大正八年十一月廿七日印刷
大正八年十一月三十日發行

（豫約出版）

著者検印 島村

著作者　故　島村抱月

發行者　東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社天佑社
代表者　小林政治

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地
檜山定吉

印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地
友文社

發行所　東京市麴町區飯田町一丁目二番地
株式會社　天佑社
電話番町 長一一七九番
振替口座東京 一〇一二八番

尼女　何所へでも。

老僧　……………………………………

（此の時鐘樓から晩鐘の音が響く）

尼女　あゝ、淨圓さん………………

（二人は同時に鐘樓の方を見上げて、じつと眺めてゐる。つゞいて一つ二つと鐘の音の傳はる中に日影が次第に黑んで來る）

幕

抱月全集第六卷終

老僧　ふん〳〵。ね。それがあなたの信心の通じたといふものだ。
尼女　だけど一年二年たつ内には、やつぱりだめになりましたわ。私、たゞ笑つて下さるだけぢや物足りないの。もつと生きた人のやうでなくちやお友達にしても張合がないの。やつぱり淋しいんですもの。
老僧　………………
尼女　ね、私、もうあのお像ぢやお友達にならなくなつたのですよ。
老僧　そこを辛抱して飛び越して行くと、また淋しくなくなる、まことの道といふものは、さういふ所をいくつも〳〵通り越さなくちやならない。
尼女　でも、あの淨圓さんがいらしてから、私、淋しくなくなりましたわ。あれがほんとうの、私のお友達だつたのですよ。
老僧　いや、それもやつぱり、一時の假りの友達だ。それに迷つてはなりません。
尼女　だけど、私、淨圓さんと別なお山にゐるのはいやですよ。若し淨圓さんが丹波へ行くなら、私も一緒に行かして下さい。ね、和尚さま、お願ひでございますわ。
老僧　それはならん。
尼女　なあぜ？
老僧　………………
尼女　ぢや、私たち二人で、どこか他の所へ行きたいわ。
老僧　何所へ？

辛抱しておいで。佛に仕へる身はな、其の仲よい友達にも別れて、淋しい所を辛抱するのが修行だ。其のうちには、自然と淋しくなくなります。佛をお友達にすれは、少しも淋しくなくなる。他の友達は、今よくても直に飽きる時が來る。たかだかつゞいても、五十年の生涯だ。御佛を友達にすれは、五十年はおろか、未來永刼捨てられるやうな事はない。分かつたかね。

尼女　さうでせうか？

老僧　あゝ、あゝ、さうとも。そのところをよく得心して置かなくてはいけない。あなたがお腰元衆に連られて、はじめて此のお山へ這入つて、柔かに延びた髮の毛を落としたのは、あれはちやうど三年前の十二の時だつたな。

尼女　えゝ、ですけど…………

老僧　あの時私が言つて聞かせた言葉は、もう忘れたらうねえ？

尼女　なあに？

老僧　あなたが、淋しい〳〵と言つて泣いてゐるから、御堂の阿彌陀樣の前に連れて行つて、これがあなたの一生のお友達だと思つてお話をしかけて御覽と言つたらう？　そしてあなたさへ眞心でお話をすれば、屹度如來樣があの慈悲深い眼元で笑つて、お話相手になつて下さると、さう言つて聞かせたぢやないか？　覺えてゐるかい？

尼女　えゝ。ですから私、淋しくてしやうのない時は、いつでも獨りであのお像の前へ行つて、いろんな事をお話ししましたわ。でも、お像だから、口はきかないけれど、何度も〳〵さうしてる内に、しまひにはあの眼をあいて、口元で笑つて下さるやうにはなりましたの。

（二人驚いて飛びのく。老僧出て來る）

老僧　淨圓、もうそろ〳〵お山へ上つて行かないと、また晩の鐘に間に合はなくなるよ。早く行け、早く行け。

若僧　はい。

（尼女と竊に顔を見合はせ、しほ〳〵と他方へ出て行く）

尼女　（老僧の傍へ寄り）

和尚さま、どうぞ淨圓さんを叱らないで下さい。

老僧　（尼女の肩を撫で）

あゝ、あゝ、叱りはしない。けれどもあれはな、修行のために丹波の方へ行くことになりました。それと言ふのも、みんな當人のためだから、思ひ逢ひをしてはならん。悟道のためとあらば、どんな山奧邊鄙でも、喜んで行くのがまことの修行といふものだからな。

尼女　では和尚さま、私も一緒に行かして下さいませ。

老僧　一緒に？

尼女　はい。

老僧　そりやいかん。一緒に行かすくらゐなら、淨圓を丹波へは、やりはしない。

尼女　でも、私、淨圓さんがゐなくなると淋しいのですもの。

老僧　はゝ、それは、あんなに仲よくしてゐたのだから、今急に淨圓がゐなくなつたら淋しからうが、それも少しの間だ、

若僧　叱つたら、また何所かへ行けばいゝ。何所へでも、叱るものゝ居ない所へ行きませうよ。ね。だから私と一緒に行つてちやうだい。いゝでせう？

尼女　…………

若僧　いや？　いや？

尼女　…………

若僧　ぢや、いやなんだね？　私と一緒に行くのはいやなんだね？　私を好きだといふのは嘘ですね？　嘘をついたのね？

尼女　嘘ぢやないのよ、嘘ぢやないのよ。

（すがる程度の表情）

若僧　ぢや、なぜ一緒に行つて呉れない？

尼女　行くのよ、行くのよ。私、どこへでも一緒に行きますわ。

若僧　行つて呉れて？　ほんとう？　ほんとう？

尼女　ほんとうに！

若僧　うれしい！

（抱き合ふ程度の表情）

老僧　（奥から聲ばかり聞こえて）

淨圓！　淨圓！

若僧　悪かないけれど…………和尚さんが悪いと言ふの。
尼女　だつて、ほんとうに好きだと思ふのなら、いゝぢやないの？　思つちやいけなくて？
若僧　いゝの、いゝの。さう思つてちやうだい、ほんとうにさう思つてちやうだい。よ、いゝでせう？
（手を取る程度の表情）
尼女　えゝ、好きだわ。
若僧　私も好きなの、私もあなたが好きなの。和尚さんが何を言つたつて構ふものか。私、たゞ、あなたと斯うして思ひ合つてゐるの。
（抱く程度の表情）
尼女　ぢや、和尚さまにさう言つて、あなたを遠くへ行かせないやうにして貰ひませうよ。ね、さうしませうよ。
若僧　和尚さんは、もう、あゝ言ひ出したら聞かないんだから、だめ。
尼女　ぢや、どうすればいゝの？　二人で逃げ出すの？
若僧　えゝ、逃げてちやうだい、何所か和尚さんの知らない所へ行つて、二人で一生仲よくしてゐましやうよ。ね、さうしてちやうだい。
尼女　だつて、逃げ出して行くところが無いぢやないの？
若僧　何所かへ行くの。私の家だつて、あなたの家だつてあるぢやないか？
尼女　家へ歸つたら、また和尚さまのやうに叱りやしないでせうか？

尼女　行つてどうするの？

若僧　どうするつて、それは私もまだ考へつかないけれど、丹波のお寺へなんか行かなくてもいゝのです。二人で何所かへ逃げて行くの。

尼女　逃げるんですつて？　そんな事をしたら大變だわ。和尚さまに叱られますわ。

若僧　和尚さんは、どうせ私たちを善く思つてゐないんです。私たちが斯んなに仲よくしてゐるのが惡いつて、それで私を他所へやることにしたのですもの。

尼女　ぢや、昨日和尚さまがあんなに恐い顏をなすつたのはほんとうに怒つてらつしやつたのか知ら？

若僧　さうさ。だから、あなたと私とを別々にしなくちや、爲にならないつて。

尼女　なぜでせうねえ？　こんなに仲よくなつてゐるものを、別々にするなんて、和尚さまもひどいわ。私たら、そんな事をされる譯はなくてよ。

若僧　…………………………

尼女　ねえ、そんな事をされる譯はないわね。

若僧　それは、二人がもしか思ひ合つてゐたら、惡いか知れないけれど…………………

尼女　思ひ合つて、どうするの？

若僧　…………………………

尼女　あなたを好きだと思ふのが惡い？

尼女　（聲をうるませて）

なぜ和尙さまはそんな事をなさるんでせうね？　あなたをそんな遠い所へやるなんて、ひどいわ。

若僧　でも和尙さんは、それがお慈悲だと言つてるのです。

尼女　お修行が出來るから？

若僧　何だか知らないけれど……

尼女　いくらお修行だつて、そんな所へ行つちやつまらないわ。ね、和尙さまにさう言つておよしなさいよ。

若僧　よすたつて、和尙さんが聽いて下さらないんだもの。私ね、ゆふべは其の事を考へて一晩中眠らなかつたものだから、今朝になつて寢忘れちやつて、そら、あの、鐘を撞くことを後れちやつたの。あはてゝ駈けて行つたけれど、いつもより か餘程後れましたよ。あなた、氣がついて？

尼女　えゝ。そのためだつたのね。私、いつもあの頃には、ちやんと目をさましてるてよ。そしてあの鐘はあなたが撞くのだと思つて聞いてゐると、お堂の上であなたが法衣の袖をこんな風にまくつて撞いてる所が目に見えて來るのよ。

若僧　あの鐘も、今夜が撞き納めなのかも知れない。

尼女　一たい、いつ行くといふの？

若僧　明日かも知れません。

尼女　まあそんなに急なの？

若僧　だからあなた、私と一緒に行つて吳れなくて？

尼女　行くつて、何所へ？

若僧　何所へでもさ。私の行くところへ。

尼女　だつて、何所だか分からないぢやありませんか？

若僧　分からなきや、行つて異れない？

尼女　それや行くけれど、でも何所だか言つて御覧なさいよ。遠いところ？

若僧　遠いところなの？

尼女　何時行くの？

若僧　いつだか知らないけれど……

尼女　なぜさ？　行かなくちやならないの？

若僧　えゝ、行かなくちやならないの。私、行きたかないんだけれど……

尼女　誰れが行けと言ふの？　和尚さまが？

若僧　えゝ、和尚さんが。私、さう言ひ渡されちやつたの。

尼女　いつ歸つて來るの？

若僧　歸つちや來ないんです。丹波の國分寺といふお寺へ、修行に行くんですつて。

尼女　まあ、お修行に？

若僧　だから、もう此のお山には居なくなるです。

尼女　いゝえ。
若僧　頬つぺたに止まつたの？
尼女　えゝ、頬つぺたに、こゝの所に。
（指で自分の頬を差す）
若僧　きつと吸つて行つたんだよ。拭いてあげませう。
（法衣の袖で尼女の頬を柔に拭く）
あなたの顔はほんとに綺麗ね、白くて透き通るやうだ。こんな汚ない色をした法衣で拭くと、曇りがつきさうね。
尼女　ねえ、綺麗でせう？　私、小供の時からさう言はれてよ、透き通るやうだつて。でも私は仕合せですわ、みんなさう言つて褒めて呉れるから。
若僧　私はあなたを見ると、なぜこんなに自分が見つともないんだらうと思つて、悲しくなります。
尼女　でも、あなたも綺麗よ。私が今まで見た男の中ぢや、一番綺麗よ。
若僧　あなた、ほんとにさう思つて呉れて？
尼女　えゝ、ほんとうに、だから私、あなたが好きですわ。
若僧　ぢやあ、ねえ、私、お願ひがあるがかなへて呉れて？
尼女　なあに？
若僧　私ね、もしか何所かへ行くやうだつたら、あなたも一緒に行つて呉れない？

大和の或る山寺の別庵、庵室は山の麓にあつて、その前は一面の菜畠、季節は春で、菜種の花が盛りである。遠見に山の中腹の鐘樓が見える。時刻は夕方。

尼女　（十五六歳、法衣は緋色）
若僧　（十六七歳、法衣は黑色）
老僧　（法衣は朽葉色）

若僧　（菜畠の中から出て來る、後を振り向いて）
さあ、早く〳〵。こゝなら大丈夫です。もうすこしで、また和尚さんに見つかる所だつたのね。

尼女　こはかつたわね、私、またあの、骨ばかりの和尚さまの手で障られることかと思つてちゞみ上つてゐたの。

若僧　こら、こんなに法衣に泥がついちやつた、はたいて上げませう。隱れるはづみに。きつと菜畠をめちや〳〵にしちまひましたよ。

尼女　むりやり菜種の花の中にしやがんで動かないでゐると、しまひには蝶々までが馬鹿にして、私の顏や法衣にとまるのよ。

若僧　蝶々にだつて、その顏を障らしちやだめよ。しみがつくと大變だもの。どこへ止まつたの？　頰に？

尼女　いゝえ。

若僧　ぢや、額に止まつたの？

赤と黄の夕暮

…………

（突然女を引よせ烈しく接吻する、女驚いて見上げて）

清水　あゝ！（首を垂れる）

羽庭　さう！…………斯うして僕の手で救はせて下さい。肉で肉を防いでやる！

（再び女を抱く、女は頭を男の胸につける）

幕

田室　所が上つたよ、君に。だからおごれと言ふことよ。
清水　あら、いけないのねえ、そんな出たらめばかし言つて。私こまつちまふ。
田室　はゝ、はゝ、あんまり喋つて咽が乾いて來た。麥酒でも飲んで來んか。
（行きかける）
羽庭　僕は飲みたくないから、君行つて來たまへ。
田室　つき合へ〳〵。
羽庭　いやだ。
田室　行かないか、頑固な男だな。
（出て行く、羽庭はそれを見送つて、ふりかへり、女と顔を見合はす）
清水　（微笑して）肉體的誘惑！
羽庭　（眼が輝き體がふるへてゐる）僕、さうしてあなたの體を汚さして見ちやゐられない。
清水　あら、體を汚しなんかしませんわ。
羽庭　なあに、今に負けてしまひます。
清水　憚りながら、そんな女ぢやございませんよ。その事、あなたには、よく分つてる筈ぢやありませんか。
羽庭　ですけど、だめですよ。僕は不安です、僕に取つちや貴といあなたですもの、出來るなら、いつまでも其のまゝにして、讃美してゐたいのだけれど、人がさうして置かない、危險です…………どうせさうなるものなら…………さうだ！　一そ僕が

田室　これで分りの早い男ですから、御希望の方はどうか………

清水　もう〳〵田室さんにはかなはない。私もう御免蒙りますよ、あすまたお目にかゝります。

田室　まだいゝでせう？　まだ早い(時計を出して見て)九時にならない。もう少しゐらつしやい。もう亂暴な事は申しませんから。

清水　でも、お蔭で今夜はおもしろうございました。

田室　羽庭がゐると尙おもしろかつたのだが。あの男、あれでなか〳〵………

(羽庭二人の方へ行く)

清水　おや、羽庭さん、いつ歸つてゐらしてつ？　私ちつとも知りませんでしたわ。

(本能的に二三歩田室の側から離れる)

田室　這入つて來るにまで、しんねこだなあ、君。

羽庭　君の方が夢中で氣がつかなかつたんだよ。

田室　そりやさうだ、どつちかに違ひない。鐘が鳴つたか撞木が鳴つたかさ。そこで？　今、君と僕とどつちが淸水さんは好きだらうといふ問題を出した所さ。

淸水　およしなさいよ、そんな話は。

田室　所が、どつちに團扇が上つたと思ふ？　君。

羽庭　どつちにも上らなかつたらうさ。

清水　お〻暑い、あなた、あんまり接近なさると暑くるしくなるんですよ。もつと離れてゐらつしやい。
田室　さう肱で押さなくつてもい〻でせう。
清水　あら、肱鐵砲？　は〻、は〻、御免なさいよ。そんな意味ぢやなくてよ。
田室　ねえ、清水さん、僕實際眞面目ですがねえ………
清水　枕辭がつきましたのね。
田室　あなた、あの羽庭と僕とどつちがお好き？
清水　へえ？　何ですつて？
田室　僕と羽庭とですよ。
清水　まあ、あなた、隨分亂暴な事をおつしやる方ね。あきれて了ふわ。こんな亂暴な人を、私、見たことが無い。
田室　だつて、それが要點です。事務を敏活ならしめる所以です。え？
清水　存じませんわ、そんな事。
田室　何もさう、色だの戀だのと言はなくつてもい〻でせう。たゞ友人として、フレンドとしてさ。どちらの柄がお氣に召しますか、中形？　絣？　それともどちらも木綿ものでお氣に入りませんか？
清水　お答の限りでございません。
田室　僕が好きなら好きだと、遠慮なく言ふことですよ、耻かしがるには及びません。
清水　田室さんてばねえ！　私、もういや。

清水　でもあなた、それだけの議論をなさるのは眞面目だわね。
田室　眞面目ですとも、大まじめ。
清水　あなたのやうな人が眞面目におなんなさると、何だか氣の毒ね、滑稽ですわ。
田室　これは怪しからん。（女の兩手を取る、女は笑ひながらすりぬけやうとする、それを固くつかんで）さあ、もう逃しません。人がまじめになつて話してるのを、滑稽だなんて。
清水　だつて、いゝぢやありませんか、私、その滑稽が好きですよ。おゝ、痛い、お離しなさいてばね、そんな失敬な事をなさると、私、おこりますよ。
（言ひながら尙手を取られたまゝじつとしてゐる）
田室　おこつて下さい、おこらせでもしなくちや、あなたは眞面目になつて吳れないから。羽庭と話する時だけ、いやに生まじめになつてさ。僕に向ふと、まるで態度を一變するんだもの、ひどいや。
清水　あなたがさうさせるのですよ。だつてさうでせう？　羽庭さんのやうに生まじめな話ばかししてゐちや、窮屈でいけないつて、あなたさうおしつやつたでせう？　實務家の癖に哲學者のやうな事ばかし言つてゐるつて。
田室　そりや、あなた、いくら眞面目だつて、あゝどうも、人生だの藝術だのばつかし轉がしてゐた日には、たまりませんや。まじめつたつて、まじめになりやうがあります。ちよいと斯う急所々々で眞面目になつてさへ貰へば、それで話は極まらうと言ふものです。
（羽庭歸つて來て入口を這入つたまゝ立つてゐる、二人は氣がつかぬ）

清水　全く早いものね、今もさう言つた所ですよ、まるで短い夢のやう。
田室　夢にしちやあ、隨分人ぢらしな夢でしたね。
清水　どうして？
田室　どうしてつて、あなたも隨分人が惡い。どこまで行つても、こゝまでお出でよ、とうと、あすお立ちといふ所まで引ぱつて來たのだもの。
清水　また田室さんのお極り、そんな事をおしつやると、私もういや、行つちまひますよ。
田室　おつと待つて下さい、此のまゝ行かれちやあ、元も子も無くしてしまふ。
（女の手を取る、それをそつと除けて）
清水　ほんとにあなたは肉體的ねえ。
田室　え？
清水　いゝえ、こつちの話し、はゝ。
田室　いけないね〳〵。あの羽庭と二人で、無闇と僕を肉體的にして了ふものだから………全體人間といふものが肉體的ぢやありませんか。精神的だの神經的だのつて、そりやあ氣が頭へ上つた奴の言ふ事です。昔から肉體的にならないラヴなんてものがありますか。あればそれは、ならないのぢやなくて、なれなかつたのだ。ならせりや、みんな肉體的になつて了ふ。それが惡けりや、第一人間の子孫からして絶やさなくちやなりません。古い理窟さね。
（マッチを擂り卷煙草に火をつけ、あとの燃さしを女と自分の顏の間に掲げて照し見る、雙方ちよつと顏を見合つて）

清水　さうですね…………

田室　寒くて、しやうがあるものか、およしなさい、およしなさい、(押し戻すやうに女の肩にさはる)君もよしたらどうだ。ぶらつくのもいゝが、あんまりぶら／＼して、風でも引くと大變だぜ、避暑に來て、風をひいて歸つちや引き合はない。

清水　寒いたつて、そんなぢやありませんよ。みんなで御一緒に出かけたら？

田室　ちよいと／＼、後生だから手を貸して下さい、襟！　襟！　あゝ、たまらん、痛い！　くすぐつたい！　早く早く。

(女の手を取つて自分の襟元に押し込む)

清水　どうなすつたの？　痛むんですか？　揉めばいゝんですか？

田室　蟲です／＼、蟲が這入つたのです。

清水　え？　蟲？　おゝ、氣味がわるい。

田室　そら、此かなぶん／＼め、背中ぢう這ひ廻りやがつて。

清水　かなぶん／＼ですか、馬鹿らしい。私また氣味のわるい蟲でも這入つたのかと思つたわ。騒ぎが大きいものだから、びつくらしましたわ。

(此のとき羽庭は出て行つた跡である)

田室　はゝ、はゝ、計略が圖にあたつたでせう？　羽庭は行つちまひましたよ。

清水　ほんとに人の悪い！

田室　そりやさうと、愈々お分れが近づきましたね。

兒だ、其くせ生れは上方ですがね。

羽庭　あんまり口ばかりでもなさゝうだよ。少くとも手くらゐはちよい〳〵出します。

田室　おい、人聞のわるい事を言ふなよ。ちよい〳〵手を出しやあ、掏兒の見習だぜ。ねえ、清水さん、向うの端に火が三つ四つ見えるでせう？

清水　どの邊にですか？　私眼がわるくなつたのか知ら。

田室　そうら、此の見當、僕と顔を同じ方角に並べて御覧なさい（女を抱くやうにして肩をつけ顔を寄せる）ねえ、見えるでせう？

清水　えゝ〳〵（女は羽庭の方へ氣を兼ねて、ちよつと身を引く）

田室　あれが、そら、昨日見て置いた出ッ端の所ですよ。夜と晝とは方角が違ふやうに見えませう？

清水　まるで違ひますのね。

田室　今日、船を出させればよかつたつけ、惜しいことをしましたよ。

（此とき羽庭行きかける）

清水　羽庭さん、もうおやすみ？

羽庭　いや、ちよつとそこらをぶらついて來ます。

清水　さう？　ぢや行つていらつしやい。

羽庭　あなた、最後の散歩はとうです。

…私は東京にゐても淋しいんですよ。それはね、あゝして華手な社會に立ちまじつてゐますと、氣は紛れますけれど、それはたゞ摩醉劑でしびらせたやうなものです、一時忘れてゐるだけの事ですよ。是れからまた、相も變らず、あのピアノ臺にしがみついて………あゝ、もう、私………

羽庭　でも清水さん、あなたはさうして………

（此の途端に田室入り來たる）

田室　何だかいやにしんねこだね。おい氣をつけえ、羽庭君。清水さんもいけないや。僕がちよつと油斷をすると、もうすぐ是れだから困つちまふ。

清水　何をです？

田室　何だつて彼んだつて、一體いけないや、さう内證話ばかししてゐちやあ。

清水　内證話なんかしやしません、ねえ、羽庭さん。

羽庭　君等には分らない話をしてゐたのさ。

田室　分つてるよ。また例の人生だらう。人生が淋しくて運命が神秘で、そこで、二人は道づれになりませう、てな話だらう？　六道の辻で女を拐かすやうな話はよせよ。

清水　田室さん、そんな事を言ふのは、およしなさい。口のわるい！

田室　口はわるくても、腹はこれで極いゝものです。一體口の惡いものは腹は綺麗なものですよ。却つて口のいゝ奴が油斷がならんて、口のいゝ奴が。僕なんかのは是れで、口ばつかりですからね。吹拔の鯉と同じです、腹はから〳〵、江戸ッ

羽庭　清水さん！

清水　え〻。

羽庭　…………………

清水　波が光りますこと。あんなに暗くつて、やつぱり何處かに光りがあるのですわね、反射する所を見ると。

羽庭　あの中には發光體のものもゐるのでせう。

清水　さうでせうか？　あら〳〵、あんなに光つてよ。それにちつとは星明りもありますわね。………人が減つたせゐだか、淋しくなりましたこと。つい此の間までは、どんな暗い晩だつて、人影の絶えたことはなかつたのですが。向うの家なんか火が消えたやうに森としてゐますわ。それに風の寒いこと、東京ももう秋でせうね。

羽庭　急に歸りたくなたつのでせう？

清水　え〻、里心がついてね。けれども實際は歸りたくないの。又あのいやな東京へ歸らなくちやならないかと思ふと、心細い氣持になりますわ。あなた歸りたいでせう？

羽庭　い〻え、僕はいつまでも斯うしてゐたいと思ふ位だから、東京なんかてんで思ひ出しもしません。清水さんなんか、仕事が仕事だから、い〻加減こんな所へ來てゐらつしやると、また華やかな都會が戀しくなる筈ですがねえ。音樂會の歩は見ませんか。

清水　ですけれど、羽庭さん………たゞ華やかな席へ出て、人にわい〳〵言はれる位の事で、本當の滿足が得られるでせうか？　私の胸の底には、もつと大きな傷が口を明いてるのですよ。そんな上つつらの事で、其の傷が癒えるでせうか。………

羽庭　一喝の下に？

清水　えゝ一喝の下に。

羽庭　はゝ、それはだめだ。僕の見てる女といふものは、そこへ行くと弱いものです。僕が不安に思ふのはそれですよ。

清水　いけません〳〵。それはまだあなたが女の本とうの心持を知つていらつしやらないからです。それはねえ、他に氣を引かれるものが別に何もなくて、そのまあ………男なら男がそれほど厭なのでもないといふ場合なら、それは隨分どんな機（はづみ）で無理から誘惑されてしまふ事が無いとも限りません。けど一方に心をひかれるほどのゆかしいものがあつて、比較するとなれば、いくら一方が肉的な亂暴な事をして來たからつて、さうたやすく自由になるものぢやありませんよ。いくら女だからつて、さう見くびつたものぢやありません。そこへ行けば、男の方こそ却つていくぢが無いといふぢやありませんか。弱いのは男ですよ、それこそ肉體的誘惑でも受けやうものなら、ぐにや〳〵になつて了ふと言ふから。

羽庭　つまり男は正直なのですね、すぐ眞に受けて了ふのです。

清水　あら、苦しい辯護ね。さうだと、何だか女ばかりが不正直なやうに聞えますよ。いゝ面の皮ですわ。

羽庭　いや、そんな譯ぢやないんです。無論女だつて………あゝ、もう僕は退却しやう。いつでも此の邊まで來ると退却さて了ふんだから、つまらない〳〵。

清水　えゝ？　何ですつて？　どうおつしやる？

羽庭　………………

清水　羽庭さん！　退却ですつて？　ほゝゝ、何の事？　それは。聞かしてちやうだい、ね。

羽庭　所がなか〱懲らされる段ぢやない、さかさまに、こつちから逆襲しやうといふんですからね。田室と來ちやあ、とてもあなたなんかの及ぶ所ぢやない。人間もあゝづうづうしくなつて來ると、たしかに强者ですね、人を征服するに足りますね。

清水　でもあの方のは、たゞ肉的强者なんでせう？　靈の征服者にはなれませんわね。

羽庭　さうでせうか？　僕も元來その主義なのですが、此の節少々不安になつて來ました。世の中はやつぱり肉から征服してかゝらなけりや、負けさうですね。

清水　私、さうは信じませんわ。やつぱし心が先ですよ。肉體的に來る誘惑は一時は强いやうですけど、それだけだと跡が殺風景ですよ、少しもゆかしい所がありません。

羽庭　たとへば………？

清水　たとへば………？

羽庭　あなたが假りにさうした誘惑を受けたとしますかね。

清水　えゝ、ようございます、假りにですよ。

羽庭　假りに。さうしたら、あなたはどうなさるでせう？

清水　わたし？

羽庭　えゝ。

清水　それは知れてますわ。一喝の下に斥けてやります。

場　所

或る海濱の旅館の裏手、座敷から橋がゝりに濱邊に臨んで建てた涼屋、籐椅子、テーブルなど備付けてある。
こゝへ出て居る客は二人きり。

時

初秋の夜

人　物

羽庭　田室　清水たまえ

羽庭　もう私達も、そろ〳〵歸り仕度をしなくちやなりませんね。一と月といや長いやうだが、斯うなつて見ると、あつけないものですね。

清水　えゝ全くですはね。夢のやう、でも羽庭さんは一と月ゐらしつたのですが、私のはまだ、まる三週間にもなりませんよ。

羽庭　さうです〳〵、あなたの入らつしやつたのは、僕等が來てから、ちやうど十日目でした。僕はあれ以來の事を、不思議なほどあざやかにおぼえてゐます。あの晩は、そら、やつぱりこんなやうに暗い晩で、私たちが其暗いのを利用して、濱邊から覗き込んで、下座敷にぐつたりとなつてゐらつしやるあなたを、殘酷なほどよく見ましたつけ。

清水　ほんとにひどい方ねえ、私知つてゐたら、戀らしておけるのでしたつけ。

競爭

（縮圖劇）

(戸口まで追うて出て)

女　あなたは、卑怯ですよ。私をこゝまでおびき寄せて置いて、これつきりとは何です、それは卑怯といふものよ、卑怯者！
卑怯者！

(外出先から歸つて來た夫が、酒くさい息をしながら立ち現はれる)

女　あゝ、あなた。今行つたのは淺川のやつ。卑怯者！　わたしを弄ばうとした卑怯者です。卑怯者！　卑怯者！

(向うを見送りながら夫に縋りつく。夫は驚いて女を抱く。)

幕

には、第一そんな事なんかしてゐられなくなつて了ひます。それかと言つて、たゞ祕密にして隱してゐたのぢや、葉山さんに復讐するといふあなたの目的には、役に立たないぢやありませんか。

女　祕密にして抑えて居るなんて、あなたも餘つぽど空想家だわね。そんな覺束ない愛なんか、何になるものですか。大びらになつたら、してお置きなさいな。大びらになるのが恐いやうなら、そんな戀なんかしないこと。男といふものは臆病ね。さ、もつと大膽になるものよ、びく〳〵しないでさ、わたしの體を何うにでもして下さいよ。

男　そりや駄目ですよ、あなたの體はもう自由なものぢやありません。あなたの肉體に手をかけゝ事は、このまゝ生きてる限りは出來ません。私たちは、たゞ心の愛をつないで居ればそれでいゝのです。體は此の世の法則に縛らせて置いて、精神だけ自由な天國で思ひ合つてゐたら、理想的ぢやありませんか。

女　理想的だつて、おゝ、可笑しい。そんな生ぬるい事を言つて、あなたも思つたよりは弱い方ねえ。生きてゐられなければ、死んだつて可いぢやありませんか。本當に私を愛して下さるなら、死んで下さいな。死ぬつもりで愛して下さいな。此の體を抱いて下さい。さ、此の手を把つて下さい。さ、此の唇を

（二人覺えず接吻する）

（女をつき離して）

男　あゝ、もう澤山だ、もう澤山だ。之れが行止りです。之れから一足出れば、死ぬ外は無い。僕は其の勇氣はありません。もう之れで澤山です、澤山です。これつきりです。

（ふら〳〵と立ち上り、戸を押してよろけるやうに出て行く）

女　ほゝ、分からないの？　ぢやあ、今度は私があなたに伺ひませう。あなたが私の心に潜んでゐると仰しやつたのは何？
男　それはまるで違つた話です。
女　いゝえ、違つちや居ないの。私ちやんと分かつて居てよ。あなたはね、私が愛を外に求めて居ると仰しやつたのでせう？
男　けれども何うしてそれが――
女　復讐ぢやありませんか。私一人をいゝ馬鹿にして、紅白粉を塗つた石ころにして、寢かして置かうといふのですもの。それを私が裏切りしてやるの。
男　葉山さんへの面あてに、あなたも、別に愛を注ぐ人をこしらへやうと仰しやるのですか。
女　まあさうよ。だから私、そら、お手紙にあつた通りね、あなたの愛を受けますわ。うれしうござんすわ。
男　ぢやあなたは、復讐の道具として僕を愛して下さるといふのですね。
女　なんですよ、そんなに開きなほつて。構はないぢやありませんか動機は何だつて、愛にさへ變りがなければ。でもあなたそれでは否？　本當に私を思つて下さるなら、復讐の道具になつて下さるくらゐ、何でもない筈ね。愛も得たり、復讐もしたり、一擧兩得とは思はなくて？　ね、それで得心が行つたら、私と一緒になつて復讐をして下さいな。助太刀ぢやありませんか。わたし、あなたを見かけて頼んでよ。
男　それは僕だつて男ですもの。さう言はれゝば嬉しいが――
女　お座なりを言ひ〳〵こなしよ。
男　併し、お互に持つてゐる愛を、心の祕密にして抑えて居ればこそ、こんな愛も貴いのでせうが、それを大びらにした日

男　あなたは本當に、たゞさう諦めて居られると思つてらしやるのですか？　昔のおとなしい女なら、無理にもそれにして了つたでせう。けれどもあなたの今の心は、それほど單純ぢないでせう？　あなたの側へ寄るほどの男は、みんなあなたに引きつけられて了ふ。皆さう言つて居ます。僕のやうな臆病者が、あんな手紙を書くほど大膽になり得たのも、其のためですよ。あなたの血管には、不思議な力が流れてゐます。あなたの心の底には、何か隱れたものがある筈です。

女　ほゝ、あなた、わたしの心を見通したやうな事を仰しやるのね。底に隱れてゐると言へば、何でせう？

男　僕は、それほどあなたが冷たい人だとは信じられません。必ず潛んでるものがあるに違ひない。僕には直覺でそれが分かります。

（男のかけた椅子の傍に寄り）

女　私すつかりあなたに見透かれてよ。白狀しようすわ。私は復讐がしたいの。

（意外といふ表情）

男　復讐？

女　何うしたら敵が討てるでせう？　わたしといふものを蹈みにじつた葉山ですもの、わたしも見事にそんな男を背負投してやりたいわ。

男　併しもう葉山さんのあなたに對する愛は無いと仰しやつたぢやありませんか。背負投にするものがないでせう？

女　あるの。愛が無ければ、其の代りにするものがあるの。あの人の、男の面目を潰してやりたいと思ひますわ。

男　何うして？

そしてその下らないものよりも、もつとつまらない破れ草履か何かのやうに打つちやられて了ふのですもの。馬鹿らしいと言へば馬鹿らしいし、恨みを言へば恨みもありますさ。立派な愛を注ぐ女が外にあつて、その方が何うしても思ひ切れないとでも言ふのなら、私が愛の競爭に負けたのですもの、女の意氣地としても、私だつて立てる義理は立てやうぢやありませんか。けれども、葉山のなんか、元から愛だの人情だのといふ立派なのぢやないのですからね。相手にしたつてつまらないわ。

（じつと女の眼を見て）

男　それであなたは、此のさき何うなさるつもり？。

女　どうせ淋しい女ですもの、何うならうと構ひません。

（立ち上つて窓から外を見る）

男　僕があげた手紙の返事を、今日聞かせて下さる筈でしたね。

女　えゝ。お言葉はうれしうござんすわ。心と心で思ひ合ふ人をこしらへて、胸の中にそつとかこつて置けば、それが我々の生命の泉になるとお書きなすつたでせう？　けれども、たゞそれだけなら、私もう諦めたのですから、あんまり役に立たないの。どうせ淋しく暮らさなくちやならない運命なのですから。

男　併し、さう仰しやるけれど、それはあなたの本心ぢやないでせう？。

（振りかへつて）

女　何ぜ？

女　いゝえ、わたしさうは思はないの。女は事情が違ひます。少しでも量見のある、身分のある女でしたら、男のやうなふしだらは、めつたにしません。男はそれがざらぢやありませんか。それは百人に一人や千人に一人、まちがつた事をする女もありませうさ。けれど、其の時だつて、大抵は女の身として可哀さうな事情があるものです。そこですよ男と譯の違ふのは。男の浮氣は贅澤からです。女だつてそれは、そんな氣持を起すのが稀にはありませうが、藝娼妓や、下等社會か何かでなくちや、それを容易に實行するものぢやありません。一番よくあるのが、さんざ淋しい思ひをした揚句、男の薄情を恨んでそんな事をするのです。やけになるのです。かわいさうぢやありませんか。それでなく自分から仕かけた間違なら、そこには大抵言ふに言へない義理や人情合から、じりじりと身に沁み入つた愛が外にあるのですよ。夫にも換へられない切ない愛が外にあるのです。其の愛の火で、夫婦といふ形式なんか燒き切つて了ふのです。一層眞實な夫が外にあつて、否でも應でも其の方へ行かなくちやならないやうになるのですわね。そんな愛を持つのが不都合だと言へば、それまでだけれど、愛は、まあ言つて見たら淸水の自然と湧くやうなものでせう?、不都合の百萬遍を繰り返したからつて、出て來るものは出て來るし、無くなるものは無くなります。

男　それほど分かつてゐて、あなたは矢張り、葉山さんがあなたに冷淡になつたのを、恨んでゐらつしやるぢやありませんか。

女　恨みはしないわ。恨んだつて爲やうがないのですもの。たゞね、葉山なんかのは、そんな立派なのぢやありませんよ。あゝして、たゞ色んな女や色んな酒に浸つてゐるのが面白くて、それが[illegible]じ[illegible]、わたしに對する愛情といふものを散らして了つたのです。考へて見れば、馬鹿を見たのはわたしね。私がそんな[illegible]ちないものを向うへ廻して、權衡にかけられて、

暖く裝飾した西洋室
春の日の午後
女、二十五六歳
男、二十二三歳
兩人テーブルを中にして椅子にかけてゐる。

女　どうせ葉山があんな風になつたのですもの、仕方はありませんわ。これでもね、學校時代の夢の醒めない内は、よくお友達などゝそんな話をしましたつけ。こちらで捧げるだけの愛を酬いて呉れない夫なら、何度分れたてつ恥ぢやないつて、隨分力んだものですよ。けれど此の五年來の經驗で、わたしすつかり悟りましたわ。男は到底女の思つてゐるやうなものぢやありません。

男　まあ、ちよつと待つて下さい。僕これでも男の部類ですから、どうかお手やはらかに願ひます。

女　あら、すまない事ね。だけどあなただつて、今に奥樣をお迎へになつたら、屹度同じ事よ。男といふものは、つく〴〵當にならないものだと思ひます。それでゐて、そら、うまい事を言つてるぢやないの？　七人の子は生すとも女に心を許すななんて、隨分手前勝手な事を言つたものですわね。わたし眞面目くさつてあんな事を言つた奴の顔が見てやりたい。

男　けれども、それは男によりけりです。さういふ輕薄な男もあるでせう。併しさうでないのも居ます。たしかに居ます。女だつて、實際心の許されなれいのも居るし、さうでないのも居る。

復讐

（縮圖劇）

娘甲　あら嫌だ、お前まだ爲さんの事を忘れないでゐるのかよ。(笑を隱した眼で甲の顏を見ると、甲は心持顏を赤めて)

娘甲　さうぢやないけんど、あんな風にして否應なしに旅へ出る人もあるし、源さんや定さんのやうに、出たい〳〵と言つてゐて出得ない家もあると思つたからさ。そら、源さんがお前を呼んでるによ。

娘乙　いやだ、あんな手つきをして呼んでるよ。さあ行つて見やうよ。

(つれ立つて去る。今まで向うの店の前に背中を見せて立つて居た二人の書生、こちらを振り向いて無言のまゝ娘の跡を見送つてゐると、段々暗くなりかけた柳の木のあちら邊から、旅舍の軒の電燈が二つ三つぱつと點つて來る。)

幕

て、又小僧の頸首をゆすり)さあ、何うしやがるんだ。早くせい。大晦日たぞ。(小僧が澁々其の金を渡すのを引つたくり、臺口を突きつけて)野郎、顏を上げえ。手前は一體何處の者だ。岡の者か。名は何だ。力造? 苗字を言へ、苗字を。隱したつて直ぐ知れるこんだ。下を向くなつて事よ。今になつて耻かしがるにや及ばねえ。さあ、皆さんに此の顏をよく見て置いて貰うんだ。(小僧の顏を仰向けさせて、見物の方を見、またちよつと笑ふ。)一度泥棒すりやあ、一生泥棒だぞ。おれがよく手前の顏を見覺えといてやる。今度斯ういふ事をすりやあ、懲役だぞ。さあ、よし。是れでな、手前の顏はこゝいらの人の眼にや、泥棒といふ極印がついたんだ。惡い事をしたつて、すぐに取つ捕まるぞ。さあ、此の臺口を持つて行け。(突き離して若者は行つた。見物人の間につぶやきの聲が一しきり起つて、去るものもあり、立つたまゝ小僧の爲る事を見てゐるものもある。小僧は泣きもせず、眞蒼な顏をして、心もち顫へながら靜かに藁苞を拾つて、周圍の人々の顏をちらと偸むやうに見、しよんぼりとして向うへ這入る、人々四方へ散じ、二人の娘のみ殘る。)

娘甲　かわいさうぢやないかよ。

娘乙　何がかわいさうなものか。自分で惡い事をしたでないか。

娘甲　家へ歸つて何うするづら。あんなに顏を曝されて、もう此の土地にや居づらからう。

娘乙　まだ子供だもの。

娘甲　だつて、大きくなつたつて人は忘れやしない。

娘乙　其のうちにや、何處かへ突つ走しつてでも了ふづらよ。

娘甲　爲さんも、譯こそ違ふが、ちやうどあんな風にして突つ走しつたけよ。

うを見ると、柳の木蔭に立つてゐる甲の娘が彼のうつとりとした目附で此方を見守てつゐたのと、眼を見合はす。娘はあはて丶他を向く。書生がじつと其の方を見てゐると、此の時忽ち、賓來屋の店先にゐた十二三許りの小僧が、長芋の藁包にしたのを提げて足早に通りすぎる。と思ふと、突然また一人、紺の上張に三尺を締めた若者が、突かけ下駄で足音を殺しながら走つて行く。驚いてみな〳〵其の方を見る途端に、若者は先の小僧に追ひつき、後から肩を摑んで、ぐつと引き戻し睨みつける。）

若者　野郎、出せ、隠すない。（懐に手を突つ込んで茶革の小さい新しい蟇口を引き出す）此の野郎、さんざ品物をいぢくり散しやがつた揚句に、之れを萬引しやがつて。ちやあんと睨んでゐたんだぞ。太え野郎め、さあ、何うしやがる。警察へ來い。警察へ來い。

小僧　（藁包を抛り出し、頸首を取られたまゝ、うつむいて、涙ぐみ、懐を探つて）負けて呉んなよ、買ふから。よう、負けて呉んなよ。

若者　負けて呉んなも糞もあるかい。此の泥棒め。負からなきや盗んで行くつもりか。太え野郎。ぢや、是れ、二十錢に負けてやるから買つて行け。さうすりや、今日だけは許してやる。

小僧　（紙に包んだ銅貨を出しながら）さつき長芋を買つたのが茲に二十錢あるけんど、是れみんな無くしちや叱られるから、十錢に負けてくんなよ。

若者　野郎、錢も無い癖に、品物なんかいじくり廻しやがつて。初手から盗む氣で來やがつたらう？　負からねえ。其の二十錢みんな置いてけ。それで無けれや警察へ來い。（頸がみを取つてこづく。大勢立つて見てゐる方へ向き、ちよつと笑つ

らうな。

浴客の老人　人間と言ふ奴が巣を造ると、兎角暗い蔭が出來るものだ。（間を置いて）お前、あのピストルは仕舞つて置いたらうな。

浴客の婦人乙　はい、たしかに（二人とも向うへ行く。入りかはりに次の二人現はれる）

書生甲　君、さつき見たらう？　あの砂濱に、大儀さうに横になつてゐた、あれは皆病人なんだよ。あゝして日光を吸うては、ごろ〳〵してゐる。それが大抵は若い活動ざかりの人なんだから、かわいさうさ。海岸の空氣や日光を、藥を飮むやうな心持で、吸うたり浴びたりしてゐる。あの時にこそ、全く人間は、自分の肉體が衰へ亡びて行くことを感ずるね。

書生乙　つまり、君が、身につまされるのだ。

書生甲　さうかも知れん。そら、見給へ、向うの角に柳の木が一本立つてゐて、其の手前の小流で、かみさんが煤けた小障子を洗つてゐるだらう？　樹の下ぢや、白粉を眞白に塗つた村娘と、上張を着て新しい手拭を首に結んだ沛の若い衆が立話しをしてゐる。そつくり繪ぢやないか。いゝね、何となく長閑な別天地といふ感がして、都會の大晦日とは違ふねえ。

書生乙　馬鹿に氣に入つたやうだなあ。まあ、もう一二日居て見なけれや、分らんよ。

書生甲　全くいゝ。斯ういふ所で育つて、斯ういふ所で死んで、一生を何等の精神的煩悶もなしに過ごせるものは、幸福だ。斯ういふ所の若い人の顏には、見給へ、暗い運命の影なんてものは、てんで痕跡を印してゐない。彼等の太い突つ張つた聲は濤の音の反響であるし、彼等の濃い血色は、黄金色の蜜柑山や紺靑の海から反射して來る光線で染め上げたのだ。逞しい骨格は、あの大山脈の模型と言つていゝ。斯ういふ所からは、早く人生の悲哀を味ふやうな不運の兒は生じない譯だ。僕等のやうな、やくざな體のものは、實際、彼等の大自然と連なつたやうな健康が羨ましいなあ。（言ひながら不圖また向

娘甲　また始まつた、そら定さん達がやつて來る。早く隱れやうよ。こんな所に立つてゐて、見つかると又からかふから。

娘乙　構はないよう。此方でからかつてやれ。でもあの衆も、もう上衣なんか着てゐるよ。

娘甲　源さんの上衣の模樣は馬鹿に赤いでないか。夷子さまが鯛でも釣つてる所だらうか。定さんのは浦島太郎だよ。ほら來た〳〵。（乙の後に隱れるやうにする）

娘乙　（すまして）こんちや。

男甲　よう〳〵。

男乙　もう乎ぇおめかしか何かで、早えなあ、お前たちは。あつちの方へ行つて見べえ、一緒に行かねえかよ。（二人とも立どまり、一寸女と話し合つて、向うへ行く。女二人も、少し離れてついて行く、すべてゆる〳〵と歩く、奥手の隅でまた止まる、入りかはつて次の三人出で來る。）

浴客の婦人甲　御前さま、何といふ靜かな町でございませう。年の暮のやうぢやございませんね。

浴客の老人　もう春の景色だ、梅でも咲きさうだなあ。でも日が沈みかけたと見えて、段々寒くなるやうだ。

浴客の婦人乙　（仰いで町の家根越しに見える山脈を眺めて）まだあの山半分、日が射してゐますよ。日あたりは全く暖さうですことね。

浴客の老人　此の邊は枯山の色がみな暖さうに見える。枯葉が赤味を帶んで、枯れ切らない青草のやうなものも大分交つてゐる。そこへ日が射すから尚暖さうに見える。が、何だか斯う、鈍い血の色のやうに赤い山だな。

浴客の婦人甲　でも町は、かけると矢つ張り寒さうに見えますのね。人通りの少ないだけ、尚からつとして。

下堂だつて、名產堂だつて、幷べてる繪葉書からして、何時も同じものばかしで、寄つて見る氣もしないがよ。寶來屋の店だけは、前を通ると自然に足が留まるでないか。あの右の窓に幷べてあるもの、なんて好い色合なんだらう。下の黃色いぼかしになつてるのは、電燈の笠だとよ。それよりか、懸つてるリボン！　褪紅色はいゝわね。クリームの地に縞の這入つたのが見えるだらう？　高等な色合ねえ。空氣草履だつて、好いのがあるよ。表が水淺黃の天鵞絨で、鼻緒が繻珍の切れで。東京ぢや、もうあんなのでも廢つてるのか知ら。何んなのが今流行つてるのだらう、行つて見たいわねえ。（うつとりとして海の方を見る眼が潤みを持つて美しい。又店の方を眺めて）ほら、遠くから見ても、あの窓だけ眼を明いたやうに明るいだらう？　輝いてるだらう？　此の町中で一番あの店だけが活きてるやうだ。他はみんなどろんとして、眠つてるやうだによ。

娘乙　それでゐて客が來ないんだから、尙の事不景氣ぢやないかよ。

娘甲　そら御覽よ、お前がそんな事を言ふから、早速お客が一人來た。

娘乙　長芋を賣りに出た小僧つ子だよ。

娘甲　だつてお客でないか。臺口を買はうとつて見てるのだよ。此のごろ、中で口金の合はさる臺口が來たから、屹度あれを見てるのだよ。あれ〳〵、見な、源さんと定さんが遣つて來たよ。そら、橋のとこ、寒さうぢやないか。風があんなに上つ張をまくつてゐるよ。弱つてぐる〳〵舞をしてゐる。おゝ、をかしい。

娘乙　お止しよ、人が笑はな、御覽々々、橘屋へお客が着いた。夫婦客だよ。橘屋の門松は今年は小さいこと。やつぱり不景氣だからだよ。

娘　甲、乙
男　甲、乙
浴客の婦人甲、乙
浴客の老人
書　生　甲、乙
若　者
小　僧

娘甲　(娘乙の肩につかまるやうにして歩きながら)まんだ早いせいだか、人が遊んで居ないわよ。何だかきまりが惡いよう、こんなに早く髮なんか結つて。(頭に手をあてゝ見る。兩人立止る)

娘乙　構ふもんか、人は人だによ、こちとらは爲ることをして、濟ますことを濟まして來たんだもの。大晦日だとつて忙しいと極つたものぢやないよ。町がこんなに靜かなのは、不景氣だからさ。

娘甲　不景氣だつて、嫌だよ此の人は、定さんの口眞似なんか止してお呉れよう。

娘乙　だつて不景氣ぢやないか。見せい、あの寶來屋の店なんか景物の看板ばつかし幅を利かせて、客は一人もありやしないぞよ。

娘甲　そりや然だけれど、でも寶來屋の店は妾好きよ。御覽よ、しよつちう東京から珍らしいものを取り寄せてゐるに。天

海濱の一幕

構でございませんか。何うかお這入り下さい。陛下我々がお手を取りませうか。馬車にお召しなさいますか。

ナポレオン　（じつとアンドレーの顔を見て、やゝ涙ぐみ）

運命！　運命！　運命の門！

（アンドレーの肩に兩手をかけ）

空虛なモスコウ！　空虛なクレムリン！　はゝ、はゝ。

（絕望的に笑ひすてゝ、すたくと門の中に這入る。皆々驚いてついて這入る。跡に衞兵も見物人も居なくなると、先程の穢粗人二人門の前に進み出で、人々の這入つた跡を見送つて）

乙　運命の門だとよ。

甲　這入つて行つちやつた。

乙　は、は。

（乙が氣の無い笑ひを一聲したまゝ、二人とも口を明き、窪んだ眼を一杯に見ひらいて、無意味に門を見て居る。日が暮れて行く。）

幕

（モスコウはフランス人にはモスクウであらうし、クレムリンはロシア人にはクレムリださうである。又ダリユーは實際は此の時四十六歲であつた。是等は舞臺上の發音の便宜や筋の便宜で詩的特權の自由を用ひた。）

（ナポレオンは見附の入口でばたりと歩を止め、石門を見上げて立つてゐる。皆々一樣に立止まる。しばらく無言。）

ナポレオン　もう是れでいゝ。此の門さへ見れば、私は滿足だ、今夜は私は引きかへして此の村へ泊らう。ミユラーは市街の方を氣をつけい。

（言つてすた〳〵と跡へ歸らうとする。皆々驚く。ミユラー急いで其の前に立ちふさがる）

ミユラー　陛下、それはまた何うした譯でございます。こゝまでお出でになつて引つかへすと仰しやるのは意を得ません。縱へ市民は遁走しても、市街と宮殿とは殘つて居ります。陛下、是れが此の大戰爭の目的地たるモスコウの町でございます。是非お這入りを願ひます。申すまでもなく危險は少しもございません。ミユラーが身を以てお守り申して居ります。危險をお恐れになる陛下ではない。此處からお引つかへしになるといふ法は、斷じてございません。

（ナポレオン再び門の方を向いて、見上げたまゝ、默して答へず）

モルチエール　ちよつとでも、クレムリンの宮城へ陛下がお這入りになれば、一般の士氣が振ひます。

アンドレー　陛下はモスコウの町に這入るのか運命だと仰せられたでございませんか。其の通りになつて參つたのです。躊躇なさる理由はございません。

（熱心に進み寄つて）

運命！運命！陛下、運命の門はこゝに開いて居ります。たゞ一足です。クレムリンの門も開いて居ります。我等、フランス人の手で明けて待つて居ります。あれ程待ち焦れてお出でになつたモスコウへ來たのでございませんか。陛下は運命の權化だと仰しやつた、あの豫言が今一足で充されます。よしロシア人は一人も居なからうが、フランス人のモスコウで結

乙　町へ這入つて來ると言ふんだらうよ。

甲　それにしてもお前をよく放免しやがつたなあ。よつほど言ひ抜けがうまかつたと見えるな。

乙　俺は言ひ抜けなんかしやしねえ。たゞ言葉は一切韃靼語のほかは分りませんといふ風をして默つて居ただけさ。なあに、俺の體はどうせもう、持てあましてる體だあな。殺さうが活さうが、悲しくもなけれや、嬉しくも無え。總督さんに頼まれたから、火だけはつけてやるが、つけねえかも知れねえ。どつちだつていゝ事だ。

甲　だつてお前、同んなじロシア人だな。頼まれた以上は…………

（向うを見て）

あゝ、通る〳〵。あれがナポレオンだらう。來ねえ〳〵。行つて見やうよ。

（甲が乙を引つ張るやうにして後へ降りる）

舞臺廻る。

第三場

ドロゴミロフの見附前、夕暮の光景、門の兩側に數人の衞兵が立つてゐる。路を離れて前場の韃靼人二人及び貧民體のもの三四人まばらに立つて見てゐる。

ナポレオンは馬車を降り、徒歩で、第一場の人々を從へ、ミユラーに先導せられて門の前まで來る。

ミユラー　是れがドロゴミロフの見附でございます。御命令で兵は總べて一足先に市街へ入れて置きました。

アンドレー　陛下！モスコウは空虚でございます―

ナポレオン　えゝ？モスコウが空虚？

アンドレー　はい、空虚でございます。

（ナポレオンは聞くと同時にアンドレーの上に投げた鋭い眼光を、市街の方へ轉じて、無言のまゝじつと見てゐる。顔の色變はる、アンドレー其の他皆々佇立したまゝ、一齊にナポレオンの横顔を見つめて、身動きせず、しばらくの間、森として聲無き氣持。）

ナポレオン　馬車を持つて來い。

（士官の一人走り去ると、跡からナポレオン大股につか〳〵と丘を下手に降りる。皆々沈默のまゝ續いて降り去る。丘の上には夕日が淋しく薄れて殘る。）

幕

第二場

モスコウ市の入口たるドロゴミロフの見附が夕日を負うて遠見に立つてゐる。路傍の土手上の景。

髪も髯も蓬々と伸び、垢まびれの顔の蒼白く窶れた韃靼人二人、土手に腰をかけ、下の路からかけて向うの方を眺めてゐる體で幕上がる。

甲　一體どうしたと言ふんだ。馬鹿に騒ぎ出したぢやないか。

モルチエール　それから其の捕縛した韃靼人は連れて來たのか。居るならすぐ此處へ連れて來いつて、通譯を附けてな。

ナポレオン　なあに心配するには及ばない。大勢はもう極まつてゐる。この運命は動くものぢやない。そいつは追つ放してやれ。

モルチエール　でございますが、此の際注意しませんと………

ナポレオン　いゝさ、いゝさ。それは何か偶然爆發したんだらうよ。偶然の事だ、恐るゝに足らん。

（立つてゐる騎兵に向いて）

さう言つて行け。

（騎兵敬禮をして引きかへす）

それよりか、一方の樣子は何うだ。一向に報告が來んぢやないか。誰れか此の內で行つて見い。

アンドレー　私が參りませう。

（敬禮をして行かうとする時第二の傳令來たる）

アンドレー　おゝ、報告か。

（下手へ急ぎ足に行くと、馬から飛び下りた士官、あわてた樣子で、聲を潛めて話す。アンドレーの顏色また〳〵變はる。他の二人も寄つて來て報告を聞き、顏を見合はす。ちよつと密話をして、ナポレオンの方を振り向くと、立つて鋭く皆の方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あわてゝ他を向く。同時にアンドレーがつかつかと群を離れて進み寄り、顫へた聲で）

がてナポレオンはそこらを步きはじめる。)

ダリユー　もう何時だらう? 日があんな方へ行つたね。何うだらう、兵をやつてロストプチン總督を連れて來させては。

モルチエール　何うもそれがよくは無いかな。暗くなると面倒だぞ。先つきの爆聲が何か意味があるのぢやなからうか。

(ナポレオンはまた市街の方を見て沈默してゐる。日影が薄くなつて、處々の庭木の森が黑んで來る。間を置いて)

アンドレー　あゝ、來た〳〵! 報告を持つて來た。

(騎兵一人、飛び下りて、アンドレーの前に直立し、封書箱を渡す。手早く開いて)

アンドレー　あゝ、是れは先つきの爆聲に關聯した事です。(急いで讀む内に顏の色がかはる) 是れは怪しからん。大事件でございます。

(皆々驚いて聞耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる。)

ロストプチン總督が囚徒を悉く解放した樣子で、其の一人が先程の爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場處はドロゴミロフの門に近い市街の空家で、爆發の原因等は不明、出火にはならなかつたが、附近で擧動不審な一人の韃靼人を捕縛したのださうでございます。

モルチエール　其の韃靼人を調べて見たのか。

アンドレー　取り調べたが更に口を開かないとあります。

モルチエール　そりや容易ならん事だ。すぐ市街を警戒しなくちや行くまい。

アンドレー　勿論やつてるやうです。

グリユー　町が段々靜になつて來るやうに感ずるが、嘘かねえ。動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるで無くなつたやうな感じがする。見給へ、馬鹿に森として來たぢやないか。河の瀨の音が聞こえる。

モルチエール　はゝ、生の町がまた死の町になつたかな。モスコウがボロディノになるのかな。

ナポレオン　（モルチエールの方へ鋭い一瞥を投げて）

馬鹿ツ！

モルチエール　（姿勢を正してナポレオンの方へ向き）

陛下、お氣に觸りましたら御免下さいませ。併し私は飽くまでも戰地といふことを忘れたくないと思ひます。モスコウに何時敵軍が現れても驚かない覺悟はして居たいと思ひます。私は今以てまだ確實にモスコウを占領したとは思つて居りません。

（ナポレオン無言のまゝ往つたり來たりしてゐる。皆々無言。一同の胸に一種の氣まづい心持が流れ込む。しばらくして）

ナポレオン　分かつたよ、分かつたよ。併し私はもう確實にモスコウを占領したつもりで居るね。先つきからクレムリンの宮城で、大夜會を開く手筈まで考へて居る。二百九十五寺といふ夥しい寺の坊主どもを集めて論してやらうと、其の演説の腹案まで拵へた。寺の建物には、殘らず大きな字で Maison de ma mère と彫りつけさせてやらうと考へた。此のモスコウには、お前等のうち誰を總督にしやうかとそんな事まで考へてゐる。モスコウ占領！もう動かん事實だ。夢ぢやない、夢ぢやない。

（互つてじつと市街の方を見下して立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。此のとき一同の胸に一種の不安が萌す心持。や

ダリユー　さやう………十八世紀の纎弱な冷たい文明に對して、强い熱力の要求が陛下のお體に權化したと申したら、如何でせうか。

ナポレオン　ふむ。併し其の力は何處から來るだらう。私に言はすれば運命だ、運命！力はそこから來る。若し私が十九世紀の時代を暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つて貰ひたい。

アンドレー　（進み出で）

陛下、陛下、私は唯今の瞬間に於いて、陛下に神仙の如き高風を感じます。運命の權化！何といふ深いお言葉でございませう、手が此の通り感激に顫へて居ります。何うか握手を願ひたうございます。

ナポレオン　よしく。

（微笑しながら固く握手する。其の途端に市街の方で爆發の音が一つする。皆々愕然として其の方を向く。ナポレオンも俄に正氣づいたやうに屹となる）

モルチエール　あれだく。外郭に接した東の處に煙が上つてゐる。何事だらう？うむ。騎兵が這入つて行くやうだから、今に分かるだらう。是りや長く斯うして居るのは危險かも知れんよ。使節は何うしたのだらう？何うして遲いのだらう？

（一同無言で、待遠しい樣子に市街の方を見る。ナポレオンこちらを向いて）

ナポレオン　今に來る。屹度來るよ。先つきの報告はまだか。もう一度偵察にやつて見い。

アンドレー　は。

（再び下手へ行つて令を傳へる）

の影が粘りついてゐた。死の影がついてゐた。それが今ぢやモスコウの影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が躍ッて居る。今にクレムリンの城へ這入つたら、君等は一番がけに何をするだらうな。モルチエールは何が欲しいか。

モルチエール　久しぶりで善い葡萄酒でも御馳走になりませうかな。

アンドレー　私は先づ靜かな部屋に引つ込んで、この興奮の心の褪せない内に日記をつけたいものでございます。

ダリユー　私もそれに贊成。

ナポレオン　さう〳〵、ダリユーは歷史家で詩人だつたな。

ダリユー　「だつたな」は恐れ入りました。

ナポレオン　忘れて居たのだよ。

ダリユー　忘れられて少しも恨みはございませんな。私なぞは新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなものですから。

ナポレオン　はゝ、悟つたね。

ダリユー　却つて此のアンドレー君などが十九世紀の若い息を呼吸してゐて、自然と詩人になつてゐます。

ナポレオン　ふん。若い者の時代か。俺なぞはダリユー、どちらの組か、若い方か古い方か。

ダリユー　さやう………陛下は勿論私なぞよりも若くて入らせられるし、國家の上では新しい時代を代表せらるゝのでございませう。

ナポレオン　其の譯は?

モルチエール　はゝ、君の言ふことは、あんまり感に入り過ぎて可かんよ。第一我々は征服者だぜ。强きものが弱きものを愛する關係だぜ、忘れちやあ可かん。

アンドレー　ですが、愛は强い弱いの關係ではありません。

モルチエール　はゝ、生意氣を言ふなよ。

ダリユー　まあいゝさ。若いからなあ。戰をしながら戀を論ずる筆法だらう。ねえ、君。

（ナポレオンは地圖を卷いて手に持つたまゝ、そこらを大股に往つたり來たりして居たが、寄つて來て）

ナポレオン　まだ來ないか。遲いぢやないか。

モルチエール　もう來さうなものでございますな。おい君、一つ偵察にやつて吳れ。

アンドレー　は。

（下手へ行つて何か命ずると、一人の士官急ぎ足に降り去る）

ダリユー　陛下はお疲れであらうから、そこらへ假りに何したら何うだらう。

ナポレオン　要らん〳〵。俺の顏に疲れが見えるか。

ダリユー　いや、お顏色は却つて益々活氣を帶びて參るやうでございますが、何にしても一週間以來のお疲れでございますから。

ナポレオン　俺には疲勞といふ事は無い。此の眼の輝くのは、それ、運命が眼の前に來たからさ。此の晴れた空に、此の壯麗な景色を見て、興奮せずに居られるか。ダリユーなぞも顏色が違つて來たぜ。つひ先つきまで君等の顏にはボロディノ

ダリユー　やあ、ミュラー將軍が市街の入口で盛に歡迎せられてゐるぞ。貧民どもが珍しさうに集つて來るぢやないか。まるで觀せ物扱だ。

ナポレオン　クレムリン！響のいゝ言葉だ。あの邊が宮城だらうな。おい！地圖を見せないか。

（アンドレー、市街の地圖を披いて捧げる。ナポレオン手に取つて見て）

ふむ。

（顏を上げ、また市街を見入つて）

あれだ。クレムリン、クレムリン。俺はあの宮中の繪を見た事がある。あの大きなサロンには、さう〳〵、イタリヤから磨かせて來た大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキサンドルと后とが並んで腰をかけて居た。あのアレキサンドルの神經質らしい顏は、決して憎い顏ぢやない。私の兄弟にして、つき合つてやりたいと思つた。

（直立して凝視してゐた將校等互に顏を見合はせる。ナポレオン顧みて）

ねえ、さうだらう？全くルッスは憎くない國民だと思はないか。俺は好きだよ、俺は。

モルチエール　全く憎さげの無い國民でございますな。のろつとして居て、素直で、勇敢で。

ダリユー　いや、我々の脈管に流れてゐる血が同じセルトの源だから………

アンドレー　それもさうでせうが、一方から言ふと寧ろ違つてるから相惹くのかも知れません。異性相惹く道理ですね。永い間冷たい外部の壓迫で、反抗的に沸いた彼等の血は、永久に熱いのです。所が、自然が溫めて喚れた我々の血は冷熱が早い。僕はむしろ、僕が西南の人であるといふ理由で、此の東北の神祕な國民を慕ひたいと思ひます。

運命だ。運命は事實だ。

ダリユー　陛下の其の筆法によりますと、モスコウは陛下の運命でございますね。

ナポレオン　運命だ、全く運命だ。俺には是非とも一度此のザールの城へ來なくちやならん運命があつたと思ふ。モスコウは私の戀人だ。古い〳〵前世からの戀人であつたのだ。先き一目見た時に、私はすぐさう思つた。今までこの懐しい戀人を人手に委せて置いたのが妬ましいやうだ。

（振りかへつて復た市街の方を見る）

ダリユー　前世からの戀人ですね、約束されたる土地ですね、人生にはたしかさうしたものがあります。

アンドレー　併し閣下、前世からの戀人といふやうな者は、こんな北の暗い國へ來てこそ道理と思ひますが、フランスには、少なくとも女にさういふものがございますまいね。明るい國の人間は淺い戀をします。其の代り急です。底まで透き徹つた小川の瀬のやうに、急な思ひをするのが、フランス人の習ひでございませう。

モルチエール　此處で女の話なんか怪しからんな。

ダリユー　フランス男は戰をしながら戀を論ずるさ。

モルチエール　戀を論ずるもいゝが、早く陛下をクレムリンへ御供したいものだな。

アンドレー　ミロラドヴヰッチ少將が歸つてから、彼れ是れ二時間近くなりませう。もう、町の使節が來てよい時刻ですね。あゝ御覽なさい、今やつと敵軍の後衞が町を出はづれました。あの森の蔭に續いてるのが其れです。あれでクウーゾフ元帥の率ゐて居られる九萬がすつかり退却した譯です。

壯觀ですね。十字の星と新月が此の古い街の空に撒いたやうに浮んでる。これだけでも胸が躍りますね。あれが此の町の命なのだ。命のサンボルが、あゝして光つてるのだ。平和ですね。つひ、そこいらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空氣が、玆へ來ると水晶を斷ち切つたやうに澄んでゐる。其の中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてる所は、成ほど女性的ですね。ロシア人は此の町をおつ母さんと言ふさうだが、私等には美しい尼さんといふ感じですね。

モルチエール　處々隨分大きな庭がある。人家の間に森を切つて撒き散らしたやうな處だ。何うしても繪本だ。是れが本當にモスコウなのかなあ。夢のやうだ。

（飽かず市街を見てゐたナポレオンは此の時初めてこちらを向き、近くに立つて居るモルチエルの肩を輕く叩いて）

ナポレオン　おい！

モルチエール　はツ！

（皆一齊に其の方を向く。）

ナポレオン　モスコウへ來たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

モルチエール　陛下、夢のやうでございますなあ。

ナポレオン　夢ぢやあない。本當のモスコウへ來たのだ。到頭來たのだよ。

グリユー　夢が事實になつたのですね。

ナポレオン　お前にも似合はん事を言ふね。初めから事實さ。夢が何で事實になるものか。俺がパリーでセギユール伯に言つて聞かせたのはそこさ。俺には初からモスコウは目に見えて居た。必ず來られるものといふ確信があつたのだ。確信は

軍服のナポレオン、馬を薩に乘り捨てた氣持で、數歩先に立ち、つか〳〵と小急ぎに下手から丘の頂に現はれる。續いてダリユー、モルチエール、アンドレー及三四の將校從卒等登場。

（ナポレオン、モスコウの市街を見るや否。）

（叫んで尙熱心に向うを見てゐる。）

ナポレオン　モスコウ―モスコウ―

ダリユー　モスコウだ！モスコウだ！

（他の人々も之れに和して、競うて市街の方を見る。）

ダリユー　そら見給へ、あれがモスクワ河だ。其の向ふがクレムリンさ。丸の內だ。綺麗ぢやないか。

モルチエール　なる程、これや綺麗だ。まるで古い繪本が拔け出したやうな町だな。

ダリユー　あの建物を見給へ。木造だらう。塗つた屋根や壁の色も違つてるね。東洋的ぢやないか。其の前を、まるで灰色の熊が馬に乘つたやうなコザークめが、木材を橫たへて通る所は似合つてるな。配合がいゝぢやないか。

アンドレー　北國に似合はん明るい町ですね。空氣も實に澄んでる、たしかに神聖な町といふ感じがしますね。

モルチエール　眩しいやうだ。金の十字架が、まるで星を散らしたやうに光つてるぢやないか。あれが皆んな寺だらうか。寺の多い處だな、外郭も內郭も、見給へ、町の半分は寺だが。尖塔がまるで雜木林のやうに幷んでる。其の一本々々に金の星がゝかつてゐるのだ。

アンドレー　寺院ばかしが三百近いでせう。それから處々新月の徽章も光つてゐます、マホメタンの寺でせう。斯うなると

運命の丘

人

ナポレオン（四十四歳）
ダリユー（五十歳）
ミユラー（四十二歳）
モルチエール（四十五歳）
アンドレー（三十歳）
韃靼人二人
將校下士從卒其他

場所

モスコウ市外

時代

千八百十二年九月十四日の午後

第一場

モスコウ市の西南、雀が丘の一部、丘の頂を舞臺の前面に現はして、背後は一面にモスコウの市街を見下ろした景色、秋日和の午後二時過の日光が強くモスクワ河に反射してゐる。市内すべて本文にある通りの景。

運命の丘

宗　それは教に背く外道といふものぢや、
佛　私から申せばあなたのお教が外道かも知れませぬ、
宗　これ佛御前、
佛　はい、
宗　あなたは死んで貰ひたい、
(短刀の柄に手をかけ立ち上る、一足早く資成出で來たり宗盛を押し止める、佛は一足さがつたまゝぢつと見て)
佛　ほゝ、私はまだ死にませぬ、生きて榮えて行かねばなりませぬ、御免遊ばせ右大將さま、
(言ひすてゝ、すたくと奥へ入る、宗盛資成に止られて立膝の儘默然として跡を見る、外は風全く止んで月がますく冴えてゐる)

幕

佛　私は上樣の生命ではございませぬか、福原へは私が御案内に立ちます、そして新しい都へ！　新しい都へ！

宗　(氣色ばんで)これ佛御前！

佛　(緣へ上り、淸盛の手を取つて)さあ、上樣、奧へ參りませう、

淸　おゝ奧でまた一さし舞うて、平家の繁昌を祝へ、福原の天下は萬々年ぢや、

(侍女に)資成を呼べ、鼓の用意をさせい、

侍女　かしこまりました、

(一人次ぎへ行く)

淸　(佛の肩にすがり、奧へ行きかける、侍女一人從ふ)明日はいよ〱福原ぢやな、そちも奧で舞の仕度をせい、今日の今樣は何とか言うたな、さう〱「君を初めて見る時は千代も經ぬべし姬小松……」

(半ば歌ひながら這入らうとする途端に)

宗　佛御前！　お待ちなさい！

佛　(初め立留つて淸盛の手を取り、後一足離れて正面へ出で)何でございますか右大將さま、お呼びとめ遊ばしたのは、

(此の言葉のあひだ、侍女淸盛を扶けて奧へ入る)

宗　あなたはなぜ父上を外道に引入れやうとなさるか、それは天魔外道の仕業といふものぢや、

佛　私はたゞ上樣のお爲を思ふばかりでございます、都をお遷し遊ばすのも腐つた水は流して御覽遊ばせ、古い住居はかへて御覽遊ばせ、それが此の世に榮えるおきてかとは私存じます、

まあどんなでござりませう、

清　私もさう思ふ、福原がなつかしうなつた、さうぢや、私は福原へ行かう、もう此の京の都がうるさくなつた、

佛　ではあの福原に新しう都をお立て遊ばすおつもりでございますか、

清　さうぢや、こゝに居ればこそ、やれ山法師、やれ謀叛と噂が絶えぬ、あの福原は後が山で、前に海を控へて、山法師等も容易に降りては來ぬ、うるさい傲訴沙汰や爭亂の沙汰も自然と遠のくであらう、さうぢや、一思ひに京を福原へ移して見やう、私はどうして今まで福原を忘れてゐたか、佛そちも福原の都へ來いよ、

佛　では、屹度あの福原に都をお遷しなさいますか、福原を京に見かへて御覽遊ばしますか上樣、

清　おゝ、明日とも言はず、すぐに遷して見せるぞ、

佛　さうしたら上樣と私との新しい日も明日からさし初めるのでございませう、上樣福原へは私が御案內に立ちます、氣を丈夫にお持ち遊ばして日本國中に新しい日の日を見せておやり遊ばせ、玆ばかりが都ではございませぬ、

清　さうぢや〳〵、

宗　父上、それは御酒興でございますか、桓武このかた四百年の都を、さう輕々と遷されるものではございますまい、强ひてさやうな事をなされて、此の上にまた世上の恨をお重ねなされば、福原は安泰の都とはならいで却つて平家の運の果場となります、

清　うるさい〳〵、もうそち等が說法は聞かぬぞ、私の心は定まつた、四百年の都が何ぢや、大極殿も紫宸殿も此の淨海が指一本の差圖で移して見せる、佛、そちだけは、いつまでも私の傍を離れるな、私は淋しい男ぢやからな、

宗　先づ法師等をおなだめなされて……

清　うるさい奴等ぢやな、この清盛が山法師どもの前に降服するのか、此のわしに弱くなれといふのか、

（しきりに酒杯をかさねてゐたが、座に堪へぬやうに立上り、緣の邊をあるき廻る）

宗　法皇さまへもお詫の心で……

清　あゝ、うるさい事ぢやな、この私に弱くなれといふのか、私にはとてもそれは出來ぬ、遂て私にそのやうな事をせいといふなら、私はもう此の京には居らぬぞ、

（此の時また月光が舞臺を明るくする、庭の奧にあたつて、佛の聲が聞こえる）

佛　上樣、私は今宵の月で、またあの福原の住居を思ひ出しました、

清　（聲のする方を見込みながら）

おゝ、佛か、そちも福原にゐたと言うたな、

佛　（庭先へ出て來て）上樣は席をお動きなさいましたな、あぶないお足元ではございませぬか、

清　そちを待つてゐた、さあ、こゝへかけい、そちは今、福原と言うたな、

佛　（緣に腰かけて）はい、あの南の海の、明るい〳〵福原の御殿を、上樣はお忘れなさいましたか、福原はよい所とは思召しませぬか、

清　おゝ、そちも福原が好きぢやといふか福原はよい所ぢやな、

佛　上樣と御一緖で、今一度福原に住みたうございます、此の樣な月の晩にはあの松原かけて夢を見てゐるやうな景色が、

清　(益々いら〳〵として立つてゐるに堪へぬ如く體を搖かし、柱の根に坐はる)はゝ、源三位などに何が出來やう、

宗　それ許りではございませぬ、此のたびの巖島行幸で山法師どもの動搖が今以て收まりませぬ、

清　あれは、もう、私の聲がゝりで鎭まつた筈ぢや、

宗　いや、まだ鎭まるどころではございませぬ、益々廣まつて行く樣子でございます、

清　いや、さういふ筈はない、私を差し置いて法師等が騷ぐ譯はない、

宗　たしかに此のたびの騷ぎは、たゞ事とは思はれませぬ、

清　たしかにさうか？

宗　はい、

清　憎つくい法師めら、此の淨海を何と心得て居るか、今に見て居れ、山門も佛法も一揉みに揉みつぶしてやる、酒、酒、酒を持て來ぬか

(侍女等酒肴を運び、清盛に褥をすゝめ二人に酒をつぐ)

宗　併し佛法の力は人の力でどうすることも出來ませぬ、山法師を敵にして平家の天下がいつまで續くと思し召しますか、せめて佛法の前には弱くおなりなされて……

清　なに、弱くなれと？

宗　はい、佛法の前には弱くおなりなされて、末の安泰をお祈りなさるやう、お願ひに出ました、

清　弱くなるとは、どうすればよいのぢや、

清　そちはそれを唯の御消息とばかり聞いて來たか。

宗　私とても、それほどの事に心づかぬおろか者でもございませぬ、第一、ことさらに此の宗盛をお使にお立てなされた、上皇さまのお心からして、淺い御計略とは存じませぬ、併しいち早くそれにお氣のつく父上は………

清　（いらく／＼として）あゝ、もうよいわい、言ふな／＼、さうした沈んだ話を聞くと、此の淨海までが勇氣を挫く、今淨海が弱い心を起したら、平家の一門は瓦解ぢやがや、たとへ山を移し海を干しても、入道が一存は立てずには居られぬ、これ佛、酒を持てこい、酒を、

（清盛、椽へ立ち出やうとしてよろめく、佛走りよつて支へ、椽境の柱に立つたまゝ寄りかゝらせ、顏を見合はせる、此のころから月が雲に隱れた爲、舞臺やゝ暗くなる）

佛　私のまゐるまで、こゝをお動きなさいますな、獨りでお動きなさいますとあぶなうございます、（清盛うなづく、佛、次ぎの間の方へ出て行く）

宗　それから鳥羽の御所では、この頃夜な夜な怪しい物の笑ひ狂ふ聲が聞えますとかで、世上のものが寄ると障ると耳口を寄せて取沙汰いたします、何か大事の起こる前兆に相違ないと言ひ囃して居ります、總じて此の頃の世のさまが、上部の靜かさに引きかへて何か動亂の兆を孕んで居るやうで、私には心がゝりでなりませぬ、例へば三位入道などが近頃の擧動にも不審な噂がございます、

清　不審な噂がある？

宗　はい、油斷はなりませぬ、

清　そち達はむやみと後を見廻はすから、それで無氣味になるのぢや、世の中は闇夜の獨り道と思うて後を向くと己が足音まで物の怪のやうに聞えて、ちりけ元がぞッとする、後にはいつまでも暗い影がついて來る、

宗　其の暗い影を父上もお氣付でございますか、

清　知つて居るとも、世の中に勝つたもの、强いものには皆その影がついて居る、が私はそち達のやうに其の影に怖ぢ恐れて逃げ廻はることは嫌ひぢや、なう佛、

佛　でも上樣まで、お肩の凝るさうな强がりやうをなさいますこと、斯うしてお話の席にまで、のび〳〵した息は通ひませぬ、右大將さまお庭にでもお降り遊ばして少しくおくつろぎなさいませぬか、

宗　いや今宵はそれ程悠長な此の身でもありませぬ、

清　してほかの用事といふのは何事ぢや、

宗　實は私、今日上皇さまから鳥羽殿の法皇さまへお使に立ちました、

清　(屹となつて)なに、法皇さまへお使ひに？

宗　はい、お使ひに參りました、そしてあの鳥羽殿のわびしいお住居をつく〴〵見て參りました、それにつけ、私は、どうも當家の繁昌のうしろに、暗い不思議な物の影が覆ひかゝつて居るやうで、不安でなりませぬ、

清　おろかな事を言ふな、たとひ法皇さまのお力でも、今この平家をどうなさる事が出來やう、して其のお使と云ふのは何事ぢや、

宗　たゞの御消息で、久々打たえておなつかしいから、近々にお出でなされて御對面なされたい、

暗い行末ばかり眺めてゐる、陰に籠つた世の中に、私はあの大日輪のやうな上樣を慕うてまゐりました、(清盛の方へ)緋葵の花が日に向いて赤い息を吹くやうに、天に上樣、地に私が面を見合せて、天竺の魔法にかゝつてゐる世の中を、大笑ひに笑うてやらうではございませぬか、

清　なる程そちの言ふことは面白い、併し佛法の道もな、世を治めるには大切なものぢや、法師等が私の言ふ事をきゝさへすれば、あれで人の心をおだやかにする役に立つ、つまりは清盛が手足にしてはたらかすのぢや、あれも方便ぢや道具ぢや、

宗　父上、だん／＼と世のなりゆきを見ますにつけ當家の一門に集つた世上の恨みは、おもひのほかに深かう御座います、

清　またそれを言ふか、その話はもうやめい／＼、此の淨海もよく承知してをる、

宗　それを父上は恐ろしいとは思召しませぬか、

清　はゝはゝそちはそれ程世上の恨みが恐ろしいか、弱い男ぢやな、亡くなつた小松内府が遺言とやらで、さやうな弱い事を言ふのであらう、内府を見い、餘り氣が小さかつたために、早死をした、此の淨海は死なぬぞ、人の恨みなぞといふものは何時の代にもある、負けたものは何時でも勝つたものを恨むのが常ぢや、先方で恨むなら、此方でもそれだけの事をしてやる、向うが勝つか、此方がかつか、二つ一つのほかは世をわたる道はない筈ぢや、それともそちは先程佛御前が言うたやうに、一か八かの瀬戸際に負けてのきたいか、えゝ、馬鹿な事よ、なう佛、酒でも持つて來て賑かにせい、宗盛をもてなしやてれ、

宗　いやそれはお待ち下さい、まだ申し上げる一大事が御座います、

宗　それでは妓王御前も不憫なもの、佛御前とやらもなぜ身をへりくだつて、情を讓つては、おやりなされぬ、妓王御前が恨むのも道理と思はれます、

佛　妓王御前のお恨みも、もつともとは存じますが、それかと申して、私が身を引くのもいやでございます、情の戰に、私が勝てば、負けた妓王御前が身を引かれるのも、是非ない成行と存じます、

宗　併し佛御前、勝ち誇るばかりが道でもありますまい、たまには負けておやりなさい、

佛　右大將さま、それが私には出來ませぬ、日々かりそめの仁義なら、それもよろしうございませうが、人一代の運さだめに、敵を立てゝみづから亡びるのが眞の道とは存じませぬ、强いものが勝ち榮えてまゐるのは是非ないことではございませぬか、

宗　いや、勝つものも久しからず、因果應報の道理は恐ろしいと、お思ひなさい、妓王どのが此の歌を書き遺して置いたのも、偶然とは思はれませぬ、

佛　でも右大將さま、そのやうな歌は此の節日本の流行文句でございます、唐や天竺には、五百年も千年も前から、箕ですくふ程あると申すではございませぬか、それでも世の中は次ぎ〳〵に榮えてまゐります、

宗　盛者必滅は尊い佛法の敎であるのに、此の歌の心が佛御前には分からぬと見える、それともおん身は、佛法の法に背かうと言はれるか、

佛　右大將さまは、その法師づれが言ふやうな、殊勝らしい口眞似ををかしいとは思し召しませぬか、盛るものも衰へ、盛らぬものも衰へるのが定なら、なぜせめて、衰へぬ前に、盛りの色のありたけを誇つて置けとは敎へぬのでございませう、

清　うゝ、あれはな、無禮を働いたから先程暇をやつた、之を見い、斯ういふ事を書き残して出て行つたわい、

宗（二人ふりかへり襖の文字を見る、佛、燭を取つて差し照し、ぢつと宗盛の顔を見る、）

「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草何れか秋にあはで果つべき」

是は何とした歌でございますか、父上、

清　そこに居る女子を恨んだものともいふが、私は當家を恨んだ心と見た、

宗　妓王御前は、なぜにまた當家を恨みましたか、あれ程父上の寵愛を受けてゐた女子ではございませぬか、

清　さあ、それが私を恨んだのぢやから、不埒であらうがな、

宗　私には合點が參りませぬ、

佛　差し出がましうはございますが、其わけは私がよく存じて居ります、御免遊はせ右大將さま、

宗　はあ、

佛　私は佛と申して、京の町に舞と歌とを商うてゐた下賤のもの、今日上樣にお目通りがかなひまして、お側にお仕へ申す身になりましてございます、どうぞお見知り置き下さいませ、

宗　して妓王御前との仲は？

佛　上樣のお情が私の身に移りましてから、衛きは衰へるならはしで、自然と妓王御前の御寵愛が衰へましたそれが妓王御前のお恨みでございます、

清　おとなしくさへして居れば、また何とかしてやる方もあるのに、あのやうな無禮な眞似をし居る、憎い奴ぢや、

清　そしてとう〳〵此清盛を探しあてたといふのか？
佛　福原で上樣と妓王御前の噂を聞きました時は、羨ましうございました、それで私も白拍子となつて、見事この世に力と頼む一の人にまみえて見せやうと決心したのでございます、
清　よし〳〵私が其一の人になつてやる、斯うして　とそちとが同じ時代に生まれ合うて、互に慕ひ求めて居るものに出會ふといふのは宿緣ぢや、必ず私の傍を離れるなよ、
佛　私は離れませぬが上樣こそお離れ遊ばしますな、いつどのやうなものが出て參つて二人の仲に立ちませうとも、
（此間資成登場）
資成　申し上げます、前の右大將さまがただ今これへお見えでございます、
清　なに宗盛が來たと？　今時分に何用があつて來たのぢや、
（座に就く、佛從ふ、資成席を整へて引退くと、ちがへて宗盛衣冠にて登場）
おゝ、宗盛か、夜中に何事が起こつたのぢや、何か急用か、さあ、そこへ〳〵、
宗盛　（會釋をして座に就き、佛を尻目に見て）父上、お話が密談にわたりますがお差支がございませぬか？
清　うむ、遠慮には及ばぬ、それに居るのはな、何さあの、それ、佛というてな近う召し使うて居るものぢや、大事ない〳〵
佛　私は暫くお次へ下つて居りませうか、
宗　いや、父上がお許しの上は差支ありませぬ、そのまゝにしてお出でなさい、それにしても妓王御前はどうか致しましたか父上、

佛　それがいつか笛の逢瀬といふ浮名になつて、さる人に引分けられて了ひました、
清　それは何者ぢや、引分けてそちをどうしたといふのぢや、
佛　庄司の房達といふものが庄司の威光で其の男を殺して了ひ、私はいつか房達の心に從ふやうになりました、
清　ふむ〳〵房達はけしからぬ奴ぢやな、そしてそちはどうして房達と別れたか、房達との仲はどうであッたか？
佛　房達も男でございました、さる隱れ家でざれ歌を作り私がそれに合はせて舞ひました、
清　ふむそちが舞うたのか、その舞ひは見たかつたな、
佛　今もよく覺えて居ります、舞うてお目にかけませうか？
清　おう舞うて見せい〳〵、
佛　（扇をかざして歌ひながら舞ふ）
唄「さても女子は濱松原に、笛の逢瀨を松風々々、私も君ゆゑ戀松原に、房達男を斬つて棄てけり、あとには浪も引しほの、月は冴えたり小松原」
清　やあ〳〵、いや〳〵房達はけしからぬ奴ぢや、そのやうな歌は忘れて了へ、
佛　けれど房達との逢瀨も半年ばかりで、房達もまた私ゆゑに亡ぼされて了ひました、そして私は其の房達よりも強い男に身をまかせて一年が程をすごしましたが、其の男もいつかは其の房達と同じ身の果てになるかと思うと、もうそのまゝには居られませず、强いものの勝ちの世の中に私が思ひのまゝに身を任す男は日本國中で一番強い男でなうてはならぬと、其の時私は心を定めてひとりで福原へ拔け出しました、そしてとう〳〵此の京にまでさすらひ出たのでございます、

清　おゝ佛、

佛　けれども上樣、若しや私の體に自然と秋の衰へが來ましたら、其とき私はどうなるでございませう、私もやつぱり妓王の跡を追ふのではございますいか？

清　またそのやうに心細げな事を言ふか、そちが衰へるまでには私が先に衰へて了ふ、ぢやからそちが先に立つて私にいつまでも力を添へてくれといふのぢや、もうさうした鬱した話はやめい、先の事は分からぬとして置け、未來といふものはまだ紐を解かぬ經卷のやうなものぢや、何が書いてあるか知れたものではない、それよりも先程あの前裁で開いたそちが男の話の續きを聞かせい、でその濱邊に住んだ男はどうしたのぢや、

佛　それが私の十六の初戀ひでございます、そして其の男と二年ばかり、あの福原近くの松原と苫屋の蔭で二人は身も世も無いほどの戀をしつゞけました、

清　これ佛、少し遠慮して物を言はぬか、淸盛がこゝで聞いて居るのぢや、

佛　はゝ、御免遊ばせ、ではもう其の話は申しますまい、

清　いや、いかぬ〳〵、其の後が聞きたいのぢや、たゞ少し手柔かに話せといふのぢや、

佛　春の宵にはあの濱邊に絹を搖るやうな漣が寄せて、砂子が銀のやうに月に照つて暖い風が沖から吹いて來ます、私はいつも松並木の黑い影の中に木の幹に寄りかゝつて、その男の來るのを待つてゐますと、男は遠くから橫笛を吹いて近づいて來ます、そしてあたりに人氣の無いのを見すましてはそつと出會うて一夜を千夜の思ひで契りかはしました、

清　そこはもうそれでよい〳〵、それからどうした、終りを言へ終りを言へ、

た、そちは私の生命ぢや、

佛　上樣、それは神もつて誠でございますか、私が上樣のお生命になつてもよろしうございますか、

淸　おゝよいともそちの好きなことなら私は何んでもする、そちの行きたい所へは私もついて行く、そちは私が生命の案内者ぢや、併し佛、私にばかりこれほどの誓を立てさせて、そちは少しも誓を立てぬではないか、そちから先に私を棄てたらどうするか、

佛　ほゝ此の天が下は上樣のものではございませぬか、私が若し上樣を棄てましたら上樣は草をわけて土を篩つても私をお捕へなさることが出來ませう、そのやうな御懸念は御無用でございます、

淸　いやさうでない、そちの體は捕へることが出來てもそちの心は捕へられぬ、そちの心に秋風が立つたら私はどうなるのぢや、

佛　はゝ、上樣には日本國中の男女がみんな心を寄せて居ります、私風情のものがよし一人や二人心を背けたとて上樣は少しもお困り遊ばす事はございませぬ、却つてよい厄拂をしたと思召すでございませう、

淸　またたはけた事を言ふ、私はなるほど上部にこそ日本國中を味方にも持つて居るが心はいつも一人ぼつちぢや、私はいかにも強い男ぢやとは思ふが、心はいつも淋しいぞ、私の後にはいつも暗い懸念のやうなものが附きまとうて居る、それぢやからこそ、私は強いものが好きぢや美しいものが好きぢや、暗いじめ〳〵したものが大嫌ひぢや、私を淋しい男と思うてくれ、

佛　上樣、私は必ず〳〵一生上樣のお傍は離れませぬ、

（讀み了つてしばらく間を置き顔を上げて）

はゝ、はゝ、是は何でございます上樣、萠え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、いづれか秋に逢はで果つべき、早い遲いはあつても、草といふ草はみんな今に枯れて了ふぞ見てをれと申すのでございませう、

清　是れはたしかに妓王が手ぢや、重ね〱不埓な奴め、平家の繁昌を呪ひ居つたな、

佛　（笑つて）いゝえ、上樣此の歌は私の身の上を呪うた歌でございます、此の佛も今に妓王御前と同じやうに、秋風たてば棄てられて、枯れ果てゝ了ふといふ謎でございます、

清　それなら愈々けしからぬ事ぢや、此の淨海が寵愛するそちの身に不祥の事を言ふとは以ての外ぢや、今まであれ程大事にしてやつた私に、恩を怨みで返し居る憎い奴め、呼び寄せて成敗してやる、

佛　まあ、お待ち遊ばせ、私が秋に逢ひますも逢ひませぬも、みんな上樣のお心一つではございませぬか、妓王御前をお咎め遊ばす前に、まあ上樣のお心から聽きたうございます、私もあの妓王御前と同じやうに、また誰れかに見かへられるのでございませう、あゝ、あゝ、さうした上樣の水性と知つたら、こゝまで慕うて參るのではございませんでした、

清　馬鹿を言へ、私の心はな、疾くからそちの樣な女子を慕うてゐるのぢや、あの妓王などはあれはほんの勝部の口取に過ぎんのぢや、私はあの樣な弱い女は嫌ひぢや、美しうて强い、そちのやうな女子でなくては私の心には手ごたへが無い、何んで私がそちを棄てるものか、そちの身にだけは、平家の天下の續くかぎり夢にも秋風は聞かせぬぞ、

佛　上樣はそれをお誓ひ下さいますか、

清　おゝ誓ふとも、上は梵天も照覽あれ私の眞實は變らぬ、私は一目そちを見た刹那から不思議と魂をひきよせられて了う

（清盛にすがりつく）

清　えゝ、また騒ぐか、何事ぢや、そちには妓王が祟つてゐると見えるな（こちらを見て）おゝあれは妓王ぢや、おのれ邪魔をしようと思うて來居つたか、憎つくい奴め、

（駈け上り捉らへやうとする、妓王すり抜けて逃げる、清盛茫然と見送る、佛も庭に立つたまゝ見送つてゐる、やがて清盛心づいて振りかへり、縁端へ出て）

これ佛、こちらへ上らぬか、妓王はもう逃げて了うたぞ、さあ〳〵、上つて來い、

佛　でも不思議ではございませぬか、衣の音も立てず飛ぶやうに逃げて行きました、

清盛　はゝ、妓王は身の輕い奴ぢやからな、今に呼び寄せて糺明してやる、

佛　（上りながら襖をすかし見て）おゝ、上樣、あれは何でございます、お障子に大きな文字が見えます、

清　え、障子に文字が？（不審さうに一足すざつて透し見る）うむ、成程文字が書いてある、今まで何も無かつた筈ぢやが不思議だな（次の間の口へ行つて）

これ誰れか居らぬか、早く燈を持て來い、燈を、

侍女　（次の間から）はい、只今、

（燭臺を持つて出てすぐ引下る）

清　（燭臺を襖の前に引きよせ斜に面して立つたまゝ）「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草」

佛　（横向きに膝をついて坐つて）「何れか秋にあはで果つべき」

ら此の手、それしつかりと握つて見い、熱いであらう、燒けつくやうであらう、それから此の頭、頭の中はいつも此の風が立つてをる、散るならあわたゞしく散るのが私の本性ぢや、

佛　ほんとうに上樣のお手が熱いこと、それからお胸の動悸も高かう御座いますこと、私は今はじめて上樣のほんとうのお心を聞いたやうな氣がいたします、私も上樣と御一緒にあわたゞしう散つて見たう御座います、

清　あゝまたつまらぬ事を言はせをる、私は散際の相談などは嫌ひぢや、さあ〳〵今度こそそちの話の番ぢや、其の男は何ものぢや、今生きて居るか死んで居るか、

佛　二人は殺され一人は生死の程も分かりませぬ、

清　なに、二人も三人も男がゐたといふかそれは一體どうした譯ぢや、どれ〳〵私が手を引いてやるからあの花の中をあるきながら、精しい話を聞かせい、私はもう、我慢がならぬぞ、さあ來い〳〵、

（侍女履物をすゝめる、其の方を向いて）

佛　在所の濱邊にわびしい住居をしてゐた若い男でございます、そちは次へ下つて居れ、それで其の最初の男といふのは何者ぢや、

（話しながら二人つれ立ち庭に降り花の散る中に姿を沒する、引かへに妓王硯箱をかゝへて忍びやかに入り來り襖の前に立つて二人の姿を見送り襖に歌を書く、終つて立ち上り庭の方を見る途端に出て來る佛と顏を見合はす）

佛　おゝ、あそこに妓王御前が……

（此の間侍女舞をすゝめる、二人は倚立ちながら）

佛　でも、まあ御覧遊ばせ、あの淋しい景色も惜しいとも思召しませぬか、（風また吹き入る）おゝ冷たい風―髪の毛が總毛立つやうでございます、（清盛に寄り添ひながらふと後を見て）、あの渡殿の邊の暗うございますこと、若しや先程のがまことの妓王御前であつたら、……

清　引つとらへてそちが思ひのまゝにしてやるまでぢや、さあ、約束した話を早く聞かせぬか、

佛　まあちよつと、あの月を御覧遊ばせ、風に吹きさらされて、白けて居りますこと、それにまあ花吹雪の散りますこと、淋しい中に賑かな、不思議な景色ではございませぬか、

清　これ佛、そちは私をぢらして居るな、

佛　でも、これ程の景色を仇にお過し遊ばす上樣なら、私は嫌ひでございます、人に情の厚いものなら、月夜にもやはり情が無くてはなりませぬ、上樣は月夜の眺めには少しも情をおかけなさいませぬか、

清　むづかしい事を言ひ居るな、なるほど之はよい景色ぢや、あわたゞしい花の散り方をする、さあ、そこでそちの話はどうぢや、そちが見て來たよい所といふのは何所ぢや、其の男といふのは何ものぢや、

佛　まあお待ち遊ばせ、上樣が若し花なら、此のやうにあわたゞしい中で散りますのと、おつとりした春の空に一ひらづゝ散つて行きますのと、どちらがお好きでございますか、

清　また妙な事を言ひ出したな、それは靜かに散つて行かれるものなら、其の方がよささうにも思ふが併しわしにはそれは出來ぬ、私の館にはいつも嵐が吹いて居る、これ、この胸に手をあてゝ見い、この通り胸には大波が打つてをる、それか

清　私もこの頃さう思ふことがある、そちと私とは心が通ふと見える、そちに案内を頼んだら定めてそちの顔のやうに花やかな美しい所に連れて行くであらう、私はそちの跡にならら、何所へでもついて行く、そちは私の案内者ぢや、

佛　屹度ついておいで遊ばしますか、

清　おゝ、ついて行く、そのよい所といふのは何處ぢや、一體そちは何所で生れて、何所に育つた女ぢや、今までに何んな男と連れ添うたか、白狀せい、

佛　お聞かせ申しませうか、

清　おゝ言へ〳〵、早く聞かせい、

佛　でも聞いた上でお腹立遊ばすやうな事がございましたら、

清　構はぬ〳〵、

佛　おやき遊ばしますなよ、（侍女の居るのを見て躊躇して）

清　やかぬ〳〵、あちらで其の話を殘らず聞かう、隱さず物語らぬと承知せぬぞ、さ、奥へ行かう、

佛　いえ〳〵こゝがおもしろございます、さ、あなた樣もこゝへお出で遊ばせ、

（清盛を引よせ緣端へ並んで立つ、侍女褥を取りに行かうとする、途端に風が吹き入つて燈を消す）

侍女　御免遊ばしませ、すぐに燈を持つて參ります、

佛　いえ〳〵燈には及びませぬ、燈の無いのが却つて風情でございませう？　上樣、

清　暗いな、そちは淋しうはないか、私は暗い所が大きらひぢや、

そちもやつぱり弱蟲ぢや、妓王めがよく物をぢして、陰氣な事を言ひ居つたが、そちも似たものぢやな、妓王の事ばかり惡くは言はれぬぞ、

佛　はい〳〵、どうせ私風情が妓王御前の事など、とやかう申してはすみませぬ、御免遊ばせ、

清　妓王が物におびえると、屹度この京の都を私と一緒に出たいと言つて居つたが、ではこゝを出て何處ともあては無いといふ馬鹿な奴であつた、あいつはいつも宛の無い愚痴ばかりこぼす女であつたよ、そちは妓王よりもしつかり者ぢやと思うたに、案外弱い奴ぢやな、

佛　實を申せば上樣、先程は全く恐ろしうございました、あの細殿を御覧遊ばせ、あの暗い中を妓王御前が恐ろしい眼でこちらを睨んで、魔物のやうに飛んで行きました、

清　たわけを言ふな、妓王は疾くに追ひ返したではないかそれぢやから女子といふものは相手にならぬ、そちだけは男のやうにすつきりした事を言ふと思うたに、やつぱり駄目ぢやな、

佛　でも上樣がこの都をお出遊ばすことがございましたら、私がよい所へ御案内申しませう、私はたんとたんとよい所を存じて居ります、

清　おゝ、それは何ういふ所ぢや、私も實はもう此の都に飽きて來たから、そちの案内する所へなら行かぬ事もない、どこがよいのぢや、

佛　それは、もつと〳〵明るいよい處でございます、この京の都は、思うたよりも日影が薄くて、上樣の御繁昌にも似ず、何所か淋しい所があるではございませぬか、日脚のさゝぬ隅々が多うございます、

（舞臺面、前と同じ夜の景）

清盛　これ〳〵、まてといふに、なぜそのやうにあわたゞしう逃げて行くのぢや、佛、佛！

佛（衣裳をかへやゝしどけない樣子で檜扇を持つたまゝ足早に出て來るそして振りかへつて、輕く扇で手拍子を取つて）はゝ、はゝ、お歳のせいでお足元があぶなうございますよ、さ、こゝまでお出で遊ばせ、早くつかまへて御覧遊ばせ、

（清盛わざと足をゆるめて出て來る、つゞいて侍女一人あかしを持つて出て前面にする）

清　噓を言へ、私が無理を言つたのではない、そちが何かひどく物におびえたではないか、

佛　ほゝ、上樣、お氣がつきましたか、では教へて差しあげませう、上樣のお頭の影がそれ〳〵、あの障子にも映ッて居ります、大きな入道さまではございませんか、

清　はゝ〳〵、大入道ぢやな、あゝいふのがまことに出て來たら、そちはどうする？（佛清盛に寄り添うてかしこまる）それ見い、

清　何事ぢや、けたゝましい騷ぎをするではないか、

佛（衣裳をかへしどけない樣子で足早に出て來て振り向いて輕く手を叩いて）ほゝ、ほゝ、上樣のお驚き遊ばした御樣子がをかしうございましたこと、

清　何がをかしい、をかしい所の騷ぎかい、

佛　でも上樣があんまり御無理をおつしやいますもの、

（二人並んで前の方へ出る）

季　妓王さまに、上様からお暇が出たと申すのでございます、

妓　まあ、それはまことでございますか、私は夢を見て居るのではございますまいか、

季　夢でも何でもございませぬ、急いでお立ちのきの用意をなさい、

妓　それにしても、あんまり淺ましいではございませぬか、人の心がさうまざ〳〵と變るものとは、私はどうしても思はれませぬ、

季　そこが入道さまのお氣質とお諦めなさる外はありますまい、今日は一旦お引取りなされて、入道さまのお心の解ける日をお待ちなさい、玆で何うなされうとしてもすべはございませぬ、

妓　では、せめて佛御前に一目會うて、言ひたい事がございます、

季　お恨は御もつともでも、今おあひなされてはお爲になりませぬ、ま、ま、玆は一と素直にお立ちなさい、

妓　いえ〳〵、恨みは申しませぬ、たゞ一言言つて置きたい事がございます、お願ひでございます、

季　いけませぬ〳〵、お氣の毒でも、今日は是非このまゝにお下りなさい、兎も角お次へなりとも下つて、それからの御思案になさいませ、さ、さ、

（手を執つて引立て退場す）

幕

第二幕

法甲　あゝ、さま〴〵の世の中ぢや、私等は有爲轉變の敎を目の前に見て居るのぢやな、では皆さま、愚僧どもは一足お先へ失禮いたします、

法乙　またあの嵯峨の庵で一休みして行かうか、どれ〳〵

資　我々も兎に角下つて居らう、

季　それがよからう、お次へ下つて居りませう、

（皆々行きかける）

侍女　大夫判官さま、お召しでございます、

季　あ、まだ何か御用があたつかな、何御用であらう？

（考へながら一人奥へ行く）

（皆々退場）

妓　（泣き伏して、やがて顏を上ぐ）えゝ口惜しい、斯うしては居られぬ、あまりと言へば非道なお仕打、私も奥へ行つて上樣の存分にして貰ふまでぢや、

（血相をかへて立上らうとする時奥から季貞出で來る）

季　妓王さま、何うなさいます、おかはいさうではございますが、唯今入道さまからお暇が出ました、あなた樣お出での限りは佛御前が御遠慮なさるとかで、早々此の屋敷をお立ち退きなされいとの事でございますぞ、

妓　えゝ？　大夫判官さま、それは何事でございます、あなたはまあ何をおつしやるか、

（清盛座に就く、佛、席の中央に身構して）

佛　（檜扇をかざし、今樣を坐つたまゝ歌ひ、後起つて歌ひながら舞ふ）

「君をはじめて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、お前の池なる龜が岡に、鶴こそ群れゐて遊ぶめれ」

德是北辰　椿葉影再改　尊猶南面　松花色十廻

（賁歌、亂舞）

「よしさらば、心のまゝにつらかれよ、さなきは人の忘れがたきに」

清盛　（興奮して）やあ〳〵、そちは舞も歌も上手ぢやな、妓王にも劣らぬよい聲ぢや、殊に私が上を歌うた歌が氣に入つた、かわいゝ奴ぢや、私も入道の身ぢやから、今日からは、さつぱりと佛の御弟子になるぞ、こつちへ來いこつちへ來い、

（清盛歡喜極まつて興奮した體で佛の方へ立つて行き、手を取つて奧へ連れて入らうとする）

佛　まあ上樣、何事でございます、お放し遊ばせ、お放し遊ばせ、

清　いや〳〵放さぬ〳〵、私はそちに相談がある、まあ奧へ來い、

（二人奧手へ這入る、侍女等ついて這入る、妓王覺えず立ち上り、奧手を見込みて立つ）

法乙　とろ〳〵と居眠をして居るあひだに、世の中が逆さまになつたやうぢやな、

資成　飛んだ事になつたものぢや、

季貞　妓王さまもお氣の毒な……

（皆々妓王の方へ氣をかねる）

佛　今はこのやうな身なりでございますから後ほどまた、舞の裝束でお目通りが願ひたうございます、

清　烏帽子水干の支度なら、次の間でせい、私は是非今そちの舞が見たいのぢや、さ、これをあちらへ案內して舞の裝束いたしてやれ、

（侍女二人佛を案內して次へ行きかゝる）

佛　（ぢつと妓王を見る、妓王臆して俯く、淸盛の方へ媚を寄せて）ではしばらく御免遊ばしませ、

清　おゝ、早く行つて仕度をせい、それから皆のものは廂へ出い、（淸盛立上る、皆立つて席を改める）おゝ、御坊は鼓が上手ぢやといふから、一つ舞に合せて打つて下さい、これ誰れか鼓の用意をせい（侍士一人次へ鼓を取りに行く）

法甲　いや、私どもの鼓はとてもこの席で打つやうなものではございませぬ、平に御辭退申上げます、愚僧どもはもう御免を蒙つた方がよろしうございます、これ順念々々目をおさましなさい、もうお暇を申上げやう、

（法師乙、目をさまし緣に坐つたまゝ不思議さうに一座の光景を見廻してゐる）

清　いや、ならぬ〳〵、是非に打つて貰はう、佛はどうした待たせ居るな、遲いぞ〳〵

（立つて次の間の方へ行かうとする、途端に佛水干を着舞の姿で出て來る、從ふ侍士鼓を持つて來て法師甲に渡す）

（此間妓王は忘れられたやうに、手持無沙汰で片隅に悄然として坐つてゐる）

やあ、佛か、美しいぞ〳〵、まあそちらを向いて見せい、目がさめるやうぢや、妓王よりも美しいぞ、

法師乙　南無阿彌陀佛〳〵、

清　さあ舞へ、さあ舞へ、

にも上様と同じくお氣に召した所がございますか、

佛　ほゝ、それはもう、上様のやうなお方に是程思はれてお出で遊ばす、日本一の果報なお方にお目にかゝるのでございますもの、女子冥加と思うて、嬉しく存じて居ります、

清　なう妓王、佛は思うたよりも賢い女子ぢや、そちが妹と思うて召使うてやらぬか、

妓　私には、今居ります妹一人で澤山でございます、御所望なら上様御自身でお召し遊ばせ、

法師甲　資成どの、季貞どの、一旦この席をおひらきなされて、上様を奥へ御案内したらどうぢやな、

資成、季貞　それがよろしうございませう一度席をお改め遊ばして、

清　いや、まだよい／＼、大分興が湧いて來たぞ、此の遲い春の日を、さう心忙しくするものではない、心ない雑人原どもぢやな、そち達も今少し酒を過ごせ（侍女酒をつぐ）

（皆々どよめく）

佛　どうぞ一つお聞かせ下さいませ、

清　いや、そちにさう言はれると二の句は出ぬわい、そち一つ歌うて聞かせい、舞うて見せい、なう、妓王、おもしろからうぞ、

妓　どうぞお聞かせ下さい、

佛　音に聞えた妓王御前のお目通りで何で私風情が歌どころでございませう、おなぶり遊ばしますな、

清　いや／＼遠慮は無用ぢや、私が所望する、辭退するには及ばぬ、さ、早く歌うて聞かせい舞うて見せい、

妓　いゝえ、少しも御遠慮には及びませぬ、

清　遠慮するには及ばぬ、それでそちが今日まゐつたのは何か願ひの筋でもあつてか、

佛　お願ひと申しますのは、たゞ斯うして一度上樣にお目通りさへかなひますれば、それでよいのでございます、私も是まで名ある方さまへお目通りのかなうた數は多うございますが、たつた一つ、今日本で一の位においで遊ばす上樣に、お目通りがかなはぬ許りに、私は生甲斐のない思ひをいたして今日までこの西八條の御殿を夢現に慕うてまゐりました、

清　それ程ならさうと早く申し出ればよいのに、つまらぬ所に氣を兼ねたものぢやな、さ、そちに一つ酌をして貰はうか、（侍女銚子を渡す、佛取つて酒をつぐ、其間）そこでそちは、私に會うてどう思ふか、これで滿足したと思ふか、

佛　お目通りして、優しいお言葉まで受けました上は、私はもう故鄕に歸つて、一生藪草の中に埋もれましても、殘惜しいとは思ひませぬ、今日のお目見えを、一生の思出にいたします、

妓　藪草の中とやらにお歸りには及びますま、いつそこのまゝ上樣のお側にでもお出で遊ばせ、上樣も屹度その方が御滿足でございませう、なう、資成どの、

資成　（當惑して）はゝ、はゝ、佛どのもうそろ〳〵御退きなされてはいかゞでございますか

清　いや、まだよい、まだよい、妓王にも酌をしてやれ、

妓　いゝえ上樣、私はもうたんと頂きました、どうぞお構ひなさいますな、

佛　妓王さまにも、お目通りのかなひましたのを、身に餘る面目と存じて居ります、

妓　いゝえ、私などは物の數でもございませぬ、却つてお邪魔であらうとお笑止に思うて居ります、それとも、何か此妓王

てと申すから會うてやるのぢや、顏を上げて見せい、そして妓王に禮を言へ、

佛　（顏を上げ大膽にぢつと清盛を見て）はいありがたうございます、冥加でございます、どうぞお見知り置き遊ばして………

（清盛ぢつと佛の顏を凝視して其の美貌に驚き、覺えず妓王の手を取り落とす、妓王もはつとして身を退く）

清　おゝ、そちが佛か、私はどうやらそちを見たことがあるやうに思ふが、まあ近う寄れ、もつと近う進め、そちは一體どこの者ぢや、

佛　はい、私は以前福原に居りましてございます、

清　ふむ、では福原でそちに會うたかな、私は少しもおぼえて居らぬが、とにかくそちの顏は、私にはどうも初對面のやうには思はれぬ、昔馴染にめぐり逢うたやうな氣がする、

妓　では佛御前は、上樣と福原以來のお馴染でございますか、

佛　妓王さま、御免遊ばせ、私も志願の筋がございまして福原には居りましたが、ちき〳〵上樣にお目通りいたした事は一度もございませぬ、ましてお馴染などゝは、思ひもよらぬ事でございます、上樣がおたはむれをおつしやるのでございます、

妓　さやうでございますか、上樣、

清　いや、たはむれではないが、ぢき〳〵會うた事もないやうぢや、たゞ不思議とこの女子の顏が私には昔馴染のやうに思はれるといふまでぢや、氣にかけるな〳〵

佛　かやうなお席へ推參いたしまして、妓王さまへ申譯がございませぬ、

（急ぎ足に出で行く、一座動搖する）

清　さあ、妓王、もつと近う寄れ、斯う並んでゐて佛とやらを見てやらう、どのやうな女子であらうな、（妓王の手を取る）

妓　でも上樣、佛御前が私よりも美しい女子でございましたら、上樣はどうなさいます、

清　そちより美しい女子が、日本國はおろか唐にも天竺にも居る筈はない、安心して居れ、

妓　まあ、上樣のお口のよい事、でも上樣はもう私などはお忘れなさるのでございませう？

清　そちを忘れるとは？

妓　先程さうおつしやつたではございませぬか、

清　あゝ、またあの事を言ひ出したか、あれはなそちばかりを忘れるといふのではない、そちが側にゐることを忘れるときには、私は京の町まで忘れてゐる、そして何所かもつと〳〵花やかな所を心の中に描いて樂んで居るのぢや、そちもよく、京はいやぢやと言ふではないか、

妓　私は京を遁れて、極樂淨土のやうな靜かな所へ行きたいと思うて居ります、

法甲　極樂淨土の御誓願は御奇特でござります、

法乙　（寢言のやうに）南無阿彌陀々々

（此の時資成佛をつれて登場、佛、下手に平伏する）

資成　車に乘つて歸りかけました所を、呼び戻して召しつれましてござります、

清　あゝ、さうか、佛とやら、よく聞けよ、私はな、そち等がやうな推參者に會ふ筈ではなかつたが、こゝに居る妓王が達

取次　いや、引き立てますのなら、世話はございませぬ、私共が引立てますから、どうか其のまゝにお出で下さい、

妓　まあ、待つて下さい、上樣、あの、佛と申しますのは、此の頃洛中に名高い舞の名人でございませう、上樣のお氣晴しに、どうかお呼び入れ下さいませ、それに白拍子と申せば、私とても元は同じ身の上でございます、折角尋ねて參つたものを、すげなくお歸しなさるのが本意でもございますまい、呼び入れておやりなさいませ、

清　いや、ならぬ〳〵、そちが居る西八條へ、何うしてさやうなものが推しかけて參つたか、不埓ぢや、神と言はうが佛と言はうが、妓王の居る所へ足踏みもかなはぬと、早くさう言へ、

妓　いえ〳〵、私への義理をお立て下さるのは嬉しうございますが、お願でございます、どうか呼んでやつて下さいませ、佛御前とやらを、私も見たうございます、

清　はゝ、遠慮をするな、そちに義理を立てるのではない、私がそちより外の女子は見たうないからぢや、追ひ返せ〳〵

取次　はッ(立つて行く)

妓　女子の身を追ひ立てゝ、恥をおかゝせなさるのはむごうございます、召し返して、せめて御對面ばかりでもしてやつて下さいませ、妓王がゐて歸したと申されては、私の女子が立ちませぬ、資成どの、どうぞ止めて下さいませ、

資成　ごもつともではございますが……

(立かけてもぢ〳〵する)

清　よし〳〵、それ程に言ふなら呼び返してやれ、資成行つて連れて來い、

資成　かしこまりました、

法乙　いや、御當家の御代はさうではござりますまいと申すので、

清　なう御坊たち、考へても見い、保元平治このかた、此の入道は隨分身を棄てゝ上へ奉公をして居る、さればこそ、跡の月には新御門もいよ〳〵御卽位で、當家は准三后の宣旨を蒙つた、鹿ヶ谷の一類、法皇の御謀叛でさへ此の淨海には敵はぬでないか、法皇さまの鳥羽におはすのを、世間は何かと言ふさうぢや、淨海の身にもなつて見て異れい、あれほど長いお馴染でありながら、つまらぬ奴等の口車に乘つて、當家を亡さうとされる、それもお上へなら、此の淨海が首一つ差上げて、少しも惜しいとは思はぬが、お上といふのは上部のこと、裏には當家の繁昌を嫉む輩が牙を磨いて待つて居る、當家が亡びればそれらのものゝ天下になるのぢや、なう御坊、それでも私は負けて居らねばならぬぢやらうか、

法甲　御もつともと存じます、たゞ天下を味方になされて、佛法王法の憎しみをお受けなされぬ御用心が（此の時法師乙緣端に音を立てゝ眠りこける）肝要と存じます、

清　やめい〳〵、此の淨海が生きて居る限りは、日本國中、當家に指を差すものは一人も居らぬ、

（此の時取次の侍士出で來る）

取次　先程から白拍子の佛と申すものがお車寄に參つて居りますが、是非一度お上へお目通りが願ひたいと申し張つて、何と叱つても歸りませぬ、いかゞいたしませうか、

季貞　これ〳〵御前へさやうな推參な事を申し上げるとは何うしたものぢや、それは屹度狂人であらうから、早く引き出すがよい、

侍士　（立ちかゝる）私共が參つて引立てませう、

の肌の色が殊に美しいぞ、もつとも、よい女子だけは、他のものぢやと思ふと尚よく見えることがある、えゝ?　妓王などども、若い仇し男を見て、さうした心を起こすことがあらうな、

妓　私は、たゞもう上樣の大きな光に包まれて、外のものは何も目に這入りませぬ、斯うしてぢつとお惠みに身を任せて居りますれば、此の上欲しいと思ふ願は一つも起こりませぬ、たゞ此のやうな、身に餘る榮華がいつまで續きますかと、それが氣がゝりでございます、

清　そちはいつも心元なさうな奴ぢやな、ちやうどあの花のやうな奴ぢや、見事は見事ぢやが、今にも散りさうで手が離されぬ、私までが、どうかすると釣り込まれて一緒に心元ない思ひをする、さうかと思ふと、時々はもう、そちが側にゐても私には何の手ごたへもない心地がする、そちのゐることを忘れて了ふことがある、

妓　さうして私は、段々と上樣に棄てられて行くのでございませう、心元なうございます、

清　はゝ、はゝ、今私が言うたのは、そちを疎略にするといふのではない、そちがあんまり弱いからぢや、もつと強うなれ、強うなれ、さ、もつと近う寄つて一つ飲め、私はな、そち達のやうに、ちよつとすると、もう直ぐ此の世の事にあきらめをつけて、此の上望みは無いなどゝ、ちゞこまつて了ふことは嫌ひぢや、そち達も私の側にさへ居れば、少しも氣づかふ事はない、平家の運勢は千萬年ぢや、なう資成、

資成　あの櫻を見るにつけましても、誠に世は平家の天下でございます、

法乙　併しあの櫻は、今が眞つ盛りと見えますから、やがてもう、散るかも知れませぬ、

資成　(目で制しながら)これ〳〵、何で其のやうな不祥な事をおつしやる、寢ぼけてゞもおいでなさるか、

取りつくらうて噓をいふことはない、噓をいふことは無い、

法甲　併し其の騷ぎは打すてゝ置けば自然と治ります、一旦入道樣のお聲がゝりで、鎭まつたものを内輪の不服など申上げるのは、入道樣の御威光に傷をつけるといふものぢや、さあ〳〵其の話はもうお止めなさい、

清　いや分かつた〳〵、その事なら今一度私が叱つてやる、さうしたら皆も落ち付くであらう、さあ、今一めぐり酒を流行らせい、(侍女酒をついで廻る、淸盛立つ、妓王をつれて來る)

妓王、そちも何か歌はぬか、そちはいつも便りなささうに默つて沈んでゐる女子ぢやな、そちは今に尼法師にでもなるのぢやらう、

妓王　でも上樣にも、此の節は管絃を聞いてお鬱ぎ遊ばすことがございます、私はあれが氣がゝりでなりませぬ、

清　ふむ、そちもそれに心づいたか、私もな、此の頃は時々氣が弱くなつてな………ま、やめい〳〵、今の私が身の上に鬱ぎの種はない筈ぢや、いま日本の天下は私が威光で光つて居る、なう妓王、そちとても、私が寵愛してやればこそ、それ程美しく見えるのであらうが、

法乙　順念はもう酩酊いたしました、こゝらでちよつと御免を蒙りまして、

(座をすべつて緣端に出で柱によりかゝつて、うつら〳〵として居る)

妓王　それは上樣の御威でございますもの、その前に出ましたら、どんな者でも消押されて了ひます、それでも妓王には、また妓王のよい所が……幾らかあるとは思し召しませぬか、ほゝ、上樣、如何でございますか、

清　いや、さうでない〳〵、私の物ぢやと思ふから、それで美しいのぢや、さう思ふと、咲き盛つたあの櫻よりも、暖いそ

清　女犯戒はどうぢや、女子をあやめた覺はないかな、

法乙　いやお入道さま、之はきつい事を仰せられます、此の煩念五十になりまするが、いまだ曾て女子に手をかけた事はござりませぬ、たゞ斯う遠くから女菩薩たちの御來迎を拜んで居ればそれで結構なのでござります、

法甲　さあ〱、もうよいからお暇を申し上げなさい、立ちませう〱、

法乙　まだ言ひ居るか、入道さまからの許しの出ぬ内に立つのは無禮ぢや、これからお山へ歸つたら、またあのやかましい騷ぎの仲間入をせねばなるまいがな、もう當分お山へは歸るまいよ、

清　叡山の騷ぎといふのは何ぢや、

法甲　いえ、なに、些細な事でござります、

法乙　些細でもあるまいぞ、入道樣、それは斯うでござります、

法甲　これ〱お止めなさい、あのやうな内輪事を申し上げて、折角の御酒興を殺いではなりませぬ、

法乙　いや内輪事ではない、入道樣、實はこのたび嚴島へのお幸行につきましてな、山のものどもに不服がござりまして、

清　その事なら、私が疾くに叱つて置いたから、もう騷ぐことは無い筈ぢや、

法甲　さやうでござります、入道樣のお聲がゝりでもう鎭まつた跡ぢや、煩念は何をお言ひなさる、

法乙　いゝや、まだ鎭まりませぬ、貴公はさうした僞りを言ふからいけぬ、成程上部は一旦鎭まりましたが、まことの不服はまだなか〱治まりませず、より〱不穩の事などを言ひ觸らす僧が多うござります、拙僧それがうるさうて、斯うしてお山にも居りませぬやうな次第で、なに貴公とても同じ思惑ぢやといふではないか、何も入道樣の前ぢやからと言うて、

法乙　是れは恐れ入りました、入道さまのお仕込で段々人臭い息が通うてまゐります、しかし入道さま、當節の法師づれは、昔と違ひまして、みな元氣ものばかりでござります、口でこそやれ淨土ぢや穢土ぢや極樂ぢやと申しますが、内心では未來の淨土よりも、此の世の穢土の方が大すきな手合ばかりでござります、殊にかうして美しい女菩薩方のお酌で一こん頂いて、よい心持になつてまゐると、なかなか此の世の執着は斷たれませぬな、あゝ、世は末になりました末世王法なげかはしい次第でござりますな、

清　やあ、御坊は大分まゐつたやうぢやな、

法師甲　此の者は酩酊いたしますと無作法な事ばかり申して恐れ入ります、あまり長坐をいたして、無禮をはたらいてはなりませぬから私どもはこのまゝ御免を蒙りたうござります、

法乙　これ朋輩、そのやうな事は言はぬものぢや、たとひ酩酊いたさうがいたすまいが、この順念、思うたことは屹度言ふ、今時の法師どもは、あれはみんな大盜人ぢやが、

法甲　これこれ順念、何をお言ひなさる、そのやうなたわけた事を言ふものではない、殊にこゝは入道樣の御前ではないか、氣をおつけなさい、

法乙　御身こそ何をお言ひなさる、此の順念決してたわけた事は申さぬ、山法師どもが近年の騷ぎは何ぢや、何かと言へば、やれ法皇さまへお味方をする、いや上皇さまへお味方をすると、山の輿を擔ぎ廻つて暴れ散らす、つまりは俗人原の喧嘩口論、切取强盜と何が違ひますか、荒法師どもが法衣の袖をまくッて戰をする、殺生戒も女犯戒もあつたものかい、此の順念はまだ殺生戒は犯さぬ、人をあやめた覺はない、

上手半面、横ざまに一段高く寢殿の一部を現はす。室内の調度は、すべて平安朝の優麗高貴な好み、正面の半を白地薄模樣の襖で仕切り、其の奥には、遙か離れて上手から下手へ打ちわたした細殿が附緣ごしに見える。下手から奥へかけて中庭の景、庭の中央に櫻の大木二三株、花が丁度眞盛りである。遲い午後の光線が、おつとりとした暖い色にあたりを包んでゐる。

素絹奴袴で脇息に倚つた清盛を上座にして、一方は薄紅梅の小打着に袴の妓王、及び侍女、法師、一方は侍女、資成、季貞、侍士等宴席の體に居並ぶ、銚子高杯の外、妓王の前に箏を置き、琵琶、笛、鼓等管絃の樂器をそれ／＼資成、季貞、侍女、侍士等に割りあて、暫時管絃樂の中に、靜かに幕を揚げる。やがて奏樂止むと、

清盛　やあ、御苦勞々々、御坊は鼓も上手と聞いたが、なか／＼管絃のたしなみが深いと見える、

法師甲　お恥かしい手すさびでございます、もつとも此のごろ叡山の法師仲間には琵琶や鼓を弄ぶことが流行でございます、

清　結構ぢや、私も管絃の遊びはすきぢやが、併し御坊、管絃が面白いといふのは、あれはみんな聞く人の心からぢやなう、自分の身がおもしろければ、聞く音樂もおもしろい、自分の身が悲しければ、聞く音樂も悲しい、此の世は天晴淨海が世ぢやと思ふと、其の心をしらべて呉れるから管絃の音までが浮立つて面白く聞かれる、御坊などは、いつも菩薩や天女と往來して居るから自然と管絃の音が極樂淨土の音樂に聞こえるであらうな、

法師乙　はゝ、はゝ、それ程でもございませぬ、斯うして三法に身を捧げては居りまするが、やはり肉身の息は通うて居ります、極樂淨土の音樂よりも、此の世の女菩薩方の爪音の方が眞身にこたへて有りがたいと思ふ時もございます。

清　はゝ、はゝ、御坊も腥坊主(なまぐさばうず)の方ぢやな、

人物

平清盛　（六十二歳）
前右大將宗盛　（三十四歳）
佛　（二十歳）
妓王　（二十二歳）
安部資成
太夫判官季貞
叡山の法師二人
侍士二三人
侍女二三人

場所

京都、西八條、清盛の邸

時

治承四年三月十六日、午後より夜に及ぶ

第一幕

序言

此「清盛と佛御前」は數年前單に「清盛」と題して本誌に掲げたものを、一昨年一度其の第二幕だけ改作して本誌に再掲し、今回いよ／＼藝術座大正五年度の春季興行に上演する目的で改めて第一幕第二幕とも殆ど面目を一變するまでに作り直したのである、此たびは第一回を一月廿四日より大阪中座、京都南座、神戸聚樂館で開演し三月廿六日より東京帝國劇場で開演することになつてゐる、其の役割は、

佛御前	（二十四五歳）	松井須磨子	清盛	（六十歳位）	澤田正二郎
宗盛	（三十四五歳）	中井哲	叡山の法師順念	（五十歳位）	宮島
同西念	（三十歳位）	小川洛陽	安部資成	（三十歳位）	中田正造
大夫判官季貞	（二十七八歳）	宮城千之	侍士	（二十二三歳）	花田幸彥
妓王御前	（二十二三歳）	三好榮子	侍女		澤井嘉枝
侍女		磯野不二子			

尚、此の劇の舞臺面、衣裳道具其の他詳細のことは、大正二年五月植竹書院發行、「影と影」と題する私の著作集に收めた初作による

大正五年二月

清盛と佛御前

戯曲

まじ。花をたよりの母が想ひと、はかない頼みをかけしなり。用意とゝなひたるのち、彼れは四五分があひだ、いと靜かに、されど思ひのまゝに、泣きつくしぬ。死に臨みて、莊嚴なる末期の感にうたれ、悔恨の涙多少を禁じ得ざるは、なべての人の情なり。

終に濱子は立ちあがりて、机の抽斗より、硝子の栓ある小き瓶を取り出だしぬ。其の中にはかねてさる朋友より、萬一の用にとて貰ひ置ける青酸を蓄へたり。濱子はそを硝子盞に注ぎて、忽ち一息に仰ぎつくしぬ。而して靜かに寢臺の上に身を横たへ、古への聖等が安らけく眠れる姿をそのまゝ、手を胸にたゝみて、世界にたゞ一人なる我が子の到たるを待ち受けぬ。げに盲と呼ばるゝ運命も、人道のため、斯かる犧牲にあだには死なせじ。燦然たる伽藍もて、其が墓所の飾られん日は必ず來べきなり。

翌朝訣れを告げんとて入り來しお鶴の、まづ眼に遮ぎりしものは、冷たく硬く、寢臺の上に横たはりたる母の屍なりき。全身純白の裝ひして胸衣の蔭よりは、推しつぶされたる一輪の白薔薇の花、覗くが如くほの見えたり。嗚呼鳩野濱子が潔き魂は、斯くの如くして長へにこの世を去りぬ。

妾ははじめより眞理と正義とのためには身を犧牲とするもつゆ厭はじと思ひさだめぬ。されど斯かる悲しき最後に遭はんとは、知らざりし口をしさ。運命恃みがたく、人は如何なる末期に會すべしとも定めがたきが常とはいへど、妾が運は已に極まりて、この世を辭せんとする、今し眞際に迫まりたり。あゝ妾は息あるあひだ世と鬪ひて、力の及ばん限り、爲すべき務をば爲し了へぬ。生まれてより、妾が信仰はかはらざりき。今はたゞ道のために犧牲となりて、終りを潔くするのほか、此の世に爲すべき事無し。あゝいとしき我が子に、死ねよと願はるゝ母が身は悲しとも悲し。されど最愛の娘のためならば、死ぬるばかりは、いと易し。妾の死にしがために、御身が生涯の障礙一つを免れて、行く末の路なめらかに過ごさるゝことと思へば、妾はよろこびて死に就くべし。さらば、さらば。ながらへて幸あれ。母が眞心は、永く御身を守護すべし。

此の見ぐるしき手紙は、一讀の後ち直ちに燒きすつべし。表向きなる妾が自殺の理由は別紙にしたゝめ置きたれば、檢屍のみぎりには、かなたを示されよ。さらば、いとしき、いとしき、我が子へ、母より。

あゝかへす〴〵も、御身を思ふ妾が心は、御身も測り得まじきを。」

濱子は書き了へし手紙を、心して卷き納めつ、幾たびか接吻して、幾行の涙と共に封じこめたる後、さらに別紙の一通をしたゝめたり。こなたは筆のあとも悧然と、表だちたる言聞きの遺書なりき。さてのちの彼れは、自らの魂にも比ぶべき潔く眞白なる服に身裝をあらためたり。髣髴として想ひ起こすは、彼れははじめて荒雄と相契りける、其の夜のさまにも似たるかな。かの有地龍太郎がお鶴に贈れる白薔薇一輪をば、姿見の前に立ちて、ねんごろに我が胸のあたりに挿み、死したる後、せめては娘の其の花になりとも接吻せんことを願へる、濱子がやさしき心は、さすがに女なりけり。亡骸の胸に結び添へたる此の花を、娘の見んとき、嫌し母をば猜忖しと思ふとも、花は娘が意中の人の贈物なれば、これを邪慳には打ちすて

あゝ妾はたゞ御身の心も妾の心の如くなるべしとのみ思ひぬ。妾が心づくしによりて、世の盲ひたる者の見得ざる事を、御身には知らしめたりと思ひぬ。されど其は誤りなりき。妾は却りてその爲に咎を受けたり。今はたゞ妾が愚かしさを恥づるのみ。

妾ははじめより眞理と正義とのためには身を犧牲とするもつゆ厭はじと思ひさだめぬ。されど斯かる悲しき最後に遭はんとは、知らざりし口をしさ。運命恃みがたく、人は如何なる末期に會すべしとも定めがたきが常とはいへど、妾が運は已に極まりて、この世を辭せんとする、今し眞際に迫まりたり。あゝ妾は息あるあひだ世と鬪ひて、力の及ばん限り、爲すべき務をば爲し了へぬ。生れてより、妾が信仰はかはらざりき。今はたゞ道のために犧牲となりて、終りを潔くするのほか、此の世に爲すべき事無し。あゝいとしき我が子。御身が他日の思ひ出よ。必ず妾が爲しつる事の御身のために謀れるものなりしことを、思ひあたる折あるべし。妾は今までも信じたり、妾が斯かる父により、斯かる母となりしことの、御身にとりては世界のあらゆる母よりも貴とかるべきことを。妾は今もなほ斯く信じて疑はず。されど御身をしては、まこと斯くの如く感ぜしむることの難きを、はじめて悟りぬ。妾が思ふところ御身に取りて幸ひならずば、妾は何の要ありてか之れを固執せん。妾は過ちあらば、心よくこゝに御身のゆるしを願ふべし。命あらん限りは、御身妾をゆるし得まじ。されど死したる後の妾ならば、必ず深くは咎むまじ。

あゝ妾はたゞ御身の心も妾の心の如くなるべしとのみ思ひぬ。妾が心づくしによりて、世の盲ひたる者の見得ざる事を、御身には知らしめたりと思ひぬ。されど其は誤りなりき。妾は却りてその爲に咎を受けたり。今はたゞ妾が愚かしさを恥づるのみ。

濱子今はたゞ一言、

「お前ねえ。」深く〳〵傷けられたる胸の奥より、漏らすは嘆息の聲。

（その二十二）

其の夜、鳩野濱子は、悄然として寢室に入りぬ。お鶴が母と同じ家の中に眠るも、今宵をもて終とすべし。翌くる朝は、彼れは森家に引き移らんとするなり。

濱子は己が寢室の戸さし鎖むると共に、机に向かひて何をか書き始めたり。筆は走りぬ。したゝむるものは手紙なりき。

「我が最愛の娘へ書き遺す――御身の此の手紙を讀まん時は、妾は早や邪魔なる命すてたる後なるべし。ながらへてなまなか御身が思ひのまゝなる自由を妨げんことの心苦しくて。妾が此の世の務めは御身の幸ひを願ふ一つの外あらざりしに、今は却りて、そを妨ぐるものとなれるこの身、何のもとめありてか、この上永く生きて苦しき我が身を惜むべき。

あゝいとしき我が子。御身が他日の思ひ出よ。必ず妾が爲しつる事の、御身のために謀れるものなりしことを、思ひあたる折あるべし。妾は今までも信じたり、妾が斯かる父により、斯かる母となりしことの、御身にとりては世界のあらゆる母よりも貴とかるべきことを。妾は今もなほ斯く信じて疑はず。されど御身をしては、まこと斯くの如く感ぜしむることの難きを、はじめて悟りぬ。妾が思ふところ御身に取りて幸ひならずば、妾は何の要ありてか之れを固執せん。玆に過ちあらば心よりこゝに御身のゆるしを願ふべし。命あらん限りは、御身妾をゆるし得まじ。されど死したる後の妾ならば、必ず深くは咎むまじ。

ことをすつかり話して、相談をきめて來たのです。わたしは森といふ苗字にかへて、お祖父さんの家へ行くことになりました。」

「お鶴、まあお前は。」驚ける母はおぼえず聲たてゝ卓子の上につき伏し、兩手をひしと顏にあてたり。

「お前はまあ、わたしを捨てゝ行くつもりかえ。」

「ちやうどいゝ機會ですから、わたしもう此の家にゐるのはいやですから。これから世間へも出なければならない年で、いつまでおつ母さんのやうな人と一緒にゐられるものですか。自分が潔白なものなら、誰れだつていやがります。」

聞く濱子は立ち上りて、きつと娘の方を見たり。今まで、いづれは世に容れられぬ身と覺悟したれど、さすがに、現在の娘のためにこの憂目を見んとは、思ひはからざりき。

「お鶴。お前はまあ、わたしの心を承知でそんな事をおしかい。わたしがこれまでお前を思ひに、どれほど苦勞したとお思ひかい、わたしは實に、自分の命にかへてお前をこれまで世話をして來たのも、つまりはお前を立派な婦人に育てあげて、お前にも喜んで貰はうばつかし。それにまあ、これがお前の暇の挨拶とは、あんまりひどいぢやないか。わたしに死ねと言はないばかり。お前に出て行かれて、わたし一人何たのしみにながらへやう。考へても見てお呉れ。」

「おつ母さんは、そんな事を言つたつて、まだ體は丈夫だし、長らへてゐられない事はありません。…………もつともわたしは今朝お祖父さんの家から有地さんに宛てゝ手紙を出しました。若しわたしが一生のうち結婚する時があつたら、あなたに結婚しませうつて、さう言つてやつたのです。だつておつ母さんの生きてゐらつしやる中は、わたしは結婚は出來ないのですから。わたしはおつ母さんのやうな人を有地さんの姑にとは言ひ得ないのですから。」

談調ひて、お鶴は養女として森家に引き取らるゝこととなりぬ。

されば是れよりは、森の姓を名乘るべき身なり。彼れの無慈悲と罵れる母濱子とは、もはや長く顔つき合はせて憐むを要せざる身なり。時機をはかり、森家の令孃として、晴れて龍太郎と結婚し得るも程遠からじと見えたり。

お鶴は應接室にて、直ちに龍太郎に宛てたる手紙をしたゝめぬ。森家の素性より、このたびの始終に至るまで精しく書きつらね、終りにことさらに力をこめて添へたる一句は、

「されど母の此の世にながらへ候はん間は、なほ汚れある我が身、結婚の筵に出でんことの面はゆく。」とありたり。

（その二十一）

お鶴は森家を辭して、一旦我が家に歸りしが、居間に待ちわびゐたる濱子は、顔蒼ざめて、氣拔けのしたるさまに、壁なる一面の畫を見つめたり――あゝ其は荒雄が遺愛の書幅なりき。濱子が貧しき中よりも、亡き人のかたみとて買ひ取れるものなりき。圖は聖母がその神の子を拜する形にて、濱子は常に之れをもて長に殘るべき眞の教へ、慈愛の神の示現と見たりしかのみならず、これやがて濱子みづからと娘お鶴とが身の上にも思ひ合はすべき料ならずや。

「何うしたの?。」

娘の入り來たるを見て、殆ど我れにもあらで斯く問ひぬ。

お鶴は聲を尖らして、

「何うもしません。わたしは今までお祖父さんの所にゐたのです、お父つさんのお父つさんの家にですよ。そして今までの

「ふむ、それは〳〵。誰れから其の事を聞いたのかい。」

言ひつゝ肩のあたりを手もて撫でやりたり。

「おつ母さんから聞きました。わたしを斯んな身の上にした本人のおつ母さんからです。世間なみにしてゐれば、わたしまで立派な身分になられますのを、斯んなことになつたのも、みんなおつ母さんが邪慳なからだと思へば、わたしはくやしくてなりません。」

訴ふるお鶴の顔はいよ〳〵紅くなりまさりぬ。

老人は、なほも合點ゆかぬさまの眼つきにて、

「ではおつ母さんは自分の亂暴な主義でお前さんを教育したといふ譯ではないのだね、お前さんを其の主義にしやうとはしなかつたのかい。」

「おつ母さんはさうさせやうとしたのですけれどわたしは嫌ひですから、取り合はなかつたのですよ。あんな主義の人にはつきあふのもいやですから。」

森國手はお鶴を引きよせて、突然接吻すと見えしが、いたくも其の心がけの意にかなへるさまにて、

「それはよかつた、初めから其の心がけでさへあればな。」

それよりお鶴は、祖父の心を得たるに元氣づきて、夫の龍太郎との一條より、母と衝突の本末、己が希望の程をも落ちなく物語り、ひとへに祖父の憐みを惹かんとせり。森國手に取りては、輝く旭子とも見らるべし。國手は深くあはれと思ひぬ、お鶴も嬉しさに、涙ぐみて其の手に取りすがりぬ。今は生みの母よりも遙にこなたを慕はしと思へり。やがて二人が中の相

の乙子も、仔細ありて今は此の世の人ならず。老人はたゞひとり、財布の口を握りて淋しき月日を送りぬ。まことと財布のみこそ、此の老人が死際迄の思ひ出とは見られたれ。

老國手が疑ひ深き性質は、お鶴が來意をも必ず強請がましきものなるべしと思ひ定めたるなれ、苦き顔して應接間に降り來しとき、ふと見れば、そこに待てる少女の、十七歳といへば、花は蕾のうつくしさ、脊すらりとして、髪の毛の艶あざやかに、笑める眼元は、死せる荒雄をそのまゝなるに、忽ち心和ぎて、一旦沈まんとせし日の光また輝けば、三十年の昔の夢冴えかへり、目のあたり我が子に會ふが如き思ひしぬ。休日ごとに學校より歸り來たるが例なりし荒雄の面影よ。この紅薔薇の蕾の如き少女こそ、荒雄が唯ひとりのわすれがたみにはありけれ。

森國手は斯く思ひつゝ、おぼえずいと丁寧に腰をかゞめぬ。

「して何ういふのかな。」

世なれたる調子にて問ひかくれば、娘は赤面して耳のあたりまで紅うしながら、ためらひもせで、

「お祖父様、わたしはあなたの孫の鳩野つると申すものでございます。」

老人はさらにまた小腰をかゞめつ、血縁の爭ひがたさは、言ひ知れぬ情味の胸に湧くをおぼえぬ。

「さうであつたね。して今日來られたのは何ういふ用向で?。」

「わたし昨晩はじめて其の事を聞いたのでございます。それで今朝斯うして。……あなたに引き取つて貰はれるならと思つて、まゐつたのでございます。」

老人は半ば疑ひながら、半ば滿足の體にて、奇異なる笑顔を見せ、

太郎まことに我れを捨てずば、われは如何にすべきかなど、考へそめぬ。
お鶴のやがて寢室に歸らんとするに、濱子は、危ぶみながらも、常の如くそが傍に寄りて、接吻などさせんとする、其の體は顫ひて、倒れんとせり。
されどお鶴は身を引きぬ。
「わたしは決してもう二度とおつ母さんと接吻しやうとは思ひません。わたしの體が汚れます。」
斯くて其の夜は、二人等しく一睡だにもせざりき。
此の屋根裏の住居に、終夜枕二つがさめ〴〵の涙に咽びぬ。

（その二十）

明くる朝九時半ともおぼしき頃、針屋町通りなる森家の僕は、「鳩野つる」と記したる、うつくしき自筆の名刺を取り次ぎぬ。
「あの娘が強請にでも來たのではないか。」
と主人は忽ち推したり。
蓋し老國手が晩年の生涯は、やう〳〵世間狹く淋しきものとならんとせり。齡已に八十に近けれども、猶ロ々十時より一時までは患者を迎へて、皺びたる手に金を握るの樂しみに飽かず。誰れに讓らんとての苦勞かと人も異しむ程なりき。夫人は早く死し、娘等は皆相應しき家に形づきたれど、其が婿なる人々は何れも老國手と不和を生じて、往來も絕えたり。二人

とは思はなかつたものだから、お前の爲と思つてした事が、今は却つて仇になつた。」

「仇にしたのはおつ母さんです。わたしの一生はおつ母さんの爲に日陰者にされてしまつた。身分もあり信實もある方が、わたしに結婚まで申込んで來たのを、此うなつては、あつかましく何の顏さげて其の人に會はれやう。」

起ちあがりて母を睨む眼ざしいよ〳〵險しかりしが、遂に禁へかねて、泣く〳〵室を出でたり。母も其のあとにつゞきぬ。寢臺の上に身を横たへて、さながら悲みに狂せるが如く、あせりもだゆるお鶴、しばしして、少しく體を靜むるかと見れば、起き上りて、且つ怨み且つ罵りつゝ、龍太郎との一條を母に物語るに、母は胸を刺さるゝ思ひにて、今はなか〳〵に言葉も出でず、たゞ溜息と共に耳傾くるのみ。

語り了へぬと見る間に、お鶴は突然身を起こして、上着をはふり帽子をかぶりなどするに、濱子はあやしみて、

「何所へ行くの？。」

「電信かけに郵便局へ行くのですよ。」

お鶴は斯して龍太郎へ最後の挨拶を言ひ送りぬ。

其の言葉はきつぱりとして、

「母より委細承りあなた樣の御心御もつともと存候。何事も會はぬ昔、わたくしに御懸念下さるまじく。さらば過ぎし御親切は忘れ申さず。」

されど一二時間の後、龍太郎より寄越せし返電には、

「約束は渝らず。必ずわが妻なり。お心の程も承知、委細は手紙。」とありき。お鶴は此の返りごとに、やゝ心靜まりて、龍

「ほんたうにおつ母さんは、なんてそんな事をしたのでせう。ひどい、ひどいおつ母さんだわね。わたし何うしてこれが忘れられやう。」

濱子は身をふるはせて、娘の方を見つめゐたり。あゝこれおのづからなる悲劇なり。いかにして此の憐むべき少女を悲しき運命の中より救ひ出だし得べき。母も娘が心根を想ひやりて、せき來る涙を抑へぬ。

「お鶴さん、もつと優しく言つてお呉れ。わたしが惡るかつたのなら謝まりもしやうから、さうひどい事を言つてお呉れでないよ。お前がさうまでお思ひであらうとは、わたしどうして初めから知れませう。お前の考へが斯うまでもわたし等と違ふやうにならうとは思ひがけないものだから、こん事にもなつたのだけれど。」

お鶴は母のしほるゝにつれて、ます〳〵威だけだかに聲ふりたてぬ。

「おつ母さんはわたしを生む權利はなかつたのです。生むくらゐなら、十人並の人間に生みつけて貰はなくちや、わたしが迷惑です。」

濱子は手をしぼりながら、いと悲しき調子にて、

「今までたゞお前のかわいさに、わたしはどれ程苦勞をしたとお思ひか。わたしが今日までも生きながらへてゐたのも、お前といふものがあればこそ。わたしはたゞもうお前が行く〳〵わたしに代つて主義を守つてお呉れだとばかし思つて、それを樂しみに今日が日まで、斯うして苦しい世帶も張つて來たやうなもの。それをお前は今さら十人並に生みつけて呉れとおいひか。わたしは十人並よりもずつと勝つた人間にこそはしても、世間並の女には育てないと、それを自慢にしてゐたのに、お前は却つてそれを恥だとお言ひか。さういふ心なら、わたしも何とか考へはあつたらうけれど、よもやこんな事にならう

て母を睨めながら、逃げばを失へる野獸の如き血相して、
「おつ母さん、お母つさんはお父つさんと結婚なすつて?。」
濱子の頰には、見る〳〵血の色退きて、唇の顫ふが見えぬ。されど答ははつきりとして、
「いゝえ、結婚はしなかつたのですよ。結婚といふことは、わたしの主義に合はないのだから。」
「おつ母さんの主義だつて!。おつ母さんの主義だつて!。わたしの一生はおつ母さんのために、おつ母さんの主義のために人身御供にあげられたやうなものですよ。」
冷かに嘲る如き調子にて言ひ放ちしが、さらに氣色ばみて、
「そしてお父つさんは何といふ人?。」
「お前のお父つさんは、森荒雄といつて、波兒治家で、お前の生まれない中に亡くなつておしまひなすつた。針屋町通りの森といふ華族のお醫者さまの伜ですよ。」
片手を卓にさゝへながら、躊躇する所なく答へぬ。いかばかり激しく言ひ爭はんかと危ぶまれしことも、此に一段落となりて、お鶴は靜かに立ち上り、深き溜息を漏らすのみ。頰には怒の炎焚えて、我れは世に謂ふ私生兒なるか。私生兒、生れながらにして我が身は汚れたり、やがて世の嘲りの的となるべきわが運命や。母の狂氣じみたる所行だに無かりせば、今の我が身はいかに幸あるものなるべき。母方には田町の監督牧師あり。父方には華族の森家あり。我れはそが孫娘として、樂しき月日を榮華の中にかしづかれんものを。幾たび思ひかへしても、腹立たしきは母が愚かしき振舞かな。生きてはいかで再び龍太郎に會はすべき顏のあるべき。とたゞ偏に思ひせまりぬ。終には啜り泣きして、

いは我が身の上にふりかゝるなれ、怨めしの母が心やと、日頃こらへたりし怒りの一時に發して心狂はんばかり。母は正しく娘の生涯を毀ちたるものならずや。娘が幸あるべき前途を奪へるものならずや。是れたゞ母が誤れる主義を固執して、世と逆らひし結果ならずや。

斯く思ふもことはり、お鶴は生來未だ曾て母を愛すといふ眞のふるまひを見せしことあらず。往々さもしき心のものが、己れよりも高き志しある人々をあしらふ如く、お鶴の母に對するは、むしろ侮蔑して之れにかゝづらはぬ樣をよそふにありき。されば彼れは、今となりては母を憎しとまで思へるなり。

お鶴の倫敦なる我が家に歸り着けるは、たそがれ初むる頃なりき。母はしばし相見ざりし娘の恙なう歸り來たりといふに、いそ〳〵として出で迎へ、慈愛の接吻をなさんとしぬ。されどお鶴は不快の面持にて、つと顏を背けつ、殆んど身ぶるひにてもせんさまなりき。

「よして下さいよ。おつ母さん。わたしはあなたに聞かなくちやならない事がある。それ聞くまでは、わたしはあなたに接吻なんかしたくないのですから。」

濱子の面色は死人の如く蒼うなりぬ。豫て期したりしことの、終に今宵に迫りきとおぼし。今は何をか包まん。濱子はいさゝかもおめかくれんとはせざりき。

「何事か知らないが、お前の聞きたいといふことなら、わたしは何でも言つて聞かせます。今までだつて、お前に嘘僞を言つた事はない。」

濱子とお鶴とは、無言のまゝに、つれ立ちて階子を登り行きぬ。居間に入りて、母とさし向かひたるお鶴は、鋭き顏色に

如し。二人は最早相見ぬはじめの男女なりき。一たび母に相あひて、審に事の始終を聞きし上、兎も角も今一度龍太郎へ宛てし手紙に思ふところを言ひ越すべければ、それを最後の暇と見られよとのみ。お鶴は絶え得ずして衝と身を挺し、次ぎなる暗き寝室の方へ走り入りぬ。

（その十九）

次ぎの朝早く、お鶴は倫敦へ向け、小名廣をあとに出で立ちぬ。停車場に到れば、龍太郎は送りてこゝに在り。手に一枝の薔薇の花を持ちたるが、プラットフォームに立ちて、三等車に乗り込めるお鶴に其を手わたししたり。お鶴は今は貧しき装ひして三等車に乗れることの、戀人の見る目おもぶせと思ふ心も打ち忘れたらん如く、呆然として座に就きぬ。蒸汽は已に車に傳はらんとするに、龍太郎はお鶴が耳に口を寄せ、

「忘れてはいけないよ、二人は夫婦ですよ。わたしは決して初めの約束を違へないから。」

されどお鶴はさと顔をあかめしのみ。斷乎たるさまに頭を振りて、

「今はいけないのですよ。わたしが精しいことをおつ母さんから聞いた上でなくちや。今までにも聞かう〳〵と思つてゐたのですから、今度といふ今度、わたしはすつかり聞かないと、承知が出來ないのですから。」

本意なき別れは、斯くの如くして了へたり。

お鶴その夜は、まんじりともせざりき。倫敦へ着くまでも、途々たゞこの事のみを思ひつゞけて、考ふるほど、わが胸は傷くがごとく感じぬ。母濱子に對する憤りの火は、つよく熾んに燃えたちて、母の所業の惡しければこそ、斯かる悲しき報

「わたしと結婚約束をなすつた爲に、あなたが迷惑なさるやうな、そんな事ですか。」

お鶴が聲は絶望の調子を帶びて高く響きぬ。眼前なりし天國の夢は脆くも破れたり。母の如何なれば、何の咎に罹りてか、我れを此の悲しみに陷れんとはすらん。など想ひ來たりて、其のまゝ立ちつくすお鶴を、龍太郎は優しく引き寄せて、接吻したり。

「そんな事は無いさ。わたしがあなたを愛してゐることは分かつてましやう?。わたしはあなたの足のさはつた所なら、土でも拾つて置きたいとまで思つてゐる。あなたに思はれるといふことは、わたしに取つては、世界にも代へられないほど嬉しいのだから、迷惑なんてそんな事はありはしない。」

今さら棄てはせじとの意氣地より、斯く言ひ放ちはしたれど、未來の妻たるべきお鶴が正當なる夫婦の仲に生まれし兒ならぬ由を聞きし時、彼れは泣きも得ざる苦しみをおぼえぬ。

されどお鶴にはお鶴の意地あり、今に及びことさらめきて斯かる言葉聞かんとは願はず。

「いゝえ、いゝえ。わたし、何んな事だが譯は知らないけれど、歸つておつ母さんに聞いた上でなくちや――ね、有地さん、それでは二人ともさつぱりと會はない昔にして下さい。今までの約束は水に流して、あなたはどうか自由に、思ひ通りにして下さい。」

お鶴は昂然として、敢然として、されど優美なる女子の態度をば失はで、斯く言ひ切りたり。此のときのみは、濱子が若かりし面影のこゝに映りて、犯し難き位を備ふと見られぬ。

龍太郎は之れをなだめんとしたり。されどお鶴は固く執りて、復たうべなはず。浪に搖がぬ巖石の、屹然として立てるが

彼れが心に唯ならぬことの祕められたるを悟りぬ。戀人が常よりもすげなく、常よりも優しからずと見ゆる、さる事の多少はありとも、お鶴が胸を打ちしは其れにあらず、男の話しの常になく亂れて要領を得ぬ事のみ多きは、全く惑亂せる感情の、抑へがたくして、心の底に祕めたるものゝ切れ〲に漏るゝかとおぼえぬ。お鶴は遂に堪へ得ずして之れを打ち明かさしめんとせり。龍太郎は、女の明日にも出立せんといふ今宵、快からぬ事を聞かすは心なきに似たりと、強ひて押し隱し居けるが、遂にお鶴の鋭き直覺の力に見破られたり。

「いゝえ、そんな事ではないのでせう。屹度何か思つてゐるのに違ひない。何かわたしに話されないやうな事を、何所かで聞いて入らつしたのに違ひない。」

眼には早やうるみを見せて、俯きたり。

龍太郎の顏色もかはりぬ。彼れが正直なる人には之れを包み果ふせんこと難し。

「なあに、そんなに言ふほどの事でもないが。」

聞くお鶴は、期したる事ながら、今さらのやうに心おくして。

胸には大釘にてもうち込まるゝ思ひして、覺えず身を引きぬ。動悸は高まれり。

「何んな事をお聞きなすつて?。聞かして頂戴、ね、有地さん。どんな事でも構はないから、聞かして下さいよ。」

「何んな事と言つて、實は養父が昨夕或る人から聞いて來たことがあるのだが、併しお鶴さんの家の事です。」

お鶴の顏は火の如くほてりて、咽さへ渴きを感じぬ。彼れは戰慄せり。龍太郎はこれによりて、己が聞けることの事實なるべきをたしかめ得たり。

「さうでせうと思ひますの。」
「必ずですよ、必ずですよ。」龍太郎は我れを忘れて叫びぬ。
お鶴が輕くうなづけるに頭には、波だつ髮に日光殘りなく輝きて見ゆ。

（その十八）

其れより後、鳩野お鶴と有地龍太郎とが結婚の噂は村一杯にひろがりぬ。お鶴は、兎も角も一旦倫敦に歸りて、みづから母に事の次第を物語りし上、世にも公にせんとおもへど、母の快くこれを許すべきか、いと心もとなしとおぼえぬ。
お鶴がこの地に留まるべき日數はもはや幾ばくもあらず。餘れる一週間ばかりは、彼れに取りて上もなく貴きものなりき。初戀、結婚の樂しき望みは、燦爛として日夜に其が眼前を往來し、見るもの、聞くもの、たゞ天國の思ひあり。
或る日龍太郎は、お鶴を我が今の住居に誘ひて、養父と母とに引き合はせたり。兩親は別に非難すべき婦人とも見ざりけれど、只猶小娘なりと思ひぬ。龍太郎は、それよりお鶴を伴ひて、二人が後々棲ふべき、亡父の家をも見せなどするに、高き楡の木には、白嘴烏の鳴きたる、蔦は破風のあたりに這ひまつはり、教會堂の塔は高く見はらす空を限りたり。お鶴が嬉しさは、盛りし杯の溢れんばかり。やがては此の家に二人同じく棲まひて、奴婢のもの等にかしづかれ、樂しき日を送ることの、いかに幸福なるわが身よ。
お鶴がいよ〳〵明日は倫敦に歸るべしといふ、其の前夜の事なりき。龍太郎は忍びやかにお鶴が許を尋ねつ、八時頃より二時間ばかり、人目を避けたる一間の裡には、鼠の荒るゝ音だに遮ぎらず。お鶴は龍太郎の入り來し初め、一目にて早くも

聲たてゝ眼を伏せしが、これも流し目にちらと男のかたを見やりて、

「忘れな草だと思へば、こんな事はしないのでしたつけ。」

清くおどなき乙女姿の、たとへば半ば開ける蓮花にもたぐふべく、龍太郎は、早や戀の絆に縛られたり。

「では忘れな草だからといふのですね。わたしが採つて上げたからといふのではないのですね。」

「それは兩方でせうよ。」

言ふ顏は次第に眞紅の色に染みて、さながら紗に裹める紅玉の、匂ひこぼるゝが如く、さしうつむきたり。龍太郎は思ひに堪へずして、

「では其の花をどうなさるつもり？。」胸は押しつけらるゝ心地にて、斯くうち問ひぬ。

お鶴はしばしためらひしが、思ひ定めて、顫ふ脣に笑を見せ、手を懷に忍ばせて、殘れる花を肌に押しあてたり。

「斯うすればいゝのですか。」

「それで澤山。ぢやお鶴さん、何ですね、わたしさう思つてもいゝでせうね。わたしを憎いとは思つてゐらつしやらないと。」

言ひつゝ女の手をしかと把りぬ。

「憎いなんて。わたしの大好な方。」

「ではわたしを愛して下さるのね。」

お鶴はやさしき眸をちらと其のかたへ馳せて、

今ははやお鶴の此の地に來しより十四五日をも經たり。或る日、駒島家にては、近傍の野に遊山の會を催しぬ。此のあたり一面眞白なる石山にして、一方は削り成せるが如き絶壁を控へ、同じ巖石の幾ばくとなく地上に顚落せる、其の巨大なるもの丶上には、悉く蕨、黑茨、山薔薇の類生ひまつはり、巖と巖との間は、八重襷の如き小路もて縫はれたり。路なき所には、莉、木苺など高く茂りて其の巖を取り卷きぬ。今日集れる人々は、斯かる野原に席を求めて、火など燃やすに、見あぐれば崖の頂上には、おどろと亂れたる鐵線蓮の風にゆる丶、老人髯と草の名に呼ばる丶も宜と思はれたり。

一行の人々はあたりに腰うちかけて、用意の茶など取り出だし、啜り了りて、さて後は、男女二人づ丶幾組ともなく分かれて、自由に其の近傍を散歩しぬ。まことは若き男女等が、互ひの戀を、人目しげからぬ中に語り會ひなどしてたのしむの機會となるが、斯かる遊山の常なり。

お鶴と龍太郎とは、相携へて岩間に水の流る丶あたりを逍遙しつ。龍太郎は水上より清く迸り出づる小流れの方にお鶴を導きたり。岸には名も知らぬ草花の、黃なる、紫なる、咲きこぼれたる中を、流れの縁に立ち寄り、腰を屈めて忘れな草の花一房摘み取りながら、お鶴を招きて、其が手に持たせぬ。お鶴はわざと氣にも留めざるさまに美しく咲き揃ひたる花房を、指先もて揉み碎きつ丶、龍太郎が側にひしと寄り添ひて、同じ岸邊に腰打ちかけ、話しの後を續けたり。龍太郎は流し目に見やりて、

「可愛さうに、わたしの花をひどいめに遭はすのですね。」

お鶴は驚きたるさまに身を引きながら、

「あらまあ可愛さうに、ちつとも氣がつかなくてよ。」

或る夕、駒島稲子は、お鶴と一つ床に腰打ちかけて語り合ひながら、

「あなた今日テニスをなさる折、彼の方とお話しなすつて？。彼のかたがすつかりあなたにラヴして了つたやうですよ。」

お鶴が聞き頬には、紅の色輝きて、斯くも凜々しき若人の、假りにも我れを思ふと聞ける嬉しさ。

「稲子さん、彼の方は何ういふ御身分？。大層立派な方ですことね。」

つとめて平然たる容子にて問ひぬ。

「さうですよ。あの方はね、薬楠さんといふ副牧師の家に居らつしやるのですが、お父さんは士族で、お金も大層あつたのださうです。おつ母さんが連れ子をして薬楠さんの家へ再縁なすつたので・今ではおつ母さんと一緒にゐらつしやるのだといふことです。」

「幾つでせう？。」

白き寢卷姿のまゝ寢臺の傍に立てるお鶴は、極めて無心に問ひかけたれど、稲子は鋭くも其の意を猜して、男の、家督を讓らるべき年配に達せりや否やを知らん心なるべしと思ひ取り、ひとりうなづきながら、

「あゝもう其の歳におなりですよ。家督はもう疾くに襲いでらつしやるのです。一人子ですから、あの方の外には、跡繼はないのです。」

斯くて其の身の上は知られたり。お鶴はまさに妙齢可憐なり。其の一笑は以て世界をも引き寄すべし。有地龍太郎もまた富みたる家に生まれ、器量美しきが上に、家督は襲ぎたり。牛津大學の教育は受けたり。たとへば銃猟服に身を固めたる若き希臘の神の姿とも見るべき快活の青年なりき。されば二人が交りは、一週間ならずして、早くもふさはしき戀となりぬ。

たり。色白く、眼中あざやかに澄みて、黄金のごとき髪の毛は艶うるはしう。濱子はおぼえず抱きて、花の如き雙の頰に別れの接吻をなしぬ。其の折の彼れが胸には、蟲が知らすといふなる、我が子の行末心にかゝりて、早くも斯く母の手元を離れ、知らぬ他鄕に踏み出すを面白き事のやうに思ふお鶴が前途は、到底母の手に餘るべき萠しにはあらずやなど、考へわづらひたり。されどお鶴はたゞ珍らしくも母の膝下をしばし離るゝことの、樂しく興あるを喜ぶのみ。斯かる屋根裏の住居に、身は氷るが如く覺えたる際なりければ。

　駒島の娘が家は、げにお鶴の想像したりしが如く立派のものなりき。食事のをりは白き胸掛せる給仕男食卓の傍に侍り、晩餐には必ず家內中晩餐服の儀式を整ふるなど、さすがに大家と見られたり。たゞお鶴は兼てより心にかけたりし行儀作法の、思ひしほどにはむづかしからで、甚しく我が日頃と異ならぬを訝りぬ。此は貧しきが中にも、濱子が仕つけの、おのづから由緒正しき所ありしためと知られたり。三日ばかり經る中には、其の土地の訛りさへ巧に記憶して、よろづの取り捌き、晩餐の席に交りての振舞まで、靨としたる牧師の令孃と、誰が目にも見ゆるやうになりぬ。

　斯くしてお鶴は樂しき日を送れるうち、はじめてまことの男といふものを見初めぬ。銃を肩に、獵犬など曳きて、馬にさへ跨りたる、此の地方に多く見る男々しき出で立ちを、お鶴はなべて男らしと見たり。

　倫敦にて母の知り人といふ際の若人も尠なからねど、概ね彼等は色蒼白く、弱々としたる倶樂部員、乃至何がし新聞の記者などいふ人々にて、此の地に見るところは、比ぶべくもあらず。

　中にも目立ちてお鶴の心を惹けるは、有地龍太郎といふ凜々しき若人なりき。近き教會の長なる人の養子にて、まだ部屋住の身なり。

可憐なる此の少女が生涯は、げに極めて單調なりきとも謂はゞいふべし。彼れは常に倫敦の塵のさ中にのみ育ちて、新聞記者、美術家、交際家などいふ際を始めとし、凡そ噪がしき浮世の一面には馴れたれど、曾て閑遠なる田園の味を知らず。いよいよそれと話の定まれる時、お鶴が心は早や見ぬ景色にあこがるゝばかりなりき。しかのみならず、彼れが榮ある交際場裡に入り得るも、實にこれを以て始めとするなり。

お鶴が學校にて選り出だせる友達二人あり。西國小名廣と呼ぶ地より出で來たれる姉妹の娘にて、姓を駒島といひ、父は其の村の牧師長を勤め、二人は校長の家に寄宿し居れるが、いつよりかお鶴とは親しく往きかふ仲となれるなり。學校の成績もよく身分もありと聞きて、お鶴は此の二人と交はるを、榮あることに思ひぬ。こたび彼れを田舍へ誘なへるは、この駒島稻子といふ娘なりき。幸ひ稻子が家の閑靜なれば、三週間ばかり是非とも泊りに來よとのことに、お鶴は、特に我れのみ斯かる好意を受くることの、いかに名譽なるかを心に念じかへして、其の日の來たるを待ちぬ。

仕度萬端に心のみ忙がはしく、「駒島さんのやうな立派な方の家へ行くに、あんなきたない上着ではしやうがないねえ」と、ひとりもだゆるもあはれ。げに「立派」なとはお鶴が何物に對しても、みづからのしがなさを感ずる時の心なり。

濱子もさすがに我が娘の心いぢらしと見て、一着の見事なる午後服を新調することゝしぬ。今の身代に比べては、非常の奢りなりけれど、出で來しとき、お鶴が試みにとて着おろしたりし姿を見るにつけ、我が子ながらも斯くまで美しく育ちしものを、世の富みたる家に榮華の春も見せで過ごさすことの口惜しと、濱子は涙を呑みぬ。

お鶴はたゞ嬉しさに、何事もわきまへず。

お鶴が小名廣に向け倫敦を出で立つ日は來たりぬ。濱子は今さらのやうに、我が子の見かふるばかりなる風俗に眺め入り

母は何ゆゑに斯く世間の人々と背き勝ちにのみ過ぎんとするか、お鶴に取りては解きがたき疑團なりき。取り分け、祖父は名高き川町の牧師にして、母には姉妹も猶ありと聞くにつけ、斯かる貴き一族の人々が、曾て我が家を訪へることなく、また此方より出で向けることさへなきは、訝かしさの極みなり。不思議はそれのみならず、祖父の家が我が母の苗字と同じく、鳩野と呼ばるゝも世の常とはおぼえず。お鶴は物心つくにつれこれらの疑ひに、何となく胸穩かならずおぼえぬ。

或る日お鶴は、極めて突如として母に問ひかけぬ。

「おつ母さんは從弟どし結婚なすつたの？。」

濱子は思ひがけざる質問に、おぼえず顏を火の如くしつ、僅に、

「いゝえ。何ぜ？。」

「でもおつ母さんが今來てゐる家とお爺さんの家と苗字が同じだといふぢやありませんか。」

濱子は多く言はざりき。

「お前のお父つさんとわたしとは親類でも何でもありはしないよ。」

お鶴も母が深く問はるゝを好まぬ容子に、その日は其のまゝやみけるが、疑惑の力はますく強まり行きぬ。

（その十七）

既にしてお鶴は十七歳の春を迎へぬ。野に生ひし薔薇も瓣を展ぶるこの頃、彼れが身に取りては絕えて、例なき一事こそ起こりたれ。彼れは學校なる一二の友にさそはれて、しばしが間、田舍あたりに旅行することゝなりたるなり。

默せる唇より出づる一言力あり、
優しき人の心を推し碎くまでに。
「必ず惡を爲せ、さらずば必ず惡に苦め」とや。
さらば許せ默せる、盲せる神よせめて、
われは惡を爲さんよりも惡に苦しむものとならんを。

（その十六）

兎角する間に、お鶴もいつしか娘盛りの年配に達すれば、脊すらりとして、顏俯くまで美しく、品あり位ある女性と見らるゝに至りぬ。されど濱子が心には、言ひがたき失望の、娘が成人と共にやう／＼深くなり行くをおぼえたり。我が志をつがすべき資質いかにと、斷えず目を注ぎたりし濱子は、よろづの端に觸れて、お鶴が氣風の遙に己れと異なるものあるを認めたり。父となり母となれるものゝ思想は、斯くまで堅固に斯くまで高尙なりけるを、其が子となるものゝ心は世の常の婦人等といさゝかもかはる所なしと見て、濱子は殆んどあるまじき事のやうに感じぬ。されど疑ひもなくお鶴は尋常平凡の娘たるを免かれざりき。

　さればお鶴の性質に感化を及ぼせしものは、親の思想と感情とにあらずして、むしろ家主の老婦が世間の噂話などなりき。學校に行きては、學校の修身談はるかに母の敎訓よりも我意にかなひ、友達が言ふところは、母の言ふところよりも一層自然のやうに聞かれぬ。所詮お鶴が運命は母が想像せるユートピアに背きて、常識の世界に入るべきものと見られたり。

くは思ひません。けがらはしい。もう決して二度とわたしの家へ來て下さいますな。」

「ふん、それが御挨拶かね。」

「はい、それだけです。」

森國手は何事をも言はず、頭を曲げて出で行きぬ。取り殘されし濱子は、いとゞ貧しさの骨身に透るおもひして、此上は死するまでも唯はたらくの外なしと決心して、病めるお鶴が床の傍に机をすゑ、疲れし氣力をはげまして、書きはじめたり。彼れはこの間殆んどみづから、何事をいかにして書きしかすら知らざりき。夜半過ぐる頃までも、夢の如く書きつゞけたり。書き了へて郵便に託せし原稿は、次の土曜日の紙上に出でゝ、濱子が今までに書けるものゝ中、最も喝采を博したりき。

書き了へし後も、濱子は終夜眠るを得ず。お鶴が看護のかたはらには、誰れを相手に語らはんものもなく、お鶴が痩せたる手を握りしめては、千行の涙さめ〴〵と、そが上に降りかゝるのみ。語らばせめて慰められもせんものを、語るべき友もがな。祈らば神や受けます、祈るべき言葉もがな。斯く思ひつゞけつゝ濱子は夜來神經の興奮せるまゝに、筆を援きて祈りの句を草しつ。

世界の神とは、心知れざるものゝ帝冠着たる名か。

其が石の如き胸には白き翼を疊みつ。

聞かんか耳なし見んか眼あらず。

人のため情をかけんに心はた無し。

されど無慈悲なるそが手は打つに早し、

氣力なく、其のまゝ座をすゝむるに、老紳士はお鶴の傍に寄り、篤と診察して、さて口を開きぬ。

「これは癒る。併しよほど注意して、もつと取扱ひをよくしてやらなければ、此のまゝではしかたがない。」

言ひつゝ其の室を出でゝ、濱子を招き寄せ、いとも心痛の體にて、

「あれを一そわたしの家へ寄附しては何うです。さうすれば世話も行き屆くし、倅の跡をつがして、將來もよくなるといふ譯だ。わたしの孫として、固より十分の教育はしてやるし、あなたも半年に十四五日位づゝは來て居ても、何とか不都合のないやうに出來やうと思ふ。それを承諾して貰へば、あなたにはわたしから年々二百圓づゝ上ける。どうだらう。さうしなさい。さうしなさい。娘のためだ、承諾して貰はう。」

濱子は斯かる無禮の申出に應ぜんとは、夢にも想はざれど、さすがに現在の親子がしがなき暮しに比ぶれば、此の老人に引き取られし後のお鶴が榮華いかばかりならんなど、我れにもあらで念じわづらふことしばし。森國手は猶も言葉をつゞけ、

「さあ、さあ。子供のためだ。さう極めなさい。よもや、子供はどうなつても自分さへよければとは言ひますまい。それとも構ひませんか。どうです。」

濱子は本心に立ち直りて、

「森さんのお言葉ですけれど、この子はわたしと亡くなつた荒雄とが仲の子でございます。二人が信じてゐた通りの婦人に育てあげませんでは、死んだ荒雄に對して濟みません。兩親を迫害するやうなそんなお方に、誰れが其の子の教育を賴みませう。現在活きてゐる母の生活を見棄て、死んだ父の記憶を忘れさせやうとする、そんな人にお鶴を渡してなるものですか。此の前波兒活家で申した通りのわたしの決心ですから、あなたの財產はあなたの身と一緒に亡びるものです、少しも羨まし

我が與へし金は送り返されたれど、それにて思ひ止まるべき森國手の性質にもあらず。不便なるお鶴が事心にかゝりて、紛ふかたなき荒雄が遺子、我がためには孫娘の彼れを、其のまゝには差し置きがたしと、種々に思ひを碎きけるが、或る日みづから濱子が寓所を音づれぬ。されど其の日は濱子家にあらざりければ、家主の婦人としばし話をまじへなどして、濱子が生計の容子をも篤と聞き定めて、日頃病むことはなきか、家賃の滯ることはなきかといふことまで聞き取りたり。尙己れ之よりは濱子がために十分の保護をなすべしとの旨、されど事情ありて此の事今よりあからさまに言ひがたければ、今後濱子の身の上に病氣其の他の困難出で來たらん時、願はくば家主よりひそかに我がかたへ知らせ與れよとの旨を、ねんごろに賴み置きて、其の日はあだに引き取りぬ。

森國手が計れるところ違はず、其の後幾月かを經たりし頃、災難はお鶴が身に起こりぬ。百日咳といふ病はかよはきお鶴を襲ひて、晝夜を分かたず咳き狂へる後は、氣管に障りを生じ、病態日を追うて重り行くに、濱子は身も世もあられぬ思ひしつ。終夜一睡の暇だに得ずして看護に心を疲らすれば、晝とても己が職業を續け行かん力はなく、新聞社にても、やうやく報酬を貸し越さずなりぬ。かくて殆んど其の日の料にも窮するさまとなれば、病める娘に手當ての屆かん由はなく、疲れたる身を娘が病床のかたへに辛うじて支へながら、半夜の燈に對して、さめぐ泣きくづるゝこともあり。今は母子が座して餓死する外はなしと見えぬ。

此の次第を直ちに森國手のもとへ、家主より報じやりたり。森國手は打ち笑みぬ。今こそ好機會なれ、孫娘を彼の恐ろしき母の手より引き取るは、此の時を措いてあるべからずと、次の日速かに彼れは濱子の家に赴きたり。お鶴の病勢は、げに聞きしにまして危篤なりき。されど森國手の入り來るを見て、娘はそれと認めけん。笑顏して迎へたり。濱子は今は拒まん

を撫でやりながら、

「お前の名は何といふ。」

優しく問ひかくれば、お鶴ははつきりと、

「鳩野お鶴。」

森園子は愕然として身を引きぬ。彼れが性來の猜疑心は、これをもて我れを引きよせんための罠にはあらずやと疑ひ恐れたり。されどお鶴が罪なきさまを見るにつけ、その疑ひはおのづから消え去りて、爭ひがたき血縁のしるしなるか、はた奇しき我等の本能なるか、少女の面影は深くも老紳士の胸に沁み入りたり。彼れは少女を抱きて、そが赤き脣に接吻しぬ。馬車の戸を開きて待ちゐし車丁は、此のさまに驚き呆れて、見まもるのみ。やがて紳士は金入を探り、ある限りの金貨を取り出だして少女に握らせながら、

「それをお前にあげるから、家へ歸つておつ母さんにさう言ひなさいよ。通りで、年を取つた人が呉れましたと。いゝかえ。」

馬車は次なる病家へと轍を轉じぬ。

お鶴は、生まれてよりはじめて斯かる金貨を手にせることゝて、何とも譯も知らず、馳せ歸りて、母に事の次第を物がたれり。

濱子は、聞きをはりて、お鶴を抱き上げ、聲を出だして泣きぬ。其の夕べ直ちに件の金貨を手形にかへて、何事をも言はず、針屋町通りなる森園子の許へ送り返したり。

お鶴は何故とも其の事情を知らざりけれど、之れよりながく老紳士の事を忘れざりき。

（その十五）

濱子が受くる樣々の誘惑は、此れには止まらず。お鶴が六歳の時、或る日、近きあたりへ使ひにてと出だしやれるが、今しも我が家の入口まで歸りつけるころ、二三間とは隔てぬさる大家の門前に、いとも見事なる馬車の乘り捨てあるを見とめぬ。いかめしきものに怖づる癖あるお鶴は、しばし何事をも打ち忘れて、此のあたりには珍らしき車の容子に見惚れゐけるが、痛くも胸をとゞろかしたる樣にて、

「誰れの馬車ですか、おばさん。」

恰も通りかけたる、近づきの老女に問ひかけたり。老女はよく知りゐたりとおぼしく、

「森樣といふ華族のお醫者さまのですよ。」

勿體つけたる聲音にて答へぬ。げに荒雄の父なる人は、其の後さる貴顯の重病を治せし功により、貴族の列に加へられたるなり。お鶴は華族と聞きて、指を唇にあてながら、眉根を上げて、今さらの如く馬車あるかたを見直しぬ。森といふ華族の醫者とや、前後には法被着たる馬丁の警蹕の聲いさましく、かく見事なる車を大路に驅る人は、いかにえらきものならんなど幼心に歸るをも忘れて眺めゐたり。

森國手は其の間に玄關のかたより出で來たり。お鶴は一心に其の顏を見つめしが、げに斯かる立派の紳士なればこそ、彼れが如き馬車にも乘るなれなど、子供心にもそゞろに感嘆の情に堪へざりけん、おぼえず白き齒の見ゆるまで打ち笑みたり。常は嚴格なる老紳士も、不思議に此の少女が、無邪氣なる笑顏に引き寄せられ、立ちどまりて、小を腰屈め、美しき髮の毛

「ならない、ならない。斯うして年を取つて見れば、お前の不便さも增さないではないが、併し、お前に十分先非を悔悟したといふしるしのない限りは、わたしは何うもお前と握手は出來ない。お前の事は、許して下さる。それまでは、必ずわたしや他の潔白な娘どもに近づくことはかなひませんぞ。」

斯くて其のまゝに別れしが、お鶴は、引かるゝ母の手の打ちふるふをおぼえぬ。されど、濱子は何事をも言はず、言はゞ、娘がいかばかり悲しく思はんかと、腸は斷たるゝ思ひにて教會を出でし頃、お鶴は遂に母の顏を見上げて、問ひかけぬ。

「おつ母さん誰れ?、今のこわいお爺さんは。」

濱子はひしと娘を抱きよせ、すゝり泣きつゝ答へぬ。

「鶴ちやん、あれはねえ、お前のお爺さん。わたしのお父さんですよ。わたしのお父さん。」

子供の常として、お鶴は深く究んともせず。されど、これより後永く、お鶴の胸には、幼きながらも、一團の疑惑を留めたり。斯くまでいかめしき祖父を持ちながら、何故に彼等は斯かる賤しき住居に淋しく暮さゞるを得ざるか。はた彼れが如く優しき老人の、何故なればすげなく我が母の願を退けたりしか。お鶴がさま〴〵なる疑ひの始めは是れなりき。

一年の後、牧師は急の病にてみまかりぬ。世上の噂にては、濱子と荒雄とが事の累ひだになかりせば、牧師は生前僧位を進めらるゝ筈なりしに、惜しきことをしたりと。其が遺言書の中には、唯一言濱子が身の上に及べる箇所あり。それより、濱子のために神の御ゆるしを祈るといふにありき。濱子は之れを聞きて、さめ〴〵と泣きぬ。遺産を欲しとは露おもはず。たゞ悲しきは、父が此の世を去るまでも、我れを容すといふ一言を聞かせざりしことなり。

濱子は父の面を見あげながら、

「お父さま」と一聲、牧師は驚きて身を引きぬ。女の年今は二十八なれど、見やうにては四十の坂を越えしものとも見らるべく、辛苦艱難の幾年月は、濱子をしてまことの齡よりも老けさせたるなり。容色猶あせはてたるにはあらねど、殘れるは斷腸の美しさとも謂ひつべし。しばしが間、牧師は娘の顏を見つめゐけるが、

「濱か。」

とたゞ一言に呼吸せまりて聞こえぬ。

濱子は聲ふるはせながら、

「お父つさん、わたしも主義のためには隨分いろ〳〵の困難をして來ました。貴い職務の報を得たいために、的のある方へ進んで來たのですよ。今のお說教を聞いて、さう感じたものですから、何も構はず、かうやつて出て來ました。」

牧師は溶くるが如き眼元にて、濱子の顏を眺めぬ。その中には、慈悲恩愛の光りこもりて見えたり。しかも狎れざる態度にて、

「ではお前、悔悟しやうと思つて來たのかい。」

「お父さん、わたしは何も悔悟する譯はありません。信仰を貫きたいばかしに、困難と鬪つて、却つて世間からは惡く言はれるやうになつたのです。けれど今日はわたし、たゞお父つさんと握手して、お父つさんのために一と言祈りがしたいばかしに出て來たのですからね、お父つさん、わたしに接吻して下さい。」

老人は身をそらして、やゝ引き退きつ、兩眼に涙を浮べて、言葉も淀み勝ちながら、儼然として言ひ放ちぬ。

其の後十年あまり、濱子が生涯につきては多く語るべきものなし。

濱子は絕えて家族の人々と相見ざりき。鳩野一家の人々に取りては、彼れは亡き數に入れるに異ならず。姉として、娘としての濱子が名は、口にするものもなかりしが、お鶴が五歳の頃、或る日濱子は、何がしの教會を過りて、ふと說教の廣告に父の名あるを認めぬ。この日曜日には、田町の監督牧師の說教あるべしとの旨を、赤き文字にて達筆に走り書きせるなり。恰も今朝は日曜ならずや。

濱子は不思議の機緣に、飛び立つ思ひしぬ。せめて餘所ながらなりとも、絕えて久しき父の顏を、今一度見んものと、つと教會に入れば、牧師はすでに說教壇にあり。長く見事なる白髮は、其が風采に一段の威を加へ、たとへば風雨を凌ぎたる老松の、矗然として空に聳ゆるにも似たり。七十の高齢を以て、猶深き思想と、非凡の姿、熱心の態度とは、いさゝかも往時に異ならず。說教は正に「我れは貴き職務の報を得んがために目ざす方へ進む」といふ經典の句より始まりて、例の如く河水の淀みなき辯を揮ひ、聽聞者の心を浸すと見えたり。道德堅固にして、眞心の面にあらはれたるさま、主義こそ違へ、濱子も、家にありし日の事ども、そゞろに想ひ起こしぬ。やがて說教果てし後、濱子は一言にても父と言葉を交はしたき願にて、其が教務室より出で來るを待ちうけゐたり。

程なく牧師は出で來たりぬ。そが顏には、猶優しき笑みの殘りて見えしが、教務室の入口に、一人の女の、さつぱりとせる黑き服を着けたる、世の常の寡婦とも見ゆるが、髮の毛長う垂させたる、愛らしき女兒の手を引き立てるに、何氣なく眼を注ぎぬ。女はつか〳〵と進みよりて、言葉をかけんとせり。牧師は未だ我が子とも心づかず、穩かに頭を曲げて、其の言ふところを聞かんとしぬ。

まで、追ひ／＼て巻を舍く能はざるべし。惡むべき魔力は我れを魅し我れを强ゆるが如く感ぜん。其の精神の純潔なる所、卽ち其の精神の危險なる所以也。其の書は誤まれり。其の書は毒を流すものなり。其の書は汚れたり。其の書は救ふべからざる過誤に人を導かんとするものなり。しかもなほ、其の書は不幸なる天才の著たるを爭ふべからず。

スペクテートルが汚れたりと呼べるは、やがて其の書のいかに現時の道德に反對せるかを明にせるなり。而して天才の作とたゝへらる。濱子は正しく此の作に於て勝利を得たり。其の夜淋しき屋根裏の住居に、彼れが言ひ知らぬ得意の夢を結べるも、宜とこそ見えたれ。

されど憐れむべし、濱子は著述界の祕訣といふものを知らざりき。其の後日に／＼、次の批評もや出づると待てど、英國の新聞雜誌中、一つだに彼れが作の事をいふものなし。圖書館にても、彼れが作に讀者ありと見えず。濱子は意外の思をなしぬ。蓋し此は故あることなり。彼れが小說は熱心なりき、眞實なりき。道德の調子を帶びたり。こゝをもて、面白からぬものと定められ、何人も顧みるものなきに至れり。スペクテートルは、其が主義として、たゞ此の熱心と眞實とに同感せるなりき。世人は此の書を見て、「はゝあ勸懲主義で書いたものらしい。目的小說とでもいふのだらう」とのみ、直ちにかたへに投げやるなり。

鳩野濱子が文學上の希望は之れに摧けぬ。我が眞心こめて書きしものを、世の人好まずといはゞ、今は何をかせんや。濱子がこの後の生涯は、たゞお鶴のために、糊口の料を得るより外の望なかりき。

（その十四）

ば、概ねみな初より小說ならざるはなし。しかのみならず、性質また婦人の小說家たるべき特徴は多し。直覺の力の銳きこと、社交の上に深き趣味を有せること、注意のよろづに細やかなることなど、皆女子をして小說を書かしむるに適するのしるしならざるなし。

濱子が書ける小說は、いふまでもなく厭世的のものなりき。樂天的なるは多く利己の色あり。厭世的なるは多く同情の色あり。小說は厭世的なるこそよけれ。凡て眞心より出でたる美術は、厭世的なるが多きも此の故のみ。濱子の小說の厭世的なるには、固より深き事情あり。彼れはみづからの心を歎ひぬ。人道のために犧牲となる婦人の事を書けり。其の中には、高尙なる道義の上の主張を含めたり。彼れは燃ゆるが如き熱情もて、書き了りたる後、さる書肆の手に渡しぬ。

「婦人の世界」と題する小說は、間もなく公にせられたり。濱子は息をも止むる思ひにて新聞雜誌の評判いかにと待ちぬ。殆ど一ヶ月ばかりは斯くて經たれど、待つ甲斐なかりき。或る日濱子は、お鶴を抱きて、とある町を散步しけるに、圖らずも、雜誌スペクテートルの中より、「極端に進步せる婦人の小說」と題する一文を見出しぬ。疑ひもなく我が小說の批評なるべしと思へる彼れは、躊躇なく一部を買ひ求めたり。十二錢は今の身に廉ならねど、其を顧みるの遑なかりしなり。

濱子の見し所違はず、スペクテートルの評は濱子が小說に關するものなりき。生來はじめての著作といひ、はじめての批評に接せるなれば、彼れが胸は躍り、息は寒がる心地にて、一氣のもとに讀み下したり。

先づ吾人をしてうなづかしむるものは、紋田女史(濱子は此の匿名を用ゐたるなり)の作が天才の筆なることなり。吾人は甚だ其の全體の調子を好まず、殊に其の歸結を好まずといへども、而も純然たる天才の光り每頁にきらめくを否む能はず。何人といへども、一旦此の作を手にしたるものは、我が意に背きながらも、作者が此の恐ろしき悲劇の最後の何に涙を濺く

されど職業を得んことは、容易にあらず。教師とならんか、今の此の身には、望むべくもあらず。誰れか斯くまで世に疎んぜらるゝ濱子に、其の娘を托せんとはすべき。たゞ彼れは、初め此の地にありし日、新聞の事にたづさはりし縁あれば、今はこれを手蔓とするの外なしと思ひさだめぬ。記者と呼ばるゝ人々も、さすがに世を憚りて、濱子と親しく往き來うことは好まぬさまなりけれど、心の内によく濱子が人となりを知り、また主義をも知りたれば、あながちに彼れを憎み斥けんとはせざりき。濱子は遂に思ひ極はめて、何がしの記者が許を音づれ、包む所なく其のねがひを通じたり。其が服裝容貌の、全く世の虛飾を離れて、天眞爛漫たるが中に、悲哀の美さへ加はり、一日彼れと會はんものは、何人といへどもすげなくは之れを過し去るに忍びざるの趣きを備へて、記者も今さらの思ひをなしぬ。濱子が文才はよく知りたれば、快く寄稿を許し、何程かの報酬までも約束し吳れたり。

擯斥せられながらも、濱子はまた、いつともなく其の社會に容れらるゝやうになりぬ。古き馴染なりける清水刀自さへ、折にふれては、夜中忍びやかに音なひ來て、ねんごろに濱子が主義の誤まれる由を曉さんとせり。濱子を世話する記者の細君、親切なる家主の女あるじ、さては交際ずきなる何がしの令孃たちまで、やう〳〵親しき友となりぬ。されど此等の人々へは、まことの身分を明かさで、たゞ鳩野未亡人といふ資格なりしこと、言ふまでもあらず。斯くて、良心が許さぬ僞りも、いつとはなく身に馴るゝかとおぼえぬ。

濱子は、新聞社への業務のかたはら、小說に筆を執らんと思ひたちぬ。此は文筆ある婦人が常に志ざすところなれど、濱子には、取りわけてよく適せる計畫なりき。婦人はもと小說家たるべき嗜好をうけて生まれたるが多し。世のさまを見るに、男子の著述事業にたづさはるものは、其のはじめ他の方面に筆を執りて、終に小說に歸するが多けれど、女子の著述といへ

温き子よ小さき子よ、荒雄と我れとが魂よ。濱子が撰べるは、鶴といふ名なりき。

（その十三）

産の事濟みて後、濱子は愛兒を懐にして、再び倫敦に歸りぬ、歸りて見れば、變りはてたる世の樣かな。家もなく、金もなく、友もなく、夫とたのみし人もなし。濱子を見知りたりし世間すら、今は知らぬまねして通り過ぎんとす。女はいふに及ばず、男の知人だに、路に遭へば、避けて面を合はさざらんとするなり。濱子も其のこゝろを解し得たり。

「こんな奴等に交はつて貰はないでも。」と彼れはひとり思ひあきらめぬ。

何よりも先づ、一番に求とめでかなはぬものは貸間なり。次ぎには糊口の途をも求とめざるべからず。濱子はこの二つに胸を痛めぬ。はじめは固より、主義を汚すべき事情ともおぼえず。包むところなく打ち明けては、貸間あるかたを漁り求めけれど、一つだに貸さんといふものなかりき。遂に濱子は、血に泣く思ひして、わが良心の呵責を忍びつゝ、身分を言ひこしらへて、辛うじて親子が雨露を凌ぐのたつきを得ぬ。彼れは、鳩野夫人と稱して、家主の細君が前をば、まことの寡婦と僞りたるなり。あゝ基督教徒に充てる倫敦の町は、此の憫むべき一女子と其が幼兒とを、鳩野令孃といふ名の下には、屋根ある所に眠らしめざらんとす。無慈悲なるものよ、僞善のともがらよ。

濱子は是非なくも世に迫まられて、人を僞り、趙部屋（ちやべつぷ）通りの小路にて、屋根の裏さゝやかなる二階を借るを得たり。ひとり此のところに棲まんは、堪へがたかるべきも、今は職業だにあらば、傍より我を慰め與るゝもの、幼兒のあるなり。濱子はたゞこれをたよりとしぬ。

さて此のたびの濱子が不幸は、言ふまでもなく、英國の知る知らぬ男女の噂に上りぬ。新聞紙は見て來たるが如き調子にて、事の始終を報じたり。しかも多くは、冷かなる嘲りをもて、濱子が陷れる悲劇のもとを彼れが汚德のやうに報じたり。濱子の父なる牧師も、絕えて久しき我が子への書狀を、慈愛の涙に認め越しぬ。悲しき事の數々に、寄り來る年波は爭ひがたく、頭もやう〳〵白うなりて、墓中に安らけく眠る日も遠かるまじ。さあれ天は限りなき惠みを我等に垂れさせ給ふ。御身とても悔悟の餘地は必ずあるべきぞ。嗚呼されど、妹等のため、未だ淸からぬ御身を我が家へは得入れじ。などこま〴〵記したる文のこゝろを讀み行くに、濱子は底知れぬ悲哀の淵に沈むかと覺えぬ。氣を取り直し、嚴然として我が決心のほどを返書に言はせは遣りたれど、さすがに文字は涙なりき。

濱子は孑然として此の地に留まりぬ。言語さへよくは通ぜぬ他鄕に、女一代の難事をひかへて、語らうべき友もなく、淋しく暮らすのみ。蔭一つなき日向道を、日々荒雄が墓へ辿りては、寺に二三時間がほども立ちつくして、聖母の像の優しき面わに見入りたるまゝ、我が心の慰めを、こゝに得んとするものゝ如く、詣で來る女等に、ふりかへり見らるゝこと多し。墓に詣づるも懶き日は、たゞ窓の前に座りて、寺院の丘陵のあたりを、眺め入るのみ。かしこにこそ、世界にたゞ一人の濱子が友は眠るなり。

斯くして恐ろしかりし産の日は、遂に來たれり。濱子は死にもせで、安らかに産み落としぬ。生まれたるは、美しき、小さき女の子なりき。柔かく、かほそく、不思議なるまで荒雄に似たる靑き眼ざし、顏の色は濱子に似たりと見えぬ。兩の手に掻い抱き見るに、薔薇色せる小さき足の、柔かなる肌ざはり。濱子はこれあるがために、はじめて生きながらうべきよすがを得たりと感じぬ。我が子なり。先だちし荒雄が子なり。前途我れに代はりて人道のために盡しくれんは御身ぞ。

ある筈はないから、どうか取つて置いて下さい。」

濱子は傷ける獸の卽りて勢を增すが如く、深くも怒りの念に驅られて、手を上げ、力にまかせ、荒雄の父を戶のかたへ押しのけたり。

「よくそんな事が。よくまあそんな事が。直ぐ出て行つて下さい。」

森國手はためらひゐけるが、なすべき義理と知りながら、今さらに果たさずして退かんこと、心ぐるしく、胴衣(ちよつき)のかくしより以太利の銀行手形一まきを取り出しながら、

「これはどうか使つて下さい。」

濱子は憤然として向き直りつゝ、語を勵まして、

「持つて歸つて下さい。けがらはしい。あなたのやうな人にお金なんぞ貰ひたくありません。持つて歸つて下さい。」

森國手は銀行手形を取り上げて、こそ〳〵と室を出でぬ。五十圓の金は眼前に其の必要を感じ來たるべきを、我が親切を無視して、斯かる狂暴の振舞する愚かさよなど、つぶやきながら歸り行く。濱子は張りつめし氣の一時に弛るみて、椅子の上につき伏したるまゝよゝと泣き沈みたり。

濱子は幸にして猶しばしが間を支ふるの料に事缺かざりき。出產の日までは安全なるべし。こゝに借間せし時、荒雄より受取りし幾圓かの金の、其のまゝに殘れるがあれば。彼れ固より、正當に爭はゞ、荒雄の遺產の我が手に歸すべき理あることを知らざるにあらねど、彼れはこれをもて、あまりにさもしき事と思へるなり。そも〳〵遺言書に手落あるを言ひ立てにして、荒雄の遺產相續を爭はんとする、森一家の人々の賤しき心事にあきれたるなりき。

濱子はげに差しせまる糊口の途を有せざるなり。産屋の紐を解かんまで、いかにして過ごし得べきかを知らざりき。されど、何のいとまありてか、今の悲しき場合に金の沙汰を聞かんや。濱子はたゞ呆然として見まもるのみ。心に往き來うものは、亡き人の面かげ、死する際までも我れを忘れざりしうれしさなり。

森國子は例の情味なき聲音にて、

「これは伜が倫敦を出る前に書いたものと見えるが、勿論、此の通り無效のものであるといふことは、分つてゐやうね。」

言はれて、見るともなく指さすところを見れば、げにも荒雄の署名は缺けたり。

「言ふまでもないが、これは法律上無效のもので、たゞわたしの之れを持つて來たのは、伜がどれほど情誼が厚かつたかといふことを知らせて置きたいからですよ。既に有效な遺言なしに死んだ以上は、其の遺産は、當然わたしの方へ引き取るより外はない。これは法律の命ずる所であるから、あなたに對しては誠に氣の毒だが、どうも致しかたはない。わたしも此の遺言書が有效であつたらと、いかにも殘念に思ふのですが、併し、御心配には及ばん。伜の財產に對しては、なるほどあなたも其の子供も相續權を有してゐないに相違ない、またわたしとても、それを自由にあなたに贈るといふ權利もないので、つまり法律が之れを處置するより外はないのであるが、しかし。」言ひかけて、彼れは言葉を切りぬ。

さてことさらに調子を優しくして、

「わたしはあなたの目下の地位が氣の毒でならない。荒雄がつれて來たのだといふことも思つてゐる。であるから、伜が色色お世話になつた御婦人に對する、わたしの禮儀として、まことに些少ではあるが、五十圓だけこゝに持つて來たから、どうか使つて下さい。伜の遺產相續は、妹等ですることにあらうが、妹等とても、勿論此の金をあなたに差し上げるに異存の

濱子は、初より波兒治家に留まらん決心なりき。淋しさはいとゞ勝へがたけれど、さりとて今更に此の地を去らん心はゆめ〳〵なし。戀しき荒雄の眠れる地、此の地をいかで見すて去るに忍びんや。荒雄のかたみと見るべきは、せめて此の土地あるのみ。身に持てるわすれがたみの一子はあれど、未だ生まれねば眼に見ん樣もなし。さあれ此の子こそ、人道のために濱子が志しを繼ぎ成さん運命をば荷ひ來たるならめ。生まるゝ日の一日も早かれかし。我が肌に抱きて撫でもあやしもせん時の、速かに來たれかし。濱子は斯く思ひつゞけて、わづかに其が悲嘆の涙を乾かさんとはしつ。産の仕度もあらかた整ひたり。それらの事にかゝづらひて、波兒治家の町を離るゝ暇とてはあらざりき。一つは荒雄がおくつきの在る地なり、一つはせめて我が子を、亡き父の傍らに生み落として、心ばかりの親子の對面させんものとの意より、濱子は此の地を寸時も離れざるなり。此はもとよりはかなき迷ひなるべし。されど我等が胸の奥には、かゝる迷ひの深く祖先の血より傳ひ流れて、拔き去りがたきが多し。殊に女は然るものと聞くをや。

葬式のすめる翌日、森國手は國へ出で立つ暇のためとて、濱子が寓所をおとづれぬ。手に一通の證書めきしものを持ちたり。荒雄の死せし時、其が一切の所有物を己が宿へ持ち去りて、濱子に一つの紀念をだに遺さゞりし彼れは、其の中より斯かるものを見出したるなり。

「これを見なすつたら、嬉しからう。伜が自筆の證文だといふことは、すぐ分かるだらうね。」

といふ言葉はひやゝかなりき。

父がさし出だせるは、荒雄の遺言書なりき。中には一切の所有物を、擧げて我が愛する友、鳩野濱子へ贈るとのこゝろを歌へり。一日見し濱子の顔は、燃ゆるが如くかゞやきぬ。

れありしがために、彼れは狂氣となるをも免れたり。女子としての自尊の念は、濱子が身邊を衞りて、昂然として亡き夫の父と面爭せしむるに至りぬ。彼れは手もて胸を押へながら、

「それはあなたの方が間違つてゐます。此の部屋はわたしのです、荒雄さんのではございません。わたしが借りて、わたしが使つてゐるのです。鳩野濱子の名前でござまいす。わたしは何もあなたのやうに殘忍な事は申しませんから、こゝにお出でになりたくば、お出でになつてようございますが、併し何でございますよ。こゝにお出での限りは、わたしの不幸に對して、相當の遠慮をして頂かなくちやなりませんよ。英國婦人に對する相當の禮儀だけはお守りにならなくてはなりませんよ。」

濱子が言葉に、森國手は半ば膽を奪はれ、其の言ふがまゝに默して、我が子の死せる傍に進み寄りぬ。濱子はたゞ機械のめぐるがごとく、殆んど我れとも知らずして、荒雄が葬儀の準備彼れ是れと、立ちまはりゐたり。悲しみに過ぎて氣拔けせる彼れは、何事にも、みづから考がふることなく、みづから感ずることなく、殆んど我れとも知らずして、荒雄が葬儀了るまで此の地に留まりし森國手も、其の後表面のみは、濱子に無禮の振舞なかりしが、心は固より打ち釋けんやうなく、たゞ濱子が氣象の尋常ならざるを知りてより、おのづからなる畏敬の念を禁じ得ざりしのみ。彼れは旅館にありて、葬儀萬端の後見をなしたり。

葬儀の事ども總て了れば、墓は一切の濱子が前途を、棺と共に埋めつくして、ひとり淋しくわが室に歸り來ぬ。身外の心細さ、今さらのやうに感ぜられ、市に同胞はつどへど、濱子ひとりは人間にありともおぼえず。

濱子は今は、みづから行く手の道を拓かざるべからず。力を藉らんにも、相談をかけんにも、荒雄といふもの亡き身は、誰れをたよりにせんやうもなし。殊に悲しきは、彼れが將來の敵と見るべきもの、却りて荒雄が家より出でんことなり。

父は意外の面持にて、たゆたひながら、

「どうしてしない。わたしの電報を見なかつたのか。」

「見たのですけれど、主義を變じないやうにと、わたしが忠告して、結婚なぞさせなかつたのでございます。」

濱子は斯かる悲しみの中にも、凜乎たる氣象をば失はず、包むところなく言ひひらきぬ。

父は怒りに禁えざるが如く、手もて濱子を押しのけながら、

「よろしい。もうお前さんに用はない。こんな場合にこんな事を言ひたくはないが、しかたが無い。自業自得と諦めて貰はう。何と思つても勘忍がならないから、倅の室へ來ることは、これぎり御免を蒙る。」

（その十二）

夫に先だゝれ、世に頼るべき人とては一人もなき身の、臨月さへ近く迫れりといふ、げに悲しかるべきは斯かる婦人の境遇かな。産は初産なり。さなきだに來しかた往くすゑの、心にかゝる節多きを、女一生の大難といふなる初産の床に、夫とたのむ人もなく、剰さへ、寡婦(やもめ)たるべく母たるべき身の未だ妻たりしことなしといへば、世は何事をも辨へずして、不德のものよと賤(いや)しみ擯(しりぞ)けんとす。世間はみな我れを嘲けるの敵なり。かよわき女の身一つにして、いかで其の中には立ち得べき。嗚呼濱子が今の境遇は、正しくこれならずや。これに堪えんものは人力にあらず。淋しさ悲しさに、濱子は死にもすべかりしなり。されど濱子は死に得ざりき、森國手に對する仕向こそ、濱子をして、悲しみも忘れ、淋しさも忘れ、憤然として此の世に踏み止まらんの心を固うせしめし基なりけれ。無情彼れがごとき言葉に、濱子が憤りの心は勃然として起こりぬ。是

くは昏睡して何事も知らず、半ば開きたる眶よりは、白眼のかすかに見ゆる外、一言をも發せず、身動きだにすること稀れなりき。病勢はいよ〳〵募り來るのみ。傍に侍れる濱子は、早くも來たるべき運命を心に描きて、淋しく賴りなきこと言はんかたなし。斯く不時に荒雄の死に遭はんとは、實に濱子の夢にだも覺悟せざりしところなり。濱子は殆んど言ふところを知らざりき。彼れが荒雄に對するの情は、世の夫たり妻たる其れよりも、深くはあれ、決して淺くはあらざりしを。醫師はこの病癒ゆべき望なしと言ひ切りぬ。濱子はたゞ坐せるのみ、白き大理石像のこゝに侍べるが如し。

次の日の夕おそく、森國手は波兒治家に着きて、直ちに停車場より荒雄等が住める、陰氣なる町のかたへ、馬車を走らせぬ。荒雄が室の入口にて、彼れは濱子に出で逢ひたり。

打ち見るに、濱子は全身眞白の服を裝ひて、今しも荒雄が傍にありきとおぼしく、眼は涙に泣きふさがり、顏蒼ざめて、恐ろしきまで窶れはてたるさま、いぢらし。

森國手は、胸をどらせながら問ひかけぬ。

「倅は?。」

「亡くなりましたの、半時間ばかし前に。」

濱子は辛うじて言ひ得たり。父は泣かんばかりの聲音にて、

「死ぬ前に結婚式は濟ましたらうね。子供の事はよからうね。悔悟してから死んだらうね。」

「そんな事はしませんでした。死ぬまでも主義は守つてゐたのですから。」

答ふる濱子の聲は殆んど聞き取りがたし。

まをば知らしむべし。其の上にて兎も角もせんものと、濱子は氣をはげまして、電報のこゝろを男に告げ知らせたり。荒雄の病おこたるを見て、電文を取り出だせし濱子が眼には、涙まづ潸々（さめ／＼）として流れぬ。

荒雄は一目見て、

「親父（おやぢ）が來やうとは思はなかつた。併し此の電報は、親父に取てつは、よつぽど好意のつもりだらう。」言ひて言葉を絶ちしが、

「濱子さんはどうお思ひだ。此の際親父の意見どほりにした方がいゝとお考へか。」

濱子は溢れ落つる涙を抑へて、荒雄が寢ねたる上に伏しながら。

「わたし、何うしやう。ね、荒雄さん。そんな事を言はれるとわたしは心細くつて。あなた死なないでゐて下さいよ。わたしを見すてないで下さいな。あなたに居なくなられたら、わたしは何うなるでせう。ね、ね、荒雄さん。わたしよりも兒どもは何うなるでせう。兒供が可愛さうぢやありませんか。けれど、今はそんな事言つてはゐられないのですから、わたし、此の電報も、あなたに見せまいかと思つたのです。」あなたの爲なら、わたしどんな辛抱でもします、どんな辛抱でもします。けれど是ればかしは、世界にかへても、わたし立てとほしたいと思ひます。今まで二人が命がけて、辛苦艱難をしたのも、みんな主義のためばかしですもの。今になつてそれを擲りすてゝしまふなんて、そんな事がどうして。」

荒雄は、聞き了りて力なげに打ち笑みぬ。

「濱さん。それでこそわたしも苦勞した甲斐がある。濱さんの決心は、實に立派といつていゝ。何所へ出しても恥かしくない。わたしが濱さんのために勵まされたことは、これまで一通りや二通りでは無かたつ。」

其の夜終夜、翌日までも、濱子は荒雄が寢所の傍にありて、看護に心をつくしぬ。荒雄は折々正氣にかへることあれど多

狀は時を追うて重もり行けり。

濱子が初めの驚きは、今や苦しみとなりぬ。荒雄はたゞ日に夜に衰へ行くのみ。二日ののちには、濱子も心を定めて、倫敦なる森國手の許へ電報を發することゝしぬ。

「荒雄病氣危篤、窒扶斯、明日まで保ちがたし、鳩野濱子。」

との文面なりしが、其の日夕方、返電來たれり。されど其は荒雄に宛てたるものなりき。

「直ぐ行く。但し卽刻結婚式を濟ますこと肝要。萬一の時、生まるゝ兒のため。」

（その十二）

父がこの電報こそは、慈愛、寬恕のこゝろを言はせたる、情のたよりなりき。日頃荒雄が物語れる、勵しき父の氣象にて、斯かるやさしき便りを聞かせんこと、濱子の意外に思ふ所なりき。さもあれ、血は水よりも濃しといふ、其のためしにたがはず。常はいかばかり鬩ぎ惡める仲たりとも、父と子とが、いかで今日の場合に其の怒りを忘れざるべき。遠ざかりたる親子の情は、不慮の變事によりて復び相釋けんとするなり。

されど濱子は、彼の電報を荒雄に示すに得堪えず。斯かる危急の時、病に氣力弱れる荒雄が父の言ふ所に心動きて、かねて誓へる二人の主義を棄つることもあらば、濱子はいかにすべき。

さりとてまた、此のまゝに、何事も知らせで過ぎんはうしろめだし。言ふもつらし。言はぬもつらし。と濱子はしばし爲んやうを知らざりしが、遂に心をさだめつ。よし、荒雄が心のちかひいかばかり固きかをためさんは此の時なり。ありしま

山の景色をも寫せり。路のかたはら、丘のほとり、濱子は其の根氣よきに驚きぬ。荒雄は生れながらにして、畫家たるの資性を具へしなり。

（その十）

二三週間は斯くてありしが、何日の頃よりともなく、荒雄は、絶えず頭痛すとて、頭を手もて支ふるやうになりぬ。頭痛のさりしのちも、心安らかならず、落ちつきて眠ること稀れになり行きぬ。しばしが間、寫生畫などもやめて何よりまづ療養に心を用ひずばと、濱子のねんごろに說き勸むるを、否むべくもあらねば、荒雄は、其のこゝろに從ひたり。

されどいかにかしけん。其の翌日より、病ひはます／＼つのり來ぬ。濱子の驚きはいふまでもあらず。急ぎ土地の醫師を迎へなどするに、英人の醫師とては此の地にあらざれば、見まひ來たれるは伊太利人なりき。醫師は例の如くまづ脈を考へ、病の徵候ども一々に取りしらべたるのち、斯く問ひぬ。

「此のお方は不老幽からお出でになつたのですか。」

濱子「はあ、不老幽から。」

醫師は下唇を突き出たし、しばし何事も言はざりしが、

「これは窒扶斯熱です。甚だよくない病性で、此の冬不老幽に流行つてゐるのです。」

彼れの言へる所は實際なりき。三週間以前、不老幽の旅宿にて荒雄は一杯の水を飮みしが、其の水こそ、不潔なる用水井の水なりき。されば此の三週があひだ、バチルスは、荒雄が血管に潛みて、縱横に其の毒を瀰漫せしめたるなり。荒雄の病

（その九）

森荒雄は、深くも胸に瞋恚の火群を燃しながら、父の家を辭しぬ。うつろなる世の道徳が、いかばかり人を傷ふかを、今さらの如く身に感じて、濱子が事に思ひを及ぼせば、げに憐れむべきは濱子の志しなるかな。

斯く想ひつゞけつゝ、寓所に歸れば、濱子が清く氣高き姿の一しほ美しく見られて、之れに光明をだに加へば、古き伊太利あたりの聖母像とも紛ふべしと思はれぬ。起こりし事の本末、父が苦々しき言葉の數々を、濱子がやさしき耳には、いかで入れらるべき。

其の日の午後、二人は汽車にて巴里に出で立ちぬ。一夜をかびくさき旅館の夜具に明し、翌朝は直ちに瑞西に向かひしが、道すがら、龍山、美蘭と、心の欲するまゝに足を留むれば、初旅なる濱子の感興は言ふ迄もあらず。瑞西の風光は早く夢寐の間に浮び來りて、たゞ樂しき旅にあこがれぬ。

美蘭に幾日かを消して、興盡れば不老蓮に向かふ。不老蓮は取りわけて樂しき土地なりき。濱子が一生の記憶にのこれるものは、げに此の地の一週間なりき。ましてわが愛する男と、親しく寢食を共にするにつれ、今までに知らざりし情味の心に沁むが如くおぼゆるを、やう〳〵唯ならずなりまさる身は、うれしきにつけ、心元なきにつけ、いとゞ感情のみ鋭くなり行きて、其の頃のこと、深くも胸に彫られたるなり。

二人は不老蓮より更に波兒治家に移りぬ。こゝも濱子が目には珍らしく見られたり。臨月も遠からねば、二人は、一まづ此の地に足を留めて、よろづの用意を整ふることゝしぬ。暇あるときは、荒雄は例の寫生畫に耽りつ。教會堂をも寫せり、

「お父さん、しかたがないのです。濱子さんがさうよりほか承知しないのだから。もつとも彼れに取つては、結婚は恥辱なのです。罪悪なのです。主義を破ることになるのです。此の說から一歩もあとへ返ることは出來なかつたのです。女子の獨立といふことよりほか、彼の女の生命はないといつてもいゝ。」

荒雄の言葉は絶望の調を帶びたり。

父は眼(まな)ざしを鋭(するど)くして、

「それでお前が其の馬鹿らしい主義の手傳ひをするといふのか、其の間違つたやり口を、どこまでも續けやうといふのか。公然世間の道德を敵にして立たうといふのか。」

荒雄は力を籠めて答へぬ。

「わたしはどうも、自分の愛してる女に、所信を曲げても樂をしろといふやうな卑劣なことは、勸め得ません。」

森國手は再び時計をのぞき、立ち上りて呼鈴を響かしぬ。

「患者は來てゐるか。すぐこちらへ通すがいゝ。それからね那波君、此の後森荒雄といふ名で尋ねて來た人があつたら、わたしは留守だといふのだよ。奥さんもさういふのだ。嬢達もその通り。」

さらに冷かに荒雄のかたを見かへり、凍(こほ)るが如き聲音(こわね)にて、

「わたしは少くともお前のおつ母さんや妹等を、そんな汚れた考への女に近づけない樣に、保護する義務があるからな。」

荒雄は一語をも發せず、小腰のみにて、室を辭したり。而して死に抵るまで、ふたゝび父の顏をば見ることなかりき。

父は小面悪きまで、物静かに言ひぬ。荒雄は、怒りに堪えずして立ち上がれり。

「お父さん。あなたが飽くまでそんな精神で談をなさらうといふのなら、わたしはもう此所にゐる必要はありません。わたしが今日來たのは、今度の困難の事情や、わたしの地位に關して、いろ〳〵お話したいと思つたからであるのに、お父さんからさういふ風にしかけてお出でなさる以上は、わたしは何も言ふヿは出來ない。此のまゝ出て行くよりほかはないのです。」

「では話すがいゝさ。もう時間もたつてゐるし、十時十五分からは、患者を診察しなければならないから、成るたけ簡單にたのむ。」

荒雄はつとめて熱心に、事の次第を物語り、濱子が說の立場をば、精しく說明したり。森國手は、一二分默して耳傾けぬと見えしが、懷を探りて時計を見ながら、

「もう御免を蒙らう、あと三分しかないから。兎に角病理は措いて實地の方にかゝるがいゝ。すぐさま其の通りを實行するさ。令孃をつれて伊太利へ行くといふぢやないか。向うへついたら、其の令孃が結婚するか知らん。さうでない以上は、こんな淺はかな事を企てゝ、向うに居るあひだ二人がわたしの仕送りを當てにするといふやうな譯もなからうからね。」

「伊太利へ行つたからといつて、結婚するとは限りますまいし、二人の仕送りをあなたに願ふ氣もないのですから。」

荒雄は決然として答へぬ。其の顏は火の如くほてりて見ゆ。

父は、精神病者の容態にても診察すらん面持にて、荒雄のかたを眺めしが、徐々として口を開きぬ。

「結婚はしない。それでお前と一緒に住んで。つまり公然の圍ひものといふべきだね。身分のある令孃は違つたものだ。ねゑ、さうぢやないか。」

らかすやうな真似をしたのだ。」

「たぶらかしはいたしません。たぶらかさうと言つた所で、あの清浄な婦人を、たぶらかすことの出来る男は、世界に一人もゐますまい。」

荒雄は断乎として言ひ放てり。

森國手は、なほも眸をすゑて、荒雄の顔に向かひしまゝ、かの古柏の椅子に端然たる態度を變ぜず。胸中如何なる言葉をか織りつゝある。

「たぶらかしたのさ。お前が。それにあの女だつて、お前にさうさせた以上、さらに清浄なことは無いのだ。」

「わたしの身は潔白ですから構ひません。そんな淺はかな事で後ぐらくなるやうな潔白とは、潔白が違ひます。」

「わたしには、そんな微妙な――別はわからないが、お前の今まで言つた所で見ると、その令嬢が近々産屋につくといふではないか。それで結婚しては居ないといふ。どうしたつて何ものかゞたぶらかしたとしか聞えないぢやないか。まさかお前にしろ、其の他の男にしろさ。」

「失敬ながらお父さんは、そんな調子で、鳩野の令嬢ともいはれる女の事を、何う斯うおつしやる權利はないのです。鳩野の令嬢は、結婚といふことに就ては、十分研究をして、自分一個の見識を立てゝゐるのですから、わたしも其の意見には賛成して、いろ〳〵助言を與へてゐるのです。わたしと結婚はすまい、飽くまでも自由な條件で、自然の交際をしやうといふことに極めたのも、つまり其の主義に基いたのです。」

「では、其の女は、取りも直さず、細君よりは、情婦になるのを望んだ譯だね。」

父の冷かなる言葉に、荒雄は怒火おのづから顔に上り、
「實際、あなたあんまりな事を言つて、後で悔るやうになりませうぜ。論より證據、其の令孃の名をいへば、一番早わかりでせう。鳩野濱子といつて、田町の監督牧師の娘です。」
森國手は長き息をひきぬ。口いたく締まりて、直く薄き眉揚がると見えしほかは、さしたる不快の色をも、驚きし容子をも見せざりしが、やゝ久しく言葉を切りたるのち、
「それならば、勿論別さ。あの女なら令孃と言つても不思議はない。たしか角見に行つてゐた。」
「行つてゐました。」
荒雄は二の句をつぎ得ざりき。
森國手は一二分極めて落ちつきたるさまに、例の拇指を廻はし試みゐしが、にべなき聲にて言ひつぎぬ。
「それでもうお前の言ふことは大抵別かつた。鳩野さんの健康がすぐれないから、急に忠告して、轉地させなくちやならないといふのだらう。伊太利へでも行くといふのか。妊娠でもしたといふのだらう。」
荒雄は不快の念を呑みおろしながら、
「其の通りです。」
父はじつと荒雄の面を見こみて、
「さうだらう。日頃からお前の馬鹿な事は知つてゐた。併しまさか斯うまでの馬鹿とは思はなかつたよ。もう今となつては、つまりが、あの娘と結婚するより外は無からう。それならそれで、いゝ面の皮な、何ぜ初めから結婚をしないで、娘をたぶ

笑へる顔と、打ちくつろげる容子とは、其が一代の中より封じ去られたりとおぼゆる老紳士、これやがて森先生なり。

朝の食事濟みて、荒雄が針屋町なる父の家をおとづれしは、父なる人が、第一回の診察を始むる前十五分ばかりなりき。

森園手は、荒雄を診察室に延きながら、薄き瞼を上げて、用ありやと問ふ心を示す。其の顔色に、荒雄はまづとむねを衝きぬ。されど言はで已むべきにあらねば、荒雄は氣を激まして、口を開きたり。父は大きやかに嚴めしげなる——材は古き柏にや、後は圓く細工せる——職業用の椅子にもたれ、兩手を胸にたゝみて、おごそかに見まもりたる樣、眼前なるを心理上の患者とも見て其を診察せんとするにも似たり。荒雄は薄き氷を踏む心地にて、いかで無事に一わたり思ふところは辯じ過ぎんものと、心を砕きつゝ、言葉も途切れ勝ちなりしが、父のあまりに冷なる灰色の眸もて鋭く我が方を見つむるに快からずなりて、おのづと情もさめたり。話次はやうやく其の身の倫敦を去らんとする覺悟、故ありてさる令孃と生涯を共にするの關係を結びたりとのあらましに移りぬ。

森園手は、我れと我が兩の拇指をかはる〴〵捉りながら、きちりとしたる顔に一分のゆるみをも見せず、文なき聲にて問ひぬ。

「ふうん。どんな令孃だね。面を被つた令孃どもぢやないか。」

荒雄は驚きて叫びぬ。

「決して、決してそんなものぢやありません。實際令孃です。」

「實際の令孃、さうさ、自分から實際の令孃でないといふ奴は無からうからね。上部ばかりではわかりませんよ。その令孃も、やつぱり牧師の娘といふやうな事を言つてるのだらう。」

二人が志ざす方は伊太利と、荒雄が選びて定めぬ。行く末の事ども思ひめぐらすに、このまゝ英國に留まりて、濱子に産の事などあらば、よろづにつき便宜あしかるべしと、いたくも思慮を極めたるなり。げに英國にては、二人が行く手を塞す難儀不便は多かるべきも、伊太利ならば、人は知らねば、たゞ英國の若夫婦が、一月二月こゝに假りの住居を定めたりとのみ思ひなし、深くは咎めざるべし。されど濱子は却りて其を心ぐるしく思ひぬ。濱子にとりては、假りにも逃げ隱れせりと、世の思はん手前面目なく、倫敦人の眼前に、飽くまでも我が主義を貫きて、公に世と鬪はんこそ願はしかりしなり。たゞ荒雄は之れをもて殆んど實行すべからざる願と見たり。濱子が心にはよく爭ふべき道も知りたれど、今は男の思案も借らではと、しばらく荒雄のいふ所にまかせたるなり。されど濱子はしか言ひぬ。我れは猶我がかたにこそ正しき道理あれと、信ずれど、枉げて君の志に從ふは、我が君を愛する心と君を信ずる心との、いかに深きかを證かさんとてなりき。

さて二人が今日發足の朝といふに、荒雄は父の家をおとづれぬ。始終の事情を打ち明け置かんこと、此の場合に必要ならんと信じたればなり。今日まで、未だ倫敦にて荒雄と濱子との關係を知れるもの一人もあらず。濱子が望むがまゝに、荒雄は嘗て之れを他人に語らざりき。されど今は包むに及ばず。父に始終を知らしめ置かんと決意せるなり。荒雄未だ都會の地より退くべき年齒にもあらず。寓所は別に設けたれど、針町屋通りの父が家へも、常に往來したれば、今遽かに斷りなくして倫敦を去らば、兩親の訝り思はんことも氣づかはし。いづれよりいふも、今は包み隱して過ごすべきにあらず。

森國手は、倫敦なる醫者氣質の手本とも見るべき人なりき。其の性質は誰れが目にも一點の汚れなき君子と見られぬ。態度端正にして、丈高く、鬢髮やう〳〵白うして、額に分別の波を疊めり。年は六十を超えたれど、未だ老の坂に杖つく身とも見えず。嚴肅にして狎れがたき氣風は、親と子となる荒雄すら、さすがに口を開きかねて、其の前に踟蹰せるにて知らる。

のいかに驚きも、怒りも、悲しみもせんかと想へば、腸はちぎるゝ心地す。

されど、手紙はしたゝめ了れり。書中には、やさしき、かなしき言葉の數をつくして、想ふこゝろを封じこめたり。我が主義のためには、自ら犠牲とならではとの決心より、一人の男を得て生涯の朋とするに至れる本末まで、包み隠すところなく打ち明けて、さて我が意にはいさゝか違へど、男の勸むるがまゝに、しばし英國を去らんとするの旨、我が主義の見事貫徹せられて、再び歸り來る日あらんとの意を、こま〴〵書きつゞりたり、終りの文字は「永く御懇意忘れず慕ひまゐらする濱子より」とあり。

此の手紙を受けし清水刀自の驚愕は言ふまでもなし。たゞ驚き呆れて歎じゐるのみ、如何にとも爲す所を知らざりき。あゝ濱子は過てり、とのみ。やがての程頭痛すとて居間に退きたり。其の後永く、此の刀自が副校長の身の上を語る言葉は、「濱子さんは主義を誤りました。可愛さうに、不便の事をしました。」といふ外なかりき。

馬練横町にても、この乙姫とも見ゆる女教師、朝な〳〵女生徒等に取りまかれて、學校に通ひ居たりし女教師が、日曜毎に、宵ごとに、訪ひ來るを例とせし若紳士と、相携へて一夜の間に他へ引き移れりと聞きし、其の朝の騒ぎは非常なりき。細楮く太りたる年配の妻君はいひぬ。

「ほんとに、人は見かけによらないものだ。なあにね、あんな風をしてゐるものが、却つて油斷のならないものさ。」

さもあるべし。彼等は、彼等の卑しき心もて、之れを測れるなり。

（その八）

この頃よりやうやく濱子が身の上に心を痛めたり。今にして學校の職を捨てずんば、清水校長が、我等の事情を推して、煩はしき吟味沙汰に及ばんこと必定なり。濱子は、其の主義のため、飽くまで世と鬪ひて、清水校長が公に職を剝がん日まで、如何なる事情ありとも、自ら退くことせじと、固く言ひ張りたれど、荒雄の世才ある眼には、さる振舞の愚しく不利益なること、よく知られたり。しかのみならず、濱子も今は、知らず識らぬ間に、男の力に動かさるゝが如く見えぬ。荒雄がこのたびの意見には、濱子も從はざるを得ざりき。凡そ男には、年處久しく養ひ來たれる權力ありて、女子の一たび之れに近づくや、其の名の夫たると、戀人たるとに論なく、多くは其が化する所となるを免れず。男と女とは、生れながらにして、相反す。男性は、こなたより働きかくるなり。進みて攻むるなり。女性は、退いて守るなり。座して迎ふるなり。働きかけらるゝなり。いかなる男女といへども、此の能所の外に出でんことは難し。

濱子も遂に歩を讓りぬ。哀むべし、志を枉げて、荒雄のいふ所を聽けるなり。三月はやく、初めて濱子が姿の教場に見えざりし朝、彼れは我が家にありて、氣の毒なる、昔氣質の、されど眞心深き校長清水刀自の許へ暇をこふの文したゝめつゝありき。日頃いつくしみたる女生徒等にすら、一言の訣れをも告げ得ざりしなれど、濱子は再び教場に入る身とも覺えず。筆は持ちながら、長き息のみぞつかるゝ。清水刀自の心はよく知れり。昔氣質の偏見は是非なけれど、慈愛深き老女史なればこそ濱子をば子の如くいつくしみ、濱子をもて己が自慢の一つとしたり。

「これがわたくしどもの學校の副校長で、鳩野さんと申すかたです。御存じかも知れませんが、親御は田町の監督牧師をなすつてゐらつしやる有名なお方です。」

とは常の言葉なりき。濱子は今この人に別れを告げんとするなり。わが文を披き見んとき、其がやさしき、年老いたる胸

すら、初めより念ひ得ざりき。馬棘横町の兎耳子と呼ばるゝ人が、早くも噂を八方に散らして、同じ門並に棲む、この若き美人と、夜ごと訪ひ來る丈高き一人の紳士とは、近隣の人が耳を敍て、眼を瞬りて、其の素性と關係とを知らんとする、注意の的となれり。憫むべき洗濯女、勞働者の妻のともがら——彼等はたゞ、其が醉ひどれたる夫のために、身を捧げて奴隷たらんとする外、何事をも知らざるものなり——彼等いかでか濱子等の爲す所のこゝろを解し得べき。この若き美しき令孃が、何ゆゑなれば、斯くは好みて其の名を傷けんとする。且つ濱子の、曾て敎會に行きしことなきは、いとゞ彼等の疑を強うせり。其の人すでに敎會にすら行かず、如何なる惡事をか成し得ざらんや。世は斯の如く推し究めんとするなり。

されど濱子の常の行ひは、富みたると貧しきと論なく、親しむべきものなりければ、人はみな彼れがために惜むのみなりき。憫むべし、馬棘横町には、人を見るの明なし。

濱子みづからは、其の身の噂につきて、嘗て與り知らざりき。清き心には、よろづの物清し。濱子が心は、げに限なく清きものなりき。しかのみならず、馬棘横町と濱子が通ふところの學校とは、僅に二三町を距るのみなれど、社會全く異なるがため、校長なる劍橋の老淑女清水夫人の耳にも、未た兎耳子なる洗濯女の報道は一も達せず。六ケ月が間の濱子の境涯は、一點の曇をも帶びずして、蜜月の幸福ひとへに圓かなりき。日曜は、二人つれだちて、町のそゞろあるき、郊外の散歩に暮らすを例としぬ。濱子が荒雄を愛するの情は日に〳〵深く、荒雄もまた濱子の氣高き精神に化せられて、馴れ染むにしたがひ、いよ〳〵嘆美の念を強くせり。斯くして二人の心と心とは、眞に相近づきぬ、濱子は遂に荒雄をして心より我が一念に同ぜしめ得たるなり。

斯かる中に六月がほどは樂しく過ぎぬ。濱子が此のあひだの記憶は、平生にも代へがたく貴きものなりき。されど荒雄は、

いよ〳〵今宵より、我れと濱子が仲は、世の常ならぬものとなるべしと思へば、さすがに心臆しつゝ、馬練横町と呼ばるゝ、豆ほどなる家のみ立ちつゞきたる町に出でぬ。家はみな蔦色せる煉瓦の、やうやく古びて朽ちんとするを、其のまゝにうちまかせたり。

濱子が住居は、毛織物の薄き窓掛と、草花の一鉢その窓に据ゑられたるとが、目標となりて、やう〳〵に見わけられぬ。されど家のうちに入りては、さすがに部屋などの装飾、賤しからず。壁紙窓掛の好み美しく、よろづの彩り恰好、おのづから優しき女性の氣立に應じたり。書架にはキーツ、セレーなど竝ひぬ。暖爐の上にかゝれるロゼチが筆の婦人畫は、下界のものとも見えず、此方をさしのぞきたり。

荒雄のおとづれしより、濱子はみづから出でゝ戸を開きぬ。全然純白の装ひして、濃き髪の毛には、一輪の白薔薇をぞかざしたる、彼方の花瓶には、三枝ばかりの百合の花活けられて、これも色は眞白なりき。想ふらくは、濱子の心の奥、なほ、父より母より傳ひ殘せる想像の、世に従へる婚姻ならば、斯くてもあるべしと、夢のごとく今宵に描がれて、斯くは荒雄を迎へしなるべし。頰には嬌羞の血の色輝きて、ためらひながらも、扉をあけんともせず、手をさしのぶるを、男は掻い抱きて、額に熱き唇押しあてぬ。鳩野濱子と森荒雄とが夫婦のかためは、この夕斯くして完うせられたり。

（その七）

其の後の六月は、濱子に取りて最も幸福なるものなりき。晝は、終日學校の授業の忙しく、夕暮るゝ頃よりは、荒雄の訪ひ來て、樂しき事ども語らひ更かす。罪も知らず、恥も覺えなき身は、其の行ひのいかに世の誤解を招くべきものなるかを

濱子は、此の點につきて、飽くまで考へ究めたり。而してすべて解きがたき疑を解き、動かぬ心を定めたり。朋友は必ず同じ家に住まひて、同じ生活を送らざるべからずといふか、夫婦の仲らひは、何ゆゑに此の朋友の交はりと殊なるべき。舊き同棲の習ひは、是れやがて男が女子を壓するの遺制なり。妻子とは主人の奴僕のみ、所有物のみ。眞に自由なる社會は、かゝる夫婦の關係を容すべきか。女子は自由にみづから生活すべきなり。女子の獨立は、何ものといへども犯すべからず。

これ明かなる道理ならずや。斯くして、我が夫とたのむ男、子の父とたのむ男の訪ひ來るをば迎ふべし。女子のまことの自由はこの外になし。外なるは、みな蔿に就きて男の女を制するなり。女子が個人としての資格に矛盾するものなり。

濱子は斯くの如く考へたりしが故に、今はとて、ことさらに我が生計を變ふる必要なしと思ひぬ。

荒雄と斯かる交らひを結びたりとも、濱子が身分の上には、何の革命のあるべき理なし。たとへ女が天性自然の性に循ひて、其の性の欲する所を充せるのみなれば。結婚を人生の大事と心得る未開のともがらよ、何を謂れとしてか、男と交はり結ぶ今日よりの我が身の上を、さしも以前にかはるものとはせんとする。

濱子が清き心は、この外を念はざるなり。

濱子は倫敦なる學校の附近に、小さき家一棟を所有せり。あたりは皆勞働者のみの場末なれば、借る人ありて、何がしの家賃は、濱子の收入の一部なり。濱子も其所に住みて、一人棲しの靜かなる日を送りぬ。召使の者一人だに置かざるは、濱子が主義なり。彼れは、荒雄と契を結びたらん後も、この同じ生活を續け行かんとねがへるなりき。

倫敦に歸りてのち、一週間ばかり、かねて約せし日の夕ぐれより、荒雄は濱子が、この可憐なる小さき住居を音づれぬ。

今さら別かれるなんて、どうしてそんな事が。あなたのやうな人が、それほど言つて下さるかと思へば、わたしは、うれしいのです。肩身が廣いのです。威張れるのです。其のあなたの事が、どうして思ひ切られやう。可愛い、可愛い、命かけて可愛い人を。」

「では、わたしの申すこと、承知して下すつて？。」

濱子は男の胸に身を投げかけたり。

「承知しました。どんな事でも。」

「渝らないやうに、ね、荒雄さん。屹度ですよ。わたし、眞實にうれしい。」

（その六）

二人が仲の關係は、結婚の式を踏まざる夫婦なりき。荒雄は、半ば其の意に背きながらも、濱子の欲する所に從がひぬ。次いで來たれる問題は、行く先を如何にして、何をたつきに二人が口を糊せんかといふことなりき。一日も忽せにし難き問題なれど、荒雄は、其のはじめ殆んど濱子が言ふところの趣意をだに領し得ざりければ、心に描くところは、飽くまでも結婚といふ舊き型の外に出でざりき。よし結婚の式は踏まざるまでも、同じ屋根の下に、二人同じく捿まんは勿論の事と信じたり。

されど濱子が心は全くこれに違へり。彼れは夫婦の仲をもて、全く朋友の仲と異ならざるものにせんとするなり。夫婦が同じ家に捿むは、やがて男を主人とし、男の家に嫁ぐの舊き遺習ならずや。

にあり。身につけたるは瀟洒たる更紗服にて、たゞ一輪の百合の花とも見ゆ。荒雄の上り來たれるを見て、面はゆげに、手をさしのぶれば、男は、步み寄りて、其の手を握りぬ。草ある畝のあたりに、腰うちかくれば、木の間より漏るゝ日影、地上に虎斑を描きて、山鳩の鳴く聲、茂みの中より聞こゆ。二人は無言のまゝ、固く手と手を把り交はせしが、荒雄の口を開かんとするを、濱子は遮りて、

「およしなさいよ。だまつてゐて下さい。わたし斯うして、ちやんとしてゐたいのですから、邪魔をしないで下さい。」

初戀の清き味はひに飽かんとする濱子、荒雄も是非なく言葉をひかへしが、しばしして、逢に期せしことどもまことを盡して說き出でつ、濱子の今一たび思ひ止まらんことを切に、言ひかへすべき足場だに無からんを、必ず〳〵思ひかへすべきは今なりと、熱心なる雄辯もて說き諭しぬ。濱子は耳傾けて聞きゐたり。されど甲斐なかりき。互に想ふところを言ひ張りて、やゝ一時がほどは、退かじと爭ひしが、濱子の決心は飜すべくも見えず、今は雙の眼に淚を浮べて、

「荒雄さん、あれほど申したぢやありませんか。そんな事は、もう〳〵わたしが考へつくしたのですから、今さら聞く必要はないのです。それよりかあなたは、なぜさうわたしの言ふことをお拒みなさるのです。」

「つまりあなたを思ふからです。」

濱子は此の言葉を聞きて立ち上りぬ。

「わかりました。ではもう、お別かれするより外はございません。」

荒雄は衝と女の體を抱きて、我がかたへに引き寄せつ、顏さしよせて、

「どうして、どうしてあなたに別かれられやう。あなたはわたしを愛すると言つたでせう。女にさうまで言はして置いて、

ころなるべきも、彼れは、己が身の上に顧みるを禁じ得ざりき。濱子の望むが如く、結婚を避けて、たゞ自然の變りをなすの日は、世の人我等を何とか言ふべき。我が地位、我が前途は、之れがために如何なる影響を受くべきか、榮ゆべき狀師としての我が將來は、之れによりてそこなはれ、倶樂部には我れと言葉を交はすべき友もなきに至らば、我れは何とせん。

されど濱子が志は憐むべし。彼れは、此の志によりて生きて行くものなり。

斯く思ひつゞけて、夜は更けぬ。雨ふり出でゝ、窓の硝子を打つ音も聞ゆ。しばしすと思ふ間に、はや明方近うなりぬ。荒雄が心の闇はなほ破れず。

いかにすとも、我れは濱子をして、破滅の途を馳せしむるに忍びず。其の志は犯すべからずといへど、其の體は引きとゞめざるべからず。さなり、さなり。我れは決して濱子を此の危險に入らしめざるべし。道のために殉死する、悲しき境遇より、必ず、必ず、我れは濱子を救はざるべからず。

荒雄は、朝近く、遂に斯く思ひさだめぬ。此の男々しき決心をもて、蚤く寢所を離れたり。彼れは、愛すべき濱子のために、保護者たらんとするなり。

(その五)

雨名殘なく晴れたる、夏の朝景色、いとすゞし。荒雄は濱子との約を果たさんため、彼の丘のあたりへたどりぬ。道すがら、固く唇を結べる草花のめぐりには、蜂のつぶやく音かすかに、熟したるはりえにしだの莢の日に向かひてはじけたるが見ゆ。二人が落ち合ふ場所は、森はづれ、廣やかに枝を伸ばせる、一木の樫の大木の下なり。濱子は荒雄よりも先に、此所

もゐない。」言ひ來たつて、濱子は言葉を切り、一息つぎしが、

「もう止しませう。わたしの心は酌んで下さいましたらうからもう何も言はないはうがよござんす。これでお別かれにして、あなたの御考へは明日の朝伺ひませう。」

（その四）

その夜荒雄は殆んど眠らざりき。頭痛すとて寢所へは早く入りたれど、心は濱子が事に滿たされて、今日の問題をいかにか解決すべきと、たゞ其の思ひに、眼いとゞ冴えたり。

けに荒雄は濱子を戀ひぬ。今までに、母、妹等が引きあはせし幾たりかの女をば、かの馬を購ふものが其をトふにも似て、精しく吟味し、觀察し、批評し、果ては、我が望みに滿たずとて斥くるに躊躇せざりし彼れも、濱子と相見てしよりは、心からなる戀慕の念、已みがたくおぼえぬ。

荒雄が濱子を慕へるは、實に濱子其の人を慕へるなりき。濱子が高潔の主義と精神とに感ぜるなりき。されど彼れは、濱子の言ふがまゝに、我が愛する女を犧牲とするに得堪ふべきか。其の人を愛して、其の主義を助くるは、やがて濱子の牲を受くるものに非ざるか。思ひ來たりて、荒雄は忽ち躊躇せざるを得ざりき。彼れが如き濱子の志しを害せんは我が意にあらず。されど是れを成さしむるはやがて其の身を亡ぼさしむるなり。其の志しを助けんか。其の身を保護せんか。荒雄はこの一問を解きかねて、もだへ苦しみぬ。

しかのみならず、荒雄が心には、濱子が上を思ふほか、更に別なる一念潜みたり。其は恐らく、荒雄が口にするを憚ると

分の思ひ通り行かない時ばかしです。數へて御覽なさい。メーリー、ゴドヰンがセレーに結婚しやうと思つて、ハリエツトといふものゝあるために其れが出來ないで、一生結婚はしないなんて言つてゐたのも、ハリエツトが死ぬと直ぐもう前に言つた事は破つてしまつて、セレーに結婚したでせう。ジョージ、エリオツトがリユヰズと結婚しないでゐたのは、結婚が悪いと思つたからだといひますけれど、實際はやつぱしリユヰズに妻があつて、したくてもエリオツトと結婚は出來なかつたのです。其の證據には、リユヰズが死ぬとすぐ、エリオツトは外の男に結婚したではありませんか。みんな、主義のために何うといふやうな、そんな人は一人もないのです。ですからわたしだけは、主義のためと申すより外、わたしの望むところはないのですから、ちやうど今が其れを實行する好機會だと思ひます。わたしは世間に向かつてさう言つてやりたいと思ふのですよ。これがわたしの見立てた、眞實わたしの愛する方だが、お前方はこんな方から、自分の娘に結婚でも申込んでほしいと思ふであらう。わたしは何時でも、其の結婚をすれば出來る身分だけれど、わざと其れをしない譯といふのは、女子の自由が貴いからである。お前等は笑ふかも知れないが、わたしは何とも思はない。ひどい事を言ふかも知れないが、わたしは少しも怖くないよ。正義の爲には、どんな荊棘の道も厭はない。わたしは一時の成功を目的としてはゐない。お前等に耻かしめられるのがいやで、女子の將來の爲にする仕事を中止するやうな、そんなわたしではないから、さう思つてお吳れ。結婚といへば、神聖な伽藍か何ぞのやうに思つてゐるか知れないが、其の礎が汚れてゐる。一生をそんなものゝ中に立て籠つて、自分で衰へて、自分で亡ぶ。わたしはさういふものゝ中へはいることは御免だ。わたしはわたしの自由の意志で、正しいと信ずる所にちやんと足場を定めてあるから、お前等に何と見られやうが、少しも構ひはしない。わたしの知つてる所では、外の女のまだしない事かも知れない。外の女はみんな男のだましごとに罹つてしまふ。わたしの思ふほどな女は一人

たしに同感して下さい。わたしがあなたに愛して頂かうと思ふのは、顔や容でもなければ、世間なみの女德ともなすやうなものでないのです。たゞわたしの此の胸です。若しあなたがそれを愛して下さることが出來なければ、わたしはあなたに愛して頂かうとは思ひません。わたしが愛して頂かうと思ふのは、胸にある此の望みです。あなたもそれは御存知でありながら、なぜそれがお嫌ひか、わたしには分からないのです。わたしが心の中で、ほんたうに一生連れ添うて、わたしを助け、わたしを激まして下さるのは、あなたばかしと思つたのも、わたしの胸を御存じと思つたればこそ。それに、今となつて、わたしの信仰が間違つてゐるなんて、もう〳〵そんな事はよして下さい。わたしの申すやうになつて下さい。わたしの信じてるあなたになつて下さい。わたしに力を添へて下さい。わたしを激まして、わたしを高めて、わたしを引き立てゝ下さい。わたしの申す條件でわたしを愛して下さい。ね、荒雄さん。」

荒雄は遂に女が眞實に打ち勝たれたり。覺えず抱き寄せて、胸と胸とを相接しぬ。

「濱子さん。あなたのおつしやる通りになります。あなたの心はよくわかりました。其の代り、どうか明日の朝まで待つて下さい。重大の問題ですから、わたしも十分考へたいと思ふのです。」

濱子は長き息をつけり。

「ようござんす。けれどもね荒雄さん。わたしの申した事はよく記憶してゐて下さいな。わたしはたゞそれより外に望みはないのですから。昔のえらい婦人で、同じやうな事をした人もなくはありませんが、それは大抵自分の都合のよい時ばかしで、一生結婚をしないと言つたのも、後になれば前言つたことは忘れてしまつて、男にだまされて婦人の名譽を汚して顧みないといふやうな人が、幾らもあります。こんな人たちが結婚をしないといふのは、みんな他に邪魔になる女があつて、自

の悪徳も亦た此の習ひに基づくなり。斯くして荒雄はしばらくためらひつ。

「併しわたしのいふのはあなたの身の爲です。どうもわたしは、あなたを見す〳〵犠牲にするに忍びないのです。あなたの言ひ通りを實行した日には、あなたが其の爲に殉死するといふのは、到底避けられない結果ですからね。わたしはそれを見るに忍びないのです。」

濱子は、眼にかすかなる涙の痕をにじませながら、深く心に決する所あるが如く、

「わたしはそれを何とも思ひはしません。犠牲にならないからと言つて、どうせ經つて行くわたしの一代ですもの。誠のために善い事をさへすれば、それがわたしの本望です。眞と悟つた事はどこまでも熱心にしとげて行くのが、世間の俗人とちがつて、ほんとに道のために先驅をするものでせうし、先驅をするものは犠牲になつて其の道のために殉死するといふのが、已むを得ない運命です。犠牲にでもならなければ、世間はほんたうの價値を認めて吳れません。我々の取るべき道は間違つた事をして安全に過ごすか、正しい事をして身を敗るか、二つ一つの外はないのですから、ほんたうに成功しやうと思へば身を敗るのがあたりまへであらうと思はれます。」

「ですからわたしは、あなたが助けたいと思ふのです。あなたの體が救ひたい。今一度、その危險極まる考へだけは思ひ直させたいと思ふのです。」

荒雄は親しく女の方に寄り添ひながら、斯く言ひぬ。濱子は、情激し、意氣揚がりて、

「それでは、わたしを救つて下さるのではなくて、わたしの善い高尙な天性を奪ふといふものです。わたしはそんなにして救つて頂く必要はないのですから、それよりか、あなたにお願ひ申したいのは、どうかわたしを補助して、力を添へて、わ

婦女子を奴隷にしやうといふ精神から出たものですから、ほんたうに正義を守るものなら、儀式だけでも悪い儀式は避けるのがあたりまへかと思ひます。わたしそんな汚らはしい事は嫌ひです。それは、あなたはたゞ式だけで、悪い遺風は棄てゝしまへばよいと思し召すかも知れませんが、それでもわたしはいやでございます。結婚式と申すことが、元來男子が女子より上に立つといふことを表してるものではありませんか。考へても御覽なさいな。一旦結婚した女は、一生男についてゐなければならず。女一個の考へといふものが行はれるではなし。人間の心で果たして行なはれるか何うか知れない事まで、約束しなくてはならないといふのですから。さうでせう?。行ひだけは約束することが出來るとしても、どうして心の上の約束がほんたうに出來るでせうか。矛盾といふことは誰れが見ても分かります。結婚といふことの弊は數へきれないほどです。ほんたうにわたしが男を愛するのでしたら、わたしは十分な自由の條件で愛したいと思ひます。たとひ今は愛してる男でも、愛しなくなつたら、一日も一緒に居る必要はないと思ふのです。愛は無くなつても、結婚したばかしに其の男にまかせてゐなければならないといふのは、恥づべきことゝ思ひますし、愛するといふことでも、今日愛したために、愛する價値がないと認めた後までも、愛しなくてはならないといふのは、無理でせう。外に一層愛すべき價値のある人を目つけたなら、前の人をすてゝ後の人を愛するといふのが、人情の自然ですもの。それで結婚といふものは、みんな是等の自由を禁ずるものです。あなたはこれまでわたしの此の主義を眞理だと認めてゐらつしやりながら、今朝に限つて、なぜ其れを實行するのを引き止めやうとなさるのです。」

荒雄はたゞ普通の英國氣質を有せるのみ。理論の上にはさなりと信ずることも、實行せんとしては前後を見かへりて、用心に過ぐるが其の習ひなり。英國人のみづからは是れを中庸といひ、調和と唱へて美徳と稱す。されども英國人が鄙吝卑屈

欺く。それが一番たやすいでせう。けれど、それでは、わたしの良心が許しませんの。わたしはさう思つてゐます、結婚と申すものは、卑しい奴隷主義から起こつたもので、世間の女子だつて、心には恐ろしいものゝやうに思つてゐながら、しかたなしに從つてるものが多いのです。結婚といふことの歴史から見ても、現在から見ても、わたしは決して正當のものではないと思ひます。愛して吳れる男の氣に入るからと言つて、自分の信仰をまげても、自分の自由をすてゝも、結婚するといふ、そんな不眞實な事はわたしには出來ないのですから。わたしはあなたを愛するし、あなたはわたしを愛して下すつても、わたしの地位は別ですから、自由はどこまでも保たなければなりません。ですから、わたしはわたしの心が許す限り、あなたのおつしやるまゝにもなりませうけれど、心にない事までして、男をだますやうなことはしないつもりです。わたしの生涯も、わたしの未來も、わたしの自由も、みんな捧げて男につくといふ、そんな事は決して女の本心ではないのですから。』

女の燃ゆるが如き能辯に、荒雄は心を奪はれたり。

『わたしも決して、あなたの生命、あなたの未來、あなたの自由をまで捧げて下さいとは言はないのです。むしろ其をあなたがお守りなさるのを希望するのです。けれども、わたしの氣づかふのは、形式です。形式だけでも世間の仕來りに從つて置かないと、世間は殘酷ですから、屹度ひどい事を言ふでせうが、それではあなたや、乃至子供が可愛さうです。たゞ結婚の儀式だけです。儀式といへば、つまり今日の社會の普通な條件に從つて二人が一所に住まふといふだけの同意を表するに止まるものぢやありませんか。』

濱子はなほ頭をふりぬ。

『いけません、いけません、わたし其の普通な條件といふのが惡いと思ひます。今日の社會の結婚條件と申すのは、みんな

さすがに少女氣の、聲はかすかに打ちふるひたり。

濱子は今さらの思ひにて、荒雄が心を頼み少なく感ぜり。それと氣色にあらはるゝを、男も、いかに濱子が我れを蔑まんかと、うら恥かしく、男子も及ばぬ自信の力に感じて、

「わたしの言つたのは、そんなつもりではないのです。何もわたしが何うといふのではなく、たゞあなたのためにどんなものであらうかと、躊躇したのです。まだお歳は若いし、いくら考へたといつても、それを實行するには今少し物足りない所がありはすまいかと思ふのです。」

女の手をもてあそびながら、斯く言ひぬ。濱子は熱心に、

「大丈夫です。是れまで考へられるだけは考へぬいて、女子の爲に、わたしの身からまづ自由の女にならうと、固く決心したのですもの。ほんたうに自由を主張するくらゐなら、自分から實行する決心がなくては、何にもならないでせう。それはあなたのおつしやる心もちは、わたしもよく存じてます。ほんたうに愛して下さる方なら、屹度さう言ふでせう。自分で犠牲になつて、自分で殉死するやうな事はよして、日なたほつこでもしてゐるがよい。そんなつまらない役まはりは自分でしなくともよい。とさう言つて呉れるでせう。けれどわたしはさういふ氣にはなれないのです。進んで犠牲になるものがなくては、いつまでたつても始まりつこはないのですから。」言ひつゝ男の手をわが上に重ねて、かはらかにうち返しなどしながら、

「一番たやすいのは、人なみにしてさへゐれば、それですむのです。あなたのおつしやる、その結婚を承知して、世間と同じやうに名譽な事と思つて、たゞ妻になつて養はれてゐるために、心にもない愛まで賣つて、男を欺き、自分の信仰までも

男の言葉をくりかへしながら、靨に笑みを寄せて、「荒雄さんでもない。わたしの今までの生涯は、それを考へるばかしに經つたのぢやありませんか。自分自身は勿論、男や子供に對する女の義務といふ、その大問題の外には、わたしの考へたことはないのですよ。それをあなたは、どうしてわたしが考へもしないで斯んな事を言ふと思し召すのですか。世間のめくら娘たちが、屠所へ引かれる羊のやうに、何も知らないなりで、結婚式といへば何時でも禮拜壇の前に行くものと極めてゐる、あれと同じやうにわたしにもなれとおつしやるのですか。あなたは、それほどまでにうつかりもの、ぼんやりものと、わたしを思つて?。あれほどわたしの心を打ちあけた、そのあなたが、さうまで思つておいでなさるのね。」

荒雄はたゞ見つむるのみ、心まよひて、答ふる所を知らず。

「では何うするといふのですか。」

「何うつて、知れてゐるぢやありませんか。たゞ朋友になればいゝでせう……親しい、親しい、男と女の間に自然になり立つ、其の朋友になればいゝでせう。」

斯くいふ濱子が言葉には、些も濁れる所なく、多年考へ來たれるまゝの述懷なりけれど、荒雄に取りては、驚くべき新說と聞かれぬ。濱子の手を把れるまゝ、なほ放たんともせず、

「併し實際どんな事があつても結婚しないといふ決心ですか。世間ではあなたの心は知らないから、隨分騷ぐでせうが、それにも構はず、たゞ朋友といふ資格で、結婚しないでやつて行くといふ決心なのですか。」

「さうです、その決心ですよ。わたしは決心してをります。あなただつて、あれだけ打ちあけてお話しし合つた仲ですから、わたしの決心に同感ぐらゐはなすつて下さいませうね。」

荒雄が不思議と思へるまでに、滋子の態度は淸く矯めざるものなりき。自然なりき、おどけなかりき。戀せられたる女が、其を戀ふ男に素直なるは、やがて飾るところなきまことの情なればなり。斯かる場合に男に從ふは、女の耻にあらず。滋子は斯く信じたり。

荒雄は殆んど女の心を解し得ず。半ば思ひわづらひて、

「では、何時でも結婚して下すつて？。」うら問ふが如く、言ひ出でぬ。

結婚と聞きて、滋子は意外の想ひをなせり。荒雄の口より斯かる言葉を聞かんとは、想ひ設けざりしなり。頰には、耻づるが如く恐るゝが如き色動きぬ。身を引きながら、

「そんな事？。」決然として言ひつゞけたり。

「まあ荒雄さんは、何を言つていらつしやつて？。わたしがあれほど申したのに、まだ結婚なんて、そんな事をわたしがすると思つてお出でなさるの？。」

男は驚きて眼を見張りたり。尋常ならずとは知りながら、斯くまで其の主義に熱心ならんとは、さすがに思ひ及ばざりければ、

「それはいけない。そんな事を言つて何うなるか、よくまあ考へて御覧なさい。いくら自由だからと言つて、さうまで極端な、危險な所に行くのがあなたの趣意では、決してないでせう。」

滋子はやゝ不滿の面持にて見上げぬ。

「よく考へて見ろとおつしやるのですか。」

「改まつて苗字なんぞ、わたしは濱子さんといつてるのに。」

「では荒雄さんの事ばかし。」言ふ雙の頰には、眞紅の色輝きて見ゆ。

男は今さらのやうに女の顏を見まもりぬ。たゞ美しく美しと見たり。

「わたしがこんな事を言つては。わたしはこんな事を濱子さんに言ふ資格はないと、自分で思はないではないが、併し、わたしよりももつと立派な男に、あなたを取られるのであつたら、其のあとのわたしは、何うなるでせう。」

「わたしだつてさう思ひますわ。立派な、信實な、優しい方、斯うしてわたし一人のもの〻やうに思つて、一人占めといへば自分勝手のやうですけれど、實際思つてますことは、他の女に負けないつもりですのに、何だか自分で氣が咎めるやうに思ひます。それで自分で考へて、自分で極めましたの。ほんたうに愛してる方なら、先で愛して下さるといへば、それでもう、其の方は自分のものと思つてい〻と、さう極めましたの。わたしの心がさういふ風に思ふのですもの。」

荒雄の顏も血色輝いて見えぬ。燃ゆるが如き調子にて、

「では、わたしを愛して下さる、屹度ですか。濱子さん、濱子さん、濱子さん、――、何うしてわたしが。」

彼れは兩の腕に、しかと濱子を抱き寄せたり。胸と胸とは、相接して動悸す。

しばしが程は、一語なし。語るものは互ひの心と心のみ。荒雄は身をひらきて、低く靜かなる調子にさ〻やきぬ。

「濱子さん。では、わたしの妻になつて頂けば、わたしはあなたの夫ですね。」

「なるのではなくつて、もうなつてゐるのでせう。今までだつて、わたしはさう思つてゐたし、今だつて其の氣ですもの。ですから、何うとも、あなたのよいやうに。」

「ありがたうございます。」

何れともつかぬ挨拶なれば、男は笑みを裝ひながら、念を押して、

「わたしは濱子さんと言ひましたよ。」

「ですから、お禮を申します。」

「濱子さんと言つたのにお禮をおつしやるのですか。」

「はあ、お禮を申さなくちや。わたしはあなたが大好きですから、そのあなたがわたしの名を呼んで下さるのですもの、お禮を申さなくて何うしませう。わたしは其れが眞理だと思つてますから、眞理の前には憚るところは無いのですよ。」

荒雄はしばし言葉をつぎ得ざりき。濱子が溫き息の、せはしく我が面に觸るゝまで顏さし寄せて、

「濱子さん、ほんたうに、ほんたうに、其のお心ですか。わたしは、實際、この三週間ほどゝいふもの、あなたの事ばかり思ひつゞけてゐたのです。わたしの心はあなたの事で、一杯になつてゐました。お察し下さい。」

濱子は草の葉をむしりて、かすかに顫ふ指先に弄びながら、やゝためらひて、小さき、されどはつきりとせる聲音にて答へぬ。

「お心は存じてをります。」

「そしてあなたは？。」

男は胸をどらせながら、狂ふが如き熱心をもて問ひぬ。濱子は隱さんともせず。

「わたしも、森さんの事は、思つてゐます。」

くして三十の男子には似合はしからぬ、淸き初戀に入れり。彼れはもはや我が妻たるに適する婦人なるか否かを問ふの餘地を有せず。たゞ初心なるものゝ常になす如く、斯かる淸き、善き、美しき女に、いかで我が言ひ寄り得べきかと、みづから身の程を疑ふのみなりき。其はさもあるべきことなり。濱子が如く眞率にして淸き心もてる少女は、汚れたる今の英吉利には、多く見るべからざるものなれば。

或る日の午後、二人は、かなたの丘に沿ひたる砂山の險しき坂を攀ぢつ、頂ちかく酸模草の毛氈に腰を下して、見わたせば洋々として流るゝとも見えぬ河水、つゞいては廣々としたる牧場のあたりも一目なり。蒼くして森嚴なる靄は地上に立ち迷ひ、日脚やうやく舂きかけたり。斜なる光はるかに南の砂山を浸して、谷間には盆の如き影をつくれり。

荒雄の方を見かへりつ、女は坂を上る苦しさに、息はづませ、頰には紅の色を染めたり。鄙の少女が、ひたすらに紅く肥えふとりて見ゆるとは趣殊にして、この血色も濱子が爲には風情を添ふる料なりき。つくづくと女の方を見入りたる荒雄は、俄然、胸に抑へがたき一種の感情湧くが如くおぼえぬ。其の氣高き面わ、其の情こもれる眼ざし、其の眞紅の唇、荒雄は殆んど見るにえ堪えずなりぬ。

「濱子さん。」叫び出でたり。荒雄ははじめて親しく女の名を呼べるなり。

「わたしは、いつか露野さんの宅へまゐつたあの日を實に仕合はせな日だと思ふのです。若しあの日行かなかつたら、斯うしてあなたと近づきになる機會はなかつたのですから。」

濱子の胸は嬉しさに踊りぬ。男の斯かる言葉を聞きて、嬉しと思ふは、女の情なれば。されどそを其のまゝに受けぬも女の情なり。濱子は落ちつきたる容子にて、男のかたを見かへりながら言ひぬ。

荒雄は、三十にして猶配偶なき身なり。其の心の熱は冷めたり。三十にして未だ婚せざるものゝ往々厭はるゝが如く、荒雄もまた些事にこせつくの性あり、氣むづかしくして煩瑣なりと見られぬ。彼れは絶えず己が身邊を顧みたり。我に適すべき婦人を求め出ださんと、あせりもだゆるなり。

二十にしては、何人も未だ斯の如きことあらず。たゞ相見ては戀するのみ。されど荒雄は、此の青春妙齢の機を逸したるの人なり。我が行く手にあたりて我れを魅せざれば已まざる天使のごときもの見はるゝも、直ちに走りて其が足下に身を投ぐるの清き情火はとざゝれ了んぬ。今はたゞ、如何にして我が身にふさはしき妻を得んかといふの一念に駈らるゝのみ。一言もてこれを掩へば、人、若きときは、たゞ如何にして我が戀する婦人を喜ばしめんかと心を砕く。一たび此の機を逸したるものは、たゞ如何なる婦人を得て、我が生涯を滑かならしめんかと苦慮す。前なるは全く清き戀なり。後なるはすべて專らなる私慾のみ。

荒雄は、今や身を立つるの時に際せり。世に謂ふ身を定むるの好時機なり。好き家の妻を得んと願ふの時なり。而してこの途端に出で會へるものは濱子にあらずや、荒雄がまことの情を、賤しき私慾の淵より救ひ出ださんは濱子の任にして、見事此の任務を果たせるものは、實に其の人なりき。

荒雄は、斯かる身の上にも、濱子を一目見しより、戀といふものを知りぬ。彼れは濱子を嘆美せり、畏敬せり、最もよく會得せり。濱子が純潔の性は、近づき來たる荒雄をまで、己れと等しく純潔にするの力を有せりき。まことの女は、古の魔神の如く、觸るゝところのものを皆黄金に化す。親しみを重ぬるにつれ、荒雄は果然、濱子が上に、たゞ好都合なるものといふよりも、以上の意味を感ずるやうになりぬ。荒雄は曾て夢にだも想像せざりし高尚の意味、そこに籠れるを知りぬ。斯

もの、必ず我慾の人なり、卑劣の人なり、打算的の人なり。眞に戀する天才の男たらん男は初めより戀すべし。あたりのもの皆我れを戀ふと見るべし。人生第一の必要は戀にして、麵麭や、肉や、衣服や、邸宅や、收入や、皆これに比ぶれば第二位のみ。

而して荒雄が戀の天才は未だこゝに至らず。

荒雄が性質は、素直なるものには非ざりき。濱子も之れを知らざるにはあらず。されど貴きはまことの女子が醇化の力なり、荒雄が性の弱點は、此の力によりて救はれたり。げに濱子が一代の悲劇に力を添へしものは荒雄がこの弱點、濱子の美しき性質には相應すべくもあらざる人となりを、濱子よく信じて疑はず、一身を擧げて之れに捧げたるの一事なり。

荒雄は、齡すでに三十を越えぬ。而して猶己が身邊を顧みて、ふさはしき配偶を得んとあせり求むるの人なりき。たゞ此の一事、すでに彼れが性質の好ましからぬ弱點を示して餘りあり。男子三十にして猶定まれる妻なく、また定まれる意中の人なく、我が生涯の慰藉者たるべきものゝ絕えて無きは、以て其の人の氣質のいかに打算的にして、私慾の念强きかを證するものなればなり、素直なるものは戀に打算分別の心をまじへず。私慾のつめたき心もて、我れは猶妻を養ふの力なし、我れ今結婚せば、我が前途の邪魔となるべし、など言ふと無し。直ちに感じ、直ちに行ふ。天性ひとり在ること能はずして、鳥の如く群れんことを願ひ、苟くも我が片身となりて我れを助くべき婦人の、我が行く手を横ぎるにあへば、躊躇なく之れを捉らへて逸せざらしめんとす。これまことの性なり。男たるべき男の、感ずるところ、思ふところ、行ふところは此の外にあらず。夫のマルザスが、美しき名に呼びて、用心周到といひけん、まことは青春の水の出端を、結婚といはずしてたゞ淫慾の賣買に歸せしめんとする、其の用心周到こそ、人間の繁殖をも妨ぐる、大罪にはありけれ。

に寫し入れたり。斯かるをりには、濱子もまた出で來るを例としぬ。蓋し濱子には隱すところなかりしなり。かの若人をば好みぬ。而して眞理はみづからを自由ならしめたり。何を憚りてか、我が好む相會ひ相伴ふの事實を避け隱すの要あらんや。濱子は斯く信ぜるがゆゑに、彼の昔ありけん、男女が交りを嫌ふといふ女神をも恐ろしとは思はざりき。はた他人はいかに噂すとも、濱子は心に留めざりき。荒雄と牧場にて出で會ふこと、此の村の媼等がなかには、おもしろからぬ意味に解せらるゝをも、濱子は知らざるにあらねど、些事に屑々たらぬ心には、それらの事、言ふに足らずと思へるなり。人間のなせる事に人間が下だす批評の眞價幾許なるかは、濱子のよく知れるところ。

斯くして日を経るにつれ、偶然のをりもあり、態とのをりもありて、木戸村の坂のあたりに、二人の落ち合ふことは繁くなりぬ。荒雄も深く濱子が志を知るにしたがひ、會ふたび〳〵、話はつきざりき。寫生の筆走らす間も、或る時はわが方へ歩み寄る人の、輕き足音を聞き取らんとて、或る時は近き丘の頂に、弱かなる姿の風を吸ひて立つさまを見んとて、心はあらぬ方にさまよふこと多し。濱子の來るを見れば、息おのづからはづむが如くおぼゆるも、荒雄に取りては、たゞならずあやしき心地なりき。此は故ある事なり。

固より荒雄とても、彼れが如き人物と見るときはやさしき節もこもりて、すぐれたるものなることを失はざれど、されど世に謂ふ、生まれながらにして結婚性ある、花の如き若人原に立ちまじりては、秀俊と謂はんにいまだしき性質あり。なべて生れながらにして、戀をし、戀をせらるゝの天才ある人は、永く一人棲むこと能はず、若うして早く必ず結婚すべし。結婚せずば少なくとも我が情を分かつべき婦人の相手を作るべし。斯かる境界には、思慮分別といふことは、害悪殘忍の假名たるに止まる。秀俊の才あるものは、必ず二十歳ならずして相手を作るべし。彼の結婚する資格の生ぜんまではなどゝいふ

荒雄は笑みを含みて見まもりぬ。

「おもしろい話を聞かせて置いて、お詫をなさるとは、どういふ譯ですか。決して身勝手な事なぞありはしません。お話してゐらつしやるのは、一篇の歴史です。傾聽すべき價値のある人心史です。あなたがそれをわたしにお聽かせなさるのは、聽かすに足るとお認めなすつたからで、却つてわたしの名譽です。信用の證據です。それに」と云ひさしてしばし口籠りしが、

「わたしとあなたと、男と女であつて見れば、他の場合には身勝手と聞かれる事も、二人の上にはさうでなく聞くことが出來ます。二人が同感さへ持つてゐれば、自分の事を話しても、それが自分一人といふ色分を失つて、人類共通の趣味に合してしまふのです。」

濱子は打ちながめたる眼を荒雄の面にさしむけつ。

「全くさうです。男女の關係ほど不思議なものはございませんね。二人の間を區別するのも結合するのも、みんなこの關係ですし、此の關係のためには、色々の事も出てまゐります。實際わたしはまだわたしの眞實の感情を、これほど打ちあけた方は、女にもないのでございます。」

（その三）

此の日以後、荒雄と濱子とはしば〳〵相會ひぬ。

荒雄は寫生畫に耽りゐけるが、閑あるごとに、彼の牧場に出でゝ、幾許となく其を寫生し、あたりの草舍をも、詩中の景

むべし」といふ本文についてでございましたが、どうしたわけか、その時の說教が、わたしには活きてゐるやうに聽かれたのでございます。父の申しました言葉に、何よりも先づわれ〳〵の求めなくてならないものは眞理で、たしかに之れを目つけたと信ずる迄は、決して挫折してはならない。たゞ自分で目つけるのが骨が折れるといふだけで、間違つた信仰に安んじてゐるやうな事があつては、自分で罪惡に入るやうなものである。我々は自分で目つけ出さなければならぬ。また目つけ出したらそれに從はなければならぬといふのでございました。わたしは其れを聽いてゐる內に決心が出て來て、何でも自分で眞理を見出ださうと思ひ立つたのです。どんな事情があつても、眞理を探求してそれを自分の身に體するといふことだけは、中途で挫折すまいと思ひ立つたのです。父はまた、眞理が我々を自由ならしむるといふことを、精しく述べまして、わたしも一々さうかと感じました。我々を悟らせて、そして社會上道德上の奴隸の境界から解放して吳れますのも、みんな眞理の力ですから、眞理さへ見出したら、それを何所までも硏究して、そしてわたしの生涯に實行して、完全な自由を得るに躊躇すまいと決心したのも、やはり此の時でございます。こんな譯で、眞理探求のために、わたしは父に順つて角見にまゐつたのでございますが、あちらで偶然悟るところもあり、自由をも得まして段々居て見ますと、其のまゝ留つてゐては、到底自分の自由を守つて、完全にして行くことの出來ない事情が分かつたものですから、再びあちらを止める事になつたのでございます。それからと申すものは、わたしの目的は、眞理を悟つて、それを實行するといふことばかしに向かつたのでございます。安んじて法に則りゆけ。正は正に從ふがゆゑに正なり。といふ樣な意味の句が、テニスンの詩にございましたつけ。」

言ひ來りて、濱子は俄に言葉を切りつ、眸をあけて砂山に生ひたる松の尾の上を見やりしが、

「わたしほど身勝手なものはございません。自分の言ひたい事ばかししやべつてゐて。どうか御免あそばせ。」

濱子は急に思ひ起せし如く、斯く言ひ出でぬ。

荒雄も固より望む處なりければ、濱子は帽子を用意せんため、その場を去ると見えしが、早や身づくろひ整へて、晴れやかなる笑みを湛へながら、出で來りぬ。世間の女子等がすなる些の身の裝ひに多くの時を間あだにするが如きは、濱子の賤しとするところなり。何のあやもなく、輕く頂けるばかりの帽子姿にこそ、限りなき趣はあるなりけれ。

斯くして二人は、つれだち出でぬ。そよ〳〵と風わたる牧場を過ぐれば、石竹、夏ゑにしだなどの、直ぐなる莖ところ〳〵を黄に染めて、野豌豆の花の咲きこぼれたるあたりも拔けたり。蜜蜂のつぶやく如き羽音、蟋蟀の鳴きつるゝ聲も砂地のかなたより聞こゆ。

丘の頂に達せし頃、見おろせば、本戸村の會堂はかしこにあり。草の茂きあたりに、二人竝びて腰うちかくれば、雛菊の花あたりに繍の模樣を敷く。前方はるかに、苅り取りしのちの草地を隔てゝ、砂山の一線蜒蜿たるを見る。空の灰色と野の綠とは落葉松の林に會して互に溶け合へり。その前景として、白く夢の如く輝けるは、別戸村の白土坑なるべし。荒雄は今しも濱子が熱心なる言葉に感ぜる如く、

「實にあなたほど人生について眞面目な考へを持つてゐるものは、稀れであらうと思ふのですが、全體どういふ譯で、それほどの熱心をお起こしになつたのですか。」問ひかけぬ。

濱子はさながら我が身の上に關すともおぼえぬが如く、冷靜なる調子にて答へぬ。

「わたしが十六の歳、突然さういふ氣になつたのでございます。事の起こりは、何でも父の說敎を聽いたのが元でした。ですからわたしは、遺傳の力が作用してゐるに違ひないと思ふのですよ。其のときの說敎は、あの「眞理は汝等を自由ならし

柵の扉に開ける、粗末なる門のあたりにあらはれしとき、濱子は、恰も内より見やりつ、門の戸推しあくる荒雄を見るより、顔には喜びの色さつと輝きぬ。

「あら、お早いこと。よく入らしつて下さいましたのね。」

聲たてゝ立ち上りし濱子は、ちらと姿見にわが顔を見しまゝ、帽子をも被らで、庭に出でたり。

「いゝところでせう？　あの木芙蓉だけでもいゝ景色ですよ。倫敦に六月も居たのち、こんな處へまゐりますと、沙漠の中でオアシスに着いたやうな氣がします。」

白き朝服は、普通なる英國風の長上着に過ぎざれど、淡如として、風情昨日にも增して見えたり。媚め飾れるふしとては絶えて無けれど、おのづからなる高雅の好み、希臘風のなごりとも見るべく、端嚴にして思慮深き容貌と、優雅なる五體とには、復たあるまじく善くかなひたり。斯くまで氣高く、斯くまで眞面目に、斯くまで落ちつきて、しかもなほ女性のやさしさを露ほども傷はぬこの女がたしなみは、むべ、荒雄が理想の婦人なるべし。

「さうです、いゝ住居ですねえ。わたしは今公園の近傍にゐるのですが、あの以太利風の寨や欄干の事々しいのよりも、遙にこちらの方がおもしろい。家の前には薔薇が咲いてゐる。家の位置も申分なし。あれは小鳩草ですね。そしてずッと牧場の方も見えるのですね。わたしは此の刺鷹爪が好きです。水の溜つてる池もおもしろいし、鵞鳥もいゝ、どうしても英國風の景色ですね。」

「山の方へ散歩でもいたしませうか。家の中ですごすには惜しい天氣です。お待ち申してゐたのですから、丘の上で、汚れない空氣でも吸つて、世間憚らず、思ふまゝのお話でもしやうぢやございませんか。」

濱子はかすかに唇を締めしが、眞面目なる調子もて、

「あなたは、十分わたしの主義を解してゐらつしやらないのね、露野さん。わたしの此の節の考へでは、結婚などゝ申すことは、一切いたさないつもりです。」

露野夫人は頭をふりぬ、世間のためしをよく知りたれば。

「ほゝ、同じ事を言つてる娘ごは、世間に多いのですよ。けれど、氣に入つた男のかたさへ目つかれば、前に言つた事なぞはすぐ忘れてしまふのです。あなたのほんたうの前途は男のかたが實際に出て來てからでなくちや分かりませんよ。」なめらかに辯じ去れるを、濱子はなほ頭をかたむけて、うけひかず。

「あなたは、わたしの言葉を誤解なすつたのです。何もわたしが一生男を愛すまいと申すのではないのですよ。屹度愛する男は出來るでせう、それなら今からいつておいたつていゝのです、女としてあたりまへの事ですもの。けれどわたしは、決して結婚といふ事をすまいと思ふのですよ。世間でいつてゐる正式の結婚なぞは、する必要がないと思ふのですよ。」

露野夫人もさすがに驚きたり。この少女が根本の主義よりいへば、自然の結論ともいふべきなれど、斯くまでの思想を懐くべしとは、露野夫人も思ひ及ばざりしなり。濱子が如何なる心の色を顏に染めて、この午後おとづるゝ男を迎へしかを、若し露野夫人をして見せしめば、濱子いかに才覺ありとも、詮ずるところ世間の少女が數には洩れざりきとの心を岡くすべし。されどまことはさに非ず。荒雄の來着けるとき、濱子は黄楊の樹にそへる窓の前に、わざとにはあらで、半ばとぢたる詩集を手にして、座しゐたり。荒雄の訪ひ來るをば、待ち詫ぶる色おのづと見ゆれど、彼れは其を隱さんとはせざりき。ことさらに思ふところを矯めて、みづから欺き人を欺くは、女の好みてするわざなれど、濱子は之れを嫌へるなり。男の姿、

まことに稀れでございます。」

「何時頃出ましたらお宅でせうか。」

「朝なら御飯すぎがよろしうございます。八時頃でございますね。それとも、もつと晩くなら、お晝飯すぎ、二時頃でもよろしうございます。」

濱子は笑みを含みて答へぬ。荒雄は、

「六週間」と誰れに話しかくるともなく繰りかへせしが、其の六週間こそ、貴くもあだには過ごすべからざるものなりき。

「では明朝お伺ひしやうと思ふのですが。」

濱子は答へざりき、されど其が頬には嬉しと思へる心の波打ち寄せて、たとへば白百合の花に紅のほろが如く見えぬ。

（その二）

荒雄が、胸おどらせながら、濱子の假りの住居を訪れしは、あくる日の二時頃なりき。是れよりさき、濱子は露野夫人より、少なからず男の事をば聞けるなりき。

「あの方はおもしろいかたでせう。あなたとなら乾度氣が合ふにちがひないと、わたしの思つてゐた通り。主義までちやうどあなたと同じですもの。それになか／＼話せるかたですね。お父つさんは、倫敦の有名なお醫者で、御存じでせう、それ、貴族の人たちがよく行く、新風のお醫者で、そしてあの方は、牧師をしてゐるのですが、腕も立派なものです。濱子さんなぞが結婚約束でもなさるには、この上もない適當のかたですよ。ほゝゝ。」

います。本當に天地の眞理を考へるほどの人でございましたら、悟りやう一つで、一方に悟れば宗教家になり、一方に悟れば哲學者と申すやうなものになるので、問題は一つでございます、たゞ解釋のしかたで兩方にわかれるのでございませう。」

「全くお説の通りです。隨つてあなたやわたし等のやうな主義のものでも、凡人の人間と話すよりは、却つて熱心な舊教信者などゝ話した方が、遙かに同感の出來る點が多いのです。」

濱子は決斷を下すが如く、

「さうですよ。思想となら、大抵同感の出來るものですけれど、仕方の無いのは、始めから考へのない俗人でございます。」

荒雄は此の女を最も其が理想にかなへるものと見たり。およそ今までに、心に描きこゝろみたりし幻の婦人を現にせるは、この人の外にあるべからず思へるなり。彼れは急に話題を轉じぬ。

「してあなたは、本戸村に何のくらゐ御逗留ですか。」

「六週間ばかしでございます。」

「何といふ家ですか。」

「場明さんと申して、停車場からすぐでございます。」

「お尋ねしてよろしうございますか。」

濱子は明なる眸もて、男のかたを見おろしながら、

「よろしうございますとも、どうかお出で下さいまし。」言ひてやゝ言葉を切りしが、

「あなたとは御同感の事が多いやうでございますが、男の方で、少しでも高い希望を持つてゐる女に同感して下さるかたは、

「わたしはもう其所まで達したのか知れません。自分で正當と信じました事は、他と意見が合はないからつて、躊躇するやうなわたしではないのですから。」

荒雄は女の方を見まもりぬ。脊、格好、いづれに點の打ちどころなき此の美人を、むしろ驚嘆するが如き樣子もて打ちまもりぬ。さるにても牧師の家にかゝる乙女の生まれたりとは、不思議といふべし。

「奇態ですね、あなたが監督牧師をなさる方のお娘ごとは。」言ひてつくづく見やれば、濱子は全く冴えたる調子にて。

「それが奇態でないのですよ。わたし、さう考へるのでござゐますが、わたしの體は遺傳論の活證據であらうと思ひますの。」

「何ういふ譯で?。」

「でも、わたしの父は、自由研究と申すやうな考へを持つてるものでございますから。」言ひさして、濱子はやゝ頬に紅させしが、言葉をつゞけ、

「それだけでも、論理思想の可なりに發達してゐるものといふことは分からうと存じます。父なぞの頃は、論理を信仰の基礎にあてはめて何うと申すやうな、そんな時勢ではなかつたのですから、信仰と論理と申すやうなことは、言ふまでもない事と世間では考へてゐたのでございませうが、父は其の頃からして、論理思想の勝ッた方で、たゞ宗教上の信仰と申すばかりでなく、道德上社會上の事にも興味を持つてゐたのでございます。全體論理思想と正義の思想とは、宗教家をこしらへるに與つて力のあるものでございませうが、世間の俗人は、宇宙の根本問題と申すやうな事には、少しも注意いたさないのですから、たゞもう受身に考へますばかしで、人が信仰しろと申せば信仰する、人が考へろと申せば考へるといふ有樣でござ

濱子はうなづきて、

「はあ、自活してゐます。高等女學校へ教へにまゐりますのと、少しばかり新聞に關係してゐますので。」

「では此の休暇中こちらへお出かけになつたのですね。」顔さし出しながら、荒雄は言葉を挿みぬ。

「はあ、やすみの間と存じまして、ちやうどまゐりましたばかし。宿は本戸村でございます。草葺の小屋のやうな家ですけれど、入口には薔薇が咲いて、植込にはいろ〳〵の小鳥が來て鳴きますし、古びた趣のある所でござゐます。倫敦に半年もゐた眼には、實にいゝ景色でございます。」

「しかしお一人で？」荒雄はなほ幾分かためらひながら、再び言葉を挿みぬ。

濱子もまた笑ひぬ、男の意外といふ容子ををかしと見たるなり。

「さうですよ、全くわたし一人。ですけれど、それをそんなに不思議におぼしめすところを見ると、何だかあなたと露野さんとして、わたしを擔がうとしてゐらつしやるのではないかと思はれますよ。なぜ女ひとりで田舍へまゐるのが不思議でせう。」

荒雄は響の如く應じぬ。

「これは鳩野さんにも似合はない。わたしは批難するつもりで申したのではない、感服のあまりです。自分の信ずるところは實行して疑はないといふのが、實に敬服の至りです。わたしの平生から感じてゐるところは、そこにあるのです。立派な理想を懷いてゐる人でも、往々其の行を理想的にしやうとすると、失敗に終るのが多いやうです。」

濱子は笑ひて答へぬ。

よ。取つて二十二にもなる男が、自分の意見をきめるにまで、親の干渉を受けるやうでは、しかたがございますまい。では女だつて同じことぢやございませんか。」

濱子は瞬き一つして答へたり。荒雄。

「これはお言葉でもない、わたしは飽くまであなたと同主義だと信じてゐます。今申したのは、たゞ實際世の中にある例から考へたので、何もあなたのなさるのが間違つてゐるとは申した譯ではないのです。世間多數の婦女子は、——さうです、多少親に依賴してゐないものは無いくらゐですから。」

濱子はなほ言葉の底に疑ひあるが如く、されども得意の調子にて。

「けれどもわたしには、さやうの事はございません。角見をやめましたのも、一つはそれが原因ですから。わたし、本當に女子が自由を得やうとするには、何よりか先づ獨立しなくてはいけないと感じたのですよ。女子が社會上や道德上から、男子のために色々な規則で束縛せられますのも、つまりは男子に依賴するからでございます。わたしが角見をやめましたのは、一つは勿論教育が偏してゐて、ヒロドタスがどうとか、三角がどうとか、高等教育がどうとか申すやうな、偏屈なことしか世の中にないやうに考へさせますのが間違つてゐると思つたからでもございますが、一つは男子に依賴するのが望ましくないものですから、親父にも誰れにも世話になるまいと決心したのでございます。それで今では、何を致さうと、考へやうと、自由な身になつて、角見から倫敦へ上つてまゐつたのでございます。」

「いや分かりました。あなたが矛盾な教育に甘んじておいでなさらないといふのは、さもあるべきです。で目下のところ、あなたは自活しておいでなさる譯ですか。」打ちあけたる言ひぶりなり。

「さうでございますよ。わたしはいつもさう感じてゐるのでございます。ですから世間で女子の選擧とか何とか騒いでま爲すのは、末であらうと存じますの。それよりか社會上道德上の自由解放といふのが急な問題でございます。勿論女權同盟會とか申すやうなものには、大抵會員になつてゐますけれど、選擧權なんてことは、どうでもよいのでございます。肝心なのはそれを運轉する女子の人物でございます。政治上の事なぞはほんの一部のもので、女子のほんたうに苦しんでゐますのは、社會上道德上の壓制ですから。」

荒雄はふと思ひ出だして、暫く答へを絕ちたりしが、女のかたを熟視して、

「時にあなたの御親父は田町の監督牧師をしてお出でだと聞きましたが。」と靜かなる調子にて言ひぬ。

濱子は輕く笑へり、わか〳〵しく鈴のごとき聲にて。荒雄は其を心地よく聞けり、角見敎育の鐵鎖が猶未だ世間多數の女生等の如く濱子の精神を縛し了らざりしを感じたれば。

「はあ、さうです。わたしは、わたしの主義に反對しさうな人には、いつでも嚴肅にさう言つて聞かすのでございますよ。」

げに濱子が心には、なほ無垢自然の笑を宿すべき餘裕の存するなりき。かれは快活に答へぬ。

これで英國敎會の牧師の家に生まれた身分ですつて。」

「それで御親父は、あなたの意見を何とおつしやるのですか。」

荒雄は心もとなげに言葉を挿みぬ。

濱子は再び笑へり。其の眼は智慧に輝けど、其の靨は情を湛へて見えぬ。

「わたし、あなたを同主義の方と思つたのですけれど、さういふことをおつしやるやうぢや、何だか變になつてしまひます

を、圓滿に發達さする事が出來るのです。それは勿論、プレトーも讀みませうし、アリストートルも讀みませうし、ジョン、スチュアート、ミルも讀まないではないが、――其の辨得る所はあまり無いのですが、併しそればかりでないのです。話すにも考るにも、一切書物の範圍を離れぬといふ弊がないのです。端艇も漕げば蹴鞠もやる、球撞にもはいる。晝は町の方へ遊びに出かけ、夜はお互の部屋を押しあるいて、酒を飲む、腕白小僧のやうに枕を取つて打つつけくらゐをする、といふやうな亂暴な眞似もして、したい三昧の事が出來るのです。やる事柄は愚極まつてるに違ひないが、併しそこに生命があるのです、それが眞理なのです。蒼い顏をしてゐるサマーヴヰル主義の婦人たちが、偏熱心に固まつてゐるのは、みんな一方に偏した教育の弊です。」

濱子はさながら有名なる彫像の如く、うしろざまに身を外らして、腰掛に倚りかゝりながら答へぬ。

「天賦の稟を圓滿に發達さすとおつしやつたのは、急所を指したお言葉と存じます。まだ誰も論じない方面でございます。世間で色々言つて呉れますのは、みんな智育ばかしで、道徳とか社會とか申す上からは、女子はいつまでも束縛せられて居なければならないのですから、女子教育の成功しやう譯はございません。社會の婦人室が一掃せられないうちは、だめでございますよ。早晩あなた方が女子教育にお携はりになりましたら、どうか女子の自由解放といふことに、お骨折下さいまし。」

荒雄はますく〜興に入りて、

「わたしもさう思つてゐます。我々の爲すべき急務は、たゞ女子教育といふのでは無い。むしろ女子解放にあると考へるのです。」

女も一層思ひ切りて、言葉を進めぬ。蓋しまことの同感の士を得たりと信じければなり。

露野夫人の言へる所は違はざりき。二人は暫しがほどに、全く親しき仲となれり。同じ鑄型に鑄ぬかれたりし二人は、明せずして互ひの心を會得するがごとく見えぬ。連れだちて、芝生をめぐる二三たび、徑を行き戻るまた二三たび、はや互ひの心中は、隱す隈なく讀まれたり。男の誠なる心と、女の實なる志と。

「ではあなたは、角見の女學校にゐらつしやつたのですか。」

荒雄は立ちとゞまりて、粗末なる腰掛の、見晴しよき所に据ゑられたるを指し示しつゝ言ひぬ。

「はあ。角見女學校に。」言ひながら濱子は輕く腰うちかけ、片手をうしろに突きたるさま、わざとならぬ體のこなしなり。

「けれど卒業はいたしませんでした。」と急ぎて言ひ足しぬ。さながら言はでは我が名譽を毀つ恐れにてもあるかの如く。

「あちらに居ります間も、うるさくつて、何も氣にとめてした事はないのでございます。わたし、さう存じまして、女子の獨立といふことが本當にございますものなら、教育からして、もつと〳〵立派な自由教育が行はれませんでは、仕方がございません。角見なぞのは、自由と申しましても、在り來たりの卑屈主義に仕つけられてしまふのでございます。却つて何うしたら女子の獨立といふやうな危險がなくて教育が出來やうかと、それを試驗するのが目的と申してもよいくらゐですよ。」

濱子の言ふところ、一々荒雄の意を得て、男は言葉せはしくこれに答へぬ。

「御もつともです。わたしは牛津に居たのですが、お話の卑屈主義はよく知つてゐます。今でも牛津に出ますと、若い婦人たちがサマーヴヰルの機械主義で刻み出すやうな教育を受けてゐるものを見るのですが、わたしはあれを見るたびに、心から可哀さうだと思ふのです。男生よりは、遙に女子の方がひどいのですから、大事な大學教育の時機を過つてしまふのです。男の方は、なあに、學位をさへ貰はない氣になれば、思ふまゝの事が出來ます。片輪でない生活が送られて、天賦の乙の體

のあたりに金絲の唐草を縫ひ、同じく金絲の打紐に、寶玉細工の鏁匙ある帶もて、腰の下二寸ばかりのところを斜に締めたり。下には黑き絹の胸着、兩の腕と頸とより見えて、袖もよき程に寬くあけたり。すべての風俗、極めて淡泊なれども、午後服、夕服、いづれの好みにもかなひて、目あたらしきが人の目を惹き、取りわけ、しなやかなる其の人の體と共に、立居の輕妙なるが眼だちて見ゆ。

されど、荒雄が、一目見て魂を奪はれたらんが如くなりしは、其の顏だてなりき。二人の眼と〳〵相合ひしとき、濱子が、一瞥の中には、日頃人類の自由といふことを、何よりも貴きものに思へる荒雄が心動きぬべき、圓滿なる獨立自由の光り、かゞやきて、眞に自由の精神あり獨立の氣象ある婦人とは斯かるをいふならんと見えたり。

思ひあはすれば、悲しきことの數々に彩られたりし晩年の濱子が顏ばせこそ、いとゞ目ざましくはありたれ、みづから進みて人道の犧牲となりけん其の性質は、深くも其處に彫られたりき。されどこは、美しといはんよりも、神々しとこそいふべかしりか。若くして、はじめて荒雄と相見ける頃は、英吉利風俗の娘姿、活潑なるが中の優しさに、面あからむる血の色こまやかなることもありしが、それすら氣高き位をば離れざりき。

露野夫人はうなづきながら言ひぬ。

「濱子さん。この方とは屹度お話が合ひましやうよ。ちやうどあなたと同じやうな、進んだ自由主義の方ですから、わたしなんぞには怖いわ。ほゝゝあなたの加擔人には、申分のない方です。ほゝ、實際の事ですよ、どちらが怖いか知れやしません。」

斯く緖を開きし後をば、二人みづからの繼ぐにまかして、夫人は其の場を去りぬ。

荒雄は主人を見かへりながら斯く言ひぬ。

主人なる露野夫人は、忙はしき眼を八方に馳せて、誰れをがな此の若人の談敵にと見まはせしが、つと芝生を彼方の角へ、紺の服着けたる一人の少女のかたへ通りながら。

「をゝ、こちらへ入らつしやい。新客がございます。劍橋から見えました鳩野の令孃と申すのにお引き合はせいたしませう。立派なお娘ごで――御親父のかたは、田町の監督牧師を勤めてお出でゞございますが。」

荒雄はためらひながら、氣の進まぬ容子にて答へぬ。

「あゝさうですか、併し私は例の主義ですから、監督牧師の令孃なんて、そんな方にはお話が合ひませんから。」

露野夫人は、交際家といふ際の、意味ありげな笑みを湛へつ。

「ですからお話が合はうと存じますよ。實のところ、あの方もやつぱし其の主義なのでございますから。ほゝゝ。」答へをもしろく冴えたり。

若人は受身にて、露野夫人の急がし立つるがまゝに導かれぬ。物馴れたる人が、初めて會へる者を引き合はすときの、いとも靜なる調子にて、

「こなたが鳩野の令孃、こなたは森荒雄とおつしやる方。」といふが聞こえて、帽子に手をかけながら、鳩野濱子と顏見あはしゝが、若人の面には、忽ち驚きの色浮びたり。言ふまでもなく、此の令孃は非常の美人なりければ。脊すらりとして、美しき額に波うつ髮の濃き。珍らしき上着の、染めは海軍紺とかいふなるべし。毛織の地合柔かく、立居におのづと襞をなして、肉ゆたかにしなやかなる濱子の體にかなふさま、いとゞ美しく見えぬ。此は袖なき寛衣などいふたぐひのものにて、胸

作者の序

我が友の曰く「けれどもまさか其んな事を断行する女はなからう。」

われ曰く「ところが断行した女を僕が知つてるのだ、是れがすなはち其の女の物語りさ。」

（その一）

露野夫人の庭の芝生といひては、およそ猿江地方にて眺めよきものゝ第一に數へらるゝこと、知れるものは皆うなづくべし。滑にして彈性に富める芝生の、前庭一面に廣がれるは、細かき黄の苜蓿にて、足ざはりさながら天鵞絨の毛を踏むごとし。其の上に立ちて、見やるかなた、砂山の一線かすかに翠なるが背景となりて、前方には、樫の森幾つとなくつゞきたり。貝殼石の長く低き丘、脊を並べて森のあたりに立ちまよふ霧の、其の間を斷續するも見ゆ。

今し深くもこの景色に見ほれ居るは、森荒雄といふ若人なり。なべて伊太利地方の景色は、譬へば堅き寶石を刻りたらんごとく、鋭く際だちて明快なる眺多ければ、之れに慣ける眼の、朧ろに奥深く幽玄の意義籠れるがごとき英吉利の景色に對する時は、感は一しほ強かるべきことはりとて、荒雄は、夏早くより、伊太利の諸名山を跋渉し、こたび新たに本國に歸り來けるなり。

「やつぱり何うも佳い景色ですね、伊太利では畫家の喜ぶところは背景にあるのですが、英吉利ではむしろ前方の景色が佳いやうですね。」

その女

（英吉利の美學者グラント・アレン著 "The Woman Who Did" の翻案──編者註）

私は今早鞆の瀨戸とは程遠からぬ小門に來て、同じ海つゞきの青く光る渦卷の無氣味な光景を眺めてゐる。斯うした渦の底からぽつかりとRの死骸でも浮き上つて來たらどうだらうと思ふと、もう烏賊魚を追つかける勇氣も興味も無くなつて、乘合の人々を促し立て、そこ〳〵にして樓に戾つた。

また一風呂取つて、乾いた浴衣に着かへ、取れた烏賊魚を刺身にして燗酒の强いのに醉ひを求め、下の關から來た藝者どもが空騷ぎの中に、心私かにその夜の酒をRの爲に飮んだ。ともすれば醒めやうとする酒を、今夜こそはRの爲に痛飮淋漓も辭しないと思つた。其の間に酒も發して來る。小門の夜焚の一夜は愉快であつた。やがて其の夜の終列車に乘らうと小蒸氣で再び會社の人々に送られ乍ら、すぐ驛下の棧橋に着いて、夢を二等車の輕便寢臺に託したのは十二時過ぐる頃であつた。

た程である。私が國を出た後、彼は或る官途に就いて、十五圓か二十圓の判任官でも、小さな田舍の町では大さうな威勢であつたといふ。其の威勢が累ひをなして、彼れは或る藝者に想ひそめられとう〳〵公金を使ひ込んで足元が危くなると共に、高飛して東京に出た。そして突然私の家へ尋ねて來て、半日ばかり居たが私の夏羽織を一枚借りて行つたなり、行方不明となつて了つた。その時彼れは、殆んど涙を流すやうにして、私が東京へ出る時の一件を告白し、私の恕しを乞うた。今度東京へ出たのは、職を求めながら勉強して新しい前途を拓きたいからだと誠意を籠めて語つた。怜悧な彼れは、斯うして一つの罪を消すことによつて他の罪を育んで行つたのである。

Rが行方不明になつた後、國の友人に會ふと、俺れも着物を貸した俺も金を貸したといふものが可なりあつた。それでもRは、隠れ了ふせなかつたと見え、とう〳〵國へ歸つて監獄に入つた。そして出獄してから、大いに商賣を始めるのだと云つて、手始めに洋服の裁縫のやうな事を習ひ、ミシンなどを仕込んで、店を出してゐたといふ。けれども此の頃から後のRの交際の範圍は全く變つてゐた。私等の知合で彼れの消息を知つてゐるものは一人も居なかつた。恐らく彼を想ひも出すものすら居なかつたらうと思ふ。たまに想ひ出せば着逃げ、借り逃げをした男といふだけの事であつた。併しそれ等の人があながちに彼れを惡人だとも憎い奴だとも思つてゐるのではないやうであつた。たゞ借り逃げをした男、着逃げをした男といふのをRの想ひ出の符號としてゐたのに過ぎない。

その彼れは、その後何處をどう經て馬關に來たか、何ういふ差し迫つた事情で何う思ひつめたか、それともたゞ何時となしあとから〳〵と追ひつめられて、何がなし此の世が厭になつたのか、あの早潮で有名な瀬戸に身を投げて死んで了つた。死骸は容易に揚らなかつたに違ひないと、友人は手紙一つせずに私に話した。

上つて出た〳〵と叫んだ。樓の女が緣端に出て、當番！と呼ぶ、おゝいと答へて、二艘三艘段々に寄つて來た。私は會社の經驗ある某君某君と三人一つ船に乘り組んだ。女連もみなそれ〴〵に世話係が附いて乘り組んだ。船ははしから〳〵と潮流の中へ乘り出して行く。客船漁船入りまじつて七八點の篝火が、油煙を風に靡かせながら大きな圓を描いて暗い海の上に往きつ戻りつしてゐる樣は、一種異樣の觀物である。

ともすれば風につれてしぶき來る雨と燃え立つ篝火のほてりとに責められて、鼻の穴や眼の緣を煤で眞つ黑にしながら、私たちは物の一時間もぐる〳〵と一つところを廻つてゐた。其の間に三艘の船で取れた魚は、烏賊魚が主で、すべて二三十尾も居たらう。尤も私自身の乘つた船は、船頭が未熟で魚の水道を知らなかつたせいか、とう〳〵雜魚一つも抄へなかつた。

私はもうとても駄目だと諦めて抄網を舷についたまゝ、ぼんやりとして、篝火に照し出される潮の渦卷を眺めてゐると、海草類の根こぎにされたのやら、家具船具類の缺けらやら、或は赤黑く、或は蒼白く、水底に光りながら、渦の中に吸ひ込まれて行くのもあれば、死骸のやうになつて渦から吐き出されて來るのもある。私はじつと此の氣味惡い景色を見てゐて不圖同じ海續きの早鞆の瀨戸を思ひ出した。そこでは何年前かに私の幼友達のRといふ男が身を投げて死んだ。その事を私は今度の旅で、はじめて同鄕の者から聞いたのである。何時であつたかといふことも、其の死骸が揚つたかどうかといふことも、一切明らかでないが、とにかくRは今はもう此の世の人ではない。彼と私とは、故鄕で別れてから二十何年になるが、其の間だ唯一度再會したばかりで、平生は勿論何の音信もしない。今から思へば、Rは蓋しかうなるべき運命の人であつた。十三四の頃から非常な英才で、しかも其の才は動ともすれば善惡いづれの途にでも走り得る種類のものであつた。私が東京に出るといふ時、競爭者であつた彼れは、裏に廻つて頻りと其の機會を橫取りする策をめぐらしてゐた事を、後に聞き知つ

點在し、其のあひだ〳〵に高く低く潤んだ燈火の影が瞬いてゐる。それと相對して下ノ關の港は、低く横に一直線を描いて、赤い燈の影が一層華やかに見える。私たちの船は間もなく小門の對岸について、そこの某樓と云ふのに上つた。會社の元氣な手合は艀船を待たず二人三人つゞいて舷から海に飛び込み、小降りの雨の中を急な潮の瀬に乘つて拔手を切つて泳ぎ着く。女達が手を叩いてヤンヤと喝采をする。皆が一風呂浴びて汗と雨の氣を洗ひ落し、樓の浴衣に着かへてさつぱりすると、日はもうとつぷり暮れて夜焚の時刻となるのであつた。

廣い泉水程しか見えぬ海門のすぐ向うの黑い島の裾には、三四點の火影が見えて、潮は微な音を立てながら青黒く光つて流れてゐる。雨氣を持つた海風がひや〳〵と懷を吹き拔ける。夜焚といふのは、鵜を使はない鵜飼のやうなもので、漁船に篝火を焚き、その明りに魚を呼び寄せて球網ですくひ取るのである。此の漁船が五六月の頃、闇の夜に乘じて何艘となく小さい入海の中を、潮のまに〳〵ぐる〳〵廻り乍ら漁をする。渦に沿うて流すのである。そこで遊山の客は料理屋から、その漁船に聲をかけると、順番が極まつて居て料理屋の庭先に舟を寄せる。それに乘つて船頭を案内に球網を斜に構へたまゝ篝火の下を睨んで待つてゐると、時々ほかり〳〵と潮の底から浮き上つて來るものがある。ソレとばかりすくひ取つて見ると、多くは水母であつたり、芥であつたりする。けれども其の中に烏賊魚がゐることもあり、鰻がゐることも飛魚がゐることもある。多いときは烏賊魚が何十杯となく取れることがあるといふ。私たちは尻端折りの頬被りといふ出でたち、女達は浴衣を二枚重ねたり、男のレインコートを被つたりして、いづれも結束して雨の小休みになるのを待つてゐた。

雨が少し小降りになつたかと思ふと、篝火の眞赤な影が何處からともなく後から〳〵現れて來る。其の赤い火影に照し出された、逞しい漁師の顔が、遠見に物凄い光景を呈する。ちやうど長良川の鵜飼そのまゝの景色である。私達は覺えず躍り

もきつと好い景色であらうと思ふが、私たちの行つたのは丁度明りのつき初める頃であつた。

一夜大里のぬかるみの町を、夜中過ぎから二三人づれで土地のDと云ふ料理屋に辿つた。先方には麥酒會社の人たちが十人許りも、早くから集まつて、冷しビールか何かで待ちあぐねてゐる。門司から連れて來たと云ふ藝者が二三人に、土地の藝者雛妓もまじつて、やがて膳が出る酒がはやる、主人側には土佐の人が多いと云ふので「土佐はよいとこ」が盛んに席を賑はす。錦魚と云ふお酌が今度一本になるので、名を替へたいが何とつけたものであらうといふ話に、其の目の大きい肩の細い具合がどこか夢二君の繪に似てゐるから、差しづめ夢路とでもつけたらと早速名づけ親の役目を濟ますと、周圍の贔負連が此のお禮に私達を是非一度小門の夜焚に招きたいといふ。小門の夜焚とは名がいかにも氣に入つて、遂行つて見る氣になる。

まあ斯んなたわいない事でその後一週間ばかりして、私たちは小門へ出かける事になつた。九州方面の藝術座の用事も片づいて、其の夜すぐに下ノ關から汽車で歸東の途に就かうと云ふので、荷物はみんな他の連中に持たせて先に立たせた。夕方、例のD料亭で主人側の二三人と落合つて、小蒸氣の仕度の出來るあひだ、鮑の切身に氷をあしらつたのを肴に、お手前物の麥酒の生なところを賞翫して居ると、稍や晴れかけた空がまた雨を催して來た。儘よ、どうせ梅雨の船遊びであるからには、濡れるのは覺悟の前と、料亭の婢に傘をさしかけさせて、渡上場に出て見ると、舟はもう煙をあげて居る。丁度これもさしかけ傘で長い袖と裾とを氣にしながら、例の錦魚もはしやいで飛び込んで來た。人數が揃つて船が動き出すと、雨は一しきり横しぶきに吹きつけて來る。みなが慌てゝ下の薄暗いケビンに逃げ込み、山と仕込んであるバナヽや折詰の肴でビールの泡を吸ふ。窓から外を窺ふと、門司の港は小雨と夕暮の色に包まれて、幾艘とない繫り船が黒い大小の巖壁のやうに

今年の九州の旅は、春から三四ヶ月にわたつて、ちやうど梅雨のあがらうとする頃に終つた。その長い旅の最後の一夜が、此の旅行の締め括りをするには、いかにもふさはしいものであつた事を幸福と感ずる。

旅行と言つても殆んど三四日置き五六日置きには處を變へて、未見の土地に入るのであるから、新鮮な印象は到るところに得られる。けれどもそれを受け入れる私の神經がいかにも匆忙として荒んだものになつてゐる。惜しいかな、自然が與へて呉れる美しいものゝ大部分は、摺れ違つた窓から見る人の顔ほどにも心に留まらずして過ぎ去つて了ふ。やはり其の懷中に自分を投げ入れて、ぢつとそこに耽溺して了はなくては自然の味は出て來ない。自然と接觸するには場合が必要である。殊に年を取るに從つてさうなつて來る。若い時はその柔な神經が極めて些細な刺戟にもすぐに振るひ立つ。自然に對して自ら環境を造り場合を造つて行く。それが年を取るに從つてむづかしくなるのである。そして其の青年期に於ける柔な、感觸の想ひ出に對して、言ひ難い一種の悔恨、焦燥の念を感ずる。ちやうど青年が自然そのものに對して感ずる如な、涙ぐまれる程殘り惜しく、もどかしく、羨ましく、妬ましいやうな追慕の心が、また壯、老年者の青年期に對する心持ちである。年齡はまさしくあらゆるものを變化せしめなければ已まない。耶馬溪に行てて山陽の紀行文を想ふとき、あれは山陽が何歳の時に書いたのであるかと考へる。南洲と月照と相抱いて身を投げた鹿兒島灣の遺跡を訪うては、二人はその時幾つと幾つであつたらうと首を傾ける。そして自然と我との相語る言葉が、年齡に從つて變化し、濃厚芳烈から次第に枯淡に遷り行く跡を想うて、悵然たることが多い。斯うして二三ヶ月も旅をしてゐて、そのあひだに眞に心に殘る追懷は數へるだけしかない。其の心に殘るものの一つに小門の夜焚がある。小門は下ノ關と門司の間にある小さい、箱庭のやうな海門で、彦島の陰、下ノ關の海岸に沿うて玄海灘の方に出やうとする水路が、小さい島に遮られて方何町かの間に渦を卷いてゐる所である。蓋

小門の夜焚

くなるでせう。

こちらへ來て以來、だん〴〵こんな風に考へて來ました。今では自分が自分に對して他人になる工風をしてゐます。私の力では自身を何うすることも出來なくなつたからですよ。でね、やつぱりあなたを思ひつゞけてゐるのですけれど、前よりは安らかな氣持で思つて居るやうになりました。若しお兄樣の事や世間の義理を考へて、苦しくなつて來ると、つッと離れて遠くから自分を眺めてゐます。私の知つた事ぢやないといふ風にほゝ笑んで見ます。

で此のごろは、前よりも一層はげしく自分の事を胴忘れするやうになりました。自分の今の境遇なんか忘れて了つて、縫いかけて置いた着物の事などを考へてゐます。斯うしてこゝに一二ヶ月もゐたら、私もどうにかなるでせう。何うなるかは私にも分りません。たゞ是れで私もあなたと同じ所まで來たのぢやないかと思ひます。是れから先は、また二人一緒に同じ心持で同じ自分を眺めて暮すのぢやないでせうか？　そして二人一緒に…………。私何だかそんな氣がしてなりません。

せんより

冷つこくて、海の香ひが胸をすつきりとさせます。澁色に染めた鰤網を一杯に乾した砂濱や、別莊らしい新築の家の明け放つた南緣へは、美しい日光が勿體ない程澤山に流れかゝつてゐます。私、こゝへ來てから氣が廣くなつた樣に思ひますわ。でね、別れぎはにあなたがおつしやつた言葉の本當の意味が分かりかけたやうな氣がします。あせつたつてしやうがないのですものね。

宿の〇〇館に十七八の娘さんがゐましてね、ちよつと愛くるしい顔だちの上に、今がちやうど花やかな血の潮時といふ年で、圓みを持つた頬のしまりや、浮彫のやうになつた胸のあたりの肉附の美しい底に、若さの力が張り切れるやうに漲つてゐます。よく女中の座敷掃除の手傳などに來て、廊下の緣先から、紫に霞んだ沖の方を見てゐる。其の眼はうるんだやうな光澤を持つてゐます。何でも、去年の作逗留してゐた川田とかいふ大學生のことを忘れ得ないのですつて。で、其の大學生の友人が、今年は川向うの別の宿へ來たとかで、川田さんもそこへ來るのぢやないかと、毎日のやうに其の友人が町へ出たり、濱邊をあるいたりするのを、氣をつけて見てゐるのださうです。今日も橋を渡つて行く若い人の後姿を見つめて、

「あの大島の着物を着て居る具合が、川田さんに似てゐるわね。」

と言つて、懇意な男の客にからかはれてゐました。

あれが本當の戀ですわね。私たちの間のやうに、ひねくれて了つては、だん〳〵しなびて行くばかり。漲つて來る生命は、なるたけ素直にして、力一杯に活かせて行きたうござんすわね。ですけれども、私たちの戀は、初めから、もう捩くれた運命の上をあるいてゐるのだから、無理に手を出してどうすることも出來はしません。捩くれたら捩くれたで、其のまゝ素直に引つぱられて行くより外はありません。思ひたければ死ぬまで思つて行くし、思つてゐるければ、自然と思つてゐられな

中頃のたより

健三樣

一月辛抱して見ましたが、だめでした。私には、寂しくて、とてもあの山奥に長くゐるとは出來ません。人を忘れやうと思つて、寂しい所へ來るなんて、全體まちがつてゐますわね。私には元から自然よりも人間の方がなつかしいし、人間の中でも、どちらかと言へば賑かな方が好きだつたのですよ。それが此の節では、賑かな人間ばかりが好きだとも思ひません。けれども、まだ人間を振りすてゝ自然の中へ遁れたいとまで決心はつきません。斯うして段々押しつめて行つたら、さうなるのかも知れませんね。けれども、今の私は、まだあんな山奥にゐながら、人間の聲がなつかしくてならなかつたのですよ。

もとの宿の隣の部屋にね、病身らしい若奥さんが長く逗留してゐたのですよ。で、其のおだやかでしとやかな事と言つたら、一日咳拂の聲一つも聞こえはしません。折々お友達が見えての話振なども、實に靜なものでした。元は私、あんな人を見ると腹が立つたものですが、でも今度は感心しましたわ。私もあゝだつたら、どんな苦しい想ひをしても、じつと胸一つに納めて行けるのだらうと思ひました。

でね、とても我慢が爲きれなくて、この海濱へ出て來ました。こゝだつて寂しいのは同じかも知れませんが、何となく海は山よりも人なつこいやうに思はれたのですよ。第一空氣が明るうございますわね。私、また明るい所が好きになつたのですよ。此の邊は、實際まあ何といふ佳い景色でせう? 白い波に乘つて太洋を渡つて來る空氣が、透きとほつた靑玉のやうに

寂しくてたまらない時には、よく裏の谷合を散歩します。まつすぐに見上げる様な南方の山が、牯牛の脊のやうな枯肌を競ひ立てゝ私たつた一人を取り巻いて了つて、其の高い大きな山脈と青空の外には、何も見えはしません。その谷底があの急な川になつて、南向の山の半分から上が眞赤な日を受け、下は二時頃から、もう夕暮の色を漂はせてゐます。土地の氣候は暖かでも、谷川の風は、かなり冷たいのですけれど、それは却つて寂しい時に相應した、いゝ氣持のやうにも思へます。で、わざと肩掛も着ないで出かけて行きますが、人はあんまり見えません。道路からちよいと降りた小蔭の所に、水が大きな岩に堰かれて曲る所があつて、その岩の上に腰をかけてゐると、初め耳についてゐた瀬の音が、次第に遠い〳〵聲のやうにほんやりして行つて、後の枯木山の奥で、ひよ鳥の鳴くのが、はつきりと反響して聞こえて來ます。

前の山の、もう陰つた裾の所に、ちよほ〳〵とした蜜柑畑があつて、青い葉の中に、まばらに黄金色の小粒な實が殘つてゐる。それを見て、そして次第に山の頂きの方へ眼を移すと、頂きの邊はまだ日なたほこりをしてゐます。じつとその邊を見てゐると、何だか寂しい涙が流れて來て、ひとり此の世に取り殘されてるやうな氣になります。いつそあの山の頂邊へ行つて、たつた一人で立つてゐたら、どんなにいゝ氣持だらうと思ひました。

足もとの水はどん〳〵流れて行く。岩にせかれても、川原で狹められても、曲つてもくねつても、流れる性はかへないや、自分の意地を通して行きます。私はどうしたらいゝのでせう?

そんな事を考へながら歸つて來て、義務のやうにお湯につかります。はしやぐ時にははしやぎ、沈む時には沈んだ私が、此の頃では、はしやぐ氣持なんか忘れて了ひました。

あなたからのお便りを待ちます。

まぎするのは私の癖なのですよ。だから私はすぐ正氣にかへつて、解かした髪を、ちやうどこんどのやうに、左の手に捲いたまゝ、素直にあなたの胸に顔をつけましたわね。おぼえてゐらつしやるでせう。あの、忘れてならない最初の紀念を、どうして私は思ひ出さなかつたのでせう？　あれからといふもの、髪を洗ふ日は私に取つて花のはじめて芽ぐむやうな、うれしい、なつかしい想ひ出になつてゐたのを、何うしてあんなに胴忘れしたのでせう？

　さう言へば、この頃私は、時々自分自身を胴忘れしてゐるやうですよ。何事も無かつた昔の心持で、何か平氣な事を考へて、唱歌の譜を鼻唄のやうに歌ひながら、前の山なんか見てゐることがあるのですよ。そして、はつと思つて其の事に氣がつくと、胸がどき／＼します。何だかそんなに平氣でゐるのが濟まないやうで、もつと／＼苦しい事を思つて／＼思ひつめなくちや、私の責任が果てないやうで、恐ろしい氣がします。

　でね、お兄樣が戰地から便りをお斷ちになつた心持を考へたり、濟まないけれども若しか無事でお歸りになつたら、其の時どんな氣持がするだらう？　私は一番先にどう言はう？　あなたは何とおつしやるだらうか？　そんな事を次から次と考へると、私、もうじつとしてゐられなくなります。どうしても私は生きてお宅の方や家のものに顔は合はされない。ぢや、せめてこゝらで、さつぱりと思ひ切りませうか。今までの事はしかたが無いとして、之れからさき、生れかはつた積りで、お兄樣の前に身を投げ出して、どうともして頂きませうか。假りにさうしたと思つて見ると、ちよつと重荷を卸したやうに樂々した氣持になるはなるけれども、すぐ其のそばから、あなたのお顔が目について來ます。さうなつたあとの私たちは、どんなに寂しいでせう？　そんなにして生きてる甲斐があるでせうか。斯うして別れる氣で出て來ても、眞實別れるやうな心持は少しもないのですもの。たゞ離れてゐるのが寂しい一方。

おつしやるあなたの血は、その時もう半分冷えかゝつてゐたのぢやないでせうか。私が一そお別れしませうと言つたのも、それを見こしたつもりだつたのですよ。あなたがさうして、御自分で御自分を眺めていらつしやる間に、私といふものは、いつともなく忘れられて、流れに浮いてる花のやうに次第に影が遠くなつて、しまひには見えなくなつて了ふのだらうと思ひました。だから、私、さうされない内に、自分で覺悟がきめたいと思つて、おれつきりつらいお別れをしました。

お別れして、もう二月の餘になりますね。私がこゝへ來て、一番先に何をしたとお思ひなすつて？

私は髪を洗ひました。女湯に人の絶えたころ、岡湯だけ別にバケツに貰つて置いて、初めて温泉で洗ひました。温泉は洗粉がきかないと言ひますが、こゝのはそれ程でもありませんでした。久しく洗はなかつた上に、途中で砂埃や石炭の粉を被つたものだから、まるで捏ねたやうで、櫛を入れるとざき／＼と音がしました。でね、やつと一流し洗つて、二度目のお湯を酌みに源泉槽の所へ行くと、全體が暗くて、上の方から差込むやうに明りを取つてある浴室ですから、側に据ゑてある深い水槽が、ちやうど淺い井戸をのぞく樣に光つて、水鏡を映してゐました。髪から雫を落とすまいと思つて、捌いた髪を根元で左の手に一條捲き、餘りを横によけて、首を心持ち左に曲げ、水槽の上を覗くと、私ははつとして自分の影に驚きました。髪を洗つてゐる私といふものに初めて氣がついたのです。ねえ、髪を洗つてゐる私。おぼえてゐらつしやるでせう？ 緣先に立つて髪をほごしてゐると、見てゐらしたあなたが「僕が解かしてあげやう」と言つて、前から元結を切つて下すつて、そして其まゝ兩手を私の肩にかけて、捌髪の私の顔を見詰て、眼元でちよつとお笑ひなすつた。私だつて、元結を切つて下さるあひだ、じつとお顔を見つめて、眼と眼の行き合ふのを待つてゐました。たゞお顔があんまり近く來るのに、ちよつとどぎまぎしました。あなたはそれを大へん氣になすつて、いろ／＼言ひ慰めて下すつてね。けれども初めての事にどぎ

あの時あなたは
「どうなるものか別れて見るさ。別れてる以上は音信不通でも構はない。そしてお互の心にはつきりした覺悟がついたら、其の時それを明し合つて見るさ。」
とおつしやつたのね。そして、お顏を心持あほむけて、二人で見なれたお庭の上の月をじつと御覽なすつた。その眼のうるんでゐた事を、私よくおぼえてゐます。去年の秋の風の冷きつた晩でした。
「私の覺悟はもう極まつてゐたのだ。」
とおつしやるから、私が
「どう極めてゐらして？。」
と聞いたら
「兄への義理、世間への義理もすまない。けれどもやつぱり思ひ込んだ人も忘れられない。すまない私と忘れられない私とが鬪つてゐるうちに、もう一人第三の私といふものが出來た。その私はたゞじつと二人の爭ひを見てゐる。時によると面白いとさへ思つて眺めてゐる。私の今の覺悟といふのは、それだ。別に覺悟をしやうとして爲たのぢやない。たゞ自然と第三の私になつたのだ。どつちに身方をしろたつて出來ないからの事だ。これでもう十年年を取つてゐたら、すまない〱の私に身方して、血管の中で煮える血をじつと抑へて、冷ましたかも知れないし、もう十年若かつたら、一も二もなく其の熱い血の中に飛び込んで了つたらう。けれども今の私は其の眞ん中ほどに立つてゐる。さう此の頃では思ふやうになつた。」
つておつしやつたのね。そりや、どうせ世の中はなるやうにしかならないんだから、それもいゝでせう。けれども、さう

初めのたより

健三様

書けとおつしやれば、手紙は一日に二度でも三度でも書きます。よく人は日文夜文と言ひますけれど、それくらゐ別に驚くことでもありませんわね。お別れしてこのかたの私の想ひが日文くらゐで書きつくせるものなら、こんな寂しい山奥へ来て、こんな苦しみは為ない筈ですもの。

たゞのたよりで可いとおつしやつたのね。けれども、今の私にどうしてたゞのたよりなんか書けませう？　親しいお友達にも、宅の両親にも、葉書一枚出しはしません。なぜでせう？　こはいのですよ。筆を持てば、この胸の想ひがすぐ筆の先に出て来さうで、こはいのですよ。誰れにも〳〵話すまい、たよるまいと誓つた此の想ひが、書くまいとしても出て来るからですよ。口の先でたゞごとばかり言つてゐるのが苦しいものだから、此の頃では、人ともあまり口を利かないやうにしてゐます。たゞのたよりを、而もあなたに、どうして此の私が書かれませう。

本たうの事を書いてよければ、日文夜文も厭ひません。私ね、この頃日記をつけてゐるのですよ。たゞ毎日想ッた事をくしやくしやと書きつけるのですけれど、いくら書いても〳〵、私の胸の十分一もすきはしません。あとから〳〵と新しい想ひが詰めかけて来て、そして、それがみんな、あなた一人をあてなのですよ。だから、ならう事なら、日文でも夜文でもいゝから、それを残らず、つぎ〳〵に書いて送りたいと思ひます。けれどまさかそんな事も出来ませんわね。またいくら書いたつて、それでみんな書いたといふ気はしないのだから、無駄かも知れません。

斷　片

なつた。

伊東に着いたのは二時半であつた。道づれの女が教へて吳れた猪戶の〇屋といふのに落ついて、何よりも先づ湯に這入つた。湯は無臭(むしう)ですきとほつてゐる。廣い湯殿には磨硝子(すりがらす)の窓を通して和かな日光が一杯にさし込んでゐる。湯に浸つてゐると、今朝のいら〳〵した氣持は消えて了つて、ゆつたりとなつて、そして思ふともなく道づれの女の身の上を思つて見た。

とお辭儀をするのを見向もせず、こちらに向いて一寸會釋したまゝ、すたくと峠の方へ行つて了つた。

S生はそこの旅籠兼帶の茶店で晝食をすませ、人足に鞄をかつがせて、出來るだけゆつくり歩いて、一時間ばかりで柏峠の絶頂に達した。それでも身内には汗がしつとりと滲んで來て、高地でありながら、一足々々氣候が暖になるやうに思はれた。

峠の頂上に一軒の茶店がある。取り敢へず、そこで一休することにして、薄縁を敷いた縁臺に腰を下すと、白髪の美しい爺さんが茶を酌めた、婆さんは蜜柑を盆に盛つて出した。S生は蜜柑を剝きながら、ふと臺所の爐の方を見ると、先の女が爐の端に坐つて、こちらに脊を見せたまゝ、頻りに食事をしてゐる。其の前に同じ年頃の娘が更盆を持つて飯櫃を控へて、給仕をしながら媒掃の話か何かしてゐる。

S生と人足とは、爺さんと峠の話などをして、十分ばかりも休んでから、下り路に向かつたが、女は其の聲を聞きながら、終に一度もこちらを向かなかつた。

茶店のすぐ横に半丁ばかりの隧道路があつて、それを拔けると、やがて突然眼界が開けて遙の下に伊東の海が紺青に光つて、地平線の邊に圓く盛り上がつて見える。風の肌ざはりが、むうとするやうに思はれた。下り路は早い。山の中腹に沿うて幾たびか迂り曲りするたびに、海が見えたり隱れたりする。兩側に迫つて來る雜木の枯れ山の色が、今までの鼠色なのと違つて、赤味を帶びてゐる。所々に青草の枯れ殘つたらしい色も見える。藪の中に聞える山雀の聲が、峠の向うとこちらとで、冬と春とを劃つり分けてゐるやうな氣がした。其のうち日光に漬つた伊東の町が間近に見え出して來た。別莊の庭でもあるか、橙の木の黄色な實の盛りこぼれるやうに生つたのが、彼方にも此方にも見える。暖い土地に來たな、といふ感じが切に

「あゝ、姉さんはそこに居るんだね。」

「いゝえ、さうぢやありません。私のは居所だつて極まゝてゐないんですよ。風來人。」

「まさか。」

「全くですよ、氣樂者でせう?。居所もなければ、商賣もないなんて。」

「だつて、喰はせて呉れる者が無くちやあ、君。」

「はゝあ、喰ふなんて、そんな事は何んでもありやしません。奉公したつて、女一人喰ひ外す氣づかひは無いんですもの、私なんざ、何所へ行つたつて、ひとりでに人が喰はせて呉れます。氣に入つたら、一年でも半年でも奉公してゐるし、飽きたらずんく好きな所へ行つて了ふし、生れてからまだ喰はせて貰ふ苦勞なんかした事はありません。」

言ひ放つて、女は體をゆつたりさせ、間近の行手に聳え立つてゐる柏峠の峯つゞきを、うつとりした眼で見てゐる。S生は

「ふむ。」

と言つた切り二人の間の會話は途ぎれて了ッた。

（三）

冷川で馬車を下りると、女は馬車賃十錢の所を二十錢銀貨一枚投げ出し、馬丁が

「姉さんどうも有りがたうございます。」

「向々ですけど、猪戸では○屋と○○が一等大きいでせう。○屋は手堅い家ですから東京の官員さんなんか、よく泊りますよ。まあ○屋と、それから玖須美で○○○が一等でせうね、○○○は○屋に比べると派出な方です、割に経済に行くのは玖須美の△△や□□□でせう。△△は商人客が重ですし、□□□には書生さんがよく來ます。五十錢位で行けませう？△館や△△△はかゝりは大きいけれど、淋れてゐますから、お止しなさいまし。」

いかにも直截な物の言ひかたが、今までの番頭や馬丁の狡猾な逃言葉に比べて痛快で、S生には、うれしかツた。

「さうかね、何うも有りがたう。それでよく分かつた。一體姉さんは大變精しいやうだが伊東の人かね。」

「いゝえ。」

「ぢや伊東に居たことがあるのだらう。」

「えゝ、居ました。」

「商賣は何です。」

「私のですか。」

「えゝ。」

「何だか分かりません。商賣なんかありやしません。私の家は土地でやつぱり宿屋をしてゐるんですけれど、そりやもう、木賃宿のやうなものです。」

「土地といふと。」

「伊東から少し行つた所ですよ。」

てゐると、十間ばかりも駈け出した頃、跡から、一人の女が走せて來た。

「馬車屋さん、乘せてお呉れ。」

馬車が止まると、息をはづませて飛び乘つた、馬丁は女に一瞥を呉れたまゝ、また馬に鞭をあてた。

女はS生の直ぐ向うの所へ、臆する色もなく投げるやうにして腰を下した。狹苦しい乘合馬車の事だから、少し搖れると、膝と膝とはすぐぶッつかる。けれども女は平氣である。二十にはまだなつて居ない、引つ詰めた銀杏返に結つて、紡績飛白の羽織を着て、紫色の肩かけを寒さうに顎まで卷いてゐる。頭に差した堆朱まがひの護謨櫛の峯が一點の色彩になつて、人の目を惹いた。赤く艶を持つた丈夫さうな血色が、南海岸の者といふ事を語つてゐる。

S生は女の大膽な態度に興味を持つて話の口を切つて見た。

「姉さんは伊東へ行くのかね。」

「えゝ、伊東へ行きます、旦那もさうですか?。」

「えゝ、伊東へ行つて見やうと思ふが、此の先の峠は、あるいて越した方がいゝといふがさうかねえ。」

「さうですよ、馬車ですと新道を廻りますから、大變です。峠つて、何でもありやしません。人足を賴んで其の荷物は擔がせてお越しなさい。」

「人足はすぐあるかねえ。」

「えゝえ、馬車の止まる所でね、茶屋がありますから、そこでさう言へば雇つて呉れます。」

「伊東では宿屋は何所が一等いゝかねえ。」

「外に何んな家がいゝかね。」

「大抵同じものさね。」

「○屋△館なんてのは、何うだらう。」

「いゝ宿屋ですよ。」

「東京邊から來るお客が一番多く行くのは、何處らだね。」

「みんな行きますよ。」

「冷川から伊東まで人足賃は幾らの極りかねえ。」

馬丁は聞えない振をしてゐる。S生は

「五十錢も取るかね。」

「さう、幾ら位取るかね。」

「君なんか知つて居さうなものだね。」

「荷物の具合で違ひまさあ。」

此の不得要領な問答で、S生は暫く忘れてゐた宿の番頭の事を復た想ひ出した。聲だけで笑つてゐる、あの不愉快な顔が眼先に浮ぶ、そして、此の人達が利益の相互保護の必要に教へられて、他の事をはつきり言ふのを避けるやうになつた道行を考へた。

乘合の小僧が降りてから、冷川まであと一里許りは、いよ〳〵S生一人になつた。併し寒さは少し薄らいで來た。と思つ

（三）

大仁から冷川まで三里あまりの間、乘合馬車は冬の枯山を兩側に見て、不揃の路を不揃の足取で、駈けたり休んだりして行く。日蔭の水田には、古株の腐つたのが、みじめに凍てついてゐて、日あたりのよい路傍の百姓家では、緣先に筵を敷いて、水車からでも搗き上げて來たらしい糠まびれの米を擴げてゐた。

馬車に張つてある、大仁組と染ぬいた淺黃の幕が、寒風に煽られて音を立ると、馬丁が吹す惡煙草の香と、汗ばんだ馬の臭氣とが一緖になつて吹きつけて來る。乘合は、中途の立場まで十五六の小僧一人きりであつた。小僧は、小學校を卒へてから、家でぶら〳〵遊んでゐるとでもいふ風體で、飛白の袷羽織の古びたのを、くるりと捲つて、頭から被り、眼ばかり出して小さくなつて顫へてゐた。

馬丁は、道で人を追ひ越すたびに聲をかけて、

「負けとくから乘つて行かねえか。」

と勸めるが、誰れも乘らうと言ふものが無い。人里にはいると、あの、神經を突き拔くやうな喇叭を、プリミチーヴな節で吹き立てる。併し誰も出て來る者がない。斯うして、荒涼たる冬の村を拔け田を拔けして、馬車は何時果てるとも知らぬ路を駈けて行く。餘りの退屈さに、S生は馬丁に話しかけて、又伊東の事を聞き始めた。

「伊東の〇〇といふのは善い宿屋かね。」

「〇〇、さうさなあ、善い宿屋でせう。」

「あゝ、さうですか——併しまあ兎に角大仁まで出て見やう。伊東ではどんな家が善いかねえ。」

「さうでございますな。猪戸で○○、玖須美で△△、みんなよろしうございませう。」

「○屋といふのはどんな家です。」

「○屋もよろしうございます。」

「△館といふのは？。」

「△館もよろしうございます。」

「其のうちで一流といふのは先づどんな所です。」

「さうでございますな、手前精しくは存じませんが、今申したやうな家は、みんな似たり寄つたりでございませう。」

番頭は曖昧な事を言つて、障子をしめて立たうとする。S生は尚追かぶせて。

「大仁から伊東までの馬車賃は何のくらいですか。」

「冷川までたしか——」

言かけて躊躇してゐたが、

「三十錢位でございませう。冷川から先はおあるきになつたかが早うございますよ。お勘定は唯今持つて參ります。」

逃げるやうにして下りて行つた。知つて居る癖に、何ぜあゝ、はき〳〵と物を言ふことを避けるのだらうと、S生は番頭のするいのが癪に障つてならなかつた。

Ｓ生は、暖な南日の温泉場を想像して來た當が外れて、落ちつかない心持になつた、此所はやはり夏場所だ、冬こゝへ來たのは土地の選擇を誤つたものである。のみならず、宿屋の選擇も悪かつたやうだ。來て見ればもつと向のいゝ家などもある。それから此の宿の番頭の樣子がいかにも不愉快である。どうせ斯ういふ種類の職業をしてゐるものに、春風の吹くやうな人間は居ないに極まつてゐるが、それにしても、あの番頭とは餘りに性が合はな過ぎる。

斯んな事を考へ出すと、急に此の土地がいやになつて、Ｓ生は其の日すぐに海岸の伊東へ轉ずることにした。

手を叩いて番頭を呼んで、

「も少し居るつもりだつたが、急に伊東へ行つて見たくなつたから、勘定をして下さい、そして大仁まで車を一臺呼んで下さい。是からすぐ立ちたいから。」

言つて番頭の顏を見ると、番頭は見る〳〵顏の表情をかへて、今までの世辭笑を引つこめてしまつた。情味の枯れ切つた眼を險しくして。

「手前どもでは、暫く御逗留のことゝ伺つて居りましたが、それは何うも急なお思ひ立ちで、へえ〳〵、伊東と申しましても、隨分と風のひどい所でございましてな、いや何ういたしまして……」

Ｓ生はいやな顏だと思ふと、たまらなくいやな心持になつて、默つて了つた。番頭は、でも段々顏色を繕つて行くらしく、手を揉みながら、

「それでは大仁(おほひと)から馬車でいらつしやいますか。車なら大仁までいらつしやらずに、すぐそこの渡しから突つ切りますと近うございます。」

（一）

S生が修善寺に出かけたのは、十二月中旬であつた。着いた日にすぐ土地の案内記を買つて、志してゐた古跡などを一巡し、頼家の横死、辻姫の遁れ、不越の坂といふやうなローマンスを頭の中に描きながら夕暮に宿に歸つた。宿は桂川に面してゐて、湯殿も綺麗である。瀬戸で疊んだ湯船には、澄み切つた温泉が溢れてゐる。心持熱い温度の中に、疲れた體を浸して居ると、温泉特有の湯の香が微かに鼻を襲うて、ついうと／＼と眠い氣持になる。

晩食の膳も、歯切のいゝ刺身や、椎茸の香の高い椀で、可なり深い食慾を刺戟した。

寢床に這入つてからも、しばらくは今日一日の事などを想ひ返して、別に何事もなかつたが、段々あたりが靜まるにつれて、すぐ枕の下を流れる桂川の瀬の音が耳につき初めた。するとそれが後には暴風雨にでも襲はれて居る樣で、折角治まりかけてゐた神經がまた興奮して來た。S生はとう／＼夜の明ける迄一睡もし得なかつた。

翌朝は頭がしびれたやうになつて、遲くまで床を離れるのが懶かつた。でもやつと起き上がつて、一風呂あびて見たが氣分はまだなほらない。色々と不愉快な事ばかり想ひ出しながら、朝飯を濟ませて、北向の二階の縁に懷手をして立つてゐると、後を立て切つた山と山との峡から、一筋の朝日が、どす黒い川の片隅に差し込んで、そこだけ眩く光つて見える。寒鴉が五六羽そこへ當つて來た、皆な寒さうである。案内記に擂研の底のやうな處と書いてあるが、よく此の土地の形勢を言ひ現はしてゐる。日陰の谷間で、町全體が暗い、そこへ怨ろしく強い霜が降りて、桂川にかゝつた板橋が白粉で塗つたやうに白く、大湯の湯氣が夥しく其の上に立ち淀んでゐる。底冷のする處だ。

柏峠

た千代子は、

「あゝ活きかへつたやうだ。」

とつぶやいて、ほろ〳〵と涙をおとした。

甲信の山あひでは、斯んな事が人々の噂の舌を動かし、想像の胸を躍らせて、其の靜かな空氣を騷がせて居る間、大原均一は、家出した妻の手紙を見て、一時は悄然として首を垂れてゐたが、やがて振り上げた顏には我慢の色を漲らして、にやりと淋しげに笑つた。そしてまたいつものやうに車を命じた。

之候。あなたさまの御親切はよく〳〵承知いたし居り候。たゞあなたさまには立身といふ思ひ者がつき纏ひ居り、わたくしはそれが嫉く、それに苦しめられてお別れ申事に思ひ定め申候。あなたさまが立身なさるゝにつれ、わたくしは自分の田舎育ちの身がつらく、だん〳〵肩身狭く相成り申候。上部ばかりを人並に着飾りて、當世の貴婦人がたに立ち交はり行き候事、わたくしには何ぼうにも辛く、集會などにまゐり候たびに、傍のお世辭までがわたくしを嘲笑ひ居るとしか思はれず候。それがためおのづとあなたさまの面皮を缺かすやうなことも起こり、まことに相すみ申さず候。さりとて此の年になりて、人樣のやうに學校ばいりなどは、迚もわたくしの性分にては出來ず候。もと〳〵わたくしのやうな者があなたさまと一緒になり候こと、わたくしの過ちに候へば、此の上は、自分で身を引き、元の山住ひに歸りて、一生を野生ひのまゝに暮したく候。今のあなたの御身分にては、どのやうな善い所からでも緣談これあるべく候へば、跡には御身分に似合ふやうな奧さまを御むかへなされて、思ひのまゝに立身なされ候やう念じ上げ候。千代より。」

といふ一封を殘して、千代子が親里へ歸つた日は、ちやうど郷次が荒川筋で水死したといふ噂の村中に姦ましい最中であつた。併し千代子はそれを聞いて別に驚きもしなかつた。

久しぶりで懐かしい山の懐に出て見れば、今さらのやうに新しい景色が目につく。どちらを向いても大浪の天を限るやうに聳え立つた山脈が牸牛の背のやうに冬の瘦を見せて長々と其の脚を淡い日向に投げ出してゐる。其の中にほつりと動いてゐるものは自分の影ばかりで、傷ましい淋しい中の平和さと言つたら、譬へやうのない氣持である。はつきりと澄み切つた空には、山の嶺が色々の形に幅帰を染め出して、其の線の曲り具合の大膽なこと、とても人間の小細工で眞似の出來るものではない。あたりの空氣は淸冽な水のやうに體に透き通つて、微な土の香ひがさま〴〵の事を想ひ出させる。うつとりしてゐる

てゐるかといふ事を、ちつとも考へて下さらない……。」

「お前にどんな辛い思ひをさせた？　此の大原均一は三十幾つになるまで妾狂ひ一つした事はないよ。」

「それは分かつてますさ。そんな事をわたし言てつやしない。」

「ぢやあ何だ？　わたしの身分には不相應なまでに、金もかけて立派に大原夫人として交際社會に出してやる……。」

「それをあなたは有りがたい事と思つてゐらつしやるの？。」

「うれしくはないのか。」

「ほゝ、それが嬉しいやうなら、わたし何も言ひはしない。」

「お前の言ふ事は、わたしには分らない。」

大原はぷいと立つて、車を呼ばせて出て行つた。

千代子はそのまゝ柱に身をもたせ、懐手をしてじつと考へ込んだが、

「わたしとあの人の考は、同じ世界に住んでる者とは思へないほど違つてる。」

と思つた。そして生欠伸を一つした。

六

「わたくしは、逃げも隠れもいたすものには候はず、たゞ山へ歸りたき一心の我がまゝとおぼしめし下さるべく候。かしこにて命ある限りは此の身ひとりを清くすごしたき願ひに候。あなたさまを嫌ふのでもなければ、浮きたる心にはなほさら無

「夫に面皮を欠かせて、立身の邪魔をするとは、何といふ不心得な事だ。厭なら厭で、始めからさう言へばいゝぢやないか。約束をして置いて、向うではそれがためにわざ〳〵仕度までして待つて居たのを、断はりもなしに待ぼけを喰はすなんて、物を知らんにも程がある。」

「それは重々わたしが悪いのですと、さう言つてるぢやありませんか、けれども厭で仕やうが無かつたから、止したのです。わたし、もうあんなお勤めは出来なくなつたのですよ。」

「小供のやうな事を言つてるぢやないか。何だつて勤めとなりやあ厭なものさ、それを辛抱してやればこそ後に芽が吹くのだ。ぢやあお前は、わたしの身はどうなつても構はんといふのか。」

「構はないとは言ひませんが、あなただつて餘りあがき過ぎますよ。」

「何だと？　あがき過ぎると？　ぢやあお前にはわたしの出世がうれしくはないのだね？。」

「はい。」

「驚いた。」

「大臣の妻になつたからつて、それが女の仕合せとは限りませんよ。」

「うん分かつた、では何だな、わたしがお前に不親切だといふのだな、わたしは随分お前には出来るだけの事はしてゐるつもりだよ。」

「其の親切はよく分かつてます。けれども、たゞ樂に暮させて、贅澤をさせて貰ふだけの親切ならちつとも有りがたいものぢやありません。あなたはあんまり世間の方へ氣を取られ過ぎておいでなさるのです。わたしが一人でどんな辛い思ひをし

たけれど、金の融通が利くやうになると、こんどは紳士だの紳商だのつて、違つた名をつけて、違つた見えを張つて行かなくちやならない。お金が出來てまあよかつたと思へば、代議士の運動がはじまる。一萬圓のものは十萬圓にも百萬圓にも見せて、見えと機關で綱渡りをして今日が日まで送つたが、つく／″＼考へて見りや、わたし達は何のために生きてゐるんだか分らないぢやないかね。それは、大原は、あの通り野心の強い人だから、自分がすきであがいて行くのだし、小學校の校長から今の身分にまでなれば、大した立身さねえ。けれどつまらないのはわたしぢやないか。何時が果てだか知れない大原の野心に引つぱられて、一段上がればもうすぐ其の次の足場に取りかゝる、幾ら上つても／＼是でいゝといふ時はありやしない。絹の着物を着て、大きな玄關を構へて、旦那さま奧樣とあそばせごかしにされてゐれば、人は羨ましい身分だと思ふか知らないが、そんな事が本當の仕合はせでも何でもありやしない。

氣がついて見れば、わたしはつく／″＼今の身分が厭になるよ、わたしはもう疲れちやつたの、今一度生まれた山の中に歸つて、あの甘い溪の水を飲んで、青い山蔭の空氣を吸うて、身も心もさつぱりとして死にたい……わたしは、斯んな事を考へてると言つてね、若し生きてゐたら鄕次さんに言つてをしてお吳れ……。」

「分かりました、よく分かりました。それぢやあ是れがお分かれでごわすよ。」

虛無僧と千代子とは、潮合に漂うてゐた二つの浮木が、不圖流れ寄つてまたゆら／＼と分かれ行くやうに、夜の街道を北と南に別かれて了つた。

五

ね、斯うやつて打ち明け話をしたのでごわす。あゝ郷次はとう〳〵死にました。思つてならない人を思ふために、始めの二十幾年といふものを人間で育つて、それから十年は浮世離れのした氣樂な世界で過ごし、愈々死ぬために、も一度ふらりと人間に戻つて來た。斯う考へて見りやあ、郷次の一生もおもしろいぢやごわせんか。

奥さんよく聽いて下さつた。風でもおひきなさつちやあわるうごわす、さあお歸んなさい。わしも是れでお暇を申します。」

男が飄然として立ち去らうとするのを千代子は引きとめて、

「よく話してお呉れだつた。わたしや嬉しいよ。お禮をいひます。若しひよつと郷次さんがまだ死なゝいでゐるたら、せめて其の氣樂な氣違ひの世界でゞも、一度逢ひたかつたと、さう傳言してお呉れ。わたしもねえ、今ぢや、育つた山の中がしみ〴〵と戀しくなつたよ。お前さんは御存じもなからうが、ふとした意地からあゝして大原と一緒になりはなつたが、其のあくる日から、わたしはもうもとの素直な、竹のやうなお千代ではなくなつたのだよ。あれから東京へ出て、一番がけに傳手を求めてなつたのが何だとお思ひか、耶蘇教の牧師ぢやないか、わたしは牧師の妻君といふので、急に猫聲を出して讃美歌を歌ふことも習へば、教會堂の入口に立つて、刷物を配ることも覺える。日曜日に集まつて來る女學生仕立のお孃さん方と、山育ちのわたしとは、話の合はう筈がない。それを此方が物を知らないからと思つて下手に出て御機嫌を取れば、向うはお客さまか何かのつもりで、「あの大原さんのお神さんちよいと」なんて馬鹿にするぢやないか。それを大原までが、一緒になつて御機嫌を取つて行く。言ふに言へないつらい思ひをして、やつと信用もついたかと思へば、今度は社會改良とやらの演說をする樣になつて、折角急ごしらへの耶蘇教信者が、いつの間にか政治家と新聞記者の合ひの子見たいな商賣にかはつちやつて、あくる日もない思ひをして行くうちに、會社の株なんぞちよい〳〵と買ふやうになつて、内は少し樂になつ

さんの事は口にも出さなかつたさうでごわすが、あいつの氣では、名で覺えてるやうな、そんな上つゝらの思ひぢやあなかつたのでごわせうよ。あいつの胸には、其の人の正體がそつくり納めてあつた。名なんざあどうでもよかつたのでござわせう。それで、何所で貰つて來たか、古い書物を何册も持つてゐて、時々それを出して見ちやあ、何だか分らん事を口の内で言ふ。どうしたのだと聞くと、讀んでるのだといふ。今に見ろ、おれも斯うやつて、大先生になつて見せる、何だ、おれとあの大原先生とは、たゞ是れんばかしの青表紙の違ひぢやあないか、おれが今にこれを讀んでしまつたら、あとは五分々々の相撲だ。この青表紙さへなけりやあ、こつちあ八千尺の金峯山の風に育てられた、淸しい男だ、曲りくねつたあの校長先生なんぞに、ひけは取らないと、氣違ひに似合はん理窟を言つたさうでごわす。

其の氣違がどうした機か、此の頃ひよつこりと治りました。治つて見りやあ間の十年は他の世で見た夢の樣で、世間は其の頃のお下げが島田に結ふほど變つてゐても、自分だけは、一昔前がすぐ昨日のやうに思はれて、忘れた事はまるで、忘てゐるが、覺えてゐる事ははつきりと覺えてゐる。それでふつと死なうといふ氣になつたのでごわす。何ういふ譯で死にたくなつたかは、自分にも分かりませんが、大かた十年前のあの晩に、思ひせまつて死ぬと決心をしたのでごわせう。所がいよいよといふ間際に氣が狂つて、決心をほろりと忘れてしまつて、十年おもしろをかしく生き延びた。それが正氣に立ち戻つて見ると、前の決心のつゞきが直ぐそこへ繫がつて來る。前の世の因果とでもいつた風に、否應なしに心をその方へ引つ張つて行つたのでごわす。だから死ぬるときの鄕次は、誰れを怨んだといふでもない。また誰れが留めたつて留まるものでもない。油の切れた行燈のやうに、すうつと消えて行くべきに極まつてゐたのでごわす。たゞわしはねえ、親しいものゝ好みで、此の世にたつた一人のあなたに、かはいさうだと一言言つてもらつたら、死んだものも定めて浮ぶだらうと思ひまして

になつても歸つて來なさらん。さあ人を集めて村中を探がす。といつても夜の事ではあるし、誰も山の中まで踏み込んで見やうと云ひ出すものはない。その時にぜつひわしがといつて、一番に山の方へ駈けだしたものは、おとなしいで評判の鄕次でごわしたよ。日頃からあなたの好いて行きなさる方角は知つてゐるし、とう〳〵御嶽の方へ外れた溪合ひで、疲れて途方にくれてゐなさるあなたを見つけて、一里に近い山路を負つて戾つて來た。

あの晩は月夜でごわした。廻り廻つて、やつと、いつもの道の見える。あの突き出た岩の上へ來た時は、流れるやうなお月さんの光りが、煙に浸つた目下の村を撫でつけてゐる。しつとりと出た身内の汗に、冷々と夜風が吹いて、あゝいゝ氣持だと思ふと、背中に負つてる人の髮の油の香がする。其の亂れた毛筋が自分の頰まで垂れて、耳元に暖かな息のかゝるのが分ると、鄕次は總身にぶる〳〵と慄へが來ました。

あゝ奥さん、それからあとは言ひますまい。四年があひだといふもの、鄕次のたつた一つの生き甲斐は、「有りがたい」と言つて下さつたあなたの一言と、顏を合はすたび潤むあなたの眼が、何だか胸にこたへる。鄕次もしまひには、あなたを見ると、たゞ何となく淚が出るやうになりました。

けれども一方は村長さんの一人娘で、一方は其の日稼ぎの日傭取りであつて見りやあ、何うすることも出來ない。心を割つて見せたら、何所の何方が來たつて負けるものぢやごわせんが、身分といふやつが憎い邪魔でごわした。その中に四年立ちました。するとある朝、鄕次は耳元で早鐘を撞き出されたやうな噂を聞いた。お千代さんは、やり手といふ評判の、あの小學校の校長さんと夫婦になつて、東京へ出なさるさうだ。斯う聞いた時の鄕次の胸は何んなでごわしたらう?。

村長さんの宅で祝言の晩が、鄕次の氣違ひになつた晩でごわした。氣違になつてからの鄕次は、名でも忘れたか、お千代

す。わかりましたか。」

千代子が驚いてだまつてゐるのを見て、虚無僧は夕靄に包まれた門の潜りから、跡をも振向かないで出て行つた。と思ふと、榛の木林の方へ、町はづれの街道を淋しさうにぼろろと吹いて行く尺八の音が、風につれて聞こえて來た。耳を傾けて聽いてゐた千代子は、すつと緣側に出て、庭下駄をつゝかけて笛の音の跡を追うた。

四

街道を右によけた雜木林の暗い中に、女は栗の大木を背にして、男はそれに向かつて立つてゐる。まばらになつた枯葉の間からは、冷く澄んだ空が透けて、吹き曝らされれ幾點かの星影が見える。暮れるにつれて風がぱたりと休み、あたりは一しほ森として、朽葉の香ひが鼻を打つて來る。

「十年のあひだ鄕次がどんな事をしてゐたか、あなたは知んなさるまい。あれが氣の觸れた始めが、ちやうど今夜のやうな晩でごわした。からつと晴れた星空に、風が馬鹿に吹きやあがる。あなたの家の横手の往來は、土が灰色に乾からびて、折をり枯れつ葉ががら〳〵と捲くれて通る。其の中を夜中被り物をしないで行つたり來たりして、しまひには的もなく驅け廻つてゐましたが、夜が明けると、姿が見えなくなつた。それから後の鄕次は、もう舊の鄕次ぢやなかつたのでごわすよ。」

言つて虛無僧は肩をふるはせたが、また言葉をつゞける。

「それも其の筈ぢやあごわせんか。たしかあなたは十七の時、村長さんの一人娘が山ばいりが好きで、人を連れないで、男のやうに峯から峯へと驅け廻はんなさる。其のうちにとう〳〵騷ぎが起こつて、あれは九月の二十日の晩でごわした。晩飯

頻りに其の方を眺めて、聞き耳を立てゝゐた千代子は、次第に面を俯せて、山茶花がたゞ一輪赤く咲いてゐるあたりに眼を据ゑた。そしてじつと見つめてゐると、青黑い葉の中に、ほつちりと赤い其の花が、激しい視線の波動にでも感じたか、ぶる〳〵と搖れるやうで今にも散りさうに思はれた。千代子は、はつと思つて眉を動かすと、何所からともなく「郷次はとうとう死んだ、郷次はとう〳〵死んだ」といふ濁聲が風の唸り聲にまじつて聞こえた。途端に木の蔭からとつゝ身を見はした人影がある。

見れば先程玄關前で尺八を吹かせて、帶の間の銀貨入れから、ありたけの五十錢銀貨二十錢銀貨を摑み出してやつた、深編笠を被つた物貰ひである。千代子はぎよつとして體を引つこませると、

「奥さんお待ちなさい。郷次は疾くの昔に、氣違になつて死んでしまひました。」

といふ言葉が夕ぐれの空氣にほかされて沈んで聞こえる。千代子は氣を取り直して、

「そして、お前さんは一體誰れなの？」

「誰れでも構ひますまい。一々あなたの胸に讀めることをいふ虛無僧だと思ひなさりやあ、それで澤山でごわせう。郷次といふ名も、氣違ひになつた事も、死んだ事もみんな知つてる乞食でごわす。乞食ぢやあつても、言ふ事はみんな本當でごわすよ。こんな胡亂な裝はしてゐても、水晶の出る土地に生れたわし達だ、僞つた事はいひません。ゆすりにでも來たかと思ひなさるか知らんが、そんな料簡は微塵もない。わしが斯うして來たのは、たつた一言あなたに言傳をいはうと思つたからでごわすよ。郷次は十年の間氣違ひになつて、そしてそれが直ると、ふつと死ぬる氣になつた。其の死ぬる間際まで、唯の一言もあなたを怨むとは言はなかつた。郷次は默つて死んでしまひましたよ。奥さん、わしの用といふのはそれだけでごわ

「香さんでも隅田川さんでもいゝや、ねお辰、どうせあんな、人間の袋に空世辭を詰めたやうなやつは、何所へでも据ゑて置けばぴよこ〳〵お辭儀をするわね。あんなものに極まつた名前なんかいりやあしないや。わたし、あんな男を見ると、身が慄へるよ。今は會へませんつて、返しておやり。」

「へ」

と言つて下女は立つた。

「車屋もおかへし、今夜はやめたからいらないつて。」

「でも奥さま、旦那さまが……。」

「旦那さまがどういつたつていゝやぢないか、わたしの乘る車だもの。」

「旦那さまがお待ちでございませうから……。」

「くどいねえ。」

つんとして女中の方へ背を向けて、窓の障子を開けた。山茶花の咲いてゐる肱掛窓に、面長な白い顏の出たのは此の時である。

三

どうつといふ音が、向うの丘の上から落ちて來る。見上げると、夕まぐれの薄明るい空に、つきぬけた松の大木が、怪物の蹲まつたやうにむく〳〵と黑い影を起こして、風に唸つてゐるのである。

「では、車はどういたしませう？。それにもうそろ〳〵お仕度を遊ばさないと、加島さまへお約束の時間が遲くなりはいたしませんか？」

加島といふのは、某政黨の領袖で、今回の選擧の後援となつて大原を引き立てゝゐる人である。

「わたし、そんな話を聞くとぞつとするよ。白々しいお追從を言つて御機嫌を取りに人の家へ行くことなんか、わたし、眞實いやになつた。あゝ、いや〳〵。今までゞもう澤山。」

「それはもう、おつらい事でございませう。われ〳〵と違ひまして、上つがたには上つがたの御心配がございますからねえ。けれども、旦那さまの御出世遊ばすことでございますから、先がお樂しみでございますわ。それをおぼしめしてねえ、どうか今晩は御仕度あそばして……。」

「ほゝ、お前は大層わたしたちを上つがた扱ひにおしだことね。わたしやその上つがたが大きらひ。」

「ほゝゝ奥様、御冗談をおつしやいます。」

といふとき、新參の下女がまた一人出て來て、近ごろやつと敎へられたらしく、そこへぺたりと座つたが、ぞんざいな下附で、

「奥さまあの、會社の隅田川さんが見えやして、お目にかゝりたいと申されやす。」

年增の女中は、其のあとを引き取つて、

「お辰どん、隅田川さんなんて、そんなお名前の方はない筈だよ。隅田香さんとおつしやるんでせう？」

千代子は言葉を遮つて、

と言つて、圓火屋の火を細めたランプを、座敷の眞中に運んで、捲金を廻はすと、ぱつと差す明が、埋高いほど飾りをつけたニッケルの大臺に輝いてきらくと眩しいやうである。ちよつと此方を振り向いた千代子は、うるさゝうに顔を背けて、

「あちらへ持つて行つてお呉れ。玆へは燈はいらないよ。あゝもう、そのぎらくする仰山らしいランプなんか見ると、わたし、頭がくらくするよ。早く持つて行つてお呉れつてばね。」

仲働は變な顔をして、命令どほりにした。座敷はまた舊の薄暗さにかへつた。すると今度は年增の女中が入り交つて來て、

「あの、車屋がまゐりまして、奥樣の今晩お召になりますお車は、どういたしませうか、若しあの、旦那さまのお車と先方で御一緒でございます樣なら、やつぱり今までの對のにいたしませうし、それともお別々でございますなら、昨日出來てまゐりましたばかりの、新調のがございますから、其の方にいたしませうか、どちらにいたしたものでございませうか、奥樣に伺つて呉れと、さう申すのでございますよ。奥さまどちらに遊ばしたものでございませう。いづれお歸りは旦那さまと御一緒でございませうから、やつぱりあれでございませうね……。」

「うるさいね、車なんかどんなでもいゝと、さう言つておやり。」

「は、ではよろしいやうに取りはからへとさう申しつけるのでございますか？」

「車なんぞには、もうく乘りたくないよ。」

「まあ奥さま、どう遊ばしたのでございますか？、お加減でも惡いのぢやございませんか？」

「どこも惡かない。」

一

甲斐と信濃の山あひで育つた彼女には、金峯山から吹いて來る風の遠鳴りが、胎内にゐた命の初めから二十で嫁入りする夕まで、魂の窓の薄ら明りにしみ込んでゐる。東京に住んでからもう十年であるが、夜半に雨戸打つ風の音を聞いても、感じはすぐ胸に通じて、遠いむかしの響を傳へる「わたしが死んだら魂は蛇度山へ還るだらう」と、いつも自分で言つてゐた。それは今度某選擧區の補缺選擧に代議士の候補者として立つた大原均一の妻千代子である。

其の山あひを想はせる、木枯の淋しい風が今年も赤坂あたりの高臺を吹き廻る頃となつた。

今朝の夜明を合圖に吹き出した東北の風は、後の林から榛や栗の落葉を捲いて、灰色に乾いた玄關先へ打ちつける。そこに見事に苅り込んだ九尺物の楡葉の木の間を拔ければ、南向の裏庭つゞきで、可なり廣い庭も大かたは冬枯の色に變つてゐる。四つ目垣に添へて植えた一本の山茶花が黄昏の薄蒼い窓の障子に對して紅く咲いてゐる。

其の肱掛窓の障子がすうつと開いて、面長の白い顔が現れた。最早はつきりとは見えないが、黒い眼の際立つて大きいのだけはよく分かる。何處ともなく颯つといふ風の音がすると、から〳〵と落葉が地べたを走る、身内がぞつと寒い。

二

障子の明く少し前の事であつた。千代子は窓の柱に身をもたせかけて、首を垂れたまゝじつと考へこんでゐると、仲働の女が仕切の襖をあけ、次の間に手をつかへて、

山戀ひ

それもあだなりき。夫死してよりは、想ひ出の數つきず、とりわけて、熱海の船に昔の事の忘られねば、よし、笑ふ人のあらばあれ、必ず一度は、今宵の身をと願ひしに、小田原へいさゝかの便りが機となりて、日頃の念ひ果たしたり。今宵こそは、泣くもわれからの望みなれば、見ゆるしたまへ。

さるにても、同じ月夜の船に、同じ笛さへ聞きながら、變りはてし世のさまや。昔は斯くはあらざりき。船も樂し、笛も樂しと見しにこそ。しばし仮りしがまゝを現の想ひに耽らんとは願ひけれ。許させたまへ、昔戀し、昔なつかし。亡き夫の、こゝにばかりは、若しや妾を待ちておはすと、狂はしきたのみに、むづかる兒をさへ父に逢はすと言ひ慰めて、この船には乘りつ。愚かしとは知れど、今もなほ、入り來る人の氣はひするたび〳〵、それかと顏の見らるゝも、うとましや。そこにおはする方の、無禮とや罵りたまはん、眼鏡かけたまへるが、亡き夫に似たりと見るにつけ、眞のそれに變はりもやしたまふと、見かへるたび、心おどろかるゝも、羞かし。今宵は泣くべきわが身、たゞ此のまゝに見のがしたまへや。」

顏を掩ひてさめ〴〵と泣く。われも面を擧けざりき。笛は朗々として、ます〳〵月に冴えたり。一座愴然として、聲無し。笛はいかにと見れば、あゝ彼れもまた凡夫なりしか。はふり落つる涙拂ひもあへず。

「わが涙こそ口惜しけれ。」喝し去りて、口を結び眼を閉ぢ、再び說かず。夜や更けし。笛の音一しきり、風にもまれて、續々斷えなんとす。

女は飽くまで泣きぬ。笛は嫣然たり。われ獨り思ふ、紅涙何の日か乾かん。千部の經卷も、畢竟一管の笛に若かざる也。

きを、ひたと抱ける兒の頰につけたり。抑へ得で啜り泣くはこの女なりき。斯くと見しわれも、何とは知らず、潸然として淚下りぬ。面を背けて船外を望めば、長浪短波の月に馳せ交ふさま、眼もあやに、今を命と吹きすさむ笛の音は、風にしたがッて虛空に舞ふとぞおぼえし。睡れりと見し僧は、眼を開きて凝然たり。何をか言はんとするに、女は羞ぢて俯きぬ。

「婦人の泣きたまふは如何に。彼の笛の音を何とか聞かれし。われらも昔ならば、斯かる夜を、泣かで明かすべき者ならねど、今は見らるゝ如き心安の身、一念の外、我執淺ければ、滯ることも無し。總じてわれらの覺悟を言はゞ、嬉しきものを嬉しと見、悲しき聲を悲しとは聞けど、其は、澄みたる水に影のうつるが如し。嬉しと見るの笑みも、頰邊三寸の際をば離れず。悲しと見るの淚も、睫頭一滴の露には過ぎじ。われに躍り狂ふべき大歡喜なければ、熱き淚を澆ぐべき大悲嘆もあらず。五蘊すべて如是の法、心やすきを樂しといはゞ、斯からん世こそ、樂しきの限りなれ。所詮は我執一つのみ。御身の悲しと見らるゝものを、仔細なくば、われらに示したまはずや。幼きを携へて、ひとり船路に惱みたまふは、如何なる身の上ならん。」

僧は問ひ了りて、復た凝然たり。婦人は答へんとして、幾たびかためらひぬ。

「情ある言葉を、餘所には見ねど、ことさらに語るべき身の上ならず。亡き夫のわすれがたみ、たゞ此の兒を哀れと見たまへや。三とせ前、はじめて夫に嫁ぎし冬は、許させたまへ、まことの樂しき一月を、熱海の夢と過ごせしが、人車とやらんの煩はしさに、家路は海をこそと、忘れもせず、同じき明月の夜、船もこの船にて京に歸りぬ。其の夜は、この兒未だあらざりき。想ひ出づるは、其の船旅よ。同じすさびの笛の音に、世はたゞわれらが爲めの歌舞の場、しみ〴〵歡樂の數を祕めしは、このほの暗き室なりしを。

今朝も胸のみ騒がしう、明方の夢驚けば、あはれ木枯の戸を打つ音よ。一夜がほどに書樓の前の梧の葉、見る目もいたましく傷つきて、翠烟の色、あさましともあさまし。げにこそ、秋は老いぬれ。身世われに於いて、安しともおぼえず。情趣日に疎うして、務めは念願の縛とのみ。醍醐の一味、掬ぶべきえにしだに無し。噫、われも老いんとするか。若かんや、おりて累ひ淡き地に、病躯の眠り安く、吾が生を思ふことの更に／＼眞ならんには。

月の某日、わが出で立つかたは熱海と定めたれど、仔細ありて、靈岸島より船に搭じぬ。奇縁こゝに、一夜を月と笛とに會して、ゆくりなくも、この一篇を了し得たり。

船の東京灣を離るゝ頃とおぼえぬ。乗客多からざる室の中、早くも睡り熟して僵るゝもの、船に中りて取り亂すもの、凡べて五七人がほかには、開き船窓を背にして默然たる一人の雲水あり。雲水の人はこれ枯れたる木、相對して、殘んの花の、五五をば未だ越ゆまじき一人の女あり。腕に眠れる二つばかりなる兒の、寢顏輝かしきは、三五の月の申し子か。われを合はせて十人には足らぬ船旅、凄じき機關の音に、寒き一夜を、船僮が分かつ茶の冷ゆるにまかせしことの、今はなか／＼に懷かしうぞおぼゆる。

潮靜かにして、船の脚平かに、船室の燈火心細う搖れて、窓に倚れる僧の、居ながら眠りに入らんとするとき、然なり、僧も居ながら眠ると見えて、一座やう／＼しめやかなりし、其の時よ、忽然として、甲板はるかに、笛の音こそ起こりたれ。聞くともなく耳そばだつれば、心情の呂律のしらべや。戀もあり、怨もあり。戀には高く、雲も裂けよと吹きすませど、怨にはほろ／＼と咽ぶ聲のみ細り行く。あゝ吹くもの意ありや。此の夜、滿船の人、誰れか肅然として愁へざらん。ふと眼を擧ぐれば、傍らに嗚咽の聲あり。僧が項のあたりよりさし入る月、かすかに、前なる女の額を射て、みだれ毛かゝる頰の蒼

紅涙賦

關谷より山にかゝりしは、夜半ともおぼしく、一坂上りきりて、ふりかへり見れば、今通りぬけし平原一帶、月光に浸されて、道も、川も、灌木の林も、たゞ一樣にうち煙れるの中に、月痕低く、浮ぶが如く見ゆ。行く手は、しばしがほど、木深き嶮道に曲り入りて、路上に大木枝を交へ、月影ちぎれ〳〵に、紋を散らせし如く、漏れ來る。遙の谷底に流れの音聞きし邊よりは、忽ちにして脚下、一隈暗き所に遠雷起り、忽ちにして頭上懸崖の間に白玉を迸らし、絕えず送り迎ふる小瀑に靴の音も奪はれつゝ、倉敷巡査は、大網も過ぎて、福渡戸の手前白雲洞の隧道を、今しも通りぬけぬ。別に夜道を厭ふにもあらず、景色を愛づるにもあらず、規律正しき大股の足取例の如く、たゞ眼のみは下に伏せて、俯き勝に見えたり。

と思ふと、突然行く手の曲り角に黑き影さして、男女二人の旅姿あらはれたり。此方が、ふと首を上ぐるとき、彼方は女の聲として、

「あれッ。」

と低き調子に叫びしまゝ、二人とも、一時に魂消えし如く、立ち止まりしが、男は女の手を捉りて、大膽につか〳〵と巡査の傍をすれちがひたり。月あかりにちらと見し顏は、正しくおさよと來栖。おのれ來栖、と倉敷はおぼえず振りかへりて一歩戾せしが、忽ち足を止めて、生えぬきしごとく突ッ立ち、二人の後姿を見送りたり。ありと見し二つの影は、早くも隧道の黑きが中に消えぬ。倉敷巡査は動かず。洞の中には小走りに走る音かすかに響きて、それも消ゆれば、ほッつりと、月下に取り殘されて、一個可憐の巡査が、うなだれし首をめぐらして、己がかげを友に、ぽつり〳〵と古町の方に辿るを見るのみ。

讀者は今も彼の地に姿勢正しく態度嚴肅なる一人の巡査が、をり〳〵浴場の前を過ぎるを見受くべし。

といひつゞくるとき、鼓のかなたより、噂の聲として、おさよ、おさよと呼びたつれば、

「うるさいね、今行きますよ。」

「話は後にして、早く行ッて來るがいゝ。」

と倉敷より促して、一まづおさよを歸し、自分は河原をぶらつきながら、夜更くるまで待ちゐしが、なにゆゑか女は二たび來たらざりし。

草原に蟲の音いとゞ冴ゆるころ、世間は夢の眞中と見ゆるに、塚田茶屋の裏には、三尺四方ばかりの明り窓一つ、刳りぬきしやうに、赤く燈火を漏して、それに男女の差し向ふ影繪うつれり。

それとも知らずか、外には先程より淺黄ほき浴衣に麻裏草履をはきし一人の男が、此の家の前を行きつ戻りつ、内の容子に氣をあせるさま、倉敷とおぼし。

（下）

翌朝太田原の本署より、直ぐ來よとの電報に接し、倉敷巡査は、急行して山を下りしが、用務といふは、このたび東京より、五人組の大詐欺犯の一人鹽原方面へ潛みし形迹あれば、刑事を派すべし、注意を添へられたしとの、來電あり、人相はしか〳〵との話、この際十分の機敏を以て、東京より刑事の來着するに先だち、倉敷の働にて當署の功とする工風せよとの署長が懇切なる諭達なりき。さてこそと思ひあたる節ある倉敷巡査は、勇みすゝみて歸路につくべしと見えしに、何かすまぬ面もちにて、夜の八時過ぐる頃、やうやく太田原を引きかへしぬ。

「犯罪人をつかまへるには、それ〴〵手續のいるものだから、さうむやみと掴まへるわけには行かないが。」
「手續ッて、どんな事？。」
「何か犯罪人だといふ證據とか、本署から廻はッて來る令狀とか、掴まへるだけの理由がなければ、掴まへることは出來ない。」
「さう。」
とばかり、之れもさし俯きしが、また顔をあげ、
「倉敷さん、あなたは、あたしとあの方と何うかあるとでも思ッてらしやッて？。」
「ゑ。」
と男はおぼえず女の顔を見つめぬ。月に蒼きほど白き頰に、一葉返の鬢のほつれ二筋三筋。女は眩げに横を向きながら、
「あたしと栗栖さんと何うかあるとでも思ッてらッしやるのね。」
倉敷はしばし答にゆきつまり、
「なに決してさういふわけではないが。」
「ようござんす、何とでも思ッてゐらッしやい。」
ちよッと鬱ぐ氣合なりしが氣をかへて、晴れやかに笑ひ、
「何と思ッたッて構はない。それよかあたしャー、あなたにお願があッてよ。あたしね、何も栗栖さんを庇ふわけはないんですけども………。」

おさよは耳傾けて聽きゐるのみ、一語をも發せず。

「併し必ず惡く思ッて下さるなよ。わたしの言ふことが氣に入らなければ、それはどうとも、お前さん等の自由にするがいい、決してわたしが强ゐて何うといふのでもなし、また言ふ譯もないのだから。お前さん等がわたしのいふことを採用して吳れないからといッて、すぐ面あてがましい事をするといふやうな、それほど卑怯なわたしではない。わたしは何所までも蔭から保護せられるだけは保護してあげる。勿論職務を曲げてもといふのではないが……、保護はわれ〳〵の職務の精神だから、わたしはたゞ其の職務に對して保護してあげる。決して私の義理や情でいふのでもなければ、それを餌に、人によく思はれやうの何うして貰はうのといふのではない。」

自分に言ひ譯しながら、倉敷は悄然としてさしうつぶきぬ。

「ぢや栗柄さんは泥棒なのですか。」

「泥棒といふのぢやーない。それはさよさんなぞには分かるまいが、六七年も斯うして罪人ばかり扱ひつけてゐれば、自然、人の擧動で、この男は何ういふ素性のものだといふことが、一目に分かるやうになる。詐欺だか泥棒だか、それは分からないにしても、わたしの此の眼では、あの男はたしかに犯罪を持ッてるものに違ひない。たとひ此所でつかまらないまでも、今に何所かの警察の厄介になる男だ。わたしの怪しいといふのは、たゞそれだけな事さ。」

倉敷はやゝ昂然たる樣子にて顏を上げしが、

「ぢや、あなた栗柄さんを掴まへるつもり？。」

おさよは男の顏を見あげたり。

中

塚田茶屋のすこし手前、往來よりは一叢の藪を隔てゝ、小半町も下り立ちし河原の巖に浴衣姿の男女が腰かけたる影あり、月は廣き淺瀨に、一面の玉を碎き、ところ〴〵小石の露れたるあたりには、きョろ〳〵と河鹿の鳴くも聞こゆ。

「お話ッて、何ですか。早く聞かして頂戴。あたしこんな所に居るのは、何だか氣味が惡いわ。あちらの方へ行ッて涼みませうよ。ね、倉敷さん。」

「話といッて、こんな事をわたしの口から漏らしてはならないのだが、あの栗栖ね、あの男は決して眞ッ直な人間ではないといふ、わたしの見込だ。何時どんな事があるかも知れないから、氣をつけてつき合はぬと、飛んだ災難に罹るだらうと思ふがね。」

言ッて女の顏を見れば、女は眼を睜りゐたり。

「併しさよさんは、大分あの男と親しいやうだから………。」

といひかけし倉敷の顏にはさッと血の上るが見ゆ。

「わたしが斯んな事をいふと、をかしく聞くかも知れないが、わたしは決して………、わたしは決して人の邪魔をしやうなんといふ考へは持たない。無論わたしが此所で、はッきりと、あの男を犯罪人だと言ひ切ることの出來るではなし、わたしは唯わたしの職務だけを守ッてゐればいゝやうなものゝ、何だか、お前さん等をあんな者の持て遊びにさすのが、可愛さうに思はれてならないから、斯うやッて、變におもはれるのも構はず、話をするのだ。」

「おッ母ア、早速だが之れをまた冷して置いて貰うぜ。」
嚊は、巡査の事など忘れし如く、飛んで出で、
「おや栗柄様、入らッしやいまし。ちやうど今お噂を申してゐる所で。」
といひかけ、心づきて倉敷の方をふり向き、口を噤めば、栗柄もちらりと同じ方を見ながら、指先にて耳を搔くまねし、
「道理で痒いと思ッた。さよさんは居ないやうぢやないか。何所か行きましたか。」
「ゐるのでござゐますよ。何所かまた隱れんぼをして。しやうがございませんね。ちッと叱ッてやッて下さいまし。」
「どれ、探してやらう。」
と栗柄は裏の方へ立ち出でしが、間もなく彼方にて、おさよがキャッ／＼と逃げまはる聲、わざと捉らへられてふざけ合ふ聲聞こえ、やがて二人とも出で來し時は、倉敷巡査は、立ちあがりて茶代を投げ出し、出で行かんとするところなりき。
栗柄は連の男の肩に手をかけ、
「どうだ。是れから靈の湯へ一浴び浴びて來やうぢやないか。さよさん、お前も一緒に行け。」
おさよはすまして、
「いやですよ、あなた行ッてらッしやい。」
巡査の方へはわざと笑顔をつくりて、
「もうお立ち？。さやうなら、お靜にいらッしやい。」
二三間も行くあとに、どッと笑ふ聲聞こえ、中におさよのまで交りしやうにおぼえて、倉敷の胸は煮えかへるおもひ。

いそ節を唄ひながら、歸り來る人數を見むかへゐたるが、客には女もまじりて、倉敷とおさよとの顏を見くらべては、分からぬことを言ひて笑ひどよめきつゝ、素通りに行き過ぎたり。

跡に巡査が何となく安からぬ面持を、嗅は見て取り、氣を轉じさせんと、また客の噂に話を起こせば、倉敷は、時計を引き出してちよッと見ながら、何か話し出ださんとするを、おさよはそれに頓着なく、顏をさしよせて、時計を覗き、

「何時ですか。」

「十時。」

と時計を傾けて娘に見せ、自分は嗅の話に受け答へしつゝ、しばらく何事か思案の體なりしが、

「時にあの、栗栖とかいふ澤屋の客ね、あれはまだ餘程此方にゐるらしいか、外に連は無い樣子かね。」

と聞きし時、おさよは裏口の方へ立ちぬ。

「さやうでございますね。別にお連の方と申しては居らつしやらないやうでございますが、よく一緒にお出でになりますのは、お相客でもございませうか、そんな樣子でございますよ、何時ごろお立ちになりますやら、そこらは一向………。」

言ひ澁りて、この話は外へ移さんとする樣子に、巡査はなほも二の句をつがんとするとき、恰も福渡戸の方より來かゝる、紳士仕立の二人連は、噂に影の栗栖とそが友となり。栗栖といふは、苦味走りし商人風の好男子、倉敷は折惡しゝと、直に帽子を被り立ち上らんとせしが、何とやらん心殘りて緣の片隅へ身をへりくだりしまゝ、またしばらくは腰をかけゐたり。

二人は、杉林の彼方より、早くも倉敷巡査を認め、指しては何か語りあひて、笑ふさまなりしが、やがて此の家の前に來着くや、

聟は茶菓子を皿に取りながら、

「今朝は大層お早うございますが、もう細渡戸の方をおまはりになりましてございますか。はい〳〵旦那方の御身分では、我々とちがひまして、さうでございませうねー。今年はそれでも、上ッて来るお客が尠いと申すではございませんか。」

「今の所では、餘程すいてるやうだね。併し實際に込むのはこれからだから。」

「さやうでございますね、旦那方のお骨の折れますのも之れからで。尤も近年はお客の風儀もよろしくなりまして、土地の繁昌して參ります割には、間違が尠いやうでございますが、之れと申しますのもね、やッぱりお上のお世話が行き屆くからでございます。」

おさよは冷せし手巾を絞りて、倉敷に渡し、

「はい、冷たくなりました。今日は風が無くて、何だかいやに蒸し暑うございますこと。あなた、劍をお外しなさいな。いけなくッて？。やかましいものですことね。煽いであげませう。」

と無遠慮に巡査の傍に腰かけ、團扇の風を送りやれば、倉敷は、女と席を竝ぶること、官職の手前人の見る目も如何と、もぢ〳〵はすれど、さりとて座を立つにも忍びず、

「あゝ、いゝ氣持になッた。」

と、娘が振り出し晃れし手巾を顔にあて、其のまゝ煽がれゐしが、瀧の湯の方より四五人づれの客の歸り來る樣子に、あわてゝ立ちあがりぬ。

仕立ておろしの、細き久留米がすりを着たるおさよは、腰をかけしまゝ、團扇の上に眼ばかり出だし、口の中にて舊むに

ひかけしものを載せたるまゝ、座をすべらせ、睨むまねをして笑ふ。わざとならぬ愛嬌が、この店繁昌の一つのいはれとは知られたり。

されば流石の倉敷巡査も、一年以前、この地に赴任してより今日までに、此の家の前を通る際の姿勢のみは、凡そ三たび變じたりと、金さん等は噂しあへり。初めのうちは、世にもすましたる容子にて、眞正面に向きしまゝ、傍目もふらず、しッかりとしたる足取に、規律正しくぼッく〳〵と通り過ぐるが常なりしに、中頃よりは、彼の杉林の見ゆる邊より、据わりし首の、おのづと横に囘りて、茶店の嬶が挨拶を、顏にて受くるやうになりぬ。其のたびごとに、針の手いそがしげに俯きゐるおさよは、顏を上げて、官帽のいかめしげなる姿を、しげ〳〵と見迎へ見送る。倉敷巡査が一日の勤務中、最も樂しきは、此の時なりき。

されど沸きし泉の、噴き出ては廣がり行く如く、何時の頃よりか、倉敷巡査は又、塚田屋が縁に腰を下して、嬶の薦むる茶を辭退なく啜るまでになりぬ。嬶よりも、おさよが汲んで出す煮花の、一しほ色もよく香も高く、たまには重々しき口より輕口をいふほどにもなりて、今日も、朝のうちは立ち寄る人の稀なれば、しばしが間と、サーベルの腰をおろせしが、

「あゝ暑つ。」

と、帽子をとッて、手巾に額の汗を拭へば、日に燒けし跡、縞になりて見ゆ。おさよは心得て、かひ〴〵しく降り立ち、

「お暑いでせう。お冷の方がようございますね。おッ母さんはいつもお茶〳〵ッて、お茶はお嫌ひなのよ。お手拭をふり出してあげませう。」

「いやどうもお世話さま。お冷で結構。」

上

去年鹽原にておもしろき巡査に出會ひたり。年はまだ三十にもなるまじけれど、性質極めて實直に、職務に忠なること、當世には珍らしきほどなり。もと小學教員を勤めしとのことなれど、今は巡査より警部にと、それを唯一の立身の道と定め、太田原の本署には、贔負にして呉るゝ上官もあれば、こゝ一はたらきにて、分署長にはなるゝ身なりと、得意に語るを聞きしが、其の巡査、名は倉敷といひて、今年再たび此の地に來たり見れば、依然として此所の駐在所にあり。さては一年が間一はたらきも得せずにかと、一日、その人と道づれになりて、去年の事を語れば、巡査は空を仰いで大笑し、

「やつぱり鹽原の土地がいゝのです。」

とばかり、あとは餘事に移りしが、をかしき素振と、土地の者に容子を聞けば、それも其の筈の本末あり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

土地の名物、鹽釜の二代高尾が石碑の前を、古町への往來に沿ひ、少し上れば、左手に十本ばかりの大杉の、一列になりて立てるがあり。其の蔭にいつも縁臺を出だして、煙草盆一つ具へたる向う側は、塚田屋といふ茶店、並樹のうしろは、切り落としたるやうに急勾配をなして、數十間の底に箒川の流れを控へ、水音絶えず杉の梢の風に通ひて、涼しさが名代の、こゝの縁臺には、一人二人の客たえず。店には饅頭、干菓子の類をならべて、傍にいつも針仕事をなしてゐるは、此の家の嬶と、十八九の色の白き娘、名をさよと謂ひて、福渡戸邊の温泉宿の浴衣を仕立つるが片手間の內職とおぼし。笑むたびに深く寄する靨を、いつも菓子喰に來る村の者等が、煙管の吸口にてつゝき、是れは何ぞといへば、「いやな爺さん、」と膝に縫

後の鹽原

る鳥居戸山の自殺者の話は是れである。

と電報を取り上げ、

「桑橋自殺。」

と讀んだまゝ體をすくめてゐたが、

「うむ、さうだ。自分も死ぬのであッた。死んで申譯するのだ。」

と思ふと、忽ち豁然として迷の雲の一時に晴れし如く、腦に一種の新しい靈氣を感じた。湯の中より温玉の如き體を拔いた彼れは、まづその體を仕舞ッて、お加代に向かひ、

「あなたは一刻も早くお歸んなさるがいゝ。わたしは少し考があるから、いづれ後からいひます。さア、早く、先へ歸るのが桑橋君への情誼です。や、此の川をどうして渡ッたのですか。よろしい、わたしが負ッて送ッてあげる。」

鈴川は泣きゐるお加代を背にして、流を亂り、こなたの岸におろすと其のまゝ、

「必ず歸ッて桑橋君に盡すのが情ですよ。」

一句を殘して、

「あなたは何ちらへ入らッしやる?。」

と泣く〳〵追ひすがるを見もかへらず、ひとり再び向う岸に辿ッて、山に沿うた小路を、こんどは不動澤の奥へと分け入ッた。

一夜に四回まで、箒川の水は此の奇なる客をわたしたが、鳥居戸山の月は、遂に二たび出て來る鈴川を照らさぬ。

其の夜別仕立の腕車二輛は、桑橋母子を載せて山を下り、鈴川の行衞不明になッたことは、翌日知れた。今も彼の地に轉

の分らぬほどに引き裂いては、一片づゝ脚下の水に流す。風につれてひら〳〵と遠く近く飄るのが、殘らず流に落ちて東する頃は、小半時もたッて、鈴川は岩の湯に戻ッた。湯も澄んでゐて、人は勿論來ず、月が横合から湯船に半分ばかりも差し入り、氣持のよいことは、たとへやうがない。

湯船の縁を枕にし、體を船一杯に横たへて、頭からは月の光を浴び、眼を半眼にして空を眺めゐれば、月に傍うた一片の白雲が何時かそこを離れて、我が方へ舞ひさがるかとおぼえ、殆ど夢心地になッた。すると何所かで我が名を呼ぶものがある。雲のあたりからかと見すませば、向うの岸の方に聞えるので、振り向いて見ると、水際に立ッてゐるのはお加代の姿。彼れはしきりに手招して我れを呼んでゐる。

と思ッたが鈴川は別にこたへやうともせぬ。知らぬものゝやうに、また月の方へ顔を向け、うッとりとしてゐるらしい。お加代はもどかしがッて、鈴川が渡ッた淺瀬の邊を、脛もあらはに女の弱足で渡りかけた。水勢は急であるが、淺かッたためと女の一心で無事に向うに着くと、我れを忘れて驅け出し、湯船の傍へ驅け寄ッて、

「鈴川さん、大變ですよ。」

とおど〳〵する。鈴川は氣ぬけの體で、やう〳〵體は起こしたが、湯船の中に据ッたまゝ、

「何です。」

「桑橋が自殺しました。こ、これを。」

と電報をさしつける。この一句は、鈴川の萎へた腦にも針を打たれしほどにこたへ、

「ゑ、自殺。」

鈴川は黙然してゐたが、思ひ出した如く、先刻の短刀を取り出し、

「わたしは此の通りいまだに保存してゐるのです。之れを見るたびに、あの頃の事を思ひ出さぬではないが、いくら思ひ出したからといッて、それが今どうなるものでもないと覺悟してゐるから、わたしはあなたに對して、少しも怒ッたり笑ッたりする理由は持たないのです。東京にゐる間も、お目にかゝると却ッて色々なことを思ひ出すから、成るだけお目にかゝらないやうにしてゐた。それは私もあなたも同じ事です。」

言ッて顔を上げると、恰も月は山の端を離れて、今までの暗黒界は夜の明けたやうに、お加代が濃い睫毛に露のしけきが見える。

「わたしは是れから岩の湯の方へ行ッて見るから、あなたは早くお歸んなさい。」

突きのけるやうにして、鈴川は下の淺瀨の方をざぶ〳〵と向うへわたりかけた。脛のあたりにきら〳〵と珠の碎けるのが、次第に下へ〳〵と遠ざかり行く。

（十四）鳥居戸山の月

鈴川の渡りついたのは、斜に一丁ばかりも川下の河原である。そこには小石の中にところ〴〵家のやうな大きな奇巖がころばッてゐる。鈴川は巖の上に攀ぢ上ッて、月に一しほの奇を添へし此の山懐の絶景を眺めゐたが、淵には漂ふ月、瀨には碎ける月の清さ。此の流れに我が罪業苦惱を流して、彼の岩の湯に五體も清めて、そして死なうと、袂から取り出したのは、彼の桑楯からの手紙、水無瀨からの手紙取りまぜ二三通の親書、それを一々ひろげて、月明りに讀みかけ、端から字つゝき

りました。あんまり人を馬鹿にしたしかただと思ッて口惜しうございますけど、わたしやさうした方が却ッて………。」

「桑橋君が家を疊むといふのですね。」

女それには答へず。

「學校に入らッしやる頃お目にかゝッてから、わたし、ほんとうにお目にかゝるのは、今日がはじめてだと思ひます。今日からは、したいだけの御挨拶したッて、誰れも何も言ふものはないのですから。」

鈴川も此の言葉に少しは心を動かして、

「それはそんなものですね。學校にゐた頃はおもしろかッた。併しもう駄目だ、もう駄目です。」

「駄目ッて何ういふのですか。」

「境遇が變ッてゐるから、昔の事は夢のやうなものです。幾ら夢を追ッたッて、二度とその通りになるものぢやない。昔は昔、今は今と諦めるのが肝腎です。あなたはやはり桑橋へお歸んなさるのがいゝ。桑橋君がさういふのは、何かそこに事情があるのでせうから、わたしも實は少々思ひあたることが無いではないから、何れ其の内には分かるでせう。兎に角それでは急に東京へ歸ッて見るのがいゝです。」

はじめから信じてゐた鈴川の言葉があまりに淡いので、

「あなたはあんまりです。」

「外にいふことは無いのですから。」

「やッぱり怒ッてることがあるのでせう。ね、屹度さうでせう。」

いふ氣になッた。

死ぬといふのが誠に手輕くおもはれて、一旦宿所に歸ッたが、ありたけの金をぐる〳〵と紙に卷き、上に「鈴川源宥什」と書いて袋棚の隅に載せ、鞄の底から取り出した一口の短刀を呑んで、飄然と川端に出た。

鳥居戸山の外手にあたり、空が一叢明るくなッて、二十日の月は上りかけてゐる。鈴川は岩の湯の方へ渡らうとしたが、橋がないので躊躇してゐると、後から庭裏の音細く歩み寄ッて、

「鈴川さん。」

と聲を掛けたものがある。鈴川はびくりとしたが、音色で知ッてゐる。

「お加代さんですか。」

言ひ切るか切らぬに、女は突然鈴川の手に縋りついた。そしてはら〳〵と涙を溢し、

「鈴川さん。ほんとうにお久しうございます。」

男はあきれて見てゐる。

「わたしやもう今日から桑橋には居ないのですから、どうぞね、鈴川さん、今までの事はみんな辛い義理だと思ッて、御免なすッて下さい。わたしは今日から舊の體になりましたの。」

此方は冷然として、

「何うしたのですか、桑橋にゐないとは。」

「さッき東京から手紙がまゐりまして、あちらの家を疊むから、妻は里へかへし、母は兄の所へまゐるやうにと申してまゐる

妻主義にて押し通さんかとの考へも之れあり、實は如何いたさんかと躊躇致し居り候際、先日ちらと道部氏より承り候に、道部氏は御存知の如き人物ゆゑ、往々貴兄に對する誹言も交り候やうなれど、拙生は決して貴兄を疑ふものに之れなく、唯何となく奇因緣のやうに存ぜられ、加代に於ては必ず異存なかるべしと思ひあたる節も之れあり候に付、貴兄に於て此の義御承知下され候はゞ、拙生親元となりて、末永く貴兄と親戚の因むすび申し度、加代が近來の氣鬱症といひ、畢竟氣のすすまぬものを強ふるより起こること、情に於て忍びざる節も之れあり候。尙また拙生も今回の不首尾にて、少々面目を失し、或は當分社會より退かんかなど考へ候ことも之れあり、かた〴〵彼れを一生日蔭者にいたすも不便と存じ候。貴兄も拙生を御信用下され候上、成るべくは御一諾下され度候。」

されども鈴川は此の一節には意を留めぬ。女どころの騷ではない。「拒絕しやう。」といふ決斷が讀下に出來た。たゞ桑橋の誠意に感じて、涙の催さるゝことは前とかはらぬ。殊に其の末の、「當分社會より退く」といふ一句は、何となく心に染みて哀れに讀まれた。

爾來鈴川が心には、ごた〳〵した考へは無くなり、たゞ漠然と「何うしたものだらう。」といふ問題が橫ッてゐるばかり。晝夜これを思ひつゞけて、時には知らず〳〵「何うしたものだらう」とひとりごつやうになッた。

（十三） つらい義理

先ほどから水音に耳を澄まして、しばらくなりとも苦痛を忘れやうとしてゐた鈴川は、自分も何時か水底の叫喚に引き入れられるやうで、一ッそ死んでしまッたらばと思ふと、たちまち閉ぢたる胸が開けるごとく感じ、ふら〳〵と、「死なう」と

「今更是非もなき義にて、たゞ〳〵拙生の知慮淺かりしを悔ゆるの外なく候。彼れが如き祕密は、貴兄も御承知の如く、決して我が黨より漏るゝものに之れなく、小動城氏の言は、未だ深く貴兄を知らざるより出づるものに候へば、拙生は飽くまでも貴兄がさる譎詐反覆の人にあらざることを掛じ置き候。若し貴兄に不信用の事あらば、拙生が人を知らざる不明の罪は、甘んじて、屠腹して謝すべしとまで激語いたし候。それとも萬々一誤まッて、貴兄の口より何人にか漏れたるものが、敵黨の乘ずる所となりし義ならば、過失は致方なく、此方にてもそれに應ずる計畫必要につき、お心あたりも候はゞ御包みなく御一報下されたく、甚だ無禮の條ながら、兄と僕との間柄ゆゑ、隔心なく申添候。拙生の意は貴兄に於ても必ず諒とせらるべく候。」

鈴川には、此の手紙を讀んで、冷に笑ふ程の膽力はない。氣の弱くなッてゐる此の頃、彼れは却ッて之れを見て涙ぐんだ。さすがに此の手紙に對して、自分が漏らしたとも、漏らさぬとも、返事のしやうはない、彼れが心の苦しさは、この時から一層切になッて、いよ〳〵堪へられぬときは、立ち上り、

「區々たる人情のために。」と自ら苦悶を振り切らうとするが、もはや昔のやうにはゆかぬ。現に自分の言ッたのは裏腹に、自分の胸に響きかへす。それが死ぬほど苦しい。

手紙の後半はさらに驚かれる文句。

「なほ甚だ唐突なる御相談の件之れあり候が、是また親友と申す資格にて、一切拙生のハートなることを豫め誓ひ置き候。さて其の義と申すは、義妹加代を貴兄御貰ひ受け下さるまじくや。斯やう申すばかりにては御不審も候べし。實の所加代義は、拙生の妻にと母その他の心組にて貰ひ受けしものには相違なけれど、拙生とは何故か氣性あはず、且つ拙生には當分無

昨日の急雨に、玉を溶したやうな清流が見る〳〵赤土色に變じ、夜に入ッては、河原一面の濁流となッて、岩の湯へ渡した假橋が流れるといふ騷ぎ。夜更けし頃より、その引きあげに騷がし　町のもの等の掛聲が、水の音にまじッて、終夜夢も現ともつかず、薄暗い枕元の火影に、淋しさ蒲團の襟より沁み入り、枕の底には何ともいへぬ悲しい叫喚の聲聞こえ、明方までうと〳〵として熟睡し得なかッた、今朝見れば夜半からあがッた空は拭ふが如く晴れわたり、前山の翠色一しほ鮮になッて、山の蔭には、昨日まで無かッた小瀑布が、木々の間から細く長く、一巾の布を懸けたやうに見られる。河の水も嘘のやうに見事に澄んで、新嵐の氣が軒の青簾に迫り來る。

されど鈴川は、終日ぼんやりと、何か考へ込んで過ごし、晩食の後僅に川邊に立ち出でたのである。河のどん〳〵になッた所は、水の激する聲太く樣々の響をなすが底に、一種那落に徹へるやうな地響の音がまじッて、何となく物悲しい。果ては幾萬といふ、世に恨ある人の靈などが、一齊に揚げる悲恨の叫喚の、この水音の底から漏れるのではないかと取りとめもない想像に、昨宵のことなど思ひ寄せ、しばらくは水の流を見込んで偶像の如く佇む。

但し鈴川が一昨日の午後、一葉の新聞を見て、また桑橋から一通の手紙を受領してからの胸中には、一つの大疑案が横ッてるるので、其ののちの有樣は殆ど氣ぬけのやうである。其の新聞といふのは、中央の政界は、彼れが東京を去ッて間もなく、急轉直下の勢で變じかけた。そして水無瀬の計畫圖にあたり、兩三日前の內閣會議には、全く兩黨離反の端を開いて、夫の本山事件の祕密を訐かれたのを導火に、左黨の大臣はもはや總辭職といふ場合になり、さしあたり當局の小動城大臣は、責を引いて、即日官邸を引き拂ッた。

祕書官桑橋からの手紙の前半には、

「伜も是非近々に參ると申してをりましたから、いづれ參りましたら、御一緒にそこいらの湯を這入り廻ッて見たいものでございますね。」

「それは面白いでせう。瀧なぞも大分あるやうですから、近い所は御一所に行ッて見ませう。あなたのやうな氣鬱症の病氣には、この先の、鹽の湯がいゝさうですね。」

言ッてお加代の方を見れば、ぢッと見むかへてゐた眼をそらして、

「さうでございますか。」

と氣のなささうに言ッたきり、話は滅入ッてしまふ。鈴川は心の中で、快活な女であッたが、と思ッた。

（十二）悲恨の叫喚

四五日たッて、陰曆六月二十日、宵闇に間のない夕まぐれであッた。鈴川は、ひとり箒川の緣に下りたッて、流れに出張ッた巖の上から、矢を射るやうな急湍を見おろしてゐる。此のあたりは、河床が一面に大盤石で、殊に傾斜の急なため、二三間が間は、勾配のゆるい瀧ほどの勢で、落ち込んだ水は渦き立ッて淵になり、次第に河幅の廣まるにつれ、流れもゆるくなッて、漾々たる大河の姿を現はす。其の河幅の廣い向うには、木深い前山の裾のあたり、所々に山骨あらはれて、鐵氣を帶びた湯の噴き出るのを、そのまゝ巖石のあはひに湛へて、自然の湯船とし、浴舍に構へたのが岩の湯である。そこから川に沿うて下れば、廣い小石河原に出て、路は川を離れ山腰を繞ッたまゝ、不動澤の谿流をかちわたりして、鳥居戸山の山あひに分け入る。

「精しいことは存じませんが、新聞なぞでも色々な事を申してゐるさうでございますから、いづれ其んなことでもございませう。それはさうと、あなたは、お體は如何でゐらッしやいます。お顏の色がよろしくないやうでございますが、何んな御病氣でございますか。」

「なに私のは御心配かけるほどではないのです。唯すこしばかり腦がわるくて。立ちますとき、ちよッと御挨拶に出ればよかッたのですが、少々都合があッたものですから、御無禮いたしました。」

鈴川は、つとめて平然としてゐるらしいが、何所にか不安の氣味があッて、稍々おちつかず、口數の多い、媚びるやうな調子が、全く以前とは違ッて、別人のやうである。お加代は、老母の後に體を半ば隱して、額越にちら〳〵と鈴川の容子を見てゐたが、これまた去年菊見の折の面ざしに比べると、窶れた風情あはれに見える。鈴川はこれにまで世辭をいふ。

「あなたも御病氣なのですか。なるほど少しお瘦せなすッたやうだ。」

お加代はたゞ淋しげに笑んで、頭を下げたばかり。

同室ではといふので、早速別間のふさはしいのを明けさせて、桑橋母子をそれに移し、鈴川みづから先に立ッて、岩の湯、泡の湯と一々入浴の案内までする。さりながら鞠躬如として機嫌を取る鈴川の心には、却ッて無頓着であッた昔の溫な情は宿ッてをらず。笞の下に働く奴隷の奉公ぶりと、選ぶ所はないのである。其の夜は母子の室に語り更して、

「桑橋君も一日も早く來られるといゝですがね。」

と口には言へど、彼れに取ッては、桑橋と顏をは合すのが心ぐるしければこそ、半は自棄のつもりで此の地に避けたのであるのに、今また其の人の我れを追うて上り來るといふ。待つ間一日も長かれかしと願ふのが內心であッた。

案内につれて這入ッて來たのは、桑橋の老母とお加代である。桑橋に逢ふのがつらさに逃げ出して來た此方は、疵持つ足なり、だしぬけに何の譯とも分からねば、浮とは挨拶も出來ぬといふ身構。東京にゐた時とは、打ッてかはッた他人行儀に、

「何か急な御用でお出でになりましたか。」

暗に若しやといふこゝろの探り言葉。老母はそれとも氣づかず、

「いゝえね、斯やうに突然參るわけではなかッたのでございますが、御一緒に參るやうにと、豫て伜からもお話申したさうでございますけれど、あなたが大層急なお立ちで、お體が惡いといふことを、お手紙ではじめて承知いたしましたものですから、伜も大さう心配いたしまして、何んな御病氣やら御容子もさッぱり知れませず、屹度また御遠慮なすッて、それでお一人お立ちになッたのであらうが定めし御不自由でゐらッしやらうから、どうせ行くものなら少しぐらゐは早くともと、伜もさう申しますし、これも近頃氣分がはき〳〵致しませんので、かた〴〵急に思ひたちまして、昨晩夜中かゝりまして、ほほ、大さわぎで荷ごしらへしたのでございます。」

「まあ、さうですか。私はまた何か急な事でも起ッたかと思ひまして。いや、よく入らッしやいました。私までいろ〳〵御心配をかけました。桑橋君の方には別段おかはりはございませんか。」

「はい、お蔭でかはりもございません。此の二三日何かうるさい事があるとか申して、ろく〳〵夜の目も寢ないで驅けまはッて居りますが、私どもは却ッて邪魔になるからと申しますので、ほゝ、こちらへ追ひはらはれたやうな譯でございます。」

「何か面倒な事でも持ちあがッたのですか知らん。」

ひとへに東京の方が氣にかゝる容子。

膝を突き、
「鈴川さん、お客様でございます。」
我れに客とは心得ぬことゝ、
「何といふ人だ。」
小婢は、をかしさをこらへるといふ風情で、
「桑橋さん！」
鈴川は少なからず驚いて、そしてあわてた。
「桑橋？。已れがゐると言ッたか。」
「はい、いゝゑっ」
鈴川の見幕に恐れをなして曖昧に答をしたが、またつゞけて、
「あのー、女のお客さまでございますよお二人。」
「女？。」
いよ／＼出ていよ／＼意外。
「年取ッたかたと若い綺麗な方。」
聞いて少しは安堵の體。
「お通し申せ。」

があるので、其のまゝ星あかりをたどり、右に外れて墓地に出たのは、彼れ此れ二時でもあらう。透し見れば幾千基とも知れぬ墓標は、寂然として永遠の眠りを守り、上には醒めたる星が冷かに瞬して差し覗いてゐる。

鈴川はやゝしばし星影を仰いで、大きやかな墓石の端に腰かけたが、總身の肉が締まるやうに覺えて、それを界に頭の具合は忽ち一變し、何だか薄ら淋しいと思ふと、考へ出すことが一々不快になッて、その中から「桑橋には氣の毒な事をした、友人を賣ッた」といふ念がむら〳〵と出て來た。「是れではならぬ、今までは何を考へて愉快であッたかな」と我れから氣を轉じやうとしても、もう遲い。安堵、功名、大事業、といふやうな活きて輝いた想像は、ちよッとの間に熱も光もない脫殼になッて、不人情、不道德といふやうな、不快の感ばかりが盛に蔓ッて來る。遂に快々として一夜を墓地に明かし、眼も凹み色も蒼ざめて、翌朝下宿に歸ッた。

（十二）鹽原

下野の國那須野を三里の奥に、一簇の靈山があッて、上ること二里、すなはち鹽原の温泉郷に入る。海内の絶品たるこの地の山水は、就中奇を福渡戸に湊め、温泉の趣は岩の湯に止めを刺してゐる。

こゝ箒川に臨んだ某温泉宿の一室に、鈴川潔は青山の墓地をさまよッた二日目から、急に健康すぐれずと言ひ立てゝ、一週間ばかりも引き籠ッてゐる。この八月には桑橋も共にとの約束であッたが、出しぬいて七月早々に來たのであるから、勿論連はない。時候が少し早いので、浴客もまださまで多からず、鈴川にはそれが却ッて好都合である。

宿の屋號を圖した浴衣の上に、袷羽織重ねて、今日もやう〳〵日影の薄くなる頃、小婢がばた〳〵と駈けて來て、入口に

「記憶しないね。」
外に答のしやうもない。道部はなほも、人わるく追究する。
「はてね。あの撃劍會の時來てゐられて、君が其の前に大名擧を博した時さ。」
「さうであッたかね。」
平氣は裝へど、ナイフ持つ手に顫ひが見える。桑橋は知ッてか知らずか、何所までも鈴川をかばッて、
「撃劍の時に、見物の顏なんぞおぼえてゐられるものぢやない。鈴川君あの時は大した手柄だッてねー。僕なぞもこれから少しは何かやッて置く必要がある。文事あるものは武備ありの本文でね。」
話は外へそれてしまふ。

（十）星あかり

同じ夜の一時すぎ、赤坂新町近くの去る待合から、忍びやかに立ち出づる黑の洋服紳士は、鈴川が水無瀨に密會を遂げての歸りがけである。首尾よく此の一役を勤めおふせたれば、望の通り、是れ限りにこの方面の足を洗ひ、二三年歐米を漫遊した上で、榮達の門は擇ぶに任す、との水無瀨が言葉に、兎も角も年來の重荷を卸した心地、今夜ばかりは飮まぬ酒をあほッて、醉へば胸の苦痛も忘れ、泊ッて歸れと引きとめられるのを刎ねつけて、一人表に出た。
豪興とはこの事であらうか、壯快なうちに何とは知らず氣が立ッて、眞ッ暗な中を、山王臺から吹きおろす夜風に頰を嘗めさす心地得もいはれず。何所か非常に凄い所か大暴風の中をあるいて見たい、と思ふと、ちやうど靑山の墓地へ通ずる路

「昨年であッたけな、我輩の黨の大會で、藩閥の犬が一疋つかまッた。えゝ何とか言ッたッけ。さう〳〵丸田、あの丸田といふ奴、我輩ははじめから怪しいと睨んでゐたが、彼奴の擧動のいやなことゝ言ッたら無かッたね。事務所などへやッて來ても、その癖べら〳〵と喋るんだけれど、言ふこと爲すこと一々祕密だ〳〵と勿體をつけやがッて、それで他の祕密は無闇と聞きたがる。あんないやな奴はない。」

默ッて聽いてゐた鈴川は、おぼえず頭をもたげた。蒼くこけた頰には稍々紅を潮し、眼に異樣の光きらめくと見えたが、向側なる桑橋の視線のちらりと此方に外れるのを見るや、直ぐさま眼を俯せてしまッた。桑橋はちよッと鈴川の方を見て、すぐ道部の言葉尻を押へ、怒ッたやうな調子で、

「これは怪しからん。丸田ごとき人畜生を以て、我が神聖なる鈴川君に比するとは、甚だ以て怪しからん。」

「うふゝ、さう來るだらうと思ッた。我輩決して丸田を以て鈴川君に比したのではないよ。たゞ君等があんまり祕密々々といふから、祕密の貴ぶに足らない所以を辯じたまでだ。よしまた比較した所が鈴川君は謹嚴な沈默主義で、丸田輩の性行とは丸でちがふぢやないか。古語に曰はく、似ざるものを比較するは比較せざるに同じと、これこの謂なりさ。」

「はゝゝ。」

桑橋が噴き出せば、鈴川もつゞいて餘義なさゝうに苦笑する。道部はそれと見るや、

「時に鈴川君に伺ふがねー、僕は桑橋君の令夫人たるべき人を、深くも知らないが、何時ぞやちらとお目にかゝッた時、なんでも學校にゐるころよくお見うけ申した方だと思ッたが、君記憶してゐませんか。」

續いて放ッた一聲は、見事に命中して、鈴川は殆ど度を失はんとしたが、危く立ち直して、

「僕には何も無いさ。」
言ッたきり、またかたく口を結んでしまふ。道部はおもしろくない奴といふ顔つき。桑橋は執りなして、
「祕密主義は鈴川君の天性なのだ。それを破れといふのは、天性に背けといふのと同じことで、君の方が無理だ。凡そ世の中に祕密の化身といふものがあッたら、それは疑ひもなく鈴川君だらうと思はれるくらゐ、全く我が黨の祕密の塊だ。」
「いけない〳〵。我が輩大不賛成。第一今日の事情から言ッても、最早祕密のあるべからざる關係ぢやないか。政事上の事は正々堂々でなくちやいけない。無闇に祕密々々と騷ぐのは、ありや藩閥時代の遺風だ。」
「おッと待ちたまへ。外交の祕密、軍機の祕密。」
「それがいかないのだ。我輩をして外交の衝にあたらしめたら、決してそんなけちな政策は取らない。一切開放主義でやッて見せる。」
「いョ未來の外務。」
「要するに祕密とは正理公道の前に立たれないといふ意味ではないか。罪惡の文字を墨で塗り消すの謂ではないか。」
ナイフの尻で卓子を二ッ三ッ叩く。
「そら麥酒がこぼれる。お靜かに願ひたいものだ。」
「一個人としても同じことだ。祕密を守るなんて、そんなけちな了簡は大丈夫の持つべきぢやない。つまらない事にまで祕密祕密と祕密風を吹かされるのが、我輩甚だ癪に障る。」
麥酒に喉をしめして、道部は喋りつゞける。

「結婚の成約が濟めば、すなはち是れ令夫人さ。」

「どうも君は重寶な論理法を知ッてるよ。令夫人は、近來氣鬱症を發して弱ッてゐる。全く湯治にでも連れて行けといふ、命令はあるのだが、まさか僕が引き具して行くわけにも行かないからね。」

言ッてロールドキャベージの殘汁を、したゝるばかり麵麭片にすくひ、ぱくりと頰張ッた。

「それで我輩等をそゝのかして、人目よけにしやうといふ策略なのか。肝膽を碎く譯だね。」

道部は學校を出てから、却ッて在黨の方に緣を求め、今は其の黨報局の一人として、桑橋とは政治上の關係から、待合酒の交際が多い。

「毒舌を弄しはじめたね。烏森の方を素ッぱぬくぞ。」

「いゝとも。さう來た日にはこッちでも負けッこなし。聽き手は鈴川君といふ新手だし。」

「忽ち舊惡露顯に及ぶよ。」

「及んだッて構はない。鈴川君だッて、ねー君、眞面目な顏はしてゐるものゝ、昔おもへば信田の狐といッたやうな譯だ。どうだらう、此の會を一ッそ肝膽會とでも名づけて、三人が各々舊惡を吐露することにしては。」

「おもしろい。まづ君からはじめたまへ。」

「鈴川君に序を煩はうぢやないか。一つその祕密主義とやらの珍種を。」

先刻より二人の氣焰を傍聽しながら、泡の消えた麥酒をそのまゝ、氣のなさゝうに、麵麭を千切ッてはバタを塗ッて、ほつほつと喰ひゐし鈴川、此に至ッて苦味を帶びた顏に微笑を寄せ、重い濁ッた調子で、

密を探り、思ひも及ばざりし新材料まで得て恐ろしさに動悸する胸を、じツと押へ、跡から追ツかけられるやうな氣持に、そこ〳〵引き揚げやうとした。けれども生憎と歸路は桑橋に強ひられ、途中から更に一人の連もあツて、銀座あたりの、西洋料理に晩餐を共することゝなツた。

見れば二階の一室は三人の押領するに任せてある。でツぷりと肥えて、寛な中に才氣の迸しツた、濶達の男が桑橋、がちやりとフォークを下に置き。

「鈴川君の祕密主義も久しいものだが、兎に角きち〳〵と實行出來るだけ感心だ。」

相手は彼の桃の井黨の道部で、

「君等の内證話ぢや榮えないぜ。先の話々々々ツて、何だか甘さうな話しツぷりだが、半口乘せないか。桑橋君の省で行るからにや、どうせ一通りのたくらみぢやあるまい。」

「馬鹿言へ。」

と言ツたが、氣をかへて、

「五六十萬儲かる口があるのだ。はゝゝ。仲間になりたきャ、コンミツションを寄越したまへ。時にどうだ、道部君も此の夏は鹽原へつきあツちや。鈴川君も行くといふから、一人でも連れの多い方がいゝ。是非行くことにしては。」

「僕はこの夏は行けない、大藏省も大藏省だが、外に少しやりかけた事業があツて、その方が手ばなせないから。それで、行くのは、君等二人きりか。あゝ、おツ母さん。隨がツて令夫人もといふ譯だね。」

「令夫人とは誰れのことだ。」

そめにも男兒か犬よ畜生よと呼ばれねばならぬか。とつくぐ身邊を見かへることもある。寂寞の感はうたゝ禁へがたいまで。此のいやな氣持を無理にも壓しつけるものは、唯だ一つの功名といふ餌ばかりであるが。

矢先に世は政黨內閣の代となツて、そして內輪割の騒とまで押しつまツて、鈴川が半生の負擔を卸すのは此の時と定まり、しかも其の不情の手は、選ッた唯一の親友桑橋の上に加へねばならぬ運命となツた。鈴川を犬にして、桑橋から、小動城內務の祕密を探り、それで左黨の罪惡を羅しやうとは、そもぐ右黨の作戰計畫である。

鈴川が水無瀨から此の註文を聞いた時には、覺えず天を仰いで心の中に泣いた。

（九）肝膽會

鈴川は、とつおひつの思案に暮れたが、最後の決心は外には無い。

「己れも男だ。一旦言葉をつがへた以上、水火の中でも飛びこむのが男の意氣地だ。區々たる人情に拘はツてゐる場合ぢやない。やッてのけやう、見事にやッてのけやう。桑橋等に今まで交はりを結んだのも、本はといへば、今日を豫期して仕組んだ方便ではないか。しめるつもりで捕ッた兎を、可愛さうだからといッて、逃さうとは、婦人の情だ、此の鈴川の爲すべきことではない。」

彼れは此の勵しい決心の中にたてこもり、攻來る人情の矢叫を強ひても壓し伏せてゐる。二日ばかりの間に、鈴川の顏の色は見かへるほど蒼くなり、頰もこけた。

三日目の朝、眼の覺めるや否、猛然として起ッた彼れは、直ちに俥を乘り出し、桑橋の虛に乘じて、意のまゝに內務の祕

を跡に臺所口の方へ。

(八) 天を仰いで

鈴川の胸は此の日より兩び亂れはじめて、このたびは、じッと觀念の水をさせばさす程、底から沸きかへるやうにおぼえ、上部に取りみだした樣子こそ見せぬが、兩三日が間は、何もうち忘れて、つゞけさまに桑橋の家を音づれた。けれども翌日から目ざすお加代は弗に姿を見せぬ。不在かと思へば、そッと二階の窓より我が歸るうしろを見送りゐて、我がふりかへれば、つと身を躱す。

鈴川は出勤先の用を缺くにも構はず、一日さまぐに考へつゞけ、夜半の鐘の鳴るのをも、机の前に端座して數へつくしたが、遂に座に堪へかね、拳を固め机を拍ッて立ち上るとき、漸く本心の据場を見出だした如く、つゞいて取り出されるものは例の刺客傳であッた。

果然、この後は兩び鈴川の足が桑橋の閾を跨ぐこと絕えくになッた。

斯くて月日移ること一年が間には、鈴川が身にもさまぐの轉變あッて、其の都度力になッて吳れるものは、たゞ一人の桑橋あるばかり。人が無いではないが自ら賴りにせぬ、することも出來ぬ。一人の桑橋すら、時には恐ろしくなッて、我れから避けることもあり、戀は芽生の内に折り去られ、凡そ廣い天下に、此の三寸の胸を打ちあけさせて吳れるものは、一人も無い。

と思ふと、我が身の情なさが今さらのやうに思ひ知られて、人情の反覆を命とする間牒、何の恃むところあッてか、かり

裾濃、丹頂、御衣の黄、玉川なんど、みやびた名の札が幾つともなく并んでゐる。お加代は其の前に立ちどまり。

「これだけでございます。」

と、ちらと振りかへり見たが、すぐにあちら向いて、花に見とれた形、うツとりと眺め入る。その鬢のあたりを、さら〳〵と乾いた中に、ひやみある風が吹いて、秋の日和さはやか。

鈴川は冷然として、

「はゝア。」

と輕く受けたきり、これも傍に人あるを忘れたかの如く、菊畑の方を見わたして、突ッ立ッた。此の奇なる光景を、若し知らぬものが遠目に見たら、必ず一對の若夫婦、しかも見事な若夫婦の菊人形とでも思ふであらう。

男はヅボンのかくしに、女は帶のあたりに、雙の手を重ねたまゝ、尚もじッとして、一二分が間は互に外さうともしなかッたが、到頭女から根負けして、堪へ得ぬ體に下を向き、

「團子坂ももう盛りでございませうね。」

と思ひ切ッて愛相すれば、男はいよ〳〵無愛相に、

「あゝさうですかね。」

言ッたまゝ絶句する時、恰も後に人の足音して、旦那様のお歸りを報ずる下女の姿。兩人は申し合したやうに、覺えず左右に飛び退いた。お加代は蒼皇として、

「御免遊ばせ。」

存じますが、まことにどうも失禮いたします。此の節は、皆さまが時間の約束を違へるのは日本流でよくないとか仰ッしやいまして、伜なぞも不斷はそんな事を申してゐながら、ついさしかゝッてまゐりますと、おほゝ、やッぱり日本流になッてしまひます。」

「いや世間が皆さうですから、自分一人できち〳〵とやる譯には行かない場合がいくらもあります。先刻から風の吹きますたびに、菊の香が大層して來るやうですが、菊畑は垣の外でございますか。」

「はい、あちらの庭になッて居ります。この座敷からは、ちやうど見えませぬから、唯今御案内いたさせませう、菊でも御覧下さいまして。」

と立つと、やがて、しとやかに襖の明く音して、挨拶に出たのはお加代である。結び立ての島田つやゝかに、例の千兩の眼元が、昔の俤そのまゝ。觀念の鈴川も、さすがに一時は胸踴り、手を突き頭を下げるだけの應對も不出來に見えたが、忽ちまた元の冷靜な態度に復した。女は覺悟の上であらうが、落ちついて、

「あの、菊のございます方へ御案内いたしませう。」

「あゝ、さうですか。」とためらふ樣子。

「どうぞこちらへ。」

と先に立てば、鈴川もせんかたなく續いて縁を曲り、靴足袋のまゝに庭下駄つッかけて下りたつ。庭は狹いが、可なりに數奇を凝らして、苔を被た燈籠のこなたから、水うッた飛石づたひに、四目垣の外に出づれば、そこに一畝の菊畑を控へて、主人の丹精は、素人目にも莖の伸び具合、輪のつき具合まことに目ざましく、あたりは異香に薰じて、鉢に取ッたものには、

を撫でられるやうな、冷々としたよい心持になり、常よりは後れて己が受持の方面に出かけた。
其の後は全く女など忘れた如く、但し桑橋の家のみは、しばらく訪づれぬことゝなッた。兩人の交際はます〳〵密になるのであるが、用事はなるべく出先か手紙の上で辨じてゐる。

（七）菊人形

今日は小動城氏も來らるゝ筈なれば、君にも是非同席を願ひたい。お互に將來好都合の事もあらうと思ふから、迷惑でも是非來たまへ。と桑橋から懇々の招きに、否みかねて、土曜日の午後といふ時間を其のまゝ、鈴川は桑橋が矢來の宅に出向いた。

桑橋の宅といふのは、矢來三番の中でも分り易い、勿論借家ではあるが、ちよッと廣い屋敷である。裏の庭つゞきに、三坪ばかりの菊畑を起こし、今年は取りわけ花の出來がよいから見て與れとの案内が即ち今日、鈴川は午後の二時頃から、南の十疊に洋服の膝を崩して、一人辛氣けに待つてゐたが、どうした譯か、小動城も來ねば、主人も容易に歸らぬ。桑橋の老母といふ品のよい五十左右の婦人が先程から、ちよい〳〵顏を出しては、同じ事を言ッて行く。

「あなたどうも失禮いたします。土曜にはいつもお午に歸ッてまゐりますのが、今日は何ういたしましたか、生憎と遲なはりまして、唯今使をやりましてございますから、もうおッつけ歸ッてまゐりませう、どうぞ今しばらく御辛棒を。」

「いや、どうかお構ひなく。」

「小動城様もお見えにならないのを見ますると、多分事務所の方に、何か急な用でも起こりまして、それで遲うなるのかと

娘の名は加代と謂ッて、もと會津の藩とやら。父うせてよりは、妹と共に母の手に人となり、母をもつゞいて亡ひし不幸に、家を擧げて今は伯父の監督にまかす身であるが、十九の今年、さる緣で桑橋が妻にと所望せられ、式を擧げるまでは姑御の手元に置いてとのことに、春から其の家の人となッたのである。

譬へばいつも眺めてゐる植込の中から、花の木一本拔き去られたやうなもの。今までは此の木必ずとも思はざりしに、無くなッたあとの淋しさが、一本の値うちと知られる。我れに贈ッた短刀の主、思ひ合はす人の絕えて久しいたよりを、今宵計らずも聞けば、今は我が友と賴むべき桑橋に半生の苦樂を捧げて、我が近よるべき身でもない。

鈴川は斯う思ふと、唯何となく心苦しくおぼえて、今までにない、さま〴〵の考へが胸間に往來し、到頭その夜はまんじりともせずに明した。

翌朝になると、昨宵からの事がまるで夢でもあるかのやう、うとりとして、日影たけた後までも床を離れかねてゐたが、突然「大事。」と叫んで跳ね起きて、寢衣のまゝ机の前に端座した。そしてやゝ暫く瞑目してゐると思ふと、次には靜かに立ち上り、戸棚の中の葛籠から取り出した一品、見おぼえあるお加代が贈物の短刀である。鞘を拂ッて二三度打ちかへし見るに其の刃色の澄み具合、白味を帶びて上品なるが中に、鋩にあたりて、微に曇あるは、譬へば秋の空に一片の白雲風を呼ぶかとも思はれて、何となく心が改まる。そのまゝ收めてかたへに投げ出したあとには、久しぶりで例の刺客傳が取り出され、心行くばかりに翫讀せられた。驚天動地の大事業、大功名、血、劍、爆裂彈といふやうな、想像とともに、拔身のひらで頰

結婚しないことになッてるなんて、頑固な事ばかり言ひ張ッて、わたしまで氣を揉ます、憎い奴だと思ひますけれど、まア今のまゝで行きさへすれば、三十といッてあと全一年はないことだから、お前も辛棒してお呉れるだらうし。」

此の邊まで聞いた頃は、聲は小さし、男の足と女の足で、幾ら加減してあるいても、もう聞こえぬやうになッた。

されば彼の娘には最早夫と定まる人あッて、其の家に引き取られゐる身の上かと思ふと、始め怪しく血の騷いだ鈴川が胸は言ふに言はれぬ不快の念に鎖される。それからそれと色々面白くない事ばかり思ひつゞけて、目ざす桑楯の家に着いたが、氣を取り直して、初めての會見は首尾よく了へた。

桑楯の一味眞實な性質が、何所となく自分の氣に合ッて、先方でも其のつもりか、一見相識のやうな打ち解けたもてなしぶりに、固より心は許さぬまでも、兎に角溫い氣持がして、曩の不快も忘れ、やがて辭し歸らんと立ち上る。

「いづれまた其の内。」

といふ聲の漏れると共に、玄關にぱッと燈がさして、客よりさきに、玄關口には尻を逆たてゝ靴を直す下女、跡から送り出す主人、客は框に腰かけて、佛蘭西皮の深いのを、きゆッと兩足に喰ひつかせ、向き直ると共に、

「さやうならば。」

を雙方から言ッて、主人は奥へ、鈴川は帽子取りあげて、ふと眼を滑らすと、横手の襖から突膝の半身を出して、燈を捧げたまゝ眩ゆげに面火をよけゐる女に、ぴたりと顏見あはせた。すると先ほど見かけた娘は正しくこの家にゐるのである。あまりの意外に、覺えず瞳を凝らすと、女は顏を背けて、さッと耳のあたりを紅くする。洋燈持つ手の顫につれ、一番の丸火屋が瀬戸の笠に觸れる音。客は格子戸の外にあッた。

は少なし、往來人も自然まばらで、所々に立ッてゐる街燈が、淋しげに其の周圍を照らす外は、闇の所が多い。

鈴川は敎へられたやうにポストから幾本目かの街燈の下を左へ曲りこまうとすると、先程から直ぐ前を、途切れ〳〵に話し行く娘一人老母一人の道連を、ちやうど追ひ越した。途端何心なくちらと娘の顏に眼が走れば、街燈の影にはツきりと讀まるゝ眼元、絕えて久しい彼の姉娘のそれである。さすがに鈴川は思ひがけぬ。覺えず、や、と聲を出さうとしたが、氣がついて悟られぬやう、すた〳〵と行き過ぎる。洋服出立に帽子目深く傾むけてゐたから、女の方では何の氣もつかぬ。鈴川はふりかへツて見るのも厚かましく、それかと云ッて跡をつけるやうな所行は尙出來ず、娘の家はこの邊ではない筈と、不思議な感じがして、このまゝ別かれるのは殘り惜しいやうであッたが、其の內老母の聲とおぼしい話が聞こえる。

「賢二はもう歸ッたらうね。」

「まだでせうよ。和服を召して入らッしやる日は、いつも遲うございますから。」

「そんな事はお前、ありますまい。」

「いゝえ、他へ寄るには、服では窮窟でいけないと、さう言ッてらッしやいますよ。」

「さうかえ。他へ寄る〳〵ッて、彼れも忙がしいのではあらうけれどね。」

しばらく話は斷えたが、やがての程、

「お前も私のところへ來てから、もう彼れ此れ半年の餘だらうね。あゝさうかい。お前はさうお言ひだけれど、氣心を知り合ふと言ッてからがお前、さう何時々々までも年頃のもの同志、そんな事をしてゐられるものでないから、彼れにもさう言ッて、濟ますことは早く濟ますやうにと、急き立てゝゐるますけれどね、何時かも言ッたやうに、それ、三十を越さなければ

に巧んで、彼れは先づ左黨に深緣ある政法學校に入學したのである。卒業後も、人物のしッかりしてゐるので、自然黨の名士に昵近せられ、某機關新聞に這入ッてからは、益々便宜の地に立つやうになッた。

けれども學校にゐる間は勿論、出てから後も鈴川の擧動は極めて正大、誰れ一人彼れを恐るべき敵の間諜と感づいたものは無い。否、事實に於てこの八年の間彼れは全く間諜の役目を勤めなかッた。

大に勤めんがための準備に、全く勤めないのであッた。水無瀨が授けて以て十年の計としたのはこゝのこと、今こそは鈴川が一代の腕を揮ふべき時機である。

彼れは學校を出て以來、到る所に信用せらるれども、自らは成るべく一人に深入りせぬやうにと力めてゐる。自分の職務を考へると、さすがに心苦しくて、朋友をこしらへることが出來ぬ。彼れに親友の無いのも、彼れが祕密主義を取ると號して、其の蔭に自分の大祕密を押し隱してゐるのも、皆この故である。

されば彼れに取ッては、およそつき合ふほどの人は皆、表面に朋友として裏面に敵と思はねばならぬ。本心の交りといふことは彼れの身分と矛盾するので、草にも木にも心おくとは、眞に鈴川の境遇であッた。

（五）めぐりあひ

今から二年以前、鈴川が學校を出た翌年の秋であッた。日は忘れたが、銀河明に、空うつくしう晴れた毘沙門の緣日の夜の事、鈴川はかねて小動城校長から紹介の手紙を貰ッてゐた、當時の左黨々報主筆、後の小動城内務大臣祕書官、桑橋賢二が矢來の寓を訪問せんと、押しかへすやうな神樂坂の人込をやッと通りぬけ、矢來下へさしかゝッた。此の邊一たいに甚

の流行言葉、肝膽相照らす、盛に經綸を行ふ、上下一致、更始一新といふやうな語が、圖らずも三十年後の新聞紙に蘇生したのであるから、血の沸き易い青年ばらが、いざや政治小說の夢を現に狂せんばかり勇み立つのも無理はない。

鈴川の今の身分は、左黨の機關新聞某社の外訪記者である。とばかりでは分かるまいが、まづこゝろみに去ッて反對黨たる右黨の、六月末の金曜日の參謀會議を覗くと、意外の現象がある。合はせものは離れもの、今に喧嘩をして分かれるまでだ、とは啻に黨外のみならず、左右兩黨の中でも、達識の士は早くも見て取ッた形勢である。されば表面にこそ互に立派は飾ッてゐれ、兩黨の參謀等が黑い腹の中では分離後の準備に必死の鎬を削ッてゐる。中にも左黨の重なる政略の一つは、小動城內務大臣が其の衝にあたッて、某本山へ或る內約を與へると共に、黨費の寄附、敵黨の牽制を本山が引き受けやうといふ契約であッた。此の事を嗅ぎ出した右黨方では、早速之れに應ずる策を講ぜんがため金曜日の會を開いたのであるが、結局證據を上げ得る望み十分であるから、正面より之れを訐いて、敵の計畫を破ると共に、之れを提げて咄嗟其の本營に迫らうといふことに歸した。それには右黨中老猾第一を以ッて推される、水無瀨といふ參謀が、責任を帶びて明言したことがある。

「我輩に、殆ど十年來養ひ來ッて、曾ッて一度も放ッたことのない一つの潛勢力があるのぢや、それを此の機會に試みて見やうと思ふから、まア、一週間ばかり我輩に任せて下さい。屹度精しい證據をあげさせて來る。」

水無瀨が養ひ立てた潛勢力といふのは、外でもない夫の鈴川潔の一身である。鈴川は、不圖した緣で其の深沈寡默思慮周密、加ふるに決斷力に富んだ性質を、水無瀨の慧眼に見ぬがれ、あらゆる方面から手なづけられて、遂に敵黨の內情探偵といふ大任を托せられ、水盃までして、天晴功名の門に首途した、指を僂ふれば六年以前、彼れが廿三歲の折の事。而も巧み

を取り上げた。之れは鈴川が手紙を書くとき、手紙を讀むときに必ず守る格式である。

封筒の中を引き出せば、短い女文字が一通、はしたなき業とは知れど、今日のあなたさまの勝利嬉しさに、父が遺せし一腰を贈りまゐらす、思ひあたりたまふ節もあらば、あはれとおぼしめせ、との趣意を歌ッて小包の中は見事な短刀であッた。

鈴川はしばし此の不思議な來狀の所置に困ッてゐたが、幾度か繰りかへし卷きかへして其の文意を味ッた後、決然として思ひ定めた如く、短刀をば深く葛籠の中に納め、手紙と封筒とを一しごきにして、かたへの古火鉢をひきよせ、マッチ一本の灰にしてしまッた。これも鈴川一家の格式で。

（四）政治小說

同じ年の七月、鈴川は優等の成績を以て學校を出た。寄宿舍の前の田圃には、春の日を刺客傳に暮す人もなく、その傍に佇む姉妹の娘も見えずなッて、寒暑こゝに三年。

藩閥打破といふ簡短な旗幟の下に、左黨右黨が聯合して、一擧內閣を乘り取ッた際のことに、話は移るが、何にもせよ、十數年來犬猿の如く敵視してゐた兩黨の首領が、一堂に手を握ッて肝膽相照すといふのであるから、天下の人心は何となく活氣を帶びて來る、昨日まで花の霞であッたものが、宵の一雨にすッかり青葉の山となッたやうに、眼が淸々する。平生から經國美談や佳人の奇遇に枕藉して、春の如き功名を夢みてゐる若殿原が、半夜しば〳〵衾を蹴ッて起ッたり、淋漓酒を被ッて悲歌するのを見るにつけ、兎に角世の中は二三十年も若がへッたやうに思はれた。明治ッ兒には、たゞ歷史の中でのみ讀むことの出來る、そして維新革命の歷史を讀んで此等の文字に到るごとに、髣髴として當時を想像するを禁じ得ない幾多

ならぬ。まァ考へても見たまへ。僕が婦人なんぞ態々つれて來て、その前で朋友を負かして見せるなんて、そんな醜陋極まッた事が、劍道の手前に對しても出來やうか。」
「醜陋であるかないかは、僕は知らんことだが、ゐゝさ、兎に角昨日の勝敗は僕が負に違ひないのだから、近い内今一本ほんとうに立ち合ッて、雌雄を決しやうではないか。其の上僕が敗ければ潔く君の門に入學する、小さいことを愚圖々々言ッてゐては、人間壽命が縮まる。僕はそんな事大きらひさ。」
「鈴川君、それ程に潔白なら、何ぜ今まで隱しだてをしてゐて、昨日になッてあんなだしぬけな事をしたのだ。此方はみんな手心が分からんから、極端に言へばだまし討も同じことだ。」
負けた連中が口を添へる。
「だまし討？。」
と鈴川は顏をねじ向けて一睨したが、口を噤んで控へる。桃の井は、
「だまし討といふのはいかんさ。昨日の試合については、一言の非難すべき點もないといふことは、教師も明言してゐる。それを勝ッたものが負けたものゝ所へ詫に來たり、大義名分の吹聽に來たりするのは、却ッて、をかしいぢやないか。」
これほど言ッても、不淡泊なことを言ふなら、よし、それまでだと、鈴川は席を辭した。中心の不快はます〳〵募る。
寄宿舍に歸ると、小使が代ッて受取ッて置いた市内配達の小包と、外に手紙が一通、宛は政法學校寄宿舍にて鈴川潔様とあッて、手蹟は雙方とも同じ優形の文字であるが、裏に差出人の名所がない。訝かりながら我が室に持ち歸ッて、先づ封書から裂かうとして、忽ち氣がつき、四方の障子を閉て切ッて、室内に人氣のないのを見定め、靜かに机の前に座ッて、小刀

で溜で面をぬいだとき、ねー君、鈴川、互に見合す顔さ、おゝ嬉しいも口の内。」

道部といふのが、ひとりで喋ッてゐると、桃の井は遮ぎッて、

「君はいかん。我々大いに尙武の氣風を興さんければならんものが、そんな柔弱な話なんかしては甚だいかん。まア一杯飮め。僕といへどもそりや勿論木石に非ずさ。けれども僕は女色を愛せん。ねー鈴川、君はどッちやだ。」

傍の無駄口家が、

「鈴川は自然を愛す。」

「但し女子は此の限りにあらず。」

鈴川はうるさいと思ッたが、遁らぬ態度で桃の井の方に向き、

「僕は君を武士と見こんで言ふが、昨日の立會に僕が野心があッたやうに思はれては、實に迷惑する。たゞ寄宿組があんまり情ないと思ッたから、一時の感情で飛び出す氣になッたまでゞ、僕が女を連れて來てそれに見せやうとしたなんて、そんな卑劣な考は、この鈴川潔には徽塵もない。どうか君、僕が一個人の手柄のためとか、まして女のため何うといふやうな考では決して無いといふことを承認して吳れ給へ。」

「そんな事はどうでもゑゝではないか。僕がさう認めると言ッた所で、はたからさう見て吳れんければつまるまいし、たとへ僕は認めんでも、君の心さへ實際その通りであれば、疚しい所はないぢやないか。」

「いや、はたからは何う見やうと、僕は構はないつもりだが、君にだけは、どうも自分を賣ッたやうに思はれたくない。君がさう思ッて居る間は、僕はつまり、君の精神に對して迫害を加へつゝあると同じことで、僕は永遠の罪人にならなければ

とはッきりせし調子。周圍からは早速飛ぶやうに杯が集まッて來る。されど鈴川は初めから、

「僕は一滴も飲まない。」

の一本鎗で、群がる杯を愛相も容赦もなく、片端から拂ひのけた。斷わるべきものは斷々乎としてことわるといふのが彼れの主義であるから。

すると今度は、十分に酒氣を帶びた連中のことゝて、鈴川をひやかしにかゝる。殆んど彼れをして口を開かしむる餘地が無い。

「鈴川、先きも言ッてた所だが、昨日の試合はたしかに見せばえがしたよ、あの美人は一體どういふ關係の人だい。保證人の娘で君の姪とでもいふのか。いゝ加減に白をきれよ。えゝ鈴川。」

鈴川は以ての外といふ口ぶり、を打ち消し、

「嘘をつけ。君が隱しても先方で自白してゐるから駄目だ。我輩初めから場中第一の美人と睨んで置いたから、始終其の擧動に注目してゐたのだ。すると爭へないぢやないか、彼奴めの眼が鈴川の姿を認めてからといふものは、他見もしないで、前の女の肩に半顏を隱すやうにして、一心に鈴川の顏ばかり見てゐるやうぢやないか。」

「いョ、氣をたしかに持て。」

傍から鈴川の背をぴしやり。鈴川はたゞ苦笑する。蓋し鈴川が斯ういふ場合に處する唯一の方策は、常に苦笑の外ないのであッた。

「それであの試合の時なぞと來ると、顏をほんのり紅くして、前の女に倚りかゝるやうにして見てゐたが、愈々試合も濟ん

「ゑエ構ふものか。己れの志さへ高ければそれでいゝのだ。天地に俯仰して耻づる所は無い。」

無理に蒲團を引ッかぶれば、此の間ばかりの燈光も消える。

翌日の某新聞紙には、昨日の運動會の記事が半段ばかりも出てゐて、その大部分は鈴川の飛込試合の一落を、昔ながら道場破りといふ格に、おもしろく書き立てゝあッた。

鈴川は不斷から自分の名の、善悪ともに人の口に上るのを嫌ッてゐる。まして新聞紙と聞いたのであるから、尠からず安からぬ容子で、わざ〱其の新聞紙持て來し友人には、ろくな挨拶もせず、烏渡走り讀にして直ぐ抛り出したが。

「昨日は疲れたでせう。」

「君は何所で稽古したのだ。」

など常は口利いたこともない者まで、うるさく訪ね來て話しかけるので、そこ〱に何所へか避けてしまッた。

鈴川の行く先は、神樂坂近くの桃の井が下宿。四疊半ながら小綺麗な一室に、桃の井は同臭味の三四人と、ちやうど今朝から飲み續けてゐる。昨日の鬱憤は氣焔となッて盛に四筵を驚かす、その中へ、鈴川の這入ッて來るのを、主人は、ちらと尻眼で見たが、「失敬」と、先から爲て來る挨拶を知らぬふりに、喋りつゞけただけ喋ッてしまひ、さて鈴川の體の据ッた頃こちらから態とらしく、

「やア失敬々々。」

と居ずまひ直して挨拶する。虚を衝かれて鈴川も一寸はまごつきしが、直ぐ落ちついて、苦笑と共に、

「昨日は失敬した。」

のも、何時かひッそとなり、今のさきどや〳〵と群の上戸書生が歸ッてからは火の番の木の音の外、耳に遮ぎるものもない。

鈴川は今日しも運動會で桃の井以下六人まで叩き伏せ、竹刀投げすてゝ具足を着かへるや否、そこ〳〵に人ごみの中を潛りぬけて寄宿舍に歸ッたが、どういふものか心が穩でない。あれほどの晴業をしながら、不快でたまらぬ。夜に入ッてからも、書物には對してゐながら、考はあらぬかたに外れてゐる。

頰杖ついて森閑と燈火を見まもりゐれば、窓前の丸太圍に沿うた小溝の流が、晝は世間の騷がしいのに壓されて、人の耳にも留まらぬ、さゝやかな鈴ふるやうな音をたてゝ段々聞きすましゆくと、何時か谿川の音のやうに聞かれる。しばし氣が紛れると、忽ち念頭に思ひもかけぬ女の姿浮んで、とき色半巾の隅を口に咬へたまゝ、じッと我が方を見るやうにおぼえて、はてな見たやうなと思ふと、正しく田圃で顏見し姉娘である。けれど鈴川にはそれが何の意味もない。あの女は今日も來てゐたやうだがと、小首は傾けたれど、とき色絹を今日見たのであるといふことは、全く彼れの注意に殘ッてゐぬらしい。

今日といふ一句に、鈴川はまた忽ち想像を跡に戻し、何だか不快なといふ面持で考へる。

「己れは決して自分の野心のためにあんな事をしたのでは無い。寄宿舍黨のために弱きを助けたのみである。けれども何うも皆はさう取ッて呉れぬやうだ。外の奴等はどうでもいゝが、桃の井が誤解して怨むであらうと思ふと、不快でたまらぬ。義のためなら、私怨ぐらゐ買ッたッて少しも恐るゝに足らんが、併し誤解されるのはいやだ。己れは決して己れの名譽のために桃の井の功を傷つけたのではない。私慾のために、友を擊つ、決してそんな意味では。」

と覺えず口に出した鈴川は、此の一刹那に於て、深くも胸中に蟠ッてゐる一塊の大祕密に、我れから試鐵を下して、其の響を試みたのである。そして驚いて自ら心の耳を塞がうとした。

さしもに廣い野原が、たゞ鈴川一人の噂に埋もれて、やがて名譽ある來賓席婦人席の前に賞品授與式の準備が整ふと、山と積みあげた賞品臺の下には、審査長の呼出に應じて、當日のチャンピオンが立ちかはり入りかはり見參する。その中にも鈴川とは何んな男か、定めて肩を山のやうにして出て來るであらうが、早く見たいものだと、暗に待ち構へてゐると、審査長が「鈴川潔君」と高らかな一聲、喝采は例によッて四方から起る。けれど不思議!、一分たッても三分たッても、本人の姿は見えぬ。しばらくは審査長も此の名譽ある選手のために、賞品を兩手に捧げたまゝ、跡をひかへて、キョロ〳〵見まはしてゐたが、會員の中から、

「鈴川は擊劍が濟むと直ぐ歸ッちやッた。」

「賞品なんざつまらないッて、往ッちやッた。」

と怒鳴る聲がして、審査長も張のぬけたやうに「跡廻し」と叫んで其の次ぎへ移ッた。之れを潮ざかひに、會場の人氣は一時に崩れ、

「もう何も無いのだらう。これから酒だ〳〵。」

「他の褒美を貰ふのを見て居る奴があるか。」

と今まで見てゐたものまでが、雪崩を打ッて散亂する。來賓も五人三人と減り行く中に、彼の美人の姿も消えてしまッた。

(三) 短刀

寄宿舍は運動會の勞れといふので、九時頃からは水を打ッたやうに寢靜まる。時々度はづれの大きな聲で詩吟の聞こえた

「驚いた。何時稽古したのだらう。彼奴が擊劍をやらうとは思はなかッたね。」
「鈴川のやることは、みんな突然だから不思議だ。三年の間擊劍のことなぞは噯にも出さなかッたがねー。」
「鈴川君負けるなーッ。」
「君の任や重し。」
「桃の井しッかりやれ。」
「何方も負けるな。」
此方の天布に設けられた婦人席には、絲織づくめの安風俗もあれば、綴織の帶の間より、寶石輝く指先に、十六形の金時計扳き出したまふ令夫人もある。其の中に、先ほどから鈴川の擧動を一心に見つめゐる一人の美人は、紛ひもなく、彼の丘のほとりで見かけた其の人、今日は身なりも改まッて、秋の星のやうな淸しい眼に、瞬一つせず、とき色の絹手巾を口にあてたまゝ、頰のあたりに稍上氣の色を見せてゐる。
彼方では、「やー」「やー」の掛聲に氣合を窺ふ兩士、隙やあッて、桃の井がお面と叫ぶ一聲を口火に、橫面、左へ受けて、押し返す、衝く、半身に開く、二三合激しい竹刀の音がすると見る間に、いらッて上段から疊みかけて來る桃の井、隙を潜ッて、あざやかな「お胴」の一本に、勝は鈴川のものとなッた。
滿場の喝采は割れるばかり。
牛門園からは、此の耻辱雪がざるべからずといふので、豫備の精兵を繰り出したが、殘る六人まで殆ど同じやうな敗を取ッて、當日第一の名譽は、遂に今まで曾て一度も道場に出たことのない、意外の人によッて占められた。試合の終ッた後は、

の兩軍試合まで演じ進んで、この學校の二大擊劍黨たる寄宿組と牛門團との七人拔勝負が將に終らんとしてゐる。此の勝負には、敵の虛實を計ッて身方の强卒弱卒を巧に配合するのが軍略で、寄宿組は功を急いだため、目ぼしい使ひ手は大抵初めの内に傷いてしまひ、牛門團の猛將桃の井が出た頃には、手に立つものが殆ど無い。今一人で七人といふ所で、桃の井は勝ち誇ッた獅子の如く、竹刀を杖に試合場の眞中に突ッ立ち、四方を睨めまはしてゐる。牛門團萬歲、桃の井君萬歲の聲は、崩れるやうに見物の中から湧いて來る。

兎見ると、休憩所の傍に立ッてゐた一群の書生の中から、つか／＼と寄宿組の溜へ進み出た小作りの男がある。何か一言三言指揮長と言葉を交し、

「僕が引き受けた。」

と手早く着物を脱ぎ、シャツに袴一つ、垂れ、胴、面、籠手と身仕度形のごとく、肩を一ゆすり、竹刀押ッ取ッて、一二三度空を切り、道場に跳り上ッた。驚いたのは桃の井、面の奧から、ふくらんだ聲で、

「貴樣鈴川ぢやないか。氣でも違やせんか。」

「氣の毒だが、寄宿舍の名譽のためだ。僕が相手になる。サア來い。」

「貴樣に竹刀持ッたことがあるとは驚いた。ゑゝか。」

桃の井は眞向から、諸手上段に振りかぶッて來る。鈴川は間合を計ッて、尋常に、精眼につけ、

「やーッ。」

とかける矢聲がすでに昨日今日のものではない。

其の翌日も、同じ時刻、同じ丘のほとりに姉妹の姿が見える。妹のリボン昨日の如く、姉はさし傾けた蝙蝠の蔭から、結ひたての島田うつくしう、されども鈴川は今日は出て來ぬ。

(二)　運　動　會

「牛門團萬歳、桃の井君萬歳。」

「三年級大勝利。」

「彼奴桃の井といふのか。三年？。馬鹿に强いぢやないか。」

「鈴川の友達だ。」

「さァ、もう一人でいよ〳〵七人。今日の月桂冠は彼奴に落ちるかなァ。」

「寄宿組は顔色なしだね。」

「彼奴を叩き伏するものが一人も無いちうのは、殘念至極ぢや。」

「寄宿組――、しッかりしないと負けるぞ――。」

「河田や本山は一體どうしたのだ。初めの勢は何所へいッた。」

「もう出手が無いぢやァないか。塚原――、益木――。」

こゝは政法學校の春季大運動會場である。當日の重なる餘興中でも、擊劍は豫てから此の學校の特色の一つで、校内に道場まで建ッてる程であるから、競走よりも、ベースボールよりも、人氣は最も此の方面に集まッて來る。今しも擊劍は最後

「御免なすッて。」

と輕く詫の一禮したが、首を上げ〳〵、上目づかひにそッと顔見あはすと、男も色白な、凛々しい眼で此方を見つめるので、さッと鼻白んで、あちらを向く。ちやうど其の途端に、露ちやんと呼ばれた七八歳の妹が、委細かまはず丘を這ひ上ッて、向うに越さうとして、一足踏みすべらすと見えた。

「あゝ、危い。」

と駈け出すまでもなく、鈴川は跳ね起きて、猿臂を伸ばし、肩を捉ッて引き戻す。引き戻された妹は不平の顔つき、「いゝのよ」と言ひたげな口元から眼元の見事なのが、姉をそのまゝに。紅のリボンゆるく、房々とした髪に春風うたせて、鈴川を見あげる。鈴川は肩に手をかけたまゝ、覺えず打ち笑んで埃のついた膝のあたりを拂ッてやり、

「そーれ。」

と姉の傍へ抱き下した。菜種畑から、暖い風につれて、佳い香がこぼれると見れば、一番の大きな蝶が、眞盛りの花の中な、潜ッては出て來て、其の花の色に己が羽を染めやうとでもしてゐるやう。物心ついてから、世の中を險しいものとのみ覺悟した鈴川の硬い胸に、この時ばかりは暖い血が傳はるやうに覺えて、

「轉んぢやいけない。」

と姉が十分嬌羞を寄せた挨拶を後に、鈴川は鷹揚な足取りで學校の方へ歩み去ッた。しばし見送ッてゐた姉は、

「露ちやん、あちらへ行くのですよ。」

と手を引いてこれも野川の土手を。

い、其の證據には彼れが隣室に女義太夫論やビーヤホールの批評の姦しいとき、ふいと外に出て、人げの少ない野原などに、所謂天然を友とするにあたッて、必ず懷から取り出されるのは、史記の刺客傳である。彼れは人間が嫌ひどころの騷ではない。荊軻だの、聶政だの、豫讓だのと、氣味のわるい、匕首から生血の滴るやうな人間が好きである。

刺客傳は兎に角鈴川の愛讀書で、中にも荊軻傳の、あの、樊將軍の首を得て以て秦王に獻ぜん、の邊からが殊に氣に入ッてゐる。今日も例の如く丘の上に腹ばッて、小さい、さりながら力のはいッた聲に悲壯慷慨の調子を籠めて、誦し來たッたのは彼の一節。

「且つ一匕首を提げて不測の强秦に入る。僕の留まる所以のものは、吾が客を待ッて與に倶にせんとすればなり。今太子之れを遲しとす。請ふ辭決せん矣。遂に發す。太子及び賓客の其の事を知るもの皆衣冠を白うして以て之を送る。易水の上に至ッて、既に祖して道を取る。高漸離筑を撃つ。荊軻和して而して歌ふ。變徵の聲をなす。士皆涙を垂れて涕泣す。又前んで歌うて曰はく、風蕭々兮易水寒し、壯士一たび去る兮復た還らずと。復た羽聲を爲して慷慨す。士皆瞋目して、髮盡く上り冠を指す。」

我れを忘れて朗誦する、覺えず聲の高まッたとき、

「露ちやんッ、いけませんよ。」

だしぬけに頭から浴せられた、しかも艶いた聲に、鈴川はさながらに夜撃でも喰ッた如くあわてゝ、讀みさしの書物を懷に押しこみ、半身を起こした。そして横手を見れば、菜種畑の傍に十七八の女が立ッてゐる。

女は鈴川が狼狽した容子のをかしかッたせいか、目だッて美しい眼元に微笑を殘して、

（一）其の春の頃

帝都を西にはづれて、郡部に接した一廓の大建物、といへば讀者は直ちに合點せられやう。當時の大政黨、左黨の副總理小動城冠吾が校長として、優に一千の書生を養ひつゝある、彼の政法學校である。

說き出す寄宿舍の春の頃。門前は五間の大道を隔てゝ、見わたす限り一面の水田につゞき、碁盤の目を盛ッたやうな畦の限には、若草のみどり煙るが如く、景色は今、一年のうちで最も眺ゆたかな或る日のことであッた。折々水の乾いた田面には、蓮花草がきちやうめんに赤い市松を染めて、眞中を野川の兩堤が、際だッて青い平行線をつくり、遙のあなたから斜に流れる。その堤を下へ〳〵と見送ッて行けば、摘草の小娘やらお乳母やら日高すくひの腕白ものやら、目まぐるしい程に通りぬけ、少し人氣が絕えたかと見ると、目も冴えるばかりに黃な菜種畑が二三枚、それから小高い枯草の丘になッて、曲れば竹藪もあるらしい、菜種畑の邊からは霞みはじめて、よく見えぬが、その丘の上に寢そべッて、何か讀んでゐる一人の書生がある。

凡そ寄宿舍の書生といふもの、晩餐後の腹なやしに郊外に出ては、風聲籟音を相手に、獨演說の喉を鍛へる特志家もあれば、新綠の森かげにセレクトポエムスを懐にして、麥畑から揚げる雲雀の行衞に見ほれる感情家もある。丘の上に寢そべッてゐるのは、それ等とも違ッて、名は鈴川潔といふ。鈴川は人間よりも天然が好だ、今に哲學者にでもなるだらうと、同窓のものは言ッてゐるが、なるほど彼れには、同じクラスの中でも、取りわけ親友といふものはない。寄宿舍でも常に北向の陰氣な室や便所の隣といふやうな、望み手のない所はかりを選んで、獨居するのを好む。けれども彼れは決して變物ではな

待つ間あはれ

か、兵糧の種切？。なんだジャゴ〳〵いはせてる所を見れァ、さうでもないかネ。それではいよ〳〵辭退するわけはない筈だが、待てよ、ㇾコ的の小言に慄へあがッたといふやうな事かネ。」

こゝに到ッて、悪魔、悪魔、大悪魔。縛の繩は切れ去ッて、

「そんなに云ふなら、糞ッ、是れで尚一勝負やッて見るか。明日の横濱だッて、實は浮雲ッかしいものだ。此方で埒が明けばその方が早手まはし。どうせ乘りかけた船だ、どうなるものかい。」

つかひ殘りの金を攫んで立ち上りし金次郎は、帽子を取りて、

「よし、今行くよ。」

と熊井を先に出し、一足戻りて、スャ〳〵と罪も報もなく寢入りたる娘の顏を覗き込み、

「留守をしてゐろよ。」

と言ふ口は優しけれど、眼には涙はなく、たゞ神を爛らす毒燄の輝くが見ゆるのみ。やがて夫の集會所の二階に、金次郎の姿は見られぬ。

斯かることゝは知らず、程經て夫と愛兒が驫着を抱き、イソ〳〵歸り來たりしお千代、夫の居らぬに不審して、娘を搖りさまし、問へども答へんやうはなく、

「エヽ口惜しいッ、また騙されたか。」

と果はさめ〴〵と我が兒の頰に涙をそゝぐ。あはれ可憐の母子が行く末は。

も行ひるしやうに、仰天して立ちあがり、あはて惑ひながらやう〳〵氣を鎭めて、

「お千代か。」

と呼べば、

「わたくし。御主人お一人？。占めた。」

とズッと這入るは、花友達の熊井なり。金次郎のあはてたる樣子をば、わざと知らぬふりに、

「今夜は大將いよ〳〵ヘコタレ込んでしまッたネ。何故出馬が遲いと、皆が待ち焦れてゐるから、拙者がお使者に立ッた次第だ。サア來たまへ〳〵。」

金次郎は手を振り、

「もう〳〵御免々々。少し心願の筋があッて當分休むから、跡の所をよろしく賴む。」

「オヤ〳〵是れは驚いた、異な事を承はるものかな。こゝ一戰で天下別目といふ所で、逃け出すなんぞは怪しからん。サアサア出たり〳〵。僕がたッてお供をする、マアサ來て御覽ぜよ、今夜は屹度勝てるから。」

「マアさう引ッぱらなくともいゝ。君のは口と手と一緒に動くから恐ろしい。もッと靜かにしやうぢやないか。」

「來て貰はないと連帶責任の私が迷惑しますから、是非に來ていたゞきませう。なんかんと言ふのは嘘だが、この方角が今夜は滅法素敵に景氣がいゝから、ちよッと來て見なさいといふことよ。」

「今夜はすこし譯があるのだからネ。また行くよ、また。」

「わけとは何んな毛？。赤毛か縮れッ毛か。たゞしは怖氣といふ奴につかまッたのか。さうだらう。さうでなければコレ

「フム、さうだネ、こいつは一番失策ッた。こゝに二圓足らず殘ッてるが、これでどうかなるまいか。」

「貰ッた紬を疋で五圓は貸すでせうから、あれと妾のこの羽織とで、あなたの一欒が出せるかも知れない。餘りがあッたら、お美代の黄八のちやん〳〵と綿入を出してやりませう、可愛さうだから。妾のは内にゐるのだから要りませんよ。そのおあしは取ッとかないと、明日いるでせう。」

「さうだネ。では氣の毒だがさうして貰はうか。」

「わたしちよッと往ッて來ますよ。」

牢屋のやうなる質屋が格子も、馴れてはさして物うからぬか、お千代は風呂敷包を小腋に甲斐々々しく出で行く。

あとにボンヤリと煙草くゆらす金次郎は、一人となりて急に物さびしく、初の内は、妻子の事明日横濱に行きての事など考へ居しが、不圖昨宵の今頃はと思ひ寄る途端、一念無明、身は早くも神田明神下なる集會所の二階にありて、其の場の景色あり〳〵と眼先に浮ぶ。

車座になりたる毎時もの連中には、シヤツ一枚の半肌ぬぎになりたる熊井、ドテラに濱縮緬まきつけたる大須賀、さては銀見勳章の和倉が「エ、ツ」と勵しき舌打して「サ早くやッた〳〵」と促せば、向うなるは得意らしく押しだまりて、ズラリと空素の手七枚を場に曝す。バチリ〳〵と打つ札の音、手の冴は、いづれもこの道の黑人とおぼしく、互に負けじと競ふより、憤怨の氣、鬪諍の相はおのづから座中に充ち滿ち、焰となりて立ち騰るかと異しまれぬ。

金次郎は、かゝる幻影の中に、一意たゞ過ぎし勝負に氣をいらち、あの札が一枚遲く起きたらば、あの場で大須賀に出來役なかりせばなど、あさましき想像に耽りゐたるが、突然ガラリと格子戸の明く音して、人の訪ふに、金次郎は、惡事にて

「さうもなりますまいけれど、少し氣を落ちつけて、引ッこたへる工風をして下されば。」

「屹度引ッこたへるよ、安心しナ。いゝかい美坊、これからお父ッさんが善いべゞをどッさり拵へてやるぞ。今日はいゝ天氣だから、久しぶりにこの兒をつれて、淺草へでも行ッて見やうぢやないか。」

「だからあなたは氣樂だといふのですよ。そんな事どころぢやないぢやありませんか。おあしもありもしないで。」

「そこに五圓あるぢやないか、ナニ五圓や三圓の金は何時でも出來らアネ。着物か、乃公の着物？　乃公のはこれで澤山だが、お前のが無からう。貰ッたのがある？、ならそれで間にあはすとして、お美代のは可愛さうだがしかたがない。在り合はせで我慢するサ。今に善いのを拵へてやるからナ。さう〳〵赤い見事なのを拵へてやる。」

斯くてこの日半日は、上野山王臺の望遠鏡、商品陳列所さては淺草仲見世、勸工場をも素見かし、寺内の鳩に豆を與れて、花屋敷より十二階、江川の玉乘に日を暮らし、歸りは鳥八十に一本かたむけて、兒供の土產も大分嵩ばるやうになれば、五圓の金も殘りすくなになりて、六時過ぐる頃親子三人睦じく打ちつれ家に戻りぬ。

四

お美代を寢つかせてさて、後は夫婦さしむかひ、しんみりと世帶話にうつり、女のこま〴〵と胸算たてゝ見するを、男は微醉の氣も聲も大きく、

「明日濱へ行きア、年越の金ぐらゐ摑んで來るのは何でもないから、安心しなさいヨ。」

「濱へ行くといッても、その服裝ぢや可ますまい？。」

といふ傍より女房が、

「アラ可けませんよ、お父ッさんの寢んねのお邪魔をしては。」

所詮穩には歸るまじと思ひし妻子の、思ひがけず歸り來りしに、男は疑も淺く、胸中の不平はおのづと銷えて、こなたより言葉をかくれば、お千代も意外の首尾と心うれしく、をかしき機合に、二人が仲は昨日までいがみ合ひし夫婦とも見えぬまで和ぎたり。

お千代は姉の家へたゞ行きし體に言ひこしらへ、貰ひし品など取り出して、自分も見夫にも見すれば、

「私はまた、愛憎をつかして出て行かれたと思ッたから、一杯あほッて、元氣をつけ、トロ〳〵とやッた所だ。さうでなくてまづ〳〵めでたいといふものだが、時に、今日といふ今日、乃公はふッつりと博奕を止めた。何も金がなくッてそういふのではないよ。今度こそ金輪際、花といふものに手は觸れまいといふ心願を立てたのだ。今迄は實にお前に苦勞をさせて濟まなかッた、あやまるから、堪忍して吳れ。」

「またお極まりが始まッた、もう騙されませんよ。」

「イヽエ嘘や冗談ではなく、今度こそ決して出かけないから見てゐて吳れ。牛込へもあやまりに行くつもりだ。」

「本當に止めてさへ下されば、何もあやまるには及びませんワ。けれどもあんまり話が立派すぎるから、妾はまだ何とも得言はない。あなたの今度こそも久しいのだから、今は本當にさう思ッてゐても、氣がかはれば何にもならないのだもの。」

「今までは全く私が惡かッた。其の時には是れッきりと思ふのだけれども、ツイ金を握ると、惡魔めがフラ〳〵と連れ出しやがッて、實面目次第もない。これからは私は一切金を預からないことにしやう。」

「それは信州の叔母さんから、妾とお前に一反づゝお歳暮だといッて、小包で昨日屆いたのだけれど、妾は要らないから、一疋みんなお前に上げませう。それからこの秋田八丈は、妾には少し華手すぎるから、お前持ッて歸ッて、ちよい〳〵着にするがいゝ。ゆきたけもソックリお前には合ふのだから。」

外に五圓札一枚、たやすからぬ土產を持たせて、無事にお千代を歸らせぬ。

三

お千代は、わが家のみを憂き世とも定めかね、風に片羽折りし蝶の、たよる花蔭にも蜘蛛は巢を張る思ひして、しほ〳〵ともと來し方へ足を向けぬ。

この上の願には、どうぞ夫の留守の間に歸りたしと、それ一念に道を急ぎしが、やがて我が家の見ゆる程ともなれば、我より先に、戶口の締は明きゐたり。夫は最早歸りしかと、ドキリとする胸を抑へ、一足は入口にためらひつゝも、人の見る目と思ひ切ッて内に入りぬ。

見れば家の内は、居間の方のみ片あかりして、夫は蒲團を引ッかつぎ熟睡の體なり。腹立ちゆゑの空寢入かと、態とその傍に背中の兒供をおろせば、お美代は喜びて、

「お父ッちやん、お父ッちやん。」

と寢たる父の首のあたりにまつはる。不圖眼をさませし金次郎も、覺えずニコリとして。

「オゝ美いちやんか。」

「姉さん妾はそれが何よりも悲しくて。」

と妹は乳房を含みたる我兒の上に泣き伏しぬ。

「これは無理にとは言はないが、お前どうお思ひか、妾は内證でこの暮は何うともしやうから、今少し我慢して、春になツて氣が變ッたら、また善い思案も出はすまいか。先を考へれば、母に附かうが、父親に附かうが、どの途不便なはその兒だから、それのある限り、お前の涙の乾く瀬はなからうと思ふがねエ。」

暫時返事にたゆたひゐしが、

「妾もさう思ひますノ。姉さんにも色々心配をかけて濟まないし………、妾今日は歸ることにしませう。また春になツてネ、相談に來ます。」

泣顏を收めて、キッパリとしたる妹の返事に、姉は氣味惡く、

「達てさうおしといふのでは無いよ、惡くお取りでないよ。」

「そんな事はなくツてよ姉さん。妾も先刻から色々考へて見たのですが、やッぱし今日は歸ッた方がよさゝうですから、さう極めたのですよ。成るたけ家で歸ッて來ない前が、都合がようござんすから、姉さん憚りさま負はせて頂戴ナ。サア坊やまた負だよ。」

妹の立ちかゝるに、

「ぢやさうおし、妾がその内行くから、必ず無分別な事をしてはなりませんよ。ア、さうだッけ、鳥渡お待ち。」

と立ち上り、簞笥より奉書に包みし反物を取り出して妹の前にさし置き、自分は倚他の抽斗を探しながら、

ら留めて置きましたとも言ッて居られまいし。困ッたねちやうど生憎と家のが居なくて。

「兄さんもひどいのねエ、あんなものになんか迷ひこんで。あれこそ思ふさまいぢめてやると、少しは治るでせうに、姉さんがあんまりおとなし過ぎるのですよ。」

姉は何とも答なく、兩手に顔をふくらませ、襟もて顔を埋めながら、打ち沈みて見えたるが、

「他の事と思へば自分の事、自分の事と思へば他の事。ほんとに妾等二人が不仕合に生て來たのだと思ふと、世の中が厭になッてしまふねエ。こんな事なら一ッそ二人が尼にでもなッて、人の來ない靜かな所に住んでゐたら、嘸サバ〱して快い心持だらうけれど。」

「妾やしみ〴〵さう思ふことがありますよ。けれども姉さんはまだ、家までがどうといふのではなし、親類中寄ッて兄さんにとッくり異見でもして貰ッたら、また善くなる時節もありませう。そんな心細い事なんぞ、怪我にも思はないでゝ下さいよ。妾はどうせ斯うなッたものだから、構はないけれど、姉さんなんざ可愛さうだ。」

言ふお千代の眼頭には、涙にじみたり。

「妾よりかお前こそ、兒供はあるし、緣づいてからといふもの、貧乏のしどほしで、いやが上の苦勞をお仕だと思へば、可愛さうだ。先刻來た須藤のお嫁さんなんぞ、お前より歳は一つ上だけれども、歳暮といへばそれ相應に形づけて、糸織に八丈の羽織位は引ッかけて來るのに、見すぼらしいお前のその風俗は、これが妾の妹かと思ふと、涙がこぼれます。」

「妾は構はないけどネ、他所の兒供を見るたびに、この兒が可愛さうでなりませんワ。」

「金さんも不心得な人ではある。自分の道樂ばッかりに、可愛ざかりの初子を、一生父無し子か母無し子にしてしまふ。」

と疊みかくるに、妹はやゝしばしためらひ、
「妾は當分この兒を連れて、一人で居やうと思ひますノ。」
「何うして?。」
「何うといッて、妾も今までは、この兒が可愛そうばかりに、辛抱もして見たのだけれど、あゝしてゐては、とても末始終の見込が立ちません。昨日もとッつかまへて、言ふだけの事は言ッて見たのですけれど、ブン〳〵怒るばかしで丸で氣違ですもの、手のつけやうがありませんから、妾や今の内に覺悟を極めやうと思ふのですよ。」
姉は聞き了りて、火鉢に一服はたき、
「あれから久しく音沙汰がないから、妾はまた少しは善くなッたのかと思ッてゐたが、さういふ風では困ッたものねエ。何うしていゝものか………。それでお前は、どういふことにして來て?。」
「今朝まだ歸ッて來ない内に出て來たのですよ。」
「たゞ默ッて?。」
「エヽ。」
「可けないねエ、お前。出るなら出るで、何とか話を極めてからでなくては、たゞ默ッて逃げ出して來て、跡で何と言はれても、仕方が無からうぢやないか。」
「でも妾はもう、そんな事は考へて居られないのですもの。隣近所へだッて、合はす顏はありャしない。」
「それはさうでもあらうけどネ、仲人(なかうど)といふものもあるのだから、猫の兒の遣取かなんぞのやうに、逃げ出して來ましたか

にも辛けれど、さりとて我が家に居て方のつくあてもなければと、やッとの思ひにて、高き敷居を跨ぎぬ。
ソッと勝手口より上がれば、ちやうど今がた歳暮の客の歸りしあとにて、床の間には三つ四つ大きやかなる折の積み重ねたるが見通さるゝ、此方の茶の間に姉の冴々したる聲、
「アラ、何ですネ、だしぬけに這入ッて來て。美ちやんは寢てるかい、オヽ起きてます〳〵。」
と立ちかゝり、背中の兒供をあやさんとせしが、妹のベタリと座りて、
「今日は。」
と挨拶する樣子の打ち萎れたるに、不圖心づき、己れも自然と常の落ちつきたる調子に戻りて、
「お前この節は、家は何んな樣子かヱ。大層顏色が惡いやうだが、どうかしたのでは無いかヱ。」
言ひ〳〵妹母子が憫れの身の廻りに目をつけて、
「マアこの寒いのに、肩掛も着ないで。お美代が鼻頭を眞赤にしてゐます。早く下して暖をさせてやるがいゝ、炬燵に火を入れてやりませう。」
お千代は我子を前に抱き取りながら、
「いゝえお火鉢で澤山。今日はネ、少し姉さんに御相談があッて來たのですが、姉さんお一人?。」
「アヽ、家のにもネエ、困ッちまふよ。昨夕出たきりまだ歸らないノ。」
言ひかけしが、跡をひかへて、
「相談とは?。」

と、覺悟は極めて歸ッたものゝ、斯うなると何だか拍子ぬけがしたやうだ。併し彼奴も彼奴だな。人の一生は何時芽の吹くまいにも限らないに、是れが昨日や今日のくッつき夫婦といふではなし、兒供まである仲を、振りすてゝ往ッちまふなんて、氣の强い奴だ………。クョ〳〵するでもあるまい。嬶が居なくなッて見れァ、要らない道具も大分ある。是れを賣り飛ばしてもう一勝負、ウンと張ッて見るのも面白い。」

口にはいことも言ッて見れど、しよげて、浮かぬ顔をして、日頃の元氣に似ず何時か沈み込む。しばらくして、フイと立ち、臺所の棚に貧乏德利の二三本弁びたる中より、酒の殘りやあると探し出し、そのまゝグウと立てゝよい程に飲み、居間の押入より夜具を一枚取り出すと見れば、ゴロリと其所に横になれり。

二

男はもと信州出の生絲仲買にて、五年前お千代といふ今の女房を貰ひ、お美代といふ兒までなして、横濱の取引先へも鎌田金次郎といふ名の少しは通りたるが、さして仕出かせしといふ程にもなき身代を、去る頃より花にかゝりて、伏せつめくりつする間に全く無くし、それにもまだ迷の夢は醒めずして、女房の諫も更に聞き入れねば、お千代も思案につき、この上はと、泣く〳〵見切をつけて、今朝しもお美代を背負ひしまゝ、固よりショール一枚ある身ならねば、これ限りの娘が着換一二枚を風呂敷に包み、牛込なる姉の許へと出で行きしなり。

姉の家とて、主人は他人なり、手元こそ少しは豐なれど、この押しつみし節季を、乳香兒かゝへて轉げ込むこと、何ばう

一

本郷弓町の兎ある家の格子戸口に立ち寄り、締まりし戸を引き試みつゝ、訝しげに小首をかしぐる男あり。昨夜一夜眠らざりし徴には、顔の色蒼う、洋燈の煤に黒ずみて、瞼險しげに、腫れ狹まりし眼は血走りたり。少しく持ち上げて引けば、入口は譯も無く明きて、やがて居間の黒戸一二枚繰る音す。あか／＼と差し込む日影に、家の中の樣子を見れば、毎時とかはりて、針箱の上は綺麗に形づき、今年四ッになる女の兒が、取り散らしたる翫具箱のさまも、今日は見えず。火鉢に手を翳せば、見事にならせし灰の中に、火の氣猶残りて、人の出で行きしはつい今しがたと思はれたり。

「買物にでも。」

と思へば常の事とて、別に怪しき筋もなき筈なれど、何故か今日は、女房の居らぬが氣にかゝり、ドカリと火鉢の前にあぐらを組みしまゝ、叉し腕に頤を埋め、しばし考へ込みし體。

「よく／＼乃公を見くびッたやうな言分が癪に障ッて、昨日飛び出す時には、あぶなく頬桁を蹴外さうとしたが、考へて見れア、向うに無理はない。此の頃のやうに、濱の方へは顔出もならず、斯う負けてばかし居ちア、家は全く立ち切れまい。昨夕こそ少しは握ッて歸らうと思ッたのが、仕舞の一場で形なしになり、到頭吟味を取り損なッて、相變らずの始末だ。世間は節季だとか、正月だとか言ッて騒いでるのに、春の仕度はおろか、兒供の祝着までまけてしまッて、明日をどうして立てる算段もつかないと來てるのだから、女房もよく／＼居たゝまれないで、昨日の言條通り、出て往ッたものらしい。今朝こそ女房にもあやまッて、フッつりと此の道は止めやう、これからといふもの、花と名のつくものには見向もすまい

花がるた

左右を見かへれば、夢でもなく、チビとヂョレンは襤褸切に石油を浸したのを束ねて提げてゐる。茫然として立ッてゐたが、夜番とは名ばかりの雇人が、今眼や醒せし、番小屋のあたりで、マッチを摺る光の見えたるに、傍の二人は仰天して、手の物投げすて、一散に舊來た方へ逃げ出す。それに氣づいて、本性に還りたる源太郎、矢庭に襤褸屑拾うて駈け出し、平屋建の主人が居間の横手に寄ッて、たゞ一本、摺りつけたマッチの火は、見る間に炎々として、風に靡き木に傳ひ、此の屋の棟を包んで、何所までもと手を延す。源太郎は逃げ出さんともせず、物蔭に隱れて、ジッと見てゐたが、家内は叫喚の聲聞え、眞先に摺り出す半鐘の音、ワーッと一なだれに響く近隣の人聲、すべて夢のやうに、突然衣服を脱ぎすてゝ、大童になるかと見れば、驀地に烟の中を潛ッて、西洋館の方へ、姿は遂に失せてしまッた。

此の火は幸に、水利のよかッた爲、十軒ばかりで燒け止ッたが、宮部の家は無論丸燒となッて、灰の中から出たのは、無慘な源太郎の屍であッた。たゞ四重五重に錠を差した寢室の宮部、取り別けかよはいお絹が、あれ程の急火に、よく安全で逃げ出したものと、雇人等が噂、恐らく源太郎が聞いたら、地獄か天堂かで、ニッコリ笑んでゐるであらう。

宮部の家は再び建てなかつた。彼れが十萬に近い財産は、宮部家最後の慈善事業として、小石川の端手に、慈善院といふ壯大の貧民學校兼育兒院のやうなものゝ基本金と、全くなッて、親子は元の下谷、さゝやかな假住居、足りるだけを安樂の世帶にして、お絹も一生女教師の望を遂げるとやら。

「ソーレ見ろ、やッぱり犬だ。」

「泥坊は嫌ひだなんて、大御層な事を言やァがる。手前に泥棒しろとは言はねえから、可いぢァねえか。」

源太郎は考へてゐたが、決心の面に血色を漲して、

「よッし、やるべえ。高利貸なんて、大きな面をしてゐても、今に見ろ、源公がマッチ一本引きやァ、門も屋敷も黒焦だぞ。やらないでよ、やらないでよ。だけども、乃公が見事にやッた日には、手前達はどうする。犬だのと、さんざ悪口ついたお禮は屹度するから、覺えて居ろよ。」

「面白い、面白い。チビ行け。ヂョレン、行け。」

第十二

夜は十二時を過ぎて、人の寢さかる頃、天色凄じく、一面の薄雲ちぎれて東に飛び、風は東南より吹き起ッて、瞬く間に暴風となり、末には大雨をも呼ぶべき景色、颯颯として木末を揉み、建物を打ち、天地を眠りの安息より引き出さんず權幕に、人はたゞ屏息して、其暴威を避くる中に、源太郎は、二人の者を引きつれ、風にすくはるゝ足元危くも、日頃馴れた宮部の門のあたりに近より、裏門より廻ッて、三人とも塀を乗り越え、難なく屋敷の中に忍び入る。此所までは、殆ど夢中であッた源太郎、不圖仰ぎ見れば、二階の窓より燈火の瞬くやうに漏るゝは、お絹の室とおぼしく、つい先程までも、此所に情ある人の面影は見られたのだ。此所はお絹の家だと思ふと、今まで勇んで居た五體忽ちに竦み上ッて、手足は硬ばるやうに思はれ、現在の所業が奇異に感じられる。

「そんな事は無いと言ッたら。お前も合點が惡い。」
默ッてゐた銀次は口を挿む。
「この野郎高利貸の娘ッ子に惚れやがッて、それで裏切りをしやがッたのだ。」
源太郎は、此の一言に血相をかへて、銀次の前に詰めより、
「銀公は、何が證據でそんな事をいふ。承知しねえぞ。」
「でも手前は、宮部の贔屓ばかりするぢやないか。乃公が這入らうとすれば、邪魔を入れやがる。放火やうと思へば、先潜りをして、早くから火の番を出させやがる。」
「何時公が邪魔をした、何時乃公が先潜りをした、手前は善い頃合な拵らへ言を言ふナ。」
「拵へ言ぢやあるめえ、銀公の言ふのが本當だ。源、手前はも少し頼もしい奴だと思ッたが、から意久地の無え野郎だナ。五十錢や三十錢の目腐れ金で、高利貸なんぞの犬になりァがッて。」
銀次と他の二人とは、何か耳打するさまで、
「それなら源公、手前が宮部とグルでないといふ證據に、己達と一緒で仕事をしないか。」
「ウムするとも、どんな仕事だ。」
「仕事といやァ仕事サ。今夜の風を幸ひ、宮部の家へ放火のだ。そして稼ぎァ、大分儲はある、チピとヂヨレンに攷けさすから、手前案内してやれ。」
「乃公は、手前達のやうに泥坊をすることは嫌ひだから、燒拂ッたッて詰らない。近所が迷惑だ。」

「嘘つけ、屹度また、宮部の屋敷へ這入り込んで、魚の骨でもしやぶッてゐやがッたのだらう。貴様のやうな奴は、放ッとくと商賣の邪魔だから、叩きッ拂ひにするのだ。」

「するといふのなら仕方がないが、乃公何も惡い事をした覺えはない。宮部の屋敷へ這入り込むなんて、丸ッきり嘘だ。」

「這入らないものが、何で毎日毎晩、其のまはりばッかりうろつくんだイ。」

「あの前の柳の木が、乃公好きだからサ。」

「貴様が持ッてる金は、どうしたのだ、此所へ出して見ろ。」

言ふより早く源太郎の懐に手を差し入れ、古財布引き出して、煉瓦の上にさらけ出すと、夜目にも光る銀貨が三四十錢。

三人は等しく目を見張る。

「是れはどうしたんだい、是れは。」

源太郎も、暫時は躊躇してゐたが、

「是れは宮部のお嬢さんに貰ッたのさ。お錢は貰ッたけれども、乃公宮部の犬になぞなッた覺えは無い。是れを貰ッた時、始めて屋敷の中へ引ずり込まれたッ限り、物貰ひや向うの用事で一足でもあの門をまたいだ事はないから、さう思ひねえ。」

「馬鹿言へ。縁もゆかりも無いものが、門の入へ引ずり込んで、そしてお足を五十錢も一圓も呉れるといふ、夢でも見るやうな事を誰れがする奴があるカイ。」

「だッて、本當にさうなんだからしやうがない。」

「だから何か裏切りでもしやがッて、その褒美に貰ッたのだらうといふのだ。」

に隠れてやらうか、とも思ッたが、逃げ隠れは卑怯だ、このまゝ居てつかまッてやらう。先日から銀次奴が、乃公のお錢を持ッてるのを見て、嫉きやァがッて、高利貸の家へ反り忠をしたのだと、頭へやかましく言ッつけて居たから、屹度それで、何とか言ひに來やがッたのに違ひない。乃公は逃げない。摑まッて、一喧嘩打ッぱたいてやらう。と決心して、源太郎は此方から、

「銀次ぢアないか。」

と聲をかけると、先方はギョッとしたが、三人すぐさま一團になッて、ツカ〳〵と源太郎の傍に進み、二言三言交はすと見ると、はや源太郎を引きずるやうにして、荷揚場の方へ連れて行く。

河岸のダラ〳〵下りになッて餘程が間の空地の片角には、運んだまゝの煉瓦が二三坪置き重ねてある。其の蔭に、源太郎の一群は這入ッた。すると、其所にも一人、是れは一層年嵩の、頭と覺しき者が待ち構へてゐて、

「甘く行ッたか。」

と聲をかけると、銀次は、

「引きずッて來た。」

と面前へ源太郎を撞き出す。

「何で此の野郎、規則ゥ破りァがッたい。今日で三日、乃公の所いは顔も出しやがらねえで、何所をまごついてゐやがッた。」

「此の河岸から麴町の方をあるいてゐた。」

「アヽさう、此所へ持て來てお呉れ。」
鳥の子紙のいかめしき封筒に、名宛は宮部絹子樣、裏は貴婦人慈惠會としてある。
「慈惠會から來たのか、何であらう。」
「多分先達て寄附を申込んでやりました、返事でございましやう。」
「ハアさうか。先日會社では、私を今度實業彰效會の名譽幹事とかに舉げると言ッてゐたが。」
と娘の氣休になるやうな事をいひゐる中、何の氣もなく、お絹が開いた封書の中は、美濃版の罫紙にしかつめらしく、
金五百圓本會へ寄附御申越の旨は、都合有之謝絕致事に評決相成申候間可然御諒承有之度候以上。
と讀み下し、親子覺えず顏見合せたが、會長には何の宮妃殿下を戴いてゐる、貴婦人慈惠會へ、寄附を申込んで、家柄の不評といふので刎ねつけられたかと思へば、到頭たまりかねて、お絹は其の書狀顏にあてたまゝワッと泣き伏した。

（十一）

天候ますく激變の徵を示して、空には月の光薄く、地には風の音やうやく耳立つ。夜十時頃、宮部の家の前を、まだ立ち去らなかッた源太郎は、不圖聞耳立てゝ、錦町河岸の方角に目を注いだと思ふと、果たして、其の方角から、同じ魚腹拾か屑拾ひと見える三人許りの少年が、キョロくと往來の八方に眼を配りながら、やッて來る。中に一人は、やゝ年嵩で、時々他の二人を寄せては、何か指揮して、また別れて歩く。
源太郎は、早くも此の三人を認めた。仲間の銀次奴が、チビやヂョレンを連れて、乃公を探しに來たに違ひない、今の內

間もなく同じ部屋に入りかはッて聞えるは、お絹親子の聲、

「ではやッぱり離縁だけするのですね、お金の事なぞ言はないで。」

「さうですとも、極もう綺麗立派に、此方の腹を見せてやります。親一人子一人の其の子を、呉れる人もあらうに、あんな狼のやうな奴の餌にして、取りかへしのつかない失策をしました。」

「そんな事はございませんヮ、お父ッ樣、此方が悪いのではないのですもの。」

「イヽヤさうでない、私がありまり焦燥過ぎたから起ッた事で、誰を怨まうやうはない。」

とは言ッて見たものゝ、お絹の折角の元氣をしほれさすのが不便と、氣をかへて、

「併し案じるには及びません、家の名折やお前の瑕にならないだけの事は、田川に言ひつけて、屹度させますから、其の内には、お前にも立派な婿を取ッて、津久茂なぞを見かへしてやる。些しも氣にかけることはない。」

「私はお父ッ樣、もう夫は持つまいと思ひます。女教師で、一生獨身でやッて行く方が善うございます。」

「そんな一徹な事を言ふけれども、まあ待ッて見なさい。少し年を取ると、さうも言ッてゐられぬ譯が、幾らも知れて來るから。今夜は、田川を相手に、ひどく酒を過して、醉ひました。」

といふ時、扉の外に咳の聲して、

「お孃樣郵便でございます。」

してしまふのも、惜しいものですぜ。」

折角立てゝ來た宮部の主義も、此に至ッて逃路に窮し、どうやら土臺が搖ぎさうに見えた。成程世間は意地が惡い、何時まで我等をさいなむのであらうか、斯ンナ事なら、どうで毒喰ッた皿だ、一舐りに大きく舐ッて退けやうか、イヤ〳〵私には、どうも此方から太く出て、押し通すといふことの出來ない性分だから、また中途でグラつくやうではならぬ。五年の間、金の溜れば溜るほど、此の體の瘦せ衰へたのも、一つは心配性から來た損耗だ。やはり石橋は叩いて渡れ、正道について置く方が、此の上の踏み外しが無からう。と言ッて差し當り此の場の返答は、何としたものか。遂てと言へば、唯退かぬ横[illegible]の田川、この上はたゞ穩に言延ばして、後で思案するより外はあるまいと、宮部は面を和げ、

「田川さん、私も言ひ過ぎた。お志だから兎も角今夜一晩篤りと考へて見ましやう、明日まで待ッて下さい、必ず君の顏は立てやうから。」

「別にお考へになる必要はなからうと思ひますがネエ、已むを得ませんから、ぢや明日また伺ひます。是非どうか、斷然たる御決心を伺ひたいもので。今晩は、お孃さんは?。ア、さうですか。イエどう致して、僕なぞは、津久茂何某の如く女を喰物にするといふ色惡の方ではないのですから。暫くお目にかゝりませんので、一寸御挨拶をと思ひまして。」

「娘には、今夜の事などは一切聞かせて下さるな。」

「心得ました。」

[illegible]て田川は座をすべる。

「可けないと言ッたら。諄いね。」
田川は態と思はせぶりに手を叉き、
「でもあなた、私を此のまゝに解雇なさるには、條件が入りますが、よろしうございますか。」
「無論、それは今までのお骨折に酬ふるだけの事はします。」
「所が、それがさう容易くないのですテ。私から申すのも如何ですが、此の宮部のお家の財産、之はどうしてお拵へなすッたといふことを定めて御記憶でございましやうネ。」
「此の財産が、さう有りがたくも無い。是れのあるばッかりで、實に五月蠅いからネ。私が妄狂一つするではなし、膿を持ッた腫物のやうに、大事にしてゐる當人には、苦しくッて、其の腐れ汁を吸ひに來る、君等は蠅のやうなものだ。」
「腐れ汁よろしい、結構です、喜んで嘗めましやうが、併し、其の腫物を散らして了へば、それであなたの體は、健康體に復するものと思召すのですか。私の手一つでも、三つや四つの、古疵は、お體のそこら中に搔き起すことが出來る。ひよッとすると、安全でお出でになることの出來ない結果に、立ち至るかも知れませんが、よろしうございますか。まだ凡てが期滿免除になッてゐませんから。」
蟲は到頭骨にまで蝕ひ入ッて、一身を併せ盡さうとする。宮部の答ないのを見て、
「併し斯う申すものゝ、何も私だッて、好んで敵役になる譯ではないから、悪くはお取り下さいますなよ。全體、絶交とか何とか申して、顔を赤め合ふといふのは、芳ばしい事ではないのですからね。畢竟お家大事と思へばこそ、面を犯して苦言も申すといふもの、如何でしやう、御得心が參るッたら、中直りとしては。是れほどに築き上げた屋臺骨を、内輪喧嘩で毀

「娘を津久茂へ還すといふのは、殘酷だ。第一居られるものでもなし、此の方から仕かけた喧嘩になッては、面白くないからネ。」

「それはホンのちよッとでさアネ。小一年も辛抱してゐたものが、お孃さんだッて、一日も歸ッてゐられないとは仰しやるまい。わたしに言はすれば津久茂さんなぞといふ、あんなピー〳〵華族にお孃さんを賴んで貰ッて貰ふといふ、最初がそもそも間違ッてゐるのですからネ、其の跡掃除だもの、どうせ少し位は苦勢もしなけりア。尙溯ッて言へば、高利で毀損した名譽を、今になッて恢復しやうといふ其の了簡が第一不贊成ですな。駄目ですよ。幾ら洗ッたッて、地が染色で出來てるものは、元の生木綿にはならないから。先達ての市會議員の選擧の折なぞ御覽なさい。あれほど物もかけ、奔走もした結果が、たッた三票とは情ないぢアありませんか。なか〳〵世間は意地の惡いもの、さう覺えてゐれば間違ッこはありません。此方からも、どうせやるものなら、思ひ切ッて意地惡く出てやる、生半熟な眞似をしちア駄目だ、駄目は知れてゐます。」

「默りたまへ、私はやッて見せる、立派に汚名を濯いで見せる。君のやうなものがついて居るから、却て浮まれないのだ。色々君の世話にもなッたが、今日限り御緣を切る、以來一切君と關係を斷ッて、私の了簡一杯にやるつもりだから、さう思ッて下さい。」

「ア、まづ〳〵お待ち下さい、さう急き込んだッて話の分かるものぢやない。お氣に障ッた廉々は、前言を取り消し、謝罪をすることに致しますから。斯くの通り手を突いて、間直もどきに平に〳〵。」

「人を嘲弄なさる勿。今日限り絶交だ、歸ッて下さい。」

「困りましたネ、では斯うしましやう、お孃さんを呼んで來て、御詫して戴くことにしましやう。」

なければ、貸借が合はない。斷然さうなさい、何の躊躇することがありましやう。」

宮部はカブリを振りて、頑として聽きさうにもない。

「止めたく、一旦約束した以上は、たとひ口約でも、破ッては體面にかゝる、信用に關するから、マア止めませう。」

「ハヽ體面なんて、甘い事を仰せられるが、若しあなた、二萬圓ですぜ、ようございますか。一寸失禮、算盤拜借、イヽエ僕が、利子を當ッてお目にかけます。」

「要らない事だ。二萬圓の利子が何程といふこと位、君に聞かないでも知ッてゐます。」

「ヨウ御立腹では恐縮するが、其の二萬圓、全く少なくもない金でしやう。ですから、どうか僕の意見を採用して、此所は一番、是非やッて戴きたい。以前とは違ッて、御信用に關するやうな、ドヂな事は決してせんから、曲げて僕に一任して下さい。あの津久茂といふ奴、元來僕の氣に喰はん。」

「君はさういふけれどもネエ、萬一、向うが强く出て、左樣ならば離緣の相談は取消しましやう、早速當人を戻して下さいと言ッたら、何うする。」

「それは何でもない事サ、一旦お孃さんを歸して置いて、こんどの一件を種に、此方からアベコベに離緣の請求と出掛ける。家族の名義に於てする財產は、家族に所有權がある、罷りちかへば委托物費消とまで切り込んで御覽なさい、二萬の金は向うから轉げ込んで來ますが、大丈夫、そんな事は先方だッて言ひません、勝算は歷々方寸の裡にありサ。安心してお任せなさい。」

宮部しばらくは、コップと肴をかへくに嘗めてゐたが、

ので、私が母一人を殘して、お迎に行ッた事もある、今から思へば、無用心な事。江の島の辨天窟へあの方の跡について這入りかけ、恐くなッて中途から手を曳かれて出て來て、母にお轉婆だと叱られたのも、あの時であッた。歸りは風が出て、ひどく暴風であッたッけ。

と思ひつゞけて、不圖最前の雲の事に氣が移り、其の方角を仰ぎ見れば、早や一面に胡粉刷毛で亂塗した如く、何所かにゴウ〳〵と風の音もするやうに覺えし途端、瞰下せば、柳の樹蔭に佇んで餘念なく此方を見上げてゐる源太郎と、しかとは見えぬ顏を合せ、譯もなくハッとして、お絹は身を引いた。

身を引いて振りかへる後の、扉を開いて、恰も這入ッて來たのは田川。

第九

宮部は酩酊の態で、田川と麥酒を中に差向ひの一間の中は、極めて密談の樣子かとすれば時々調子外れの大きな聲が漏れる。可かん、可かん。ソンナ事は到底可かん。正面から法廷へ持ち出して、離緣の理由を明にさするといふだけは、君の意見に任せて行ッてもよいが、金の事は到底いかん。先日津久茂が來た節も、キッパリさう言ッて置いたのだからネ。」

「それはあなた、何でもありません、唯一場の口頭契約に過ぎないことで、公正證書を取りかはしたといふではなし、どうでも言ひ廻はされるのです。大體あなたが、あんな古狸の辯口にお乘んなさるから可けないのだ。此の際こそウンと、絞ッてやらなければ、あんな奴は、手ぬるい事をして置くと、人を見くびッて勝手な事をするものです。一萬の元は勿論、半年近くも融通してやッた利子に、お孃さんの慰まれ賃、と言ッちや失敬だが、どうしても二萬より尠なからざる金は手取にし

めなさい。」

との事であッたが、財産よりも身分よりも、貧しい宮木さんのお家の方が、今思へば羨ましい、結婚の當座ほど、樂しいものはないと、人にも聞いてゐたけれど、私のは斯ういふ事になる前兆でゞもあッたか、初から冷たいやうで氣には染まなかッた。

お絹は何時かうッとりとして、想を昔の幸福な春にかへしてゐる。

宮木さんに始めてお目にかゝッたのは、學校でちよッとの間歷史をお持ちなすッた、たしか私が十七の時であッた。それから暫く打ち絕えて、私は宮木といふ苗字だけは覺えてゐたが、お名前までは忘れてしまッた一昨年の、丁度此の頃、母と一緖に逗子でお目にかゝり、それからの御交際に、隨分御親切は盡して下すッたけれど、其の頃は、實私もまだ、お嫁に行くなら華族ぐらゐでなければと、果敢ない夢を、半分は見てゐたものだから、お父ッ樣の仰しやるまゝに、ツイ宮木さんの事は思ひ捨てゝしまッて、あの方にも申譯がない。それを憎いとも仰しやらないで、交際を續けて下さる、何處までも優しいお心。

逗子の靑松樓に御同宿してゐた頃は、朝の濱邊の散步、夕凉かけて鎌倉への運動も、あの方と母と三人、大抵每日缺かした事はなかッた。ちやうど斯ういふ月夜であッた。由比ヶ濱で、引上げてある舟に三人並んで腰をかけ、私はチヨロ〳〵と珠を晒らすやうな磯際の景色がおもしろいといへば、宮木さんは稻村ヶ崎の邊からかけて、黑く染め出した岩角に嚙みかゝッて碎ける波の方がおもしろいと仰しやる。母は沖の方にチラ〳〵する漁火を見ると、國の事が思ひ出されて懷しいといッて、笑ッた事もある。それからあの方が大佛の前の力餠を、土產に買ッて歸ると言ッてお出でなすッた限り、お歸りが遲い

はくも耻かしい。

私ほど不運な者はない、是れほどの財産もあり、是れほどの教育も受けた身で、廿二になッてもまだ身が極まらないとは、よく〳〵の事であらう。お父ッ様があれほど心配をなすッて此方から頼むやうにして、宮部の家を浮み上らす頼の綱はそれより外にはない、父への功德と思ッて往ッて吳れと、私にまで手を下げない許りになすッて、其れでやッと嫁ついたのが去年の暮、今年の春は、津久茂靜馬の妻と、親類友達へも肩身廣く、マア善かッたと思ッたのも束の間で、またもお父ッ様へ心配をかけるやうになり、私はもう、世間へ合はす顏がない。あの人もあんまりな、非道な仕方と思へば、私は悔しい。それには足らない私だもの、落度もたまにはあらうけれど、持ッて行ッたあれ程の財産も無くした上で親の素性を言ひがゝりに、離緣なぞと、よくも言はれたもの。是れほどの耻を搔かされて默ッてゐられやう筈もなければ、お父ッ様が此の事をお聞きなすッて、何も言はず、夜一夜ブル〳〵震へてお出でなすッた時には、意氣地のない私までが嘸惜かッたらう。

私を離緣した上で、鏑木といふ子爵から貰ふことに、疾ッくから極まッてゐたとやら。それが本當なら、私は今まで騙されてゐた、早くから見かへられてゐたのを、それと知らないで、ボンヤリしてゐた。斯うなることゝ知れたなら、私は……あゝさうであッた、他の情を仇にした、是れも罰か知ら、先日宮木さんが來て下すッてのお話しに。

「妻を持ッて見て、我々が妻を持つのは自分の不幸、妻子となるものゝ不幸といふことを悟ッた。今の私が、妻を持たない昔なら、必ず無妻論を唱へやう。妻を持つ、負擔が重くなる、身體が其れに堪へない時ほど、人間の苦痛はない。また妻を持ッて、身が不自由になり、世帶くさくなッて、昔の我儘な生活が懷かしくなる時ほど、人間の根性の淺ましい事はない、私に許して下さらなかッた、あなたよりも、私の妻になッた女の方は、一層不幸だから、不幸はあなたばかりでないとお諦

「風になるかも知れない。」

とお豐のつぶやく所へ、例の如く寄ッて來た源太郎、月あかりに透かしながら、始めは見えぬ程遠くの物蔭から、窺ッてゐたが、段々に我知らず足の進むにつれ、此方から顏の見える頃は、向うよりも、おさんが目ざとく見つけて、

「そら參りました、お孃樣々々、何時かの乞食が。」

と打ちさゝやくに、一同源太郎の方を振り向く。源太郎は、周章てゝ踵をかへし、遠靄の中にまた姿を銷して了ふ。

お絹は薄氣味悪い心地して、

「もう歸りませう。」

と先に立ち、門の內へ引き取る間もなく、源太郎の影は再び此の家の前に見れた。

第八

月ある方を後にして、外見だけは西洋造の、お絹が居間と定まッた二階の窓から、表遙に見渡せば、夜色縹渺として、丸の內はたゞ一面の霞に包まれ、彼方の空に、雲の脚がやう〳〵忙しい。

お絹は窓に凭ッたまゝ、片肱をもたせて、蚊を追ふ團扇の音も切れ〳〵に、常は嗜深く人に見せざる物思ひ、さすがに獨居の席には包みかねて、吐息を漏らす。

「あのマア大きな笑ひ聲、田川さんの長相談は、またあの件であらうが、お父ッ樣ももう大抵にして、よして下さればいゝに、田川さんの言ふ事なんぞを信用なさるものだから、折角取りかへしかけた家名も、また汚れるやうになる。津久茂の思

源太郎は、其の後彼の柳の樹の下へは、弗に姿を見せない。たゞお絹が、母の亡くなッてから一しほしげ〳〵往來する、永田町の叔母の許とかへ、車で通ふ道すがら、折々思はぬ所で、餘念なく其の車を見迎へ、見送ッてゐる源太郎に出會ふことはあッたが、服裝も前より片づいて、稍々人らしくなッてゐた。あたりに人目のない時は、車上から目元だけの挨拶を與れると、源太郎は、其のクル〳〵した眼を一寸俯にして、車の通り過ぎたあとを見えなくなるまで見守ッてゐる。のみならず、晝こそ來ないが、夜になると、同じ木の元や、屋敷の周圍を立ち廻はる人影を、二三度まで見たと、おさんの注進もある。源太郎に取ッては、母に別れ父に別れてよりこのかた、世に情あるお絹の言葉が、五臟六腑に染み入りて、母とも姉とも、果ては有りがたく拜みたいやうに思はれ、其の人の面影目前にちらつきて、唯何となく忘れがたい心地がする。併しさらさら以て戀なぞといふ、大それた事とは思ッてゐない。他所ながら顏見ることの出來ぬ日は、せめて聲なりとも聞いて、此のむさくるしい胸に導かれた情の泉から、湧き出す不斷の感謝が君に捧げたい。たゞそればかりに、雨の日もお絹が車の道筋に立ち、風の夜もお絹が居間と覺しき二階の窓の下に更かす。

斯うなるにつれて、昨日までは、高利貸の憎い奴め、何時か一度は叩き潰して與れうと、恐ろしい眼をして睨んだ此の屋敷も、お絹の情といふ、美くしい光の爲に飾られて、毒蛇の背に、輝く珠のある思ひ、我強い源太郎も、稍々我を折りはじめてゐる。

月の明かいある夜、宮部の家には、日外見し崩し四目の紋つけたる男、姓は田川といふ例の腰巾着の辯護士が、宵の口から來てゐて、奥の一間に人拂で、主人と話最中。お絹は外の女どもと、珍らしく門の前、河岸緣の邊を漫歩してゐると、東の空にあたッて、ポッチリと抓み綿ほどの白い雲が現はれ、見る間に廣がッて來る。

と聲をかけ、屹と其の方を振り向くはづみ、一道の光りは、まばゆく眼を射て、老婢のお豐が、竹臺に丸火屋の、火力熾な洋燈を、常の如く運んだのに外ならないといふことが知れた。けれども、主人はひどく立腹の體で、何故言葉をかけないで居間に這入ッて來たかと、お豐を矯めつける。優しい時は極めて優しいけれども、僻みとむら氣は、此の節の宮部の癖なので、

「御免遊ばせ、お明りが遲くなりましたものですから、つい急きまして。」

氣をつけるが善いと、宮部は其のまゝ庭下駄つッかけ、五日ばかりの月影映る泉水の縁を彼方の萩叢の方へ、考へながら足を向けしが、其の間も斷えず振りかへッて、居間の方を氣にしつゝ、五六歩行ッたと思ふ頃、不圖右手の木蔭に人影の潛むのを見た。足音のハタリと止まると共に、しばらく樣子を窺ッてゐたが、其れと見極めて、空拳を固め、だしぬけに、

「うぬ！　泥坊。」

と聲を揚げると、人影は忽ち一散に裏門の方へ逃げ出す。

「吉藏々々。」

とけたゝましく呼び立てゝ、家内總がゝりで追ッ詰めたれど、到頭影は見失ッてしまッた。但し此の晩からして、宮部親子の寢室、さなきだに用心堅固にさしかためたドア附の寢室は、一層錠の掛外しが嚴重になッて、夜中外からは、決して這入れない程になッた。内からでも、容易には明けられない。下では、いゝ牢屋だと惡口を言ッてゐる。

第七

づッしりとした體を、寛に、椅子一杯に踏んぞり、葉巻の煙吹かせながら、顔には斷えず愛嬌を持ちて、ハッキリと言葉を切りたる津久茂の樣子に、苦り切ッた宮部も、附合だけの笑、冷な、嘲るやうな笑を眼元に浮め、

「其の儀はもう御免蒙ります、俗に申す釣合はぬが不緣で、やはり牛は牛づれに限るやうです、ハヽヽヽ。」

「フム、それも御道理ぢや、味のある言葉ぢや。が、また考へて見ると、身分なぞといふのは表面のことで、お互の心さへ合ッてをれば、ノウ、御交際は續けられるといふものぢや、どうか今後とも、腹藏なく御交際を願ひます、我輩にても、御商賣の上なり、何なり、十分の御助勢を致す場合が、必ずあると信ずるから、靜馬奴の事は、まづ〳〵大目に見て下さい。よろしいか、君。それで我輩も少なからず滿足したぢや。萬の一、彼れが如き強請がましい事が、貴公の本意でゞもあッたらば、親友たる貴公の爲に悲しむべき事と、心配してゐたが、アヽやッと安神しました。安神、滿足、今日はめでたいお暇になッた。所謂禍を轉じて福となすとは此の事ぢや、のう、ハヽヽヽ。左樣なら。」

津久茂の歸るを送り、一風呂浴びて、打水の露したゝる庭に向ひ、團扇の風に、新らしき浴衣の袖膨らますれば、心地まことに生き返りし如く、麥酒の獨酌に、晩餐の膳も是れからといふ所を、宮部今日は、氣持惡るければとて、箸もしかとはつけず。ひとり居間に閉ぢ籠ッて、椽際の柱に凭りかゝりしまゝ、眼を眠り、深き思ひに沈んでゐる。

神經の鋭くなるにつれ、宮部は頻りに眉を揚げ、口を動かし、時々パチリと兩眼を瞠いては、不安の體に四方を見廻はし、落ち着いてまた眼を塞ぐ。黄昏れかゝる日の脚に、座敷の中は早や小暗うなッたのも知らずにゐると、忽ち、聲もかけないで、次の間から隔の襖を推し明けるものありと覺えて、宮部は、突然立ち上り、

「誰だ。」

それからといふもの、今まで手先に使ッた小鬼どもには大抵縁を切ッて、新らしく實業界に身を立てる仕度に取りかゝッたが、辯護士の田川だけは、何う睾丸を攫んだか、宮部の帷幄に參してゐる。

去年新築の方角が、そも／＼鬼門にあたッたといふので、宮部の妻は、ひどく氣に病んでゐたが、引越す間もなく、激烈な腸加答兒に罹ッて亡くなり、宮部の爲には、是れからといふ首途の最先を折られ、折角集めた財寶も甲斐ない樣子で、今年二十になる一人娘のお絹だけを、せめてもの頼りにして、心細い日を經てゐる内、男爵津久茂家の身寄の緣の有るを幸、宮部が是非にとの望で、お絹はそれに嫁づくことゝなり、あとには一時、廣い屋敷に車夫婢女三四人の外は、人らしきもの宮部一人の樣であッた。

第六

「イヤどうも、さういふ話ぢやらうと、察して居ッたのぢや。貴公は假りそめにも、立派な、府下に何人といふ屈指のゼントルマンぢやから、よもやさういふ事は仰しやるまい。恐らく、イヤ恐らく所ではない、斷じて之は田川とかいふ、お使の人の考であらう、と斯う我輩察して居るから、實は、今日まで確たる御返事もせなんだのぢや。成程お娘御に取ッては、何一ッ落度のない、イヤどうして、お娘御は立派なものぢや、お娘御に落度のない事は、我輩保證する、其のお娘御を故なく離緣するといふのぢやから、嘸、御無念であらう、ナカ／＼以て、貴公の實業界に於ける御名譽と、お娘御の御標緻と、一萬といふ御持參金と、この三ッのものが揃へば、子爵はおろか、伯爵でも侯爵でも、喜んで迎へることと思ふから、必ず御取持申します。」

て、其の殘念、心急が邪魔をなし、立身はます〳〵仕損ねる。やがて四十にも間の無いに、是れではならぬと、細君とも相談の上、二十五圓か三十圓の判任の株を、綺麗に擲ち、妻君の丹念で貯蓄した何がしの金を資本に、何か一儲と、方角を換へては見たれど、是れとて目途は更に立たず、兎角する中には、居食の姿となりて、折角の資本を形なしにして了ふ恐があると、久は夜の目も寢ない程に考へた揚句、色々に世間の者が成り上る道筋から割りだして、到底地道の事ばかりしてゐては、當世はだめだ、何所かに、思ひ切ッて一飛びか一跨やらなければ、目醒ましい出世は覺束ないと、斯ういふ悟りを開いた。是れが青年の浮いた空想といふではなく、遲蒔の悟道だけに、彼れには極めて眞面目に、極めて意味あることゝ信ぜられ、其の最好方便として選まれたのが、卽ち世の人に蛇蝎視せらるゝ高利貸であッた。

金より外に、我々の一跨するといふ、其の梯子になるものは無い。高利貸といへば聞こえ惡るけれど、勿論一生の高利貸といふではなし、ホンの一時の方便、言はゞ世間から無理借する資本のやうなものだ。今に金庫の中が公債や株券で埋まる程になれば、借りたものは利を添へて返してやる。借りた爲に負うた惡名なら、返せば消えるに極まッてる。どうせ塵の巷といふではないか、途中で袖や袂の汚れる位は、落着く所に落着いてから濯げば譯もない事と。宮部初の程は、自身に鞄提げて出歩くこと、型の如くであッたが、一年經たぬ中、果たしてメキ〳〵と伸し上げ、後は川川といふへボ辯護士を番頭代りに置き、手代の二三人も使ふ身分となッた。

さうなると、自然配下に殘忍な者も出で、案の定一方には宮部の事を下谷の人喰とまで綽名するやうになる、買ひ廣げた徒士町の住居も危險な迄になッたので、最う此所等が切り上げ時と、分別敏い宮部は、見事に足を洗ッて、去る會社の株を買ひ占め、其の社長と成りすまし、今の所に新築の邸を構へて引移ッたのは、去年の事である。

抱おし。そして普通の體になッてお出でなら、其の時は、わたしの家にだッて置いて上げられない事もなし、必ず辛抱が大事よ。」

お絹は、其のまゝ木戸に沿うて、横手一面の芝生の、端には葡萄棚などあしらひある庭に入る。俯したる源太郎は、思ひ出したるやうに、スタ〳〵と表門の方へ駈け出し、五六歩過ぎて、振りかへり、お絹の後姿見入ッたが、屋根より落つる夕日まばゆげに、眼ばたき三ッ四ッして、また急ぎ足に踏み出す向うより、抱と見ゆる見事の車一輛、驀地に駈けつけざま、あぶなく源太郎に突きあたらうとして、突き飛ばし、

「エヽ、獸類め、邪魔しやがると踏んづけるぞ。」

と車夫は駈けながら顧みて一喝した。源太郎もよろめきながら、ムッとして見かへれば、車は宮部が門へ、早や敷石轟かしてガラ〳〵。

第五

十二疊の一間を、すべて洋風の應接室に仕立て、青梧の葉越しに、東南の風飽くまで入れて、相對座するは、先程の車の主津久茂男爵とて、軍人上りの政治家といふ資格ある、新華族の殿と、主人の宮部久である。久は、年の頃四十二三の貧相、元と西國何藩の士分とかで、全く無知文盲の人物でもないが、此の人一生の疵は、あまりに成功を急ぎ且つあがくといふ癖のあること、隨ッてせゝこましい樣子の應對萬事に見はれるのを、自分も氣にして、力めて隱さうとしてゐる。

同輩の者が續々社會に重要の地位を占めて來るのに、自分ひとり、依然たる安官員に老い朽ちるかと思へば殘念で、心急

「おッ母さんは六年あとに死んぢやッた。それからお父ッさんと岐阜の町を出て、東京へ來たのだが、お父ッさんが脚氣で稼がれぬといふから、お貰ひに出る樣になッたのだ。それでお父ッさんは、其の年の暮に、あの柳の樹の下で亡くなッちやッた。其の頃はまだ、屋敷なんざ無かッたが、乃公しかたがないから、仲間のものと一緒に、板橋へも行ッたし、堀の内にも居たし、折にや東京へも戻ッて、方々渡ッてゐた。ナアに構ふものか、それは、偶にやさうも思はねえぢやないが、乃公一人で金を溜めたッて、大盡になッたッて、身一杯より外に贅澤のしやうはなし、皆には憎がられ、要らない心配をして、差し引つまらない。それよりか、今の商賣がどれほど氣樂だかサ。乃公一生是でやッて行く、行けなけりや唯の家持にはなッても、大盡にはならねえ、大盡は嫌ひだ。」

お絹は、源太郎の臆面なく言ッてのける樣子を、打ち目守りながら、聽き入ッてゐたが、

「生意氣な事を言ふよ。」

といふ聲に心づき、

「默ッておいで。」

とおさんを制して、源太郎の方に向き直り、

「わたしはね、お前の今言ッた事は、一々道理だと思ふけれど、唯の家持にだけは、辛抱してお成りよ。それでないと亡くなッたお父ッさんやおッ母さんにも濟まないからねェ。」

言ひ〳〵帶の間より玉屋仕立の紙入取り出し、何程か紙に捻りて取らせ、

「是れを上げるから、お前ほどの體をしてゐれば、何所へ行ッても、立派に若い衆で働けやうし、雇ふ口もあらうから、辛

「ホヽ。」

「オホヽヽヽヽ。」

「お前もあんまり頑といふものですよ、おさんが與ると言ッたら、素直に貰ッてお置き。人の情で過ごすものが、そんな片意地な事をして、憎まれては損ですよ。今日はわたしが吉藏に言ッて、恕して貰ッて上げるから、サ、早くお歸り。」

老婢のお豐も傍より口を添へる。

「歸るッたて、ほんとうの宿無しなのだから、また柳の下へでも行くのであらうが、あんまり一ッ所にばかしゐると、お巡りさんが怒りますよ。全體お前はお父ッさんもおッ母さんもゐないのかえ、お國は何所なの？。」

「ヘン、國は阿波の徳島。」

と吉藏は妙な假聲つかひすて、箒を提げて裏庭の方へ、源太郎は、口をへの字なりに緊く結んだまゝ、一言もなく、屹度吉藏の後姿を睨んでゐる。お絹は優しく、

「お前兄弟はあるのかえ。」

源太郎はたゞ冠振るのみ。

「ではおッ母さんは？。」

是にも同じく冠が答へる。

「お父ッさんは？。」

今まで閉ぢたる脣の、やゝ動くと見れば、眼にはこぼるゝ許り涙を溜め、源太郎は始めて言葉を出した。

と源太郎の襟上取ッて引ッ敷き、

「人が折角呉れるものを、有りがてえとも思はねえで、土足にかけるとは何だい。太え餓鬼もあッたものだ。手前のやうな奴はナ、後々の懲らしめに、足腰の立たねえ目に遭はせねえぢや………。畜生め、此方へうせやがれ。」

門内なる車寄の蔭まで引き摺ッて來る。

第四

「吉藏、ゆるしておやり、ソンナひどい事するものぢやありません。」

と見かねて降り立ちたるお絹が制すれば、聞かぬ氣の吉藏、

「だッてお孃樣、あなたは御存じないから、さう仰しやるが、私が今御門傍から見てゐますと、おさんどんが持ッてゝやッたお飯だかお菜だかを、土足で踏んにぢりやァがるのでございます。ナアニ、おさんどんが石の上へぶッくりかへして置いたもんだから、奴さん、犬ぢや無えと、グッと大きく出て、腹ァ立ちやがッたのサ、笑かしやァがる。」

「さうでございますよ、わたしが、お孃樣のお慈悲だッて、さう申しましてね、持ッてッてやりましても、有りがたい顔もしないのでございます。ホントに憎らしい乞食ッたらありァしない。」

「お前、人に物をやるに、なんぼ先方がコンナものだからといッて、石の上へ明けてやるといふ法はないよ。」

「さうでございますけれども、いくら器物をお出しと言ッても、ブリ〳〵してゐて、受つけないのでございますもの。」

「乞食の癖に全體生意氣だ、堀の内三界まで御苦勞させやがッて、お孃のお供なんざ、乃公生まれて始めだからナア。」

ッて、どんな事を言ひ出すか、知れたもんぢやございません。イヽエね、吉どんがそれを聞きますと、をかしいのでございますよ、たゞあの柳の木の下が好きなのだと言ッてるさうでございます。」

「それなら尚の事、あんまり非道な事をしないやうにしてお呉れよ。人の怨を受けないやうに〳〵と、お父ッさんも仰しやるのだから。」

聽ての程、此の家のおさんが、笊に蓮の糞染の殘物冷飯など取り混ぜて、門前なる源太郎が側へ持ち行き、日頃の慳貪聲に似ず優しう、

「お孤さん、お餘りだよ。お前何か入物があるかえ、飯器でも風呂敷でも、あるならさッさとお出し。是はね、お孃様のお慈悲だから、仇に思ッちやならないよ。そして是からはね、あッた時にはあげるから、お前も無性せずに臺所口まで來て見るがいゝよ。さうしないと、其のたんびにお使番に立つわたしが迷惑だから。だけどもね、またあんまりうるさく來ちや厭だよ。それに、其のボロ〳〵した服裝がねエ、もすこしどうかならないものかしら。サ、早く入物を出さないと、わたし、人が來るからいやだよ。何をうぢ〳〵してサア、エヽぢれッたいねエ、此の石の上に明けて行くから、跡でお拾ひよ。」

おさんの我鳴り立てゝ歸ッたあと、犬の餌か何ぞのやうに、石の上に明けられた殘飯を、ツク〴〵見てゐた源太郎、何と思ッたか、ツト寄ッて、土足にかけて踏にぢらうとする。門の內では、一棟高い西洋館の窓から、お絹が此の様子を見て居るとも知らず、下には、抱への車夫の吉藏が、今敷石に撒水を濟して、箒手にしたまゝ、どうするかと源太郎の素振を窺ッてゐたが、此の態に怺へかね、飛んで出で、

「コン畜生、何しやがるんだい。」

「知らないよ。」

と彼方を向いてしまふ。書生は憫として睨みつけたまゝ、全くの乞食小僧と見て、喧嘩するのも大人氣ないと思ッたか、薩摩下駄を引ずる音荒らかに立ち去る。跡には、源太郎の黒ずんだ顔から、冷な笑が漏れてゐる。

第三

「お嬢さま、お止し遊ばせ、癖になると可けませんから。」

といふは宮部の臺所奉行お豊とて、四十恰好の老婢の聲。お嬢さまと呼ばるゝ、此の家の一人娘お絹は、去る頃津久茂といふ新男爵の甥の許へ、父久がやッとの苦心で片づいた間もなく、明鏡長へに圓からで、片割月の離別談となり、何日か前に出戻ッたまゝの言はゞ可憐な花嫁である。

「でもお前、何か貰はうと思へばこそ、毎日のやうにあゝして來てゐるものを、何もやらないで懲らしてやるなんて、あんまりですよ。それにまた、仇なんぞされてはなりませぬから、與ッてお呉れ。」

「イヽエお嬢様、あれの參ッて居りますのは、昨日や今日に始まッた事ではございません。半月も前から、あの柳の樹の下へ毎日乾度來て、往來を眺めてをるのでございます。お巡りさんにも頼んで、追ッ拂ッて貰ひましたし、旦那樣がさう仰しやいまして、手荒な事をして仇に火なんぞ挿まれてはならないからと存じまして、お握飯をドッサリ拵へて吉どんに持たせ、ホヽ、御叮嚀ぢやございませんか、堀の内へ行くと申しますから、其所まで送らせたのでございますよ。さうしますと、憎らしいぢやございませんか、三日目にはもう歸ッて參ッたのでございます。あんな奴でございますから、甘く出ると附け上

かもいッたが、高利貸といふものは豪勢だ。六七年經たない中にあんなに大くなれるといふから、いッそやる位ならあれが善い。乃公も此の商賣の足を洗ッたら、高利貸になッて、しこたま儲けてやらうか。

イヤ可けぬ〳〵、乃公一人で儲ける筈ではなかッたッけ。自分一人で儲ける奴があるから、貧乏する奴も出來るのだ。それで以て、よくなると貧乏した昔の事は忘れやがッて、自分一人のやうに推し廻しやがる。悪い事もしなければ、彼奴等の邪魔一つした覺もないのに、穢いの、目障りのと、勝手な熱を吹アがッて、自分等の鼻梁に留ッた蠅でも追ふ氣で居るから癪に觸ら。

ヘン、また洋劍が。己達をいぢめるのを商賣のやうにしてゐる癖に、此の屋敷の者になんぞ門前で逢うものなら、小腰を曲めて阿諛をして行きァがる。」

源太郎は立ッてゐた柳の根本を離れて何所を當ともなく、河岸縁を東へと歩き初めたので、眼を光らせて來た巡査も、見逃して行過ぎる。程を計ッてまた元の木の下に戻り、此たびは、水の面を眺めてボンヤリとしてゐる。

粘るかと思はれる程、蒼味を帶んで濁ッた水は、之さへ暑さうに見えて、柳の葉裏黄色になるまで、塵埃を浴び、炎威に疲れ、世はまだ容易に午睡の閑さより醒めさうにもない四時頃、後には宮部が屋敷の西北の一角を隱せる欅の木立から、蟬の聲が頭腦に泌み入るやうだ。其中氷屋も店を他へ運んで、源太郎一人、馴染の柳の蔭を去りがてにしてゐる。

突然横合から、

「オイ、〇〇町一番地といへば何所いらだ？。」

と一人の書生が問ひかけた、源太郎はビックリして振り向いたが、書生の權柄高な樣子をジロ〳〵と見たきり、

は絶えず八方に走ッて、あたりの人の氣色を窺ふさまである。氷屋もしばし躊躇ッたが、是非なしといふ態で、匙を取り上げ、一杯といッても並の半分にも足らぬ程の氷を、突慳貪に此の客の眼前へつきつけた。客はまた、立派に小判の端の身錢に切ッて買ッたものを、窃みものか何ぞのやうに、一息に呑み干して、逃け出す如く彼方の木蔭に退いた。そして柳の幹に靠れて、不平に堪へぬ顔色で、屹度氷屋の方を見てゐると、氷屋はまた、態とらしく彼れの呑んだ硝子盃を、二度も三度も濯いで、他の場合に例の無い、清め水までかけて見せる、一ッは車夫や見守娘といふ上客へ申譯の爲に。

「成程この乃公と向うの宮部の家とでも比べた日には、己達は人の數ではないかも知れぬ、とても追ッ着けないと諦めもしやう。けれども乃公とあの車夫と何れだけの違ひがある。お客を乘ッけて、汗水絞ッて賺けるのが車夫の商賣なら、此方だッて荷揚の手傳をするのも商賣、魚河岸で拾ふ魚腸だッて皆當り前の商賣だ。憚りながらこの源公はナ、皆のやうに、お貰ひの同勢に出掛けた事もなけりやァ、火附や火事場稼で巾を利かす銀次なぞとは違ふのだぞ、餘り馬鹿にしやがるない。あの氷屋の畜生め、一杯五厘の癖に、大きな面をしやがッて、乃公と他の客と何れだけ違ふと思ふ。この乃公だッて、亡くなッた親父と岐阜の町を出るまでは、まさかこんな衣服を着たこともなけりや、觀音樣や愛宕山の堂の下に寢たこともありァしない。今の源公も元の源太郎も、中の正身に變りはない。」

腹の中に不平の蟠れば、自然と附いた癖の、口を尖らせて考へてゐたが、不圖此に至ッて、自分の身の周りを見かへり、今さらのやうに鬱ぎ込んでしまふ。折ふしゴロ〳〵と車の轢る音に顏を上ぐれば、先程の車上の客が、今し歸ッて往くらしく、幌の中に扇四ッ目の紋所、パナマ帽の後姿が遠ざかりゆく。

「この屋敷なぞも、高利貸の大いのだ。どうせ人の物を奪りやがッたのだから、構ふことはない放火てやれと、銀次が何時

「此のお屋敷では、此節何だか車の出這入りが忙しさうですナ。」

「此の家ア、たしか何だらう。宮部といッて、高利貸でせう。」

車夫は身内の汗を拭ひながら、振りかへッて、宮部久とある瀬戸の門札に眼を向ける。鑿り出したまゝに角を入れた、御影石の門柱は、ギラ〳〵と焦げつくやうな日光を反射して、日脚は三時過と覺ぼしく、迯り込んだ客は容易に出て來さうにもない。氷屋は、

「さうです。」

言ッたまゝ新な客に氣を取られ、忙しさうにまた鑵を廻し初める。全く押し默ッて、元の無口に還ッて了ッた。

第二

やゝ客脚の途切れたる頃、オヅ〳〵と店先に立ッた一人の客、是はまたいくら大道店でも、いくら金がお客の理窟はあッても、さすがに善い顔の出來ない、今までのともズッと違ッた客種であッた。袷の襟より胸にかけて、テカ〳〵と油垢に輝き、肩から先、腰から下はボロ〳〵に切れ下ッたのを幾重となく結び附けた、所謂百結の衣ともいふべき奴を着て、徒跣のまゝ頭髪は栗の毬ほどに延び、顔は寧ろふくらかに肉の附いた方なれど、何分にも日にやけ垢に埋れて、大きな眼ばかり光れば、顔相おのづから險しく、年は十五六、何所かに生れついての孤黨とも見えぬ所はあれど、まづ此あたりから魚河岸界隈を渡りあるく、魚腹拾の小僧とは知られた。

懐を探ると見えて、彼れは幾らかの銅貨を取り出し、氷屋の店屋臺に差し置き、氷をとの意を眼顔で言はせながらも、眸

第一

鎌倉河岸を〇〇町へ、凡そ千坪許りの角屋敷に、煉瓦の色まだ鮮な和洋折衷の一構、向側なる柳の木蔭に、一夏出通しで一杯五厘のアイスクリーム屋が、今日も日の照りさかる頃から荷を卸して、早速鋸屑まみれのやくざ氷を取り出す、砕く、外罐にまくり込む、鹽が這入る、内罐が機械のやうに廻り始める、さも忙しそうにやッてゐる中、客がつき始めると、一しきりは殆ど絶間の無いほどに繁昌する。

或は南より、湯呑持參で是に三錢がといふは、店の小僧が番頭の命を奉じて、割安の品買ひに駈つけたのであらう。或は北より、子守娘がソッと帶の間から一錢銅取り出して、背中の小兒を羨ます。西より威勢よく駈つけた一輛の辻車が、今しも客を角屋敷に送り込んだと思ふと、空車は河岸緣に挽きすてゝ、珠なす額の汗を拭き〳〵、喘ぎも止まぬ一人の車夫が、腹掛の丼から、白銅摑み出しながら、立ち寄ッて別格大形の硝子に三四杯、泥濘で捏ねた雨雪のやうなのを息もつがせず立てつけた。元來無口と見えて、「入らッしやい」とも、「有りがたう」とも、一切言葉の挨拶は無しの氷菓子屋も、大事の客と見たか、此の時始めて口を開いて、

「ヘエ、どうも、今日は別段きびしいお暑さで。」

「全くきびしいや、風といふものが、丸ッきり無えのだから。斯ういふ日にア、氷屋さんなんざ丸儲だ。」

「へゝ、載せてお出でなすッたのは何方からのお客で。」

「ナアニ、大して遠くからでも無いがネ、水戸樣の横手から、馬鹿に焦燥ッたものだから、渇きァがッて。」

衆生心

彼れはと問へば、船頭笑つて答へず。再びすれば「ナァニ女をつれ出しやがッたのサ」といふ。さらば驅落かと問ひ返すに、櫓の手も止めで輕く首肯くのみ。やゝありて「潮來の女郎でさァ、精々行ッて銚子で取ッつかまる位のことサ、始終ある事だ」と氣にも留めず。

翌日われは鹿島に詣でゝ、御手洗の甘泉に半日の勞を清しめ、歸途潮來に立寄りて稻荷山の茶店に、次の便船を待ち合はせぬ。

藤棚の下に二疊ばかりの席をしつらひて、影こまやかにおのづからなる氈紋を敷き、木深き杉林には無限の清風を蓄へたり。三方の眺矚は利根一帶の翠白を萃めて目ざまし。我れはしばらく此所に憩ひて、茶店の老婆善く語るが中に、圖らずも一條の因緣を了し得たり。

「昨夜あの川で旦那さま、情死した者があります、男は定といふ佐原の酒屋者で、女はそれあすこに見えます大かい棟の、○○樓の女郎衆で、吾妻さんといふのでござります。船で下ッて、吾妻さんは銚子のものといふ所から、其の沖で曉方に二人一緒に身を投げたのださうですが、水烟の立つのがよく見えたさうでござります、それを津の宮の船が通りあはせて漕ぎよッて見ますと、もう書置ばかりで二人は居なかッたさうでござります。」

あゝ彼等二人は、月に思ひのまゝ浮世を泣きて遂に波間を分けゝるなり。此の上の事は聞くにも及ばず、聞きたりとて語るも用なし。われは昨夜見し夢の續きをまた見る心地して、利根川を顧望の間に渡り、其の日直ちに京に還りぬ。

ことし夏の初めは、われ利根川に過ぎりぬ、名川の趣さすがに風情多し。

銚子の町に機織る家の繁き、縮は鰹の鹽辛とならびて、所の名物なり。姉さん被りに襟脚の見事なるを見せて、やがては、あれが銚子の機織女と、浮名を流す。潮來そも〳〵の戀の源、朝妻船の淺からぬ情の淵瀬は、今もかはらず。

潮來は稻荷山の眺め佳し、往こか還ろの思案橋と、小唄に殘る加藤洲の十二の橋、今は二十にも超えぬべけれど渡る人絕え〴〵なり。眞菰を分けて朝霧の中深く棹し込み行くは、舟一葉、主一人、佐原か津の宮あたりの客が、朝歸りの姿なるべし。後朝の別れこゝに念ひを引いて、船の脚遲く、編笠目深に、笠下地は白地の手拭頰被り、土地の小唄に意氣を歌はせて、木綿物の着流しに縮緬の帶のみ白く、我れと操る櫂の手の屈強なる、朝風裾をかへせば、毛脛の黑きも見られぬ。

利根の夜船は趣き更に多し。天廣く月小さく、遠き彼方、岸一帶の黑き中に、三點五點の火影赤う見ゆるは、息栖か、大船津か、淙々と音する方をふり向けば、今まで隔たりし中洲、近く左手の舷に迫りて、眞菰を亘る風面を拂ひ、漫々たる水の上には銀漣走る。夜も更けぬ、船頭舟をやらずやと、立ち上る時、潮來の方より流れに沿うて漕ぎ下る小傳馬一艘、遙に烟の水を染むる間より潛り出てぬ。風につれてたえだえ送る一ふし、明日は浮名のたつみ風と、一調子張りあげしやうに聞えて、後ハタと止めば、たゞ櫓臍の軋る音のみ急に、船は見る見る我等と行き交ひぬ。

不圖見れば、艫しまりて、二十の上を多くは越すまじき小づくりの男櫓柄を執りて、船の中には一人の女を載せたり。蒼き程色の白きが、ハキと我が目に殘りて、待てしばし、彼の船の主こそと見かへれば、船は早や半町ばかりも後へに拔けぬ。途端に「畜生め」と疾き一聲船頭の唇より洩れて、我等が船は上へ、男女の船は下へ〳〵と遠ざかり、小さく黑き目標何時しか復た煙の中に消え去りぬ。

利根川の一夜

斯くて順風に帆並直れは、事々思のまゝに運びて、よろづは出來秋の十月とまで談まとまり、此に三年このかた我が家の棟を立ち隱せし憂の雲霧も消えて、姉が物案じの樣子も此より變り、吾も氣力やうやう壯になりて、またムラムラと萠すものは出京の念なり。矢張り我が骨の埋め所は彼所と、此の機を外さず兩親にも仔細を告げて、次の日直に出で立つ。車の上より見かへれば、父や母や、街道の辻までは後影を見送り給ふ。見えずなりし頃は、身も並木道深く縫ひ入りて、蟬時雨サツと落とし來る。國府津よりは汽車なり、揉まれ揉まれて遂に、東京の飯を食ひ了せたる五年ぶり、今は兩親も此の地にあり、姉は二人の子の母となり、今年あたりは是非避暑に來よとの便り、想へば一月に足らぬ故都の假寢にも、さまざまの夢見つるものかな。

が、今またつく〴〵と姉の身の上を聽くにつけ、同じ心起りたり。靜けき水の面行く船も、渦捲立てる底の黑潮に、若し棹を觸れん時、誰れかは安穩に見過ごすべき、之れを思へば、吾はこの山蔭に蟄して、暫しなりとも、淋しき姉を慰めたし、老いたる父母をも喜ばすべし。

吾は斯く思ひ定めて、歸京の日取近寄るをも心にかけず、さりとて以前ほどにこの地の風趣懷しとにもあらず、胸の奧には微なる暈を帶びて、たゞ女々しく、半は田舍人と成り了したる心にて日を重ねぬ。吾は恐らく氣を腐らせしなるべし、あはれ吾が半生はこのまゝに埋もれ行くべきか、とは其の時の吾が胸にも往來せる疑なりき。

九月一日

九月一日、思ひ設けぬ客ありて、次の間より漏れ聞けば、父の聲として、

「それは至極結構、どうせ此方も再緣の事でござれば。フム〳〵。ヤレ〳〵それで安心しました。折角どうなつた事か、實は外からの話も無いではなかつたが、貴方の方へ如彼言ッてあるからと思ひましてナ、差し控へて居りましたが、イヤそれは萬事好都合。」

母も傍より口を挿みて、

「堂前さんでも、さういふ都合でございますなら、いづれ早い方が、さうでございますとも、善は急げとやら。ではねエ先程相談したやうに、良人からお話しなさいませ。娘へは私から烏渡申し聞けて置きますから。」

吾は此の話を聞きて、覺えず躍り上りぬ、勝手元なる姉を驚かして、事の次第を語れば、姉はきまり惡げに顏を背けたり。

如何にかしけん

如何にかしけん、吾は此の日より姉の事氣にかゝりて、先立ちし新夫のことを思ひ續けに斯くは寠るゝなるべし、思へば此所にも吾に鳴くもの秋の蟲のみにはあらで、故郷を樂しきものとは、離れて後の空想なりけりと、吾が晴やかなりし胸にも深くも感じぬ。或日そつと母に質せば、人情の切なさは其所ばかりに止まらず。

姉は吾と三つ違ひの二十三にて、一昨年さる方へ嫁づきしが、緣薄うして、一年經たぬ間に夫と賴む人に死別れ、浮世さんゞゝの涙を見て、齡も三つ四つは一時に老けて、今は出戾りの哀れの身なり。されば夫死したる後の一年はたゞ、其方の空のみ懷かしく、此の世果敢なく、夜半の枕紙乾く間もなかりしが、月日こそ可笑しきものなれ。遠ざかるに連れて忘るゝともなき復の一年は、心我に還り、父母の慈愛に、行手少しく明るうなりぬ。されど、人の身の上を見るにつけ、思ふにつけ、憂は蓮の糸の絕ゆる時なく、如何になるべき我が末か。肩身狹き、我は一生寡婦暮しの、それも厭はねど父が母が、いかばかり悲しき思ひをし給ふやらん。是非に今一度嫁かではとの勸にまかせ、良き緣あらばと心當の先々へ賴みしも、幾月かの前なるに、それさへ捗々しからぬは、よくゝゝ緣の遠き身か、この齡になりて、近所友達の前も耻かしく、兩親にまで氣の置かるゝしがなさ。たゞ良き緣あれかし、如何なる舅姑小姑も我は厭はじ、一刻も斯くしては居たくなし、と心せかるるだけ、倘懷かしき父母の傍の居づらく、姉が此の頃の物思とはなれり。

さればこそ、日外母が言葉の端にも、姉は世間がつらく、御身は勝手の醉狂にて、二人とも家には得留まらぬ性分、よくよく宿緣淺き我等なるべしと、怨じ給ひしことありけれ、吾はその時、フト心細くなりて、東京には最早歸るまじと思ひし

「洒落なんか言ッて、お前は相變らず氣樂だねェ。」

言葉の尾の、何となく氣にかゝるは、澄み切りたる水に泥の溜りし心地して、姉の機嫌いかにと、ソッと窺へば、姉は土によごれし手をそのまゝ、ボンヤリと何事か物を思ふ様なり。

「姉さん、何うしたのです。」

と言ふ時早く、姉は心づきて今までの愉快なる調子に戻り、

「アラそんなに青いのを採ッて、お前どうする積り？、皆片赤らみではないかね。ホヽ、それ御覧、それ御覧。」

「ナアニ是れくらゐなら上等だ、喰へるのは香で分かる。姉さんは顔色が悪いやうだが、體でも悪いのか。折々ひどく鬱いでることがあるぢやないか。」

「何でもないよ。いろんな事を考へるものだから、ついそんなに見えるのだらう。サアもう歸りませうよ。それだけあれば澤山。あの水槽に投り込んで、樋口に打たして置けば、今に冷え切ります。」

姉は話を外に轉じて、先に立つ。詮方なければ、山と盛り上げし瓜籠を水船の傍まで運びやりて、吾は後の谿合を一めぐりし、歸れば掃除も早や濟みて、巽明の十疊間、母のたんねんは鏡の如き廻緣に見はれ、水を吳れし軒端の葱、風鈴の短册まで父の好とおぼしく、手を入れし青梧の幹には露滴たりて、葉蔭に嵐氣立ちたり。手水をすめて、此所に親子四人車座になり、一日の暑氣拂と、梅干に三盆かけたるを茶菓子にして、番茶の煮花を啜れば、實に王侯の富貴も此の時ばかりはと思はれぬ。

「どうしてお前、庭いぢりよりか、此の節は畑いぢりの方が忙しいからネ、彼所の瓜畑なんぞも、皆お父さんの丹精なのだよ。」

と姉が指ざすまゝに辿れば、右は茄子畑、左は玉黍蜀の間より芋の葉の露置けるが透きて、彼方は一面の瓜畑なり、畑の香高く、濡れたる土に爪先の汚るゝも興あり、露を分け行けば、姉は早く瓜蔓の中に身を屈めて、

「經さん御覽、今年の出來やうを。」

言ひつゝ庖丁を取り上げ、黄ばみたるを四つ五つと摘み取りぬ。

『ドレ僕が一つ切ッて見やう。』

と尻端折りて吾も踏み込めば、姉は懇に切り方を教へ臭るる。

「其蔓は細だから、不味いよ、金柑の方がおいしいから、此方をお切りよ。細長いのや、瓢箪形をしたのは、不味い證據ですよ、俵の恰好した、丸まッちいのがおいしいに極まッてる。それはお前、幾通だッてあるわね、細だの、鴨川だの、金柑だの。」

調子のをかしかりしに、吾は覺えず口拍子を取りて、

「蜜柑だの、紀州だの、雲州だの。」

と續くれば、姉は突然の吾が輕口に愕ける如く、

「馬鹿をお言いでないよ。」

と首を擧げて吾が方を見かへりしが、フヽと噴き出して、

指を輪にして

指を輪にして、帽子の塵弾きし夜半は、月一しほ眞圓に、故郷の夢の淡かりき。嬉しきは今年の夏なり。

今しばし捨置き給へ、この若さの眠氣盛を朝起させて何かせんと、母上の勞はり給ふを夢のやうに聞きて、寢かへり打てば、父上の聲とおぼしく、

イヤ稀には朝起も樂よ、朝露の墜ちぬ間に、瓜畑見たしと、一昨日よりの願なれば、と靜に枕下に立寄り、蚊帳の外より、經也々々と呼醒し給ふ。短夜の枕戀しさに、宵の定を反古にして、一昨日も昨日も寢過したれば、今朝こそはと、蒲團の上に起き直り、眼を擦りて、ハと返事すれば、母の後よりホヽと笑ふは吾が姉なり。

母が背よりフハと被せ呉るゝ白地絣を其のまゝ、グル〳〵と紺絞の兵兒帶巻きつけ、縁先より燒杉の庭下駄をつッかけて下り立てば、姉は表より廻りて、

「私が一緒に行ッて上けやう。」

と早や横手の木戸を明けて待つ、淺黃地の手拭を姉さん被にして、手には笊に薄刄の庖丁入れたるを抱へたり。

寢衣の暖味まだ去りやらぬ肌に、冷々と朝風の心地よく、襟を寬げて、思ふさま大氣を吸へば、身も透き通る樣なり。今を命の朝顏、籬根一ぱいの花を飾りて、紅に、紫に、瑠璃に、絞りに、盛の色を比べ、露に濡れたる葉の色生々と、風わたる度うれしげに身を搖るを、吾はしばし眺め居しが、姉に促されて垣の外に出でぬ。

「お父さんの庭いぢりも、相變らずらしいぢやないか。」

夏の夢

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜半ともおぼえし頃、金剛が淵に沿うたる街道を、露に裾ぬらし、蟲の音に包まれて、辿り行く男女の影は、紛ふ方なき松澤とお鈴、翌朝は娘が家出せしとて、揉みかへす騒ぎも甲斐なく、その次の日は十五夜、豆畑に蟲の音は一しほ冴えたれど、月の國にや新世帶を持ちし、それとも塵の都は芝口か馬喰町あたりに宿帳をつけさせ、こゝしばし浮世の荒浪へ飛び込む仕度最中か、二人の行方は皆くれ知れざりき。

女は情に淡きものとのみ思ひ習へる松澤は、眞實こめし言葉の嬉しさに、覺えずホロリとなれば、女は顏をふり上げ、冴えし調子にて、

「いゝえ、妾やさう決めましたノ、お父さんおッ母さんがあれですもの、このまゝでは、妾だッてゐられやしない、一緒に何所へなり身を隱して、時節を待ッて下さい、そんな心細い事をいはないでサ、行けなければそれまで、一緒に死んで、あの月の國へでも行かうぢやありませんか、宜ござんすか。」

「それでは私が濟まない。」

「濟まないといへば、妾や今までは、ほんとに濟まない事だらけ、堪忍して下さいよ。何でもサ、そんな諄い事はいゝぢやありませんか。」

「私は氣が咎めて、どうもお前を連れては行かれない。」

女は耳にもかけず、小首をかしげて考へ居る。男は月を見つめて、是れも同じさまなりしが、母屋の方に人音するを氣にして、言葉をつゞけぬ。

「では未練なやうだが、今夜一晩、どうにかして、ゆッくりと名殘の話をさせては貰へまいか、お父さんやおッ母さんにも濟まないし、お前の身の末が氣になッて、連れてはどうも行けないから、お前の志だけを身にしめて行きたいと思ふがね。」

お鈴それには何とも答へず、たゞニコリと笑みしのみ。

「彼所の蔭で、少しの間待ッてゝ下さいナ、待ち遠しくッても、外へ行ッては可けませんよ。」

言ひ捨てゝ、急ぎ足に桑林の角を曲れば、松澤は小屋の片隅に身を潜ます、月も中空にさしかゝれり。

あたりに紅を漲らし、眉目おのづから淸やかに、今までの其の人とは別人のやうに見えたり。是れが我夫なりしかと思へば、假にも他なる心を起せし我が身の怪しく、あるかなきかの埋火ほどにも見えざりし眞の戀といふもの、人の情に掻き起こされて、パツと燃え上るかと覺えぬ。

「私や貴郞に濟まない。」

「濟むも濟まぬもないサ、私から、嫁ッて吳れと賴むのだもの、私に怨は少しもない。」

他の心に酌取られ、先を折られて、女は言ひ澁り、

「貴郞どうしても、此方には居られなくて？。」

「さうさね、マア居られさうにもなし、私も居やうとも思はない。先刻來る道々も考へた事さ、私はいッそあの金剛淵にでも飛び込んで、死んで了はうかとも思ッたが、それも面當がましくて、結句好意が邪魔にでもなッてはと、止めにした。けれど身を退くだけの事は是非して、お前のさいさきが祈りたい、是れまでの事はホンの仇花の一盛り、お前には後の憶ひ出にもならうし、私はそれを盛りの紀念にして、此のまゝ老い込んだ所が、ちッとも惜くはない。是れからは、蔭ながらお前の幸福を祈るばかりだ。綿屋へなり、何所へなり緣づいて、私の顏を立てゝお吳れ。」

「もう〳〵そんな事は言はないで下さいよ。私は悲しくッて。」

とお鈴は突然男の膝に突ッ伏したり。

「私や貴郞と一緒に行きたうござんす、連れて退いて下さい。」

「馬鹿な事。」

「お前は言ッて吳れぬが、人の噂に聞けば、綿屋からも貰はれたといふぢやないか、それを私への義理で斷ッて居るといふことも聞いた。ソ、ソレだけで私はもう澤山だ、並の夫婦が一生つれ添うても得られないだけの滿足が、其の中にはある、私は淚の翻れるほど嬉しかッた。斯うして久しく別れて居る中には、邪推も僻も、出ないではなかッたが、この話を聞いてからといふもの、それらは、朝日の前の露霜ほどに消えてしまッて、此所で言ッてはをかしいが、蔭では手を合はすやうにしてゐる。」

何と言ッてよいやら、途方に暮れゐたるお鈴は、聞きかねて、男が足の爪先に着いたる泥を拂ひやりながら、

「そんな事はもうお止しなさいよ。言ふだけ他人がましいぢやありませんか。」

「相談といふのは其所だが、其れまでにして貰へば貰ふほど、私はお前に申譯がない。イヤ決して義理立てでなく、實お前を行末の見えない私ゆゑに朽ち果てさすのが可愛さうだ。綿屋といへば外々とは違ひ、現在花の咲くお前、それを私がゐるばッかりで、秋のすがれに引き込むやうでは、私は善いが、引き込まれるお前の行末が、私は實に悲しい。貧苦に窶れて、氣心までも慳貪になッて、あの長屋の嚊衆と同じやうになッて了ふまいにも限らぬ。それよりか、此所で私一人が辛い思をして、お前と手を切りさへすれば、二人の不幸が一人で濟む。私とても、續くか續かないかは知らぬが、一人身で流浪する内には、復た芽の吹くまいにも限らず、其の時には、歸ッて來て、淸く兄妹の交際でもさせて貰はう、相談といふのは此の事だ。」

お鈴は引き入れられて、手を膝に重ねしまゝ、しんみりと聽き惚れゐたるが、何時か星の如き眼に淚の露噴きて、そッと流眄に見やれば、今しも言葉を切りて、深き息ホッと、月影に蒼白き顏を晒したる松澤は、感高まり、面ほてりして、頰の

と輕く受けはしたれど、女は胸の底を見らるゝ心地。松澤は何とやらん物足らぬ心地して、
「無論用事といッては、それだけなのだから、今夜といへば、今夜でもいゝサ。」
「でも貴郎、明後日までどうして居るつもり?。」
といふが男の耳へは入らざりしか、それには應け答へせず。
「さうだ、思ひ立つ日が吉日だ、今夜にしやう、やッぱり今夜にした方がよからう。」
持ッたる蝙蝠傘を傍の畝に横たへて、お鈴を据わらせ、自分も片端に腰をかけながら、
「私は今度出れば、當分歸ッて來ないつもりだから、お前との緣は、綺麗に斷ッて置かうと思ふ。初めの內は、あの嬉しかッた、夢のやうな昔に、どうかして尙一度戻ッて見たいと、それ一心にやッても來たが、今になッて見ると、どうしても私はだめだ、とても行く先碌な事は出來さうにもない、何時たのしい昔が見られるやら、當もない事を當にしてゐるやうよりは、いッそ今の內に思ひ切ッて、雲水坊主にでもならうかと、フラ〳〵と想ひ立つこともあるが、また考へ直すと、未練氣も出て。」
說き來たッて感に堪へぬものゝ如く、しばしは咽つまりて、跡を言ひ得ざりしが、
「私は心からお前に禮を言ふ、お前に盡して貰ふ親切がなかッたら、私は今まで無事では居なかッたらう。離緣してからは赤の他人の、貧乏はする、意氣地はない、自分で愛憎のつきた此の私を、今日まで捨てないでゐて吳れたお前の志は、何と禮を言ッてよいやら。」
泣き出しもしさうなる言葉の端に、お鈴は驚きて、今さらのやうに松澤が顏を見直したり。

「何をそんなに考へてお居なさるの？、妾には言へない事なの？　言へなければ可ござんす、聞かなくとも。」

ツンとして見すれば、男は思ひ定めて、

「私は此の土地に居まいと思ふ。」

意外の一言に、お鈴は眼を丸くしたり。

「何うするの？。」

と覺えず玉蜀黍の葉を綰め居たる手を放てば、バラ〳〵と露かなんぞの飜るゝ音。

「何時まで斯うしても居られないし、實はお前にも話さなかッたが、盆を言ひ延ばした明日の月末が、どうしてもじッとして居ては越されない譯になッて………。それはどうか出來もしやうが、私は是非に此の地を立たうと思ふ。世話になッてる人へは濟まないけれど、今夜中に此の土地を離れて了はうかとも思ッてゐたのだ。」

「それで何所へお出なさるつもり？。」

「何所といふ當もないが、も一度東京へ出て見やうか、それともズッと方角を更へて見やうかとも思ッてる。」

「さうねエ………。若しさうなら苦しい思をして、明後日まで延すよりか、今夜極めちやッた方が、いゝかも知れませんネ。相談て、別に斯うしたらといふ考へがあるのですか。」

「考へはそれだけサ、けれども愈々さうなれば、私は是が一生の別れだらうと思ふから、どうか、ゆッくり逢ッて、名殘が惜ませて貰ひたいやうな氣がする。」

「縁起でもない事。」

と言ひ放ちしが、フト想ひ出してか、また忽ちもとの寂れし調子に戻り、

「私實は相談があッて來たのだから、明後日の晩に必ず來るよ。」

うかと口をすべらすを、相談と聞きて、お鈴は急に氣になり、

「相談？、何んな事？。」

「今夜話して居ては遲くなるから、次回にしやう。」

「何んな事？。」

と男の顏をふり仰ぎて、切に答を促す。

「どんな事ッて、私は少し考へかあるのだがネ。」

「そんな事なら、話したッてよいものを家の方はどうにもなりますから、聞かして下さいナ。」

「さうネ。」

鐵柄の蝙蝠傘にて地をつゝきながら、跡を言ひよどみて、

「今夜は止さう。」

「何故？。」

「何故と言ッて、今夜は遲くなると可けないから。」

「可ござんすよ、構はないから聞かして下さいよ。」

と言へど男は悲しげに案じゐるのみにて、答なければ、お鈴は焦れ氣味になりて、

れ程までに思ひつめたる心の、嘸かし氣落して取亂しもしかねじ、話すは今夜にも限らねばと、氣をかへ、

「妾今夜は、何だか變な氣持がして、クサ〳〵して可けないから、明後日の晩復た來て下さいナ。家でも、永く斯うしてゐると、變に思ひますから。」

「それヤさうだ。」

言ひしまゝ松澤は立ち上らんともせず、つくねんとして手を組み居るは、何所か心に飽き足らぬ節のあるらしく、思案して見れば、今宵來しも暇乞なり、相談なりの爲なりしに、今さら我れより他國と言ひ出すが辛くも心外にもなりて、エヽまゝよ、明後日といへば中二日の辛抱、何とかなるべし、今夜はこのまゝにして別れんものと、松澤は考へ直して、

「それでは明後日ゆツくり話させて貰はう、家へ知れると好くないから、お前は早くお歸り、私もブラ〳〵涼みながら歸るサ。」

本意なげに立ちは立ちたれど、心は跡に、後姿のしほ〳〵としたるをお鈴も立ち上りて、二三分間は見送り居たるが、稻の香を送る風ハラ〳〵と、玉蜀黍の葉に鳴りて、蟲の聲一しほ高うなりし時、お鈴は覺えず、

「あのネ。」

と呼びかけて二足三足驅け出す途端、ふりかへりし松澤が顏の蒼さ。

「今夜は濟まないけれど、堪忍して下さいよ。明後日は屹度待ッてゐますからネ。」

と寄り添うて言へば、不意の優しき言葉に、萎れし松澤は活きかへり、言葉の調子まで俄に元氣づきて、

「來る、來る、屹度來る。」

お鈴が常よりも言葉尠なに、心のあるやうなる應對ぶりを、先程の擧動に思ひ合はせて、松澤は心安からず、邪推がさする業の嫉ましさよりも、裏悲しさが先立てば、怨ずる言葉も自から控へ目になりて、

「お鈴、お前は何か怒ッてるやうだが、私が今夜だしぬけに來たのが、氣にでも障ッたのか、それならさうと、サッパリ言ッて呉れゝば、私は直にも引ッかへして歸る、强て邪魔をしやうとは言はないのに、何んだか奥歯に物の介まッたやうな……………。お前それではあんまりといふものぢやないか、打ち明けて言ッて貰へば、私はどんな事でも嬉しく聞かうのに。」

「貴郎こそそんなに愚痴ッぽい事を言ッて。邪魔にするなんて、怨みがましいことは、言はないものよ。妾は何も怒ッてゐやしません。」

「でも、どうも勝手が違ふやうに、私には思はれるが、それとも體でも悪い爲か。」

「體も悪くはないけれど……………。貴郎今夜は何か用で來て?。」

「私?。別に用といふでもないが。」

松澤は心に蓄へしことも打ち出す遑なく、お鈴が次の句如何にと、生半熟の答をするを、

「何かあるの?。」

と尙も問ひ詰められ、いよ〳〵出端を失ひて

「何も別に用はなかッたが。」

と似たる言葉を繰り返す。お鈴はしばし考へ居しが、松澤の寠れし風情をシミ〴〵と見るにつけ、過ぎし事、行末の事よりも、さしあたりての不便さに、胸ふさがり、今玆にては、宵の間の手切の話はいかにも打ち出しにくゝ、打ち出したらばあ

下

家の右手、前よりは桑畑木深く隱して、薪小屋の庇下に積みたる、伐り放しの丸太の上に、男女雙びて腰をかけたるは、お鈴と松澤なり。月の光を正面より浴びて、女は少し俯し、男はその横顏を眤と見入りたり、豌豆の這ひ茂りたるあたりには、蟋蟀の聲のみ高し。

「お前にさう言はれゝば、面目次第もないが、私は斯うして、何所に遠慮のある體ではなし、成ることなら、毎日でも逢に來たいのを、お前の首尾に障ッてはと、之れでも辛抱に辛抱をして、それこそあの牽牛織女が天の河を渡るほどの思をしてお前の指圖通り四五日隔にホンの顏見に來る。無事なのを見るまでは、もしや捨てられはすまいか、外へ往くと極ッて逢へないことになッてはゐまいかと、胸は刳られるやうで、一緒に居た頃の事を想ひ出すと、現在自分の女房であッたものが、斯んな譯にもなるものかと、空々しい、賴み少いやうな氣がする。今夜は來る筈でなかッたから、お前の吃驚したのも無理はないが。」

「吃驚した譯ぢやありませんけれど、何だかついネ、出後れましたの。」

「家の都合が惡かッたらうねエ。」

「いゝえ。」

「お父さんも、おッ母さんも、お在家たらうネ。」

「居ますよ。」

い。」

母の立ちしあと、お鈴はなほも氣拔けのしたるやうに、ボンヤリと居殘りたるが、後挿をぬいて、頭の地を焦燥たけに搔き撥き、つと緣を憚りの方へ曲りぬ。

不圖こゝより見やれば、家の横手、桑畑の片蔭より、月明に半身を出して、頻に小手招するものあり。お鈴は一目にて松澤と知りぬ。常ならば、直にも合圖してそれと知らする筈を、今日ばかりは其の影を見ると其のまゝ、逃げるやうに座敷に駈け入り、障子の蔭に身を潛めたり。

されど、いかにして其の場の去られうぞ、お鈴は動悸する胸を押へて、ソッと障子の端より彼方を窺ふ。

松澤は、今のお鈴の樣子いかにも合點ゆかず、慥に此所に我れあることを氣づきし筈なるに、知らぬふりにて駈け込みしは人違か、イヤ〳〵一年連れ添ひし最愛の妻の姿、たとへ一目になりとも、見誤りてならうや、あの銀杏返と前髮の釣合ひ具合、物ごし恰好紛ひもなきお鈴なるに、素氣なきあの振舞は若しや、若しや我れは早や捨てられし、それを曉れよとの心か、さりとはさもしき仕打、お鈴に限りてさうはせぬ筈、我れを他人と見ちがへしにあらぬか、と首をかしげながら悄然とまた元の木蔭に蹲まり、鬨の聲あげて攻め寄する蚊を拂ひかねつゝ、次の便りもと待つさまなり。

いぢらしと身を震はせて、詫を心に言はせるしお鈴は、怺へかねて、在り合はす草履をつッかけ松澤の忍べる畑蔭に小走り寄れば、男は垣越に身を延ばし、顏と顏とをさしよせて、しばし私語くと見えしが、やがてお鈴は座敷へ、松澤の姿も見えずなりぬ。

しぬ。搆はぬ庭の四目垣に寄せて、萩の一叢生ひ茂り、長く地に腹這ひたる、高く人の丈にも及びたる、撓み面白う垣の外に猿臂を延したる、葉毎に打水の露繁く置きて、限なき月の光を砕きたり。畑につゞきて、蟲の鳴く音こぼるゝ如く、一間の裡森閑としたるに引かへ、店の方には、父が乙息子雇人どもと話し興ずる聲聞こゆ。母はまた說き出しぬ。

「お鈴、どうする積だえ。今の理合が腑に落ちましたかえ。妾はさう思ひますよ、お前が此處で綿屋さんへ嫁ッてしまへば、それが却ッて松澤の爲にもなりはすまいか、お前が斯うしてゐればこそ、彼れも寄ッて來るといふものゝ、お前の身が片づけば、松澤だッても男だもの、諦めてしまひませう、そして立身の勵も出て來やうといふもの。表向は兎に角、內實が今までのやうな行掛りでは、どうする事も出來はしない。いづれさッぱりと手を切ることになれば、松澤もあゝして居るのだから、お父さんに相談して、身の振方のつく程の事はどうにかして上げやうから、さうなれば、松澤の爲にもよし、お前の爲、賢次さんの爲は勿論、三方が圓く治まるといふもの。」

つく〴〵聽きゐたるお鈴は、凉しき眼に決心を見せて、

「ではおッ母さん、さうしますよ、妾や綿屋さんへ行くことにします。」

容易くはと思ひし竹の、ポキリと折れし如く、母は意外といふ面持、尙不安心と覗き込みながら。

「屹度なのかえ。」

「決めましたの。」

といふ顔の他意なく見ゆるに

「それで妾も片安心した。さう決まれば譯もない事を、お前があんまり強情だものだから、どれ程氣を揉んだか知れやしな

「それならサッサと此方をお極めなネ。」

「けれど私はたゞ可愛さうだと思ひますの、一度はあんな譯になッた人を、落目につけ込んで、スッぽかして、妾ばッかり善い目をしたら、跡で松澤さんはどんな氣持がするだらうかと、それがたゞ可愛さうで。」

蚊遣の蔭、母には見せぬ涙の、それと聲に知るゝはお鈴なり。母もしばしは默然としてゐたりしが、言葉をつなぎぬ。

「それは道理だと思ひますが、之れといふのも、つまりはお前がまだ松澤の事を忘れ切れないからの事、當分心を鬼にしたつもりでゐれば、少し立つ内には氣が紛れて、忘れて了ふ。それッぱかしの事を氣にして、大事の出世口を取り失ッては、後悔しても追ッつかないから、よく／＼了簡おしでないと、損だよ。」

言ッてやゝ娘の顏色を窺ひ居しが、お鈴の兎角打ち解けぬを見てまた說き續くる。

「松澤に氣の毒だと思ふのも道理ではあらうけれど、賢次さんだッても据ゑかへて考へれば同じ道理だよ。是れは妾が言ふのも異なものだが、賢次さんのまだ兵隊に出ない前から、お前には大變執心で、是非といふ話であッたさうだが、少しの行違で松澤の方へ行くことになッた。其年賢次さんは自分から志願して兵隊に出られたが、それもお前を他に取られたやけ腹からで、今度歸ッて來て見れば、不思議なやうに、お前も丁度不緣になッて家に歸ッてゐる。よくよく緣の搦み合ッたといふものか、唯ではないやうに思はれるから、內緣の切れないものを引ッたくるやうで、松澤へは濟まないが、どうか來ては吳れまいかと、それは／＼涙の出るやうな口上で、お父さんがもう喜んで、一も二もなく受け合ひ込みなすッたのだから、お前だッて、賢次さんの身にも少しはなッて見なければ、冥利に盡きますよ。」

お鈴は俯向きしまゝジッと考へ入る、母は續けざまにスパ／＼と煙草二三服吹かして、蚊遣火を搔き起し、緣先に突き出

中

「お前もあんまり目端が利かな過ぎるよ、何時までそんな事を言ッてゐられるものか、考へても御覽、お前ことし五ではないか。大抵に見切をつけて、所置を極めて置かなければ、さうかうして居る間に、年は取る、惡い噂は立つ、ある口まで取り逃して、一生を出戻りで通すやうな事になるまいとも限りませんよ。其所を幸ひ綿屋さんで、先方から逹ての所望といふのだから、貰はれる身に取ッて、是れほど仕合な事はない。それで先方はあれ程の身代なり、賢次さんはあの通りの働者、男ぶりなら、口の利きやうなら、何所へ押し出しても耻かしくはない。其の上此方には再縁といふ弱身があるのではないか。この縁談を取り逃したら、お前は一生有逹は上りませんぞ、片意地な事ばかり言はないで少しは了簡もして御覽。」

「おッ母さん、私は再縁々々と言はれるのが、眞實辛いから何もそんなにして他家へ行かなくとも、髮を結ッてなり横濱へ出て奉公してなり、一生は家の厄介にならないで過ごせやうと思ひますの。」

「再縁だからと言ッてお前、先樣が其れを承知で所望するといふのに、何も辛い思をするには及ばない。此方は大威張で行けるのではないかね。一人で過ごすのを手柄のやうに思ふのは、それは小娘の折の事、今時分そんな事を言ッたッて何うなるものかね、今までは苦勞の仕つゞけであッたから、是れからお前が樂の出來る番に向いたのでせう。あんな松澤なんぞの事は綺麗に忘れて了ッて、この方に極めるが可いと思ひますよ。」

「おッ母さんは人を馬鹿にして。何も彼の人に未練があるなんて、そんな譯ではないと、あれほど言ッたぢやありませんか。」

「切れなきや薪割か何かでぶッ切る。」

「何だネ、默ッてお出でなさい、もうお前には話さない、こゝの賢旦那に話すのですよ。」

松澤は見知られぬやうと、身を小くして通り過ぎ、歩を緩めて聞き居しが、話の前後ヒシ〳〵と胸に徹へ、紛ひもなう此の身の蔭口とおぼえぬ。自ら知らぬではなけれど、返す返すも疎ましの身や。お鈴が昔に變らぬ信實も、疑へばほんの義理一遍、內心は吾を怨みもし五月蠅くも思ひゐるかも知れず。今までとても、思ひ切らんとは幾たびか決心したれど、ツイ逢ふたびの情に引かれ、今日明日と徒に過せしと、思へば不覺なりし。今宵はいッそ此のまゝに引ッかへさんか。イヤ〳〵今宵こそは、最後の相談きめて、綺麗に跡を拭ふべければ遠慮するまでもなし。此所まで來し上は一日なりとも是非に逢はでは。と同し事を念じかへして、暫時は彼方の話も耳に入らざりしが、風の吹きまはしにや、また一くさり際立ちて聲高なるが聞こえぬ。

「銀公はこの節、氣も變だといふではないか。」

「いッそ金剛淵にでも陷ッて、死んでしまへば兩助かりだよ。」

さらば今までの話はやはり吾が上にはあらざりしか、さるにても似たる本末、死ねよとまで、浮世が邪魔にする體は、よくよくの因業なるべし。銀公とは、あの骨根の銀次が事か、何とやら、我が身の行末も見ゆるやうにて心細し。

一歩も早くお鈴に逢ッて、と小急ぎに行く向うには、遙に大川の流月にきらめきて、見かへれば、ありし火影豆の如く、青田が果に埋もれぬ。

「ハヽヽヽ、さうですとも、あゝ執こくッては、貧乏侍士の言分ぢアないが、全くヤリ切れねえ。」

どうやら我が身の上にも取りなされて、松澤は覺えず耳を傾けしが、

「第一御亭が堪りますまい、能く我慢してゐますことさね。」

と二の句に、さては他の噂なりしかと、何かは知らず安堵の思をすれば、このたびは女の聲として、初の方は聽取れず。

「この方はまた逆さまに、御亭主の方から蒼蠅く着きまとふのですからね。さう言ひますことさ、何ぼ何でもねエ、男らしくない、幾ら大事にして吳れますからッて、あれでは厭になッちまひます。」

「オヤ、お幸さん火事は御近所ですか。」

「ヘエ、何ですと。」

「燒けさうだと申しますぜ。」

「アハヽヽ、お氣の毒さま、他樣の事ですよ。けれどねエ、全くの所、あれでは誰しも厭になッちまひますよ。其れに何よりか當人の邪魔になります、緣が切れたといふのは上部ばかりで、盛りのついた洋犬見たやうに、先の男に尾けまはされ、一ッ間違はうものなら、どんな騷にならうも知れぬといふ、危なッかしいものを何所の茶人がお嫁になんか貰ふものがありますか。」

相手の男、差し合ありとの心をエヘン／＼と咳拂ひに知らせながら、

「手さへ切れゝば、誰だッて貰ふまいには限らないサ。」

「其の手がちよッくらちよいと切れないので困るのだよ。」

何で渡り難い世の中であらうぞと、一安心する裏口へは、もう讒訴が廻り、臺所からの勤が足りないのであらうと妻に心づけられた時は、最早脈の斷れた後で、する事なす事皆へマばかり、到頭會社にも居づらくなッて役所の方へ換ッたのは善かッたが、家の經濟はさんぐで、妻にも知らさず苦しい思をして遣り繰りしてゐた穴が一時に明き、噫あの時であッた、何故談しては呉れなかッたかと、妻にひどく怨まれて、詫て、妻の手で一時は纏めたが、あれからといふもの二人は丕裸、貧乏はいとゞ骨身に染む、手は廻らなくなる、貧すりや鈍する譬通り、此所も何時か失策ッて、お鈴といふ女房つれた浮浪人、さうぐは彼れの里へ厄介もかけられず、持ち切れなくなッて、夫婦別れと談の極ッた時は彼れは泣かなかッたが、私は心から泣いた、氣が變になッたのではないかと言はれるまで泣いた。噫今でも想ひ出せば腸が斷れるやうだ。それももう一年近くなる。」

歩むともなく川根といふ所まで來れば、往來を右手に小半町避けて屋の棟四ッばかり、月明に高く黑く透き、中央なるが一ッ、洋燈の火影を風に搖らせて、傍に三戸前まで土藏の白壁眼を剝きしやうに幷ばせたるは、綿屋とて、この鄕切ッての大盡なり。松澤は、しばし立ち留まりて、遠見につくとぐ眺め居しが、ホッと一息して、

「あれ程の家臺骨を踏まへての談だから、お鈴に取ッては仕合せだ。この私が一日早く退けば、一日だけ彼れの爲になる、折角浮まうとするものを、私が居るばッかりで見すく奈落へ引き入れるのは可愛さうだ。併し、併し、萬一さうと極まらうものなら、私は生きては居得ないかも知れぬ、是れまでだッて妻の爲に取りつないで居たやうなものだ。」

想に沈む耳元に人聲聞えて、やうく言葉の文の分り行く頃、透かし見れば、綿屋が廣庭に緣臺を幷べて、近所合壁打ち寄りての夕涼と覺しく話は其れより漏るゝなり。

上

居敷のあたり今にも抜けさうなる白地の、汗染みて、濡紙かなんぞのやうに、脚に巻きつくを、

「エヽ、五月蠅いナ。」

と引きからげて、四分六分ほどに端折りながら、月影暗き山蔭を丁度通りぬけたる男あり。粟畑にサラ〲と風の音づるゝ、それにも早や世の秋は感ぜられて、

「その癖襟元は薄ら寒い、が無理は無い、今年ももう九月だ。斯うなることゝ知ッたら、今まで愚圖〲してるのではなかッたッけ、意氣地の無いざまだナア。」

蝙蝠傘片手に、地に曳く影を眺めては、立留まりて、身の廻りをふりかへり見ながら、八王子街道を此方へ辿り來るは、松澤とて、二十四五の、頬こけ色蒼く、見るから窶れたる風俗、何か激してはまた思ひ直すが如く、

「イヤ〲やッぱり此方が惡いのだ、此の世智辛い世の中に、私のやうなものは、とても介まッて行くことは出來ないのであらう、自分も實に厭でならぬ、やッぱり歸るに如ずだ。歸るではない往くに如かずかハヽ。其の厭な事を強て行らうとすればこそ、恥もかく、馬鹿にもされる。今で思へば、私はやッぱり好な大工にでもなれば好かッた。親が遺して呉れた資本を、何の役にも立たない學問三昧に使ひすてゝ、何年か苦學の果が此の始末とは、情ないや。中途で學資は無くなる學問は荒む、其の代りに活きてる書物を讀めばといふやうな、鼻元思案で、うッかりして居る矢先へ、此地の會社に口があッて、乏しいながらも一時の凌はつく。ついした機で、妻まで持つことになッて、初戀のそも〲から萬事トン〲拍子、之れが

墨繪草紙

是れより後、十方山の松風江月は長へに澄みて、名僧の昔を語るとかや。

我れ知らず鐘樓の柱に身を伸ばし、「お糸さん／＼」と呼びかけ透し見るに、此は何時の間にか消えし、在りと思ひしお糸の影はあたりに見えず、人の身の大事、さては何とせん、斯うして居らるゝ場合ならずと、其のまゝ、殘る三ッ四ッは亂調子に、百八(ひやくはち)の鐘を撞(つ)き切ッて、庫裡の方へ一散に馳せつけたり。

「コレ一成どうするのぢや。」

と燥(あせ)り狂ふ一成が鼻先へ、庭下駄靜かに、山吹の露重げなる一枝二枝を花鋏(はなばさみ)に持ち添へしまゝ立ち現はれし方丈の顏、見るより、一成はハッとして、其のまゝ其所に蹲(うづくま)り、

「和尙樣、お糸さんが。」

とウロ／＼するを、方丈は輕く制し、

「氣遣ふことはない、作造に言ひつけて、疾くに連れさせたから、安心するがよい。オヽ其の譯もあらかたは知ッてゐる。所で其方は何う思案した。」

「和尙樣私は行きます、丹波へ。」

「しかとさう決めたか。」

「ハイ是れから直ぐ行きたうござります。」

「ウム善く了簡した。其所ぢやぞ一成。其方は惡魔に出逢ッて、其れを視(み)たのぢや、自分の力で視たのぢや。分かッたとか。それなら仕度して直ぐ立つがよいぞや。」

話す折がなくて、其のまゝ別れた跡は、妾ャ今朝まで泣通し、考へ通して、死ぬ氣でやッと來て見れば、貴郎はしらを切ッて餘所々々しい事ばッかし。あんまりといへばひどござんすよ。」

手に縋りてさめ〴〵泣くを、一成は途方に暮れて默然と打ちまもり居たるが、夜は靜かなり、何時となく我が胸に動悸の高うなる音聞こえて、風なきに我が手とお糸が横顏にかゝる後れ毛と搖ぐが如く覺えぬ。

折しも庫裡の方に、玉を碎くやうなる咳の聲一ッまた一ッ。や、彼れこそと思へば、五體一時にすくみて、頭上に大濤を浴びし如く、一成は物をも言はず、お糸の體を突き離しざま、まッしぐらに鐘樓目がけて駈け上りたり。

呼吸おぼえし撞木の綱、いきなり一ッ援いて、ウンと撞けば、殷々として響き出る梵鐘の聲、さながら大海原に果てしなき浪の巻き行く如く、無間より無間に傳ふ音色は、高く低く野山に溯りぬ。

一ッ撞いては消ゆるを待つ間、方丈の方のみ恐ろしく、二ッ撞いては、お糸が如何にせしと、月明にソッと透して瞰下す。お糸は、撞き倒されしまゝ、石の上に泣き伏して、しばしは起きも得上らぬ風情、流石に哀れと、一成は駈け下りて抱き起こさんとせしが、忽ち思ひ直して、眼を堅く眠り、また援いて、三ッ撞き、四ッ五ッと撞き重ねたり。

鐘は撞きながらも、其の音は更に耳に入らず、煩惱の數讀みかへしては、胸騷ぐのみなりしが、十撞き、十五撞きて、少しく心落ちつく頃、つく〴〵思ひ廻せば、昨宵よりの事たゞ夢の如く、昨日までも、今朝までも知らざりし優しき血汐の、五體に漲る心地して、其の目には、塞げども〳〵、あり〳〵映るお糸の姿、現在のあの樣を如何にして此のまゝには過ごされう、たゞ一走りと下に引かるゝ心をまた取り直しては撞木を援く。

我れと撞く鐘に夜を短うして、東明やう〳〵しろくなれば、早や寺の内に人の氣させり。人の起き出でぬ間にと、一成は

のまゝ脛も露に緋無地の蹴出は泥に塗れたり。

「今頃どうしたのだらう。」

と一成は油斷せず。

「作造さんに頼んで妾ャ死ぬ氣で此所まで來たのですよ。」

と聞きてギヨツとして、覺えず眼を瞬りぬ。

「一成さん、どうぞ妾を丹波とやらへ連れて行ツて下さい。行脚でもする、尼にでも成れと言はれゝばなる、何んな事でも妾はしますから、ね、一成さん。」

「とんでもない、そんな事があツたら、それこそ大變だ。」

「大變でも構ひません、妾はもう家へは歸らないし、歸れる身でもないのですもの。」

「お糸さんは構はないでも私が大變だ。」

聞くお糸は、しばし怨めしげに一成の顔を見つめ居しが、「邪見な」を目に言はせ、言葉に力を入れて、

「一成さん、貴郎はそれ程妾が憎くツて？。」

「憎いのではないけれど、男女で行脚は出來ないからさ。」

「やツぱり妾が嫌だからでせう。妾は貴郎に邪見にされゝば、生きては居ないつもりで、覺悟を決めて來たのだから、可ござんすよ、可ござんすよ。それは妾だツて、耻かしいことも、恐ろしいことも知ツてるけれど、此のまゝ立たせては、また何時逢ふ的はなし、獨り取り殘されて悲しい思ひをせうよりは、いツその事打明けて、と昨宵もわざ〳〵來て貰ツたけれど、

立てば、うたてや、夢にも見しことなき父母の、一成やと、優しく呼び給ふが聞こえて、熱き涙は眦に傳ふ。

さるにても、和尚さまの今日の仰しやりやう、私にはどうも腑に落ちず、引きかへて、宵の間あの家の人々が掛け吳れし情の糸は五臟を締めて、世の中は何時も春風の暖さうなる羨ましさ、今までは人を笑ひし身の、今日といふ今日、私はお山が淋しう思はるゝ。

淋しう思へば、此の上百里に近き野山の起臥に、明日は行衛も知らぬ雲水の旅しみ〴〵と心細く、右つ左つに更かす夜も明方近くなれば、ハラ〳〵と鷄の遠音も幾度か聞え、手水にや起きし、方丈の方に細々と戸を繰る音す。頭を擡れば、足元なる戸の隙より明のさし入るに、寢過ごせしかと、一成は跳ね起きて、身づくろひ手早く、廊下の方へ走り出でぬ。外に出づれば、明け離れぬと思ひし夜はまだ殘りて、宵の雨跡なく、中空に幾刷毛かの雲を曳いて、鐘樓の一角に月淡くかゝれり。樫の森よりかけて、ドンヨリと打霞める中に、本堂の屋根瓦のまだ濡れたるが輝き出で、あたり森として、木の葉一つ搖れぬ靜けさ。まだ遲くはなかりしと、一成はつか〳〵と鐘樓の方へ、石を鋪きたる道一ッ横ぎりかけしが、不意に後の森より寢惚鴉一羽、厭なる聲に鳴きて、また茂みが中へ飛び込めば、後はバラ〳〵と雫の飜るゝ音一しきり。

「あの鴉め、毎朝人を嚇し居る、もう嚇されはしないぞ、成然なんぞとは違ふぞ。」

と少し脹れたる瞼に冷なる笑を寄せ、振り仰向く途端、だしぬけに一成の袖にしがみつく者あり。一成はあッと叫びしまゝ、體をかはさんとして、諸倒しに石の上へ轉びしが、飛び起きて一生懸命の身構に、屹となれば、

「一成さん妾よ、堪忍して下さいよ。」

と尚も取り縋るは、正しくお糸なり。ブル〳〵と震へながら一念の唇を嚙み緊むる。顏は月の光を浴びて蒼みを帶び、素足

「決めないと言ッて、方丈樣が達てさう言はれゝば、仕方はないのでせう。あれ程な方丈樣の事だから、深い考へがあるのだらう、仇に思ひなさッちやァ可けませんぜ。」

「其の考へといふのを聞いて見ましたら、私の周圍には毒蛇のやうなものが覗ひに來てゐるから、早く此所を逃すのだと言はれました。私に限ッてそんな事はないと言ひましたけれど、聽入れて下さらない。」

「はてナ。」

「どういふ譯なものですかねえ。」

「イヤ、それは何かあるのに違ひない。方丈樣が黑い眼で睨みなさッたのだから、間違はなからう。では斯うなさい、私が明日にも方丈樣に逢ッて、其れとなしに聞いて見てあげますから、それまでお待ちなさい。併しさういふ譯なら、あの方丈樣が、一旦かうと言ひ出された以上、動くやうな事は無からうから、あなたは何うせ行きなされずばなるまい。譯を聞いた上は、素直に出て、體を大事にし、修行を積んで、立派なお寺さんになッて、歸ッて來て下さい。其の頃には私等は齒の拔けた爺さん婆さんで、孫でも抱いて待ッて居ませう。」

母が「さうですね」と鼻をつまらせば、お糸は怺へかねて、ホロ〳〵と淚を隕とすを、一成はジッと見入りて物言はず。お糸はそれと、心づいて、衝と立ちしまゝ、奧へ座を外しぬ。

四

一成その夜は、夢現の境に明かしぬ。名も知らず、ついぞ覺へしことなき感じの、譬へば手もて搔き廻す如く、胸に沸き

なら大變ですね。古いお馴染を他國へ遣りたくはないが、我々の商賣と違ッて、これも修業だと言ゃァ仕方が無いやうなものだが。何とか法はないものかなァ。まだ何と言ッても、お年が行かないのだから、お可愛さうだ。方丈樣もよくお出しなさる。」

「さうですね、十五や六では、まだねえ、何處かの人なんぞは、一人で留守番も出來ないのに。」

言はれても、お糸は生眞面目のまゝ、ニコともせず、首を据ゑ、洋燈の火影に眞向ひ居るを、一成は何氣なく笑みかけて、瞳を其方に向くれば、お糸は情火に輝く眼もて、ピタと迎へ取り、しばしは眤と見つめ居ぬ。されど千萬無量の想ひも、一成には通ぜぬか、其のまゝ夫婦の方へ向き直るに、娘は拍子拔けして、ソッと四方を見はして俯むきたり。

「このあたりでは、皆さう言ッてゐますよ、どうか一成さんを行く〳〵は光明寺の住職にしたいものだと。それですから、マア辛抱して下さいよ。方丈樣も、大變力を入れてゐられるやうだから、今に立派になられます。」

一成が兩親に離れしは、まだ物心づかぬ六ッの頃にて、光明寺に拾はれしこのかた、松の聲、水の音に心は澄ませど、世の情合といふもの、とつくりと味ひしことなし。今の和尚が深き慈愛を天とも地とも懷き親む外は、この家のものが一成の素性を知りて、まだ沙彌の頃より、彼れ是れと不便をかけし、其れを父とも母とも頼むばかり。其の央へ、和尚より不意に暇同樣の仕義となり、怨むとにはあらねど、たよる情無くては立ち難き世に、心細さの增さり行けば、秤の一方斷れし如く、重みはおのづと此の家に傾き、其れや是れやに四五日來ざりし間もなつかしく、來て見れば何處までも優しき情がしみ〴〵身にこたへ、嬉しくも悲しくもなりて、一成は聲までしほれたり。

「私は行くまいと思ひますけれど、和尚樣は行け〳〵と言はれる、どうしたらよいか、まだ決めないのでござんす。」

と母は勝手へ、一成は殊勝氣に佛前に直りて、形ばかりの禮拜を濟ましぬ。

この家の娘お糸といふは、十六か七なるべし。ハキ〳〵として氣象の勝てる質なれど、幼馴染の一成に、戀とは知らぬ戀をおぼえてより、容子もおのづと變れるこの頃、逢へばたゞ逡巡勝にのみ面はゆく、逢ねば其の事の心にかゝりて、今日は來るか、今宵は來るかと、待たるゝ人の態度もどかしく、四五日がほどは、たゞ鬱いで過ごせしが、賴めし昨日も暮れ、降りこめし窓の、いとゞ小暗きに、半障子を明けて、雨嘗し風の吹き入るまゝ、蒼みさせし頰のあたりを吹かすれば、後れ毛の風情も我れにはうるさく、心は何時かぼうッとなりて、庭つゞき彼方の小田に鳴く蛙の聲のみ、夢のやうに殘れり。聞けば彼の人は行脚に出るとやら、それ故村へも出て來ぬか。少しの間逢はぬに、今まではさほどにも思はざりし事の氣にかゝりて、何となう相見たく懷かしく、噂の實否も問ひ質して見たし。若し出るが誠ならば、我が思一つでも、留めずに置かうか。妾がこれ程の思を、知らぬふりの心悄さは、今さらならねど、此まゝ振りすてゝ他國せうとは、よく〳〵の情知らず、妾が嫌でか、それともまこと情の道は知らずか、何よりも聞きたきは彼の人の心、是れまでにも何度か打ち明けんとは思ひたれど、さすがに心弱く、恥かしく、母の後より、障子の蔭より、顏見て、見られては他所を向く、たわいなき事に一日々々を徒と過ごせしこと、今日の身となりては、何ぼう口惜しけれど、詮なや。もう此の上は、やぶれかぶれ、是非に逢うて、打つけに此の胸を言はではと、お糸は必死の覺悟して、一夜をまどろまずに明かし、日每この店に來る寺男の作造といふに傳言を賴みしは、今日のことなり。願叶ひて、一成が姿を見れば、此の上どうしての考へも、しばしは胸より消えて、たゞ嬉しく、軈て母が餠を燒きて一成を正客に、家内うち寄り睦まじげに話し興ずれば、主人は思ひ出せし如く、

「時に一成さん、あなたは今度行脚に出なさるといふ話だが、さうですか。寺を背はんなさるのだともいふが、何しろ本當

「さうだらうけれどね、何うかして、鳥渡でいゝのだから、來られるやうにしてお呉れよ。これは少ないけれど、いゝから取ッといてお呉れ。いゝかえ、頼んだよ。」

二言三言番へて、番傘は寺へ、蛇の目は村へ、さし傾けて分かれ行きぬ。やがて後影見えずなりし頃は、日脚も落ちて、光明寺の鐘の聲に、暗さ鎖し初めぬ。

三

「一成さんよくお出でなさりましたね、此の四五日サッパリお出でなさらなかッたが、體にでも變りはありませんか。さう、それは結構でござんした、折角心配してね。あなたがお出でなさらないと、何だか淋しうて、お寺さんにこんな事をいッては失禮か知らないが、家のものゝやうに思ッて居りますからね。お糸や、お父さんに一成さんが見えたと、さう言ッてお出で。また毎時の急ぎでござんすか、今夜は何かおいしい物を御馳走しますから、マア少しゆッくりしてお出でなさい。あなたは餘り氣を詰めると病氣の出る質だから、用心しないと可けませんよ。」

「私は弱さうに見えても、さうでないから大丈夫、腕押なんぞは、私が一番强うござんすよ。病氣といふものは、座禪して氣を空にすれば、直ぐ治ります。」

「ホヽ、お寺さんといふものは、氣樂な事を言ッて。」

言ひながら、立ッて持佛に燈明を點す間に、父も入り來たれば、

「おさんや、涼爐に火を取ッてね。」

るし、一成さんも此の頃はあんまり出さねえやうにしたのだからね。ソレ程逢ひたけりや此の頃は一成さんが鐘番だから、朝早やく鐘撞堂の下に來て居なされば、逢はれまいものでもねえ。」

「お寺では何故ねえ、ソンナに妾を恐がるのだらう。」

「何故だかサ、貴孃の方がよく知ッて居なさらう。」

と作造はニヤ〳〵するを知らぬ風に聞きそらして、女は言葉を繼ぐ。

「一成さんは急に立つやうな事はなからうね。」

「先刻も方丈樣の前へ召ばれて、早くしろ〳〵と、お說法があッた樣子だから、明日にも立つまいとも限らねえ。」

「眞實かえ。其れで一成さんは何う返答して？。」

「ちよッくら聞いたのだから、後は知らねえ。まだお說法中かも知れん。」

「ホヽ、妾に一杯喰はしたのだね。」

「またさういふ事を言ひなさる。噓を吐いてどうするものか。」

「眞實？。」

女は顏を曇らせて跡先見まはし、稍々しばし俯きゐたりしが、作造のモヂ〳〵する樣に、氣を取り直し、

「ではねえ、作造さん、一成さんに家でも用があると言ッてたからね、今夜手がすいたら、內證でゞも、鳥渡來て下さるやうに傳言してお吳れでないか。噓を言ふものかね。お疑りなら、家の長助を迎ひに寄越してもいゝ。」

「本當ならさう言ひもするが、來るか來ねえかは受合はれませんぜ。」

足を踏み外して、瀧壺へ落ち入ッて死んだ、それが卽ち壽命であッたといふこと。自分の智慧で知れぬことを、遂て知らうとすれば、さういふ事になるから、よく〳〵思案が大事ぢや。其方も、マア二三日思案せい、今日はもう暮れかゝッて、皆の者も忙しからう、今夜トックリと考へたがよい。」

一成は、是非なく、さう致しませうと拜をして立ち出づるを、下の間に待ち受けて、長老が、一成どうしたと氣遣はしげに問ふ傍より、相弟子、沙彌、二三人の小僧等がガヤ〳〵騷ぎつれて本堂の方へ、一成は鐘樓の方へと足音消ゆれば、森としたる庫裡のうち、早や暗うなり初めて、奥には方丈が組みし膝に小動もせず、雨の脚見つめて、一念を湛ふる樣しづかなり。

二

左りは滑川といふ小流れに春の水ゆるく、右手は次第高の小山になりて、裾一枚を菜畑に取り、山の頂は芥子坊主の如く、雜木生ひ茂りたる中には、遲櫻の散り殘りたるも交り、若芽の色柔げなるれうばう楓など生々として、風わたるたびにバラバラと雫を拂ふ音聞こゆ。

此所は跡先トロ〳〵上りになりて、中凹といふ野道に、人通り絕えたる暇を、光明寺と鼎に割りし番傘と、定紋を拔いたる紺蛇の目と、立話の體なり。

「作造さんお禮はするから、屹度知らしてお吳れよ。」

「知らせねえではないが、あんまり貴孃が來ると、方丈樣の機嫌が惡い。長老さんは、私の知ッた事でもねえのに、私を叱

あらう。されども悲しいことには、其れは染めぬ前の素い糸で、此の後どうにも染まるまいものでないからノ。そうッと澄ませてある水は、鳥渡攪き拌ぜれば、直ぐ濁る、底の泥が取り切ッてないからのこと、外から惡魔外道が來て、甘いものや見事な色を見せびらかせば、つい其の方に靡く、折角の道心も殼になッて、自分と魔道へ墮する始末になるから、さうならぬ前に、修行が肝腎ぢや。」

「私はうまい物や見事な色ぐらゐに騙されはしませぬ。」

「さう思ッて居ても目先へ突きつけられれば、つい心が狂ふ、それが凡夫のあさましさぢや。」

「そんなものが、來れば來る方が善いと思ひます。私は負けはしない、勝つか負けるか、試して見たうござんす。和尚様、何所ぞにそんなものが、居りますか。」

和尚は幾たびか首肯く如く、

「ウム〳〵、居る。其方の身の周りには、毒蛇が何疋も取りまいて、焰のやうな舌を吐いて居る。アヽ毒蛇、毒蛇。其方には見えまいが、この予の眼にはよく見える。其れぢやから早く此所を立ち退けといふのぢや。分ッたか。」

されど一成は答えず、今さらのやうに振り上ぐる顏は、うすく紅を漲らし、師の坊を見詰めたる眼には、何物かきらめく如く覺えぬ。師は片頰に笑を寄せ、

「ハヽヽ、見幕をかへて、どうした。毒蛇が見たいか。さほど見たくば見せてもよいが、こゝに面白い話がある、氣を落ち着けて聴けよ。むかし京の五條に、何某といふ寡婦があッた、かね〴〵自分の壽命が知りたいとて不動へ祈願してゐたが、或夜の枕神に、其の方の壽命は那智の瀧へ行ッて見れば知れるといふ告げがあッたから、寡婦は喜んで、早速行ッて見た所、

「フム〳〵善く言ッた。心にもない妄語を吐くよりは其の方がよい。が、まだ小供じやノ、予が今言うたのは、たゞ一方の譬を話した許り。其のやうに、ヤレ和尙樣が戀しいの村の者が懷しいのと一所に執してゐるのは、善いとは言はぬぞや。出家といふものは內外打成一片というて、取り別け是れが戀しいといふものもなく、是れが嫌ひといふものもなく、死人の生きがへッたやうにありたいと、昔の大德は說かれた。」

言ひながらも流石に哀れと、眼に情を籠めて、昵と一成の面を見詰め、しばしは言葉無し。外の方には、糸の如き春雨音もなう、庭一杯に降りこめたり。枝垂櫻の八重なるが、五ッ六ッ咲き殘りて、露重げに首垂たる風情憐れ。

「可哀さうとは、予も思はぬではない、十四や五の小供を何十里の野に山に獨行脚さすといふのは、氣づかひでならぬが、其方の事ぢやから道中は、大丈夫であらう。昔の歌に、あら樂や虛空を家と住みなして、心にかゝる造作もなし、ともあッて、雲水の旅はなか〳〵心安いものぢや、少々つらい事があッても、可愛い子には旅をさせよと俗にも言ふ通り、何も修行と心得て辛い事をせい。其方の身のため、また予の爲にもなる事ぢや。」

と跡言ひさして口籠り、しばらく考へ居しが、忽ち眉を揚げ、體を直して、

「イヤ〳〵、予としたことが身の爲呼ばはり………。コレ一成、佛法の爲ぢや、其方は必ず行かねばならぬぞや。」

きッぱり言ひ切れば、一成は怺へ〳〵し一しづく、ホロリとこぼるゝを周章て手の巾に擦り消しながら、

「何だか譯がありさうな、和尙樣、私が何か破戒の事を致しましたか。どうぞ其の譯を聞かして下さい。」

和尙はしばしが間端然と目を瞑り居しが、軈て靜かに口を開きぬ。

「其方の身に過ちはない。其方は幼少の頃から此の山に居て世の塵にも染まず、蓮華の水を出たやうな其の心が、卽ち佛で

此所にも浮々逗留して、また外へ行くと、此のたびは鐵の門があッて、獄卒が銅の盆に火焰を燃えたゝせて持ッて來て、童女の頭に載せたから、童女は驚いて其の譯を問ふと、此の獄卒は今までの童女の身の上を殘らず知ッて居て、斯う言ッた。貴公が子供の時母を大事にした報で、銀の城で四萬劫、金の城で八萬劫の間宮女の饗應を受けたのぢや、貴公は又、寶の島へ行く時母の留めるのを聽かず、母の髮の毛を三筋拔いて母を苦しめたに由ッて此の銅の盆に火焰を盛ッたのを頂かねばならぬ。此の城内には貴公のやうな罪人が一杯であるといふ。之を聞いて童女は、とても遁れぬものなら、其の多くの罪人共になり代ッて、苦痛をして遣らうと決定した。其の誓願の功德で頭の火盆が墜ちたから、獄卒はひどく腹を立て、鐵の槌で打ち殺した所が、忽ち人間に生を復した、其れが釋迦であるといふとぢや。斯ういふ話は、今の若い者等は空談ぢやと言ふであらうが、それは世智辯聰といふもので、其の方が餘ッ程鼻元思案、猿智慧といふものぢや。佛は一方では妻子珍寶及王位一切の物は身に隨ふものでないぞ、執着するな迷ふなよと說かれても、それなら親は餓えやうが、妻子は野たれ死しやうが、一切構はぬのが人間の道かと言へば、さうではない。やつぱり親は親、子は子と立てなければ、不孝の罪には斯ういふ報があり、善根には斯ういふ報があるぞといふことを、此の話で示されたのぢや。一成其方には此の意合がよく分ッたらうナ。サ、それなれば話が後へ戻ッて、この予が言ふことをよく聞き分け、行脚に出るつもりで、丹波の篠山まで行け。先方へは予の方から手紙をつけてやるから、彼方で暫く修行せい。エ、どうぢや、惡いことは言はぬ、強情を張らずと、さうせい。」

「でも和尙樣、私は親兄弟はござんせぬけれど、何だか和尙樣や馴染の衆に別れるのが悲しうて行くのが嫌でござんす。」

「それで外へは行かぬといふのか。」

「ハイ。叱られはしまいかと今までは默ッて居りましたが、和尙樣が構はないと仰有るから。」

「コレ一成、多分また次室で考へて居たのであらうノ。今日も昨日も、あれ程言ッて聞かせたに、其方はまだ出やうといふ決心がつかぬか。日頃の利發にも似ず何故さう分別が定まらぬのぢや、予の言ふことを、ついぞ背いた事のない其方が此の度に限ッて何故さう柔順にはせぬぞ。此の御山がそれ程離れたくないか、愛執を遺す親も兄弟も其方には無いではないか。」

「和尚樣私は親兄弟に愛着するやうなものではござんせぬ。」

「イヤこれは其方の言ふのが本當であッた、負うた子に教へられるとやら、其方も佛弟子であるからは、在家のものと一つ並にいふのではなかッた。併し一成や常々いふ通り、强ちに親兄弟を疎遠にするのが佛の本意ではないぞよ。一概に左樣思ひ僻めるのは、矢張り外道の一つといふもの、昔し釋迦如來の前生は慈童女というて長者の一人息子であッたが、家沒落の後ちは日々山通ひをして、年寄ッた一人の母を孝養して居られた。所が或日山からの歸り道で、以前の長者仲間の者に逢ッた。すると其の者が、貴公は何の何某といふものゝ子息ではないかといふ。成程さうぢやと答へたら、然らば近日我等と一所に寶の島へ寶を取りに行かぬかといふ、必ず同道仕らうと言葉を番へて歸ッたが、扨て此の事を母に話さうなら、母が心配して引留めるであらうと態と默ッてゐて、いよ〱今日往くといふ日に、其の事を話すと、母は案の如く心細がッて、たとひ此のまゝ餓死してもよいから、往ッて吳れるなと、無二無三にしがみついて留めた、けれども童女は突放して往かうとする拍子に、どうしたものか母の髮の毛を三筋拔き取ッた。さていよ〱船で乘り出した所が、サア海の上で大風が吹き出し、船が難破して、外の者は皆溺れ死んだ。併し童女一人は不思議に命を助かり、一つの島に流れ着いた。すると向うに一つの銀の城が見えて、内から四人の宮女が出て來て色々に款待したから、童女は浮々と滯留してゐたが、もう此所も饜いたからと名殘を惜んで外へ往ッた、すると今度は向うに金の城があッて、此所には八人の宮女が前にも增した款待をするので、

一

春雨降りつゞく山寺の夕べ、まだ肌に布子は欲しけれど、いや欲しいといふも心の汚れ、樹下座の戒さへあるものを、兎角は道心ゆるみ勝の此の頃、斯かること口にするやうにては一山の住持思もよらず、弟子の者等が聞かん前も耻かし。アヽ見事に咲いたる山吹の風情かな、垣根の一叢、濃い緑の茂みが上に、黄なるもの一面の花明り、今にも崩れさうなるが、葉の端、瓣の上に宿す露の、たま〳〵翻れて池水に輪を描くもおもしろく、柳の芽の鮮なるに倦き眼も醒むるばかり、緋鯉の潑ぬる音時々聞こえて、閑寂の趣は翁の昔にも似たり。

「コレ誰れか居ぬか、成然は居らぬか。」

「ハイ和尚様、私が居ります。」

次の間より襖を半ば開けて、突膝したるは、十五六と見ゆる上座、薄鼠によごせし布子もさッぱりとして、月代の一二分伸びたるが、色白の顔に映好く、眉目清しく口締まり、鼻つき見事なり。

「オヽ一成か、其方はまだ其所に居たのか、イヤ用といふのは其方でなくともよいのぢや。作造を喚べ、そして、其方には幸ひ話したい事もあるから、マア此方へ這入ッたがよい、跡を締めて、もッと近く寄れ。」

此所は伯州米子在なる十方山光明寺の庫裡の一間、東南を開けて前は一面の築山に庭の苔厚く雨を宿せり、方丈と見ゆるは年の頃五十左右背は少さけれど柔和の裡に精悍の相を含める顔色、おのづから氣高くも見えて、物やわらかに言葉を續けぬ。

白蓮華

「でも雑行だと仰つやるぢやありませんか。」

「雑行でも何でもよいといひますのに、分からない人達ではある。」

言ッたまゝしばらくは、香の煙りの立ち迷ふ末を眺めて、じッとしてゐたが、だしぬけに二人を押し分け、佛前へゐざり出で、涙をほろ／＼落しながら、

「お祖師様、御開山様、南無阿彌陀佛／＼。」

愁ひ場の最中へ二度目の注進と駈け込んで來たのは久助。

「御覧なせえ、易の表は恐ろしいものだ。お二人とも通りかゝりの舟に助けられて息を吹きかへし、今警察の人に連れられて此所へ來なさるさうだ。警察へ今しがた電話で通じて來たのだから間違ひはありません。」

「え、助かッた?、やッぱり助かりましたか。あの義之助は助かりましたか。やれやれ。」

「娘が助かりましたか。やれ／＼。」

「それでは賃金を出し合ふ世話も無くなりました。お婆さん。」

「さうですとも。まあ／＼やッと安心しました。」

「南無妙法蓮華經」

「南無阿彌陀佛／＼」

れでよいのですよ。」
と久助の方を見れば、もう疾くの先きに駈け出した跡であッた。お神さんは泣き顔になッて、
「一人目ッけるも二人目ッけるも、同じぢやありませんか。」
「それなら、賃金は後で出し合ひにして貰ひますから、其のつもりでゐて下さいよ。」
といふ時、また潜りの明く音して、這入ッて來るのは主人。顔色蒼ざめて、すご／＼座敷に上る直ぐ、持佛の前に坐ッて、手を叉ぬいた。傍からは、三人が樣子は／＼と、詰めかける。
「死んぢやッた、二人は死んぢやッた。向島の白鬚の前に二人の下駄と書置とが殘してあッた。死骸は大川筋を一應捜して貰ふことにして、ちよッと知らせに歸りました。あゝ情ない事をして呉れた。」
二人がわあッと泣き伏す聲、主人も眼をしばたゝく。
「此の上は未來が大事だ、泣いてたッて仕方がないから、さあ／＼、仕度にかゝりませう。」
「こんな事になると知ッたら、どうしてなりと二人添はしてやッたらうもの、何ぜさう言ッては呉れなかッた。」
「今となッては、何んと言ッてもしやうがないから、せめて二人の望通り未來で添はしてやるのが、何よりの功德だ。一つ墓所へ埋めて、一つ蓮座を分けさせてやりたいものだ。」
「けれどもねえ。お婆さんは、わたしどもの宗旨がお嫌ひで。」
ほい／＼泣くばかりで、何も言はなかッた婆さんは、此の時口惜しげに二人を見やッて、
「誰れが何時そんな事を言ひましたよ、今となッてそんな穿鑿立は、しなくともの事ですよ。」

婆さんが急きたてる側から、お神さんは復た思ひ出したやうに、

「南無清正公大明神、南無日蓮大菩薩、南無妙法蓮華經〳〵。」

と祈り上げる。

「わッしがいふのは、易の表ですが、大丈夫當りますよ。今歸りがけ毎時も行く本命堂の前を通ると、ふッとお二人の身の上を占はせて見やうと思ひついて、這入ッたのです。所が不思議ですね、此方から碌々口も利かないうち、向ふからぽん〳〵言ッて除けるのです。それで、つまりが、何とかで、一旦は水に沈むかも知れんが、また浮び上る易だといひます。浮び上ッても死んでゐてはつまらないがといひますと、そこが易ですね、今の所では、まだ死んでゐないといひます。併し此の易といふものは、本當に、其の時〳〵までの運勢で判斷するもので、今は斯うあつても、外の事情が變はッて來ると、次の時には最う易の表も變はるものだといひますが、成程さうでせうよ。そこで此方は、今の先まで無事でお出でなされば、大丈夫、夜が明けてますからね、是れは何よりか、早く探し出すのが一番ですよ。」

「さうですとも、御利益どころの騷ではない、久助さん誰れかよい人はあるまいか。頼んで下さい、お禮は幾らでもするから、人相は年が十九で、色が白く、顏が丸く、眼がぱッちりとして、眉がはらりとして、鼻がちんまりと、口元が締つて、生際が尋常で、髮は島田で、着物が………。おや何れを着て行ッたらう。」

「わたしの所のはね、糸織の藍鼠萬筋に、下が黃八丈で、七子の三紋付の羽織、お正月着のまゝですから、どうかそのおつもりで。」

「義之助さんの事は、お祖師樣へお頼みだから、久助さんお聞きなさらなくてもよいよ、お花はどつれて來て下されば、そ

「大丈夫、御安心なさい、お二人は無事でゐられるらしうごす。」
「消息がございましたか、本當ですか、丸で夢のやうですねぇ、お婆さんお喜びなさいまし。」
「もう〳〵安心しました、おかげで生き延びました。」
「御覧なさい、御利益は爭はれないものでせう。」
「御利益で助かッたのだかどうだかは、分かりますまいよ。久助さん全體何所にゐましたか、どうして知れましたか。」
「いゝえどうしてゐたッて、助かッた日には、やッぱり御利益といふものですよ。」
「義之助さんは知らぬ事、わたしどもの娘は、御利益を願ッて頂く前に、助かッてゐたのですよ。」
「それがやッぱり御利益ですよ、日頃から願ッてあるのですから。」
「おや〳〵、をかしうございますね。では前から心中することを御存じで？。」
二人の居ずまゐが改まりかゝるので、久助は復かといふ顏。
「まあ〳〵そんなに理窟ばッたッてもしやうがない。無事らしいといふまでゞ、まだ無事だと決まッた譯ではないのですから、是れからが大事です。」
「へえ、ぢやまだ助かッたのではございませんか。」
「此の久助さんは、何を言ふのだ、人を上げたり下げたり。」
「此方では上げも下げもしないが、あなたの方で上つたり下つたりしなさるのだ。」
「どうして無事らしいといふのだかそれを早く聞かせて下さい。」

「おや、お氣の毒さま。ほんとに餘計な事でしたね、人樣のお娘子がどうあらうと、手前どもの構ッた事ではなかッたけ。どれ義之助の一命助かります樣に、南無妙法蓮華經々々。」

と、何かくど〳〵いッては、一心不亂に、責めかけ〳〵祈り立てるので、傍に聞いてゐた婆さんの心は、少し變になッて來た。娘の事が心細くなッて、何だか一緒に祈ッては貰ひたい。けれども、今さらさうとも言ひ出し兼ね、お念佛で我慢してゐる。すると、たまらなくなッて咽からは引ッきりなく念佛が出て來る。

「南無阿彌陀佛〳〵、南無阿彌陀佛〳〵」

我れ知らず續けざまにやるので、お神さんはびッくりして振り向いたが、全くお題目の向かうを張るものと心得、また向き直ッて、血眼になり、南無妙法蓮華經〳〵と立てつける、お題目とお念佛とで、しばらくは家の中が冴えかへッた。

（四）

潜の戸がら〳〵と彈鈴の音がする。

「おゝ歸られたお神さん、警察から歸られたらしい。」

とだしぬけに婆さんが立ッたので、お神さんもお題目そちのけに、

「おやさうですか、何をぐづ〳〵してゐたのでせうねえ。」

と、今までのことは忘れて飛んで出る、門口で出逢ひがしらに顏を見れば、亭主と思ひの外、先程歸ッた久助、にこ〳〵して、

大事の娘を唆かして、そんな事をしでかした。お神さんだッて、馴れ合ひに違ひない。生かして還へせ。舊のやうにして戻せ。」

「なにこの門徒のもの知らずめ、子供の心中に親が馴れ合ふもないものだ。此方から生かして還へして貰はなけりや承知しない。此の強慾婆め。」

「くそ法華氣違の癖に。」

二人は取ッ組み初める、ひッ搔く、こづき廻はすといふ騷ぎに、久助は飛びこんで引き分ける。

三

「ほんとにあの方の言はれた通りですよ、此方どの手でどうなる事でもございませんから、探す方は警察へ御賴み申して、此方どもは、斯ういふ時には、やッぱり神佛へおすがり申すより外はございません。今お燈明を上げますから、さあお婆さん、お寄なさいまし。」

「わたしどもでは、雜行は致しませんから。」

「今そんな事を仰ッたッて仕方はございませんよ。門徒の衆はそれだからほんとに厭になッちまう。それではあれ等は見す見す見殺しにするといふものですよ。直に手を出してはお救ひ下さらないでも、一心が屆きさへすれば、それはもう、あらたかなものですよ。」

「南無阿彌陀佛〳〵」

を覗きこんでゐたが、また繰り返した。

「義之助さんはどこにゐる、娘をかへして貰ひませう。」

すると、それを聞いたお神さんは、亭主の留めてゐる手を振りほどいて、上り口へ飛んで來た。

「おゝ向かうからお出でなすッた、さあお婆さん、どうして下さる、伜を生かして返して下さい。いゝや、これはどうしても、お花さんがそゝのかしたものに違ひない。義之助は、あの通り大人しい性ですもの、そんな事なぞ思ひ立つ筈はありません、お花さんが惡いのだ。」

「これどうしたものだ。お婆さんが呆れてゐられる。譯も話さないで何だ、がみ〳〵と。」

「譯なんか聞きには來ません、お花が〳〵と、さう一概に言ッて貰ひますまい。お花は女子ですよ、女子の方から手を出すといふことは、聞きも及ばん。これはどうでも、義之助さんが張本に違ひない。面倒くさい、娘に聞いて見れば分かるから、娘を早く出して下さい。お花は何所にをる。それとも外へ隱まうたか。」

「呑氣な事を言ッてなさるよ、心中に隱まふやつが何所にある。二人一緒に死んで、未來で添ふと、此の通り立派な書置があるぢやないか。何をそんなにぶまな顔しておいでなさるよ。ゑゝぢれッたい、あなたこんな人に取り合ッてゝは、手後れになりますよ。早く警察へなり、何所へなり賴んで、探して下さいよ。何所をどう助かッてゐるかも知れないから。」

「おいよ、今すぐやるから、まあ、お前さう大きな聲で吼え立てなさんな。お婆さんは、何も御存知ないらしい。伜とお花さんとが、心中したのだ、お婆さん。だからぐづ〳〵してはゐられない。」

「ゑ、娘が心中、あの娘が？。義之助さんと？。それ見た事か、とう〳〵そんな事を仕でかした。あの義之助めが、大事の

婆さんは、不思議げに取り上げて見てゐたがお花と手を引き合ッて居るのは、而も同じ潛門を這入ッた、四ッ目垣一重の、すぐ隣の一人息子であッた、それと知ッた時の、婆さんのまごつきやうといッたらない。寫眞を引ッ掴んだまゝ奥の室へ飛びこんで「己れ不孝者め」といきなり寢てゐる娘の襟がみ捉ッて引き起こさうとする、と、おや夜具の中は藻ぬけの殼だ。さすがの婆さんも、これには度膽を拔かれ、窪んだ眼をぱちくりさせてゐたが、急に思ひ出したやうに、戸棚を探す、便所を探す、臺所を探す、井戸端を探す、半狂亂の體で駈けまはる。

跡はぽかんと見てゐた久助が、氣の毒と、聲をかけ、「御隱居さん〳〵。」と呼ぶに、ふッと耳を貸したが、今度はそのまゝ久助の側を走りぬけて、下駄をつッかけ、表へ飛び出した。久助がひき留めやうとする間に、躍り込んだのは隣りの宅。

二

此の隣といふのは、義之助といッて、今年二十六七の、區役所か何かへ勤める、色の生白い、牛屋の姉さんなぞにはあれこれ言はれる一人息子と、ひどく法華に凝ッてゐる兩親と、三人暮しの一家で、加藤の內とは、お題目と念佛ほど折合の悪い仲であッた。晩い家ではまだ朝飯時分といふ頃、加藤の婆さんは寫眞を持ッたまゝ、泣き面になッて義之助の家へ暴れ込む。

「お花を出して貰ひませう、隱まうておゐでに違ひない、義之助さんは何所にゐる、娘をもとの體にして貰はう。」

門口から怒鳴ッても、一向に返辭のしてもない。奥の方では、何か夫婦がごッたかへしてゐるらしく、お神さんは、わんわん泣きたてゐる、御亭主はそれを取りさへながら、之れもうろ〳〵してゐる。婆さんは、少し間のぬけた氣味で、中の様子

「何だと、この人は。」
「なにさ、何も慰物にした譯ぢやありませんぜ。」
「やツぱり慰物ですよ。お欺しなすツた以上は、慰物ですよ。憚りながら、この婆さんがついてゐる内は、それでは通しませんよ。」
「まあさ、御隱居さん、さう一向にならずとお聞きなさい、物は譬ですがね、生身は腐り物で、先刻話の、惡い蟲といふやうなものが、萬に一つ着いてゐないとも限らないが、こゝはあんまりがみ／＼言はない方が、後々の爲ではがせんか。」
「おや／＼、是れは聞き所だね、其の惡い蟲といふのを聞かして貰ひませう。」
「聞かさうと思ッて言ッてるのだ。」
「憚りながら、加藤の娘ですよ、今風のお跳ねとは、少し譯が違ひますよ、はい見くびッて貰ひますまいよ。」
「そんなにやたらと威張ッたッてしやうがない、御隱居さんも罪がないや。それでは話して上げるから、驚いちや可けませんぜ。お氣の毒ながら、お娘子には情夫があるのだ、破談の一件も、實はそれから起ッた事で。」
「久助さん、うツかりした事をお言ひでない、何時娘が情夫をこしらへました、何を證據にそんな事をお言ひなさる。一晩だッて私の傍を離した事のないものに、情夫も聞いて呆れる。わたしが附いてゐるからには、蚤にも喰はすことではない。さあ證據を見せて貰ひませう。」
久助は、わざと落ちつき拂ッて懐の紙入から取り出したものを、何かと見れば、お花が男と一緒に寫した手札形の寫眞で、
「どうです、是れは麹町の寫眞館で、旦那が目つけて買ッて來たのださうです。」

顔が合はされませぬ。やれ家主の娘はかッたい筋ではないかの、悪い蟲がついたのであらうのと、ろくな噂は立たないで、店子の衆に對しても、押が利かず………。」

「もし〳〵御隱居さん、お言葉の中だが、成程それは、あなたの仰ることは、一々もッともに違ひないが、どうでせう、斯うやッて先方でも、態と、細しい譯はなるたけ言はない方が雙方の爲だらうといふのですから、其の口振を買ッてやッて、たゞ何となく圓く治めてやッたら、如何なものでせう。」

「いけませんよ。お前さんは、ほんとに蟲のよい事ばかり言ッてなさる。それで圓く治まれば、先樣は善からうが、此方が困ります。何の事はない、此のまゝ泣き寢入りにしろといふのですね。」

「そこです、先方はどう言ふか知らないが、私も中へ這入ッたものだから、何とか話をつけて、手ッ取り早い所が、仕度金がこちらで是れ〳〵かゝッたと言へば、其の内の是れ是れだけは、向う持ちにするといふやうな事に、纏まりを着けたらどんなものでせう、此方樣だッて、是れがいけなければ、緣談はそれでおしまひといふ譯ではなし。ねえ御隱居さん、何とかそこを一つ。」

「お金でどうと言ふのではないが、全體どの位出すといふのですか。」

「それは決めやう次第ですが、まあ此方で三百圓お掛けなすッたといへば、其の三分一、百圓も出さうと言ッたやうな具合に、そこは私が一ッ骨折ッて見ませう。」

「御免蒙りませうよ。そんな事で加藤の娘は、人樣の慰物にはなりませんから、歸ッてさう言ッて下さい。」

「へん、あんまり慰物にならない方でもない癖に。」

一

青山墓地の手前、第何番かのいろはの近邊、といッても、强ち會葬の歸りに牛喰ふと極まッた譯ではなからうが、兎に角肉食妻帶は自由な一向宗のお固まりで、婆さん一人孫娘一人、內輪の可なり有福なのは、近まはり何軒かの家主といふのでも分かる。娘は十九の美しい盛り、名さへお花と言ッて、七八年前兩親に死なれてからは、婆さんが手一ッの丹靑に、髮も當世はよけて、高島田の毛一筋亂した事なく、帶は獨鈷の出た博多、今に御覽、世が昔に戾れば是れが流行ッて來ますと、よろづ手固い所が身上だ。

婆さんといふのは、彼れ是れ七十にも手が屆かうか、切り下げ髮が大かた白くなッて、齒も少しは拔けたらしいが、耳と眼のたしかなのが、何よりも自慢で、負けぬ氣の昔にかはらないのは、しやくんだ顏、尖ッた口にも見えてゐる。其の上を、たゞ一心に南無阿彌陀佛〳〵でかためつけたのだから、この婆さんの一度思ひこんだ事といッたら、たとへ御法主樣の仰せでも、いつかな動かさない。ましてあの外齒の久助が媒人口ぐらゐに、凹まされる筈のものではない。

「お前さん今になッて、そんな事を言ッて來たッて、わたしの方ではどうすることもなりません。立派に見合までして、結納まで取りかはして、おまけに先樣から言ひこんで置いて、たゞお斷り申すぢや濟みますまいよ。あんまり道理を知らないにも程がある。わたしどもでは、斯うして女ばかりだから、それと見くびッて、どんな無理無體を言ッても聽くものと思ッてお出でのやうだが、これでも家作の少々も持ッて、加藤のお杉といッては、顏一つで十年近く人樣つき合もして來た者ですよ。あんまり馬鹿にして貰ひますまい。今此所でそんな事を言はれて御覽なさい、娘は疵物になる、わたしが第一世間へ

佛ぞろへ

さ、さ、早く渡してお出で、何を愚図々々してゐるのだ、其の金がどうしたと、遠慮ならよしたく〱。それとも私の手から出た金は不浄だとでもいふのか。そりやどうせ清い金ではないさ。けれども、出所まで氣にすれば、世間に使はれる金はたんとあるものぢやない。使ひやうさへ善かッたら、それで埋め合はせはつく。でなければ早くお袋にやッて來な、此の夜寒に、年よりの可愛さうに。お前の事は來てから話す。」

出しやッて一服吹かさんと、筒に手をかけし時、下の方に二言三言異常の聲、茨木は聞耳立てゝ屹となりしが、手早く洋燈を吹き消すと見れば、身は早や雨戸際にあり。とん〱と亂るゝ足音に、續いて振り絞ッたるお鈴の一聲、

「茨木さんお逃げなさいよ早く〱。」

聞くまでもなく、茨木の體はひらり躍ると見えて、影も形もあらず。踏み込みし刑事が、それッとつゞいて飛び出せし跡には、何時の間にか戸一尺ばかりも明いて、大臣山の嶺に群る星あかり、立ち騒ぐ人の面に青し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

子のため情夫のための姉妹が、一つ檻倉に繋がるゝ時、母が頭髪は一夜に白うなるまで、額に憂さの波ふかく、老いくづをれぬ。

茨木が遁れし其の夜、同じ鎌倉の海濱院に、大賊忍び入りしもそれかとの噂、流星といふ綽名は、今も探偵が手帳に殘れり。

（四）

母への氣休めと、輕く立ち上がるお鈴、上も氣急と、廊下へ出て二あし三あしは、我れにもあらず駈け出せしか、草履の音の衰へ行くまゝに、胸はしぼられる思ひ。初めて聞いた男の素性に、どうなる自分の身の上かと、それさへ分からぬ内、妹がふしだら、母の悲嘆、茨木へ當座の無心まで言はねばならぬつらさ苦しさ。何時か段階子も上ッて、指す方へ足は向けたれど、さて身のふりを決めよと急かれたらどうしやう。たとへ泥棒であらうが、詐欺であらうが、是れまでになッた茨木さんを、ゆめ見すてる氣はなけれど、何だか世間が耻しくもあり、お袋が跡での嘆きも思ひやられる。ほんとに二代までこんな事になるとは不思議な廻合せ。おゝそれ〳〵差掛ッた金の事はどうしやう。えゝもう、と獨り悶へて柱にぐたりと寄りかゝれば、すかし見て、茨木が手招き。獨りで綺麗な事は言ッても、正當な人間から見たら、成程あゝでもあらう。あさましいは此の身、洗ッても〳〵、どうせ清まらないものなら、なあに自分は構はない、好でやるのに誰れが批を打つ。けれども、それで無垢清淨な人間にまで斑點をつけては濟ない。外に幾らも同じ泥を啣ッた女はあらう。と思ふと、なほの事あのお鈴がかあいくも思はれるのは、よく〳〵の縁といふものか。

ひとり思案の半へ上り來たるお鈴を、茨木は招き入れ、

「お鈴さん是れを。」

とだしぬけに幾枚かの札を、女の手に握らせて、

「もう何もいふには及ばぬ、みんな聞いたよ。少ないけれど、それで急場の難は凌げやう、餘ッたらお袋への手當にして、

お鈴は胸に片手をさしこんだまゝ、考へこんで口もきかず。お袋はそれに氣を得て、言葉をつゞける。

「先方へ顚下とやらを賴んでやらねば、お紺はあのまゝ懲役、この寒空を監獄で過ごさなければなるまい。ねえお鈴、何とか法はつくまいか。お父ッさんがひよんな事からあの死樣、其の子がまた同じ筋で監獄へ行くやうでは、それ見た事か親の子だと、世間の口の端が、わたしは何ばうにも殘念で。行かずに濟むものなら、どうなりとして、取りとめてやりたい。人間が一度牢ばいりをしては、もう人の數ではない、一生ろくな考へは出ず、出た所が世間で取り合はねば、とゞのつまりは、また舊の惡黨で終る。取りわけ女子の惡黨ほど、小憎らしいものはない、娘はどうかそれにしたくない。貧乏はしても、正直にわたッて行く世でさへあッたら、わたしは嬉しからうと思ひます。何の因果で、二代までこんな事に祟られるかと思へば、心細くもなります。」

「おッ母さんもういゝのよ、あたしが惡るかッたから、もういゝのよ。」

「お前を誤らせに來たのではないよ、お前に何も惡い事はないのだから。それ、そんなに、見ッともない、顏をお拭き、忙がしい中を、あんまり長く話してゐては、朋輩衆にも氣の毒だから、わたしは復た來ませう。肝腎な話はどうしたものだらう。田澤の旦那にこんな事を聞かして、出來るにしてからが、あとでお前の肩身が狹くてもならず。さうねえ、ならう事なら、さうするとよいが、お前いやでもあらうが、賴んで見てお吳れでないか。待ッてゐてもよし、今夜の間にあはなければ、明日の朝また來てもいゝ。」

「おや、ちよッと待ッてゝ見てお吳れ。」

お鈴の立つ氣合に、茨木は、ぬき足して二階へもどりぬ。

結び目に手をかけ、きゆッと締める其のまゝ、裏手便所への段階子をつか〳〵と下りぬ。

便所へ通ふ廊下傍、客のない日の女中どもが息つぎ場と極まッたる小座敷に、燈火ほのぐらく、さしむかひの二人の影法師は、女なるべし。もしやと足をしのばせて、立ち聞けば、正しくお鈴、今一人は母とも思はるゝが、

「メレンスでもよいから、孫の春着が一枚拵へたいと、此のまへ來たとき繰り返し〳〵て言ッてゐたのを、わたしは浮ッかり聞き流したが、今思へば餘程思ひこんでゐたものと見え、窃んだお金は十圓そこいら、みんな孫の物にして、友禪縮緬だの、メレンスだの、襦袢の切れだのと、やたらに買ッて里方の方へ送ッたさうで、わたしの行ッた時は、先方でせッせと縫ッてゐたのを、よいやうに言ッて持つて歸り、賣り拂ひはしたが、出來たお金は五圓にも足りず、わたしの羽織を相模屋へやッて、少し足したきり、跡の工面がどうしてもつかない。それかと言ッて、たゞでさへ奉公といふ者は、氣兼苦勞の多い中へ、此の前の事もある上に、こんな事をお前に聞かせて心配さすのは可愛さうだと、いろ〳〵考へたけれど、どうもしやうがないから、とう〳〵また來ました。」

「おッ母さん、あたしはもう知らないよ。給金も二度まで前借がしてあるし、今またそんな事を持ちこまれたッて、どうなるものかね。あたしは此所に居られなくなるわね。」

「さうとも〳〵、御主人に此の上の無心はとても言はれまい、無理はない。」

とあとしばし言ひよどみしが、

「ひよッとねえ、あのそれ、何時かお前がお話しの、御贔負になッてゐる田澤の旦那に、あつかましいやうだけれど、どうかなりはすまいか。」

も出ないのだらう。それが不圖した事で、お前と斯ういふ中になッてからといふもの、お前の身の上も聞くにつけ、昔が懐しいやうな、末が思はれるやうな、何だかしみッたれた根性になッちやッて、急に世間が戀ひしくなッた。舊をいへば、これでもおん婆日から傘で育ッたものが、どうして斯う狂ひ出したかと思へば、をかしいやうで、どうせ倘一度は税金拂ひに行ッて來なければなるまいが、魂は今度かぎり入れかへて、もとの田澤になりかへるつもりだ。譯といふのは此所だて。折角殊勝にこゝまで漕ぎつけたものを、こゝで以て泥棒の絲瓜のと騒ぎ立てられやうものなら、そこは男の意地で、どんな不了簡を起こさうも知れぬ。上げられるものなら、立派に名乘ッて出てからの事、餘計の世話はやかれたくない。こんな譯で、私の本名なぞが下に知れては面倒だから、足元の明るい中に此所を立ち退く。これまで明かしたら、お前に言分はあるまい。どうだ、其の上でおれを貰ッて呉れるか、但しは戀がさめたか。一緒になる氣なら、先刻言ッたやうにするさ。厭なら厭でかまはん、おれに未練はないから、どちらにでも早くきめるさ。」

呆氣に取られてたゞ聞きゐしお鈴が、何か言はんとする時、廊下にばた〱と上草履の音聞こえて、お鈴さん〱ちよいとちよいとゝ呼ぶ聲、茨木が目まぜに、

「待ッて下さいよ。」

とお鈴は立ッて行く。

三

お鈴が降り行きしより小十分も立てど音沙汰なきに、茨木はちよッと首をかしけしが、例の紙入を懐に押しこんで、帯の

「悪かッたの？　御免なさいよ。」
と言へど茨木は耳にもかけぬ樣子に、女はおど〱して、
「あたしやどうしやう。」
「悪かない、お前のどうも出來る事ぢやないから、構はないが、私だけは、今夜すぐ立たなければならん。」
「堪忍して下さいよ。あたしやどうしやう。」
「何もお前を怒ッてるのぢやない、外に譯があるのだ。お前は必ず引き取ッてやるから、明日にも暇を貰ッて、一旦おッ母さんの方へ歸るがいゝ。ゑゝ疑ぐるな、男だ。譯といッて、よし〱言ッて聞かす、其の代り、こればッかりは他に言ふことはならんぞ。」
立ち上ッてちよッと廊下へ出で、あたりを窺ッて、座に戻り、
「是れは一緒になる間際まで言ッてはならないのだが、びッくりすまいぞ。私實は今の商賣は邯鄲師さ。枕さがしと言ッて、旅籠屋ねらひの泥棒だ、驚いたか。築地も嘘、茨木も嘘、本名はやッぱり田澤啓一で、仲間には別に通り名もあるが、そんな事はどうでも可いとして、私もさん〲馬鹿はし盡くして、つい此の二月ほど前、四度目でくらひ込んでゐた時、病氣でひどく體は弱る、世の中が果敢ないやうな氣がして、ふッと佛心がさし、堅氣になるつもりで娑婆へ出て來た。けれども出て見ればやッぱり駄目だ、仲間の奴等がさうはさせず、またとう〱引ッぱりこまれ、此所へ來たのも、仕事の積りであッたのさ。所が妙なもので、これで吉原洲崎と浮かれて居るうちは、たまには向ふから來てゐる奴の一人や半分あッても、娑婆氣は更に出ない。つまりが金で買ッたものだから、金が自由になり身が自由になッて見れば、持ち固めてどうといふ了簡

「そんな冗談をあてにする奴があるものか、築地三丁目といッても廣いもの、どうしてそんな事が分かるものか。お前が擔がれたのだ。」

「さうか知ら、憎い奴だ。貴方もうお酒は召し上らなくて?。ぢや御飯を持ッてまゐりますよ。」

二

「今夜のお二階の靜なこと此の間一つきりですよ燈火のついてるのは。」

と言ひ〳〵飯櫃を運びて給仕をしながら、

「あたしは聞かう〳〵と思ッて、つい忘れてゐた。貴方此所のお神さんを舊から御存じ?。」

「知らない。どうして?。」

「でもね、今朝ですよ、皆の前で、あの岡惚お金めが、さんざあたしを苛めるものですから、あんまり口惜しくて、つい浮ッかり饒舌ッちまひましたの、あのそれ、貴方がもと田澤啓一ッて、四谷で砂糖問屋の若旦那であッた頃の事を。」

聞く茨木は、俄に眞面目になりて、顏を見つめぬ。女はそれに氣もつかず、

「すると、お神さんがさう言ひますの、何だか聞いたやうな名だッて。だからあたしやお近附かと思ッて。」

「そいッは惡かッたね。」

はッきりしたる語調に言ひ切ッて、箸を投げすて、淸しい大きな目をまぢつかせながら、尙もお鈴の顏を見つめて、ぢッと考へこむ。お鈴は驚いて、

てるといふのですよ。あんなにしよッちう顔見て居ながら、年をとると皆忘れッちまふのか知ら、ほゝ、しやうがないのねえ。」

「啓さんの頃に、尚一度なッて見たいナ………。いけない〳〵もういけない、一度汚れちやッてからは、どうしても、もう駄目だ。」

とちよッと腕こまぬきしが、氣をかへて、ふゝと笑ひ出し、

「私がそろ〳〵色氣づいて飛び出した頃は、お鈴さんなんざ、まだおたばこぼんを振りたゝて居たが、何時の間にか佳い女になッちやッた。やッぱり緣だね、私は早熟の方で、隨分早くから遊もする、地女も何人か手にかけたが、今度ばかりは、すッかりやられた、まいッたよ。實も不實もあるものか、私は全體、一ッ所にのんべんくらり斯うしてゐられる體ではないのだ。それをこんな目に逢はすなんて、お前もよッほど罪つくりさ。」

「あたしよりか貴方の方が幾ら罪が深いかさ。」

「おや、これは聞きものだね。」

「あたしや、今まで眞實にしてゐた。」

「何をさ。」

「貴方の所は築地ですとね、けれど築地三丁目にはそんな家はないさうですよ。あたしに隱してるのね、屹度あたしは何も彼も欺されてゐるに違ひない。今度といふ今度貴方一人は立たせないから、構やしないけれど。あら、籍を洗ッて見るなんて、そんな譯ぢやないの。板前の竹どんね、あの人がつい近頃まであすこいらに居たのですよ、それがさう言ひますもの。」

一

星つくよ鎌倉に名高い某旅店の灯點し過ぎ、忙がしい年の瀬まぢかは、さすがに靜かな由比が濱にも、浪の音聞く奥二階の一室に、客が晩酌の膳の相手は、お鈴といふ女中、極まりの唐棧に繻子の襟、これが命の帶ばかりに哀を見せて、かんこと何かの腹合ひッかけたるは、斯かる身に取りて何ばうかつらかるべし。きちんと座りたる後姿もほッそりと、肩しなやかに流れて、銀杏返の鬢のほつれ一筋二筋、面あかりをよけて、少し斜向に、横顔の佳いのを惜氣もなく見せて、銚子を取りあげ、はいと輕く注ぐ、其の手をはづして、

「一つおやり。」

と杯をさしつけしは、宿帳のおもてに茨木平三三十一歳とあッて、當世の市樂じたて、兜町あたりとの觸れこみなり。

「あたしもう澤山。」

「飲みもしない癖に。今夜はどうしてさう鬱いでゐるのだ、またお神が何か言ッたのか。」

「お神さんよりか傍が悪いのですよ、お金さんだの、お倉さんだのが、焚きつけるものだから。わたしや、ふつ／＼此所にゐるのが厭になッた。」

「よし／＼心得てる、すぐ呼んでやるから、尙二三日辛抱しな。跡は、お袋の方はいゝんだね。」

「妹のお紺が此方に居ますから。あたじの事を先達てお袋に話した時ね、初めは濟まない顏してゐましたけれど、貴方といふことが分かつて、大よろこび。顏は知らないけれど、四谷にゐた頃、死んだ兄がよく啓さん／＼てたので、名ほどは覺へ

ながれ星

町あたりに、かすかな烟を立てゝゐるとか。

けれども、此所でそれ聞かせたら、お清は今さらに顚倒するであらう。其のみじめさが、如何にも見るに忍びない。つく〴〵思へば、何の罪科もない、夫思ひに餘念ないあのお清を、どうして、今までは隔てたか。こんな情ない事が、どう今さら開かされやう。正木は、お清の言ふがまゝに、また横になッた。

氣がゆるんで、うと〳〵するかと思へば、座敷の隅から、先程の黒坊子が、はッきり宇川の顔に見えて居ざり來る。おのれ、と聲かけて追ッ拂はんともがけば、お清に搖り醒まされて、ほッと息し、身内びッしよりの汗を拭く。二階から母が降りて來て、いろ〳〵いはれる面目なさに、また蒲團かぶりて、とろ〳〵とすれば、氣味惡い夢に、我れと目がさめる。そッと顔を上げて、見れば、有明のランプぼんやりと、お清は、疲れはてゝ、疊んだまゝの夜具に凭れ、すや〳〵と眠りゐるに、其のまゝじッと見入ッたが、

「可愛さうなものだ。」

と起き直り、我が着てゐし蒲團取ッて、被せんとする、お清はふッと眼をさまし、顔見上げて、

「あなた、どうなさるの？。」

と夫の手に縋れば、

「おゝわたしだ。わたしは詫に來たのだ。」

妻の手を取つて、熱い〳〵涙一しづく。

次の日、牛ヶ淵に夫婦心中の噂高く、二人は見事に宇川の跡追うた。深澤も長からぬ命、残るは母一人の哀れ、今も飯田

「氣がついて？。」

と居ざり寄り、

「まあ、どうなすッたのですか。」

と夫の顔を眺める。眼の窪みやう、頰のこけやう、色の衰へやう、ほとほと別人のやうで、口を緊く結んだまゝ、男の方も、しげしげとお淸の顏を見る。

「氣がついたら、此のお藥を召し上れ。」

目盛した小コップに、枕元の藥を移して、渡しながら、

「寒くはなくッて？。」

と後にまはり、そッと蒲團被せてやるを、正木は其のまゝ引ッ被ッてしまふ。お淸は詮方なく、枕元にまはり、コップなど片よせんとするに、正木は、突然はね起きて、蒲團の上に端座し、

「わたしが惡い、皆わたしが惡いのだ。」

と繰り返して、跡言ひかねてゐる。

「だしぬけに何ですねあなた。まだ氣がしッかりしないのですよ、もッと休んでゐらッしやいよ、ねえ、もッと休んでゐて下さいよ。」

正木は、今までの事を言ッてのける氣で、幾度か口へまで出しかけては見れど、どうしても言ひ切れない。斯うまで覺悟した上は、妻に祕密が漏れる位はおろかの事、むしろ我が口から、一言なりともいひ聞かせ、詫を言ッて死にたいのである。

煙草屋、繪草紙屋の店あかり恐ろしく、馬場に沿うて行けば、車に叱られ、何を當途ともなく、近衛兵營の前まで來て、紀念碑の蔭から、一目に見おろす町々、火影の賑やかなるにつけても、我が身淋しく、あのあたりが錦町か、と思へば、あのあたりが宇川の下宿であツたと、目は直にそれに止まりて、宇川の聲が、耳元に聞こえる。ぞツとする足もとはるかに、蒼く蟠くのは、牛ヶ淵だ。一歩は退いたが、思ひ定めたやうに、大股に九段を急ぎ下りて、車屋が掛聲を後に、指す方へ曲ッた。

「とても死ぬるものなら、同じ所へと、牛ヶ淵公園を土手づたひ行く正木の顏は、月の光に蒼白く、風に、總毛立ッて、田安門の內から漲り落ちる水、銀河の如く、ざあと音する方は、松に嵐の通ふかとも思はれる。

「お〻此所だ。」と正木は立ち留ッて、あたり見まはした目を、じッと水の面に移す。同時、罪惡の記臆は、あり〱とその夜の景色を眼前に見せて、たしかに、我か拔き取ッた岸も、其のまゝになッてゐる。あのあたりこそ、二度目に打ち沈めた所、と思ふと、其の時の樣子が眼先にちらついて、二三分間、まじろきもせず見つめゐるに、藻の蔭少し動くと見えて、ぬッと浮び上るは、濡れしよぼけた黑坊主、うぬッと我れ知らず叫んだ聲に、忽ち幻は消え失せて、夢の醒めた如く、何所か人の足音も聞こえ、氣味わるさ襟元より沁み入るに、何事も忘れ果てゝ、正木は一直線に驀來し道を馳戻る。

（十三）

我が家の前までは、やッと辿りついたが、戸に手をかけて、ばたりと倒れたまゝ、跡は何事も知らぬ。時經ッて、正氣づき見れば、身は居間の寢床に打ち臥して、枕元には、妻のお清が、一人悄然と燈火をまもッて座りゐる。夜半は過ぎたらしく、下女部屋に大きな鼾の聲がして、二階にごほ〱と、例の咳聲もする。正木の眼を開いたのを見て、お清は、

斯うなッて見れば、自殺といふ事が、何の造作もない。思ひに沈んで、歩行くともなく、招魂社傍まで來て、其の神々しい棟や鳥居やが、澄みわたッた大空に、かッきりと聳えてゐるのを見ては、さすがに我が身もふりかへられる。折角男と生れ來て、何の仕でかした事もなく、死んでしまふかと思へば、殘念でもあるが、是非がない。一旦の怒で宇川をやッつけたのは、悪かッた。けれども、其の意志に至ッては、疚しい所はない。せめても其れを思ひ出に、一息にやッてのけるまでだ。

社内に足が向いて、何とはなく、神前はるかに額づいたが、涙ははら〳〵と敷石をぬらした。例の御手洗の音が、澄んで聞こえる。心細い中に、過ぎた事の懷しさが、むら〳〵と萌して、横より裏手へ廻り見るに、亭、池の面目一杯の月影に、今が名殘と思へば、見る限り、此の世の物が美しく、尊く見える。

あのきら〳〵とした池水に沈んだら、それこそ身も心も清淨な、天上界に遷られはすまいか。考へて見れば、世間苦しい此の頃であッた。あゝいゝ風が吹く、このまゝ此の苦しい胸を刺し通して貰ひたい。月もよく澄んでゐる、いつかの凄い暗い俤はない。と思ふと、戀しき昔も懷ひ出され、心はいつか現在の妻の身の上に移ッて、彼れも可愛さうだ。疑ぐるのは疑ぐられるだけの事が、此方にあればこそ、それも皆此の身を氣づかッて呉れるからの事。夫の首に繩打たうとするのではなし、只一言、私から打ち明けてやりさへすれば、事は濟む。さうと知りながらも、思ひ切ることの出來なかッたのは、矢張り私の迷からであッた。此のまゝ死んだら、跡で怨むであらう、一目逢ッて、私の心を聞かせたくもある。いや〳〵止さう、女々しい。

吾家の方へ向きかけし足をかへして、通りへ迷ひ出で、まだ正月の人通り繁き中を、身を小さくして、柳の蔭をたどれば、

であッたらといふのですから、どうか其のつもりで、僕のいふ所を聽いて下さい。君が兎も角も嫌疑を蒙ッてゐるといふ事だけは、斷言してよいでせう。それは君みづからも、承知してゐられるやうですな。さうすればです、僕から今言ッたのも、畢竟この嫌疑を解く一法だといふことを、あなたに認めて貰へば、それで僕の志は貫徹するのです。」

「有りがたい、わたしは、世の中に、始めて一人の知己に出逢ッた氣がする、君の高意は、死んでも忘れない。わたしの今の境遇といふものは、丸で、牢で、牢にでもはいッたやうなもの、何方向いても、上部でこそ笑うてはをれ、眼の底には、じろ〱といやな光で見まはされる。石倉君、わたしは今ぢや、親にまで、妻にまで疑はれる身ですよ。何所へ行ッても、眞身慰めて吳れるものは一人もない。其の中に君ばッかりだ、あれ程の事を言ッて吳れるのは。嬉しいですよ、親友の味といふものを、今始めて嘗めました。君の教は必ず服膺する、君の言葉には背かない。」

「それです、さう聞けば僕はもう何も言ひません。あなたの心があの月のやうに霽れ渡ッた時は、則ち僕があなたの爲にいつかのお話し通り、世の誤解に對して、辯護の勞を取る時です。夜も更けたやうですから、どうです、此れで別れませうか。」

「では、明日も知れない身ですから、何分にも。」

「無論ですとも。」

（十二）

しよんぼりと、我が影蹈んで歸る道々、正木の思ひ得たのは、自殺といふ考へより外はない。いよ〱差しせまッた身で見れば、無論、おめ〱と引かれてなるものか、潔く自首するか、自殺するかだ。自首も願ふ所ではない、自殺して除けやう。

おらうが、凡そありとあらゆるものは、恥ぢて、其の醜い所を隱してしまふ。見るものとして、うつくしからぬはない。況んや我々人間が、どんな惡人にもせよ、どんな愚物にもせよ、此の隱す所ない、月の光に對して、一點羞恥の念を振り起こし、隱れた良心を、洗ひ清めいでならうか。春の月は、人の心を蕩かし、人に惡事をすゝめる。けれども、冬の月は、人に悔悟を教へる、懺悔を教へる。是れを思ふと、僕はつくぐ考へるです、法律だの、裁判だの、監獄だのと、うるさいほど工夫はしても、到底それは上ッつらだけの事で、人間の罪惡を、心から改め清めさするには、何の效もない。再犯三犯といふ犯罪人の多いのでも、此の理はわかる。罪人を、心から改悛させてやらうと思へば、どうしても、何所かに一點造化の力を假りて、良心の明を我れからともさするより外はない。だから、出來ることなら、一切の罪人の鎖を解いて、此の月光の下に立たせ、靜に大聖人の說法でも聞かせて、本當の悔悟に、導いてやりたい。斯う思ふと、僕等が、心血を枯らして研究してゐる所などは、實にはかないものですな。僕はむしろ宗教家にならうかとも思ふのです。」

默して聽いてゐた正木君、正木、今日はかりは、石倉が氣取ッた演說ぶりも、身にこたへて、何時がほうッとしてゐる。

『斯ういッたら、正木君、大抵は分かりましたらう、僕が本心のある所は。僕は宇川の朋友でした、けれども、決して宇川に服してゐたものではない。彼れは或は僞物であッたかも知れぬ。隨て死んだ彼れの爲にどうといふ考へでは無論ない。また君に對しても、さしたる恩もない、代りに怨もない。僕はたゞ、今言ッた宗教家のつもりで、君に至心の誠を捧げるのです、忠告するのです。僕の聞く所、また探ッた所では、事情が餘程切迫してゐるらしい。とても此の上は駄目らしいです。だから、前言ッたやうに、僕は決して君を犯人と認めたといふのではないが、萬一ですな、そのやうな事でもあッたら、願はくば、男らしく悔悟の人となッて、自首して貰ひたいと思ふのです。併し、決して君を犯人だとはいひません、たゞ萬一さう

かはたれ時の薄明りに、そッと、庭口の木戸を明ければ、南天の實の赤いのが、ぱッと目について、半間の袖垣の蔭に、小く蹲る正木。内には、お清の泣聲、母の詰問する聲、とぎれ〴〵に、言葉のあやはッきりせず。猶も聞耳立てゝ、身をすり寄せんと焦る頭上より、思ひがけなく、

「あれえ、奥さん。」

と絶叫したる下女の聲、驚くまいことか、正木は、一足飛びに通りへ出て、一町ばかりは、何所をどう走ッたやら。跡では家内三人が、あれも探偵との噂とり〴〵。近所へは泥棒との吹聽であッた。

（十一）

夜は滿月で、番町の土手の上には、くねッた松の影くろ〴〵と、枯芝は一面の白氈を敷く。此の廣い座敷に、しんみりと話してゐる二人は、正木と石倉。大蛇の如く地上をのたくッた松の幹に、身を寄せ、今しも通りすぎる甲武列車の凄じい地響を足下にやり過ごして、しばし言葉を切り、見やる向かうは、牛込臺にこんもりと煙とざして、田町あたり、ちら〳〵と瞬く灯影、寒光は限りなく江の水を照して、二人の襟は、霜を浴びてゐるやうだ。石倉は例の調子、なれども、日外惟卷いた時とは違ひ、極て眞面目に、

「御覽なさい、此の景色を。僕が、秋から冬へかけての月を、殊に愛するのは、此の爲だ。此の凜とした、清しい、骨を刺すやうな、一點微塵の曇りない、實に佳いではありませんか。人間が、何時も此の景色、此の曇りない引きしまッた景色に、心を比べてゐたら、恐らく、其れが天人の境界であらう。此の月光の下には、草も、木も、山も、川も、家であらうが、倉で

「それば無理ですわ。おッ母さんから、直きにあなたには、言ひ難いもの。」

「それが他人行義といふものさ、假にも親子の間に、そんな、別け隔てがあッてはなるまい。」

「それは、そこが義理ある親子ですもの。」

「よろしい、さうするなら、幾らでもするがいゝ。」

二人の言葉は途切れて、あはひの鐵瓶が、ひとりじひと音立てゝゐる。

「あゝ、つまらない、つまらない。私は天涯のひとりぼッち、親もなければ、同感して呉れる妻もない。どれ、石倉の所へでも、行ッて見やう。」

立ちかゝるを、お清はひかへて、

「おてつけがましい、そんな事言ひッこなら、わたしにだッて、怨はある。別け隔ては、あなたからするのぢやありませんか。わたしを疑ッて祕し隱しなさるのも、わたしは知ッてる…………。」

と聲はうるんで、事むづかしうなりかけた時、二階に足音して、

「あかりはまだかえ。」

と下り來るは母。正木は衝と立ッて、着かへたまゝの平服の上に、マント引ッかけながら、

「石倉の所へ行ッて來るよ。」

とわざと大きく言ッて、出て行く。と見ると、四五間行きかけて、何と思ッたか、突然足をかへし、家の裏手へ忍びこんだ。

と正木は向き直る。

「何がッて、あなたは、なぜそんなに、宇川さんのことばかり氣になさるか、わたしには分らないもの。」

「別に、何もありはしないさ。たゞ、場合が場合だから、あの事と宇川の殺されたのと、變にこんがらかッて來ると、わたしが迷惑するから、それで心配するのさ。情ないよ、お前までが、そんな事を言ッて呉れては。妻にまで私は疑はれてゐるかと思へば、實に、實に、情なくなる。お前は、わたしが宇川をどうかしたと思ッてゐるのか。」

「いゝゑ、さうは思ッてゐないけれど。」

「いゝや。思ッてゐるらしい、思ッてゐるらしい。お母さんにも屹度そんな事を言ッたに違ひない、言ッて、いろんな事を吹き込まれたに違ひない。」

「嘘ですよ。」

言ッたまゝ、たゞならぬ正木の顔色を、避けて見てゐると、正木は、ます〳〵募ッて疊みかける。

「嘘ではない。さうならさうと、隱さず、白状して呉れ、さうでないと、私の心得方があるから。」

「白狀なんて、わたしは、全くそんな事は知らないもの。」

「お前等は親子して、此の私を他人扱にするのだね。」

「あらわたしが何時そんな事を言ッて?。」

「お母さんなんぞ、私が探偵につけられてゐる事も、毎晩うなされてをかしいといふ事も、皆な腹の中では思ッてゐるながら、私には話して下さらない。私はみな外から聞いた。」

と言ひ放ちはしたが、濟まぬ氣もして、躊躇する。
「おッ母さんは、誰れに、そんな事を聞いたのだらう。外に何かまだ言ッてはゐなさらなかッたか、わたしの事を。」
「お父ッさまの夢の事は、お聞きなすッて?。」
「あゝ、それはさッき二階で聞いた。」
「あれを、大變氣にしてゐましたッけ。」
「お前何か饒舌りはすまいね、おッ母さんに。」
「何を?。」
「饒舌りさへしなければいゝ、あのそれ先刻言ッた一件をさ。」
聞くお清は、言譯の心も後や前。今更のやうに、夫の顔を見直した。正木は之れに度を失ッて。
「あんな事が知れると、それを種にして、人といふものは、色々な噂を拵へるものだからね、拵へだッて構はないけれど、うるさいさ。おッ母さんにも、お父ッさんにも、屹度饒舌りはすまいね、餘計な心配をかけると濟まないから、お前は兎も角、わたしが濟まないから、決して言ふことはならないよ。是ればかりは背くと承知しないぞ。」
「そんなに仰らなくても、言ひはしないけれど………。」
「言はないけれど、どうした?。」
「わたしや、何だか心配でならない。」
「何がさ?。」

「夕飯までには、歸ッて來ます。」
「あなたは、入らッしやらない方が、よくッてよ。」
「何ぜ?。」
「先刻おッ母さんがをかしな事を、言ひましたよ。」
「どんな事を?。」
お濱はあたりを見まはし、おさんやと、一聲呼んで、返事のないのに安心し、
「あなたに探偵がついてるさうですよ。」
と、二階で聞いたやうな事を話す。それには色々母の想像も加はッてたので。元來此の事は、聞くまでもなく、正木は早くから、薄々勘づいてゐたので、役所の歸りを、わざと遠方へ散歩などするのも、一ッは探偵の目先をくらまし、勉めて平氣を裝ふつもりに外ならない。けれども、さすがにあはてが來たものと見え、する事に間がぬけて、辻褄の合はぬ節が多い。當人は、それでも立派に巧んでゐる氣だ。
「そんな、馬鹿な事があるものか。よしあッたにしろ、平氣なものさ、何も探偵されるやうな事をした覺がないから。」
「さうですけれど、何だか、夜なんぞ氣味が惡いやうで。」
「はゝ、つまらない、往ッて來るさ。」
「おッかさんも、なるたけ、おでかけなさらない方がいゝと、いッてますよ。」
「構ふものか。」

「成程、さうでした。これは私が悪うございました。鬱ぐといふ程でもないのですが、何だか氣が重いさうで、晴々した野原へでも、出て見たいやうな氣がするものですから、つい考なへしに、ぶら〳〵あるきと出かけたのでした。」

「尤も、おあるきなさるのが悪いといふのではないから、それは思ひ違へして下さいますなよ。どうしたのでせうね、さう晴々しないといふのは、顔色も、何だかお勝れなさらない様だが、體でも悪いのではないか知ら。外に、何か心配事でも、あるのぢやありませんか。若しそんな事なら、わたしは兎も角、娘(あれ)に位は打ち明けて、役には立つまいけれど、相談もしたり、慰められしたりしなければ、男が、内外に氣を置くやうでは、とても立ち行くものぢやありませんよ。」

言ッて、そッと顔色をうかゞへば、正木は默然(もくねん)として答へない、二階で病人の手を拍つ音が不調子に聞こえて、娘の立ちかゝるを、

「いゝよ、わたしが行くから。」

と、細君は行ッてしまふ。

「今日、石倉さんが入らッしやいましたよ、何だか、急な御用らしうございましたよ。まだ役所から歸りませんといひましたら、首(くび)をひねり〳〵歸ッて入らしやいました、あのかたは、おもしろい方ですことね、風からして變ッてゝ。」

「どんな事か知らん、別に、そんな急な用事はなかッた筈だが。」

「おさんが歸ッたら、聞きにやりませうか。」

「わたしが、ちよッと行ッて來やう。」

「今から？。」

「はゝゝ私の土産です。驚いちやいけませんよ。」
「おや〳〵、お團子かえ。」
「鬼子母神のお土産。」
「通りがけ、あんまりいゝ風がしたものですから、買ッて來ました。」
「今お茶を入れますよ。」
「ぢや、一つ頂かうかね、さあ馨さん、召上れ。雜司ヶ谷の方へ、今日入らしたの？。」
「ゑゝ、散歩がてら、あすこいらをぶらついて來たのですからそれで、すこし遲くなりました。」
「この寒いのに、よくね。」
「天氣がいゝから、外は暖です。宅にゐると、何だか鬱いでいけませんから、氣晴しに、これから、毎日少しづゝあるいて來やうと思ふのですが。」
「さうですか。」
と細君はやゝ不滿の樣子。
「ですがねえ、まだ、鬱ぐには早やすぎるぢやありませんか。お正月ですよ。それに、今の身そらで、鬱ぐなんて、第一外聞が惡い。來る早々、內で面白くないからといッて、亭主が內を開ける、いゝゑさ、何も、明けるといふ程ではないけれど、まあ物の道理がさ、內を明けるといッては、何か、內によくない事でもあるやうで、娘は、申すに及ばず、わたしまでが、不行屆か不心得と、世間ではいふまいにも限りませんからね。そこは、よく吞みこんで置いて下さらないと。」

が、此の頃ちらりッと或人の口から、妙な事を聞いた。宇川の一件では、あの通り、犯人が今以て知れないので、警視廳でも、餘程骨を折ッてるらしいが、此所の近所やお前の行く先などに、折々怪しいものがつきまはるといふ話だと、是れは、强ち犯人だからといふではなく、手がゝりさへあれば、何時誰れの身を探偵するかも知れないのが先方の商賣だから、自分でそんな事さへなければ、何も構ひつけないやうなものだが、併しつまらぬ事で、嫌疑など受けては、此方の損だから、よくよく注意しなさいよ。わしは知らないが、妻の話なぞにもひどくうなされなさるさうだが、氣苦勞が多いからであらう、ちと氣を休めるやうにして下さい。」

「ありがたうございます。そこまで言ッて下さるものは、此の廣い世界に、あなた一人でございます。」

と覺えず言葉に力が入れば、深澤は、不思議げに見よこしたが、話はそれだけだといふので、正木は、そこ〳〵に降りて來た。

居間へ來て見ると、母とお清とは、火鉢を挾んで、何かひそ〳〵話してゐたのを、ぴたりと止めて、此奴胡亂、といふやうな目つきで、見迎へる、と正木には思はれ、厭な氣持のするのを、じッと抑へて、祕密を見すかされたやうな、それが怖さに媚びるやうな考へもまじッて、わざと笑ひかける。

「先ッきの物を、おッ母さんに上げて見たらどうだ。」

「晩に、あたゝめてと思ッたのですが、ぢや出して見ませうか。」

とお清が、體をひねりて、うしろの茶簞笥から取り出すものを、尻目にかけながら、

「何だね、御馳走かえ。」

「女といふものは、どうも僻みが強いので、困るよ。今も、内々でお前に言ッて置くことがあると、わたしが言ふと、彼れが、此の場になッて、何も内證話しなくとも、三人の前で、言ッてもよいではないかと、このわたしに理窟押しをするのだ。が、まあそんな事はさておいて、お前も、行がゝりで、こんな家へ來て、さぞ迷惑であらう。譲るものといッては、借錢の外に何もなく、おまけに、あんな事で色々心配をかけて、すまん。併しまあお蔭で、わしも安心して、此うやッて、疊の上で死なれるといふもの。お前の恩は、被て行きます。」

「つまらない、何も親子の間にそんな他人がましい事は入りません。それよりか、何かお話しといふのを、承りませうか。」

「さうであッた、病むと愚痴になッてな。内々で言ッて置くといふのも、やはり、ろくな事ではないが、是れまで、お前に頼んだ外に、尚一口借錢が殘ッてをる、といふのは、是れだが。」

と枕元の小箱から、書面を取り出して、

「何も、外と變ッた借り口でもないが、あんまり借錢ばかり續くのが、面目ないと、初手妻に隱したのが本で、とう〳〵、今日まで出し後れ、利子勘定の時なぞ、是れ一ッの爲に、わしはどんなに苦心したか知れぬ。何もかも内々でやり繰りせねばならぬのだからな。重々の災難だが、是れも一緒に、絡めて置いて下さい。それで、いよ〳〵、安心の爲じまひをした。あゝこれで、何時死んでもよい。それからと何かをいはうと思ッた、それ〳〵、わしは、昨宵變な夢を見ました。あの死んだ宇川な、不吉な事だが、お前が、あれの下手人で、わしも一緒につかまッて、わしは何も知らぬのに、どういふ譯であらうと、平氣で考へ〳〵、引かれて行くといふやうな夢であッた。馬鹿な事とは思ッたが、どうも、今朝目が醒めてから、氣持が惡くてならないから、妻に、是れ〳〵と話して見たのだ。すると、妻のいふのには、お前にそんな事のあらう筈はない

「お前は、役所に關係のある人だと思ふか、全く外の人だと思ふか。」
「さうですね、お役所の人のやうでもあり。」
としばしあとをためらッて、正木の眼色を窺へば、
「ゑ。」
と正木の息はつまる。それを見て取ッて、
「さうでないやうでもあり。」
「何の事だ、分らないぢやないか。」
「あなたは？。」
「お前には、どうして、役所の人のやうだと思はれる。」
鸚鵡がへしに、しばし、暗闘の探り合ひと見えた時、隱居所兼病室の樣になッてゐる、二階の下り口から、馨さんちよッと〳〵呼ぶは、母の聲、何用かと、正木が上り行けば、八疊の間を屛風で仕切ッた中に、ごほ〳〵と三ッ四ッ續け樣の咳聲、ぷんとクレオソートの香が鼻を撲ッて、病人は、窶れた顏を少し擡げかけ、
「馨さん、もッと、ずッと、近う寄ッて貰ひませう、今日は少し氣分もよいやうだから、之れを幸に、些ッと許り、昨日三人の前で言ひ落した事を、言ッて置かう、之れは、お前一人にだけ、聞かせて置けば、それでよい。」
と言ッて、また咳き込み、あとは遠慮して、言ひ出し兼ねてゐる樣子に、母は、じろ〳〵見てゐたが、ふいと立ッて足音荒く下りてしまッた。

「別にないやうでした。」

「お父ッさんの御容態は？。」

「變はりませんよ。今日は少しいゝやうですと。」

「さうか、それはよかッた」と一段聲を低めて、

「おッ母さんは、わたしの事を、何とか言ッては入らッしやらなかッたか。」

「いゝえ。なぜ？。」

「お前の知ッてる、宇川の事ね、あれを、おッ母さんは知ッてゐるやうだが、誰れからきいたらう。わたしは不思議でならない。」

言ッて、竊にお清の顏色を伺ふと、お清は意外といふ面持。

「さう？。わたし、些ッとも氣がつかなかッた。誰れも知ッてる筈はないのですがねえ。」

これはお清の不審がるのが尤で、全く正木のぺてんであッた。正木も安心して、

「それでは、わたしの考へ違であッたか。お前さへ言はなければ、知れる筈はないから、やッぱり知ッてゐなさらないのが、本當であらう。それはいゝとして、今日なぞも、役所では、盛に宇川殺しの話が出て、中には、賭なんぞしてゐるものもあるさうだ。お前はどう思ふ、誰れだと思ふ。まあさ、およそこゝいらであらうと思ふ所を、言ッて御覽。」

お清は、ちよッと正木の顏を見て、すぐ側を向き、

「そんな事は、わたしに分からう筈はないぢやありませんか。あなたは？。」

けて、話して見やうかとも思へど、それが緒で、ひよッと、正木の身に拘るやうな事あッてはと、胸一杯の思案に、今日の日も暮れ殘る門口へ、正木の音なふ聲が聞こえる。

（十）

あくれば酉の正月、酉は嫁取り、婿取りに通ひ、また何でも彼でも攫み取りといッて、めでたい年に違ひないと、老人の擔ぐ傍から、藥取り借金取りは、ありがたくなし、別けて年は取りたくないもの、それ〳〵御覽じろ、鼻から雫がおッこちる、皆これ酉年の祟だと、憎まれ口きくも、笑ふも春の大やうさ。

此の頃は、何だか淋しくもあり、急に不便でなりませねばと、此方から急ぎたてし緣談の運び早く、早々、正木は、姓を深澤にかへる身となッて、主人の病氣以來、火の消えた樣なりし富士見町の家も、下女部屋の隅まで、高笑ひの聲こぼれ、松飾に日影うらゝかに、群雀の軒に囀づるのもめでたい。

けれども、一度催した空は、一時晴の續きがたく、めでたかッたのもほんの二三日、其のめでた酒過したが本で、安堵して、がッかりした弱みへ、寒が入り、再がへッた病氣に、深澤はまた枕屛風の蔭に、藥瓶并べる、昨日今日。出入る人脚も、おのづと減りて、ともすれば沈みかゝる家内の調子を、傍から引きしめ景氣づけてゐるは、正木夫婦。それも、あれ程思ひ思はれた仲の新夫婦とは見えぬまで底によそ〳〵しい所があッて、强ひて上部ばかり造り笑ひ、造り陽氣は、丁度火の消えかゝッた炬燵の、何所ともなく寒いのと同じ心地がする。今しも歸ッたばかりの正木、

「何も變ッた事はなかッたね。」

あぢきない一日を過ごしたその夕ぐれ、待ちに待ッた正木の聲に、飛びたつほど逢ひたく、樣子が聞きたけれど、病氣の手前、出る事もならず、もがいてゐる内、正木が便所へ下りた樣子、折よしと、其のまゝ緣先に立ち出で、其れとなく待合はすれば、彼方も心あッてか、摺れちがうて、そッと袂へ忍ばせた一封、人目をよけて西明りに拾ひ讀めば、是れは夢のやうな、萬めでたくおさまり候へば、もう宇川へは御出で下されずともよろしく、いづれは御目もじ、との意が歌ッてある。あまりの事に、お淸は、しばしほかんとしてゐた。その五日目、近所の人の立ち騷ぐので、牛が淵に死人のあッたことを知り、檢視の結果、役所の宇川らしいと聞いた。お淸がと胸をついて、色を失ッたのは、卽ち此の時で、宇川といふ讀聲に響き返すは正木、日取といひ、事情といひ、もしや正木さんが、よもやそんな事を、と打消す氣も出で、やッと開きかゝッた胸は、うやむやの中にまた塞ぢそめる。

　疑が高じて、何時かお淸の心では、正木をそれに思ひ極はめて、悲しいも、淋しいも、皆これから割り出す。誰れだか分かりもしないものを、と時々思ひかへしはしても、やッぱり本心は爭はれない。其の氣で見れば、近頃の正木の擧動に、目につく事が多い。何方かといへば、落ちついてゐた人が、此の頃のそは〳〵しやう、ステッキを忘れたり、帽子を忘れたり。第一顏の色艶がなくなッて、蒼く、何處やらどす黑いやうにも見えるは、湯にも入らぬものか、氣の爲か眼も窪み、頰もこけたやうだ。宇川の死んだのをひどく果敢なんで、世の中が厭になッた、心淋しくなッたと、口癖のやうに言ッてゐる。牛ヶ淵近邊は、通るさへ氣持がわるいと、わざ〳〵遠まはりして來る。來れば、人懷かしげに何時までも賑に話して、話の途切れには、うッかり額など眺めてゐる。いくら更けても、泊ッた事のない人が、夜道は淋しいからと、自分で言ひ出して、泊ッて行くやうになッた。すべてが、前とは變ッた調子に、お淸の疑は、無理でない。何も氣づかぬ樣子の兩親に、打ち明

限り水は靜まッてしまッた。と見ると、正木は一散に、公園の出口の方へ、土手傳ひに走りだしたが、人通りに怖ぢたか不安心とでも思ッたか、取ッてかへし、そこらを透かし見まはして、何事もないのに、安堵し、今度は、竹橋の方へ驅け出す足元に、かさりと蹶いたのを、何かと拾ひ取ッて見れば、忘れてゐた自分の帽子、其の儘手にして、志す方は役所であらう。

（九）

宇川が無斷缺勤は珍しい事だ、急病でも起こッたのではないかと、噂の中に、翌日は暮れた。正木の顏色の蒼ざめ果てゝゐるのには、誰れも氣づいたものがない、氣づく筈もなかッた。二日目には、宇川が居ないさうだといふ評判がぱッとし、三日目、四日目と經つ内には、官金持逃ではないか、いやさうでないさうだ。駈落ちか、まさか。では世をはかなんで鐵道往生でもしたのではあるまいか。と勝手な噂が立つ。下宿では、たゞ、夕御飯を召上るとやがてお出かけになッた限りだといふ。其の中に、牛ヶ淵へ死骸が浮んで、いよ〳〵人に殺されたものと極まり、新聞種にもなッた。すると探偵はきびしい、一時も心が許されぬ、けれども、幸にして、未だ正木には疑がかゝらない。

此の事を聞いて、と胸をついたのは、お淸だ。事のあッた翌日の夕方、正木は、いつもの如く深澤をおとづれ、今日は、昨日にひきかへ、にこ〳〵と笑ひかけて、萬事うまく行ッたと、主人に話して、喜ばれて、留められるのを、强ひて振り切ッて歸ッたが、ひどくそは〳〵してゐた。尤も、一つは、昨夕の一件から、細君のお覺が日頃ほどでないのに、氣を惡くしたのでもあらう。

お淸は、昨夜から病氣といッて、一間を出ず、食も進まないで、一心たゞ、もしやの賴を繰かへし、行末の事など考へて、

「小い聲で言はうが、大きい聲で言はふが、我輩の自由ではありませんか。」

「だから頼んでゐる。」

「頼むのなら、承諾するとしないとは、我輩の權利でせう。」

「飽くまでわたし等に辛く當たらうといふのだね。あれ程事を分けて頼むのに、頼み甲斐のない。」

「何を言ッてるのだ、君は。大きい聲をするなといふから、しやうとすまいと、我輩の自由だといッたまでゞはないか。全體大きい聲をされゝば、どうといふのです。何か、官印盜用とでもいふやうな、犯罪でもあッて、それが露見する恐があるといふのですか。」

思ひ切ッた大聲の、まだ終らぬ内、正木はたまりかねて、ついと寄り、

「えゝッ。」

と一聲、全身の力を諸拳に籠めて、突きおとせば、宇川の體は、不意をくらッて、お濠へ眞ッさかさま。どんぶと響いたなごりの波が、あちらの岸にも、こちらの岸にも、ぴた〱と甜めるやうに音立てゝ、見すかす限り、水底の星影亂れる中を、

「畜生めッ。」

と低くしやがれた一聲に、睨みつめて、すッくりと立つ正木、元の所より四五間上手に、見る〱黒いものゝ浮かび出るに、目をつけ、

「已れッ、まだ。」

と狂氣のやうに走り下ッて、しやにむに石垣を手探り、ぬき取ッて、碎けよと許り抛げ下す。たしかに手答あッて、それ

「今少し心に城府を設けないで、聞いて吳れたまへな。」
「城府を設けるなんぞと、それこそ君の僻みといふものだ。我輩は、君等のやうに、他人の意を迎へることが出來んからな。これが我輩の性質だから、それで話が出來ずば、出來なくともいゝ、してもらはなくても困らん。君の方から聞いて吳れといふから、來たのではないか。此方から賴みはせん。」
嵩にかゝッた言ひぶりの面憎さに、正木は、覺えず拳を固めて、見つめた。それが宇川に見えでもしやうものなら、嘸ぞ猛りたてた事であらう。
風が築地垣の松の梢を揉むのと、たまに車の音のするばかり、お濠の水の黑いのに、星影沈んで、續くものは二人の話聲。
「では、君はお淸さんを貰ふのは厭か。」
中堅へ切り込んだら、崩れるかと思ッた正木の目算は、外れて、宇川は益々頑に出る。
「我輩は不正な事は嫌ひだ。君はそれを以て、我輩の口を箝せやうとするのであらう、卑劣な。」
「不正な事。」
と正木は口ばしッたが、跡を呑みこんで、我れと胸を撫でゝゐる。
「不正な事ではないか。自分等の罪跡を隱蔽する爲に美色を以て人に啗はす。」
「宇川君。」
「何です。」
「もッと小い聲で言ッて吳れたまへ。」

「いや、君を色男であるのないのと言ッた譯ではなく、たゞ、夫婦と言ふものについて、わたしの考へを言ッたまでだ。言葉が多ほ過ぎたかも知れないが、氣に當たッたら、恕して吳れたまへ。まあそんな事はどうでもよいとしてさ、君はお淸さんの心を、初めから信じないでかゝッてゐるらしいが、當人だッて、承知する位だもの、無論君に心を寄せてゐるのは明かだ。それは、わたしが直に遭ッて、話した時の口ぶりでも分かッてゐる。物は當たッて碎けろだ。そんな事を言ッてゐずに、兎も角もやッて見て、損はなからうぢやないか。」

「君は直に逢ッたのか。」

「あゝ、逢ッた。」

「よく逢ッたねえ。毎時でもそんな風に逢へるのか。」

宇川の圓目には、冷笑に邪推嫉妬がまじッて、いやな凄い光がある。

「それは、此の件で、わざ〳〵逢ッて話したのさ。」

「君の言には、確固たる所がなうて可かん。初めには、君と課長とで說得したやうな事をいッて、後には、當人が心を寄せてゐるといふ。君は、我輩を愚弄するのではないか。」

「僻るな、さう僻んでは。」

「敢て僻みはせん。」

「併しそれでは、話が出來ないぢやないか。」

「なぜ。」

同じ夜の十一時過ぎ、夜風吹きさらす牛ヶ淵公園の、しかも人通り疎な土手まはりを、話しつゝ行くは、正木と宇川の二人づれ。今しがた料理屋からでも出て來たかの風。

「わたし一人の計ひでは、無論ない。課長も君の好意をひどく喜んで、つまり將來の爲だから、是れを機に、君と緣を結んで置きたいといふのだ。是非、さうして呉れたまへ。わたしが月下翁の役はするから。」

「幾ら親がさういッたからと言ッて、肝腎の當人が、心から靡かん以上は、外からどうする事もでけまい。」

「それはもう、わたしが確めて來たのさ。當人も十分承知の上だ。」

「親の威光で承知させたかは知らんが、併し、戀は好意の贈物だといふからな、外から强ひて承知させたのでは、快くない、男兒の面目にかゝるからなあ。」

「さう十分を言ッたッて、しやうがない。初めはどうだッて、貰ッてから好意を盡くしてさへ呉れゝばそれでいゝぢやないか。世間の夫婦は、大抵そんなものぢやないか知らん。戀婿だの、相惚夫婦だのと、それは色男どもの言ふ事だらうと思ふがねえ。」

「敢て十分を言ふわけではないさ。戀婿だの相惚だのと、そんなそんな。怪しからん事。我が輩が色男でないのは、敢て君を待たんで知ッて居る。」

宇川の語氣の荒いので、正木は飽くまで下手に出て、慰める。

と、忽ち忘れてゐた、さしせまる身の上を思ひ出して、氣がいらだッて來る。公園に出れば、向うの木蔭に、一つ二つ人家の火影が見えて、暗い中に、池の水が氣味わるく光る。少し小高い所の亭(あづまや)へ、正木は、怖がるお清の手を引いて腰かけさせ、どうあッても言はねば濟まぬ事と、氣を鬼にして、一部始終を打ち明けた。お清は驚きのあまり、たゞおど〳〵するばかり。

「氣を慥にして、よッく了簡して下さいよ。そんな譯だから、此所であなたが厭を通せば、お父ッさんなり、わたしなりは、九分九厘監獄ものです。わたしを思ッて下さるのは、そりや嬉しいに違ひないけれど、折角さうして、一緒になるかならないで、男は監獄に行く、あなたは一生の疵物で、世間に顏も合はされない。それを思ふと、わたしは、今の嬉しさよりも幾層倍悲しいですよ。わたしだッて、男ですもの、思ふ女を人に奪はれて、平氣でゐられやう譯はない。それを此ッ方から進んで、さうしなければならぬとは、それがうき世なのでせう。考へれば、明日の日が危ない、宇川の口一ッで、わたし等は、明日にもどうなるか分らない身です。わたし決して二心ない證據は、見てゐて下されば分かる、あなたが、お父ッさんやわたしの爲に面白くない月日を送ッて下さるものを、わたし一人、どうしてそんな浮いた眞似が出來ませう、わたしは、決して二度と妻は迎へない。是れほど言ッたら、よもや、あなたも厭とは言ッて下さいますまいね。」

「では參ります。」

言ッて丸卓子(テーブル)の上に泣き伏したお清、

「よくいッて下すッた。」

と背に手をかけたまゝ、正木も顏をそむけて、しばしは、口を得開かぬ。

賴まれたから他所へ嫁けなんて、あんまりひどい、あなたさへ立てば、わたしはどうなッてもよいといふのですね。」

と下より覗きこみて、怨ずる顔を、正木はたゞじッと見おろすのみで、一言も出さない。

「それとも、わたしを他所へやッて、跡で、外からよい奥さんを、お貰ひなさるといふのですか。それならさうと、お隱しなさらないでもよいのよ。」

なほ返辭がないので、

「わたしは口惜しい。」

と女はやゝ泣聲。道はいつか曲ッて、招魂社の鳥居內へ這入ると、御手洗の噴水が、ちろ〳〵と淸い音を立てゝ、氣も心も澄みかへる。つく〴〵と女の言葉を聞いてゐた正木、しばしは、身の大事恩家の大事も忘れて、お淸不憫に心を惹かれ、今まで我がした事をふりかへッて見れば、怨まれるのも無理はない。そぶりに戀をほのめかされ、我れも憎くは想はなかッた女、一度は妻とまで想ひきめた女を、如何にさしかゝッた災難が恐しければとて、其の女を餌に、身を遁れやうとは、殘忍な所業であッた。それを平氣で說きつけやうとする、自分の心はどんなものであッたか、今さら不思議なほど。と思ふと、ついぞ覺えぬ優しい、溫い、嬉しい、何所か悲しくもあるやうな感じに、身內が融けるやうで、我れ知らず、竝んでゐたお淸の肩に手をかけた。お情は身をすくめる。

左へ櫻林の中を神社の裏手へぬける道々は、枯枝の縱橫に鎻したのが、はッきりと電燈の光に透け、木立の間から、街燈が星の樣に、轍の音が絕えず響いて、わあと何所ともない遠聲の中に、冴えた三味線の音じめやら、營所の消燈喇叭の音やらが、調子外れに聞こえる。離れた世界から人間世を覗く心地して、我れもあの中の一人か、といふやうな事に考へが向く

まだ話の序開きも濟まない内、ポストの曲角も過ぎて、猶人館と赤い字の街燈のついた家、何時も琴の音の聞こえる家、其の次はもうお清の宅だ。是れでは仕方がない、招魂社の境内までと誘へば、誘はれるまゝに、厭ともいはぬ。

「では私のいふ事なら、屹度聞いて下さいますね。」

「はい。」

「ぢや言ひますが、あなたお嫁に行ッては下さるまいか。とばかりでは分かりますまいが、宇川の所へ行ッて下さい。驚きましたか。無理は無いが、宇川があなたの事を言ッたり思ッたりしてゐるのは、今日や昨日に初まッたのぢやありませんよ。少し譯あッて、わたしが其の取り持を頼まれたのです、そして屹度よい返事を聞かせてやると、受け合ッたのです。」

「人を馬鹿にして。わたしは、あんな方は嫌ひ。ほゝ、幾らさうでも厭なんですもの。」

「困ッたな、それでは、わたしの顏が立たない。」

「なぜそんな事をお請合ひなすッて?。」

「其所には言ふに言はれない譯があります。」

と考はいつか、差し當ッた身の上に戻ッて、二の句は容易に繼けない。

「どんな譯か、聞かして下さいな。」

「それ言へば頼んだ事を聽いて下さるか。」

「それは無理ですわ。どんな譯か知らないけれど、私にだッて、言ふに言はれぬ切ない事もあります。あなたは、わたしの心を少しも察して下さらないのね、さうですよ、屹度さうですよ。でなくては、そんな事をお引き請けなさる筈がないもの。

めぐりながら、氣ばかりあせッて、往きも還りも得せぬ。

何とはなしに、錦町の宇川が下宿の方へ二三間、足を向け、つまらない事と、また跡もどりして、銅像の根もとをぐる〳〵

なりへ、觸れまはッたかも知れぬ、斯ういふ今、饒舌ッてゐるかも知れぬと、今度は其の方が氣になッて、居たゝまれず、

（七）

兎も角も宇川の樣子をと、大夜燈の前を交番の横まで、ふら〳〵と來かゝる正木、袖と〳〵つき合はせて、其所等ぶらついてゐる、立番の巡査にあぶなく衝き當たらうとして、あはてゝ身をかはせば、今度は來あはせた吾妻コートにぶつゝかり、まごつきながら、見たやうな女と、頭巾の中を覗けば、それも其の筈、お清である。相方間のわるさうに、ちよッと默禮したまゝ、一旦は立ち別かれたが、此の時正木の胸に、ふッと別の考が浮んだ。いッそ清子に打ち明けて、直に說得したらどんなものであらう。當人さへ承知すれば、跡はどうでもなる。と思ふと、其のまゝ足をかへして、ちよッとお清さん。と呼びかけた。

「今お父ッさんに言ひ落とした事があるから、あなたに話して頂きませう。其所いらまで、一緒に行ッてもいゝでせうね。」

「どんな事？。」

「それは今いひますが。」

「では入らッしやいな。」

つれ立ッて、馬場の向う角を曲ッた。跡を見送ッてゐた巡査、彼れも木の端竹の端ではない、よい心持はしなかッたらう。

「氣色が勝れぬやうだが、ひよッと、一件を仕損じたといふやうな事で、それで緣談も延さうといふのではないかな。私に氣の毒だなどと、隱し立てをして下さッては結句困りますぞ。」

急所を衝かれ、苦しい胸を抑へて、何と答のしやうもなかッたが、隱し通すことも出來ねば、思ひ定めて打ち出した。

「お察しの通り、やり損ッたです、仕方がありません。」

深澤はせきこんで、ぶる〳〵と顫へながら、にじり寄つた。正木は、見る目に堪へないで傍を向いたが、あとを言ひ繼ひる勇氣はない。

「構ひません、またやり直すまでゝす。なに、ちよいとした邪魔があッて、やり遂げられなかッたのです、御心配なさいますな。」

我れ知らず一時の氣休めを言つて除ける。斯うなッては、とてもお清を餌に、宇川を釣ッて、どうといふやうな事は、言ふに忍びない。また出直して明日にでもしやうと、姑息な思案を極めて、其の場を辭したのは、夜の八時頃でもあッたか。

馬場に出れば、招魂社内の常夜燈の赤いのが、豆ほどに光ッて、黑ずんだ空に、星影ぎら〳〵と、冷い風が頰を脅める。歸りかけはしたものゝ、考へれば、此のまゝ歸られる場合ではない。わざ〳〵來たのも、畢竟、今夜を過ごされないと思へばこそであッたに、空手で歸ッては、何の役にも立たない。是非とも深澤親子を說きつけて、今夜中に、宇川を此方のものにして置かねば、明日の日があぶない。一句、宇川の口が滑らうものなら、此の身は罪人だ、と思ふと胸は刳られるやうで、こりや斯うではならぬと、引ッかへす行手の、暗い中に、すッくと立ち塞がッた銅像は、大魔王の姿とも見える。門口まで來れば、深澤のうろ〳〵した顏が目につき、這入りかねて、また戻る。いや斯うしてゐる間も、宇川奴、もう同僚なり監督

た積りですから、其の上は、あなたでよいやうに引廻して下されば、年の行く中には、人樣並にはなりませう。」

話はいよ〳〵脇道に外れて、正木の胸は、さなきだに苦しい上に、また一つの難題を持ちこまれ、ほとゞ途方にくれる。たゞ否では濟まず、諾とは猶の事いはれぬ、切羽つまッた仕義と、當惑の色を、見て取る細君。

「もッともお氣に召さないとか、外に極ッた口でもあるといふのなら、決してもう、御遠慮には及びませんから、さう仰ッて下さいよ。」

「いえ、そんな譯は決してないので、實は豫てお噂もあり、私の方では内々心構へまでしてゐた程ですから、外に口なぞある筈はございませんが、たゞ事情がありますので、一二年延して頂きたいと思ふのです、どうも、今すぐといふ譯に行き兼ねます。」

「事情ッて、どんな事でございますか、おさしつかへがなければ、聞かしていたゞきますとねえ。」

とは表向で腹の中は、年頃の娘を持ッて、譯も聞かずに、おいそれと一年二年指を咬へて待ッて居られるものか、考へても見るがいゝ。何の、いやといふならそれでよし。もッと〳〵よい口は外に幾らもある。此方から親切に言ッてやれば、附け上ッて、一二年待ての、事情があるのと、そんな事の言はれた義理か、と細君大の不平だ。

「いや措きなさい、男といふものは、世間が廣いから、どんな苦しい義理のあるまいものでもない。うッかり口外の出來ぬ事は、いくらもある、その事は、また私が聞いて置きます。正木さんは今夜は泊りであッたな、あまり引き留めて、不慮の事などあッてはよくない。下へ行ッて、お茶でも出しかへて來なさい。」

細君の立つのを待ッて、主人は小膝をすゝめ、心配げに問ひかけた。

（六）

車で驅けつけし正木を、それと聞いて、二階からまろび落ちるやうに、出迎へた深澤。

「おゝ御苦勞でした、さあ〳〵、ずッと通ッて下さい。早速だが、樣子はどうですか、首尾を聞かせて下さい。」

「やりました。」

「やりましたか、それ聞いて、胸が落ちつきました。沙汰のない中は、立ッても居ても居られなかッたが、まあ〳〵、お蔭で息をついた。嘸氣骨が折れたらうね。」

涙を浮べて喜ぶ體の、氣の毒さに、正木は二の句も得つがぬ。兎角する内に、娘が茶を運ぶ、細君が菓子を運ぶ、毎時もの款待(もてなし)も、今日は殊更溫い風の身のまはり吹く思ひして、決心の鋒先が鈍(なま)る。成るたけ、深澤の顏、お淸の顏も見ぬやうにはしてゐれど、つい大事言ひ出す機(はづみ)を失ッて、もぢ〳〵してゐる正木、委細構はぬ主人の眼くばせを、細君は呑みこみて、

「淸ちやん、お前晩くなるといけませんから、御免蒙ッて行ッてお出で。」

と娘を出しやり、さて改めて、口を切ッた話は、豫て薄々香はされた、娘と正木との緣談一件であッた。

「それは今すぐに返事とも行くまいが、考へて見て下さい。」

と主人が話を結べば、妻君は引ッ取ッて、

「あれも年頃、あなただッてもう身をお固めなすッて早いといふではなし、私共では、あゝして病身なりしますれば、決まるものなら一日も早く決めたいと思ふのですよ。それは不肖者(ふつゝか)ではございますけれど、一通りはねえ、どうかかうか仕つけ

言ッたばかり、宇川はふりかへりもせず、足拍子荒らかに出て行く。後影見送ッて、ほんやりと氣拔のやうな正木、心づいてばたばたと駈け降り見れは、宇川はもう歸たッらしく、別に變ッた樣子もないので、また取ッて返して、ぐたりと椅子に身を投げかけ、腕叉いて、しばらくはじッと考へてゐる。夕日は長く窓掛の端よりさしこんで、死人のやうな正木の横顔を掠める、時は彼れ是れ四時でもあらう。

はかない一言の約束に、見事宇川の口を止め得やうとは正木も思はぬ、いつかは、悪名を噂の端に歌はれて、身はもう破滅したも同然だ。せめては、深澤一人の上なりとも取りとめて、自分は處刑も受けやう、此の地も去らう、絶體絶命の覺悟は、之れより外にない。けれどもまだ何となく未練が殘る、此所で、宇川一人の口さへ塞ぎおほすれば、事は穩に濟む、宇川さへ我が躬方であッたら、いッそ宇川が死んでしまッたら。

思うて此に至たッた時、正木は、悚然として身をすくめた。殺してしまふか、との妄念がほんの刹那、ちらりと影を見せるかと思ふと、ふと續いて浮んだ一つの工風は、彼奴を手なづける手段として、深澤と姻戚の關係をつけるのだ、清子を彼奴に呉れるのだ。さうしたらば、舅なり妻なりの身にかゝる大事、よもや口外はすまい。何だか惜しいやうな、心淋しいやうな、不憫でたまらぬやうな氣はすれど、今の事を思へば、身が飛び上るやうで、じッとしてはゐられぬ、そんな事を言ッてる場合ではない、ゑゝ是非がない。

「さうだ。」

と叫んで立ち上る正木、今さらのやうに、あはたゞしく其所等を取り形づけ降りて來るや否、ちよッとの間と、留守を廷丁に賴んで出て行ッた。

「はい。」

「わたしは犯罪人です。斯うなッた以上は、仕方がない。何を隱さう、今此の所長の印を、盜用しやうとした所です。此の上は、わたしの身を生すも殺すも、君のお手一つだ。併し、決して私が不義の財を貪ッてどうといふのではなく、深澤課長の身にかゝる大事が、救ひたさばッかりの、此の犯罪です。わたしは構はん、たゞ此所で事がばれては、課長は死ぬより外はない。人一人の命と思ッて、どうか、見ぬふりしては貰へまいか。無論、此の事は此の場かぎり、ふッつりと止める、此の通り認めた書類も裂きすてる、誓ッて此の後に迷惑はかけまいから、君もなさけだ、此の場限りにして下さい。わたしが一生の賴です、宇川君。」

「我輩は不正な事は嫌ひですなあ。」

「さうでもあらうが、其所を寬假して。」

「寬假するのしないのと、我が輩は、敢て告發者の位地には立ちますまい。」

「さうですか、では見逃して下さるか。」

「同僚の中から繩付が出たといッては、名譽でありませんからなあ。」

「それで安心した、君さへそのお言葉をたがへて下さらなければ、何時でも、此の身は退きます、必ず付等の面目にかゝるやうな事はしない。」

「退く退かぬは君の勝手ですな、そんな事には關係しません。我が輩は、通りかけ一寸寄ッたばかりですから、お先へ失敬します。」

夢のやうに耳に入ッて、あたりの靜けさといッたら、寂として、丸で深山にでも這入たッやうだ。

だしぬけに、簞笥の蔭できし／＼とペンの軋る音聞こえ、かたりと筆を投げすて、顏を上げて、きよろ／＼と見廻はすのは、當直書記の正木、管轄違の庶務課の一卓で、何か書物をしてゐたらしい。淋しけれど難のない顏に、三十を二ッ三ッは若く見せて、黑の斜綾のフロックコートしッくりと、おとなしい中に、深く思ひ惱んだ樣子が、顏色の蒼く、眼じりの釣れたのに見える。何所かそは／＼と、立ち上ッて、硝子越しに窓外を覗くかとすれば、席に戻ッて、隱しをさぐる。同じ事を二三度繰り返して、取り出したものを、何かと見れば、鍵だ。片手が傍の小簞笥にさはると、戸はすぐあいて、印箱から、所長の官印があらはれる。正木の顏には、見る／＼心火漲り眼うるみて、ぶる／＼と顫ふ手に、疾こく二三枚押しかゝッた時、突然、がちやりと戸に障る音して、身を入れたものがある。はッと思ひざま、手に持ッた印章投げ出して、見上げた正木の五體は、一時に硬ばッて、言句も忘れ果てゝゐる。

「正木君、御精が出ますな。」

「おゝ宇川君か。」

「そんなに驚かなくともよいでせう。お手傳を致します。」

つか／＼進みよッて、取り散した書類と、ひッくり返ッた印箱とに、じろ／＼目を注ぎながら、態と落ちついて問ひかける。

「何か、臨時に支拂命令でもありましたか。」

「宇川君。」

怨はありません。」

「それでは悪事の上塗りするやうでもあり、あなたに對して、いかにも濟まん。」

「此うなッては、濟むも濟まぬもありません、焦眉の急をすくふのが第一ですから、わたしが引き受けて、やります。先刻も、途々不圖考へたのです、明日は日曜なり、泊りなり、丁度都合がよいですから、うまくやり了せませう。しくじッたらそれまで。大丈夫です。さう極まれば、用意もありますから、今晩はお暇にしませう。明日の模様は、すぐお知らせ申します。」

「では幾重にも相濟まんが、やッて下さるか、諄くは何もいひませぬ。清や〳〵、正木さんがお立ちだよ、皆早く出て來ぬか。」

「もうお歸りですか、泊つて入らッしやればよいのに、大層急にねえ。どうなすッたのです。車を呼びにやりませうか、ぢや清ちやんお提燈ですよ。」

聲をうしろに、手丸提燈の影は、中坂の方へと曲ッてしまふ。

（五）

さしもに廣い役所の中、がらんとして、掃除番の廷丁が鼻唄も絶え、をり〳〵、宿直部屋のあたりに人氣するばかりの、今日日曜の午後、二階の廊下を右へ突當り二三十疊の一間には、彼所に二ッ、此所に三ッと、卓子が空しく書類簿冊を控へて、割據してゐる中に、こッち〳〵と動いてゐるものは、時計の振子ばかり、窓下の百日紅に、小鳥の鳴くのが一聲二聲、

ゐて。是ればかりは、妻子を持ッたものゝ情だ、正木さん笑うて下さるなよ。」

「お察し申します。」

と正木が眼をしばたゝけば、主人もたまらず、こらへ〳〵し一滴ほろりと落して、俯むいた。

「あなたに何か御思案はありませんか、善後策について。」

「どうも何ともしやうがないが、どうせ包み果せないものなら、所長はじめ重な人々だけに、此の事を打ち明けて、一か八か頼んで見たら、ひよッとしたら、穏便に取り計ッて呉れるかとも思ふが。」

「それです、わたしもさう思ッたのですが、あなたのお見込では、出來さうに思はれますか。」

「是れはあなたばかりへだが、實の所は、覺束なからうかと思はれる、あの所長といふ人物が、あれで中々機嫌買の上に、お氣に入りの監督書記とわたしとが、彼あいふ風になッてゐるから、八分までは、いかないものと覺悟してかゝるより外はない。是れまでもなく、打ち出して見やうとは幾度か思ッたが、それぱかりに氣おくれがして、其の内〳〵と、到頭今日まで切り詰めたのだからな。」

「外には、隱せる所まで隱して見るのが一策でせう。私が衝に當ッてゐるのを幸に、帳簿と書類を、三四ヶ所變更さへすれば、隱蔽し切れない事はありますまい。けれども、危險はやはり免れません。」

言つたまゝ、主客しばらくは默然としてゐたが、やゝあッて。

「所長の方がそんな譯ですなら、思ひ切ッて、此方のはうをやッて見ませう。やり損ッたら、どうもそれまでの運とあきらめるのですね。私ですか、構ひません、どうせあなたに拾はれた體だ、いけなかッたら、あなたと一ッ運命を分けるのに、

金で張り通す世間ほど、世の中に辛い苦しいものはない。御承知のやうに、わし等が盛りの頃は官吏といふものゝ値打が非常に高くて、殊に田舍などゝなると、わし等のやうなものでも、今の年俸千圓二千圓といふ人達と、大した違はない位のもので、交際向なども、それに準じて奢ッたものであッた。所が、近年世の中が移ッてからといふものは、中々三十圓や四十圓の月給では、昔の三分一ほどにも行かなくなッて、五人七人の家内を抱へては、暮し向だけでも、さう樂ではない所へ、とても今まで通りの華手な世間は持ち切れなくなる、といッて、今まで身をそれに持ちくづしてゐたものを、私は兎も角、女子供まで、急に木綿物を被ろ、車を止めろといふのも可哀さうだし、そこには女の意氣地といふものもあッて、儉約々々と内では言ッてゐても、内が不如意なだけ、猶世間へは其れが見せたくない。わしとても、あなた等に比べれば、時勢後れの人間で、今さら書物をかゝへて學校通ひも出來ず、上にも下にもよく言はれて、今日まで地位を保ち續けるには、若い人、腕で行く人の知らぬ苦勞、物入がある。是れを思ふと何につけても、人間は一荷に餘るものを背負ひ出すのが、一番苦勞の種だ。斯うして、つまりは世間倒ふれといふやうな譯で、一昨年の暮、苦しまぎれに、高利貸といふ奴に引つかゝつたのが、わしが失策の手始め、それからといふもの、月々の給料のあらましは、其の方へ引き去られて、それで、借金は減る所でなく、段々殖えて行く。深田に蹈みこんで、拔かうとすればするほどぬめり込むと同じ目に遭ッて、到頭大それた、官金に手をつけたが最期、ちよッとの間と思ッたのが手違うて、次手に〳〵と、何時か何百圓といふものを使ひすて、今さら驚いても、もがいても、手の出やうはなし。それらの心配に、近頃は夜の目もろく〳〵眠らなかッた揚句が、此の病氣、思うて見れば、何も自業自得と、わしはあきらめてゐます。たゞ可哀さうなのは妻子の行末だと思ふと、どうもたまらなくなッて、つい、どうかして尻の割れずに納まる工風はなからうか、生先の長い娘を、罪人の子にはしてやりたくないと、未練氣も出

「あなたが此の二三日見えなかッたのも、譯のあることゝ、私はもう始めから察してゐるが、頼といふのは其の事で。斯ういへばあなたの事だから、大抵は分からうが、年がひもない事をして、私は面目次第もない。まだ表面へ打ち出しては下さらぬか。」

「實は其の事で、わたしも二三日前に初めて氣がつきまして、ひよッと外々の間違ひではなからうかと、色々當つても見ましたが、誰れも知てッるものゝない様子が、どうも外ではないやうですから、直にも上らうと思ひましたが、お包みになッてるのを、私がさし出で奸いたやうでもよくなし、それかといッて、知ッた以上は、お目にかゝつて知らぬ振に過すも、心根がさもしいやうで、どうか内々に事が納まッたらと、そればかりに、やきもきしまして。」

「誠に有りがたい、悪人のわしを、それ程思ッて下さるかと思へば、涙がこぼれる。あなたがゐなかッたら、私は疾うに婆婆の人間ではなかッた。それにつけても、此の身は、餘命があッた所で、どうせ滿足な終りは見られず、もう行先長くもあるまいし、こう體が弱ッては、とても劇務に堪へられまいから、此の際辭職して退いて、跡にあなたを据ゑるやう、内意だけ今朝所長の所へ、手紙で言ッてやりました。尤も之れは、決して私が恩を賣らうの、跡を引かうのといふ、卑しい了簡ではなく、息ある内に、あなたへ遺して置く、ほんの松の葉といふもの、どうかそれに氣兼はして下さるな。」

「お志は重々身に沁みて受けます、今のわたしの身は、つまりあなたに仕立て上げて戴いたも同然、わたしは親とも思ッてゐるますれば………。」

「それはお互のことよ。それよりか、私が今日までの懺悔話ともいふやうなものを、言ひ譯とはいはぬ、たゞ此のまゝ持ッて土の中へ這入るのが殘念だから、あなたにだけ聞いて置いて貰ひたい。是れは世帶を持つものゝ皆な言ふ事だが、凡そ、

めて、なにがしの奥様、それがしの孃樣と、競馬場見物煙火見物の目をいつも此所に集める深澤の二階座敷には、折しも霜枯時のあたり淋しい中を、障子の火影あか／＼と、二三人の影法師が仰りつ屈みつして見える。其の外見賑やかな中はやッぱり憂き數々の一座、主人の深澤賢爾に、細君に、娘の清子、一家總出で欵待す客は、餘人でない正木だ。主人は病餘の體。

「よく來て下さッた、三四日見えないので、折角案じてゐました。ふん、ふん、嘸忙しからうて、お察し申すが、そこをよいやうに賴みますぞ。此の樣子では、私はとても春までは舊の體になれさうにもない。」

「ちよいとした事からねえ、飛んだ事になッて、正木さんなぞにも御迷惑をかけて。何をいふにも此の寒空で、一ッは、もうそろ／＼年のせいでもございませうからね。何分ねえ、あとの所をよろしくお賴申します。ひどく忙しいとねえ。無理はありません。なに夜分だッて構ひませんから、折々は來て下さいよ。家内中が正木さんを力にしてゐるのですからね。」

「清や、御飯は此所がよいぞ、おさんにさう言ひなさい。今夜は半退けであッたな、ゆッくり話して行くことさ、何なら泊ッて行ッたらどうだ、少ししんみりと話したい事もあるから。明日が當直だと、それは／＼。」

お清の給仕で、正木は膳を濟まし、深澤も、久しぶりで飯がうまいと、二椀ばかりかへた。やがて、

「少し要談があるから、お前等は下にゐて呉れ、用があれば手を拍ちます。」

と主人が言葉に、細君お清は引き下る。あとは二人さしむかひ、互に、しばし氣を計りかねてゐる。

「今夜あなたを迎にあげたのは、些と賴みがあッての事、聽いて下されうか。」

先づ深澤が口を開くに、正木は、期してゐた事と驚かない。

「それはもう、身に叶ひました事なら、何なりと。」

「一應お歸りなさいますの？。無駄ぢやありませんか、ずッと入ッしやればいゝことに。」

「是れから歸ッて、夕飯でもすめて出ます。」

「お夕飯なんぞは何處にでもありますわ。そんな事云つて、また來まいと思ッて、ずるござんすよ。何かお氣にさはる事があるのですか。此の前わたしが何か言ッて？。うそ〳〵、何か思ッてらッしやるに違ひない、お父さまも何だか大變心配してゐました。わたし？。平生は、もッとずッと早うございますの。丁度あなたなんぞと同じ頃ですよ。ですからね………止さう止さう。」

「おや、をかしい。同じ頃ならどうしたといふのですか、言ッて聞かせて下さい。」

「ですからね、昨日と一昨日と、此方の方へまはッて見ましたの、あなたに逢ッたら、綱ッ引でつれて歸らうと思ッて、ほほゝ。それからあの、何とか言ひましたッけね、髯の生へた、顔の外ッた、いつも面白い事ばかり言ふ方、あの方なぞにばかり逢ひました。宇川さんは何だかいやな方ですことね。」

「それを聞いたら、宇川は泣くでせう。併し女といふものは裏をいふさうだから、分かりませんね。」

「憎らしい事ね。あら、もう一ッ橋ですよ。では、ずッと入らして下すッて？。さう。」

つれだち行く二人の後影、いつか融け合ひて、黑いもの一つ、牛が淵公園を富士見町の方へ曲ッて見えなくな縁た。

（四）

招魂社の馬場を隔てゝ、によきと黑板壁の上に半身の恰好は惡けれど、明け放せば、三間折り廻はしの縁に、絨氈敷きつ

るより外に手段はないか。預け入れの部の合はない所を引直して、告知書の不都合なのを造りかへる、いよ〳〵官文書僞造とまでやッてのけるか。情ないことになッたものだ。いッそ所長に打ち明けやうか、所長と深澤とは、別懇の間柄でもあれば、何とか、救濟策のありさうなもの、此の方が安全らしくもある。が、萬一いけなかッた日には、大事だ、深澤は私の手で罪人になり、是迄の心づくしも水の泡、怨み憎みは、此の身ばかりにかゝッて來る。

考へるほど迷ふので、正木はあぐみ果てゝ、胸を輕く叩きながら、あゝと覺えず深い息を漏らせば、其の聲に、ふと此方をふり向いた十七八の女、たそがれ時の薄あかりに、瓜核顏の、色の白いと、眉の鮮やかなとが、はッきり目だちて、流行形吾妻コートの、襟あきゆたかに、黑のおとなしいのを、襦袢の襟の藤紫に照り榮えさせ、片手には卷束の葉蘭と南天とを一束にして持ッたるが、歩をゆるめて、聲をかけた。

「正木さん。」

男は思ひかけず立ちどまりて、「お清さんですか、びッくりした。今時分何方へ？。」

「今歸りがけ。先生の所からね、お友達へ廻ッたものですから、こんなに遲くなりましたの。あなた今お退け？。大變遲ございますのねえ。お父さまの容態は、あんまり變りません。此の節は、些ッとも入らッしやらなくてねえ、お父さまが、幾度お迎ひを上げても、何時もお退けが遲いかしてお留守だから、今日は、夜分でも是非入らして下さるやうにと、さう申してをりました、お手紙を上げた筈でございますよ。」

「さうですか。私も上らう〳〵と思ッてゐても、此の通り晩く歸るものですから、つい二三日御無沙汰しました それでは、今夜は是非伺ひますよろしく言ッて置いて下さい。」

に、義理人情の切ない事は幾らもあるからねえ。」

「同感〳〵、取り別け女の子に嫌はれた時なぞ、此の感深しですね。」

と桃川が話を外に持ッて行けば、沈み勝ちの一座も、どうかかうか笑聲に納まッて、挨拶をきッかけに、桃川は手水に立つ、石倉は、意地ぎたなく、冷え切ッた殘酒を嘗めては、鍋をぢり〳〵いはせてゐる。正木が門を出た頃は、お城の松に、糸のやうな弦月が光を放ちそめてゐた。

（三）

內攻した酒の、醒め際の心地わるさは、一しほで、ぶら〳〵歸る途すがらも、正木が胸の中は、煮え返るやうだ。自分が、あれ程祕密にしてゐる大事の、漏れかゝッたのが、第一不思議でならない。先刻の石倉が口占では、其れを傳へたのは屬僚の宇川で餘程立ち入ッた事まで嗅ぎ知ッてゐるらしい。さうであッた日には、もう愚圖々々しては居られぬ。一刻も早く深澤の罪跡を隱し終ほせるか、さなくば、斷然我が手より打ち出して、善後策を所長にでも謀るか、二ッ一ッに極めなくては、恩人たる深澤は、病苦の中に繩目の耻を受けて、今のまゝでは、空しく獄中の鬼ともなり兼ねまい。使ひ込んだ金高といッても、取り集めたら彼れ是れ千圓近し、第一帳簿の上のつくろひやうが拙だから、少し念入れて檢べれば、直ぐ破綻が見える。年甲斐もなく、何百圓といふ金を何に使ッたか。さう苦しい內輪とも見えなかッたが、今で思へば、華手過ぎた暮らし向きからでゞもあッたらう。あの人も、もう五十の阪を越してゐれば、今此所でみじめな末を見せるのは、如何にも忍びない。殊に十年來の恩を被てゐるわたしで見れば、此の場合こそ、身にかへても庇ふのが義理。あゝ、どうしても隱蔽す

調子のあまり眞面目なので、石倉も興醒め顏に、例の、眼をましつかせてゐる。桃川は座取り持ちの側にまはる。

「まづ一杯、熱い所をやり給へ、酒が理に落ちる。兎角野郎ばかりだと、是れで弱る て。石倉君たしなめ。」

「僕は何時でも止しますが、では、此の話は是れで切り上げるか。」

「念の爲だから、本當なら今の事だけ聞いて置きたいものですね。私の一身上にも關するから、聞かせて下さい。」

「詳しい事は知らないですが、何でも、深澤課長が、事務上に手落のあッたのを、あなたが引き受けて、圓滑に所分しやうと、苦しんで居られるといふ噂です。併し之れは極内々ださうですから、其のつもりに願ひたいですな。」

「それだけですか。」

「ゑゝ。そんなに向になるほどの事でもありますまい。」

「それで、先刻の關係がどうとやらいふのは?。」

「それは宇川の推測でせう。つまり其の關係があるから、君が一層骨を折られると言ふやうな譯で。」

「つまらない事。」

言ッてしばし考へ込んだが、言葉を改めて、

「是れは別の話で、わたしは、世間の誤解といふもの程、世の中に恐いものはないと思ふが、ねえ桃川君。故人を引き合に出すまでもなく、誤解の毒に中ッて、一生恨を呑んで終はる例は、現に我々の見てゐる世間に幾らもある。だから、わたしは石倉君に願ッて置くが、是れから後、わたしの身の上に、先ッきの話のやうな事件が萬一持ち上りでもしたら、たゞ色戀のと囃し立てるばかりでなく、そこには、色々事情のある身の上を推察して、十分酌量減刑が施して貰ひたい。色戀の外

「勝手にしたまへ。」

「まだありますぞ、同人の說によると、其の關係の爲め、正木君の職務上に、苦心慘憺の事件が、將に持ち上らんとしてゐる。是れもすッかり證據が擧ッてゐるのです、どうです、ますく驚きましたらう。」

正木は此の一言にぎよッとして、覺えず目を瞠り、半身を起したが、忽ち心づいてまた肱枕に平氣を裝うてゐる。斯うなると、醉も醒めて、酒は面白くなくなる、胸には動悸が高まッて來る。

「そんな馬鹿な。宇川がそんな事をいふのは、怪しからんね。」

我れ知らず聲に力がはいッたので、二人の目は、一齊に正木の面上に注いだ。併し石倉は飽迄惡る氣はない。

「などゝ眞面目に隱し立てをしなくてもよいでせう。今さら包んだッて頭かくして尻かくさずで何の役にも立ちません、此方で取調が濟んでるのだから。」

「數罪倶發は百條を適用するね。」

「石倉君は、わたしが色情の爲に、何か職務上不都合な事でもしたといふのですか。」

「不都合でもないでせう。が、何か苦心があるらしいといふことですな。」

「それを聞かうではありませんか。」

「それは言はれない。」

正木は、いつか起き直ッた氣色が只でない。石倉はのん氣で、

「言はれない譯はない、是非聞きたいものです。」

『早速控訴の申立は恐れるが、全體、事實はどうなのだ。深澤令孃と正木馨君。それから？。一向に要領を得ないね。これは一ッ正木君に說明を願ひたいものですな、正木君どうでせう。』

時々眼をあいてはまた閉ぢて、默聽してゐた正木は、口のほとりに微笑を見せて、

『何の事だか、私にも分かりません。石倉君が夢でも見たのではないか。』

『そりやいかん、宇川といふ證人があります、證人が。』

『宇川は何といひました。』

『君と齊子令孃との間にですな、或る關係の成り立ッてる事を。』

言ひ切ッて一杯ぐッと干し、目をまし〳〵と覗き込みながら、肱を張ッて返答如何にと待ち構へてゐる。傍から油をさすのは桃川。

『面白くなッて來た、正木君たるもの、默して已む譯には行きますまい。』

『世間は物ずきですな、そんな小さい事を仰々しく噂して。よしそれが本當であッた所が、何でもないぢやないか。』

『是れは御挨拶だ。が、併しいよ〳〵本當となると、ねえ石倉君、たゞぢやあ濟まされない。』

『正木君の言葉が甚だ曖昧です。事實か否やを、先づ確答して貰ッた上でなくては。』

『まるで對決だ、そんな事は確答の限りにあらずさ。』

『いよ〳〵怪しくなッて來た。』

『無いと斷言出來ない以上は、事實と認めていゝですな。』

「石倉君、もう初めたのか、早いのには驚くね。」
「ゑゝ、今燗見をやッたのです。さあどうぞお初めなすッて。」
「お初めなすッてはいゝね。さあ正木君。」
と嫌がる正木を押へて、段々醉の廻ッて來る二人が悪強ひに、是れから凡そ小一時間も酒の香嗅がされ、元來が量の淺い上に空腹の利目するどく、初めは、心と心で消し／＼してゐた醉の、いつか抑へ切れずなッて、ごろりと横になれば、石倉といふ履書記が、舌なめずりして、
「僕は一言を正木會計課長代理に呈するが、宇川半次なるものゝ證言によると、少しく怪しい廉がある。はゝゝゝ、そんなに驚かなくともいゝです。ちやあんと口供まで取ッてあるから、ゑらいでせう。方様まゐる深譯清子拜と來るから、有りがたい。」
「おい／＼石倉君、何をひとりで饒舌ッてるのだ、わたしには些ッとも分からない、もッと通じるやうに願ひたいね。」
「即ちそこ、そこに曰はくがあるのだで。桃川さん知ッてるでせう、深澤清子といふ婦人を。それが即ち、そこに曰はくがあるのだて。ねえ分かッたでせう。」
「ちッとも分らないぢやないか。」
「ちやあんと分ッてます、ちやあんと。」
「君のやうに、さう醉ッ拂ッても困るよ。」
「いや、それはいかん。僕は少しも醉ッてはゐない。醉漢と認められては不服です。」

「馬鹿な事。」

「ないといひたまふか。わたしは採用しないね、情況によッて認定裁判を下すね、君が正木の祕密々々と氣にするのも、畢竟………。」

「おい君、もッと小さい聲をしないか。」

「おッと心得た、此所は何所だ。」

と振り向く途端、向うから女子職業學校の生徒らしいのが、二三人澄あして來るので、噂は何時かそれに移ッた。

（二）

「正木君如何です。深澤さんの御病氣は、其の後どんな風ですか、どうもよくないと、それは困りましたね。あなたまでが飛んだ災難で、嘸お忙しいでせう。夜業ですか。」

會計課の入口で、今歸らうとする正木を呼びとめたのは、當直書記の桃川といふ男、正木は氣ぜきの體で、無愛想だ。

「なに、さうでもありません、もう歸らうと思ッた所で。」

「あ、さうですか。今日は半どんですから、どうです、下で一杯やらうぢやありませんか。今夜は夜業だらうと思ッて石倉と仕度した所で、あなたを迎に來た譯です。いゝでせう、おつき合なさい。なあにそんな事は何時でも出來ますさ、別にお差しつかへがなくば、是非入らッしやい、お出で下さい。」

きッぱりとも否みかねて、進まぬながらについて行けば、宿直部屋には、早や雞鍋の香がぷん〳〵と高い。

殿でもあらうか、何か話しながら行く。

「正木の今日此頃の様子は、どうも變だ、何か事があるに違ない。何時だッて人より長く居殘なんぞした事のない癖に、課長代理を命ぜられて、急に働きぶりの見て呉れもをかしいが、第一我輩等を邪魔にする風のあるのが、怪しいぢやないか。跡に殘ッて何をする積りか知らん。」

「正木にそんな祕密があるものかね、自分に責任があると思ッて、念入りにやるのだらう。結構な事さ、お互に大助かりで。是れでもッて、點燈頃までも、例年の通りやられやうものなら、折角の半どんを玉なしにした上、惡くすると、明日まで引ッ張り出されて、辨當料位で追ッ拂はれまいとも限らないからね。いゝ面な、そんな事を言ッてるから困るよ、先きなぞも、餘計な眞似をするものだから、厭味を言はれたりさ、わたしは側であぶひやしてゐた。」

「君はあまり物事を無意味に解釋するからいかん。祕密の後には罪惡あり、我が輩は、國家の爲に祕密を打破してやるのだ。」

「恐れ入ッた。けれども君は知るまい、正木に大々祕密のあるのを、はゝゝ祕密といへば、すぐ君の眼が三角形になるからをかしい。何かッて、それは容易に口外することは出來ないがね、併し君にだけ言ッてもよい。いや冗談なしに、正木はあれで、中々の艶福家だが、君知ッてるか。」

「そんな事だらうと思ッた。課長の所のお清さんの一件だらう。」

「や、これは驚いた、拔驅して族籍姓名まで洗ッて來たのは驚いた。早くから知ッてると、へえ、して見ると、察する所宇川氏なども、怪しくなくはない方で。」

（一）

今年ももう暮に間がない。世間の何となう忙がしげに見えるも、氣の爲かして日脚までが一層縮まッたやうで、朝は九時から晩の四時まで、是れに、小石川から丸の内までてく／＼あるきの往き還りを見積もッて、一日ざッと九時間をさし引けば、日の内を我が物と、欠伸して、手足伸ばして、休む間は殆どない、殆ど所でなく全く無い此の頃の事とて、七日目七日目に一日づゝ、例の日曜といふ奴が、無上に有り難く、貴く、取り別け明日と云ふ今日の土曜が、一倍樂しい。丁度、日の出る前に東が白むで、段だら雲の端が紫に光ッて來る、はら／＼と雞の鳴く音が遠方に聞こえて、何處か早や車井戸を繰る音がきい／＼するといふ、一日は是れからの朝景色の快いのと同じ道理だ。明日は歌舞伎座見物といふ前夜、

「みよや、お前寢過ごすといけないから、目醒ましをかゝるだけかけて、枕元にお置きよ。屹度またあたいに起こされるのだよ、起きなからうものなら、蒲團を引ッぱいでやるから」と娘子の終夜寢つかれぬほどうれしいのも土曜の晩で、「柳橋にしやうか、いッそ少し遠出と洒落て見やうか、いや此の寒さに汽車は恐れる」と縣連が謀叛をたくらむも土曜の晩、一週に一度の鮪のお刺身が膳の向について、細君の酌に、一合半酒の醉心地とろりと、目の薄い耳の遠いお母さんを留守番に、是れから若竹へでも行かうといふのも土曜の晩、凡そ勤める身に取ッては、半どんほど愉快な日は無からう。

今日が恰かもそれで、こゝ麹町の某官署の三階の大時計が、さッき二時を打ッた頃には、早く表門は締まつてゐた。居殘りの小役人までが、一人退き、二人退いて、大抵は出拂ッたらしい。日はお濠の築地垣を斜に染めて、水紋ちろ／＼と、枯柳に風ゆるく、紫袱紗の辨當包小腋にかい込んだ人影も、あらまし絶えた頃、滑り門より出で來た二人連は、恐らく今日の

月暈日暈

證すべり

後幾年、玉置の妙心とて、初めは惜みし黑髮も、執着の我れに耻ぢてぷつりと切り捨て、處の一名物と今に殘れど、健一のみは、たより傳ふるものもなければ、名さへ思ひ出す人のありや無しや。

「お立ちなさるあなたは善いけれど、わたしが後で淋しい目を見るのかと思や………。」

「遠のいて居る内には紛れませう。なあに、お互に了簡さへ極まッて來れば、また逢ふ時節もありますさ。」

「それもさうですねえ。」

「こゝ二三年です、是れを機に私は最一あがきやッて立派に歸ッて來ますよ。」

「ぢや御機嫌よく行ッて入らッしやい。」

「あなたがさう言ッて下されば、私も氣が勇む、今度こそはやりますよ。」

二人は立ちあがりぬ。男の身仕度する間に、

「おや晴れたらしい。」

と雨戸を一枚引けば、さと吹き入る風襟元にしみて、見ゆる限りばあッと大明かりする空に、十重二十重と立ちこめし雲剝けて、薄綿を展べし如く、何所ともなき月影に、霽際の雪ちら〳〵と天上の花を搖り落すに似たり。

「あゝいゝ景色だ。では此のまゝ行きませう。」

「屹度ね、歸ッて來て下さいよ。」

待たるればとて、我れより出づるくらぶ山、夢の跡追うて歸へる日は、戀に輝く今日の身ならず。健一は後髮引かるゝ思ひを傘に隱して、廻しの袖うちはらひ、小走りに垣の外に出でぬ。あとには雪また一しきり、風たてば、笹に音し、雲斷るれば月影透きて、夜すがら霽れみ霽れずみの胸騷がしく、庭に忍び男の跡も埋もれ果てぬ。

・　・　・　・　・　・　・

振り上げし顔には決心の色を示して、
「私はまた發心しました。今といふ今、ふッつりと思ひ切りました。是れまでの事は、あれ限り水に流して下さい。どう考へても正氣では出來ないことゝ、何だが空恐ろしい氣がして來た。私實は、都合によッたら、復た出京して見やうかと思ッてたのですから、いッそ是れを幸に、當分お目にかゝらないかも知れません。斯うしてゐれば居るだけ苦しくもあり、煩惱の種ですから、是れきりお別かれします。あなたはどうかお達者で………。」
「あら厭ですよ、そんなだしぬけな事をいッて、冗談ですか。ぢや何か妾の言ッた事がお氣に障ッて?。いゝえそれを聞かない中は立たせません。」
「氣に障るの腹がたつのと、そんな浮いた話ではなく、どうも此所は思ひ切らなけりや、末始終が立ちさうもない。やッぱり思ひ切りました。どうぞ其れは止して下さい。折角澄みかけた血を攪きまぜる道理で、それではあなただッて濟みますまい。思ひ立ッては、何だか斯うしてる間も睨まれてるやうで、私はぞッとします。」
言はれて不圖見れば、うつ向に腕を組む健一の、亡き人が着馴れし羽織をそのまゝに引きかけたる、何所にか在りし日の姿目に着くやうにて、覺えずぎよッとなるを、健一は氣もつかず、
「私は思案を極めました、是非尚一度出て見やうとおもひますから、是れを當分の別かれにして下さい。」
早や立ちかゝれば、
「何だか夢見たやうで、何うしてよいか、わたしには分からない。では是非お立ちなさるの?、さう。」
女のしほれたるが哀れと男も立ちかねてためらへば、

意外といふ綾子の面持を、尻目にかけて、

「何だか氣まづくなッて來ましたからさ。」

「わたしも先から急に厭あな氣持がしますよ。」

「たんと厭がッて下さい。」

「あら厭がるなんて、そんな事、たゞ變にいやな、氣持になッて來たといふのですよ。健さんだッてさうのやうぢやありませんか。」

言はれて見れば健一も同じ心なるに、冷め行く血の氣を盛りかへさんと焦燥(あせ)れば焦燥るほど猶氣まづく、今までの事を思へば、氣恥かしくもあり、殘惜しくもあり、たゞむしやくしやと、僻みも喰ッてかゝりもして見たきを、じッとこらへて口を噤(つぐ)みぬ。

綾子も所在なさに、火鉢の火を掻き起こし、無言のまゝ眺め居れば、それよ、まだ二人が心の花の香る頃は、健一此の近村に聞こえし美男にて、取り別け顔體の肉着の程よさ、女にもして見まほしきを、痩せ過ぎたるが口惜き我れは、羨ましく思ひしが、今は倒に此の身を羨まるゝまでの窶れやう。火鉢にかざす手の、見れば感高まりて顫へたるが膏氣(あぶらけ)槁れて、痩せの目につくも悲し。

「あなた寒いでせう、是れをお羽折んなさいな。」

言ひつゝ前綵の書生羽織を取り出して、健一の背にふはと被せやれば、

「構ッて下さるな。」

と覺えずたじろぐを、踏み止まりて、見まはせば人もなし。ほッと安堵の胸を撫でながら座にかへり、

「何の事。」

と笑ひは造れど動悸はなほ收まらず、唇の色かはりて見ゆ。綾子も氣味わるく、

「鼠でも騷いだのか知ら。」

とばかりつぎほなければ、席はおのづと白けたり。

「此のランプの暗いこと。」

綾子が眞白の腕を伸べて捩金廻す時、窓の外に、復さら〳〵と竹の葉に雪の滑る音聞えて、二人は目と目を見あはせぬ。

「やッぱり降ッてると見えますね、大分積もッたらしい。」

「さうですね。」

「更けたかして、ひどく冷えて來たぢやありませんか。」

と男は一ゆすりして、火鉢の上に半身をつき出すに、二人の顏の摺れ合ふかとする間、女は外方に體をひねりて、時計に目をつけ、

「あら、もう十二時ですよ。」

答も膠なく、其のまゝ横顏見せて物案じの氣色を、じッと見つむる健一の眼の中、いつしか凄味を帶びたり。

「では歸りませうか、お邪魔をすると濟まないから。」

「何故？、健さん。」

うが何といはれうが些とも厭ひません。日の照る限り、あなた一人は庇うて見せます、命かけての戀です、綾さん、何うして下さる。」

總身の血躍るをじッと抑へて覗き込めば、生際見せて下向ける綾子が顏には、今までの愁の色いつしか消えて、肉着おとなしき頰のあたり、高まりし血潮に、二十三の若後家が、盛りの色香とろけんばかり、細めし眼のうち潤を帶びて輝きぬ。健一は覺えず身をすり寄せ、火箸いぢくる手を、じッと捉れば、捉らるゝまゝに綾子も身を寄せぬ。男は夢ごゝろ。

「是れを聽いて貰へば、私はもう死んでも惜しくはない。」

「厭ですわ、緣起でもない。東京ではこの靑茶の節紬が此の頃はやりますッてね、不斷着には善ござんすこと、健さんにもよく似合ッて。」

「似合ひますか、何んな風に？。」

「ほゝ何んな風に似合ふッて、そんな事がありますか。」

「ありますとも、斯んな風にですか。」

と肩に手をかけ引きよせて、熱き唇に、燃ゆる思ひや移すと見る時、不意を打ッて、ばさりと物の氣合、はッと許り、二人は頭上より冷水を浴びせられし如く、飛び除いて覺えず座を正しぬ。同時、四ッの眸はあやしく輝きて、人や來ると襖の方を見守れど、續く音もなし。健一衝と立ちて襖を引きあくれば、ぱッと射す火影あざやかに、廊下を隔てし大津壁にうつる影法師。

「や。」

だしぬけの言葉に、綾子は目を見張りぬ。

「何？。」

「くどいけれど、あなたは眞實私を思ッて下さるか。先程言ッた事はかはりますまいね。」

「何故？。」

「何故ッて、それを聞いた上でなくては、私の願は言へないから。」

「それは、あれ程言ッて上げたぢやありませんか。」

「では屹度ですね綾さん。」

「さう言はれると、わたしや返事のしやうがないけれど。いゝぢやありませんか、そんなに言はなくても。」

「ゑ？。」

「健さんはひどいこと、他を疑ぐッて、わざとそんな事をいッて困らせやうと。」

「そんな譯がありますものか、氣に障ッたら堪忍して下さい。わたしの願といふのは、無理かは知らないが、それ程まで濟まない〳〵と思ッてるあなたの心を、私に貰ひたいのです。斯う言ッたばかりでは分かるまいけれど、とても思ッて下さるほどなら、私を玉置君に見かへて下さい。位牌へ濟まないのも、世間の口の端の恐ろしいのも、一時耳をふさいでゐて下さればそれで濟む。思ひ切ッて私に浮名をたてゝ下さい。え、綾さん。私の願といふのは其れです。昔こひしいが眞實なら、それだけでも、佛の前はもう無垢清淨では通されぬ二人の中ですもの。玉置君には濟まないけれど、言はゞ先戀の私が奪られたものを奪りかへすも同じこと、辛いのはそりや覺悟の前です。あなたさへ辛抱して下されば、私の身はたとへ何となら

血を一たらしづゝ火にせうよりは、一と思ひに煽りたてゝ、燃える所までさッさと燃やした方が、どれ程さッぱりするか知れない。義理だの世間だのとうるさい思ひは、初から知らない、見ない、いッそそんな事のない身であッたら、此の世はどれ程樂しからうか、考へると實にたまらない。歸ッて四月といふもの、私の嬉しい事悲しい事、あなたの外に無かッたのは、茂一が話しにも大抵は分かりませう。斯うと打ちあけるまでには、どれ程心と心でもがいたか、察して下さい。」

「それは察してをります、お心は飛び立つほどうれしいけれど………。わたしや熟々昔が戀しい。」

「あなたも泣いて下さるか、つらい事だらけの年月、それは私も同し事ですもの、泣かせに歸り泣きに歸るほどなら、二度と故郷へ足は向けなかッたらうに、何所までうき世といふものか。是れではあちらに居て、淋しい冷い石ころの中に寢起する思はしても、まだ〳〵其の方が勝でした。私は思ひ切ッて復た出やうかとも思ひます。」

「そんな心細い事。心と心でさへ添ッてたら、朝夕お顏は見られるし、其の内には時節も來やうと思ひますわ。ねえ健さん、さう思案して下さいな。」

「だめです。それがなる程なら、此の苦しみはしません。それにあなただッて、心ではそれほど思ッて下さるからは、體ばかりの操だては何の益にも立つまいぢやありませんか。」

「だッてしやうが無いのですもの。」

怨ずるやうにじッと男の顏を見つむれば、健一は下に向きしまゝ溜息ふかく言葉なし。窓前の女竹にさら〳〵と雪の葉滑りするが聞こゆ。

「私はあなたに願がある。」

頬かぶり取ッての挨拶そのまゝ、右は田圃道、左は郷へと、何氣なく別れはしたれど、己れの知らざりし疵を見つけて刳られし如く、健一はしばし胸を抑へて立ちどまりぬ。朋友が非業の死に、一たびは痛く驚きもしたれど、其の刹那、むらむらと燃えかへる戀の初一念は消しがたく、はッと思ふ顔に、ほてりを覺えて、一脈の春風枯野を吹くかとすれば、それも瞬く間の照りかへし跡なく、やがては闇うなる日と共に、人の眉目また曇りて、何時しか夕靄の中に姿は見えず。

下

風ゆるみて、今朝より氣色ばみたる雪空しめやかに降り出しぬ。篩ひ落すやうな粉雪、見る〳〵飛石、葉蘭、手水鉢の緣、建仁寺の結ひ目より白う置きそむれば、饑えし雀の二羽三羽、嬉しげに友呼びちらして下り來るも哀れなり。いつしか雪明窓に殘りて、世間もやう〳〵暮れ行き埋もれ行くに、一間の中ことりとも音せず、桐胴の火桶を中に差しむかひたる男女あり。互に言葉絶えて、あたりも寂と、さしうつむける横顔に丸火屋の火影蒼く、刹那を刻む針の音のみ忙はし。男は顔を上げて低めし聲に力を入れ、

「もう〳〵其れを言ふのは休めて下さい、亡くなッた人に濟まないとは私だッて思ッてゐます。玉置君には實に申譯ないけれど、思ひこんだのが私の因果か、此の身になると、其の申譯ないのが結句忘れられない種で、此の戀かなはぬ内は、義理も世間も味方では無いのです。ゑゝいッそ、思うて思うて思ひ死に死なうとまゝと、一向になる側から、いや〳〵道でないこと死んだ朋友に濟まない、弗に思ひ切らう、と生中了簡の出るだけ、また其の側からはあなたの姿がありく浮ぶ。玉置君の恐ろしい眼して不義者不信實者と怨ずる顔も見える。燃えかゝッた火を揉み消しては復た吹きつけるやうに、此の胸の

「金神に祟ッて、氣が違うたといふ事でござります。此の春の藏普請が惡るかッたさうでござりますな。」

「あの人は、平生から氣が小さ過ぎるとは思ッて居たが、併し氣の違ふまでには、何か入り組んだ仔細がなくては。」

「これはあなたまでゞござりますが、實はお後室に責め殺されたのだと言ひますぜ。あのお後室は、隨分意地の惡い方であッたと言ひますな。参旦那は體は弱し、年中病みつゞけてござるので、婚にはしたものゝ、是れでは家が治まらんと、散々揩ッた揉んだの揚句、到頭離緣沙汰になッて、参旦那はそれが口惜しいとて、首を括ッたのださうでござります。お後室も其れからぶら〳〵病みついて、四十九日經たん内に跡を追うてゞござりました。やれお後室は怨靈に取り殺されたの何のと言ふものもありますが、幽靈といふものは眞實にあるので無いといふから嘘でござりませう。」

「氣の毒な事だなあ。さうすると、跡には御新造ひとりッきりかね。氣の毒なものだ。」

「小旦那が、はじめ彼所へ貰はれてお出でなさるといふ話でござりましたけな。」

「馬鹿を言ッてる。」

「隱しなさッても知ッてをりまさあ。参旦那と張り合うたのを、お後室が向うになッて、小旦那は東京へお出でなさる。」

「ふッ、昔はそんな事もあッたかなあ。饒舌ッちや困るよ。村中知ッてると、弱ッたな。今度も丁度わるい時に歸ッて來て、人が何う斯う言はなければ善いがね。」

「屹度言ひますぜ、早瀬の小旦那が跡釜を覘ひに來たなんて。第一私なんぞが疑がひまさ。」

「や、此奴が〳〵、油斷させて欺し討なんぞはひどいよ。」

「はゝゝ、今夜は何所へ落着きなさる、東西館でござりますか。麾下の旦那の宅、さうでござりますか。」

「早瀨の小旦那ではござりませんか。」
猿股といふ者を穿きて畚負ひたる男の、野良がへりと見ゆるが不思議げに健一の顏をのぞき込めば、
「何方だッけか、ついお見それ申して。」
「麓の茂一でござりますさあ。」
「あ、さう〳〵、聲で思ひ出すよ、若い衆になッちやッて、すッかり見違へたね。はゝさうだらう、お互に其の筈さ、丁度八年になるからねえ。私の事?、今東京から歸りがけさ、なに別に事といふでもないが、それでは一緒に行かうかな。」
つれ立ちて問ひつ語りつ行けば、言葉は短けれど、不盡の意味に、十年の事あり〳〵と、變れるは人の身の上にて、彼所の石橋、此所の谷陰昔のまゝに懷しさは一足づゝ加はりゆく。
「えゝ、學校へも這入ッたり、この三四年は、役人にもなる、教師にもなる、商買もして試たり、いろんな事をやッたがね、だめ〳〵。全體東京といふ所が、非常にゑらい人か、非常につまらん人でなくては、並出來の人間の行く所ではないよ。君なぞ此方で立派にやッて行ける人が、何を好奇に、苦勞しに出ることがあるものか。さう〳〵、一頃飛び出すことがはやッたけな。ふうむ、いろんな人が、出たり這入ッたりしたものだね。他に變はッた事はないかね。」
「變ッた事もござりませんが、玉置の參旦那が、此の間中首を括ッて死になさりました。」
「あの玉置の參さんが?。」
「お後室も續いて死になさりまして、今日あたり葬式でござりませう。」
「ふう、驚いた。全體どうした譯でね?。」

上

「や、青野か。」

と覺えず足を停め見上ぐる鼻先に、悠然として長石二國を壓する青野ヶ嶽の片面、夕日を浴びて、峰越す日影まばゆくかすれ行く。至二日路、右になり左になりてつけ覘ひし此の山より麓に沿うて一曲りすれば我が村なり。世をあきらめて、昔馴染の山の懐水の隈に平和の寢床求むる身は、はじめて故舊に逢ひしなつかしさ一しほにて涙さへさしぐまるゝに、日はやゝ雲の色より暮れそめて、見わたす限り、黄ばめる田の面に風悲しく、穂并を分くる小荷駄の背の、とぎれ〳〵聞こゆる一ふし、「西は追分東は關所」と哀れ深し。

行手おぼつかなき山蔭には、暮烟早や蒼う鎖し初めたり。我れも彼方へ歸りは歸る身なれど青春の光鮮に希望の華の門出を飾りし昔とは事かはり、今は親もなく家もなく、功名の一念秋の梢とすがれ果てゝ、あはれ淋しき此の眺にも似たるかな。今宵よりは叔父の家をしばしの我が宿とは思へど、見る影も無き此の樣にては、日あるうち村にも入りがたし。舊の身ならば、最早此所等にては多人數の出迎に取り巻かれ、門先に待ち給ふ父上母上に、遠くより聲かけて、一家笑ひ崩るゝ中に、寒喧久濶はそッち除けて、都の噂に時も移るべきを、我が今宵歸るべしとは、誰れ知るものもあるまじ、知ッたりとて我が名さへ今は忘れたるが多かるべし。

考へつゝ、何時か道をよけて、小高き蕎麥畑の畦に、蝙蝠傘を杖にうッとりと眺め入りたるは、早瀬健一とて、老け性の二十八九なるべし、眉秀で、頬少しこけたる顔の色、あたりの夕景色に包まれて一しほ蒼白く見ゆ。

笹すべり

ど、百感高まり來て氣いとゞ冴へ、頭重く堪え難し、發船時刻少し遲れて、一時とも覺しき頃、機械の響やうやく聞こえ、錨鎖を繰る音、人の甲板に往き來う聲、續いては汽笛の音も忙しく、船は動き初めたれど、客は情死の噂に勞れて眠れるが多し。窓より首つき出して見返れば、いつしか夜の景色がらりと變りて、港の内一面の月明に三田尻の町々は一刷の墨繪なり。彼のあたりにや二人は沈みし、彼のあたりにや櫻木の火影は見えし、今は其れも次第に遠ざかり行く。

「そんな悪強いことを言ッたッてしやうが無い。」

「うるさいよ、どうせ悪強いわたしだから、構うてお呉れでない。」

力あまりて危くたじろく身を其のまゝ鐵柵に寄り掛りしお露、男の手を振り切ッては流石に心細く、覺えずよゝと泣き沈む。男は無言。

「鬼のやうな男に欺されて鬼のやうな事をしたかと思や、わたしはほんとに悲しい。身の置き所がない。此のまゝ人に顔見られるのがつらい。」

首うなだれてつく〴〵聴き居し金平、何時しか哀れを誘はれて温き涙に心の氷一分づゝ融け行くを、見られじと彼方向く手に、

「わたしが悪るかッた恕して。」

と眞心こめて抱き寄せんとする刹那おそく。

「忌ゝ口惜しいッ。」とだしぬけに一聲、お露の體は躍り上りて、あはや舷三寸の眞際に、

「是れは。」

と驚き手を伸べ身をのめらす金平の足元浮いて、二人の體は折り重なりしまゝ水音高く落ち入ッたり。

「それ身投だ。」

と一時は立ち騒ぐ波の景色も、やがて收まれば、潮は舊によりて去く、空は舊によりて漫々。我れより外に知るもの無き、是れも浮世の秘密一つ、長へに千尋の底にかくれ了りぬ。我れは船室に歸りて鞄に凭りすがりしまゝ暫時まどろまんとすれ

「何所まで白々しいのだらう。わたしはお前の爲なら無い罪でも被やうに、お前は善い時ばかり善くして、悪くなれば突き放す。女房にするの家を持つのと、善い加減な事をいうて人を弄みものにして、落目になれば、其れにかまけた愛想づかし。突き放すのさ、愛想づかしさ。何ぼわたしがぼんやりでも、それ位の事が分からないで何うならう。」

「まあ少し靜におし。お前があんまり思ひ切ッた事をしたので、一途其の方に氣を取られて、わたしの言ひやうも少し過ぎたか知れない。けれど、」

「休めてお呉れ、空々しい。言ひ譯は聞きたうないよ。」

「まあ默ッてお聞き。お前はわたしの事ばかりがみ〳〵言ふけれど、自分は何うするつもりなのだ、何うすれば氣に入るのだ。」

「わたしは何うなッても構はんよ。」

「では何うすれば善いのだ。」

「何うすればもない、わたしやお前の薄情が憎い。わたしだとて鬼でも蛇でもありはせず、兒供の不便なのは知ッて居る。お前に饜かれまいばッかりに酷いことまでして、結句それを言ひがゝりにお前に振り棄てられ、それで默ッて居られるとお思ひか。よいよ、わたしは破れかぶれ。人は何と噂せうと、お前を頼に、お前さへしッかりしてお呉れならと、氣強う思ふて居ッたもの、舟底を拔くやうな目に遭はせて、それで何うするも白々しい。是れからはわたし一人でやッて行く、何の、情無し男に未練はない。あゝ、うるさいと言へばねえ。」

袂を拂ッて立たんとするを、男は制し止むる氣合なり。

「あれまあひどい。此の前お前はさう言うたでないか、兒供が出來てはとても何うする事も出來ない、此のまゝ生まれでもせうなら、斯うしては居られぬから、臺灣にでも行くと、さう言ふから、わたしは生まれぬ方がお前に都合のよい事と思うて、それでお鳥婆さんの言ふなりにしたのを、今になッて連座にするの何のと、それはお前あんまりといふもの、お前はやッぱりわたしを棄てる氣で、それで言ひがゝりを拵るのに違ひない。」

「言ひがゝりもないものだ、お爲ごかしで抱きこまうなんて。」

「わたしは抱きこみはせんよ。是れが若しお上へ知れて、懲役にでもなるなら、わたしは何所までもわたし一人で負うて行く。たとへ骨が砂利にならうとお前に迷惑はかけんから安心してお呉れ。」

「立派な言ひ分だね。」

「それでお前はわたしを一人やられるかえ。」

「やッぱり連れて行かうといふのか、未練くさい。」

「よいよ、其れでお前の了見は分かッた。まあ薄情な。」

ゑゝくやしいと男の顏を睨めつけて、暫時言葉なかりしが、やがて潤める聲を顫はせ、

「さうまで冷たい心とは知らず今まで欺されて、弄まれて居ッたと思へば口惜しい、殘念な。今にお禮はするから覺えて居るがよい。」

と泣き入る。

「何だ薄氣味の惡い。何もお前を欺した事はないぢやないか。」

娘はちよッと躊躇の體なりしが、思ひ切ッたる語氣。
「いゝえ、お鳥婆さんに賴んで。」
「墮胎したのか。」
「月足らずで此の月の始に生まれたけれど、譯を話して形づけて貰うたよ。」
「形づけたッて?。殺したのか。ふうむ。驚いた。お前も隨分思ひ切ッた事をやらかすなァ。」
「でも外に仕方は無いもの。」
「まさか、殺さずとも外に方はついたらうに、飛んだ事を爲出かしたものだ。お前はそれ程にも思はないか知らんが、何ぼ自分の子でも、假りにも人殺となれば、たゞぢや濟まないぜ。」
男の不興に、娘は案外といふこゝろ。
「お前さへ見すてゝお吳れでなけりや、わたしは構はんよ。」
「見捨てるも見捨てんもないけれど、懲役にまでつき會ふ譯には行かず。何故わたしに相談しなかッたのだ。」
「相談せうと思うても、お前が寄ッて吳れんのだもの。」
「では寄るまで待ッてるがいゝぢやないか。」
「でもどうせ兒供のある内は、お前に邪魔であらうと思うて。」
「わたしに邪魔だなんて、押ッ被せられては迷惑だ。わたしは邪魔だから殺せといッた覺えはないぜ。今度だッて今聞いてびッくりした位の事だから、そんな大それた事に連座は御免だ。」

て居るのを知りながら、どさくさ紛れに外してしまはうと。」

「しやうが無いなあ、さう僻んでは。これ靜に。聞こえると惡い。此の前寄らなかッたのはわたしが惡いとして謝るから、もッと靜におし、人が來ると見ッともない。今日だッて嘘も僞もない、これ此の通りの樣で働いてるのだ。沖が少し荒れたので下は大騷ぎ、嘘なら行ッてごらん。え、分ッたらう、だからさ、わたしだッて自分が好でこんな稼業をするのではなし、誰れがわざ〳〵忙がしい目なんかするものか。斯うやッてるのも、矢ッ張りお前といふものがあればだ。わたしだッて、顏の見たいのは同じだらうぢやないか、出來さへすれば一時も早く手を明けて、ちよッとでも會ひたいとは思ふけれど、其所がつい、斯ういふしがない身で見れば、どうも思ふやうに行かず。ねえお露さん、其の邊も少しは斟酌して吳れなけりや。それはお前に何といはれても、本はといへば皆わたしが腑甲斐ないからで、仕方はないけれど、わたしの心では、何所までもそんな水臭い了見は持たないつもりだ、少しはわたしの心も察して貰ひたい。」

「それは分かッて居るけれど。」

「さ、それが分かれば、わたしはもう何もいふまいから、今夜はおとなしく歸ッてお吳れ、ね。先ッきもいふ通り、今度から中がやかましくなッて、此の度はとても寄ッてる暇がないから、此の下りには屹度寄るから、え、分かッたらう。さうさなあ、何日と日はッきり極められないが、まあ何でも今までと大した違ひはない、大抵其の頃と思ッてゐればいゝ。なあに此方から行くよ大丈夫。あ、さう〳〵一件はどうした、墮りたと、其いッは善かッた、本當かい。」

「嘘をいふものかね。これ此の通り舊の體になッて。」

「そいッは大でかしだ、ひとりでに墮りたのかい。」

と棹取り直すと見る間に岸に突きたてぐッと一と押し、船は見る〳〵岸を離れて搖ぎ出でぬ。船頭はすかし見て、

「お露さんか、また迷はしに行くのかい、罪作りぢやなう。」

言ひ〳〵操る櫓に、船は闇を潜りて、行く手に消ゆる浪のきらめき心細し。

下

乘る客下る客の混雜形づきて、出入口(ハッチ)に積荷揚荷の懸聲忙がしき中を、我れはお露の事が氣になりて、獨り甲板に出で、あちこちとぶらつけば、下の騷々しきに引きかへ靜けさ一入なり。見渡す限り空も水も只漫々として玄(くろ)く、向島(むかふじま)あたり岩根に咽ぶ濤の音遠音に響く。陸の方には、燈火はや疎になり行きて、今しも端なるが一つ消え、次なるもゆらぐと見えてまた消えぬ。

「あの火一つ〳〵の下にも、戀や涙や、人間さま〴〵の有爲轉變は往きつ戻りつしてゐるのか。」と先程よりの事など思ひ出しては、今丁度消えかゝりし彼の火影が櫻木のでは無いかと、愚にも附ぬ事まで考へ續くる途端、ひゆうッと煙筒の風を切る音凄じく、身を刺す寒さに、覺えず首を竦(すく)めて此方を向けば、今まで氣づかざりし男女の聲とぎれ〳〵に艫の方より聞こゆ。石油箱を積み重ねたる蔭に忍びよりて、耳を傾くれば、お露等男女(ふたり)に紛れなく、言ひ募り居るは女の聲なり。

「いゝえ嘘々、お前にそれほど實のあるものなら、此の前の下りに何故素通したえ。寄られぬなら寄られぬで、其の譯を知らせて呉れてもよいでないか。何の無理に引き留めやうとは言ふまいし、欺さずともの事を。口惜しいよ、わたしは欺されたのが口惜しい。厭々、話の分らぬ中は船が出やうと何うしやうと、歸るものか。今も、わたしがあれ程人前を兼ねて探し

「でも、さうせんと跡が辛うて。」

とほろりとなるを、噂は透さず引き取ッて、

「此の娘は自分の事かなんぞのやうに、ほゝゝ。お客樣の仰しやる事に間違は無い。」

と其の場を濁しかける時、恰も待ちに待ちたる汽笛の音、眞艫に吹きおくる西風につれ、夜をつんざいて高く低く響きわたりぬ。「それ船が。」と我れ一番に立ち上がれば、遅し、我れより先きにお露は早や身仕度をして戸の傍にあり、差櫛拔いて鬢のほつれを直しながら、

「お客さん、わたしも雲龍へ行くのでござんすよ。」

と何時か常の調子に復り甲斐々々しく我が鞄を提げて後に立ちぬ。何がしかの茶代を投げ出して、櫻木と染め拔いたる小丸提燈に送られ、荷揚場際に艀の用意を待つ。

今夜は此所よりの乘り合ひ客少なく、船宿の若い者等が手んでに振りかざす提燈の影まばらに、まだ人數も調はぬ樣なり。牡牛の悲鳴する如き響一しきりして後は、あたり一しほしんとして築きおろせし石垣の裾を洗ふ浪音ぴた／＼と、黒き沖合に舷燈の青きが搖いで見ゆ。軈て人聲次第に騷がしく、丸萬、佐野長と叫ぶ聲、提燈の飛び交ふ影いそがしく、我れ勝と艀に乘り移れば、

「櫻木のお客さん此所が善ござんす、此所が。」

とお露の疳走ッたる聲、つゞいて「出すぞう。」と船頭が濁聲高し。娘は衝と立ちて、

「忠さん善いかえ。」

「構ふ事は無い他言するわたしぢやないから、大事ない限り話したり〳〵。心配事なぞある時は、人に打ち明けてしまふと清々するものだ。」
「それも事に由りけりで。」
「善いから叔母さん抛ッて置いて下さい。此のお客さんは親切らしいから、わたしは聞いて置くことがある。ねお客さん。」
と仰ぐ眼元には復た笑を宿したり。我れも覺えずほゝ笑まれて、
「よろしい、何なりと。」
「今しがた彼の人達が墮胎す〳〵と言ふた、あれはお腹に出來た兒を、生まぬ内に流してしまふのでござんすよ。あれがお上へ知れると大變でござすとね。大變とは何うされるのでござんしよ。懲役？、どのくらゐ？。生まれてから死んだのも同じか知ら、さうでござんすね、ひとりでに死んだのなら何でもありませんね。殺しでもすりや、それこそ大變だけれど。殺したのは墮胎したのよりひどござんせうね。やッぱり懲役？。」
天ッ晴れ遠廻しに手ぐり寄せたつもりの此の問の下心、我れには前後思ひ合はせて能く見え透きたれば、其れとなく斯かる無慈悲の所業の罪深きことを說き聞かせ、悔悟の念の萌せかしと努めぬ。娘も耳を傾むけて聞きぬ、されど深く思ひ惱めりとも見えぬは、情夫といふ類のあればならんと、我れは更に兒供の不便さを楔枯にして言葉を繼ぎぬ。
「それに折角生まれて來たものを闇から闇へ追ひかへすなんて慘いぢやないか。全で兒供の可愛さの分からない鬼のやうな者なら兎も角、少しでも我が子不便と思ふ情があれば、まづそんな事は出來ない筈だ。」
お露は何時か我が上に取りなして、

り厄介になるのだね。」我れの迷惑顔を氣の毒と、お露は例の調子に話の緒を切りぬ。

「お客さんは東京でござんすね、言葉で分かります。雲龍にも東京の人が澤山居りますよ。」

「さうかね、先き話の金平さんといふのも、其の中らしいな。ハヽヽして見ると矢ッ張り色男は東京に限るかな。」

「お客さんの面白い事ばッかし。女子も東京には綺麗なのが居りますとね。構ひませんよ、男の一人や二人奪られても、代は何時でもあるから。」

「よし〳〵、雲龍へ乘り込んだら、金平さんにさう言ッつけるぞ。空とぼけたッてだめだよ。何だね、では赤ん坊の亡くなッたことは、まだ知らないのだね。聞いたら嘸殘念がるだらう。平氣だと、そんな事があるものか。何うして?。面倒臭い者が出來たら往生、何うすることも出來ないと。それやさうに違ひ無からうけれども、出來た兒の憎い譯はないさ。」

お露はどうしてか、今までの笑顔をまた曇らすと見えてあわてゝ暗き方に退けば、言葉まで早やしめりて聞こゆ。

「お客さんは知らんのでござんすよ。此の前多渡津に情婦のあッた時も、兒供を生んだのが惡いといふて、其れぎり往かなんださうでござんす。今度も若しわたしが兒供を生んだとでも言へば、屹度またわたしを見すてゝしまひます。」

疇昔は他の身の上、今日は我が身の上と、思ひ比べて感に堪へぬ如く、

「ほんに男といふものは身勝手な。」

と誰れに言ふともなき述懐も、行末いかにの心細さ嘸と、我れはしみ〴〵哀れに覺えぬ。嚊は氣を兼ねたる取り廻はし。

「お客樣横になッて一休なさりませ、船が着いたらお起こし申します。お露さん何ぢやえ、要もない事をお客樣にお聞かせ申して。」

と猶も問ひ詰められ、急に愛度ない調子に砕けて、甘へたる聲を一段張り上げ、
「生まれるのは生まれても、直ぐ死んだのさ。お鳥婆さんがよく知ッて居るから聞いて御覽よ。」
とさもさえ〴〵しく作り笑ひをしぬ。されど男は飽まで意地わるく、
「お鳥婆は墮胎すのが上手ぢやといふぜ、濡れ紙でも張りはせなんだか。」
とからかひ掛かるを、お露は恐ろしき眼して、
「七五郎さん、覺えてお出で。」
と言ひ捨てたまゝ表へ駈け出したり。跡には暫時あッけに取られて見送り居し二人の、やがてあはゝと高笑ひに腰を浮かせ、
「どれ出かけやうか。」
「わしも一緒に行こ、お客さん御免なさい。」

中

今まで話に紛れて忘れ居し船の事を思ひ出し、時計を見れば早や八時近し。二時間の上延着とは餘りなり、若しや汽笛を聞き漏らしはせぬかと心いらちて、立ち上がらんとする時、嚊はお露と連れ立ちて歸り來たり。
「あれお客様を投うたらかして、御無禮ばかり。馬關からの電報では餘程遲れるげにござります、お退屈さまで、まあゆッくりお休みなさりませ。」
「そりや弱ッたね、正、何時には着くだらう?。九時?、おや〳〵まだ餘程あるね。さうさ何うも仕方はないから、やッぱ

「鼠の腹で中ッ腹とお出でた。」

と若き男。二人聲を合はせてどッと笑ふに我れはいぢらしと見て言葉を添へぬ。

「姉さんは赤ん坊の亡くなッたことを思ひ出して、それで泣いてるのだね。生まれてから死んだのかね流產でもしたのかい、え姉さん。」

女は意外といふ面持にて振りかへり、遽に笑ひかけて、

「いやなお客さん。」

とばかり猶も口數を利かず　先程のがら〳〵したる樣子は失せたり。若き男は執ねく付け入りて、

「生まれてから死んだのよ、なお露坊、おぎやあ〳〵といふ聲が聞こえたもの、なあ。嘘を言ふものか、此所のおッ母に聞いて見なさい。お前は息張り出す方が苦しうて、泣き聲が聞こえなんだのぢや。」

「嘘でござんすからね、わたしのは其れほどむづかしい產では無かッたからね。」

「でも少し位は泣いたらう。嚔を三つせんと嚔ぢやといふぜ。」

「泣かなんだよ。」

「動くのは知れるかい。」

「それは知れるさ。」

「それ見い、生きて生まれたのぢや。」と二人は眼を見合はせてしたり顏す。お露はどぎまぎして嘘々とかぶりを振るに、

「生きて居らんものが、何うして動くのが知れるい。」

「よい兒でござんせう、わたしのよ、此の兒は、ね坊や。」
とまた頰を寄せ眼を細めて、しばしは餘念なかりしが、あたりに人の居るをも忘れし如く、何時かうッとりとして、心は我が子が墓の上やさまよふ、丸き眼の冴え、長く濃き睫毛の色、あやしう曇りて見えぬ。それとも氣づかぬ一人の男はフヽヽと笑ひかけて、
「思ひ出しをるな、彼奴と頰摺でもした氣で。畜生ッ。」
されど娘は感じなし。年上の一人は慰め顏に、
「亡くなッた子のことを思ひ出しはせんかい。金平さんに言ひ譯が無いとて、それを苦にするのであろ。なあお露さん、可愛さうに。」
と言ひ了らぬにお露は衝と立ちて、
「あゝ厭、叔母さん抱いて遣ッてお吳れよ。」
と兒供を嚊が手に投げやるやうに渡し、鍍金脚護謨球の後差にて頭の地をじれッたさうに掻きゐたり。
「また蟲が起こッたのかえ、困るねお前にも。それ見な泣き出した。わたしは此の兒を返して來るから、お客樣にお茶を出し更へてあげてお吳れよ。」
と嚊は立ちあがりぬ。
「じれずに待ッて居れい。今に可愛いのが汽笛鳴らして這入ッて來るぞ。」
お露は彼方に向いたまゝ首をすこし垂れて、「人を馬鹿。」と小聲にいふ。男はかぶせかけて、

と我れは任り合はす菓子を侑めながら、殘りし二人の男に問ひかけたり。今まで一語も挾まず、笑うて傍の火鉢によりかゝり居し主人の嬶は、此の時口を出して、

「男の方ではさほどでも無いのでござりますがね、可愛さうにまだ兒供でござりますから、彼の通りたわいはござりません。すぐ近所の綱屋の爺さんが、男の手一つで丹精しあげた乙娘で、綱屋の爺さんと申せば、此の界隈で名の通ッた一向宗のお固まりでござります。はいそれはもう氣さくな、おもしろい娘で、何方樣の前でも彼の通りぞんざいな事ばかり致しまして、ほんに仕方がござりません。」

「一月ぶりで會ふといふので、嬉しさに立ッても居ても居られんのぢや。それに急に身が輕うなッて、餘計に跳ねまはりやがるのよ。」

年下の方が口を出せば、一人の男は低めし聲に力を入れて眞面目なり。

「月足らずを生んだとな。それも生んでから殺したのぢやといふぞ。」

「まさかさうでもあるまい。墮胎しくらゐはしたかも知れん。」

「へえ、そんな噂がありますかえ、些ッとも知らなんだ。人の言ふことでござんせうよ。」

と、嬶があとを續けんとする時、入口の戸をがたぴしと、何所かの赤兒を抱いたまゝ頰づけして、何か歌ひ〱お露は歸り來たり。

「はい叔母さん今晩は。叔父さん今晩は。」

とあやし〱兒供を洋燈の傍にさし寄せ、笑む顏を己れも笑ましげに眺めて、座中を見廻はし、

と我れも餘りの辛氣さに障子の影の仲間入りしぬ。嬶は茶を出し更へる、菓子を運ぶ。お露と呼ばれし十六七の娘は、我れの正面に座りて、憶面もせず、極めて快濶なる調子に話しかけぬ。

「お客さん雲龍へお乘んなさるか、始めてでござんすか彼の船は。好い船でござんすよ。上等？、中等？。中等でも綺麗なことゝ言うたら無い。それに第一大きいから搖れが少なしさ、ね七五郎さん。あれ嘘なら聞いて御覧よ。」

「彼の人にかい、彼の人ならさう言ふかも知れん。」

「馬鹿いふよ、ね叔母さん、此の前の暴風にでも、伯耆や中國は皆な出なんだに、雲龍ばかしでないか出たのは。」

「さう〳〵、出ねば善いと思うた雲龍が出て、目の縁を眞紅にして泣いとッた人がある。ハ、お客さん全たくの話でござすよ。」

指子の鐵砲袖被たる年嵩の男が高く笑ふを、お露は額越しに睨む爲して、話を外しかゝる。

「ボーイさんの人のよいのは中國丸ね、蜜柑を賣りに行く頃なんぞ、毎時も手傳うて賣ッて吳れたよ。自分のが賣れんと思うて人の惡い事ばかりいふのは雲龍が一番。」

「でも金平さんといふ善い人があれば澤山ぢや。」

娘は手を擧げて男の肩を撲つまねしながら、上目づかひにちらと我が方を見て、口をちよと炬燵蒲團の襟に寄せ稍々羞かしげに俯むいて、「ほゝう。」と一言、嬉しいのか、自ら嘲けるのか、囃し立てるのか、分からぬ程に投げ出し、やがてちうちうと一つ二つ鼠鳴すると其のまゝ立ちあがり、ばた〳〵表の方へ出で行きぬ。

「おもしろい女だ。雲龍丸に情夫でもあるといふのですか。」

上

手車にゆらりと體を載せて、身を破風に葉卷の烟のどやかな、當世の公達には分かるまじき心づかひ、二錢三錢と小ぎり絞ッての上が、あの場末まで上下とは行かぬ我等辻車の花客には、先づ乘るからして氣兼あり。上りは俯す下りは仰す、何時とはなく梶棒の呼吸をおぼえて、我れから氣を利かすも思へば有り難からぬ車上の旅、通ひ馴れし山口街道を、此の度はいッそ三田尻に外れて、其所より汽船のことゝ、まづ櫻木といふ汽船問屋に落ち着きぬ。

湯に入り夕餉したゝめて、客を措くか措かぬに、早や門司拔錨の雲龍丸が着く時刻と、店の若い者に急き立てられ、軒別の軒洋燈光を放つ頃より港口なる支店へと送り込まれぬ。見れば支店といふは名ばかりにて、店には駄菓子など並べ、あたりの若者原が宵々毎の遊び宿かとも思はるゝ内の樣子、我れより先に、男女うち交ぜて二三人の客あり、中の間の炬燵を取り卷いて笑ひ興ずる彩障子にしるし。我れは二重マントにくるまりしまゝ、上り口に居すくまり、嬶が追從たら〳〵汲んで出す醜くさき茶に、四切れ五切れの外郎つまむ氣も無く、待てど〳〵定めの時刻は過ぎて、船の着きさうもなし。

「どうもお氣の毒な、今夜に限ッて何故斯う晩いのでござりませう。いゝえもう、商船の方はきちりとしたものでござります。折々遲れますのは反對船で。もう直ぐ着く筈でござります、些との間御辛抱なさりませ。ひどく冷ますではござりませぬか、むさうござりますれど、上ッてお休み遊ばせ。いえもう彼れは近所の衆ばかり。お露さん憚りちやが向ふ側へ行ッて、七さん順送りにしてお呉れ。さあお客様あそこへお暖りなさりませ。」

「ではお邪魔しやうかね。」

めをと波

ない。そッと樣子を見て來やうと思ッてたけれど、とう〳〵其の暇もなし。お前どうぞあれをお前の子にしてやッてお吳れよ。わたしの心が濟むから。

其の後間もなく、兩國の橋杭に流れ寄りしは兩人の死骸なり。繼母に宛てゝお淸を賴むの一通、今もお淸が守袋に殘りて、眼鼻立おとがひの疵まで、お繁が此の世のかたみは是れ一つ。

伊三はそれとも知らず、今も猶出刄を呑んでは芝淺草と夜々うろつくを見し人ありとぞ。

小山が讀みさしの筆記塵に埋もれて、机上には貸金控帳の厚さ五寸もあるが橫はれり。

思ふがねえ。それかといッて田舍に行ッた所が、何時來るか〳〵とあぶひやしてゐるやうでは、此方にゐるも同じ事だらうし。

お繁は話を切りてあゝと深く溜息し、

「どうしてもわたしが惡かッたのねえ。斯うと行く先の知れてるものを自分が心淋しいばッかしに、何の咎もないお前に無理と道伴させ、其の上同じ憂目に果てさするのは、わたしやどうも氣がすまない。今で思へば、此の憂目は、小山と一緒に見るのが順であッたよ。

「今になッてそんな水臭えことはよしねえ。くッつくも離れるも皆んな縁だあ。たとへばどんな苦勞をしやうがさ、お前と一緒ならおいらは不足はねえ。

「さう言ッてお呉れのは嬉しいけれど、さしあたッての難儀に、行く末が思はれて。

「お前の考へはどうてんだ。

「わたしやとても生きてはゐられまいと思ふよ。

「死ぬてえのかい。

「外に分別があるかえ。

「おいらの考へも其れよ。親も子もねえ獨だ、何時死んだッて惜かねえ。けれど半月添ふか添はねえでおち〳〵話もしねえうちに斯うならうた、夢にしても殘り惜しい。果敢ねえ巾だなあ。

「そりやお前未來といふものもあるわね。わたしや其れよりかお清の事が心殘りで、斯うしてゐても一日思ひ出さない日は

ぜ、あんなやつだから執念深くつけて來やしねえかと思ッて。

「全くどんな事するか知れないよ。だけれどをかしいねえ、今時分出あるかれる譯はないがねえ。

「所が大ありさ、あの野郎とう〳〵高利貸になッちやッたらしいよ。何だかべら〳〵したものを着こみやがッて、お謡へ通りの高帽に革鞄よ。何でも高利貸に違へねえ。

「いけなかッたねえ、此所いらはあんまり場末すぎたものだから、あんな奴が來るのだよ。

同じ日の夕方、新之助はまたも湯の歸りに、伊三がよぼ〳〵と乞食の姿して軒別のぞきゐる所を見たりとて、火鉢の前に震へあがりぬ。「小山に逢ッてまた神經を起こしたのだよ。とお繁此れに取はり合はぬを、

「お前は神經々々といふが現に見たのだからしやうがねえ。と不平げに言へば、「だから神經だといふのさ。お前の伊三さんにお逢ひのは、何時も夕がたと決まッてるのが第一をかしいぢやないかね。と言ひ切りはしても、折りしもの夕まぐれ氣味わるく、覺えず後を見かへりて、「あんな事お言ひだもんだから、何だか氣味がわるくなッたよ。

中一日おいて、次の日のくれがたには、職人姿の伊三をお繁がまざ〳〵と見て、どうやら新之助の神經ばかりでもないやうだと、抑へゐし疑惧心一時に芽を吹き、淋しく賴すくないやうな氣持に、欝ぎゐる所へ、新之助が歸り來て、伊三が脱獄の始終聞いて來しまゝ話せば、はッと當惑の色に、どうしたものかと、二人ひとしく顔見合はせて言葉なし。

（十三）

「新さんお前はどうするつもりかえ。此方にゐる間は、向うだッてついてまはるもの、幾らかはッても果てしはなからうと

のにして、寸時も心休まらず、冷汗びッしよりになりて、七時ころ歸り來ぬ。お繁は待ちかけて樣子を聞き、監獄に居るにきまッてる人の此の邊をうろつく筈なしとて、眞に受けず。

「お前の神經で、似た人がさう見えたのだよ。はゝ馬鹿らしいぢやないかね、そんな事を氣にするなんて。と話は其のまゝ他にそれたれど、新之助の心には如何にしても神經とは受け取れず。其のうち家も出來て、世間忍ぶ身にて稼業なくては立たぬ世と、少し業體をかへて、急出來の建具屋となり、お繁は手内職の共稼に辛く其の日を立てしが、それもほんの十日ばかり、新之助が湯にも心安く得行かぬ樣に、お繁も心細くなりて、「こゝばかりが日の照る世界でもなし、思ひ切ッて深川の方に越してみやうぢやないか。と云へば、新之助は一も二もなく同じて、店を疊むと間もなく深川常盤町に同じ建具屋の新店一軒出で來ぬ。されど照る日降る雨は、何處も同じ朽家が軒に隙漏りて、木場邊に知人あるが氣がかりと、此所も居ごゝろわるく、新之助のすぐれぬに、お繁は小言まじりに慰めつゝも、麻布がよからう、神田がよからう、いッそ牛込がよくはないかと、半月ばかりの間三四ヶ所も家をかへたれど、新之助が心やすまる住居はなく、餘り引き越しするのが噂の元で、身の上に及びはすまいかと、其れも氣がゝりなり。いッそ商賣替して田舍へでも引こんだらばとも思へど、淺草邊へ尙一度越して見やうと、詰まりて、蠟燭問屋軒を幷ぶる松葉町邊に店を開きぬ。

其の三日目の朝、板の買ひ出しにとて出かけし新之助は、色蒼ざめて歸り來たり、

「やッぱりいけねえよ、萬年町の入口で小山の野郎に見られちやッた。

「え、それでお前さん、ずッと歸ッてお出でかえ。

「蹤けられちやいけねえと思ッたから、午砲になッたのも構はねえで、ぐる〳〵其所等ぢうめぐッて來たのよ。苦しかッた

借りても、返せる時返せば、閻魔の前の申譯は立つと、胸をすゑて、盗の手始に身のまはり出來あがり、手拭にくる〳〵卷いた出刄を懷に、刑事の目恐ろしければ、晝は人目繁き所に立ちまはらず、たそがれ時より、昨夜立ち聞きせし三田四國町の方へと志しぬ。途すがらお清の樣子、家の樣子も見たしと、刑事が張ッて待つ網の目をくゞり、そッと裏の方より窺へば、戸締固くさして人氣なし。昔なつかしき心地して、富久町の姑の家に立ち廻はれば、お清は此所にあり、夕餉とおぼしく一家うちよりての膳の上に、姑のくど〳〵と口小言いふが聞こゆ。「そのひがみ根性を直さなければ、何所へ行ッてもお飯を喰べさして呉れる人はないよ。お前の父はそれでお巡査さんに引かれたのだよ。あんな惡漢は家には置かないから、何でもおとなしくはい〳〵と、言ふ事聞かなければ、追ひ出してしまふよ。お飯が濟んだら、皆と一緒に其處いらでもおとなしく遊んでおいで。

　他の兒共等が遊び興ずるを、ひとり此方の庇下に立ッて淋しげに眺めゐるお清、伊三が小蔭よりそッと手招するを、透し見て、父と知らねば、怖いものゝやうに二足三足あとしざりし、いざといはゞ逃げ出さん身構にて額越に猶もうかゞひゐる。道行く人が此の體見つけて物ずきに立ち留まれば、伊三はびッくりして、我が身の上かと一目散に逃げ出したり。

　お繁新之助の二人は谷町の家を遁れ出でし夜、芝まで辿りつき、一夜を其所等の安旅籠に明かして、翌日早々新之助は金策と家の事との奔走に宿を出たれど、思ふやうに捗ゆかず。點燈頃山内をぬけ堀側に沿うて、不圖松本町の方を見れば、角の芋屋の街燈に青く橫顏を見せ行く男あり。新之助の足音に驚いて此方をふりかへりたる顏は、正しく監獄にありと思ひし伊三なり。新之助は仰天して、其のまゝ足をかへすや否、撒くつもりにて芝新堀町より四國町へ八重襷に駈けまはり、顏隱した人にあッては、ぎよッとし、脊恰好の似た人にあッては、ひやりとし、後の足音、摺れ違ひざまの手つき皆恐ろしきも

わざと道を外れて、立木の間、草原の中、人家の裏手と、人氣なき所ばかりを的もなく走りつゞけ、とある杉林の中に來て、振りかへり見れば幸に追手の影もなし。遁れ果せしかと心ゆるみて、其所にぐたりとなれば、日頃の疲、今宵のつかれ一時に發して、靑くさき地べたに前後も知らず寢こけたり。とろ〳〵とまどろむ。やがて目を醒ませば、夜明間ちかしと見えて、はら〳〵と鳥の鳴く聲聞こえ、人家も遠からずとおぼえぬ。氣すこし鎭まりて、今宵の事を考へ見るに、自分のせし事、他人のせし事の境目朧氣に、此所は角筈あたりかとも思へど、それさへはきとせず。巡査に追はれて逃げこみしことだけ思ひ出でゝ、忽ちぶる〳〵と胴震し、柿色の筒袖に氣が就て、是れでは一刻も猶豫ならずと跳ね起きはしたれど、さしあたり工風のなきに困りはて、手をこまぬけば、姦婦姦夫の事たちまち心に浮び、胸の中沸きかへッて、滿面朱をそゝぎし如し。それも一さかりにて、殆ど忘れゐたるお淸の事に心うつり、いたいけ盛りの我が兒を振りすて、情夫と手を取りて逃出したるあの浮氣女めは鬼か蛇かと、兒供の不便さはたゞ房の憎さに油さし、消えんとしては復た燃えあがる嫉妬のほむら。うぬ、其のまゝぬく〳〵と添はさうか、尋ね出して四ッつはおろか、ずた〳〵に切りさいなんでも飽き足らぬと、すッくと立ッて拳を固め瞳を据ゑたる顏色、杉の木立の黑きが中に物凄し。

鎖繫ぎになッて柿色の仕着きたる所は、何れが一つ強惡非道の面魂ならぬはなけれど、中に這入ッて朝夕寢起を共にし見ればつまりは皆人間なり。惡い事するにはするだけの理屈もあり、惡いながらに優しい所も何所にかありて、詐欺も竊盜も其の人がするものと思へば、娑婆で考へし程惡い事とも見えず。伊三も今さしかゝッての手段につきて、此の心ふら〳〵と胸に萌させば、それよ、我れはとても淸からぬ身なり。彼奴等二人を見事重ねて四ッつにした上が逃走の罪は遁れず。運わるく一人々々に盤んでしまへば、此の身の末が覺束なし。どの道毒は食ふ身なり。着物の一枚、小使錢一二貫ぐらゐ默ッて

の來ねえ内に何所かへかはるのが肝腎だぜ、おいらが先へ行ッて四國町の方を當たりをつけて置くから、お前はあとから來方え。あすこいらが當座のおちつき場には持ッて來いだよ。

「ではねえ、屹度行くから、其のつもりにしてお吳れ。さうして當分氣をぬけば、先は幾らでもよい工風があるから、心を大きく持ッてゐてお吳れよ。其の上でまだつきまとへば、あいつだッて暗い身だもの、お前さへしッかりしてゐてお吳れなら、どうでもなるわね。

「では、おいらは一應歸らうか。

「此の人は歸り急ぎばかしするよ。待ッてる人でもあるのかえ。

「お前ぢやあるめえし。

「憎らしいよ。

聞く伊三は、總身の血一時にくわッと頭に上ッて、だしぬけにゑいと一聲躍り上ッて、裏の戸を無二無三に蹴破り飛び込まんとするに、內には小山が襲ひ來しものと心得、それと飛び起きざま、帶もしどろに二人等しく表の方、一散に人無き方へ闇に紛れて逃げ失せぬ。取り逃したかと伊三もつゞいて表口、路次の角を左へ、何の分別もなく新之助が家の方へと一二丁ひた走りに走ッて、こらと頭上に一と聲、目前にちらつく色燈にびッくりして引ッ返へし、右手を甲州路の方へ、見えつ隱れつ、宙を駈ける赤鬼一つ、黑暗地獄に狂ふが如し。

（十二）

ぬ女房が事、若しやと思ひ募ッては、看守の言ふこととて耳には入らず、一念蟠となつて身を燬くかと見るまでに燥ち狂ひ、之れが爲には脱獄も罪ならず、減食も恐ろしからず、譯知らぬ獄吏には、手にをへぬ惡徒と見られて、ちよッとの事にも目の敵にせらるゝが常なり。

されど一念凝ッては、吐く息に日輪も曇るといふ、十日ばかりの月落ちて、死刑場の森こんもりと黑きあたり、をり／＼星の流るゝ影青きころ、伊三は三たび目の脱獄を企てゝ、さしも嚴しき幾つかの關を首尾よく滑り出でぬ。

當直看守の目を偸みては、震ふ足もとに幾たびかこけつまろびつ、足場よき門の横手に、三間にあまる築地の上に八重に植ゑたる枳殻垣を、今は足ひッかゝるも、着物引き裂かるゝも一切夢中に、しがみつき、躍り越え、外側の芝滑なる所を、あはや一すべりと足ふみ出す刹那、谷町の方より來かゝる人の氣はひ、しまッたと動脈一時に硬ばるかとすれば、其の人は氣づかぬ樣に通り過ぎたり。嬉しやと其のまゝ滑り降りて、一目散に我が家の方、路次の入口までは、あと恐ろしさに何の思慮もなし。此所にてほッと息つけば、早や、お繁が情夫とゝちぐるふ樣あり／＼と心に浮び、其の最中へ踏みこむことかと、胸の底抉ぐらるゝ如く、手足ふるへ、奥歯は噛み合ひ、一歩々々と我が家に忍び寄りて、中の樣子を窺がへば、漏る、ものは間違もなく男女のさゞめき、聞くより、今さらの心地に、口渇き息はづむを、じッと我慢し、裏口にまはりて戸に耳をあつれば、まざ／＼とお繁の聲、

「それはわたしが言ふ事だよ。あんな奴に流す浮名を、お前が引き取ッてお呉れのだもの、わたしや死んだッて惜しくはないよ。

「伊三さんにや濟まねえが、何も其の場の廻はり合はせだ。死なうと生きやうと、斯うなりや一緒よ。それよりか、あいつ

厭味いひく／＼帰る小山を、「おぼえてゐるがいゝ。と睨んだまゝお繁は立ちもせず、體をふるはせて見送ッたり。足音の彼方に消ゆる間遲く、

「ゑゝ口惜いッ。と其の場に泣き伏すお繁を新之助は慰めんともせず、飛び出す其のまゝ、

「ひどい目に逢ッちやッた。姉御、大事にしなせえよ。とぷいと門口に降り立てば、お繁は追ひ縋り、其の手を把ッて引き戻し、

「新さん、後生だから、待ッてお呉れ。一言いッて置きたいから、もう長くとは言はない、五分でも十分でも。

「聞かねえでも大概わかッてるよ。そりや心得ちげへといふものはある事だあ。此れから後を氣をつけねえ。もう彼れ此れ一時だらう、早く歸らねえぢや、方がつかねえ、其所を離して呉んねえ。

「そりや新さん邪慳だよ。わたしや此所でお前に見限られゝば、生きては居ない體だよ。ほんの夢見たやうな事のはじめ、言譯は幾らもあるけれど、此の期になッてくど／＼言ひはしないから、もうちッとの間、聞くのがいやなら、たゞ居ておくれ。

さめ／＼泣いて新之助の膝につッ伏せば、かすかに顫ふ領脚匂やかに、燈火照りはえて圓みやさしき頰のあたりに、ほつれ毛の愁深きも哀れなり。見入る新之助は、朦として夢の心地。

（十一）

監獄住居の伊三が狂氣じみし振舞は、ますく／＼亢じ來ぬ。おとなしき時は極めておとなしけれど、夢にも現にも心安から

「白を切んなさんな。

「ひどい事いふ人だねえ。

「おいお繁さん、顔を見せなさい。お前もなか〳〵働きものだねえ、蟲も殺さない顔してゐてさ、留守の間にちよッと二人三人とは、凄い腕だぜ。

「小山さん、何を證據にあなたはそんな事をおッしやる。あんまりひどうござんすよ。あなたにそんな事を言はれる覺はないぢやありませんか。

「覺がないも善く出來た、いゝ度胸だよ。其れでなくちや、斯ういふ大それたいたづらは出來ない筈だ。

「何ですと。あなたの口から其んな事。えゝ口惜しい、殘念な。こんな日陰の體には誰がしたのです、誰れがわたしに大それた事を教へたのですよ。斯うなりや破れかぶれ、わたしや承知しないから、さあ舊のやうにして下さい、舊の體にして下さい。

奥齒をぎり〳〵と肯させて、じり〳〵詰め寄する權幕凄きまで、顏青ざめて、痘のあと目立ちぬ。小山はわざと冷笑にて受け、

「あまりわたしにばかり押ッ被せてもらふまい、誰れが教へたのだか知れるものか。よしんば手の出しては誰れであらうがさ、手出は手出、あとはあとよ。はい間男ですと名乘ッて出る日にかはりは無い。お前さんの潔白立ては世間に通用しないよ。どら今夜は歸るとしやうか、何時まで斯うして張ッてもゐられまい。また來ますよ、嫌でもあらうが、もう一度は來て始末をつけなけりや、此のまゝあとへは退けないからね。

「今日は何だか氣分がすぐれないのですよ、頭が重くッて、胸がむら〳〵して、もう寢やうと思ッてたところ。あなたも大變晩く來たのねえ、十二時前ですと。急な話ッて、どんな事ですか。わたしや今夜は聞きたくないから、明日にでもして下さればいゝ。

「別でもない、やッぱり彼の事さ。今日も署で少し面しろくない事があッて、上席の奴を撲り飛ばしてやッたのだ。そんな譯だから明日にも署の方をやめて、何時かの話どほり遣ッて見やうと思ふが、お前の方はいゝだらうね。

「それは餘り速急ですよ。大丈夫ぢやありませうけれど、も少し大事を取ッて、ゆッくりおやんなさいな。

「心配しなくとも、此方は大丈夫、百が百踏み外しッこなしだから、安心しておいで。それよりかお前の方はいゝかね。

「さあそれがまだ、お袋の心を引いて見た上でなければ、言ひ出せませんからね。

「それでは前と口うちが違うぜ、お繁さん。

「前だッて何日と決めた譯ぢやなし、嫌だとさへ言はなければ可いぢやありませんか。

「どうも今夜の樣子が變だぜ。と四方をぎろ〳〵、障子の陰の膳に目をつけると、見る〳〵眉の間に凄きものきらめいて、じろ〳〵お繁の顏と膳とを見くらべ、また家の内を見まはして、

「いや讀めたよ、お樂み筋の邪魔されて、其所で中ッ腹とお出でなすッたのだね。戸棚を明けると色男が飛び出すといふ狂言か、此いつは面白い、面白くなッて來た、此のまゝには歸れないぞ。お袋が來たのだと。さうだらう、豆絞の手拭肩に、やざうをきめて、駒下駄つッかけた、いなせなお袋が來たのだらう。

「人を馬鹿にしてるよ。

「驚いた、よくさう種があッたもんだ。聞くなら早ぇ方がいゝから、聞かして呉んねえ。

「そッけない事をお言ひでないよ、お前はほんとに馴染甲斐がないねえ。ちッとはわたしの身にもなッて見てお呉れ、斯うして亭主は懲役に行き、世間のものは相手にして呉れず、廣い世界に心からつきあッて呉れるものは、お前ひとりだと思やこそ、他人とは思はないで、頼にしてゐるものを、いゝ加減な事を言ッては振りすてやう〳〵とするのは、あんまり情知らずといふものぢやないかえ。何とやらいふ木は、名もない蔦が這ひかゝッても、自分は枯れても巻きつかせて置くといふに昨日今日のお前ではなし、すこしは可愛さうだと思ッてお呉れだッて、不思議はあるまいぢやないか。

お繁の眼は潤を帶びて輝きぬ。相見て新之助は言葉なく、鐵瓶に松風の音冴えて微なり。

折しも靴とおぼしき忍足、溝板の彼方に音して近よるが聞こゆ。お繁はふと聞き耳立てゝ、見る〳〵顔の色をかへ、

「大變だ、小山さんが來たよ。新さん、早く彼方へ。見られては悪いよ、早く隠れてお呉れ、其所ぢやいけないどうしやうねえ、それ〳〵、究屈でもちよッとだから、此所へ這入ッておくれ。此所だよ、さ、早く〳〵。

新之助の姿無くなると同時、小山はくゞりをあけるさへ審やかに入り來たり。今宵は殊さらににこ〳〵したる顔つき氣味わるく、氣取られたかとおど〳〵すれば、小山は平氣、

「よく起きてたね、今夜は極内のお忍びで、ちよッと一時間ばかり顔見に來たのだよ。知れたら大變さ、明日から飯の喰ひはぐれだ。何と親切男は逢ッたものだらう、命がけといふ際どい所を、首尾して逢ひに來るなぞは、當世稀だぜ。

とお繁の顔をのぞきこみ、

「お前どうかしたのか、ひどく顔色が悪い。

「そりやお前不實だあ。懲役しやうが何うしやうが、亭主は亭主だ、おろそかに思ッちや濟むめえぜ。

「ほゝ異な所で意見されるよ、それ位の事知らないわたしでもなかッたけれど、此の頃少し物忘れしてね。けれどねえ新さん、わたしや疎にすまいと思ッても、世間がさせるの、世間が。だからいッそする位なら、思ッてするよりか、忘れて、思ひ出さないでする方が、わたしに氣樂なだけでも得だと思ふよ。わたしや是れから何も彼もみんな忘れッちまはうとおもふからね、新さんなんぞも、長く逢はないでゐると、見忘れるかも知れないよ。ようく顏見せて置いておくれ。

「つまらねえ事。お前は忘れても、おいらがおほえてらあ。

「ほゝゝ此の痞を證據にかえ。まるで芝居の對面場見たいだね。

と彼れ是れ共ににこりとする時、目白の十時の鐘かすかなり。

「や、もう歸らう、長ッ尻して、とんだ厄介をかけちやッた。明日の一番で立ッつもりだから、是れで當分逢はねえ、大事にしなさい。

身づくろひして立ちかゝる新之助を、お繁は流眄に見やりて、

「お前もうお立ちかえ、明日の一番にはまだ早いよ。

「姉御、冗談言ッちやいけねえ、是れから歸ッて仕度がある。ではお清坊を大事にして行きねえ。

「仕度なんて、嘘いッてるよ。其んな事はどうでもいゝから、もう少しゐてお呉れよ、何だか歸したくないからさ。無理でもいゝよ、おいそれと來る人ではあるまいし、たまに來た時無理どめする位はあたりまへだよ。お酒がいやなら片づけるからゆッくり話してお呉れ。話があれッくらゐで無くなるものかね、あれはほんの糸口だよ。

の資の鹽漬をあしらひてお繁が主人(あるじ)ぶり温く、新之助は、飲めぬ酒一二杯にはや眼の中まで赤くし、お繁もとろりと醉ひ心地よき頃、一本の銚子はまだあかざりき。

「また不人情だと言はれるか知らないが、ほんとによ、あの時は他(ひと)の事を考へるどころの騒ぢやねえ。大久保から淀橋へ、何所をどう拔けたか、全(まる)で夢のやうだッたぜ。おいら始めてだ、あんな目にあッたのは。

さうさまた、あんな事がさう度々あッてたまるものかね。知れきッた事をいッてるよ。

「それもよ、ほんたうの意氣筋か何かでどうてえのなら、ちッた幅の利くこともあらうが、あれぢあまるッきり茶番だあ。馬鹿を見たのはお前とおいらよ。考へて見りや話にもならねえや。

「ほんたうであッたら、お前どうおしだえ、對手がわたし見たいなものではあんまり幅が利きさうもないね。ほゝゝやッぱり茶番の方がよかッたのだよ。憎らしい口だね、此の人は、知らない間に何所かで仕こまれて來たよ。これだから若いものは手離して置けない。わたしのおッ母さんなのを、今お知りかえ。つまらなかッたこと、隱して置けばどうかしてお吳れのにねえ。

「こんな事言ッてるのを、伊三さんが聞きでもしやうものなら、さしづめ兩人の命はねえなあ。と新之助はぶる〳〵と二つ三つ肩をゆすりぬ。

お繁は一杯ぐッと飮んで新之助にさし、

「またそんな事を言ひ出して、氣をわるくさせてお吳れでないよ。もう〳〵伊三(あれ)の事は言ひ出しッこなし、わたしや何かいやな氣持になるから。

「ほんとに災難だッたよ。

「さうぢやねえ、げッそり痩せなすッたてえことよ。顔の色澤もわりいぜ。歸りがけに逢ッた時、おいらは驚いちやッたが、今日見りやまたひどい。あんまりくよ〳〵しねえで、體を大事にしねえと、取り返しのつかねえ事になるぜ。伊三公もさぞ弱ッてるだらうなあ。ちッとは便りを聞きなすッたか。

「樣子は知れるがね、なんだか大變出たがッて、隙さへあれば逃げ出さうと、二度まで牢破をしかけたといふ話だよ。其のために段々年期は增すし、監獄署の人にはほんたうの惡漢と同じやうに憎がられてゐるとさ。あゝ短氣だものだからね、毎時もあれで失敗るよ。

「そいッは驚いたなあ。人の了見てえものも、隨分狂ふ時にや狂ふものだね。

お繁は新之助の言葉何となく身にこたへて、

「もうあの事は言ッてお呉れでないよ、わたしは諦めてゐるから。其れよりか、折角お出でなのに、まだ茶も出さないでさ、あんまり嬉しかッたので逆上ちやッたのだよ。まあいゝわね、今夜はゆッくりしておいで、何か御馳走するから。返らうッて、返すものかね。

(十)

肴とては新之助が好にて天麩羅一品、大皿に山と盛りあげ、他に在り合はせの佃煮、伊三が居なくなッてより手の着け人なき、十錢も出せば大曲物に一杯ある、泥のやうな雲丹の鹽辛、小山が持ッて來て喰ひ殘せし生鷄卵二つ三つ、それに紫蘇

思ひか。お前さんに萬一の事でもあッたら、わたし一人で引き受けて、名乘ッて出やうとまで覺悟してゐたよ。それを賣りつけるのぢやないけれど、少しは察してお呉れでもいゝぢやないか。

「おいらだッて思はねえぢやねえ、騷動の翌日すぐ飛んで來やうかとも思ッたのだが、

「其の事ばかしぢやないよ。いくら世間の噂がおそろしいからッて、是れほど人なつかしがッてる所へ、一度くらゐは來て呉れたッて、罰は當たるまいと思ふよ。やッと來てお呉れかと思へば、暇乞だなんて、人泣かせをお言ひだし。いゝよ、たんとさうしてお呉れ。わたしはどうせ泣き死に死なければ業の乾ない體だもの。

「それぢやおいらが困らあ、姉御。何も泣かねえでも濟むぢやねえか。來なかッたのはおいらが惡いとしてよ、今日は別かれだあ、機嫌なほして話して呉んねえ。

お繁は新之助の不意に訪ひ來しうれしさに、覺えず涙さしくみしが、十年も逢はざりし故人かと思ふほど、不思議に懷かしく、「よく來てお呉れだねえ。と一言の挨拶にも、先だつものはつれなかりし恨の數々にて、何時か嬉し涙は恨の涙に色かへぬ。されどそれも一時、懷かしく思ふ人に詫させ誤まらせては、たゞ何とも分かず悲しく心細く、

「わたしやねえ、此の頃うち涙癖がついて、何でもない事にまでこんなに泣き蟲になッちやッたのよ。それに癇の蟲でも出たかして、あとで後悔するやうな事までべら／＼饒舌ちまふやうになッたよ。ほゝ、お饒舌は舊からだけれど、斯うでもなかッたのねえ。

「それよりかお前の面がよ、すッかり變ッちやッたぜ。

言はれてお繁は悲しげに痏を押へ、

暮るゝ早く、桃の實形の月、枝ばかりの梢に上りて、裏口の障子ぱッと明き空を、何所よりか綿の如き雲ふらりと漂ひ來て、月にかゝる影はやし。此の夜、お繁の家に、ひよろりと姿を見せしは新之助なり。

「何う恨まれてもしやうはねえが、おいらだッて是れで、つれえ義理もあらあ、ちッとは察して吳んねえ。あれからといふもの、仲間の奴等はいぢめやがるし、世間ではどうのかうのと、ありもしねえことまで拵えて讒訴しやがるし、殘念で〳〵奥歯はぎり〳〵いッても、手の出しやうがねえ。斯やッてはゐるものゝ、おいら實は面あ見られるのがいやだから、いッそ居づれえ所にゐるよりか、西行にでも出かけて、當分氣を拔かうかと思ッてゐるのよ。仙臺の方とあらかた決めちやッたのだがね、どの位ッて、そいッは分からねえや。どのみち一年ぐれは居ねえぢや、往ッた甲斐がなからうよ。それで、おいら今日は暇乞に來たのだ、何時かもあれッきりで面あ出さず、また手紙の返事もしねえでほッとくてえのは、あんまり不人情だと思ッてよ。

「不人情さ、あんまり不人情すぎるよ。わたしがあれほど言ッたのに、其の場だけいゝ加減な返事をして、待ちぼけ喰はしたり、手紙をやれば、大屋の盆節季ぢやあるまいし、取りッきりにするなんて、ほんとにひどいよ。

「堪忍して吳んねえ、惡氣ぢやねえんだけれど、おいらも苦しいからよ。

「では自分さへよけりや、他人は何んな苦しい思をしてゐても構はないてんだね、だから不人情だといふのだよ。つれあひが惡いから起ッた事だといはれゝば其れまでだけれど、わたしは、お前さんの行衞の知れないうち、どれほど心配したとお

『おや棟梁さんの、お神さんぢやありませんか、ちよいとあなた、其の後はまことに。おや、清ちやん、可愛くお成んなすッたこと。と味噌漉の方が目ざとく見つけて話しかゝるに、此方も是非なさの二言三言、ちよッとの間同じ長屋にゐたといふだけの馴染に、挨拶手がるく切りあげて別かれぬ。『お神さん、あれですか　浮氣して御亭主に殺されかゝッたてのは。『さうですよ、此所んとこにそら、あの疵がさうなのですとさ。と後にはすぐ唇をかへして我が噂なさけなく、見附外の車溜まで來て、いそぎ車を傭はんとすれば、榜示杭の下に四五人車座に腰をすゑたる車夫の一人が、此方を見かへり、何かさゝやくさまして、一座等しく我れをふりかへり見てはさゞめき笑ふに、氣怖して其のまゝ行き過ぐるを、若きが一人刻み足に追かけ來て、お神さん參りませう、と冷したる調子、知らぬ風すれば復、『お神さん參りませう、谷町まで。と末の句に力を入れていふ。溜りにてもどッと笑ふ聲して、お繁が顔色のわるさ一しほ目だち來ぬ。

其所らに空車挽きたるを見立てゝ、言ひ値どほりに乘る其のまゝ、母衣に半身を隱せば、車の走ること矢のごとく、市ケ谷八幡のほとりまで來し時、不圖四五間前に新之助の後姿、お繁はたしかにそれと見て、お清を抱いたまゝ、覺えず蹴込に立ちあがり、よろ〱してまたすわりぬ。追ひ越しざま『新さん。と一聲前後を忘れて呼びかくれば、其の男不思議さうに見かへり、お繁と瞳は合はせたれど、何の感じもなき樣にて、そのまゝ母衣の後に見えずなりぬ。氣咎めして車夫を呼び留むることも得せず、振りかへり見る面影往來の人に遮ぎられて、殘りおほさ、淺ましさに、さん〲の不快を重ね、夕方家に歸れり。燈の下にお清が脫ぎすてしもの疊む〱も、幾たびか漏るは溜息にて、今日も蟲が知らせて進まざりしを、押して出たばかりにあの始末、もう〱外出はしたくなしと、しみ〲身をはかなみぬ。

ぐことでもなけなば、今日は延ばさうかと、心よわくなれば、折角用意までせし事を、中途に已める心わるさ堪へがたく、また思ひ直して、行かうか、止さうか、としばし氣迷ひしが、思ひ切ッて出掛けることに極めぬ。

紺碧の空高く澄みわたりて、稀の外出に目もさめるばかり、そよぐ風凜と、魂ひきしまりて心地よさに、しばし何事もうち忘れぬ。市ヶ谷見附より甲武鐵道にたよれば、飯田町六丁目はすぐ鼻の先なり。汽車の窓に輕く身をもたせ、今日ばかりは重荷おろせし程のう〳〵して、やッぱり何も思ッてゐないのが一番清々する、兒どもは氣樂な筈だと、お清を見れば、餘念なく鳶の舞ふのを眺めゐるに、お繁もつい引き込まれ、あの、つうッと羽風を切ッて、澄まあして舞うてゐる所はどんな氣持だらう、と何時か魂その羽に乘ッてうッとりとなれば、車は知らぬ間に牛込停車場に着いたり。

あまりの氣持よさに、浮々と停車場をも出で、あの電信柱の前が其の家といふ間際になりて、やッと用事に心づき、少し氣がゝりの心地するを打ち消し〳〵、先方の閾またげば、居あはす人々の、一齊に我が顏を見て、眼と眼に彼れよと合點するやうなるに、お繁は折角晴れかゝりし氣色をまた悪くしぬ。それより主人に會へば、此所では挨拶よりも先づ夫への苦情、悪口、すべて皮肉に持ッて廻ッて、滿といふほど聞かされ、いよ〳〵胸ふさがりて、僅か一時間たゝぬ間に、來る路すがらとは打ッてかはりて歸りを急ぐ。

心うつれば、前によい景色と見しもの、一つも眼に留まらず、道往く人のどれも〳〵、じろ〳〵と母子が顏を眺めては、冷笑ふと見ゆるが面憎く、知り人に逢はぬをまだしもの頼にして、人力車ある方へ道を外らせば、つい其所、横町の入口に、ねんねこ袢纏に兒供負ぶうたる、前垂帆に卷いて味噌漉つッぱらせたる、二三人のお神連が立ち話し、お繁は見られじと顏をそむけて、足早に通り越すを、

で善いぢやありませんか。切れるの切れないのッて、それはあなたの邪推といふもの。見せますとも、どうせ斯うなッたのだもの、離別状取るくらゐは、おろかのことですよ。

と言ひ放つ樣子の、常になく凜とせるに、此のたびは小山より笑ひかけて、お繁の機嫌とり〴〵、强ひて其れとも言ひ出しかね、今夜は用もあればと、しを〳〵還りかゝるを、お繁もさすがにあはれと見て、門口まで送り出し手にまた引き留めぬ。

（八）

繼母が口を酸くして、やッと小山まで出し遣しり以來、お繁はつい傍の湯屋、八百屋、荒物屋など、往かで叶はぬ所へだけ、成るたけ客の居ぬ時刻をはかりて買物に行く外は、町内はおろか、二丁と踏み出すこと稀なり。

「伊三さんとこの人はみんな變屈だよ、伊三さんがゐなくなッてからといふもの、母子の顏を見たことがない。と近所の噂が陰口を、今日ばかりは嘘にして、お繁は娘をつれ飯田町へ餘儀ない用達しにと出で行きぬ。

「さあ〳〵此方へお向き、お羽織の紐をちやんと斯う結んで、まだだよ、手巾を忘れてはいけないよ。

と手巾を例の通りに巻きつけやり、疵のあたりを殊さら氣にして二三度なほし、少し離れて眺めながら、覺えず自分の頤を押へて吐息つき、同じ疵でもわたしのとは譯がちがふ。隱さねばとて、可愛さうとこそ思へ、誰れ笑ふものもあるまじき娘のに引きかへ、隱しても〳〵、見えすくかと人目怖ろしいわたしの身。どうせ新聞種にまでなッたのだもの、構ふものか笑ひたくば笑ふがいゝと、家ではあきらめてゐても、いざ人目となればさすがに心苦しく、どうも外出がしたくない。急

「どんな事ですか。
「聞かして下さいよ氣がゝりだから。
「いづれ新さんといふ方から、緩々申しあげるさうです。
斯んな事に時たちて、座も落ちつき、小山の語る所によれば、二人の情交(なか)早くも近所の取沙汰より漏れ、やがては署員の耳にも這入る虞れあれば今の内に工風せではかなはず。今一つ萬が一の用心は、お繁の籍を取り戻し置くが上分別ゆゑ、其れに女の心底見せさせん小山の望なり。お繁は此の談聞けども、さして驚きたる氣色なく、
「そら御覽なさい、言はない事ぢやありません。あなたそれがお役所へ知れたらどうなさる、わたしよりか、あなたの身のつまりぢやありませんか。どうツて、今さら爲(し)やうもないけれど。
とちよツと思案の體に、首を曲げ、
「わたしや思ツた通りを言ひますから、怒ツちやいやですよ。それはねえ、當分のうちあなた遠退いてゐて下さいな。さうすれば、まだ間のない事ですから、些(ちつ)とや少(そつ)との噂ぐらゐは、獨りでに消えてしまひます。それからどうとも方さへつけて下れば、わたしも安心するし、あなたの身分にも障らないで濟みますよ。
「そりや本氣で言ふのかい、お繁さん。愛憎盡(あいそつ)かしや、お爲ごかしで、逃げるなんざ、此の頃はやらない手だよ。他に善いのが出來たから切れるなら切れると、さらり打ちまけて貰はふぢやないか。筋さへ立てば、それを四の五の言ふ野暮でもないよ。
「そんな厭味ッたらしい事は止して下さいよ。わたしはわたしの思ひつきを言ッたばかしですもの、可(い)かなければ可かない

まじりて空に還るといふ、七色のそれならねど、日數ふるまゝに、夫なつかしく、小山憎く、我が身疎ましき心の色、いつしかぼうとぼかさるれば、褪せず殘りし斑點一つ、今さらのやうに心にかゝり、來て吳れといひし新之助が、其の後弗に姿を見せぬは、やッぱり夫婦を見かぎりての事なるべし。さりとは短氣な、あれほど賴むやうに言ひし心を酌みもせず、我意を張り通すとは、それほどの人情知らずでもなかりしにと、來られぬが當然の義理辨へぬ程のお繁でもなけれど、恨に翳す愚痴の雲拂ひかねて、來ぬとなれば來させて見たく、逢ッて話して、問ひ慰めもして見たく、是非に今一度呼び寄せる工風をと、さまぐ〵思案し、仲間うちの縺れで是非に聞きたき事あり、他に待ち合はす人もあればと言ひこしらへ、幾年硯箱の抽斗に黃ばみたる卷紙に覺束なき墨のあとにじませかゝれば、丁度門口に足音忍ばせて入り來し小山、はッと思ひ、採み皺めて背に隱せば、其れが怪しいと、くすぐりこかして引ッたくり、展ばし見て、

「なにく〵、さッそくながら申上まいらせ候。すこし色氣が無さすぎるね。や、あるぞく〵、あすのゆふがたよりと書き捨てた所なぞは、なかく〵以てお安く無い。こりや此のまゝには見のがされんぞ。あなたの所へだと。へん何所のあなたか、知れたものぢやない、口は重寶さね。拙者、さうさね、別に用といふ程でもないから、お邪魔なら歸りませうか。

「憎らしいよ、勝手になさい。

「では引きさがると致しませうて、實は少々お互の身の上にかゝる事で、いや止しませう、ぐづく〵してゐて、叩き出しでも喰ふとつまらない。どら。

と立ちかゝるを、お繁は輕く制して、

「身の上とはどんな事ですよ。

とすりや、醒めて義理の世間のと言ッてるのは、あと二十五年だらうぢやないか。それでお互に、其のまた半分は疾うに打ッちやッて來たのだから、全々夢にしても十年ばかり、少うし長い轉寢だと思へば濟む、其の夢を是非わたしが貰ひ受けるよ。河豚鍋と他人の女房に箸を取るからは、末は覺悟さ。お繁さん、いゝかい。

お繁はうつむいたる眼に潤を隱して言葉なし。外の方は心の闇に新月はやく落ち、葛の裏葉の恨長き蟋蟀、戸に來て鳴くが聞こゆ。

二人が中の果敢なき夢は、斯くて一度が二度となり、二度が三度と重なりぬ。お繁も初手こそは、嗔恚の燄ふりかぶッて、平鑿逆手に睨みつける夫の面相まざ〳〵と、眼をふさげば其所にも刹那、此所にも刹那ちらつきて、我れからおろす心の咎絕え間なく、小山といふ聲にもぞッとして、命を刻むおもひなりしが、脆きは人心なり、其れもしばしが程に薄れ行きて、昨日とたち今日とすごす憂き月日、曇り勝なる胸もいつしか開けかゝりて、終日おもひ續けし夫の事、身の事、後には日に二度となり、一度となり、全く思ひ出さぬ日もあるやうにて、お淸を相手のあどない話に、賃仕事の針の運びも輕く、拭掃除すまして後は、夕餉の膳に笑顏見することもあり。兎もして思ひ沈む事あれば、我れと力めて忘れう〳〵と、餘の事に氣を紛らすが癖となれり。

されど、小山いとしと思ふ心の、お繁にきざせりとは見えず、をり〳〵見まひ來る繼母が、今日も通りがけゆゑ寄ッて來ましたと、小山の噂さとりたつるを、別に初ほどおぞけ立てゝ嫌がりもせねば、惡くも言はねど、身を入れて聞くとにもあらず。「あの方はほんとに賴もしい方だ。と繼母が褒めそやせば、「賴にもなるけれど、何だかいけすかないよ。と冷に話をつなぎ、さして氣にも留めぬ樣子。

うか、え、お繁さん、先日(こないだ)の嬉しい夢をお忘れかい、先日(こないだ)の。

「しッこい事ねえ、あなたも。

「しッこくもならうよ、一年越しの戀だもの、小やさしい事で了見されるものかね。しッこいのがお氣に召さずば、ねえお繁さん、あッさりもので賴むぜ、ついちよいと。

「うるさいぢやありませんかね。

「へん、あんまりうるさがッてもらふまい。斯う見えても男の端だ、邪魔にされゝば意地づくでも退けなくなるが人情よ。弟見たやうなのがあッて見れば、どうせ此方は五月蠅からうさ。それを承知で思ひ切れないとは、よく〳〵の因果だらうよ。

「また新さんですか、大抵におしなさいよ。わたしのいふのは、其んな浮いたのぢやないと、あれほどいひますのに、あなたも聞きわけて下さらないねえ。そりやお志しはわたしにだッてようく分ッてゐますけれど、斯うした身になッて見れば、つい思ふやうにもならないぢやありませんか。其所を察して下さらないあなたでもあるまいし。

「おい〳〵お繁さん、とぼけちやいけない。そりや斯うならない前にいふ事よ。お前さん、此間のことをお忘れかい。

「ですからさ、醉つたまぎれにあんな譯にはなッたけれど、どうも正氣ではねえ、世間が恐ろしうございます。どうぞあの事は、ほんの轉寢(うたゝね)の夢だと思ッて、あれッきりにして下さいよ。わたしも果敢ない夢を見たと諦めてゐます。今で思や、いッそ醒めないなら、醒めない方が善ござんしたよ。

「その醒めない夢が見せたさにさ、はぢかれても五月蠅がられても、斯うして懲りまず通ふのぢやないか。お前さんも察しが無さすぎる。ねえ、分別女と聞いてたが、此所は分別の為(し)どころだぜ。積ッても見なさい、人間五十年が半分を寢て過す

いねえ、と慳貪に叱りし聲にわれと氣がつき、抱きよせてつく〴〵見れば、これも苦勞の一つ、此のいたいけ盛りを、何の因果で憂き世見せるか。親はあのざまと、後指さゝれて、兒供ながらもさぞ肩身せまからうと、ほろりとなるを、其のまゝ頰ずりに紛らして、

「おゝ冷たいこと、お前寒かッたらうね。さあ〳〵歸りませう、おッ母さんが負んぶしてやるよ。と其所にしやがめば、四谷の臺より下し來る風ひやりと領を嘗めて、監獄署の森に飛び行く鴉二羽三羽。

（七）

床上してよりは、お清とたゞ二人きりの家の内、齒のぬけしやうに淋しく、秋のあはれ一しほ身にしみて、なにとなく涙さしぐまるる夕ぐれ、お繁は今日の事胸につかへて、何となる身のつまりぞと、夕餉したゝむる氣もせず。床のべてお清を寢かしたる後は、一人寂として洋燈の心に油たつ音聞くともなく思ひに沈みゐる所へ、ほろ醉ひ機嫌の小山復たをとづれ來て、浮世話やら、世辭やら、冗談やら、おもしろをかしく囃したつれど、女はきく〳〵返事もせず、小山ももどかしがりて、話をすぐ思ふ方に向け、今宵は此所に泊りこみもせん景色に、お繁は堪へかねて、

「小山さんもう晩うござんすよ。世間の口が五月蠅うございますからね、今夜はお還んなすッて、復た入らして下さいな。

「こうお繁さん、それでは濟むまいぜ、あれほど盡すわたしに濟むまいぜ。お前さんが今になッて、幾ら綺麗だてをした所で、一度汚れた體が舊のやうになりはすまいし、お前さんの言分ぢやないが、どうせ龜裂のいッた道具よ、さうつんけんしなくても可いぢやないか。お前の顔が見たいばッかりに、斯う役所の方までやりくりして日參するのだ、機嫌なほして貰は

目元に少し力を入れてきッぱり言へば、お繁は其の顏じッと見つめて、霎時言葉なく、やがて、

「お前までさうお爲かえ。と沈んで沁るやうな聲音。

「でもおいらは面白くねえし、お前だッておいらが出入えるかぎりや、何とか言はれらあね。是れッきり往來しねえ方がお互への爲だ、恨まねえで呉んね。

お繁はやゝうるみ聲、

「わたしや恨だよ。とあと言ひかける時、どッと笑ふ聲茶屋の方に聞こえて、覺えず顏上ぐれば、門を這入ッて左へ、夕日あか〳〵と殘れる建物の角を、片手は洋劍の柄に、片手は辨當箱提げたる黒き影一つ、見るよりお繁は顏色かへ、「後で來てお呉れよ、是非。と一言殘せしまゝ、お清の手を引きすた〳〵と田圃の方へつッ切りぬ。鐵管運ぶ軌路のほとりまで來て、見かへれば、行燈立てたやうな代書所、皿伏せたやうな辨當屋の屋根に、ありし人影隱れ、風をり〳〵梢を揉む音聞こゆ。

ほッと息して動悸するあたりに手をあて停立めば、小山が今の體見知りてまた如何なる難題や持ちかけると、心安からぬは是れのみか、昨夜の夢占そのまゝに、新之助が所思かはりて、これ一重はと恃みし身の皮剝がるゝおもひ。夫のゐぬ身今さらに心細く、一人退き二人退いて、世間は遠ざかる、不幸は重なる、あれほどにした新さんまでがと、浮世はかない氣もすれど、思へば他人に無理はなし、打たれても叩かれても、笞のあとの恩愛に、親身と縋るは夫ばかりと、當座悄いと思ひし事も、過ぎし情に消され、今となりては一すじに夫なつかしく、いや〳〵夫待たれる身ではなし、とまた忽ち、我が上に心おどろいては、ながらへる身がつらし、何方ら向いても悲しいは因果、ゑゝ一とおもひに此の胸むしッて棄てやうかと、よろめく體を掴りすてし鐵管に倚せかくれば、「おッ母さん何うするの、あたいもう歸るッてば。と鼻鳴らすお清を、五月蠅

袂を引かれて、「あい今歸りますよ。とお繁は機械の如く答へしまゝ、なほぼうとして署の方を眺めゐるに、門前一面の敷砂利ひろ〴〵と、秋の日脚の傾くこと早し。

四谷と牛込との境り合ひに通ずる新宿街道を落葉はら〳〵と、夕日影片身に受けて、小包ぶら〳〵來かゝりし若者、お繁の前を通りぬけんとして、ふと見つけ、

「やあ、姉御か。と急に門の方を見かへり〳〵眼に、あたり一遍見まはして、

「どうしなすッた。

お繁も轟く胸に人目憚りながら急きたる調子、

「お前こそどうおしだえ。

「どうのかうのッて、方のつかねえ事になッちやッたなあ。伊三公はとう〳〵ぶち込まれたッてね。其の爲だね、こけへ來てゐなさるのは。おいら氣味が惡いもんだから、歸らなかッたのよ。お前がやられたてのは其れかい、もうすッかりいゝんだね、危ねえこッたッたなあ。おいらまた、お前の所へ往ッたものか往かねえものかと、一人でやきもきしてゐたぜ。つい其所いらに居たのよ。近えもんだから、翌日には樣子が知れちやッた。もう大丈夫てえから歸ッて來たのよ。さうだなあ、いやにじろ〳〵見やがらあ。お前の所へかい、別に用はねえだらう。實はお前にだけ斷りいッて、當分行くめえと思ッてゐたのよ。

「え。とお繁は眼を睜りぬ。

「伊三公た、もう縁を切らうと思ッてるのよ。

太ながらおとなしき姿湖風と共に、これも何れは浮世の廢たれものが、朝暮のたつきあはれな禿筆耳に挿んで道理くさい顏付。掛茶屋と銘酒屋を折衷した、名は辨當屋が床几には、二三人一とまとひの客まだ居殘りて何か笑ひさゞめきたる、いづれも歴とした身のまはりの、是れが在監人に緣の者とはをかしな譯さと、此方につッ立ッて人待顏の老人がつぶやく側には、少し離れて、ぼんやりと門の內眺め入るお繁母子の立ち姿。

「おッ母さん歸らうよ、おッ母さんてば、其方へ行くのぢやないよ、妾嫌だッてば。

と含み聲に早や淚ぐんで、母の袖下をするり、背後よりちく／＼と袂を引くお淸、體の割には面すこし大きけれど、ぱッちりとした眼に睫毛濃く、頰豐に、二重顎の可愛ざかりも今一二年と、かたへの老人覺えず見恍るれば、お淸は何と思うてか、じろりと額越しに睨んで體をひねり、袂の蔭に半面出して猶もまし／＼と此方の氣合を窺ふこなし、前のあどけなさに引きかへて、眉目淋しく何とも知れず嫌なるに、よく／＼見れば、仔細はこれとおぼえて、耳の下に燒痕のあと長く、上向になるたび物いふたびに、口をへの字にひッつりて泣き出すやうなり。頸にまきつけし手巾に人目よける母が心づかひ哀れに、幼きもその心を得て、日頃年頃、「ひッつりやあい、べそかき娘。と長屋中の餓鬼等にいぢめられるが口惜しさの友達ぎらひ、自然と氣も心も僻み曲りて、人の目色に我が不具を苦にするひねたる智慧もつきしと見えたり。

お繁の瘡とお淸の燒痕とを見くらべては話しゐたる二人連の婦人、

「可愛いお兒さんですこと。と此方を指す聲に、お淸は例の眼をぢろりと其方に向け、聞き耳立てゝ、惡口ではなかッたと、褒められし嬉しさは直ぐ笑顏にこぼれて、元氣よく其所ら駈けまはるを、彼に眼をつくればまた忽ちしよげ返りて、袖の下に隱れぬ。

お繁さん〳〵と、そッと搖り起こされ、目を醒せば、さても淺ましい身のしだらに、お繁あッと動顚して言葉も出でず。此れは何とせう生きて居られぬ身になッたかと、夜具の襟に顏掘り埋め、たゞ夢心地なり。小山がまめだちて、世話し吳れるもうるさく恨めしく、やッとの思ひに身繕ひして、よろめく足踏みしめ、小山へは挨拶もせず降り立てば、送り出して下駄まで揃へくれる其れに目もくれず、門口にしよんぼり待ッてゐるお淸にも氣づかぬ樣にて、ふら〳〵と家路へ辿りぬ。每時もたよりにする酒屋が街燈の、まだ夕日影消えぬ中に赤くとほれる、遠く〳〵何十里かの先にちろ〳〵燃ゆる火と見えて、身は涯知らぬ荒野にさまよふ如く、ぼうとたゞ一となだれの響耳に入るばかり。其の中より突然圖ぬけて高き聲一調子、「そをら見ろ、あれが例の姦夫だ、なに姦婦だ。と耳元に響くと覺えて、ありし幻ぱッと消ゆれば、擦れちがひざまに我れを指さし行く二人連れの書生。早やわが事あらはれしかと、ひやりとして聞き耳立つれば、「顎の瘡が貴樣には見えんか。とあたりかまはぬ高話、さてはその事かと、はッと片息、はじめて側にゐるお淸に氣がつき、おゝと抱き上げて、死人のやうな我が顏さしよせ、つく〴〵と見まもる眼には、露おきぬ。

病氣なりとて臥床に入りしまゝ、お繁は次の日も一日起き出でず、其の次の日、伊三が公判も今日確定といふに、小山が心添へにて母子はこれを限りの面會に、一年がほどの惜しき別かれ、盡きぬ淚、しばし隔ての手摺を千重の關とも、守る獄丁の人目忘れて泣きくづをれぬ。誰も怨もごッたかへせるお繁が胸には、今日の淚の色や濁る。窶れし姿見せじの身だしなみに引きかへ、伊三が薄髯延びて光る眼いよ〳〵凹く、堅くむすびし口に不言の恨今も我が身の上かと怖ろしく、悲しく、思ひし事半ば言ひ殘して出でぬ。

市ケ谷監獄支署の門前には、差入、面會、出獄人の出迎と、日々の混雜も、今日は朝より一しきり形づいて、代書所と筆

の氣が知れない、譯も知らないで、やたらと囃し立てゝさ。

居ずまひ少し崩れて、赤くうるみさせる眼に小山を仰ぎ見る。小山も顏銅色に染めて、舌なめづりし、

「なるほど、いかさま。そこで一つ頂戴とし樣か、杯や疊の紋でないねえ、少し浮いて貰ひたいね。おッとゝあるく。改めて一つ行かう。斯うさし向かひで、お神さんのお酌とは實以てうれし涙が零れるよ今日は。ねえお神さん、久しい念が、やつと屆いたといふものだぜ、へゝゝゝ。

「ほゝさうですか、此んなお婆さんでよろしくば、いくらでもお酌してさしあげますよ、さあお重ねなさい。

「ありがたいぞく。ではも一つ。

と、杯出して、銚子持つ手を把ッて引き寄せんとすれば、お繁は振り切ッて少し座をすさり、眼に微笑を湛へて猶も小山の顏眺めゐる。小山は杯さしてわざと高笑ひ、

「はゝゝゝ、今度はわたしがお酌させて貰ふかね。

「ありがたうさま。

お繁は座をすべッたまゝ、また浪々と受けぬ。どうといふ氣は微塵なけれど、これが自分に焦れ寄る人かと思へば、醉ひに浮かれ心輕く、うれしがらせの一つも言ッて、猫のちよッかい、遠くから手のみ出して弄んで見たいやうにもあり、謀ると思ふうち、何時か謀られて、日暮るゝ頃まで其所に醉ひ臥したり。

(六)

出し、もし此の場の體たらくを見せたらばと慄然と冷水浴びし如く、空怖ろしさに見る〳〵顏の色動けば、

「お神さん氣にさへちや困るよ。斯ういふ無愛憎ものだから、あなたが可愛さうだと、思ッたまゝを、ついべら〳〵饒舌ッちやッたのだ、大失策々々々、え、惡く思ッて下さるな。

いやと思へば見ること聞くことみないや氣さして、お繁今にも飛び出さうかとしたれど、じッと思慮して、顏色も了見も落ちつけ、

「そんな事はございませんよ、何だか急に氣分が變になッたのですよ。と尙も沈み居たりしが、前なる杯取ッてぐッと一と飲み、「はいさし上げませう。とつきつけられて、小山ちよッと狼狽へ、拔ける仕度かとすぐ他の杯を楔にうてば、快よく受けて、之れも乾かしぬ。それと見て小山はいそ〳〵、今一つと強ふれば、「もう澤山でございます。と遠慮しながらも、何時かまた受け、病後の酒の利目早さに、顏に紅走らせて、醉の囘はるにつれ、膽もすわり、今はさゝれる杯さのみ辭みもせず。下心ある小山が慫強ひに本性みだれかゝりて、舌おのづから滑る頃、

「あなたは若い衆〳〵と仰しやるけれど、新さんはまだ子供も同然なのですよ。あなたにまでそんな事おもはれてはわたしや實に悔しい。世間ではいろんなことといふさうですけれど、わたしはどうせ斯うなッた體ですもの、知ッてる人さへ知ッてゐれば知らぬものには何とでも言はせて置きます。つれあひが赤いべゝ着たといへば、其の女房は鬼か蛇のやうに世間ぢや思ひますけれど、何の構やしません。どうせ捨て鉢の、龜裂の入ッた體と諦めれば、五十年の命を横にひろく過ごしても濟みます。たゞ可愛さうなは新さんですよ。情婦稼ぐのと人の女房を寢取るのは、譯が違ひますからね、此れからが花といふ若い身そらを、わたし見たいなものでしくじらせるのは、可愛さうぢやありませんか。ねえ小山さん。ほんとうに世間の人

とはかく〳〵しくは話しもせず、

「大丈夫、瘡口が癒えさへすれば、却ッて少しづゝやるのが血の循環を助けていゝ。わたしを御覧なさい、飲み通しても此の通り治るときには治る。今日は兎に角お祝のつもりでゆッくり飲んで下さい。飲めなくば、半日だけ暇をわたしに呉れたと思ッて、話して貰はふぢやないかね。さあその杯もらひませうか。

小山は四方八方の浮世話おもしろく語りつゞけ、三四杯重ねてまた差すと、同じやうに辭退して同じやうに受け、三度目は我れからずッと干して催促せられぬうちに返杯すれば、見事々々と押さへて銚子さしつけるに、早や目の縁ほんのりと、もう〳〵いけませぬと、杯わたさうとするを片手に止めて、復たなみ〳〵と注がれ、あらしやうがございませんねえと、ちよッと口をつけて下に置く。

小山は何がな話を手ぐりよせんと、

「新さんとかいふ若い衆は、その後何とか便しましたかい。

「いゝえ、あれッきりでございますよ。あの人も飛んだ目にあッて、何所をうろついてゐますか、世間の口が五月蠅いとでも思ッて、氣をぬいてゐるのでせうよ。

「何だか知れもしないものを、あんな目に逢はすとは、伊三さんも随分非道人だね。いや、是れはお神さんの前でいふのではなかッたッけ、ハヽヽ。併し兎に角非道いよ。肝腎な對手を取り逃がして、女房に斬りつけるとはいよ〳〵激しい。

伊三とは六年このかたつれ添うて、お清といふ子までなせし中なれば、たとへ斫られても撲られても、まる〳〵憎いものではないが人情なり。まして、まだ夫と頼む心のお繁には、小山が蔭口うれしからず、話のいとぐちに、過ぎし夜の事思ひ

鬢櫛とッて邪慳に亂れ毛搔きあげながら、坐ッたまゝ箪笥に凭れてゐるお繁、少しこけて蒼みさせる頰のはづれに、知らぬものは良からぬ腫物の痕かとも見る瘡痕あざやかに、もとの顏相はやゝ崩れたれど、一分の凄味に却ッて顏が引ッ立ッたとは、强ち小山の世辭のみにあらず。臺所にては母のなほ口やかましく、小山へ禮かた〲行かねばすまぬと言ひ募るに、

「おッ母さんはまだ小山さんの腹を知らないのだよ。差入物の世話までして、それほど親切氣があるなら、何故あの時願下にして呉れなかッたらう。自分で牢に入れて置いてさ、親切ぶりを見せつけるのとしか、わたしには見えない。何のそれ位のお金をそんなに恩に被ることはないよ。今にわたしが稼ぎ出して返して見せるよ。さうお言ひだけれど、伊三だッてそんな悪人なのぢやない、たゞ折々一徹なことをするばかりだよ。今度の事だッて、本の起りは小山さんだといッてもいゝ。小山さんの方がいくら腹黑だか知れやしない、別からないねえ、誰もお前が悪いと言ひはしないぢやないかね。もう〱いゝよいゝよ、そんなにお言ひなら行ッて來るからいゝよ。お鐵の下を搔き起こして置いておくれ。

（五）

いやがるお繁を無理におさへて酒にしたる此所小山が家の奥の間、

「飮めると聞いてるから、まあ一杯受けて下さい。何もないけれど二人の全快祝といふ心だ。ハヽヽ二人と言やおかしなやうだが、やッぱり二人に違ひないからね。

お繁は厭な心地して、受けし杯其のまゝ下に置き、

「どうぞもう、いえ、平常なら少しは戴きますけれど、病中でございますから。

せん。今のうちに見かぎッてしまへといふんですけれど、娘の返事が煮え切らないので、まだどちらとも定まりません。孫が可愛さうだと申しますけれど、あんな父親よりか見ず知らずの他人の方がまだしもましでございます。飛んだ疫病神に見こまれて、娘も災難、わたくしども〻災難でございます。おゝそれ〳〵、ついお饒舌に實が入ッて。あなたさまのお痛みは如何で入らッしやいますか、少しは除きましてございますか。おやさやうで、はあさやうで、それは何よりでございます。どうぞまあ御用心なすッて。わたくしでございますか、これでもう六十に手が屆きます、ほゝゝお口のよい事ばかり、昔の十八も斯うなッちや、意氣地はございません。はいお蔭で體は達者でございますけれど、

と鐵漿まだらな鰕の土手に泡沫嚙み〳〵、小半時も立てつけられて、小山はうんざりし、

「お清坊また遊びにお出でよ、お爺さんが昨日よりかまた〳〵善いものを買ッて置くからね。と談をそらして立ちかゝるを、又さらに見供のお禮思ひ出したやうに繰りかへされ、もう〳〵そんな事御無用々々と、逃げるやうに歸り行けり。

其の翌日の事なり。

「お前も情が剛いねえ。そんな事いはないで、少しは出かけて御覽よ、昨日今日のお天氣のいゝ事ッたらないよ。そら小山さんの前の茶畠ね、あすこの桃がすッかり返り咲してさ、これがほんたうの小春日和てんだよ。

「おッ母さん、もうよしてお吳れよ、今日は何だかいやあな氣持がして、何所へも行きたくないから。あらさうぢやない、おッ母さんまでがさう僻んでは、しやうがないねえ。何も一所になッて小山さんを憎がるなんて、そんな譯ぢやないよ。分かッてるよ、斯うして遣ッて行かれるのも、療治代だッて差入物だッてみんな小山さんのお蔭の事はようく知ッてゐます。だから行かないとは言ふまいし、さうがみ〳〵言ッてお吳れでないよ、氣分に障るから。

（四）

お繁の瘡は縫ふほどの事もなく、一週間ばかりの自宅療養に、瘡口あらかた乾いたり。小山が二の腕の疵は案外に深かりしかど、それを事ともせず、殆ど毎日のやうに見舞ひ來て、お繁へつくす親切一通りならず。事ありし夜より來てゐて、看護から子供の世話、家事萬端に忙がしい身ながら、小山さんといへば何を措いても飛んで出て、毎時も同じやうな禮くりかへしくりかへしていふ、お繁の爲には繼母ながらこれ一人の母、心から有りがたく思へばこそ、今日も迷惑がる小山を押へて、

「あなたまあ御一服召しあがつて下さいまし。お蔭さまで彼れも命拾ひ致しましてございます。と何から何までの世話の禮、命の親とも、神佛とも拜んでゐるといふことやら、飛んだものに拘りあつて御迷惑であらうといふことやら、およそ十分が程も述べたてゝ、

「あれからでございますか、一二日といふものは全で夢中で、それといふのも矢張り熱の爲でございませうよ。やれお清が可愛さうだの、新さんが氣の毒だのと、囈語をいふかと思ひますと、すや／＼と眠りますし、醒めてぼかんとしてゐるから正氣かと思ッて、何か話をしかけますと、取り留めのない應答をしまするし、もう埒はございませんでしたが、それでも三日目あたりから正氣にもどりまして、氣分が慥になると瘡の方はずん／＼よくなりましてございます。おや／＼伊三の事でございますか、御免なさいまし、年を取りますとつい斯うなので困りますよ。あのわからずや、何う思ッてをりますか、どうせ碌な事は考へやしますまい。あゝなりましたも皆んな自業自得でございます、誰れを怨むこともありやしません。娘や孫にも申すことでございますよ、あんな亂暴者は、此方で素直にしてゐるとつけ上ッて、何んな事をしいだすか知れやしま

に金覆輪の鞍おいて。と軍記物朗讀に晝寢の夢を驚ろかすが常にて、近頃は小金も廻ッて、追ッつけ此のつゞきに貸長屋の一棟も建てるさうだと、車屋の帳場では噂しあへり。

今日は珍らしく小山の家に岡持提げた魚何の子婢が出這り、晩酌の膳には二種三種の肴箸もつかずに竝んでゐる。主人ひとり夕方よりちび〳〵と飲みはじめ、心待ちに今か〳〵と待つ客は、お繁なり。折々にや〳〵と獨笑しては、ふと戸外の下駄音に耳たて、首をひねッて考へながら、ぐびと飲む。暮れて半日も經ッたつもりで時計を見れば、まだやッと七時すぎなり。彼女もさう早くも出られまいて。と早や情婦でも待ち合はす心に、此方から道理をつけ、それよりおよそ二時間ばかりも待ッたれど、お繁は遂に影も見せぬに、さてはやッぱり欺したのか、と怒氣醉にまじッて心頭に起こり、よし〳〵、さういふ心なら、今に見をれ、と憎さ腹立たしさの八つあたり、四谷へはどう參りますか、と路問ふ人を、此所は交番でないと驚かし、明皿取りに來た肴屋を、夜逃はせぬと怒鳴りつけ、立ッつ居つしてゐる間に、何時か、兎も角も谷町の方へと、戸に手のかゝる時、突然多人數の走せ來る音あはたゞしく、人殺しと刺し通すやうな叫び聲耳を貫いたり。

さすがは本職の小山、あり合ふ棒押ッ取ッて、刻下に躍り出でぬ。出合がしらに見れば前なる女はお繁、や、といふ間もあらせず、袖下をつッと小山を楯に身をかはさんとあせれば、追ッかけ來し男は一摑と手を伸ばす、其の手を取ッて引ッ伏せんとするに伊三は眼昏んで半狂亂、「えゝ、何しやがる。とめッた斬りに斬りつけ、振りほどかん〳〵踠くを、組みついて加勢の人と共に取り押へたり。

翌日より伊三は未決監に入りて、小山の世話受くる身となりぬ。

みぬ。
「おいらまた伊三公が毎時の小ッぴでえ事しやしねえかと、心配してたのよ。お前ひどく顔色が悪いぜ、どうかしたのぢやねえか。
「やッぱりね、氣分のせいだらうよ。宿にも困ッてしまうよ。わたしやほんとにお前さんに氣の毒でならない。どうぞね、斯うして苦勞するわたしが可愛さうだと思ッて、見すてないでお呉れよ。
溜息ほッと月に白く、ほつれ毛かゝる顏を少しかしげて、新之助の顏しげ〳〵と見るに、何時しか氣持夢のやうになッて、懷かしいのか、何とも分からぬ感ぼうと行く手を立ち籠むる。新之助は見つめられて間がわるく、下向になッてこれも溜息。
「そりやお前。と言ひかゝる刹那遲く、「うぬ畜生ッ。と物蔭より躍り出でし伊三は鑿ひらめかしてしやにむに突いてかゝる。二人はびッくり新之助は右へ、お繁は左へ、一散に逃げ出すを、新之助が跡を小半丁追うて取ッて返し、監獄署の裏門前にてお繁に追ひ付きさま一つき、手元狂ひて右の顎より肩にかすれたり。お繁は覺えず人殺しと一聲叫んで、懸命に逃げ行くを、やらじと追ひすがる。
市ヶ谷監獄の裏門につゞいて、一棟のそぎ葺長屋あり。臺所とも三間ありなしの、同じやうな間取四軒に割ッて、一軒目は、此所らの湯屋で群雞の孤鶴と稱へられる、黑人あがりのお神で名だかい車屋。次ぎは姓が岡野で家號が風月堂といふ菓子屋、店には堅麵麭のビスケットに一つ五厘のカステーラ、黑餡の窓の月も乃至鐵砲玉も紅梅燒も同居する。其の隣は看守の小山庄之進が住居なり。まだ妻もなければ婢も置かず、手づから辨當詰めて、後は戸締のまゝ風月のお神さんに、よろしく賴みますと出て行く手輕な身分、非番の日は宅にゐて、幅のある聲高らかに、斯かる所へ武者一騎、太し逞くき栗毛の駒

「もう何時かしら、まだ寝やしまいねえ。と起き上るお繁、頭は割れるやうにて、襟元ぞッと惡寒く、帶しめ直す手も震へて、心細さ今更のやうなり。ぼんやり燃ゆる洋燈の心掻きあげ、娘の寢顏をじッと見詰めるに、何となく悲しく、おのづとにじむ眼を、夫の方に向けて、「ぢや行ッて來ますよ。と其のまゝ戸外に出づれば、時しも神無月二十日の霜影冴えわたり、淸光水の如く全身を浸して、顏蒼白く、地に引く影細し。

（三）

小山が底意もおよそは見すけるを、手放してお繁を出して遣りし伊三が腹には、また別の考へあり。體のよい事いッて、お繁め何所へ行く氣か、小山方としても、二人馴合ッての事ではないか、それとも小山めがどんな怪しからぬ事するのかも知れぬと、出し放しにして置く氣は微塵なく、お繁を出しぬいて、すぐ跡を蹤け、密と行く先をも、爲んやうをも見屆けんと思ひ極めしなり。其の内にも若しやと想像して見れば、惣身の肉動いて、じいと腸引き出される如く、一刻の猶豫もなりがたし。お繁が下駄音からころと次第に遠くなるを聞きすまし、むくと起き上りて寢衣の上に三尺きりゝと手早く締め、萬一の用心と、道具箱手探りにあり合ふ平鑿を呑んで、草履つゝかけ尻はし折り、震ふ足元に溝板の音立てじと氣を兼ねて小走り行く。

通りに顏さし出して透し見れば、眼の屆く限りがらんとして、街には黑きもの一ッなし。足音も聞こえぬは、てッきり脇道に外れたに相違なしと、はや胸どきつかせ、尙も二丁ばかり、心のみあせりて、安敎寺坂の曲り角まで大股の忍び足、此所よりも先づ顏つき出してそッと窺ふに、意外や、直ぐ鼻先に立話してゐるは、お繁と新之助なり。伊三はあわてゝ引き込

人を欺す了見かと、それが第一氣に入らず。無言で眼を光らせるに、
「それとも大丈夫とお思ひなら、來てお吳れな。わたしは何方にでもするから。
「いゝや止さう。と激しくいふ。
「ではどうするの。
「どうもしねえ。其のまゝ打ッちやッとくさ。と飽くまでお繁を艱しめる心。お繁も今はあまりの執念さと小面憎く、
「さう。と冷かに言ッたまゝ、堅く口を結びぬ。傍には夫婦が修羅を他所に、温みさせる玉のやうな顔すこし仰向けてすやすや睡れるお清の、寢息高く聞ごゆ。
やゝ暫時して、伊三は思ひ直したる體、二三度唇むづ〱とさせて、遂に彼方より口を切りぬ。
「矢ッ張りお前一走り行ッて、金の所どうすりやいゝか聞いて來ねえ。え、おい、お繁、お前行ッて來て吳んねえ。
女は意外のおもひ。
「わたしや止さうよ。
「それで、おいら何うなッても構はねえてのかい。でなくば行ッて吳んねえ。え、おい。
打ち解けたる樣子の故とらしきに、女は尙も半信半疑。
「行くことは行くけれどね。お前も來てお吳れな、わたし一人ではいやだよ。
「そんな事言はねえでよ、おいらが行ッて打ち毀すといけねえから。
厭がるお繁を無理押しつけに承知させ、小山が寢ぬうちにと急きたてたり。

もなれば、些とはわたしの氣心も知れさうなもの、きのふけふの中ぢやあるまいし、かうしてお清といふ子まであッて、つい當座の馴れ合ひ夫婦とも譯が違ふに、あんまりぢやないかえ。そりやもう、足らはぬだらけだらう、だッて、まだこんなに疑ぐられる覺えはないよ。怪しいとお思ひの事があるなら、ずん〳〵と言ッてお呉れな、一々お前の腑に落ちるやうに言ひ開きして見せるよ。其の上でまだ不審があるなら、此の體はお前のもの、何うとも存分にしてお呉れな。わたしや斯うしてゐるのは實につらい。

伊三もやゝ心動いたと見え、返事に當惑の語氣ゆるみて、

「お前はさうでも、對手が承知しめえよ。おいらを措いてお前に來いたあ、どうしても尋常ぢやねえ。太え奴もあッたもんだ。お前行く氣かい。

「行きたくはないよ。何だか怖いやうで。

「ぢや斯うしねえ。兎も角もお前行ッて、當然の應答だけして、何とか言ひ延ばして見ねえ。おいらは跡からついてッて、巫山戲た眞似なんかしやがッたら、取ッちめて逆捩を喰せてやらあ。さうすりや兩道だ。

「さうねえ。とお絮は思案の體、見るより伊三郎の血相はまた變ッて、

「不承知けえ。と五音鋭どし。

「けれどねえ、對手もなか〳〵喰へない代物だよ。お前が飛びこんで、却ッてむづかしくなるやうな事がありやしないか。それよりか此所はわたしがどうにか欺して、延ばすのが術だらうと思ふよ。

疑ひの根一度生えひろがりては、またしても芽の出るならひ、伊三は一圖に自分を邪魔にするものと聞き僻め、色仕掛に

「實はねえ、疑ぐられるのが厭さに今までは言はなかッたけれど、お前さんと小山さんとは談が合はないから、わたしに來て呉れ、何とか相談にも乘らうからと、小山さんが二三度わたしに言傳して寄越したのですよ。薄氣味の悪い、どうせろくな事ぢやあるまいと、打ッちやッて置いたものだから、今日は其れを根に持ッて、さんざわたしを困らせた揚句、今夜中に是非談を付けなけりや承知しないと、捨臺詞で歸りましたよ。いけすかない奴ぢやないかね、どうしやうねえ。

伊三の耳には、いかで此の話が正面より這入るべき。疑の雲は忽ちむら／＼と湧き返ッて、眼は光る鼻は怒る、つく息次第に荒くなつて、新之助よりも小山怪しく、はては二人してお繁を弄ぶのではないかとまで邪推が亢じて、其の氣で見れば、其れかと思はるゝ證據幾らもあり、うぬどうして呉れうと、腸は煮えかへるやうなり。

「お前に今夜來いッてのかい、へン、行くがいゝ。

「あれ、わたしや行きたくはないよ、行かずに濟むなら其の思案してお呉れな。

「思案も絲瓜も入るもんけえ、來いといッたら行くが善いや。

「しやうがないねえ、それぢやお前、談が出來ないわね。愚圖々々してゐたら、如彼奴だもの、裁判沙汰にすまいとも限らず、面倒になッたら何うおしだえ。

「知れた事さ、おいらが臭え飯を喰ふばッかりよ。さうなりや邪魔がなくなッて、巫山戲まはるに自由が利かあ。小山さんに相談して來ねえ。憎々しげに言ひ放ッて、ぐるりと彼方向くに、お繁取りつく島もなく、これほどまでかと今さらのやうに淺ましく情なく、覺えず眦に傳ふ涙を抑へて、しばらくは言葉なし。

「お前また腹をおたてかえ。ほんとうにわたしや何うしたらよからう。まあ、少しはしんみり考へても見ておくれ。六年に

よ。ほい薄ッ暗くなりやがッた。と歸りかゝれば、お繁は立ッて見送る目元に愛嬌頽さず。

「それぢやねえ、宿のゝ機嫌が直ッたら來てお呉れ。ほんとに濟まなかッたねえ。

「お繁ッ、巫山戯るのも大抵にしろ。と伊三は言葉するどく切りこんで、是より夫婦さし向かひ、今宵は髮を手に搦んで引き摺る騷動もなけれど、厭味のありたけ、邪推のありたけ、はては面のあたり新之助と不義でもしたやうな事まで罵りつくして、市ケ谷監獄の八時の鐘鳴る頃までも、お繁を痛めつけたり。伊三がやう〳〵口噤みし時、其所等に落ち散ッたる菓子に目がついて、お繁は忽ち小山の事思ひ出したれど、言ひ出せば是れも苦情の種なり、胸むしやくしやして堪へられぬ折なれば、まゝよどうともなれ、と其のまゝお清を抱いて床に入りぬ。

寢られぬまゝにわくつく頭を抑へて、辿るとしもなき行く末來し方、思へば夫の仕打恨めしく腹立たしく、今の我が身ほど因果なものはない、一ッそ別れて除けうか、見事善い男に見かへてやらうか、それとも一と思ひに死んで、面當してやろか、とまでくわッと思ひ詰めはしても、前後考へ直せば、無慘なはお清が生ひ先、折角此れまで辛抱した甲斐もなしと、何時か矢ッ張此の家に朽ちる身と覺悟きまッて、また今日一日の事腹に繰り返へせば、今度は小山の方氣にかゝり、詫證を種にどんな事せうも知れぬ、こりや斯うしては居られぬ、と餘事を忘れて、伊三郎を呼び醒ませば、是れも床の中にて、まだ寢つかぬ樣なり。お繁より話の緒開いて、

「今日も小山さんが來て、やかましい事言ッて行きましたよ。何ッて、今日中に挨拶しないと表向にするといふのであらうさ。小石川の方は出來なかッたの、何うしたら善からうねえ。

尙も言ひつゞけては言ひ淀みしが、

うもならず。「新さんが仕事の相談で丁度いま來なすッたのだよ。お前さんを待ち合はせるッて、此所へ這入んなすッたばかし。と心ない虛言も其の場が繕ひたさなり。新之助引き取ッて、

「伊三さん留守に來てすまねえが、實は急に儲口が一つ出來さうなので、お前今日午から休んだてえことだから、飯田町から此方へ廻ッたのだ。半口乘ッて吳れる氣はねえか。

「へん、半口乘ッて吳れも凄まじいや、お前なんか腕があらあ、一人でずん〱遣んねえ、おいらまだお前のさし金受ける程耄碌はしねえよ、全體お前は、一人前の面あして此所の敷居は跨げねえ義理ぢやねえか。烟管はたく音高し。新之助も堪へ兼ね怫として眉ぶる〱と動かすに、お繁はたまらず口を入れて、

「そりやお前さん、あんまり一徹だよ。新さんは儲口だからッて、わざ〱知らせに來てお吳れなのに、それぢや恩を仇といふものだわね。まあちッとの間氣を鎭めて下さいよ。

「なんだ此の女、人を氣違扱にしやがる。

言ひざま火鉢の上なる干菓子の袋取ッて、發矢と投げ付くれば、袋は裂けて、時ならぬ白花紅葉あたりに狼藉たり。火の付くやうなお淸の啼聲一しきり。

「手前の知ッたこッちやねえ、默ッてろい。胸糞のわりい、新さん〱ていやに恩に被やがッて、新は丸太の符牒ぢやねえぞ。

火の手ます〱盛んなので、新之助も今は氣の毒になり、もぢ〱として、

「おいらが來たばッかりで飛んだ事になッちやッた、姉御濟まねえなあ。それぢや伊三さん、また出なほして來るとしやう

ふ所へ、「伊三さんまだ歸ッて來ねか。と元氣よき掛聲先に立てゝ、新之助は戻り來ぬ。客のまだ去らぬ樣子に、格子の前にたゝずみれば、小山は一段聲張りあげて、「では晩にでも、お神さん鳥渡來てお呉んなさい、其の上で何方とも話をつけるから。とわざと新之助へ聞かす心に立ち上りがけ、袂をがさ〳〵と音させて、「お清坊がゐないものだから、つい忘れてゐた。と干菓子の袋を火鉢のねこに置いて歸りぬ。

「姉御、看守の金貸てな、あれけえ、性の悪さうな奴だね。と這入る跡より、追ッかけて主人の伊三郎も歸り來たれり。

（二）

三十でもあらうか、眉は一の字見事にはねて凹みたる眼圓にきら〳〵と底光し、顏の色土氣を帶びて薄黑く、鼻少し反り頰こけ、何所となく暗いやうな額付なり。手を腹掛の間に入れたまゝ、思ひ屈したる樣にて、物をも言はず、格子戸がらり。「お歸りか。と女房は上り口。新之助も、「や歸ッたか。と其所にまご〳〵してゐるに、意外なれば伊三はびくりとしたれど、眼にあやしき光きらめくと其のまゝ、ぐッと身をそらして手拭取り出し、無言で足の埃を拂ひにかゝる。此方の二人は思はず顏見合はするを、じろりと尻眼にかけて、つッと上り、火鉢の前にどかりと座を据ゑ、烟管取り出して一二服、見る〳〵額に青筋の畦を造れば、當年五つの娘お清が、外より父の歸宅を見つけて馳け來たり、「父や、〳〵。と肩より顏さし出すを、「ゑゝ五月蠅え餓鬼だな。と跳ね飛ばす狂氣の沙汰に、兒供は泣きも得ず、隅に小さくなりて跼まりぬ。

「まあ何だらうねお前さん、兒供に怪我でもさせたら何うおしか。とお繁さすがに新之助の手前も恥かしく、お清を抱き取れば、わあと泣き出してかぢりつく。何日もの嫉妬と思へば、默ッて氣に逆らはぬやうするが手なれど、今日は他人の前さ

さんも餘程罰あたりだね。わたしなぞなら神棚へ祭り込んで、お初穗そなへて拜んでゐるよ、へゝゝ全くの所さ。お神さん冥利だけ伊三さんにあやかりたいね。それといや今の若い衆なぞも、どうやらあやかりたい顏してゐたぜ、へゝゝゝゝ。時に留守と來ちや世話はないのだが、全體お前さん方の仕打はわたしの腑に落ちないのだて。お神さんがうまい事いひなさるものだから、ついもぎどうな事もいひかねて、あゝして延々にはなッてるものゝ、豫ねてもいふ通り、ありや元來わたしの金ではなく、言はゞ官金も同樣なので、それを、よいついでと伊三さんに賴んだばかりに、あんな譯になッたのは、實はわたしも手ぬかりさ。金錢は親兄弟も他人といふに、わたしがあまり伊三さんを信用しすぎたから起ッた事。併し先方では封金にして渡したといふから、伊三さんの手許でそれをめくッて費ッた譯になッてるので、表向になぞなッた日には、重ね重ね面白くない仕義だと、わたしは內々心配してゐるのさ。わたしの機關一つで操ッてるのだから、其所の所を少しは察して貰はないど、獨りつまらん心づかひをしても埋まらないからね。

粗葉すぱ〳〵と、味にからんだ文句を尙もかぶせかけて、

「たゞ濟みませんでは濟むまいよ、致方の無い事はない、方法はいくらもあると思へばこそ、伊三さんには談が合はず、手間は取らせぬからお前さんに烏渡來て貰はふと、あゝして度々いひ越したに、挨拶もしないで打ッちやッて置くとはひどい。お前方でさういふ了見なら此方も此方の考があれど、成るべく事は圓く治めたいと思ッてね、斯う賴まれもせぬ足を運ぶのさ。

「そりやもう御親切は重々身に浸みてをりますけれど、つい思ふやうにも參りませんので、まことに濟まぬ事いたしました。何時もの調子とは知れど、下心怪しい弱身にわれから碎けて、小山の顏色おのづと和らぎ、何か言ひ出さんとしてためら

が善いのをお世話しやうよ。あるともさ、お前の所へなら降るほどあるよ。ほゝお驕りかへ、お禮言ッて置きませう。さうね、男はやッぱり氣立が第一だらうよ。わたしはもうお婆さん、お清に婿を取るやうにでもなッたら、其の時こそわたしが眼鏡で、お前のやうなおとなしい、さッぱりとした男持たすよ。それはさうと、お前氣に入ッたのさへあれば持つ氣だらうね。考へ中だと、人を馬鹿におしでないよ。

話半ばへ「伊三さん宅かね。と潜戸荒らかに入り來しは、年の頃三十四五の、頬骨張ッて日に燒けたる顔赭く光る、脊の高き骨組逞しき男なり。お繁見るよりぎよッとして、今までの快活な調子何所へやら。

「おや小山さんでございますか、さあどうぞ。と火鉢の前なる蒲團取つて裏がへせば、新之助は片足ぬけし庭裏をつッかけ、「ぢや、ちよッくら其所まで行ッて、歸りに寄ッて見ませう。と輕く會釋して出で行く。小山は突ッたッたまゝ、細けれど鋭き眼にじろ／＼と新之助の顔眺めゐしが、篤と其の後姿の消ゆるを見定めて、辭退なく上りこみ、其所等きよろ／＼見廻して、穩ならぬ顔つき、お繁は少し俯ぶいて、

「宿は生憎と今日小日向まで參りましてございます。あなたへも上らねば濟まぬ／＼と、申しつゞけてはをりますれど、つい暇なしで御無沙汰いたしまして、申譯もございません。都合よければ半分でも持ッてお詫に出ると、さう申して出ましたれば、もう追ッつけ歸りませう程に、どうぞ御一服召し上ッて。

と茶盆拭き／＼の挨拶も他所行なり、やがてお茶一つと酌んで出し、ちらと偸むやうにして小山の樣子を見れば、にやりと氣味惡き笑を見せて、

「可愛さうに、其の若さで其の縹緻で斯うやッてるた感心なものだ。こんなお神さんを借錢の言譯に苦勞さすなんて、伊三

の、手のつけやうがない。あゝ、有りがとよ、其所まで思ッてお呉れのは新さんばッかり、大抵のものは寄りつかなくなるわね。わたしやほんに、近所のお神さんと立話しも細い聲ではしないやうにして、家にばかし屈んでゐるよ。半襟がぢみ過ぎるの、自分でお婆さん氣取でゐるのと、毎時も看守の小山さんが笑ふけれど、そんな事は、どうせお婆さんだもの、構やしないけれど、せめて宅だけはねえ、世間なみに清々させて見たいとも思ッて。

お繁が述懐に、新之助も覺えず釣りこまれ、

「困ッたものだなあ。とうッかり言つて急に氣をかへ、

「だがよ、お清坊てものまであるのだから、伊三さんの心も追々に和がうさ、辛抱してゐねえ、其の内には日も照らあな。照るといや、あの松田屋が出店のお照ッ子ね、そら學校時分によくお前をいぢめよッたお茶ッぴいよ、たしかお前が此所へ來た翌年に、一度四谷の方へ形づいて、去年の暮出戻つたのだ。そりよおいらに貰ッて呉れねえかッて、此間松田屋の隱居から談があッて、おいら挨拶に困ッちやッたよ。

「ほゝ困ることはないぢやないかね。はい戴きませうッてば、それで濟むぢやないかえ。ほゝゝ、そんな贅澤お言ひだからよ。お照さんなら縹緻もよし、仕度も立派だらうし、二度添ひは可愛いものてから、幾ら愛しがッて貰へるか知れない、お前仕合はせだあね。

「よして呉んねえ。あの隱居の口癖ぢやねえが、これでもお垢附拜領た情ねえや。おいらも老いこんぢやッて、姉御にまで馬鹿にされるやうになッたかなあ。

「おほゝ、生お言ひでないよ。それぢや何だね、わたしなざ、もうお前さん所へは行けない組だね。さういふ譯ならわたし

（一）

「それは善い仕事ね、どうせ此の節はそんなのでないと贏からないとねえ。何のお前、近頃は入札がやかましいのと、競爭の激しいので、あの仕事だッて外と異つたことはないといふよ。どうか其の方がうまく行けばよいがね。」

市ヶ谷谷町の、とある路次の何軒目かに、大工職岡伊三郎と、住居の割には大きい札うッたる家あり。取り着きの障子明ければ直ぐ居間の、上り框に、膝を重ねて腰かけたるは、新之助とて、主人には弟分の、これは盲の袢股に道具函擔ぐ身、顔に力味は乏しけれど、職人に惜き地藏眉長く濃く、燃るやうな丹花の唇、色の白さに照り榮えて、年は二十一か二なるべし。横手長火鉢の向うに、今しも話を切ッて眼をうつぶせ、片手を胸にさし入れ、片手に火箸をいぢッてゐるは此の家の女房お繁なり。若者より三つとは越すまじき年恰好、肉着しまり、口元おとなしく、利發さもはたらく黑目に見えて、眼鼻の間心もちつまりたる、ませとも譏す人はいへど、引ッつめし櫛卷、島田に結ひかへて、白粉あしらへば、十九でも二十でも押し通される愛くるしき顔に、やゝ當惑の色を見せ、

「一ッ心配なのは、宿が何といふかさ。いゝえ仕事を如何といふのではなく、何日かの事から、宿のがまだお前さんに打ち解けないでゐやしないかと、それを氣遣ふのさ。さうねえ。だけれど、宿のはさういふ性分なのだから、何ともいへない。ほんとに新さんには、毎時も〳〵濟まない事ばかり、どうぞわたしに免じて、惡く思はないでお呉れよ。折角爲を思うて爲ておくれの事を、僻んでばッかり取るのだもの、誰だッて愛想を盡かすわね。添うてるわたしでさへ、時には彌々厭になることもある。そりやねえ、意見もして見ないぢやないけれど、言ふことを裏から〳〵邪推して、果ては春づくのが常例だも

玉かづら

醉うては寐、醉うては寐するばかり。下女の定、或る日心ばかりの土產物を持ッて見舞に行きけるに、

「ヤこれは珍しい、」

と碎けた主（あるじ）ぶり昔に似ず、茶の代はりにと酌んで出す洋盃の酒は瑪瑙を碎いて、齒も香るやうに、自らも舌鼓打ッて、

「あゝうまい、此の味は忘れられないネ。ウム、お前は飲めなかッたッけナア。」

江川が後の消息は、二年越知るものなし。去年の暮破れ布子一枚に雲脂だらけの頭を搔き〳〵、繩暖簾くゞる所を見たものありとの噂のみは聞こえき。

「可愛さうなことをした、おれの手で殺したも同然だ、」

と折角浮きかゝりし色つやは忽ち消え失せ、舊の悒いだ調子にて戻り來ぬ。

ぼんやり線先につッ立ッて、暮れ行く空を眺め居たる江川、何とおもッてか、突然かけ入ッて紙入を摑むとそのまゝ、ツと出て行かうとするに、下女は驚いてあとを追ひかけ、

「アラ旦那樣、たゞ今御飯に致します、」

といふ中早や姿は消えてちり〳〵と彈鈴の音のみ闇に殘りぬ。

江川、其の夜は痛く醉ひつぶれ、車に盛られて歸り來たり、翌日は頭痛するとて終日床を出でず、是れまでに例ない麥酒などを取らせ下女の止めるをも聽かず夕方より飮み續けて二三本空にせし其の次の日よりは、役所には出れど、歸路は必ず外に夜を更かし泥のやうに醉ひ爛れて車に送られ歸るやうになりぬ。時には蒼い顏をして押して出勤することもあれど、一週に一二度は休み癖がついて役所の方もます〳〵不首尾になるにつけ、木田が氣を揉んで、

「君の自暴遊も無理ぢやないが、此の頃のやうに度外れな事しては、」

といへば江川は悄然として、

「實にさうだ、わたしとても此の頃は前と違ッて些とも面白いと思ッて遊んだ事はない。つまらないからもう止さう〳〵と思ッてゐるのだが、ツイねえ、」

と跡は何も言はずして俯く樣子の笑止なれば、木田も氣の毒になりてよい程に挨拶して歸りぬ。

其の後間もなく江川は職を辭し家も疊んで、身はもとの下宿住居となりたれど、多少の貯へを代に、朝より酒に浸りて、

裾に貪る蝶々、蜜蜂はうるさくブンブン言ッて路傍の花より花に舞ひ移る樣子春らしく、領に袖に生ぬるい風一杯の氣持何ともいへず。うか／＼とお堀端まで來し時、不圖二三間前を行く婦人の海老茶の洋傘に半身を隱したるが眼につき、お召の袷重ねたる縞の好み亡き妻のに似たと思へば體つきまでがそれに見えて、江川は覺えず大股に通り越しざま、チラと其の顏を覗くに、眼に權あッて面長く唇厚く、お敏とは似もつかぬ面だち、オヤ／＼と拍子の拔けるを、馬鹿なと自ら嗤ッて、そのまゝ急ぎ足に過ぎ行きぬ。

役所にても容易くは事務に氣が乘らず、半ば機械のやうに書類など繰りひろげ居るうち何時か釣り込まれて一時は何も打ち忘るれど、一しきり片づけばまた思ひ出して、なさけないやうな氣持に退廳を待ちかね、一直線に歸路を急ぐ。家には下女が待ちかけて、其の足ですぐ湯に行けとすゝむるを、又にせうと座りこめば、「デモもう一週間餘もお召になりませぬ」と強ひられ、いかさまと其の氣になッて一風呂浴びるうち流しに客の數やう／＼減りて、江川ひとり湯船の中にゆッたりと善い氣持になり、湯氣に籠ッた洋燈の光をボンヤリと眺め居れば小闇い片隅で唐突に長い吹呿一つ、其の末が直ア、、と節になッて「よそで解く帶とは知らず絎て居る、糸より細き我心、ツイ切れ易く綻びて」と美音の勇肌が柄に似ぬしめやかな節廻し、こよひは何となう哀に心溶けるやうにて、湯上りの心地また一入に覺えぬ。

「あゝ善い氣持だ、久しぶりで。人間が何時もこれで暮らせるものならナア、」

と手拭を肩にチラ／＼見えそむる星を數へながら、過ぎし夜毎に遊びつゞけし事ども憶ひ出し、

「隨分愉快も盡くしたが、」

とうつとりして榎の下まで來た時、不圖またお敏が病みつきの夜の事胸に浮んで、

言葉は輕く澄みたれど、眼には淚の痕まだ消えず。江川は無言にて首肯きぬ。お敏はこけたる頰に久しぶりの笑淋しく、

「濟みませんがお湯を一口飲まして、」

と起きかけるを劬勞りて江川は湯呑を持ち添へてやりぬ。病人は一口二口飲むと咽せ入りて、咳く聲血を吐くやうなり、是れはと狼狽て臥させる、背を撫でる、介抱さまざまにしたれど遂に其の甲斐なく半時ばかりして夫の手に靠れたるまゝ眠るが如く息絶えぬ。待ち焦がれし母は一夜後れて、いくその憾千々の淚に亡骸掻き抱いて泣きぬ。

四

今日も降り暮したる春雨に、風さへ添はりて、ウソ寒く、散り殘りし庭の八重櫻、頭重げに打ちしほれたり。家の内は火の消えたるやうにて、ポツネンと机に頰杖つく夕暮など八疊の間の殊さら廣く、襖一重隔てたる火鉢の側には、お敏が今もチヤンと座りて編物などして居るやうに思はれ、何時か足が其方に向いて、そこらを尋ねあぐんでまた座敷に戻れば、假の持佛に飾りたる亡き人の位牌しろじろと目につき、思ひなほして尙さら愚に返る。あゝ可愛さうな事をした、お敏は我が手で殺したも同じこと、「おとし許して呉れ、」と覺えず口に出で、われと氣がつけば、座は早やほの暗く、彼方にパツト燐寸をする光にも心おどろきぬ。

四五日は何をする氣もなく、同じやうに日を暮らし、役所も自然に休みつゞけしが朋友の切なる諫に、今日久しぶりの天氣も好く心も少し晴れ晴れしたればとて、頭髮に櫛を入れ和服の自由なるを望みて、進まぬながらに家を出でぬ。門を潜れば正面の垣越しに張り出たる櫻のツイ昨日までは花ばかりと見しもの何時か葉勝になツて、待ツて居たといはぬばかりに肩

わたしやモウ諦めて居ります。けれど、わたしが粗相したばッかりで、赤坊までがあんな事になッて、可愛さうですワ。あなたにも濟まない、堪忍して、」

といひさして泣き入る姿のいぢらしさに江川は嚙みしめし唇覺えずふるひ、

「つ、つまらん事いふな。お前が悪いのでは少しもない。」

言ツたまゝ後の言句に詰まりしが、腸ちぎれんばかり、しみ〴〵と我が罪を覺えて、お敏の手を確と把り、ポタリ〳〵しづく熱き涙の外に言葉なし。お敏もたまらず、ホロ〳〵とまた一しきり、涙に枕を濡しぬ。

江川はうるしみ聲をつくろひ、

「もう何もいふまい、皆わたしが腑甲斐ないから起こッた事だ。先月實は、」

といひかけるを遮ッて、

「お役所の事なのでせう、わたしや疾に他から聞きました。あなたがお隱しなさるから默ッてたけれど、構やしませんワ、結句前に樂みのある方が善ござんすよ。それに課長さんが善くないのださうぢやありませんか、」

と濁りもないお敏が心に江川はいとゞ耻ぢ入り、

「面目ない、下らんことを慮ひすごして隱し立てをしたのが悪かッた。」

やゝありてお敏は把られし手を引き、

「わたしや、おッ母さんが入らしッたらと思ッたけれど、あなたに賴んで置きます。ソラあの毘沙門樣ネ、あすこへ少し願立した事があるのですよ。其の願ほどきがまだして無いから後で定にでもさういッてお燈明料を上げさせて下さいな。」

遊びは、外に面白からぬ首尾もありて、さすがに遠のきたれど、冷たい心の根動々ともすれば變りて、妻の大病といふ事身にしまず、今にも萬一の事あらば大變には違ひなけれど、此の頃うちの夫婦中、兎もすれば其の大變といふ目に遭ッて見たいやうな心持もあり、假にお敏が死んだとすれば、其のあとは何とあらう、といふ空想が高じて何時か心の隅の方で、死なせて見たいな、と輕々しく吹く聲も聞える、傍からあわてゝ其れを打ち消すものもあるやうにて、ア、こんな非道なことは思うてもならぬ、とゾッとして我れに歸る。氣疲してウト／＼と居睡りし夕方の夢に、お敏は死んで七々日といふに、位牌には亡き母の戒名あざやかに讀まれ、お敏は供物の事など忠實に立ち働き、軈て江川が膳に直れば、何時か座敷着に銚子を把りて膳の前に品をつくりて座りぬ。傍には三味線もあり。江川は怪しみ、どうして斯かる身にはなッたかと問へど、たゞにッこり笑ふばかり、重ねて問へばサメ／＼と泣き出して顏に袖を覆ふ樣子、何故か前きの夜の面かげに似たと思ひつきて、辭もなく悲しく心細く尙物言はんとする時、大聲に呼ぶものありと覺えて夢は破れぬ。眦に涙あふれたり。下女は洋燈を運びて、江川を呼び醒まし、「奥樣が旦那樣に」といふ。

茶の間には六枚屛風を立て廻したる中にお敏が淺ましく病み窶れたる枕元の燈火おのづと曇り勝に、何となく物悲しき光景なり。江川は愁然と妻の傍にすわり、

「どうだ少しは痛みが除いたか。醫者は復た後ほど來ると言ッたナ。今夜か明の朝までには國からも着くだらうから、氣を落ちつけて少し休むやうにしないといかんよ。醫者があまり動かすなといつたよ。」

言ひ／＼寢衣一重になりし肩のあたりに、ソッと蒲團を被せんとするを、お敏は痩せたる手にて押し止め、

「わたしや、とても助かりませんよ。イヽエ死んだッて、そんな事は厭やしません、どうせ一度は誰だッて死ぬのだもの。

臭いのを我が家の門に吳れて、其處らをぶらつけば月も醉うてやトロリと赤みさしたるが向う四ッ辻の榎の頂きにかゝれり。「ヤ赤い月だナ」と思ふ途端に見るともなく我が家の窓に漏るゝ火影を見れば、これも常よりは赤くすさまじき色に見え、急に胸騒して氣分變になり、門の戶に手をかけんとする時遙に車の駈け來る音聞こえたり、四方の靜けさに響きて次第に近よると思ふ間もなく、一直線に此方へ曲ッて、この家の前にバタリと轅棒下しぬ、見れば豫ねて知る醫師のなにがしなり。江川は驚いて後見らるゝ心地にアタフタ駈け入ッたり。

お敏は孕りて八月目なり、常ならば產着の仕度、襁褓の用意、男子は斯う女子は彼あと夫婦談合の忙しい中にも樂みある此の頃を、今はたゞ泣いて過ごす日多く、夫の身持このまゝにつゞいた末はどうなる事かと腹に居る子の行く末まで案じわづらひ、また思ひ直しては產屋に入る心構へ、獨り寂しく運ぶ針の手も今日は何とやら懶く、腹に痛みも覺え、ツイ時を忘れて夕方ヤットと毘沙門樣へと足を運びしが、如何しけん門前にて轉びざま強く橫腹を撲ッて、半死半生の體で歸り來ぬ。恐ろしきまで顏蒼ざめ、凹みたる眼を微に開いて夢現を別けかぬる樣餘ほどの重體と見て取り、醫師も注意くれ〴〵言ひ殘して歸りぬ。

「夕方毘沙門樣の御門でお轉び遊ばして」

と下女が話しも譯を知らぬ江川には腑に落ちず、あの體で夜陰に出あるくはどうしたことゝ疑も入れたけれどまづ、

「あれ程言ッてあるに、大事の上にも大事を取るべき身で、何故さう輕々しく出あるいたか、」

と詰るのやら叱るのやら大病人の枕元に慳貪な聲覺えず高くなれば、お敏は何も言はず、力なげに澄見つめし眼をうるませ其のまゝ蒲團を引き被りて忍び音に泣き入りぬ。五六日がほど、病は重り行くのみにて、斷えず激しき下り物あり。江川が

なかッた妹の頭の腫物が、一週間程の朝々鹽絶してお願ひ申した故で綺麗に治ッたといふ事、遊人の熊が中風になッて死んだのは、お照婆が明神様へ丑の時參りをして咀ひ殺したのだといふ事、覺束ない證據を視て來たやうに述べ立て「奧様どんな事だッて一心にさへなれば叶はない事はございません」と段々乘り地になッて饒舌りかけられ、お敏もいつか釣りこまれボッとして、それもさうかと、翌日よりは夫の留守に日毎參り、一ッには夫の身持治りますやう、二ッには身の安産を祈る女氣に餘念なかりき。

晩くまで遊んで、其の足で朋友の宿に泊まりこみし江川、今宵ばかりは何とやら氣が濟まず、急腹で家は飛び出したものゝ、他に賴ない女氣の一筋から、跡に何事のありはせぬかと、左右の案じに其の夜は寢着悪かりしが、朝はやくボンヤリと歸ッて見れば、我が家ながら、閾高く、よろづ下手に出て、物いひかけなどするに、お敏は見向きもせず、泣き腫したる瞼重げに俯いたり。

三

櫻散る夜半の月、江川は例の微醉機嫌に、春風の肌ざわり心地よく、車なければ煙のやうな我が影法師を供にして、

「今夜もまたかナ、アヽ面白くない、面白くない。如彼されるとどうも出ずには居られず、出れば益々こぢれて來る、弱つたナ。ソリヤ重々氣の毒ではあるサ、けれども、あれではどうも亭主の立つ瀬が無い、其所でツイ斯んな譯にもなる、謂はゞ兩方で背負ッた因果だ。フヽン、どうなるものか、」

と屋敷町の一筋おぼろなる中を兩側の生垣について右に左に蹣跚ながら、口拍子に浮かれて歸り來ぬ。フウッと一と息然補

二

「ナニ知らん?、知らないものが何故行けと言ッた。言はないことがあるものか、今現に言ッたじやないか、失敬な、」

といつに無い尖聲鋭く、プイと茶の間から出て來る其のまゝ、手早く羽織の紐を結んで、送り出すをも待たず出て行く江川、

お敏は眼に一ぱいの涙を湛へて、火鉢に倚りかゝり領をブル〳〵と顫はせたり。

「ほんとにマァ旦那樣のお人が惡くおなりなさいましたこと、無理ばッかり仰有ッて、」

と慰める下女が言葉の緒を、繰りかへす張りもぬけ、

「わたしや、斯んなにされるやうならいッそ來なければ善かッたと、しみ〴〵さう思ふよ。斯ういふ身體にはなるし、此地に親戚といふものは無し、ホンに心細い目を見ると思や、家に居た昔が戀しい、」

とホロ〳〵落つる涙を袖に掩へば、下女も引き入れられてホロリとなりしが、氣をかへて、

「ネ奥樣斯うなさいまし。毘沙門樣へお立願なさいましな、屹度驗がございますよ、明日からわたくしがお名代に立ッて、日參いたします、」

と眞面目になッて勸むるを、お敏はさのみ氣にも留めず、

「だッて其んな事を、」

と婢は言はせず、

「イヽエほんとうに驗があるんでございますよ。一昨年わたくしの所で」と是れより、さんざッパラ醫者にかゝッても治ら

玄關に驅け出たるお敏は眼を丸くして、「マア何所へ入らしッて、」と尋ねかけるを皆まで聞かず、

「ナニあの木田の所でね、少し事務の相談があつて、」

と自分は輕く言ッてのけた積りの舌が亂れ、ついぞない酒臭い息といひ、今日の素振がどうも尋常でないと、お敏は早くも感づき、あれかこれかと心配もし邪推もして一夜を明かしぬ。朝になれば、江川はまた昨日の事、昨夜の事など思ひ出して意氣地なく、お敏に根ほり葉ほり問はれるほどなほ打ち明けかね、只木田に酒を強ひられてとばかり。割ッてしまへば埒もない昨夜の始末まで、氣咎がして得話さず、胸に包みし罪の塊をまた一ッ殖やして、われと苦勞の種を蒔きぬ。お敏は恨みの眦を上げ、

「あなたでもない、水臭い、わたしや知つてますからたんとお隱しなさい。」

言ッたまゝツイと立つて行く。

「馬鹿な何を隱すものか、」

と浴せかけては見たれど、内兜を射すかされたる氣持して二の矢は繼げざりき。

「課長が阿諛主義であんな事したのサ、其の内に尙一度上けるさうだから、君なぞは其の時に廻はされたのだ、」

と見え透いたお世辭も嬉しく、その氣で面押し拭うて出て見れば、面目ないと思ッた役所も舊に變らず。お敏の手前も何うにか言ひくろめて、夜遊びはモウ〳〵二度とせぬ事と、三方四方ぐづ〳〵に折れ合ひかゝりし時、木田が訪ね來てとう〳〵また引き出し、こそ〳〵遊びの味をしめさせたる今日このごろ、役所がへりの更けることも折々あッて、お敏に濟まぬと思ひかへしはしても、お敏の心は僻む、家のうちは面白くなくなる、何時か江川がお敏を厭がる樣子目につくやうになれり。

「どうかなすツて？。」

と心配げにうら問ふお敏を後に、何ともなけれど少し用あればと、江川は車を呼ばせそこ／＼に出で行きぬ。

此の日役所にては、年期滿ちしものに昇等の沙汰ありしが、何故か、結婚の時でさへ一日も休まなかッた程の勤勉家江川は、其の數に漏れぬ。豫ねて此の月はとお敏にも話して、共々心待に樂んで居たゞけ失望の度合も激しく、廳中の人に面目ないはまだしも、家へ歸ッてお敏に何とこれが言ひ出されう、此の事聞いたらば嘸落膽して、我れを腑甲斐なしとも意氣地なしとも思ふであろ、あゝ困つた事になつたと、常は待ちかねる十一時半が來ても辨當あける勇氣は無く、芽出たい人々が笑ひさゞめく聲に、我れは泣きたい氣持、同じ漏らされの一人で名うての放蕩家、平常は江川などゝ派の違ふ木田といふ同僚と、今日の歸路ばかりは不思議に話が合ひ、依姑の、胡麻擂りのと、口ぎたない後言も、江川が耳には快く聞こえぬ。

「それぢやいづれ晩に」と別かれて、悄然と我が家の門を潛れば、胸は絞られるやうにて、成るたけお敏の前を避けて廻る心苦しさ、生憎顏色の惡いに不審を打たれ、エヽまゝよ一と思ひにと火鉢の前に坐れば、妙に氣が改まりて言ひ出しにくゝ、其所へ下女が來合せて愈々言ひそゝくれ、急くことはない復にせう、と餘事に紛らす寸遁れ、仕方なしの茶漬一二杯流しこんで、出て行きしは先刻のことなり。

「こんな時には酒でも飮んで、卑屈極まる奴等を罵倒してやらなくツちや。君のやうにさうクヨ／＼して居ては命がつゞかん、全くだよ。マァサ來たまへといへば拙者が惡うはしないから、」

と此の夜は江川、臍の緒切つて以來の藝者遊びに、尻をもぢ／＼と何時か飮めぬ酒に盛りつぶされ、寢轉けて十二時近くまでは何も知らざりし。

一

なにがしの官署に勤むる江川禮造とて、大酒に身を亡ぼせし親の血を享けても、茲歳二十五まで色酒の味を知らず、謹直とも甲斐性なしとも、廳中に噂さるゝ男あり。まだ下宿住居の去春までは、さすがに浮世の花の紅紫いづれ面白からぬはなく、生暖かい風に、フウワリ魂を載せ、臥そべつたまゝ閉がぬ眼に華やかな夢を見て、ウツラ〳〵として居れば、緣側にはどんよりと眠さうな春日影、掌ほどな庭に糸遊騰りて、人に世帶氣といふもの微塵もなし。去り難き譯ありて、從妹のお敏を是非と緣談持ち込まれて狼狽へしは、丁度かゝる日の夕方なりき。其の場は何となく言ひ延ばして、夏も青葉陰濃やかなる頃、とう〳〵言譯に困り生返事に承知の手紙を送りければ、すぐ叔母が娘を連れての出京。六年ぶりで會ツて見れば、さすが幼馴染の面影何所やら懷かしく思ツた程には鄙びても見えず、天眞の淸く曲らぬ言動に世馴れぬ羞らひも惜からで、略式の結納手とりばやく黃道吉日も極まりて、相生の松めでたく祝ひ納めたる宿は、此所山の手の住居なり。

一年程は浮世の苦勞を知らぬ借住居、たゞぼんやりと睦み暮らしけるが、二人一緒の漫步にも、暑いといへば日傘をさしかけても遣りかねぬ嚊孝行、日頃、彼れが細君持つたらば嘸と、宿直部屋に惡口の花を咲かせし連中も、斯うまではと呆れるほどなりき。

或る日の夕方、江川はひどく鬱いで役所より歸り來ぬ。血が殖えますからと、お敏が勸めて每晩の膳に猪口三杯ときめたる機那葡萄の、一杯はお敏が間をして、ほんのり眼の緣を紅くし、さあ此れから散步とせうか家で書見とせうかと、膳の前での夫婦話も何時になく今日は聞こえず。

志ろあらし

小說

戲曲

抱月全集第六卷目次

小説

研究などの自然の響影か、餘程ドラマテイックに仕組まれた物が多い。その一例は「玉かづら」である。この作はまた愛蘭土の或作家を聯想させるやうな素朴の强みと、しかし、何時とはなしに讀者を引入れて行く特異な暖かみとを持つてゐる。ついでながら、「月暈日暈」には、微弱ながらも露西亞物、殊にドストエーフスキーの「罪と罰」の俤がある。

明治四十年以後、卽ち先生が歐洲留學から歸つて、わが國文壇の自然主義運動に參加せられた前後の小說類には特記すべき程の物がない。これはその頃の先生が批評に熱して創作に冷めてをられた爲めであらう。

大正七年の夏の終りに書かれた『小門の夜焚』は、小說といふべき類ひではないが、不思議に創作的氣分の豐かなもので、殊には先生がその頃既に、恐らく本能的に、その命數の近く盡きようとしてをるのを豫感してをられたのではないかと思はれる節のあるもので、事實、遂に公開的の絶筆となり終つたものであるがゆゑに、こゝに併せ收める事にした。

先生の戲曲類の藝術的價値に就いては、編者はあまり言ふ事を好まない、といふよりは編者は全然その方面の理解に缺けてゐる。けれども、材を歷史に借りた『淸盛と佛御前』を始めとして、すべて先生自身がそれ〴〵を起稿される當時の生活を藝術化した物でないのはない。その意味に於て、各篇一樣の生命を藏してゐるのである。この事は、しかし、極めて客觀的であるやうに見える先生の初期の小說類に對しても言はなければならない。

作品編纂の順序はすべて發表の順序に從つた。全くの誤りと思はれる以外は、文字の使ひ方、言葉癖、句讀の打ち方等も出來るだけ原作に從つた。

・この卷の材料蒐集筆寫等に就いては岡田三郎、森順子の二氏を煩はす事が多かつた。玆にしるして謝意を表す。

大正八年十月二十三日　中村將爲

第六卷『小說、戲曲』に就いて

この卷には、抱月先生の小說及び戲曲の創作の全部と、飜案物一篇とを收めた。

文藝評論家もしくは美學者もしくは飜譯家としての先生の聲名が極めて偉大である割には、創作家としての先生のそれは高く、廣く、世間的に鳴り響いてゐないかも知れぬ。けれども、その事は、直ちに先生の創作家としての技倆乃至先生の作品の價値を決定する標準と成り得ないのは勿論である。

明治三十九年の秋、先生自らが編まれた小說集『亂雲集』の序文で、先生は「今から七八年の前、專ら作家を以て立たんと志した頃の吾が短篇小說十二種、いづれも今日から見れば慊らぬ節が多い。しかも當時の吾れは此等の作を以て能く現實以上の境に瞑通するものと信じた。此の己惚が無かつたら小說は作り得なかつたであらう」と言はれ、また「新著月刊の發行者は柴田資郎君といつて、今は世に亡い人である。吾が創作に筆を着けるに至つた動機は主としてこの雜誌の發刊にあれば、今此の書を纂するにあたつても、坐ろに想ひ起こすのは同君の面影である」と言はれてあるのを見ても、作家としての先生の抱負と先生が作家として起つた機緣とは合點さるゝであらう。

編者が蒐め得た限りの材料に就いて言へば、先生の小說の創作は明治三十年四月の「新著月刊」創刊號に掲げた『しろあらし』を第一作として、引續いて凡そ四ケ年の間に發表されたものが大部分を占めてゐる。それ等を仔細に讀み味ふに、材料の摑み方などは可なりアンビシャスであるが、表現の形式は純然たる寫實家風である。自ら「現實以上の境に瞑通する」と言はれたのは何を意味するか知るよしもないが、編者の管見を以てすれば、それは各篇を殆んど一樣に貫いてゐるモーラル・トーンもしくはレリジャス・トーンではないかと考へられる。そして「現實以上」に出ようとした當然の結果か、もしくは近松

青年時代の抱月氏

（明治二十八年撮影）

向つて右上抱月氏　左上金子馬治氏

右下五十嵐力氏　綱島榮一郎氏　朝河貫一氏

抱月全集
第六卷